

壊れかけた少女と、元非モテおっさんの大冒険？

haou

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

真面目さと人の良さだけが取り柄の、彼女いない暦11年齢のアラサー男は日々燻っていた。

良識を重んじる家族に、人並みに正しく生きなさいと説かれて育てられ、

善良な人間性の恩師達には、人があるべき理想を説かれて導かれる。

愛情がこもった綺麗な言葉を受け入れるまま、彼らの望む通りに育ってきた。

真面目だけど競争心に欠けるお人よしに成長した彼は、理想と現実の違いに鬱屈として停滞するばかりの日々を送っていた。

そんな彼がある日邪悪な魔物に転生し、守るべき少女と出会う。

自分で考え自ら行動していく中で、自立した他人と出会い関わり、大人になって生きていく。

※2015年2月6日 改題しました。

※2015年4月13日 今後の更新は不定期となります。

# 目次

導入編〜いつかの断片〜

プロローグ〜旅路〜 1

プロローグ〜勇者〜 3

出会い編

転生 14

塵殺 25

家族 32

正体 45

準備 52

金策 56

出立 61

旅立ち編

到着 66

契約 72

初陣 80

キャラクタータス1 旅立ち編『初陣』時点 89

休養 93

成長 97

解体 103

凱旋 106

発覚 110

武器 115

試斬 121

敵意 126

解体	油断	好調	休日	善人？	反省	進歩	成果	変化	修行	学習	師事	啖呵	予約	買物	成金	勇者編	告白	好色	勇者	自称	休息	キャラクタータス2	誤算	喜悦
285	281	274	265	260	253	248	238	232	227	223	214	207	197	190	183		175	166	157	152	147	キャラステータス2 旅立ち編『誤算』時点 143	135	131

修行の成果	481
大師匠との出会い	475
ネイル村へ	467
奇跡の泉	463
世界へ旅立つ	459
パプニカの賢者	451
でろりんの師匠	444
へろへろと弟子	434
解答	426
自覚	417
会議	406
旧交	401
試練	392
搜索	384
表明	376
招宴	368
伝説	360
謁見	353
代償	344
伝授	335
友達	323
遭遇	313
死力	305
勇気	297
慟哭	290

迷えるマアムとお友達	488
パプニカへ	494
ロモスの名もなき村での出来事。(閑話)	499
レオナの選択	524
レオナ姫さまご乱心!? 三賢者の直訴!	536
蹂躞のミリア	541
リングアにて	558
ランカークスにて	563
テランでまったり	576
オーザムでおーさむう	579
カールにて	582
仕込みと修行の終わり	591
デルムリン島へ	597
紹介	602
特訓	608
決断	617
冒険のはじまり	626
急報	635
ダイ覚醒!	644
使徒の片鱗	652
獣王の試し	657

導入編くいつかの断片く  
プロローグく旅路く

「へへへ、お嬢ちゃん、死にたくなけりゃ身包みおいてきな！」

垢塗れで悪臭を放つ不潔な男が山道脇の茂みから飛び出し、一人でノコノコ歩いてきた獲物に、サビだらけの山刀を見せつけた。

男は舌なめずりをして、血と錆で汚れた刀身を振り上げて誇示する。

「……」

獲物とされた少女は黙りこんだままゆっくりと右手を、男の方に伸ばした。

「あん？ 何の」

次の瞬間。ずばんツと音が響いて男の首が飛び、血しぶきが舞う。

少女の右手から黒い影が伸びるように飛び出し、黒い曲刃に変形して、その首を刈ったのだ。

「……うう」

鉄くさい血の匂いと不潔な獣のような匂いが混じった異臭があたりに満ち、黒髪をツーサイドアップにまとめた小柄な少女が眉をしかめる。

「もう、ママのドレスがよごれちゃったじゃない！」

「いやいやいや！ そうじゃないだろミリア。殺人への躊躇とか、罪悪感じゃないのかよ！」

その場には少女しかいないというのに、男の声が少女に話しかけていた。

「なんで？ 敵は殺さなきゃダメだよね」

「いや、まあ、アイツはどうみても野盗だったけどさあ。それでも『さつじんき』みたいな魔物じゃないんだぞ。最低な奴かも知れんが、それでもミリアと同じ人間なんだぜ？」

その少女の右手は黒い靄を放つ影のようなものに覆われており、そ

の表面には邪悪そうにつりあがった表情の目と口が浮かんでいた。

「ん〜、よくわかんない!」

「ミリア……」

不思議そうな顔をするミリアと呼ばれた少女の反応を見て、彼女の右手にいる黒い影はしよんぼりとした表情を浮かべる。

「なあミリア。人間が相手ならさ、せめて半殺しくらいにしないか？

俺はミリアに人を殺してほしくないんだよ」

「めんどくさいからヤダ。この前それで不意打ちされたし……って、思いついたら腹立つてきた! アイツ、ドレスを破いたよね!」

ミリアが苛々した様子で眉間に皺を寄せ、怒りの形相を浮かべる。

それにあわせるように、右手の靄が増え、影が脈動するように蠢いた。

「こら、落ち着けて! 街に着いたら好きなもん食べていいからさ! 奮発して、2つまで買い食いOKだ!」

「ホント!? お兄ちゃん大好き! アップルパイあるかなあ」

表情を一転させ、ルンルン気分で嬉しそうな様子のミリアに、右手の影はため息を漏らす。

「あるあるきつとあるよ。あ、でも食べたらちゃんと歯を磨くんだぞ?」

「もおー、その位分かってるよ。ミリアは子供じゃないんだからね?

お兄ちゃん!」

「はいはい」

「ハイは一回だよ!」

頬を膨らませてプンスカ怒るミリアを宥めつつ、ふたりは街へと歩いていった。

——その場に残された首なし死体は近くの村人により発見されて騒ぎになるものの、所持品などから野盗が返り討ちにあったのだと判断されて適当に埋められたのだった。



プロローグく勇者く

「クギヤアアアーーー!!」

「一匹たりとも街へは通すな!」

リンガイア戦士団員たちが、ドラゴンの群れに雄叫びを上げて突っ込んでいく。

「うおおおおお!!」

「リンガイア戦士を舐めるな!」

それは無謀な突撃……ではない。

闘気剣ならば、鋼鉄の硬度を持つ皮膚とも言えども切り裂けるのだ。

「このおおおおツツ!!」

「くたばれええーーー!!」

戦士達は、頭上から振り下ろされるドラゴンの爪をかわして、闘気の刃をドラゴンの肉体へと次々に振り下ろしていく。

だが。

「硬すぎる?!」

彼らのレベルでは、傷を与えられてもそれはナイフを刺した程度の傷しかつかない。

言うまでもなくドラゴンは巨体である。人間のような小さな生物がまともに斬りかかったところで傷は小さいものでしかない。

それこそ『勇者』と呼ばれるような、人間の域を半ばはみ出た実力者でなければ竜殺しは現実的ではないのだ。

「ノヴァ様がこの場においてくれれば……!」

「弱音を吐くな! 死力を尽くせ!!」

そう。ノヴァならば。

彼ならばたった一撃でドラゴンに致命傷を与えることができたはずだ。

「キシヤアアアっー!」

「ぐぎやあ!」

「集まれ! 一匹ずつしとめるんだ!」

「くっ、このオお！」

虫を払うように振り払われるドラゴンの爪と尻尾の反撃で幾人かの戦士が倒れる中、群れの先頭を走っていたドラゴンの巨体に何人も戦士が群がり、次々に小さな牙を突き立てていく。

「くそがあッ!!」

「俺達を！」

「舐めるなあー!!」

「クキエアアアアー!!」

肉食魚の群れに襲われた獲物のような光景が展開され、ようやく一匹のドラゴンが全身から血を流しながら、ゆっくりと倒れ伏した。

「いけるぞー！」

「でも数がつ、多過ぎる……!!」

ドラゴンの群れは多い。

その頭数は軽く数十を超えており、下手をすれば3桁の数かもしれない。

まるで山が動いて押し寄せてきているかのようにだった。

「か、勝てない……」

集中攻撃で倒していくにしても、固まりすぎると敵が街へと侵入してしまう。バラけると各個に倒されるだけ。

「それでも……時間くらいかせいでみせる！」

その場の戦士たちは皆全滅を覚悟して、それでも王都の民が逃げる時間を稼ごうと悲痛な決意を固める。

「ぎゃああああー！」

あるものは爪で細切れに引き裂かれ、

「ぐゃこっ!!」

あるものは巨体に踏み潰されて、

「ぎっ!!」

あるものは上半身を噛み千切られて、

「うあぢ……ッ」

あるものは猛烈な炎を瞬く間に灰と化した。

ドラゴンに立ち向かっていった勇敢なリングア戦士達が、次々に



ゴンは内からはじけて、バラバラに吹き飛んだ。  
「な、なんだあ?」

血煙が晴れるとそこに佇んでいたのは、返り血で真っ赤に染まった小柄な少女!

「みんなの覚悟は!」

彼女は、竜の血に塗れた禍々しい剣を地面に突き立て、仁王立ちをしていた。

「みんなの決意は!」

彼女は、戦士団に向けて、叫んでいた。

「みんなの想いは!」

そして、小さなその手で禍々しい邪気を放つ剣を地面から抜き放つて掲げ――

「わたしが受け取ったア!!」

血に塗れた顔で決然と思いの丈を叫びきった。

「ひっ……」

「敵の新手か!」

「あれはミアアなのだ! 勇者ミアアが来てくれた!」

「みんなあ……っ」

ミアアは地獄の様相を見せる戦場を睥睨する。

肉片と化したもの、血の染みしか残っていないもの。

焦げ跡しか、痕跡がないものすらいる。

「いいひとだったのに……!」

ごく短い間であったが、顔を知り声を知っている戦士達が半数以上も死してしまった。

食事を共にして笑いあったこともある。

「絶対に、ゆるさない……ッ!」

彼らが最後まで守り抜こうとしたのは大事な人達。

ミアアは死んでしまった家族を思い起こし、彼らの姿に重ねあわせた。

「みんなの無念をこの胸にッ! 憎悪と怒りをこの剣にッ!!」

ミリアの中で、暴虐の限りを尽くす敵への負の感情が爆発する。吹き上がる暗黒闘気が天を突き勢いで噴出する。

ミリアの全身に黒い紋様が浮き上がり、彼女の肩からは影夫の両腕が伸びて刃を形づくった。

「命を捧げたみんなに代わって……！」

殺戮の準備は整った。

その手に握られたみなごろしの剣が歓喜の明滅を見せる。

「塵だあああッ！」

獣が吼えるように、怒鳴り散らしたミリアは殺意をこめた瞳でドラゴンの群れに飛び込んでいき――

「はあああああッッ！」

横薙ぎに一閃。

「ギャウ!？」

「ンクキュエツ!？」

「ギョエオ!？」

たったそれだけでドラゴン数頭が、真つ二つになって絶命する。

「ギャオオオオッー!!」

仲間を殺戮されて、怒り狂ったヒドラが突進しながら5つの頭が一斉に噛み付いてくる。

攻撃を終えていたミリアは仁王立ちをしたままで回避は間に合わない――!

「クキヤアー!!」

ミリアの、頭が、右腕が、左肩が、胴が、足が噛みつかれてしまう。ヒドラは小さな獲物を噛み殺したことに歓喜の雄叫びを上げた。

「勇者さま!？」

「あれでは……!」

戦いを見守っていた戦士たちが悲鳴を上げる。

「ギャツ!？」

否。

避ける必要がなかっただけだ。

噛み付いた5つの頭が苦しげに声を上げると牙が砕けて、顎からお

びただしく流血していた。

「避けるまでもないッ！」

戦士たちの無残な最期への怒りを糧に吹き上がる暗黒闘気と、影夫の守りが彼女の身体を鋼鉄以上の強度と化していたのだ。

「暗黒破砕撃！」

一点の突き。

それだけでヒドラには致命傷だった。

猛烈な暗黒闘気が切り裂かれた皮膚から爆発的な勢いで入り込んできて、彼の体内で暴れ狂った。

「あああああアツツ！ 砕け散れエエエ!!」

「ゴユツ!?!」

数秒後。

体内に注ぎ込まれる暗黒闘気の圧力が肉体の限界を超えた瞬間に、ヒドラは内側から弾けて爆発四散した。

肉片が周囲に飛び散り、激しい血飛沫が周囲を真っ赤に染める。

「殺し尽くすッ！」

ミリアはもう止まらない。

街へと向けて突進を始めたキースドラゴンの群れに向かって猛烈な勢いで駆け出していった。

「おお……なんともすごい！」

「リングイアの戦神が降り立ったかのようだ！」

平時に見ていれば恐ろしく感じかねないミリアの姿だが、リングイア戦士団には、この上なく頼もしくて好ましく見えた。

彼女は、散っていった同胞達に代えて猛り狂ってくれているのだ。そんな彼女を恐れるものは誇りある戦士達の中には居なかった。

「急いで生き残りを集める！ 勇者さまにだけ戦わせてはいかん！」

「おうよ！」

「みなでリングイアを守り抜くぞ！」

生き残りの戦士団達は、再び戦場へ戻っていくのだった。

★★★

「じゃま！」

「ギャウ!?」

ミリアは炎のブレスを吐きかけんとしたキースドラゴンの頭を踏みつけて、その炎を体内逆流させる。

「いっけえー！」

「ガフオアア!!」

鼻と口から炎を漏らして苦悶した彼は、次の瞬間、暗黒闘気をまとった剣によって脳天を串刺しにされて絶命した。

「キシヤアツツ！」

死体となった仲間の上にいるミリアめがけて、キースドラゴン2体が死角である左右から鋭い牙を突き立てんと大口をあけて噛み付いた。

「バレバレなんだよ！」

だが、彼らの牙は届かない。

掻き消えるようにミリアの姿が消えて、キースドラゴンは鼻先をぶつけ合ってしまう。

「クキヤアツツー！」

怒り狂って、消えた獲物を探して首を振り回すキースドラゴン達。

彼らは、影夫の飛翔呪文によって上空に浮かんでいたミリアを見つけて……驚愕した。

「極大閃熱呪文<ベギラゴン>!!」

ミリアは両腕に作り上げた閃熱のアーチを撃ち放つ。

熱に耐性を持つ彼らとはいえど、極大の閃熱には耐え切れず、焼け焦げた死体と化すしかなかった。

「ミリア、スカイドラゴンの群れだ！」

「避けるのは任せるよ！」

「任された！」

影夫は羽状に広げた暗黒闘気の手から飛翔呪文で推進力を生み出して、極大呪文を撃ち終えて息を荒げるミリアを、スカイドラゴンの群れから後退させる。

「キシヤアアアアー!!」

そのことで空を支配する竜として矜持を傷つけられたのだろう。

5匹のスカイドラゴン達は、猛烈に速度を上げて一斉にミリアに迫ってくる。

「もうすぐいけるよー！」

「ぶっ放してやれー！」

対するミリアは全身に高めた魔法力を両手に集めて両腕を天に掲げる。

「むううううう……いー！」

スカイドラゴン達の距離はみるみるうちに縮んでいき、彼ら達は鋭い牙の並ぶ大口を開けて、ミリアを噛み砕かんとする。

対するミリアはいまだ攻撃には移れず、なすすべがない。

「ふふっ」

このままでは無防備に攻撃を受けてしまう——というのにミリアは不適に笑みを浮かべる。

彼女は一片の疑いもなく信じている。必ず兄が守ってくれると。

「させるかあー！ バギマツー！」

信頼に応えた影夫が竜達に目掛けて真空呪文を放ち、推進力を一気に稼いで距離を取った。

同時に発生した真空の突風が、スカイドラゴンの顔面に直撃する。

「クキヤアツ！」

口内を切られた者、眼をきらられたもの、鼻を切られたもの。突風に煽られてバランスを崩したものの。

いずれの竜も、その動きが止まってしまった。

「消し飛べー！」

そうするうちにミリアは準備を終えた。

彼女が両手にまとった魔法力は、爆発エネルギーへと変換されて、爆裂呪文へと変貌していく。

素早く両手をぶっつけるように打ち合わせた彼女はそのまま両掌をスカイドラゴンの群れに目掛けて突き出した！

「極大爆裂呪文<イオナズン>！」

群れの只中に飛び込んで着弾した極大爆裂呪文は、激烈な爆発を発



生させ、その熱と衝撃と音で彼らを悉く殺しつくした。

彼らもまた、ミリアにわずかなダメージすら与えられなかった。

「ふう……」

「気を抜くなよ！ 大物が来るぞー！」

さすがは新生魔王軍最強の軍団である超竜軍団。

選りすぐりの竜達が集められているのは伊達ではない。

もっとも強力な個体の1つであり、頭一つ抜けた強靱な体躯と強さを持つキングヒドラがミリア達の前に立ちはだかる。

少し前にミリアが倒したヒドラの上位種であり、影夫世界のゲームではボス格の扱いを受けていたほどの強力な敵である。

「グギャオオオ、オ、オ、ツッー!!」

小山のような紫の邪竜が唸りを上げると周囲の空気が激しく震えて、それだけで砂埃が舞い上がるほど。

弱い生物ならば雄叫びを聞いた死を迎えるであろうほどの殺気を撒き散らしている。

「やばいな……」

「うん」

さすがに彼は格が違った。

ミリアに先制攻撃の隙も与えずに、野太い脚で強烈な爪の一撃を放ってくる。

さらに5つの首が同時に燃え盛る火炎をミリアに吹き掛ける。

「くっー！」

ミリアは剣で爪を受け止めるが、炎には対応できない。

5つの火炎がミリアを焼き尽くさんと迫る。

「フバーハー！」

すかさず影夫が光の粒子のバリアで炎のブレスを防ぎきる。

「次はこっちの」

「キシヤアアツツッー！」

「あぐ!? 連続攻撃いつ!?」

ミリアが反撃に動作に入るが、キングヒドラは5つの首をへビのようにならせながら5方向からミリアに迫っていた。

「このお！」

「やらせるか！」

どうにかミリアが正面から噛み付きにきた1つの首を暗黒闘気剣で叩き斬る。

影夫も、腕を変形させて暗黒闘気の刃を作り上げ、左右から迫っていた2つの首の瞳を斬りつけてどうにか攻撃を封じる。

しかし。

「きやあああああー！」

残った2つの首が右下と左上からミリアの身体に巻きついて絡みついて、ギチギチとミリアの身体を締め上げていく。

「け、剣が……」

肩を締め上げられ、苦悶のあまりミリアはみなごろしの剣を手放してしまう。

常人ならば瞬時にバラバラになるような圧倒的な力で締め上げられて

「あがあッ!?!」

暗黒闘気で強化されているミリアといえども、ろくに身動きすら取れない。

圧迫で肺の空気が押し出されて、ミリアは目を見開き、口をあけてパクパクと酸欠の魚のように苦しみがくが、どうにもできない。

「はなせえっ……このおお……っ!!」

「キシヤアアアアツツー……」

苦しむミリアをさらに甚振るように、さらに巻きつきを強めた2つの首は、大口を開いて歓喜の声を周囲に響かせる。

「あああああッツー!?!」

ミリアは、絞り出すように悲鳴を上げて、締め付け攻撃を受け続け、肉が潰され骨が軋む嫌な音が少しずつ大きくなっていく。

このままでは限界を超えて潰されてしまうことになるのは明白だった。

「くそっ！ ミリアを離しやがれエー！」

ミリアと一緒に首に巻きつかれていた影夫はあわてて、ミリアの体

内へ入り込むと、ミリアの額から暗黒闘気の手を生やし、彼女に巻きついている2つ首の大口の中に暗黒闘気の右手と左手を突っ込む。

「ギャウツ!?」

「バギマツ!」

そして、両手から同時に真空呪文を叩き込んだ。

「グオオオ……!」

邪竜は、繊細で柔らかい口内から喉にかけてをズタズタに切り裂かれ、己の血で溺れるような状態となった。

ミリアに巻きつけていた2つ首を解いて、胴体をその場に倒れこませて、悶え苦しむ。

「ベホイミ、ベホイミ」

「はあはあ……暗黒処刑術奥義!」

地面に落ちたみなごろしの剣を素早く拾ったミリアは、両手で握ったその剣を大きく振り上げ、邪竜に向けて飛び掛った。

「暗黒ツ、渾身撃イイツ!」

「ギャオオンン……ツ!!」

「死んじやえええーっ!!」

最大出力の暗黒闘気剣をキングヒドラの胴体に突き立てる。

「極大真空呪文<バギクロス>!」

胴体が大穴をぶち空けられて、断末魔を上げる邪竜に影夫がダメ押し of 極大真空呪文を撃ちはなつて2つ首を胴体から切り離し、トドメを指した。

「やっぱり強いね……キングヒドラは」

「破邪の洞窟で戦ったときよりはマシに戦えたけどなあ」

「うん! これ雑魚はあらかた片付いたかな?」

「ああ、後は戦士団に任せて大丈夫だろう」

「残るは竜騎将バランだね……トベルーラ!」

超竜軍団のリングアイア王都への侵攻を防ぎきったミリアは、超竜軍団長であるバランを探すために上空高くへと舞い上がるのだった。

## 出会い編

### 転生

「これはないだろ……」

黒い影が1つ、透き通る綺麗な川の水面を見て頭を抱えていた。

「いくら俺が喪男で童貞でキモオタでリア充を妬みまくってたからってさ」

「シャドーに転生ってなんだよ、邪悪な意思の固まりに転生ってどういうことだよ……俺にはそれがお似合いってか」

彼の元の名前は黒須影夫。

彼は意識を失った後、気付けば見知らぬ廃墟の中にたたずんでいて、妙にふわふわした身体に違和感を覚えつつ、周囲を徘徊して、みつけた川を覗き込んでいたのであった。

「いや、まあたしかに不謹慎ネタ好きだし、劣等感もバリバリだけど」「ってかドラクエ？ シャドーってことはここドラクエなのか？」

「転生、ってやつか」

呆然としていた影夫の頭が現実を受け入れ始める。

生前彼はネットでSSを読んでおり、そこで異世界転生や憑依といった話も見ていた。

「まってまって！ じゃあ俺、勇者とかに見つかったら退治されるの？」

「まずいな。黒い邪気の塊がプルプルぼく悪いシャドーじゃないよ、なんていっても信じてもらえねーだろうなあ」

彼は再び頭を抱えてしまう。

こうなったら、どこか人気のない山奥にでもひっそり隠れ住むしか……

「っ!？」

そこまで考えた彼は、あたりに漂ってきた、甘く芳しい匂いに気付いた。

「な、なんだあ……？」

抗し難いほど魅力的な匂い。

空腹の限界の時にニンニクがたっぷり効いた厚切りのステーキや、カレーの匂いを嗅がされたような、辛抱たまらなさがある。

「いや、っていかシャドローって飯食うの？ すげえ美味そうな気配だけどさ、人間とかじゃねえよな、まさか」

クンクンと匂いを嗅ぐ。

生前の感覚で覚えている嗅覚で感じるものとは違うが、なにかこう、美味しい食べ物っぽいことが彼の頭に伝わってくる。

そして、彼の意識は今、極度の空腹であると訴えてきた。

「うお……なんかやべえ」

認識してしまうともうだめだった。

彼は、フラフラ……いや、ふわふわと匂いの元へと誘われていった。

「おいおいおいおい！」

しばらく進んだところで、小さな村落が見えてくる。

その中から強烈に芳しい匂いがしてくる。

「マ、マジで人間が美味そうだったりしないよな!」

嫌な予感にヒクヒクと表情を引き攣らせるが、足は止まらない。

不思議と人気がない村の中へと入り込み、広場のほうへと移動していく。

「ん？ なんだ?」

「っ!!」

「ー!?!」

広場に通じる道へと出たとき、彼は手に木槍や農具を持った村人達が殺気だつて、広場で何かを取り囲んでいるのを見た。

「なにしてるんだ、あれ……う」

取り囲まれているのは、高校生くらいのように見える黒髪の少年と、ひとりの少女のふたりだ。

少女は小学校4、5年くらいの歳ごろかと思われる。

線の細い大人しそうな印象がある黒い長髪の少女だ。

ストレートのロングヘアにしている、着物を着ていたら小さな大和撫子のように見えるだろう。

だがその服も身体も傷だらけの埃塗れで、まるでボロクズのようにであった。

「えっ……っ！」

少年は少女を庇うように抱きしめており、少女の方は泣きながら赤く染まった2つ転がっている何かのうちの1つにしがみつき、泣きじやくっていた。

あまりに惨たらしく、鮮血でそまっているそれは、肉塊になった人間のようだった。

「う、えええ……！」

影夫は思わず吐き気を催し、目をそらしてうづくまる。

ネット上でグロ画像なんかは見たことはあった。

しかし、充分自分には耐性がついていると思っていたがそれは大間違いだった。

生の死体。それも、惨たらしく鬨り殺しにされたソレを見て、風に乗って漂ってくる血の匂いは嗅ぐということは雲泥の生々しさがあった。

「なんだ、なんだよこれ」

「国民的RPGの世界のはずだろうが！　なんでこんな……うええ」  
えづく影夫だが、シャドーとなった彼には吐き出すものはなかった。

黒い霧のようなもやが、もわあつと出るだけだ。

「うぷ……はあはあ」

頭の中は大パニックだ、現代日本で惨殺現場に立ち会うことなんて考えられない。

とはいえ、数分もすれば落ち着いてくる。

「はあ……ってそれどころじゃねえだろ！」

いやに落ち着くのが早い。と彼は自分でも思いながらも慌てて視線を戻す。

「あ、あ、ああ……ど、どうしよう……！」

影夫が人生で初めて直面する生き死にの修羅場にまごつき、惨すぎる光景に頭が真っ白になって硬直してしまっている間に事態は急変していた。

「いやああああああ!!」

村人の男連中が、少女を庇う少年に木槍を突き立て、鎌で斬りつけていたのだ。

「やめてえー! やめてやめてやめてええええ!!!」

「なんでこんなことするの! どうしてえッ!？」

血塗れになって自分を庇う少年の腕の中で、泣きじやくる少女が、村人に喚き散らしていた。

「騙されるな皆のもの! ソヤツらは魔王の手先じゃ、とどめをさせ!!」

太った男が喚くと、残りの村人達が無情にも少年へと武器を振りかざした。

「ぐっ……うう……に、げろ、みりあ……」

さらに全身にいくつもの槍を突きたてられ、その少年は血を吐いて、ぐったりと地面に倒れこんだ。

「あ、ああああああああああ!!」

「……ゆ、るさない……った、い……ゆるせない……ゆるさないッ!!」  
絶叫する少女はどうみても、ボロボロの身体なのに、目をギラつかせて怒り狂っていた。

「躊躇するな! 殺せ!」

「……………」

太った男の喚き声におされて、殺気立った村人の中で一際ガタイのいい青年が、喚く少女の前に立ち、木槍を向けて――

「ッ!？」

すぐ次の瞬間に訪れるであろう惨劇が、影夫の脳裏をよぎって、感情が爆発した。

「やめろおおお!!」

もはやただ眺めていることなど不可能だった。

はじけるように飛び出し、少女に槍を向けていた青年を突き飛ばして少女を背に庇い村人を怒鳴りつける。

「てめえら!! 今すぐその子を」

「ま、魔物だああああああ!!!」

「うわああああああ!!!」

影夫の姿を見るなり、村人達はみな大パニックで騒ぎ出した。影夫の言葉はさえぎられ、聞いてもらえそうなそぶりはまったくくない。

「はなしきけよくそがつー!」

話すら聞いてもらえないのは彼にしても想定外だったが、それならばと、ふわふわした腕を伸ばし、地面に転がる青年を全力で持ち上げて村人達のほうへと投げ飛ばす。

「ぐあつ!?!」

不意の衝撃に青年が木槍を手放して地面に転がり、村人達は事態が理解できず動けずにいた。

「大丈夫かおい! しっかりしろー!」

そのまま影夫は血塗れで倒れこむ少年の側に駆け寄る。

「……う……あ」

「まだ生きてる、でも……」

しかし、影夫は医者ではないし、身体中を穴だらけにされた人間の救い方は分からない。

周囲の連中は全部敵だ。少女にも救うすべはないと思われた。

だが、何もせずにはいられず何とかせねばと必死にその身体に手を伸ばす。

「くそつ、し……止血、とにかく血をとめないとー!」

「あああ……お兄ちゃん! お兄ちゃん!!」

必死に助けようとする影夫の姿を見て、少女も血塗れの少年にそばに駆け寄ってすがりつき必死に声を掛ける。

影夫がしているように必死に身体の穴をふさいで血を止めようとしているが、肩も腹も足も、あちこちがあなただらけでどうにもならず、血は流れ出るばかりだ。

「くそ……死ぬな、死ぬなよー!」



「……た、たの、たのむ……いもうとを……」

影夫が魔物の姿をしているというのに、表情を緩め、少年は影夫にむけてそんなことを言ってくる。

「何言ってる、諦めるな！ おまえが何とかしろよ、この子を哀しませる気か!!」

そういう影夫だったが虚しい言葉なのは自分でも分かる。どうしようもなく、致命傷であるのが分かってしまうのだ。

「は、やく……や、やく、やくそくを……」

「する！ 何でもしてやるから、死なないでくれよお！」

影夫はどうしようもなく、感情が高ぶり無茶苦茶な気持ちで目の前が霞む。

シャドーの体であるので涙は出ない。だが、潤んだ目はゆらゆらと揺れて黒い霧を放っていた。

「み、りあ……このひと、をおれだと……おも、って……いっしょ、に……」

「お、お兄ちゃん、いや、死んじゃあ、やだああ」

「……ぐふっ!!」

「お兄ちゃん!? いやああああああああ!!」

(ふざけんな、なんだこれは!!)

最後に大量の血を吐き、息を止めた少年を見下ろし、影夫は目の前で起きた死の衝撃に心中で罵倒する。

(ちくしようめ!!)

影夫の胸中には強い怒りが渦巻いていた。

それらは理不尽への怒りであり、残虐行為を行う野蛮な連中への怒りであり、どうにも出来ない自らの無力への怒りだった。

「や、やっぱりじゃああ!! 皆の者！ ワシの言うとおりじゃったろう!!」

「あいつら一家は魔王軍の手先なんじゃ！ 人間の敵なんじゃああ!!」

その証拠に魔物が助けにきおったわ!!」

ブクブクと太った豚のような男がとんでもないことを言い出し、影

夫が絶句する。

その言われ方からすると、この一家は魔王軍？との繋がりを疑われていたらしい。

「違う！ てめらの蛮行を見てられなかったただけだ！」

「何を……っひいいい!？」

影夫は、その豚男を憎悪に任せて睨みつけて黙らせ、すばやくかつ丁寧に、少年の亡骸の前で泣きじゃくる少女をそっと横抱きに抱き上げる。

「怪我はないかい？」

ゆつくりと優しく語りかける影夫にお姫様だっこされている幼子がきよとんとした顔で、影夫を見つめていた。

その瞳は、泣きすぎて腫れており、目は充血して目や鼻が涙や鼻水でぐずぐずだった。

その姿に、彼はいてもたってもいられず幼子の頭をあやすようになってやる。

「えぐっ、ぐす……」

幼子が腕の中でビクリと震えるのが分かった。

安心させるように背中をさすりながら、頭も撫で続ける。

「約束だ。俺がお兄さんのかわりに……絶対に守ってやるから。だから、もう大丈夫だよ」

ゆつくりとそういうのが影夫にかけられる精一杯の言葉だった。

「ほ、ほんとう？」

「ああ、俺はこう見えて正義の味方なんだよ、君のお兄さんと一緒のな」

影夫はおどけるように言って笑いかけた。

生前の姿ならともかく、シャドーの今だと、醜さというよりは愛嬌がある感じの印象があった。

心に傷をおった少女がこれで和むとは思えないが、それでも少しでも心を落ち着けて欲しかった。

無残な仕打ちを受けたいたいけな少女をわずかでも救いたかった。

「皆のもの！ 何をしておる、武器を構えろ！ 殺せ、魔物もろとも殺

すんじや!!」

「くされ外道が！ てめえは人間じゃねえ！」

影夫がなんと言おうが、殺せ殺せと騒ぎたてる豚のように太り、顔を醜く邪悪にゆがめている醜悪な男。

村を纏めているとおぼしきこの豚には一家が存在しては都合の悪いことがあるのだろう。

ヒステリックに喚きたてて扇動を図る輩は、下衆な企みをしている事が多いと影夫は前世の経験から知っていた。

つまり、この豚はつまらない私欲か馬鹿げた狂信でこんなことを引き起こした。そう思うと影夫の胸でさらなる怒りが爆発する。

「てめえ、てめえはああああ……!!」

影夫は怒りすぎて言葉にならない。

「お前らそれでも人間かよ！ こんな小さい女の子まで寄ってたかって殺そうってのか!!」

「魔物の言葉に騙されるでない!! あの裏切りもの一家は魔族と同じ、村を滅ぼそうとしていたんじや!! 村長であるワシの言葉を信じよ!!」

「違う！ パパもママもお兄ちゃんもそんなこと絶対しないもん！」

「みんな、この村が好きだって言ってた、村のためにいっぱい頑張ってたんだよ！なのに、滅ぼすわけないもん!!」

家族を罵られ、我慢のできなくなった少女が影夫の腕の中で豚男に吠え掛かる。

きつとすごく温かい家庭だったのだろう。

父からも母からも兄からも皆に愛され、愛していたのだろう。

それなのに、目の前で残酷に奪われてしまったこの少女の心の傷はいかばかりだろうか。と思いを巡らせ影夫は泣きそうなほど心が痛んだ。

「なんで酷いことするの!? みんな今まで優しくしてくれてたのに！」

パパやママやお兄ちゃんとも仲良くしてたのに！ なんて!? どうしてええ!?!」

少女の慟哭を受けて、村人達は少しうろたえたじろぐ姿を見せた。

この少女が言っていることは真実なのだろう。

「そ、村長……」

「だ、だまれだまれええい!! 裏切り者の悪の手先めが!! 死ね! 殺してやるっ! あのゴミクズ連中のようになあ!!」

「ぐ……くそがあっ……!」

村人の躊躇をかき消すように喚いた村長の言葉の意味を理解した影夫は、頭が真っ白になって言葉につまり、ぼろぼろと目から黒い霧を滂沱と流した。

「なんだよ、なんなんだよ……」

現代日本で綺麗事と善意の中で育った影夫は、怒りを通り越して呆気にとられ、次にどうしようもなく悲しくなったのだ。

「パパ、ママ、お兄ちゃん……」

村長の言葉を受けた少女が呆然と呟く。

その瞳は見開かれ、あまりの言い草に、大きな衝撃と絶望を受けていることが窺えた。

(なんで、そんな事が! そんな仕打ちができるんだよ!)

「そ、村長の言うとおりで、俺は、あいつらが魔族と会ってるのを見てるんだあ!」

「殺せ! 殺さねえと俺達が死ぬんだ!」

「俺らは悪くねえよ! こいつらが!!」

「イカれた野蛮人どもめ……!!」

少女を抱える腕に力がこもり、影夫の全身は激情に震えてしまう。限界を迎えた怒りは憎悪となり殺意となって影夫の身体に満ちる。

(殺してやる、こいつらみんな殺してやる!)

心の底からいくらでも激情が湧きあがる。影夫はそれに呼応して身体にどす黒い力が漲るのを感じる。

だが、腕の中のミリアの存在が彼を躊躇わせていた。

感情に任せて野蛮人どもに報いを与えてやりたいという衝動と少女を守るためには逃げたほうがいいという理性が葛藤していた。

「……………」

「そうじゃそうじゃ、こやつらは人間の敵じゃ! 世界のために人で

なし一家は根絶やしにせねばいかんのだああ!!」

耳障りな村長の言葉があたりに響きわたったその時。

「あはっ……」

「ふふふ」

ビクンと一度身を震わせ、少女が突然、ころころと鈴を転がしたような笑い声をもらった。

「くすくすくすくすくすくす……」

その囁い方を見た影夫は、暴虐な仕打ちの果てについて今、この娘の精神が壊れてしまったのだということを知った。

引きこまれるような黒さをたたえた瞳には生気が感じられない。

その瞳で影夫を見つめたミリアがニツコリと微笑んで口を開いた。

「ねえ私の勇者さま。わたしね、お願いがあるの。聞いてくれる?」

「あ、ああ……何だい?」

「チカラ……勇者さまが持つチカラをわたしにちょうだいっ!」

「へ……?」

「勇者さまは、いい子のお願いをかなえてくれるんだよね? ママがそう言ってたもん。わたし、いい子にしてたよ」

少女は、身振り手振りを交え、期待感で胸をいっぱいにしながら楽しげにそう述べた。

影夫は不吉な言葉を聞いて絶句してしまう。

「あのね、勇者さま。私の名前はミリアっていうの。いい名前でしょう大好きなの! 家族みんなで一生懸命考えてくれたんだから!」

「パパもママもお兄ちゃんもみんな大好きなのに、大事だったのに、殺されちゃった……」

「ゆるせないっ、ぜったいゆるせない!!」

「みな殺しにしてやる!!!」

ミリアはころころと表情をかえ、激情を露にして憎悪と怒りを撒き散らす。

その凄まじい負の感情の力と殺戮衝動は波動となって、影夫の身体と共鳴して、揺るがした。

「殺して殺して殺して殺して、思い知らせてやるの!!」

「だから、チカラをちょうだい! みんなを殺すチカラが欲しいの!」

「いいでしょ? ねえ、いいよね! おねがいおねがい勇者さま!

あははははははっ!!」

ミリアがけたたましく笑うと、影夫の身体から急速に力が抜けていく。

影夫は、まるで自分という存在が吸い取られているような感覚に陥った。

「え、あ……う?」

今の影夫には腕の中の小さな少女が獰猛で貪欲な捕食者に見える。

「あああつ、ありがとう勇者さま! 私のお願ひ、かなえてくれて!

チカラが、すごいすごいよ! あああつ、もつと、もつとちょうだい、全部ちょうだい!」

「ま、まっ……て」

「いただきまーす!」

次の瞬間、ミリアは影夫を食べ終えていた。



全身に溢れるチカラで、綺麗な黒髪が風もないのにバサバサと乱れ、周囲にビリビリとした殺気が伝播する。

「くふふふふっ、あははははははっ……!!」

ミリアは嗤っていた。

身体中にみなぎる強大な力に。

激情に任せ、憎い相手を滅ぼすチカラを手にいれることができたことに。

そしてすぐにでも、目の前の連中を八つ裂きに来れることに。

「ありがとう！ 私の勇者さま!! 素敵なチカラをありがとう!!」

顔に走っていた黒いソレは顔化粧を終えると、次に首を通って、蛇のように絡まるような模様を描きながら、ミリアの腕にも胴にも脚にも広がっていった。

全身にその模様が行き渡った時、ミリアは影夫と完全に融合し終え、暗黒闘気の力を手に入れていた。

「教えて教えて勇者さま。あなたの使いかた、私に全部教えてよ！」

ミリアの声に応えるように、暗黒闘気は自らの扱い方と戦う術までもをミリアの脳と魂へと瞬時に刻み込み、与えた。

「ああああ……!!」

ミリアは全身を覆う暗黒闘気の心地よさに酔いしれていた。

それはとてもいい気分であった。

今ならばまるで花を摘むようにたやすく奴らの首を刈れる、そんな確信があった。

「あはは、あはははははははははははあああー!!」

狂笑の雄たけびとともに、ミリアはその場から姿を消した。

「へっっ」

ドスン。

間の抜けた声とともに何かが落ち転がる音があたりに響いた後に、赤い血しぶきが周囲に舞った。

村人の目にも留まらぬ速さでミリアが正面にいた村人に飛び掛り、その手にまとわせた暗黒闘気の刃によってその首を刈ったのだ。

「んう……はあん」



圧倒的な力を揮って仇の命を刈り取る、その甘美さにミリアは恍惚として快感に身を震わせる。

「ぎゃあああ!!」

噴出した血しぶきをまともにあびた村人が悲鳴をあげる。

そして、その声に反応するようにミリアの姿が再び村人の前からかき消え、次の瞬間にまた首なし死体を3つも作り上げていた。

「もつと、もつとお……」

「ひっ、ひいひいひいっ!!!」

悲鳴を上げて恐慌をおこす村人だが、逃げようとして背を向けたものから、命を散らしていく。

「ぎゃぶっ!!」

「ぎええっ!!」

「ぐぎゃあああっ!!」

ある者は貫手で左胸を心臓ごと貫かれ、

ある者は、頭を叩かれて破裂させられ、

ある者は、四肢を八つ裂きにされ、

ある者は、真つ二つに両断され、

またある者は、腹部に手を突き入れられ、ぐちゃぐちゃに掻き回された。

驚き立ち止まっている間に生きている村人の数はすでに半分に減らされていた。

村人に生き残る機会があったとしたら、ミリアに異変が起こった瞬間に一斉にバラバラになって逃げることであっただろう。

しかしもはやそれは不可能だ。今生きている村人は10人もおらず、その大半は恐怖と衝撃で腰を抜かし地面を這いずるか、呆然として動けずにいる。

「ぎゃはひはふへはひやひやひやはあああ!!」

ミリアは、楽しくて気持ちよくてどうしようもなく、たまらなく噛み喘いだ。

手で肉を潰し、骨を砕き、皮を裂き、返り血を浴びる。それらの五感で感じる死の実感は、たまらなく官能的で素晴らしいものを感じら

れた。

虐殺に酔った白く美しい肌は火照って朱に染まり、汗ばんでしつとりと濡れている。

小さな舌を、返り血に塗れた唇にちろちろと這わせ、歳に見合わない艶を含んだ笑みを浮かべる。

「あ、ああああ……ひいひいひい！」

「ゆ、ゆゆゆゆ、ゆるしてえ！」

「や、やめやめやめろおつ、おおお、俺たちは、やってないんだっ!!  
言われたから来ただけなんだあ!!」

地面を這いずる村人は必死になって言い訳をして命乞いをする。

「だから、ゆるちでええ!!」

「あはは、ふふふひひひつ、あひやはははははっ!!」

だがミリアは楽しいげに嗤いながら、命乞いをする村人の喉を掴んでぐいっと持ち上げる。

村人は青年であり、持ち上げるのはミリアなので、身長さからその身体が宙に浮くことはない。

しかし、全体重が喉に掛かった男は、ミリアの手を押さえてじたばたとくるしげにもがく。

「きやは」

「ばな、ちでえ……ぎゆぐう!?!」

鼻水をたらし涙を流した懇願に対するミリアの返答は、その手で行われた。

ぐちやり。と喉骨ごと軽く握りつぶしたのだ。

喉をつぶされると同時に男の身体からは力が抜けて、その股間にぬるい水溜りを作った。

そして間髪いれず、地面を這う虫を潰すかのように、ぷちぷちと一人ずつ、その手で、足で、命を刈り取っていく。

「ひいひいひい!!」

ミリアがわずか2人になった生き残りのうちのひとりに手を向ける。

「ままままでー！ わるいのは村長なんだ！ あいつが、やれっという

からあ!!」

すると、そいつはミリアの背後で這い蹲って震える豚男を必死で指差した。

「あいつがわるいんだ! 殺すならあいつをころせよお!!」「きき、きさまっ、裏切るのかわしを!!」

「くふふ」

ミリアは、男の指が指す先を一瞥し、小さく嗤った。そしてそのまま、ゆっくりと太った男の元へと歩み寄っていく。

「ま、ままたて! ちがう、わしは、わしはただ!! 村のためを思っ  
てえっ、わしは悪くなっ」

ずぶ。

喚き散らす豚男の胸にミリアの手があてられたかと思うとゆつくりと指先が肉にめりこんでいく。

「ギゃああああ」

ずぶぶぶぎゅ、ごぎ、めきぐちゆううっ!

激痛とともにミリアの手が肉を潰し骨を砕いて突き進み、どくんどくと鼓動を繰り返す心臓に到達して一気に握りつぶした。

「ギゃべ!!」

「くひひ、ふふふ、ギゃひはははははは!!」

一番の仇となる元凶を仕留めた喜びにミリアは天に手を掲げ身をささげるようにして狂笑する。

白磁のようであったミリアの肌はいまや、返り血に塗れ、暗黒の戦化粧で彩られており、邪教の巫女が生贄を捧げているかのようなだった。

「ひ、ひ……」

村長を売り渡した男は、這い蹲りながら必死に逃げていた。

死にたくない。そのことで頭がいつぱいだった。

彼はこの村の青年団をまとめるリーダーであった。村一番の力自慢で、粗暴で威圧的な男だった。

その男は見る影もなく地を這ってただただ生き延びんとしていた。  
「くふふふふふ」

ミリアは音もなく男の背後へと走り寄り、まるで羽のように軽くて小さな手で彼の足首を掴んだ。

父と母のを蹴り殺したのは、村人の総出であったが、兄に致命傷を与え殺したのはこの男なのだ。

どうして逃がすことができようか。

「ひ、ああああああっ」

その男はむちゃくちゃに脚を振りまわし、身体をあばれさせるが、その小さな手は決して離れることはない。

「げきやひやはははは」

ミリアが無造作に手を振り上げ、そのまま地面へと振り下ろした。

「ぴぎゃっ」

男の身体はまるで軽いぬいぐるみになってしまったかのように勢いよく宙に浮いたかと思うと、猛烈な勢いで地面にたたきつけられる。

「くふふ、くひひ、あはははははー！」

だがミリアの手は止まらない。

地面に叩きつけられるたび、男の骨は叩き砕かれ、地面との衝突で皮膚は裂け、摩擦によってズル剥けとなり真っ赤に染まった。

「ひやははははは、ああああああアアアアアッ!!」

噛みながら絶叫して、何度も何度もミリアは楽しむように鮮血の華を地面に咲かせていく。

「？」

くりかえすうちに、負荷に耐え切れなくなった彼の足首が断絶してちぎれとび、勢いをつけたまま、男であった赤い物体は彼方へと飛んでいった。

「??？」

ミリアは不思議そうに血に染まった自らの手の平を開いて握つてを繰り返しながら見つめていた。

「きやはは。死んだ！ みいんな死んだ!!」

「……ああおおおおおおおオオオオオツツツ!!!」

きよろきよると辺りを見回し、周囲に生き動くものがないことを

認識したミリアは、今一度大きな雄たけびを上げる。

「あはははははははははつ、やった！ やったよ。パパママお兄ちゃん!!」

「わたし、やったの！ 見てた？ 見てくれた!? みんな死んだ、殺してやったよ!! 私、この手で、みんなの仇をとったよ!!」

ミリアの敵はすべてこの世から消えた。

殺戮を愉しみ、憎悪と怒りを晴らした歓喜の雄たけびがあたりをこだまして、野生動物であろうがモンスターであろうが、村周辺に存在する生命体を軒並み恐怖させた。

「……………」

そして、叫び終えたミリアは、糸が切れた人形のようにその場へと倒れこむのだった。

## 家族

「う、あ……う？」

影夫が目を覚ました。

今まで深い水の底に沈んでいたかのような、酷い冷たさと身体の重さを感じて、記憶をたどる。

「俺……どうして」

「あつ!? あの子は!？」

意識を失う前のことを思い出し、慌ててミリアを探し……：すぐに見つかった。

「あれ？」

そこでおかしなことに影夫は気付く。

ミリアは影夫の下にいた。正確にはミリアの身体からべろんと飛び出るように、黒い影状の身体が半分だけ出ていた。

「え？ くつついて？ ってか俺……生きてる？」

「あの後……ってうわ?! 大丈夫か!？」

目を閉じて身じろぎもしていないミリアの身体は血で染まっていた。

あわててミリアが生きているか確認をする。

鼓動や呼吸はあるのでひとまず安堵するが、右手は折れて妙な方向に曲がっており、足や身体など、全身のあちこちが熱をもって腫れていて擦り傷だらけ。その上とところどころ内出血の痕も見受けられる。

まるで交通事故のようなとてつもない力に晒された後のような有様だ。

影夫に医学知識はないが、一目で重傷なのは分かる。

「病院、はあるわけねえか……ってぎやあ！ なんじゃこりや!？」

あわてて周囲を見渡して影夫はようやくその光景に気がついた。

視界がやけに赤いと思ったら村の広場は血の海だった。

様々な形の肉片や、細かく砕けた白い骨らしきものが散乱していた。

手足がもがれて胴体だけになっている死体やら、腹に大穴のあいて

いる死体もある。

「うわグロツ……ってマジか。もう慣れちゃってるよ俺」

影夫はグロいなあとと思ったがまるでPCでグロ画像をみたくらの感慨しかわかなかつた。

慣れること自体はあるだろうが、さつきはパニくって吐きそうになったのにも耐性ができるとは……魔物の体になったことで倫理観が麻痺しているのか？

それは嫌だ、自分は人間を止めたくない。化け物になり果てるのはゴメンだと影夫はごちる。

自分はこれでも人間であることに誇りを持っている。万物の霊長たる、という増長のようだが、動物なんかとは違う。

星を覆い尽くすほどの文明を築きあげ、科学の力で月をも制覇し、素粒子の世界にまでメスをいれる。

その反面、地球に汚染を垂れ流し、宇宙にもゴミを撒き散らし、殺し合いばかりをする。

愚かだけど賢く、残酷だけど優しく、弱くて強い、矛盾だらけで不完全でそれでも進歩を続けんとする人類と文明社会が好きだった。

だからこそ我慢と満たされぬ日々であっても、文明社会の一員として恥ずかしくないようにあらんとしているのだ。

だというのに、凄い速さで人間をやめていつている気がして憂鬱だと影夫は小さく溜息を吐いた。

「生存者は、いねえか。とにかくこの子を早く治療しねえと……」

「薬なんでもってねえしどうする……あ!?! そうだドラクエ世界なんだから、やくそうとか誰かの家にあるだろ!」

「ってそれじゃ泥棒……いや、今更か。村をあげてリンチ虐殺をした報いということで許してもらおう」

「なんまんだぶ、なんまんだぶ……」

因果応報ではあるが、無残な死に様の遺体に手を合わせる。

彼らの成仏を祈って念仏を唱えつつも、なんとかかなりそうだと安堵しながら、影夫はミリアの体から抜け出し、家捜しに出かけるのだった。

「やくそう発見！」

手早く家捜しした結果、10軒ほどあった家の中から3つの薬草を見つけることに成功していた。

それが薬草であると分かったのは、DQの攻略本などに出てくる薬草の図と同じものだったからだ。まったく別の姿だったりしたら分からないところだった。

それと、気絶しているミリアに飲ませるため、やくそうとともに発見したすり鉢も持ってきている。

「苦いだろうけど我慢してくれな」

さっそくやくそうをすりつぶすと、少しだけ身体を起こさせ、井戸からくんできた水とともに口に含ませて嚥下させていく。

良薬は口に苦いのかミリアが眉をしかめてはいるが、少しずつ飲ませていき、3つとも全部飲ませることが出来た。

「よし、と」

飲ませてはみたものの、特にミリアの身体に変化はない。さすがに折れた骨が逆再生のように瞬く間に治るといふことはないらしい。

「あーゲームとちがうのか。しょうがねえ、何か他に手はねえか……」

困ったときの家捜し。

影夫はもう一度村中の家を漁り回すのだった。

「……えーとここはこうなって……こうか」

影夫は手に持った本を見ながら、地面に魔法陣を書いていた。手に持っている本は、どうやら呪文をかじっている村人の家から出てきたもので、僧侶系の初歩呪文の契約の手順や儀式、呪文の使い方などが解説してあった。

この本を見るに、持ち主は見習い僧侶か何かだったのだろうか見習い僧侶が虐殺に参加とは世も未だ。

「ドラクエ世界だからなのか文字も日本語かあ。いや、ありがたいけど変な感じだな」

いかにもといった古めかしい感じの洋書に日本語が刻まれている



というのはなんとも違和感がある。

「よし。後は契約だな。うまくいけばいいんだけど」

前世の意識からどこかおままごとみたいな気恥ずかしさがあるがそんなこといつていてはミリアの傷が治らない。

ドラクエの世界にきている以上、設定や世界観にそつたものは現実でリアルで真面目なことなのだからと前世の意識を追いやる。

僧侶の入門書にあったとおり、円陣の中央に立って、深呼吸を行い、心を静めて集中する。

「地に満ちて、生きとし生けるものを癒し育む偉大なる精霊よ……その大なる癒しの力を我に分け与えたまえ」

ミリアを治したい一心を胸に、精霊に語りかけ心からのお願いの祈りをささげつつ、契約の文書を読み上げていく。

すると、魔法陣から光が溢れ、体がぼわぼわと温かくなるのを感じる。

「よし、これでホイミが使えるはず……」

さつそく、ミリアの側へと戻ってみる。すると、薬草の効果が出たのかミリアの身体の傷が少し癒えている。

が、擦り傷切り傷が消えて体の腫れが引いているけど、骨折などは治らないようだ。なので、その側にかがみこんで手をかぎず。

「それにしても今気付いたけど魔物が五芒星で契約していいんか？

しかも俺邪気？の魔物だよな。神聖っぽい？ホイミを契約したぞ」

なにやら突っ込みどころ満載な気がしたが、魂が普通の魔物とは違うからかな？　と思いつつ。魂の有り方がきつとこの世界では重要なだろう。体や見た目は単なる器ってことかねえ。

影夫はそんなことを思いつつも、身体の中にある魔法力を手の先に集めて精神を高めていく。

「血よ肉よ、傷を塞ぎたまえ……ホイミ！」

手のひらがほんわりと光り、ミリアの身体の傷を少しずつ癒していった。

「おおすげえ。呪文つかってるよ俺」

子供のころからDQをプレイしていた身として影夫は感慨深い思

いを抱きながら、ミリアを回復させていく。

「ホイミ」

「ホイミ」

「ホイミ」

骨折を完全に治し、体中の細かい傷もなおしていく。

何度もホイミを唱えると何かは抜けていくような感覚とともに疲労感が溜まっていくが、まんたんコマンドが欲しいぜなんて馬鹿なことを考えるほどの安堵と余裕があった。

「これが最後だ、ホイミ！」

「ぶはっ!! つ、つかれたあ」

影夫が治療を終えると同時に、体の芯がずっしりと重くなるような疲労感が襲ってくる。

MP切れは地味にしんどかった。重い二日酔いと風邪の時のだるさが同時に来たような感じだ。

戦闘中にMPが切れたらきつと身体の動きも大変悪くなるだろう。ゲームとは違う生々しい現実をまた一つ発見してしまった。

「ん……………」

「お、気付いたか？」

それから程なくしてミリアは意識を取り戻した。

「あつ、勇者さまー！」

目を開けるなり、影夫を見てミリアは彼に抱きついた。

「え、ちよ、っ!?!」

10歳くらいの女の子ではあるが、影夫は正直女性に抱きつかれたことなどはない。

満員電車でおしくらまんじゅう状態になったことがあるくらいだ。あの時でも痴漢冤罪をくらわないか冷や冷やしていたくらいだから彼はものすごくこの手の免疫がなかった。

「あ、う……………」

だから30歳を越える精神年齢の癖に、子供でしかない少女相手にトギマギして硬直するという失態を演じてしまう。

「は、はなれてくれ！」

「いやー！」

どうにか声を出すが即座に却下。ミリアはダダを捏ねるみたいに逆にもっとくつついてきており、四肢を絡めて微かな胸すら押し付けてきていた。

黒影の魔物姿である今だからこそ微笑ましく見えるが影夫本来の体であればさぞやキモくて小児愛好者の性犯罪者っぽく見えていただろう。

「あわわわ……」

「くふふ、冷たくてきもちいー」

すりすりと頬ずりをして影夫の体を楽しむミリア。

とはいってもその仕草に性的な匂いはない。無邪気にじやれているような仕草だ。

「だあー離してくれってー！」

「やんっ」

性的な意味のある行為ではないと自覚することでようやく影夫は硬直がとけた。

しゆるしゆると伸縮自在の黒い手を伸ばし、服をつまんで持ち上げ、離れさせる。

正面の位置にちよこんと座らせるようにおいてやる。

「もー」

「ぐっほんー」

こんな少女を意識してしまったことを影夫はものすごく恥じた。

彼はロリコンではない。むしろ年上の色気溢れるムチつとした人妻や母性の強い女性が好みなのだ。

ありていにいって、彼にはマザコンの気があった。

(友人の言ったことは本当だったのか)

マザコンとはつまりロリコンである！ と珍説を力説していた女性崇拝者を名乗るオタ友を思い出す。

自分はロリコンではないと断言する影夫に彼は、

『マザコンの気がある。つまり君は対等な立場の女性が恐いのだ。好

きになってくれず異性として拒絶されるから怖いんだろう？ だから聖母のように優しく受け入れ愛してくれる存在を求めているのだ』  
『対等な女性が怖い時点で君はロリコンの資質がある。ロリコンは無垢性や不完全さや幼さを求めているが、それはつまり怖いから弱く未熟な女性であることを求めているわけだ』

『マザコンである君は、心優しい女性に庇護され支配されることをのぞみ、ロリコンである者は、弱くか弱い女性を庇護し支配することをのぞんでいるということだ』

『向かった先が逆なだけで根っこは同じだ。だから君はロリコンなんだよ』

『まあそのうち分かるときがくる。そしてその暁には、ロリも熟女も隔てなく愛する我が同志となっているだろうよ』

あの時は全力で否定したものだ、この体たらくだ。オタ友の言ったことは正しかったのかもしれない。

ただし卑劣な劣情だけは絶対に抱かないつもりだ。現に今も性的な欲望を感じていない。

もつとも今の体で欲情しても、モノがついてないのでどうにも出来ないのだけだ。

「それで身体は大丈夫なのか？」

「え？ うん。すごく元気。何でかな？ こんなに身体の調子がいいのは久しぶり」

「あー！ 勇者さまを食べたからかな？」

嫌なことを思い出させるなあと影夫は顔をしかめ、死んだかと思つてびびったんだからな。とごちる。

「違うって！ 俺が回復させたの。おぼえたてのホイミ連発とかすごく疲れたんだぞ！」

「え？ そ、そうなの？ ありがとう！」

「ん、ああ。まあ俺のせいでもあるだろうしな」

満面の笑みでお礼を述べられ、ポリポリと頭を搔いて影夫は顔を逸らす。

少女とはいえ、女の子にこんなに感謝されることは慣れていないの

だ。

「つていうかあれからどうなったんだ？」

「うん？」

「いや、俺を食って？ からだよ」

「えっと、身体にすごく力が溢れてえ、それでね、お願いがかなったの！」

「ありがとう私の勇者さま！ あなたのおかげでアイツラみんな殺せたの、すごく、すごく、嬉しい！」

キラキラした目で物騒なことを本当に嬉しげな様子で言ってくる。影夫はいたたまれなくて、何もいえなくなってしまふ。

「ありがとう！ みんなの仇が取れたの！ ぐちゃぐちゃのめちやくちやにしてやった！ みんなみんな死刑にしたの！！」

興奮さめやらぬミアアがまた抱きついてくる。

だが今度は影夫は何も言わず引き離さずに優しく抱きしめ頭をなでた。

異性に対する意識みたいなものは消え去っていた。

あまりに痛々しすぎる少女の姿がそれを忘れさせたのだ。

「えらい？ ミリアえらいよね？」

現代社会で育った影夫には、こんな少女のこの有様はあまりに残酷すぎるように見えた。

このくらいの悲劇は元の世界でも転がっていたはずだが世界でも有数の平和ボケ国ではおよそ起こらない事態であり、彼もそんな子供を見た経験はなかった。

両親に愛されて育った影夫は、子供は絶対に親や周囲の大人に愛され庇護されるべきだと強く思っていた。

ただ、甘やかすということではなく、叱ったり躰げは絶対に必要だ。それらをきつちりやってこそだと思っていた。

「すまない……」

影夫は自分の行為が軽率ではなかったかと猛省していた。

感情のままに飛びこんだくせに、中途半端にもたついて迷い、その結果、何もかも裏目に出ていた気がする。

彼が断固たる意思と考えをもって助けに入り、即座に少女を連れて村から逃げていたら……きつとこの少女は壊れることはなかった。

自分がミリアに力を与えなければ取り返しのつかない罪を犯すこともなかったのだ。

「なんであやまるの?」

「俺のせいで、本当にごめん……」

影夫は自分を強く呪い恥じた。しかし、時間は元には戻りはしないのだ。

出来ることは少年との約束を守り責任を取ると言うことだけだ。

心が壊れ、天外孤独となつてしまった彼女は自分が責任をもって、保護者として庇護し、その心も癒そうと決意した。

決意をしてみるととりあえず自分が今いる場所について何にも知らないことに気付いた。

何かを考えるにしてもするにしても情報は必要になる。

「それで、聞きたいんだけど」

「うんなあに?」

「えつと。ここどこの村なんだ?」

「タネパの村だよ」

「タネパ……タネパ……? うーん知らない名前だな。ドラクエ世界のはずだけど……」

ドラクエに関しては1から8までしかやっていない。だから影夫の知らないドラクエの世界かもしれない。

そうだと困ると影夫は考え込んだ。知っている作品なら、戦火から逃れるとか、どこかに隠れるなどが出来るだろうし、ミリアが落ち着いて暮らせそうな場所も割り出せるのだけど。

「ドラクエ世界いー?」

「いや、こつちの話だよ。じゃあここの国の名前は?」

「うんとね、たしか、ベンガーナだよ」

「ベンガーナ、ベン、ガーナ……? 聞いたことあるようなないような……」

影夫の脳裏にかすかに脳裏に引つかかるものはある。だけどそれが何かなのか出てこない。

しょうがないのでさらに情報を聞き出していく。

「えっとよその国で知ってる名前はある？」

「カールかな。悪い魔王を倒した勇者さまがいる国だつてパパとママが言つてたから覚えてる！ あとはお兄ちゃんが、リングなんとかつて国に友達がいるつて言つてたよ。あ！ パプニカつてところの服がとてもオシヤレで綺麗なの。ママが結婚式の時に着たドレスはパプニカのものなのつて言つてたんだよ！ 他にも何着か家にあるよ」「そうか……」

話を聞いて影夫は少し後悔し、ミリアの頭を優しく一撫でした。

ミリアは家族との思い出話から国名を教えてくれた。だが、彼女が家族を失つたばかりなのに辛いことをさせてしまった。

よくよく考えれば義務教育なんてないだろうし、親兄弟や知り合いの話とかで覚えるしかないもんな。また軽率なことをしてしまったか。

肝心なところで軽率なことをしてばかりだ……前世からの性格はどうにも治りきらないらしい。

素敵な思い出を楽しいげに思い返している様子なのは、まだ実感がないからだろうな。

「教えてくれてありがとうな」

「うんー」

どうやら、ここはダイの大冒険の世界であるようだ。

よくよく考えれば呪文の契約なんて概念があつたのもダイの大冒険だけではなかったか？

(何故気付かなかつたんだ俺……)

「ねえねえ。わたし、勇者さまの役にたつた？」

「あく、さつきからずっと気になってたんだけど、その勇者さまってやめてくれよ。大体俺なんてどう見ても魔物だろ」

「ううん、だつて私を助けてくれて、お願いだつて聞いてくれたもん！

優しいし、すごい力もあるから勇者さまなの！」

「いや、頼むからやめてくれって……聞きたびに恥ずかしくてたまらん……」

「じゃあ、パパ！ 優しくて大きくて強いから！」  
「ぶふうー！ー！」

影夫は激しく噴出し咳き込む。

さすがに恋人も出来たことがないのに子供が出来てしまうのは勘弁して欲しい。

「な、名前で呼んでくれよ。俺は黒須影夫だから」

「クロス・カゲオ？ それじゃあ、クロスお兄ちゃんだね！」

「あー姓名は逆なんだけど……まあいいや」

(しかしお兄ちゃんか……)

影夫は妹萌えな趣味ではなく、姉萌えな趣味ではある。

しかし、可愛い女の子に親愛を込められて呼ばれるとむずがゆい。妹を持った兄はこんな心境なのだろうか。

「んふふ、お兄ちゃん！ クロスお兄ちゃん!!」

ミリアが嬉しそうに呼んで来る。

苦笑しつつ、返事を返した。

「なんだい？」

「なんでもなーい、きやははは」

歳相応にはしゃいでいるミリアはとても可愛らしい。

ただ返り血がついたままの姿なのがとてもミスマッチだ。

村の惨状もそうだし、早めにミリアの家族の埋葬も済ませる必要がある。

ミリアとのやりとりは、微笑ましい兄弟のようではのぼのぼとしていたが、周囲が地獄絵図なのがものすごくミスマッチだった。

「じゃあミリアとりあえず体を洗おうか。着替えもしないとね」

「うん。ねえねえお兄ちゃん、からだ洗って！」

「ひ、ひとりでやりなさい。ミリアは女の子なんだからね」

「ぶうー」

不満げなミリアをなだめ、彼女の案内で家へと入る。

ミリアの言うところによれば、浴槽がついたお風呂は街のお金持ち



か貴族の家にしかないらしく、庶民は薬湯に浸した布で身体を拭いて身体の汚れや匂いを落とすらしい。

「むう」

いざお湯を沸かすことになり、影夫は困った。

彼は文明の利器にたよりきつて育ってきたから、お湯を沸かすどころか火をつけることすら出来なかったのだ。

「ごめんミリア、俺分らないから教えてくれる？」

「いいよママのお手伝いでいっぱいやったから覚えてる！」

ミリアに笑われたり呆れられたりしながら、悪戦苦闘したものの小一時間でどうにかお湯を沸かすことが出来た。

その後、ミリアを綺麗にさせて着替えもさせたあと、影夫は彼女に疲れているだろうから寝るように言い、眠らせた。

影夫が寝るまで起きてるとグズっていたが、寝るまで手を握ってるし、勝手にどっかに行ったりしないからと約束をしてようやく寝てくれた。

「すうすう……」

手を握って数分側にいたら安心したのか数分で寝息を立て始めた。心も身体も疲れきっていたのだろう。

「さてと」

ミリアを起こさないようにそつと手を放し、寝室を抜け出して村の広場へと影夫は戻ってきていた。

やらねばいけないことは山のようにある。

まずはミリアの父と母と兄の遺体を湿らせた布で丁寧にぬぐい、できるかぎり綺麗にする。その後、埋葬の準備のために、ミリアの家からもつてきた清潔な白い布で遺体を包んでミリアの家に運び込んだ。

すでにミリアに確認して家族構成は確認済みだ。祖父祖母はすでに亡くなっていて、4人家族だったらしい。

次に、村人達のバラバラになった遺体を一箇所を集め、穴を掘って埋葬する。

さらに血や細かい肉片はとりきれないので、その上に土を撒くよう

にして被せて対処する。

これは腐敗や伝染病の対策でもあるし、誰かが村に来たさいにすぐにはバレないようにするという意味もある。

これには大変な時間がかかった。

作業は村にあつた農具で行つたが、扱いに慣れていない上に、彼の身体が半分実体がないようなもので人間の体とは勝手が違い、すぐくやりづらかった。

幸いだったのは魔物であるこの身体はあまり疲れなかつたことだろうか。きつと前世の身体のままだったらこの作業は不可能だった。それでもどうにか、村人全員の埋葬と隠蔽工作を終えるころにはあたりはとつくに夕方をすぎ、夜になっていた。

そのころには影夫にも眠気が襲つてきた。

邪気の塊みたいな魔物でも眠くなるのかと変に感心しつつ、彼はミリアの家にもどり、客間のベッドで眠りにつくのだった。

「安らかにお眠りください……ミリアは俺が必ず守ります……」  
「ぐす、えぐつ、ぐしゅ……」

翌日、彼は朝になってミリアを起こすと彼女の家族の埋葬をした。埋葬する場所は、ミリアがよく家族とピクニックに行つていたという小高い丘の上にある大木の下だ。

「パパア、ママア、お兄ちゃん……」

ミリアは、遺体とお別れをして、穴の中に埋めた後も亡き家族にすぐるように大木に寄り添い涙を流していた。

死を理解できる年齢になつていたことは不幸だったかもしれない。もつと小さければ心が落ち着くまで理解せずに済んだかもしれない。あるいはもつと大きければ心の整理がどうにかついたらかもしれない。

一番多感な年頃にこんな辛いことを受け止めないといけないのは残酷すぎる。

だから、影夫はただただずっとミリアの側にいてあげた。

手をつないできたり、泣きついてきたり、家族のことをいっぱい話してきたり。そんなミリアに丸一日付き合つて、その日を終えた。

## 正体

「おはよ〜〜!」

「朝、朝だよ〜〜お兄ちゃん起きて〜」

「ふあふ……後五分う……」

「だめ! 朝ごはんが冷めちゃうよ!」

身体を揺すられて、ゆっくりとまぶたを開く。

そこには腰に手を当てたミリアがいて、プンスカと可愛くご立腹だった。

「ふああい……ってご飯つくってくれたのか?」

「うん。クロスお兄ちゃんよりは上手だと思うよ」

「そうかー、えらいなヨシヨシ」

「もうっ、わたしそんな小さい子じゃないよ」

「はははゴメン。でも、俺食えるのかな」

「え? 食べられないの?」

「わ、わかんない」

そういうしかない。

魔物になったのは2日前のことで、自分の身体の生態はまったくの謎なのだ。

人間を食べたくならないだろうけど、人間の食べ物が胃に入るのかどうか。

そもそも胃や腸はあるのか?

「いただきまーす」

テーブルにすわり、目の前に並べられた料理に手を伸ばす。

軽く炙られたパンに野菜やハムがはさまれているサンドイッチだ。

とりあえず手にとってパクリと一口。

「お、うまい」

「ほんと!」

花が咲いたように正面にいるミリアが笑う。

味覚はちゃんとあるようだ。食べた食べ物もこぼれおちることは

なく、黒い霧のような実体の中に収められているようだ。

「うん、ソースがすごく美味しいよ」

「ふふふそれはママの秘伝なの。パパも絶賛の味なんだから」  
「だろうね、こりゃあ美味い」

パクパクと食べていく。

今までは空腹感を覚えていなかったが、味覚を感じてしまうと手が止まらない。

あつという間に食べきってしまった。

「はあくおいしかったよ、ごちそうさま」

「うん、おそまつさまでしたー!」

軽くおなかをさすると少し膨らんでいるのが分かる。うーん、一体どうなっているのか、ただ溜まっているだけじゃないのか？

消化はされるのか？

大や小は出す必要はあるのか？

疑問が尽きない。食事の場で試すわけにもいかずとりあえずミリアが食べ終わるのを待つ。

小さな口でモグモグと食べている姿は、小動物のようだ。

しかし、小さいのに家事はもう一通りできるらしい。

(えらいなあ。俺なんかろくに手伝いもしないクソガキだったのになあ。女の子ってみんなこうなのかな？ 子供のころは男よりも成長が早いっていうしなあ)

影夫は無知だが、10歳だから言うほど小さくもない。大人並みは無理だが、大抵のことなら意思さえあれば出来るのが普通だ。彼はやらなかったので出来なかったただけだ。

「な、なに？」

えらいねーと影夫が生暖かい視線を向けているとミリアに少しひかれてしまう。食事中にマジマジ見つめられたら誰だって戸惑うだろう。

「ミリアはえらいなあ」

「そうかな？」

不思議そうに顔を傾げる。

影夫は早くも保護者として親ばかになっていた。

「そういえばクロスお兄ちゃんはどうやって生き返ったの?」

「恥ずかしそうにして話題を変えるようにミリアがそういつてくる。

「えっ?」

「私、お兄ちゃんを食べちゃったと思うんだけど……」

「そういえばと思い返しても影夫には食べられた後に復活している理由が分からない。

「うーん、俺もよく分からないんだよなあ。ミリアが食べた後に俺を吐きだしたとか?」

「わかんない。殺した後のことは覚えてないよ。良かったって思ってた疲れたなっと思ったら寝てたの」

「ミリアはそういうともぐつとサンドイッチをまた一口ほおぼる。

「うーん、ミリアの意識がなくなったから分離? したのか。合体してただけなのかなあ?」

「そうなの?」

「たぶんね」

「あれ? でも私起きてるけど、今はお兄ちゃん生きてるよね? 今は食べてないってことかな?」

「コップを両手で抱え、こくこくと水を飲みながら不思議そうにミリアが疑問を口にする。

「うーん。そもそも食べるっていうよりは、力が欲しかったから取り込んで融合したって感じなんだろうな」

「ふうくん、そんなことできるんだ」

「俺が目を覚ましたときは体が半分くっついてたから、そういうのも出来るかも」

「わあ面白そう!」

「後で色々試してみるかな」

「うん!!」

「影夫も考えていると喉が渴いたので水差しからコップに水を注ぎ、喉を潤す。

「でもよかったあ、お兄ちゃんを食べてなくて。お兄ちゃんを殺し

「ちやつたらどうしようかって思っちゃった」

「ははは、死ぬのは俺も嫌だなあ。まあ俺は死ぬのかどうかもよくわからないけどね」

「シャドー？　っていう、邪気の魔物みたいで半分実体がないみたいだからさ」

「実体がないから、弱点を攻撃されないと死なないんだっけな？　とうろ覚え気味の知識を思い出す。」

「あれ？　お兄ちゃんって暗黒闘気っていうのじゃないの？　食べ、じゃなかった。合体した時に伝わってきたよ」

「あ、暗黒闘気い！　そ、そう俺が言ったの？」

「ううん言ったっていうか、勝手に分かったっていうか、そういうものなんだーって。使い方も教えてくれたよ」

「暗黒闘気だったのか俺」

「思わぬところから影夫の正体が判明する。」

（なんてこった俺は暗黒闘気の塊だったのか。えっと憎悪や怒りなどの負の感情エネルギーに傾いた闇の闘気だっけ？　闘魔傀儡掌とかあつたなあ）

「影夫は『闇、闇かあ』と呟きながら、そんなに自分は根暗で陰湿だったかなあと落ち込む。」

「嫉妬心や劣等感が強い喪男ではあつたが弁えていたんだけどなあ」と内心ため息をつく。

「って、あーっ、思い出した！　ミストバーンの正体だ！　アイツと同じって事か!!」

「うわあ、マジかよお、アレと同じかああ……暗黒闘気の実体、つてやつなのかなあ」

「じゃあ俺、ミリアの身体のとつたりできるなあ」

「魔影参謀ミストバーン。その正体は、バーンの若い肉体を操っていたミストとかいう暗黒闘気の集合体だった。」

「影夫が暗黒闘気の実体なら、あれのお仲間ってことになる。」

「マアム乗っ取ったりしてたと、思い出す。黒マアムは結構好きタイプだったんだよなあ。」

原作を読みながらちよつとドキドキしていた。

「え？ 私を食べるの!？」

「食べないけど……操ったりはできるよたぶん。でも逆に人間に取り込まれるなんて表現はなかったと思うけどな。取り込もうとして光の闘気に消されるのはあつたけど。一体なんなんだろうなあ」

「うーん、お兄ちゃんがすごいからとか？」

キラキラした目でミリアは見つめてくるがたぶんそれは違う。

「むしろ逆で、弱いからじゃないかなあ」

「ええっ、あれで弱いんだ……じゃあミストバーンさん？ つて言う人はもつと強いのか？」

「強いなんてもんじゃないぞ！ なんとつて不死で無敵なんだからさ！」

あれは反則だもんなあ。持久戦に持ち込めば真バーンよりも強いんじゃないか？ と影夫は独りごちる。

(アストロンを掛けながら戦っているようなもんとか書いてたけどとんでもなさ過ぎる。なんだそのチートは)

「わあすごいね！ じゃあお兄ちゃんもそうなるの!？」

「まあ、そこまですになれるかはともかく、少なくともミリアを守れる程度に強くはならないとだめだね」

「もう、私だつて強いんだよー！」

「合体したらだろ？ミリアは子供だから戦わなくていいよ。子供を守るのは大人の仕事なんだから」

「むうむうむー！ ミリア子供じゃないもん！」

しゅるしゅると腕を伸ばして頭を撫でながら言つてあげるとミリアは頬をぶくーつと膨らませて拗ねた。

子供扱いはお気に召さないらしい。

「それに戦うつていっても、お兄ちゃんだけじゃ無理じゃないの？ 私の身体がないと何も出来ないんじゃないの?？」

「うぐ、それは、たぶんきつと……」

たしかに影夫には自信はない。青年を持ち上げ投げ飛ばしたことはあつたが、全力を出してあの程度では、まだまだ普通の人間レベル

だろう。あれではその辺のモンスターにも勝つのは難しそうだ。

特にダイの大冒険の世界だと人間以上の存在なんか山のよういてくる。魔王軍に襲われたり狙われるってこともありえる。そうすると自衛のための力は絶対に必要になる。

「ミリアだって戦えるよ！ ほらみて！」

「どうどう？ すごいでしょ！ これ、暗黒闘気だよ！」

そういつてミリアがぐぐぐと手に力を込めて顔をしかめるとミリアの手に黒いオーラが現われる。

そのことに影夫は腰を抜かさんばかりに驚き絶句してしまふ。

「ちよっ、ミリア!？」

「早起きして練習したらできたの。合体したときに使い方が分かったから絶対できるとおもったんだ」

たしかにミリアの手には邪悪な気配のオーラがある。出されて分かったが仲間とか同類って感じがした。

「出すのにコツがあるんだよね、最初はちよつと難しかったんだけど、怒ったらすごく出やすいの」

「ヤツラの顔を思い出したらイッパツでこんなすごいのが出ちゃった！」

「手に集めたのを飛ばしたらドカーンってなるんだよ。このまま何かを叩いてもズガンってなってね、とつてもすごいの！」

「も、もういい、もういいから！」

「はーい。どう？ミリアは戦えるでしょ？」

宥めるとミリアは暗黒闘気を消して、再びコップを掴んで水をこくこく飲んだ。

ミリアが言うとおりに、たしかに戦力としては遠距離攻撃が出来る分、影夫よりもいいかもしれない。

「だけど暗黒闘気を使わせ、幼い少女を戦わせるってどうなんだ。(どう考えても外道の所業だろう。俺の外見も相まって悪にしか見えないだろうなあ。勇者にあつたら即成敗されるぞ)」

「えつとなミリア、その力もう使わないほうが……」

「ぜつたいやだ!! クロスお兄ちゃんにもらった大事なチカラなんだ



よ！ 私の宝物なの!!」

「で、でもなあ、その、危ないし、黒くて怖いだろ？」

「お兄ちゃんと同じだもん、危なくないし怖くない!! 好きだもん!!」  
「で、でも……ミリアのためにも……」

きやんきやんと怒って駄々を捏ねるミリア。

それでもと影夫が言葉を弱めつつも宥めようとするがそれがミリアの感情を決壊させてしまった。

「ぐすっ、これはお兄ちゃんなんだもん、使うんだもん……」  
「使っちゃダメなんてやだよお……ミリアのこと、きらいになっちゃったの？」  
「うぐ……」

怒っていたミリアが今度は凄く悲しそうに涙目で影夫に訴えてくる。

これ以上無理強いと今にも本気で泣きそうだ。

『泣いた子供には鬼でも勝てない』と彼は近所の子のお守りをしたとき  
きに悟っていた。

それにミリアに対して影夫はすっかりと情が移ってしまっており、  
さめざめと泣かれてしまうともうお手上げだ。

「わ、わかったよ、じゃあ使ってもいいけど、俺がいいって言ったとき  
だけだよ？」

「うん！ ありがとうお兄ちゃん!!」

現金なミリアの様子に、ため息をつきながら、影夫は苦笑するしかなかった。

## 準備

「じゃあ今日は村を出る準備をするぞー!」

「はい」

朝食の後片付けを済ませ、ミリアと話した結果、ふたりは村を出ることにした。

この村にもたぶん役人や行商人は来るだろうし、ミリア以外の全員が死んでいることが発覚したら厄介な事態になりかねない。

特に影夫を討伐するために軍隊でもやってきたら大変なことになる。

なので、村から持っていけるだけ物を持ち出して旅に出るといふことにした。

家族との思い出が残りすぎているこの村にいとミリアも記憶のフラッシュバックがあつて辛いだろうという影夫の配慮もある。

「よし、じゃあまずは村中の物資をかき集めるか」

「りようかい!」

村人が全滅したからといって、金品を根こそぎ我が物にするのは、強盗殺人以外の何ものでもない気がして罪悪感が相当だ。

だが、そもそも悪いのは村人達だし、ここに金品を残しておいても無駄になるだけだろう。

(ここはひとつ一家虐殺事件の被害者であるミリアへの賠償金ということではおれさん達には許してもらおう)

「では出発ー!」

「おー」

気持ちですっぱりと切り替え、影夫とミリアは10軒ある家を1つずつ家捜しして金目のものや使えそうなものをかたっぱしから、持ち出していく。

「あ! 呪文書発見」

「え? ナニナニ?」

「えっと、魔法使いの初歩呪文の契約や使い方とかがのってるみたい

「だなー」

「メラ、ヒヤド、ギラ、イオ……あとで契約を試してみるか。そういや僧侶の呪文書にも色々あったけ。そっちも一緒にやるか」

「楽しみー」

古びた外観の民家の本棚から呪文書を見つけたり。

「わあ！なんかいっぱいはいってる！」

「こりやすげえな、コレクションか？」

古服や埃を被ったアイテムの収納倉庫を見つけたり。

「わあ、なにこれ？」

「んん？どしたー？」

「この壁の奥に変なのがあるよ」

「どれどれ……ってこりやなんかの仕掛けかな？ ポチつとな」

「あ！ 隠し扉だ！」

「うおーなんだこりや」

「うわー！ すごいお金ー！」

村長の家で隠し扉を見つけその中に財宝をみつけたりした。

村長の家からは日記も見つかり、不正の証拠を見つけたりした。

この村を担当する徴税官とグルになって税金を誤魔化し村人からは多く取って国には少なく納めていたらしい。

ミリアに聞いたら村の暮らしは余裕がないものだったらしい。村人に歳寄りがいかなかったのは……まさか貧しさからの口減らしだろうか？

そして、ミリアの家族は厳しい現状にある村のために村長の不正を正そうとしてあんな目にあっただろうなあ。

「家捜し終了！」

「つかれたー」

「えーそれでは。集まった物資と金を発表します！」

「わー、ぱちぱちぱち」

「まずはお金が9259G。溜め込んでやがんなあオイ」

「あの豚めえ〜！」

1Gは大体1000円だとネットで見たことがある。すると925万9千円という大金が眠っていたことになる。もちろんほとんどが村長の家にあった分だ。

「次に宝石や装飾品類。価値は不明！でもきつと高いだろう！ 豚村長の家から山ほど出てきたぞ」

「みんな苦しんでたのにー！」

「次は古着や古装備等多数。これは売るまで価値はまったくわからないな。使えそうなものは残しておいて装備するぞ」

「たのしみ〜」

「次が聖水やらのアイテム多数。消耗品だけど埃塗れで古めかしいので使うのが怖い。だから全部街で売ることにするー！」

「おぬしもワルよのおー」

「次。新鮮食料に保存食料がふたり分換算で数ヶ月分。持ち出しきれないが売ってもそんなに金にはならないだろうな。売れるだけ売ろう」

「最後が布や生活雑貨。かさばるわりに安値だろうから放置だ！ こういうのを大量にうると怪しまれそうだし。まあ宝石とか売りまくる予定だから今更な気もするけどな」

しかし、村に残すものをのぞいても、街にもっていけば結構な金額になるのではないだろうか。2万Gくらいになると大変助かる。

さすがに村中の財貨を集めるとすごい。

旅立ちの時点でこんな大金と豊富な物資を所持だなんてすさまじい。

端金を渡されて放り出される勇者とは雲泥の差である。

「うへへ、濡れ手に粟、濡れ手に粟」

つつい目Gマークになって涎が垂れてしまう。

「お兄ちゃん……」

じとーつとした目でミリアが見つめてきて影夫は正気に戻る。

「ごほん。あとは村の共有財産として、牛3頭に馬2頭に鳥が5羽と馬車が1台か。農具等もあったがあれは放置だなあんなのを大量処

分したら怪しき爆発だろうし」

「ミリア、一番近い町までは村からどのくらい？」

「一番近いのはガーナの町だよ。それなら、前に馬車で村からみんなと買い物に出かけたときは、半日くらいだったかな？」

「思ったより時間が掛かるなあ」

影夫の脳内でもったいないという気持ちと早く村を出るべきではないという考えがぶつかる。

しかし影夫は貧乏性だった。

目の前にあつて拾えるお金は拾ってしまうのだ。

昔彼がプレイしていたネットゲでもいつも倉庫がゴミアイテムで溢れていた。

「よし、もったいないから何度も往復して売れるだけ売りさばくぞ!!」

「おぉー!!」

「ところで、馬車なんて乗ったことないけど大丈夫なんだろうか？」

「私はいつも馬車の中にいたからよくわかんない！」

「とりあえず馬車に荷物をのせて、やってみるか！」

「あいあいさー」

影夫が金に目がくらんで無謀なことを言い出すがミリアはノリノリで影夫が教えた前世世界風の返事を返した。

## 金策

「そしてやっぱりこうなると……はあ」

影夫は馬鹿みたいに重たい幌馬車を曳いて舗装なんてされていないデコボコとした山道を進んでいた。

正確には、馬に乗り移って操っていた。

やったことのない素人に御者の真似事ができるわけもなく、どうすれば動いて止まるのかすら分からないのだ。

こうなるのは必然だったともいえる。

「がんばって、クロスお兄ちゃん！」

御者台に乗ったミリアがはしやぎながら、パシン！と鞭をうつ。

「ひでえ……」

影夫は馬を操っているだけなので痛みはない。でも逆を言えば鞭をいれても意味はない。

両親がやったたことの真似が楽しいのだろうか？

ちなみに、操った状態だと、村から街まで全力ダツシユなんてことも可能だ。

疲労も限界もない。途中で筋肉がはじけようが筋がちぎれようが骨が折れようがお構いなしに動かし続けることができる。

仮に死体になろうが関係はない。元々暗黒闘気は死体を操るのに向いているから死んだほうが動かすのが楽なぐらいだ。

が。馬も財産のうちであるので、影夫は馬がつぶれない程度のゆっくりとした速度で進んでいた。

まああまり速度をだすと振動で荷は傷むし、ミリアが転がったりしそうで危ないというのもある。

「ドナドナードーナードーナー」

やけくそで鼻歌を歌いながら、ぱっかヒヒンと歩みを進めていった……

「つ、つつつ、疲れたあ……」

1週間にも及ぶ売りさばきの旅が終わったときには、影夫は過労死しそうになっていた。

ゲームなんかだと無限の容量がある道具袋に全部詰め込めるから1往復で済むのだけど、異次元収納な道具袋があるはずもなく馬車には積載限界もあるし道も悪い。

そんなこんなで、5往復もしたのだ。

糞長い時間が掛かる移動中は、馬に憑依して動かしつつづけ、街にいても楽は出来ない。

街中でモンスターの姿を見せるわけにもいかないからだ。

ミリアの体の中に隠れるしかなく、影夫は表に出れないのだが、ミリアは家族を殺されたことで人間不信とトラウマを抱えてしまっているのだ。

街中での行動はすべて影夫がミリアを動かして行うしかなかった。

影夫としても元々ミリアに任せきりにしようとは思っていないかったが、慣れない街中を宿屋探しや古道具屋探して駆けずり回り、物取りや人攫いに狙われたりと無茶苦茶大変だった。

ミリアを付き合わせてしまった形になったので、彼女もクタクタになって今は馬車の中で寝ていた。

振動が酷い馬車の中でも熟睡するほど疲れているようだ。

「元が俺の貧乏性のせいだから、しょうがないかあ」

「あー、俺がしんどいのは自業自得だけど、ミリアには悪いことしたなあ」

高価そうなものだけを選んで売るようにすれば2往復くらいで済んだのだが……影夫にはそれができなかった。

最も、疲れただけの甲斐はあって、村中の持ち運び出来て換金できそうなものをあらかた売り飛ばし、所持Gはなんと27543Gになった。

街にそこそこのいい家が買ってしまう値段だ。

しかし不正蓄財に励む奴がいたとはいえ、あの小さな村の財産でもこれだけになるのか。

そういえば偽勇者連中は口モスの城下街で火事場泥棒をしてたが、

あれだと一体どれだけ儲かったことやら。

真面目に頑張るのが馬鹿らしくなりそうだと思つて影夫は、怖く  
なつた。

こんな美味しい思いを味わつたら、抜け出せなくなつてしまひそう  
だ。

こういうのは今回だけの特例ということであつて強く己を戒めよう。寝  
ているミリアをそつと、寝室まで運びながら、影夫は心に決めるの  
だつた……

「えーミリアさん！」

「なあに？」

「1週間すごくがんばつてくれたレディにプレゼントをあげます」

「ほんと?! なになに？」

「これだよ」

そう言つて、どんよりとくすんだ黒い宝石が嵌め込まれているペン  
ダントを手渡す。

「うわあ、きれい！」

そのペンダントはガーナの古道具屋の一角で見掛けた処分品だ。

その値段なんと5G。

あまりの激安ぶりに呪いでもかかっているのかと疑い、店主に尋ね  
たが、そういうことはないらしい。

なんでも、胡散臭い旅商人に騙されて買わされたゴミだから安いだ  
けだとか。

最初は1000Gの値段をつけていたが、誰も買わないからどんど  
ん値下げされていつて5Gになつてゐるとのこと。

まあたしかにこんなにくすみ切つて輝かないペンダントとか誰も  
要らないだろう。

装備品としても、まったく何の効果もないらしいし、贈答品として  
も装備品としても完全に無価値。

激安とはいえ5Gである。

日本円にして5000円相当。



誰も欲しがらず、喜ばず、役に立たないものに5G払うくらいなら、旨い飯でも食いにいったほうがいい。

というわけで売れ残っていたのだ。

こういう激安とか処分品にめっぽう弱い影夫は99.5%という破格の割引率の誘惑に耐えられず、ホイホイと購入したというわけだ。

「いやあ、安物で悪いけどな」

「ううん、ありがとう！ 大事にするね！」

壊滅的な女性経験のなさ故に、衝動買いした無価値の激安品を女性にプレゼントするという暴挙におよんだ影夫だが、彼は運がよかった。

もし、ミリアが現代日本のOLだったら、ゴミを渡すとかどういうつもりなのかとボロカスに陰口を叩かれていた事だろう。

「どう？ 似合う？」

「ああ。とつてもいいよ。うんうん。そこまでよろこんでくれると俺も嬉しいよ」

そんなことをなんら理解せずに影夫は、ペンダントをみにつけてはしゃぐミリアをみて無邪気に喜んでいた。

「さて、いよいよ明日村を出るよ」

「うん」

「馬車で行くから、持って行きたいものとかがあれば荷造りは今日のうちに終わらせておいてね」

「はい」

「では明日の朝まで自由行動です。解散！」

「わーいー！」

ミリアははしやぎながら、家の中をぐそぐそとあさりだした。持っていく家族との思い出の品や形見を選んでいるのだろう。

影夫はというと、旅立ちにそなえて、街で揃えてきたアイテムや装備の確認と馬車への積み込み、行き先を世界地図で入念にチェックしたりと忙しい。

村を出てどこに行くか。最終的な目的地は、じつはもう決めてい

た。それはデルムリン島だ。

あの地上の楽園ならばミリアも心安らかに過ごせるだろうし、ダイと触れ合うことで心も癒えていくだろう。

だがとりあえずの目的地、ベンガーナの首都だ。ちなみにその名前は国名と一緒である。

ベンガーナの街は世界一の規模と人口を誇り、発達した交通網もあるので、世界中どここの物品も買えるし、どこにでも向かえるといっても過言ではないという。

しかしだ。何事にも順序というものがある。影夫は旅の経験どころかこの世界に慣れてすらいない。

なので、しばらくは最寄のガーナの街を拠点にして、呪文の習得やら戦闘の実戦訓練などをしつつこの世界と旅に慣れる予定だ。

情報を集めたり、ミリアに休みをあげたりと言ったこともする必要がある。

そんなことを考えながら影夫は荷造りを続けていった。

## 出立

「お兄ちゃん、おっはよー!」

「ぐはあっ!?!」

スヤスヤと眠っていた影夫にミリアが飛びついた。

ぐええとつぶれたかえるのような音を出して口からもわんと黒い霧を吐いた。

影夫は暗黒闘気の集合体ではあるが生命体でもあるため半実体の状態だ。

物理攻撃や衝撃は効きづらいがいくらかダメージはあるのだ。

「ぐおお……これがかの有名な妹ダイブ……! 恐ろしい」

ミリアの下敷きになりつつ、悶絶しながら影夫がごちる。

エロゲとかで主人公がやられていたりするが生身の人間なら内臓破裂しかねない恐ろしい技であることが影夫には今分かった。

「あ、あぶないからこんどから優しく起こしなさい。わかったかいミリア?」

「ごめんなさーい」

いつもミリアは影夫にくつつき、スキンシップを取りたがる。

このように痛みを伴う激しい親愛表現もあって影夫は困ることもあり、その度に叱っている。

叱られるのも嬉しいのか楽しいのかニコニコしている。もつとも、言いつけは基本的に守ってくれるので、良い子である。

家族を失った寂しさを埋め合せているのだろうか。と影夫はその様子を見るたびに思う。

この万分の1でいいから、他の人にも親愛を向けて絆を作ってもらいたいんだけど、ミリアは他人との接触を嫌がるばかりだ。

町で一度、温和で優しいと評判の老人と会話をさせてみたものの冷や汗をかいて、うめき声しかあげられなかった。

(まずい傾向だよな)

きつと優しげな人は怖いのだろう。信用すると裏切られて大事な

物を奪われる、という強い恐怖があるのだ。

だからといってその人を殺すわけにもいかない。悪くもない人を害してはいけないことはミリアにも分かっている。亡き両親も影夫もそのように教えている。

だから信用も拒絶もできずに困り果てる。

人が優しければ優しいほど、信じれば信じるほど裏切られた時には致命的になってしまう。きっと彼女はあの村と人々が大好きだったのだろう。なのに……。

もはや家族以外は信用できなくなってしまうているのだろう。そして今のミリアに家族認定されているのは影夫だけ。

(カウンセラーでもない俺にはどうしようもない。ダイヤやアバン先生がミリアの心の傷を癒してくれば……希望はあるかもしれない)

「お兄ちゃん？ はやくいかなないとごはんさめちゃうよ」

「あ、ああ。いこうか」

「うん！」

影夫は元気いっぱいのミリアに腕を引かれながら、食事に向かうのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ミリアお手製の食事も終わり、旅立ちの瞬間がついにやってきた。

馬車を用意して村の入り口でミリアを待っていた影夫はばたばたと走りよってきたミリアに声を掛けた。

「ミリア、準備はできたみたいだな」

「うん、バッチリ。ほらみて！」

ミリアはくるくるとその場で回り、旅支度を終えた格好を影夫にみせてくる。

武器として毒蛾のナイフを2本、防具は形見の髪飾りに、形見のドレス、アクセサリとして形見のリボンと影夫がプレゼントしたネックレスを装備している。

2本の毒蛾のナイフは、腰のベルトから吊るしたナイフケースに納

められている。

戦闘時には、二刀流のスタイルで左手は逆手に握り、右手は順手で握って使う。

正直、影夫は素人である少女がそれでナイフを使いこなせるのかどうか激しく疑問だったが、このスタイルになってしまったのは影夫のせいであった。

彼が冗談でミリアにゲームの真似事をさせたらすぐくカッコいいとはしゃいで彼女が気に入ってしまったのだ。

「どうどう!?!」

すばやい動きで左右の腰につけたナイフを引き抜き、シュツシュツと振るって見せている。

影夫には意外と様になっっているように見えた。とはいえ彼もナイフ術なんてゲームや映画でみただけだから評価はできない。

「とっ! はああっ! やあっ!」

「うーん……厨二乙ってかんじだなあ」

今のミリアの格好にはなんともいえない違和感があった。

外行きのおしゃれを着て、両手に毒々しい毒蛾のナイフを握っている危ない少女の完成だ。

しかも戦闘時には邪悪な暗黒闘気を操り、敵を屠る……厨二設定の黒歴史モノみたいな絵面になることは確実だ。

ちなみに他の武器として聖なるナイフが何本かあったが、ミリアや影夫が握ろうとすると拒絶されて扱えなかった。暗黒闘気の使い手はオコトワリ、ということらしい。

決して悪いことには使わないのに。決めつけるなんて酷いと影夫は愚痴って、ミリアはピリピリしてキラい!と頬を膨らませていた。

逆に考えると暗黒闘気を纏えば呪い装備と相性がいいかもしれない。入手してシャナクを覚えていたら試してみたい。

ピサロみたいにデメリットなしで呪い装備を使えたら強力な切り札にもなりうる。

「ふふくん、ドレスはどうかかな？ 変じやない？」

「ああ、凄く似合ってて可愛いよ。一人前のレディだね」

形見でもある赤いドレスはなんとミリア自身で母のドレスをつくろい直したものだ。

影夫はその様子を見ながら、本当にミリアはなんでもできる。俺なんて……と語りだしてえらいねービームを出し、彼女を照れさせたりした。

戦闘も出来るようにと、足を動かしやすいように裾を上げたり、大人サイズなのを子供サイズにするためにダブついている布の内側を内側に縫いこんだそうだ。

だからのちのち成長すれば丈を伸ばして調節することもできるらしい。賢い工夫だと影夫はえらいねービームを……以下略。

「えへへー！」

「でも本当にいいのか？ ドレスが汚れたり破れたりしたら……」

大事な形見のドレスなのに闘いのあるような場に着ていってもいいのだろうか。かけがいが無いものだけに心配だ。

「うん、形見の服は他にもまだあるから大丈夫……コレを着てるとね、ママが側にいるみたいでポカポカするの！ だからこれがいい」

「そうか。大事にしような」

影夫はそう言つて抱きついてきたミリアをナデナデする。

「うん！ でも、アレも履きたかったなあ。やっぱりだめ？ このドレスとすぐく合うと思うの！ ママがね、パパを悩殺した時と同じ格好なんだよ！」

ミリアは母の形見である、あみタイツとガーターベルトをも履きたがったが、セクシーポーズで悩殺しようとしてくるのが目に見えているので影夫は10年早いと言つて装備をやめさせた。

無論、教育上よろしくないからで、興奮してしまふからではない。

「ダメだよ。ミリアがママと同じくらい大きくなったらね」

「もう、一人前のレディっていったくせに！」

「ゴメンゴメン」

謝りながら頭を何度か撫であげるとむくれ顔がすぐに笑顔になる。

ころころとよく変わる表情が、子供らしくて微笑ましい。

「それでお兄ちゃん、まずはどこいくの?」

「まあそのあたりは馬車で話すよ。ほら、のって」

「うんしょっ!」

手を貸してミリアを馬車の御者台にのせる。

いつもとは違い、影夫はミリアのとなりに座って手綱を握った。

「あれ? 今日馬さんに乗れ移らないの?」

「んー、もう慣れたし操り方覚えたから大丈夫。暴走したときだけ乗り移るよ」

「へえくお兄ちゃんってすごいね!」

「まあ道に沿って一定の速度で走らすだけだからな。そうでもないよ」

「よし、それじゃあしゅっぱーっ! いけ! マキ〇オー!」

「んんー? マキ〇オーってなあに?」

「根性があるすごい馬の名前だよ。肖ってつけてみた」

「ふうーんそうなんだ」

ミリアは影夫と話しながらごく満悦な様子だ。

足をぶらぶらさせ、隣の影夫とくちやべってはニパニパと笑っている。

「行き先だが、とりあえずはガーナの街へいく」

「えー! またあそこお?」

いい加減飽きたと不満げなミリアを宥めすかしながら馬車を走らせるのだった。

## 旅立ち編

### 到着

「しっかし、この街も慣れたもんだよな」

「ホント、何回も来たもんね。お兄ちゃんが変に愛想よくするから……ちよつとした有名人になっちゃったよ」

まあさすがにちよつとはしやぎすぎたかも。と影夫は思い返してごちる。

ミリアの体を通してだとはいえ、人々との交流は楽しかったのだ。愛想を振り向いたり、無邪気に人々とのふれあいをエンジョイしたのだが、やりすぎてしまったようだ。

「いやあ楽しいな、ロリキャラネカマの振る舞いをしなきゃいかんのは正直アレだけど」

ミリアの身体を通す関係上、ロリロリきゅんとした言動が必要になるのでこつ恥ずかしい。

それでもそれなりにこなせるのはネトゲでのネカマ経験のおかげであろう。

「ちよつと気持ち悪かったかも」

「ぐはあ」

まあそういうわけで通りを歩くだけで、『おやまた来たのかいお嬢ちゃん』とか、『また寄つとくれ』とか、『元気だったかい』とか、『うちの子が会いたがってたよ』など、色々と声を掛けてきてくれるということになる。

その度に影夫がミリアの体と口調で愛想よく対応し挨拶を返していく。

年寄りには特に受けが良く、甘い焼き菓子をもらったりもする。

明るく素直で相手に合わせるのが得意という影夫の性格は、年上に好まれることに定評がある。



そこに、可愛らしいミリアの外見が合わさるともはや最強だった。人は一人では生きられない。そのことをミリアにも分かってほしいと影夫は強く思ったが、トラウマがある彼女に無理強いは出来ない。

でも。と影夫は思う。

本来ならばさびしがりやで、無邪気で触れ合いが好きな彼女はきつと影夫以上に人気者になれただろう。

つくづく本当にあの村の連中が腹立たしい。あいつらはミリアの幸せと未来を台無しにしたのだ。

「あ、おばあさん。こんにちは。怪我した足はもう大丈夫？ あ。そうだ、この前ホイミ覚えたから治してあげる！」

「おやおやありがとうね。じゃあお願いするよ。ミリアちゃんは本当に優しく良い子だねえ」

こうして影夫がおばあさんと会話しても、ミリアは心の奥で閉じこもっているだけだ。

無理やり操っているわけではないので、五感は共有していて、意識もあるはずだけど、とくに何も言っていないし何かをしようともしない。じつと観察しているような、恐る恐る見ているようなそんな感じの反応だ。

(ミリアとしても嫌ではないらしいけど……俺を通した触れ合いで少しずつなれていってくれれば……)

「ホイミ……これでどうかな？」

「こりやあすごいねえ！ 本当にありがとうミリアちゃん。痛みもないし、怪我する前より元気になったくらいだよ」

「よかった、もう行くけど元気でねおばあさん」

「あ、ちよつと待っておくれ。お礼に……これをあげるよ」  
立ち去ろうとしたら呼び止められて、お菓子をくれた。

「今度時間があればウチへおいで。ご飯をご馳走するよ」

「ありがとうおばあさん。じゃあねバイバイ」

「はい、さようなら」

ニコニコと見送ってくれるおばあさんに手を振り、再び歩き出す。

困っている人の役に立って、喜んでもらえるのと影夫も嬉しい。

影夫からすると特に苦勞もなく使えるようになったホイミを使っただけなのだが、庶民は一般的に呪文を使えないらしい。

適性などの問題もあるが、一番はお金と時間の問題だ。

基本的に書物は高価だし読むのに学も必要だ。誰かに教えを乞うにもよほど良心的な師でないかぎり礼金はいるし習う間は働けないので蓄えもいる。

義務教育がないため、基本的には庶民には学がない。最低限のことは地域の教会で教えてくれるが簡単な国語と足し算引き算くらいで、ほとんどの時間はお祈りや説教らしい。

なので、呪文を身につける余裕と機会に恵まれるのは、ある程度親が裕福だったり人を纏める仕事をしている必要がある。

しかもその親に教育への理解があり、子供に呪文の適性がなければ身につけることはできないのだ。

これでは呪文が使える人が少ないのも当然だ。

ちなみにミリアの教育環境はかなりよかつたようだ。両親が元お金持ちとか、何かの先生とか、もしかしたら冒険者だったのかもしれない。そのあたりはミリアも知らないようだが。

「すごく喜んでたね」

「ああ。親切にしてもらったり善意を受けたら誰だって嬉しい。俺はこういうのが好きだな」

「親切にされた人が俺と同じ気持ちになって、また他の誰かに親切にする、そしたらみんな嬉しくて幸せになるだろ。お互いを思いやれるといいよな」

影夫はしみじみと理想を述べる。

「そうかな？　でも感謝しないひとも、自分の事だけ考える人もいるよ」

「そうだな、残念だけどしょうがない。俺は自分がそうしたいからやってるだけだから無理強いはできないよ」

ミリアのいうことは最もだ。

影夫も若い頃は自分だけが良い子でいても損をする感じがしたも

のだ。だからといって、自分勝手に振舞うなんて嫌だった。

だから、馬鹿の愚行をやめさせたい、身勝手を直させ更正させたいと、心の底から思ったことも何度もあった。

だが、そう簡単に他人を制御したり管理なんてできるはずもなく、身も心も消耗しきり、疲れきっただけだった。

だからもう影夫は、損得がどうか、他人がどうかどうでもよくなっている。

自分がそうしたいからそうするだけ、というスタンスが自然体でいられて結局は楽だし軋轢もない。

「でも、悔しくない？ 親切にしてあげたのに、嫌な事をしてきたら」「もちろん俺も人の子だから、仇で返されたり内心で馬鹿にされるのは腹が立つし、嫌な事されたら当然やり返すよ」

「まあつまり、なんだ。出来る範囲で思いやりを持ちましょう、されて嫌なことほしくないようにしましょう、相手の立場になって考えましょう。最低な人もいるけど殆どの人は普通だよ。ってことかな？」

「うん……」

「さあ、今日のところはもう休もうか。宿の手配は俺がしておくからこのまま寝てもいいよ」

ミリアは疲れてしまっているようだ。

影夫は身体の主導権を譲ってもらい、なじみの宿屋まで歩き、部屋をとる。

そしてそのままその日は眠りについた。

☆☆☆☆☆☆

「う……あ……やっ」

夜中。影夫はじっとりとした汗の感触と苦しげなうめき声で目を覚ました。

今日もミリアはうなされていた。

街にいる間は宿の部屋は1つしか取れない。だからミリアと影夫は1つのベッドで寄り添うように寝るしかない。

ミリアの体に憑依した状態で寝るのは無意識が干渉するのか、頭が

ひどく痛んで危ないのだ。

最初に添い寝したとき、影夫は最初は妙に緊張して眠れなかったし、そんな浮ついた気持ちはすぐに消し飛んでいた。

眠ると同時にミリアが悪夢にうなされ、泣いているからだ。

「やめてえ……」

「ぱぱあ、ママあ……」

「おにいちゃん……」

そして今もうなされていた。

必死になって影夫の身体に手を回し、小さな体ですがるようにぎゅっと抱きしめてくる。

影夫はそつと頭を撫でる。

「すう……」

そうすればミリアは安心するのか深い眠りにはいるのだ。

「大丈夫だ、兄ちゃんはここにいるから……」

最初に添い寝して以来、影夫はできるだけだけミリアと一緒に寝るようになっていた。別々に寝ては彼女は一晚中悪夢にうなされたままだろうから。ほうっておけないのだ。

側にいることで安心できるならば一緒に寝るくらいなんでもない。

それに、ミリアの苦しむ姿を見れば照れくさいとか恥ずかしい気持ちなどは吹き飛んでしまった。

「焦るのはだめだな……ゆっくり少しずつ、だ……」

今すぐにもミリアの苦しみを取り去ってやりたい。だが焦りは禁物だろう。

幸い、時間はある。街での情報収集をした際、ハドラーが倒されてから大体10年かそこらが経っているらしいことが分かったのだ。

それが分かれば後は影夫が知る情報を元にすればバーン襲来までの時期が分かる。

凍れる時の秘法で世界が一時的に平和になってマームが生まれ、その翌年くらいにハドラーが倒されていた。

原作開始時点でマームは16歳だったはずである。

つまり、ハドラーが倒された15年後に原作が始まる。ということ

であり、つまりバーン襲来まで4、5年くらいの余裕がある。

自衛のためにある程度の力は必要だろうが、何も影夫とミリアがバーンと戦う必要はないのだから焦って強くなる必要もない。

デルムリン島に居させて貰えばあとは原作が勝手に進んで世の中は平和になるのだから。

とにかく今はゆつくりと時間をかけて、トラウマを塗りつぶせるほどぬくもりをあたえてあげられれば。思い出で埋めることができれば。そんなことを思った。

## 契約

ガーナの街から少し離れた野山の中にある山小屋。そこにミリアと影夫はいた。

「じゃあいくぞ」

「うん」

ゆっくりと影夫の体が霧状になってミリアにまとわりつく。そして、首元からゆっくりとその体内へ侵入していく。

「う、うう……あん……」

身体の中を影夫が這いずるようなその感覚にミリアは小さく喘ぎ声を漏らす。

ミリアに入り込んだ暗黒闘気は、彼女の表面に浮き上がり、黒い紋様を描く。

意識は失わない。影夫は奪うつもりがないし、ミリアも抵抗せずに受け入れているからだ。

「く、ふ……んっ」

「はああああんっ!!」

ミリアの身体の刻印が激しく明滅し、大きくミリアが身体を震わせる。すると同時に、ミリアの首元に集まっていた暗黒闘気が顔の形に変化して口を開いた。

「これで終わりだ」

「はあはあ……もつとお」

「こ、こら。はしたないぞミリア。そういう声は出すなって言ってるだろう」

「だって……気持ちいいんだもん」

「身体の中を冷たくて力強いのが、しびれるようにはいつてきて……お兄ちゃんだあって」

「だ、だからそういう言い方はダメだって！俺が変なことしてるみたいじゃないか!!」

泣きそうな顔で影夫が叫ぶ。

声だけを聞いていると、妹にイタズラをしている変態兄貴だ。

「大体、ただ暗黒闘気の調整をしてるだけだろ!? 俺をからかうならもうやらないぞ!!」

「ご、ごめんってお兄ちゃん」

そう。影夫はミリアの体内によんで溜まった暗黒闘気を吸い取り食べて掃除していたのだ。

それによつて影夫は闘気量を増して強くなり、ミリアも体内にあまりよむ暗黒闘気を除去できて心がすつきりとする。

まるでドクターフィッシュにでもなったみたいで微妙だが、しようがない。

ただでさえ不安定な精神が負に傾きやすくなるからだ。もつともこれもどこまで効果があるのかは分からない。

「でも、すつきりして気持ちいいんだけどちよつともつたいないね」

「何がだ?」

「暗黒闘気。せつかくあるのにお兄ちゃんが食べちゃうなんて食べた後、私に返してくれたらもつと強くなれるのに」

「だーめ。ミリアが戦うのはあくまでも最後の手段だからな。普段は俺自身が戦うか、俺を制御してつかうこと! いいね?」

「はぁーい」

不承不承に返事する。ミリア。

暗黒闘気は出来ればミリアには使わせたくない。使うなどといったら怒るので、最終手段ということで納得させる。どこまで制御できるかはわからないが。

「それで今日は何するの? これだけじゃないよね?」

「ああ。呪文の契約を試そうと思ったんだよ。村にあった呪文書と、ガーナの街で見つけた呪文書を片っ端から持ってきた。ほら、そのカバンに入ってる」

「あくこの重かったかばんかあ」

「そうだよ。結構な数だからね。一気に契約を済ませてしまおう」

「うん、がんばる!」

☆☆☆☆☆☆

「はあくくく終わったあ」

ミリアが身体をごろんと地面に投げ出して寝転ぶ。

全部の契約をふたりに試していったら朝から夕方まで掛かってしまった。

「これで呪文つかえるんだよね〜？」

「違うぞ」

「えええ!? こんなに疲れたのに!? もうっ!!」

ミリアががばつと影夫にタツクルしてくる。

「いたたた落ち着けて」

「力量以上の魔法は契約を済ましてても使えないの!!」

「あ。ちなみに契約を失敗した魔法は絶対に使えないから」

「えー!? じゃあ私は絶対ホイミとか使えないの？」

「ぶーそんなのずるいよー!!」

ゴンゴン。とミリアが怒って影夫のおなかにヘッドバッドをしてくる。

「あだ、いでえ、地味に鬨気をこめるんじゃない！」

「ぶうー」

「しようがないだろ。かわりに俺はメラもギラもヒヤドもイオも使えないんだからおあいこだよ」

影夫はうなだれながら言う。

彼は前世からの憧れだった攻撃魔法をバリバリ使うという夢が叶わぬことをしり結構ショックだったのだ。

まったく、30歳になっても童貞だったんだから魔法使いの適性じゃないのかよ。

「俺も、俺もナア……攻撃呪文でババーつと戦ったりさ。したかったよ。特技はイオナズンです。とか言いたかったよ」

「えーつと、じゃあ結局、私は何が使えるんだっけ？ おぼえてないよー」

ミリアが首を傾げながら言う。まあ次から次へと試していたからなあ。



ゆつくり教えながらやればよかったかな。

「えつと。ミリアは……メラ、メラミ、ヒヤド、ヒヤダルコ、ギラ、ベ  
ギラマ、イオ、イオラ、マホトラ、ラリホー、マホトーンが契約でき  
てるな」

「そんなにいっぱい!? すごい!!」

ちなみに、極大呪文がないのは高度な呪文書がないからだ。まあ地  
方の街に強力すぎる呪文書があっても購入者はいるまい。売れない  
商品を置くはずもない。

なので、それらの契約をするためには大きな街にいつて高度な呪文  
書を買いたいさるか、どつかの大魔道士とか、学者でもあるアバンとか、  
そういつた高度な知識を持っている人に教えてもらおう必要がある。

たぶん素質からいつてミリアは極大呪文の契約もできそうだから  
これからも契約は随時行つていきたい。

「力も強いみたいだし、適性というか職業でいうなら魔法戦士つてと  
ころかな」

「魔法戦士!? うわあかつこいい!!」

全身で喜びをあらわしウキウキするミリア。そんな彼女を影夫は  
生暖かい目で見守つた。

(ドラクエ世界においては微妙の筆頭ともいえる職業とは言わないで  
おこう)

「あ、違つた」

「え?」

「ミリアには暗黒闘気もあるからな……」

「魔道戦士。名づけるならそれかな! ちよつとワルっぽいのがかつ  
こいいだろ?」

「わあわあ! もつとかつこいい!! すごいすごい!!」

ミリアは影夫に頬ずりして喜ぶ。そこまで喜んでもらうとちよつ  
と恥ずかしいネーミングを披露した影夫も嬉しい。

「じゃあ次俺……ホイミ、ベホイミ、ニフラム、マヌーサ、バギ、バギ  
マ、キアリー、キアリク、ザメハ、マホトラ、インパス、トラマナが  
契約できてるな」

「私よりいっぱい！ さすがお兄ちゃん」

「でもなあ回復と補助呪文系ばかり。バギ系はあるけど……微妙だなあ」

そもそもバギ系は影夫にとって微妙なイメージしかない。しかも漫画では、バギクロスでさえ、暴風とともに肌やらが小さくスパスパと切れるだけで大きなダメージを与えられている表現がないのだ。

おそらくはちよつと痛い扇風機くらいにしかなるまい。

「お兄ちゃんの職業は？」

「え、職業？ うーんこれはなあ」

（暗黒闘気の塊で回復と補助系呪文を使う職業……？ なんだそれは）

「なんだろ暗黒神官とか？」

「おおくなんか悪そうだね！」

「まあ暗黒闘気だしね俺……闇とか暗黒とかついちやう名前は確定だなあ」

「あ、でも力も結構あつたから神官さまって感じないかも？」

「うーんたしかにひよろつとしてないか。暗黒騎士とかだとカツコイイ？」

「わわ、かつこいい！」

「でもちよつと厨二っぽいかもしれないなあ」

「ちゆうにい？」

「自意識過剰な子供っぽいって感じ、かな？ 俺はワルなんだぜーサイキョーだぜーみたいなのを喜んでる感じがして大人は恥ずかしいんだよ」

「ふうん、変なの」

「まあいいや。夜になる前に帰るか」

「疲れたから今日のご飯はお肉がいいな」

「いいねえ。いっちょ奮発して美味しい肉でも食いまくるか」

「やったあ！」

影夫とミリアははしやぎなら街へと戻った。

☆☆☆☆☆☆

「美味っ、美味っ、かぶりつきは最高だな！」

「はふはふ、んぐぐくっ、おいしいね！」

肉を食わせたら町一番と評判の居酒屋でミリアと影夫は猛烈な勢いで肉にかぶりついていた。

ミリアのテーブルの前に置かれている大量の皿の上にはいわゆるまんが肉と呼ばれるタイプのジューシーな骨付き焼肉やら、丸いハムをカットしたような形のステーキなどがずらりとならんでいる。

ちいさな手でお肉を挿んでガツガツとかぶりついて食べる。フオークもあるがお上品に食べていては肉が冷めてしまうのだ。それに手づかみで食べるからこそ出る野性味というものもある。

ちなみに影夫はテーブルクロスの中に隠れていて、ミリアが落としてくれるお肉にかぶりついている。気分はペットだが肉が美味しいので文句はない。

店員は小さな食の魔人の姿にあんぐりとしながらも次々に追加の料理を運んでくる。

「ははお嬢ちゃん、いい食いつぶりだなあおい！将来が楽しみだぜ！」

「んぐ……ぐ……！」

ハゲ頭の筋肉ダルマみたいな男が注文していない皿をもってミリアのもとにやってくる。

「このマスターだ。」

「ほらよ、これは俺からのオゴリだ遠慮なく食いな」

「……え」

ミリアが突然話しかけられておろおろしている。

それでも、料理を食べる手は止まらないが、どうしていいかわからないようだ。

影夫はテーブルの下に隠れながら張り付いているのでどうにもできな

「おつといけねえ。テーブルが汚れてるな」

「オイ！このお嬢ちゃんを奥の個室につれてってやれ。料理ももつてけよ。モタモタして冷ましたら俺がぶっころすぞ!!」「は、はいい!!」  
大声で店員をどなって料理を運ばせた。

そしてミリアにぐいっところもての顔を近づけて、トントンとテーブルを叩いた。

「ひ……」

「コノ下に連れがいるんだろ？ そいつにも存分にくわせてやんな」  
「あ……」

マスターは白い歯をみせてニタリと笑い、ウインクをする。

暑苦しい筋肉髭達磨のその仕草はどこか愛嬌があり、ミリアは毒気を抜かれてしまう。

「あ、ありがと……?」

「おう、いいってことよ。こんなに食ってくれりやあ店にとつても上客だしな!」

やがて店員がやってきて、恭しく丁寧に個室へと迎えられて出て行った。

店員が去つたのを確認して影夫は肩をぐにぐに動かしてほぐすように伸びをしながらミリアの服の中から出てきた。

「あゝゝいいオヤジさんだな」

「そ、そうだね、びっくりしたけど」

「面白い人だな。さ、飯食おうぜ!!せっかく気を遣ってくれたんだし!」

「うん!」

ミリアと影夫は楽しくおしゃべりしながら肉料理の山を平らげていった。

追加注文の時と料理を運んできたときだけは影夫は隠れる必要があったが、羽を伸ばして料理を楽しむのはありがたかった。

店員が来るときはかならずノックしてくれるし、とてもありがたい。

「お、お会計はしめて、85ゴールドになります」

店員さんが若干ヒキつりながら値段をつけてくる。一人でそれだ

け平らげたことにびつくしているのだろう。

日本円換算じゃ8万円くらいか？宿代10日分くらいの額だ。袋からじゃらじゃらと金貨をだして支払いを済ます。

面倒なので100ゴールド金貨を1枚で支払いだ。

「おつりはいりません」

「あ、でも……」

これは気を利かせてくれたマスターへのお礼もあるので受け取って欲しいが店員にそこまで分からないようだ。

「ゴノ馬鹿ヤロウが！ オゴリだって言った分まで会計にいれてんじゃねえよ！」

「悪かったなお嬢ちゃん。コイツはドンクサくてな。ほれっ、差し引きの金だ。いつでも来てくれよな！ あの部屋はあけておくからよ？」

マスターがひよいと現われたかとおもうと店員をしかって、100ゴールド金貨を3枚なげ渡し、歯を見せて豪快にわらった。

オゴリの料理代を差し引いても多い金額だ。これはサービスで割り引いてくれたのだろう。

おやじさんの好意に、ミリアも感謝の念を抱いているようで、何か言いたげにもじもじとしている。

「あう……」

その小さな背中を教えてやろうと、影夫が小さな声で囁く。

（なあ、ミリア。気を使ってくれて値引きまでしてくれたんだから、お礼を言わないとな）

「あ、あり、がとう……」

「じゃあな！ ガハハ!!」

ミリアは、俯きながら小さく返事をした。戸惑いいつもこのオヤジに歓迎されることにまんざらでもなさそうだ。

その様子を見て、明日から毎日来ようと、影夫は思いながら、宿に戻るのだった。

## 初陣

「今日は何するの?」

ガーナの街から歩いて30分ほどの山中の小高い丘の上にふたりは来ていた。

「ああ。呪文の訓練だな、その後に実戦」

「ついにたたかうんだね!」

「後でだけどなー。このあたりは価値のある植物もなく、たまに魔物がでるんで人が寄り付かないらしいんだ。腕自慢が魔物討伐で稼ぐにしてもついでに色々手にはいる場所のほうがいいからな。みんなはそつちにいくんだとさ」

「ふうーん」

「だから見られる心配もなくてちょうどいいんだよ」

「よし訓練開始だ! ではミリアさんどうぞ」

「うん。いくよー、メラ!」

「……………」

勢いよく手を突き出して、叫んだミリアだったが、その声は山彦と違ってむなしくあたりにひびいた。

「あ、あれ? 出ないよ」

「あー最初はそんなもんか?」

不思議そうにしているが普通はそんなもんだらう。

呪文を放つには、魔法力を高めて両手に集中させたうえで最適な構成に練り上げ、イメージに乗せて放つ必要がある。

もちろんこのことはちゃんと説明したのだが、一度で全部分かって実践しろというのは無理だらう。

「えーつかえないの?」

「練習がいるってことだな」

「えっと、まず魔法力の認識からいくぞー」

「うん…………」

その後、影夫は瞑想をさせてみたり、精神を集中させてみたりいろ

いろいろしてみたが、ミリアにはいまひとつピンとこないようだ。「うーんできないー」

あまりに出来ないからか、どうもミリアも集中力が切れてきたようだ。

これ以上やらせても難しいだろう。

「うーん、無理か。魔法力の認識ってなかなか難しいみたいなんだよな」

「もうっ、魔法力ってよくわかんない！ もうやめようよお」

「おちつけって。そうだな……よし、これでどうだ？」

ミリアも嫌がりだしたが、せっかく魔法の適性があるのに魔法嫌いになるのはもったいないし、苦手意識が付いてしまうと厄介だ。

しょうがないので影夫は、ミリアに憑りつき、影夫自身の魔法力を身体にめぐらせて感覚を教えることにした。

「んーわかるか？ いま身体にあたたかいものがあるだろう？」

「あ、なんかぽかぽかするやつ？」

「そうそう。これが薄まったような状態で身体の中にあるから、それをぐっと高めて、昂ぶらせるんだ。すると、こういう感じになる」

「ふんふん」

ちなみに、影夫にとっては魔法の力を認識することは実に簡単だった。前世にはない変な感覚があったので、たぶんこれが魔法力ってやつなんだろうなと理解できたからだ。

さすがにそこから先は手探りだったが、魔法力を認識できればそれに干渉を試みればいいだけだ。後はイメージがあれば魔法力の消費の少ない初歩呪文は使える。

逆にこの世界で生まれ育つと体に魔法力が宿っているのは当たり前前の状態なので、その感覚はかなり掴みにくいものらしい。

感覚ってのは慣れると気にならなくなってしまうものだからな。自分の体臭が分からないのと同じようなイメージだろうか。

「この感じが分かるまでに結構大変みたいだな。呪文書にもくじけず諦めずに努力して感覚を掴むまで繰り返すべしと書いてあったぞ。

「ここで諦める人が多いんだろう」

「そうなんだ。お兄ちゃんがいてよかった。ありがとう！」

「まあこのからだの利点のひとつだなあ。外見さえごまかせれば魔法教室とか開けそうだ」

「この世界の住人に、簡単に魔法力を認識させることができるとなると画期的だろう。」

「ううーんあの感じだね。よし、何か分かった気がする！」

「やってみるよ……んー！ー！ メラ！」

両手を突き出し、唸り声とともに呪文を唱えるとミリアの手のひらの先にサッカーボール大の火球が出現した。

「おおー！」

「わあできた！ できたよ！ お兄ちゃんのおかげだよお」

「つてこらっ、メラを消せっ、ぎやああああ」

メラを浮かべたまま飛びついてきたミリア。

影夫の顔面にメラが炸裂して燃え上がってしまう。

「あち、あちやちや！」

あわてて、地面に顔をこすりつけて消火する影夫。

「あ!? ごめんなさい……大丈夫？」

「あちち……ふーふー大丈夫みたいだ……」

心配そうなミリアの声に、ぷすぷす……と黒いもやをただよわせながら影夫がこたえた。

「あー顔がピリピリする……ホイミ」

（うーん。俺って攻撃呪文は通じるのか。でもちよつと熱かったくらいだから耐性自体はあるみたいだな。中途半端に生命体になっっているからこうなってるのだろうか？）

癒しの光で、やけどげた顔の表面がもりもりと元に戻っていく。

形を整えるだけなら、ホイミを使わずともできるがそれではダメー  
ジは残ったままなのだ。

これまでに自分の身体について、分かったことがある。

1つは、ダメージを受けると影夫の身体を構成する暗黒闘気は雲散していくということ。



2つは、雲散して減った分はホイミで減る前まで戻すことができるということ。

暗黒闘気の総量にはミリアから食べた分も含まれるようで、少しずつだけど暗黒闘気量は増えている感じがしている。

「じゃあ次はギラいくか〜」

「おー！」

そんなこんなで影夫とミリアは一通りの呪文を試し終え、習得できている呪文を把握した。

☆☆☆☆☆☆

それから数十分後、ふたりは、山中にて一匹の魔物に襲われていた。

「ぐおおおおおおっ!!!」

「きやああっ!?!」

ゴリラとサルを足したような化け物が丸太のように太い腕をミリアに向けて振り下ろす。

ミリアは身をかわすが、拳はミリアの左腕にぶち当たり、彼女を吹き飛ばした。

「大丈夫かミリア!?!」

(やべえ、あばれザルがいるとは)

「あぐ……ああ」

ミリアは左腕を押さえて苦痛に顔をゆがめていた。

殴られた箇所は青紫に変色し、陥没している。骨も折れるかしてしまっているだろう。

影夫はすぐにでも治してやりたいが、のんびりホイミをかけている余裕はない。奴はすぐそこにおいて殴りかかってきているのだ。

「ミリア! 俺が時間を稼ぐ! 距離をとれ!」

「う、うん……!」

影夫は舌打ちしながら、ミリアから分離して身体を霧状に変化させ、あばれザルにまわりつかせる。

ちなみに、憑依はしない。敵対している相手には何故か出来ないの

だ。

あばれザルに遭遇してすぐ影夫は憑依を試していたが無理だった。身体の中にもぐりこむことが出来ずはじき出された。

馬やミリアには問題なくはいりこめるといいうのに敵意を持っている相手には無理なのか？

誰にでもとりつけるミスと俺には何らかの違いがあるようだった。

「がうつ!? ぐうつ、おおつ、があああ!!」

「ぐ、このお……」

暴れられると振りほどかれそうになり、全力を込めてあばれザルを締め上げる。

「も、もうもたねえ! ミリア、呪文だ!!」

「がつ、ぐおおおつつつ!!」

ついに振りほどかれ、あばれザルがミリアへと突進する。

「ギラー!」

だが、ミリアはすでに右手を突き出し閃熱をうちはなっていた。

「ぐぎゃあおおおつ!!!」

「バギー!」

胸を焼かれて苦しんでいるところに、すかさず影夫が真横へと回りこみ、真空の刃をゼロ距離からお見舞いする。

突然浴びせられた突風により、あばれザルは転がるように吹き飛ばされていった。

「ビャドー!」

さらにその隙についてミリアが吹雪とともに飛び出す氷の弾丸を撃ちこむ。

「うごっつ、うがあああつっ!!」

「ちっつ、頑丈だな!」

初級呪文数発ではやはりしとめ切れなかった。

「ホイミ……大丈夫か?」

「う、うん……」

あばれザルが痛みにとたうっている間に影夫はミリアの側に戻り、彼女にホイミを掛ける。

全快にはならない。苦痛を和らげ全身に負った傷をマシにはできなかったが、左腕を動かすのは辛いだろう。

「どうしよう!? わたしもう魔法力空だよ? 左手もつかえない!」  
「くそっ、いちかばちかだ」

影夫はしゆるしゆるとミリアの首から肩に掛けてまとわりつき、自らの体を暗黒闘気の触手へと変化させた。

そしてミリアの腕の上に向けて伸ばす。さながら3本目と4本目の腕だ。

「ぐおおおおおっ!!!」

「防御はまかせろッ、ミリアは攻撃!」

「わかった!」

「喉を狙えよ!!」

怒りの咆哮を上げながら右の拳を振り下ろしてくるあばれザル。

しかし、その拳は影夫が伸ばした右の影触手で受け止められる。

「うけとめ、ってえっ!」

「きゃっ!」

影夫が受け止めた攻撃の重さは、当然ミリアの身体にかかる。

そのせいで、飛びかかろうとしていたミリアは体勢を崩し倒れかけてしまう。

影夫はとっさに左の触手で地面を突いてバランスを取るが、あばれザルは左の拳を放ってきていた。

「くそっ!」

ジャブに近い形で素早い攻撃だったがどうにか影夫は触手で受けとめる。

「あうっ!」

だがまたしてもミリアの体は重さを受け止めきれずに今度は後ろに飛ばされてしまう。

10歳になったばかりの少女の身体は軽い。足を踏ん張っても限界がある。

「やべっ、力の逃がし方なんて考えてなかった！」

「ぐっ、まずい！」

「がうつ！ ごあぁっ!!」

焦る影夫だが、手負いとなり凶暴性を増したあばれザルは待つてくれない。

吹き飛ぶミリアに追いつくと、振り下ろすように左右の拳を連打してきた。

「くそが！ 爆撃かよ！」

「あぐっ!? お、お兄ちゃ、ん……」

拳がぶちあたる度にドゴツゴカツと爆発でも起こっているかのような凄惨な音が鳴り、ミリアの足元が地面に埋まっていくような錯覚を覚える。

「まずい、防御で手一杯だっ！」

打撃は全て影夫が触手で受け止めているとはいえ、その衝撃はすべてミリアに掛かってしまっている。

逃げようにも、振り下ろし気味に連続攻撃を放たれているので、ミリアは体がつぶれないようにこらえるので精一杯。その場に釘付けの状態だ。

「も、もうダメ！ お兄ちゃん、暗黒闘気!!」

「すまんつかってくれ！」

もはやそれ以外に窮地は脱せない。

「ぐ……くう」

ミリアは許可を受けるなり、右手に暗黒闘気を作り出した。

それとともに、表情は歪み目元がギラついて殺気を放ちだす。

「死ねええええ!!」

右手の平から放った暗黒闘気の塊は、あばれザルにぶちあたると、その巨体を吹き飛ばした。

すかさずミリアは追いつがって、毒蛾のナイフを抜き放つと刀身に暗黒闘気を伝わらせる。

「殺す！」

仰向けに倒れ、無防備な奴の喉元にミリアは刃を突き刺した。

だが、力が足りずに、急所をえぐっても貫くまでにはいたらない。  
「ぎやううううう!!!っ」

「ぐっ、あばれんなボケザル! ミリア、もう少し耐えてくれえ!」  
「ふーふーッ!! ぐ、のおおっ!!」

あばれザルは必死にミリアを突き飛ばそうとしたが、影夫が影触手でどうにか受け止めた。

ミリアも体が押しつけられないように、足をあばれザルの体に組みつけて、必死に踏ん張り、渾身の力で刃を押し込む。

「このっ! このっ! 死ねえ!!」  
「ぐびゅふっ!」

死に切れず抵抗をする敵に苛立ちを爆発させるように、刃を引き抜いて、突き込む。

それを無茶苦茶に繰り返した。

「ぐひゅ……ひゅ……ぐぷっ」

さすがに急所をぐちやぐちやにされては頑丈なあばれザルとはいえひとたまりもない。

ぶくぶくと血を吹きながら痙攣して動かなくなった。

「死ね死ね死ね死ね!!」

ミリアは相手が死んだことに気付いていないのか、さらに無茶苦茶にナイフを振り回しては切りつけている。

「落ち着けミリア! 暗黒闘気をしまえ!!」

「はあ、はあっ。このこのっコノオオッ!!!」

「ミリアあッ!!」

「っ!」

名前を大声で呼んでようやく正気に戻ったのか、ミリアはぺたんと力が抜けたように屍骸の上にへたり込んだ。

「はあはあ……はあ」

「……ホイミ」

全身傷だらけになってしまっているミリアにホイミをかける。

「ホイミ」

触手の先から光を放ち、全身の傷を癒していった。

息を荒げながら、ミリアが震える手で抱きついてくる。

「お、おお、お兄ちゃああん……あ、あぶなかったあ」

「ああ、もう少しで、死ぬところだった……」

ミリアが行動不能にされてしまえば人間並みの腕力しかない非力な影夫にはどうすることも出来ない。

多少は攻撃に耐えられるだろうが、一撃ごとに暗黒闘気は雲散して最後は消え去ってしまったていただろう。

「し、しぬかとおもったあ、こわかったよお」

「ほ、ほんとだな。俺もすげえビビったよ」

ミリアは今更恐怖が襲ってきたのか全身をふるふると震わせている。

かく言う影夫もふるふると震えていた。

「動けるかミリア？」

「う、うん……なんとか」

「急いで街へ戻ろう。もう一匹あらわれたらやばいぞ。回復呪文ももう打ち止めだ。疲れてると思うけど頼むよ」

「うん……」

生まれたての小鹿みたいに立ち上がり、どうにか山道を引き返していくのだった。

## キャラクターステータス1 旅立ち編『初陣』時点

☆旅立ち編『初陣』時点のステータス☆

【ミアア】

職業：魔道戦士

種族：人間

性別：おんな

レベル：5

・そうび

どくがのナイフ・右（こうげき+24）

どくがのナイフ・左（こうげき+12）

形見の髪飾り（うんのよさ+10）

形見のドレス（しゅび+10）

影夫のペンダント（+0）

・つよさ

ちから：18

すばやさ：26

たいりよく：18

かしこさ：10

うんのよさ：30

さいだいHP：36

さいだいMP：15

こうげき力：右・42 左・30

しゅび力：23

※攻撃に専念すると右手で42、左手で30のこうげきりよくで2  
刀流攻撃。

・特技、呪文、特殊能力

メラ

メラミ（契約のみ）

ギラ

ベギラマ（契約のみ）

イオ（契約のみ）

イオラ（契約のみ）

ヒヤド

ヒヤダルコ（契約のみ）

マホトラ（契約のみ）

ラリホー（契約のみ）

マホトーン（契約のみ）

暗黒闘気弾・弱

暗黒闘気剣・弱

暗黒戦士達の残留思念（暗黒闘気の使用が可能になる。また、感情の昂ぶりとともに武器の取り扱いや武人の体捌きや戦術を無意識に行使できるようにもなる。一種の呪いであり、放置すれば殺戮を好む戦闘狂に変貌していく）

※暗黒闘気によるダメージは回復を受け付けない。

〔クロス・カゲオ〕

職業：暗黒騎士

種族：暗黒闘気生命体

性別：おとこ

レベル：??

・そうび

暗黒闘気の刃（さいだいHPの半分の値をこうげきに＋）

暗黒闘気の防御手（さいだいHPの半分の値をしゅびに＋）

※さいだいHPが暗黒闘気の総量を示し、暗黒闘気の量が多いほど、強度が上がる。

・つよさ

ちから：10

すばやさ：8

たいりよく：15

かしこさ：???（知識基準がDQ世界と異なる）

うんのよさ：255

さいだいHP：30



さいだいMP：15

こうげき力：25（回復不能&物理防御半分無効）

しゅび力：19（物理、呪文、氷炎耐性50%）

・特技、呪文、特殊能力

ホイミ

ベホイミ（契約のみ）

キアリー

キアリク（契約のみ）

ザメハ

バギ

バギマ（契約のみ）

マホトラ（契約のみ）

インパス

トラマナ（契約のみ）

マヌーサ（契約のみ）

ニフラム（契約のみ）

### 【連携形態】

ミリアが主となり、影夫が肩から暗黒闘気の手だけを出している状態。

ふたりがひとりとして動くので1ターン2回行動に相当。基本的にミリアが攻撃して影夫は防御や回復を担当。

・そうび

ミリアに準ずる。

・つよさ

本体部分はミリアのつよさ。

暗黒闘気の手の部分のみ影夫のつよさ。

・特技、呪文、特殊能力

各個人に準ずる。

### 【融合形態】

ミリアが影夫を体内に取り込んだ状態。

1ターン2回行動。

・そうび

ミリアに準ずる。

・つよさ

影夫との融合によりミリアのステータス値に影夫分が加算される。

他者の命令は受け付けない。

暗黒闘気との親和性が爆発的に上昇し、影夫の暗黒闘気を自在に操れる。

初回融合時には、魂に暗黒戦士達の残留思念が転写され、暗黒闘気の扱いと武人として戦い方を無意識下にインプットされる。

融合時には、暗黒戦士達の残留思念を活用し尽くすことが可能で、殺戮を繰り返し続けた歴戦の暗黒戦士達の技能と戦闘術を行使できる。

・特技、呪文（使用可能のみ）  
各個人に準ずる。

## 休養

「まったく、あの糞冒険者め！ 何がいつかくうさぎやおおありくくらしいか出ないだ！ とんでもねえのがいただろうが!!」

影夫はミリアとともに街への帰途につきながら、心底怒っていた。適当な情報のせいで死に掛けたのだから、その怒りは強く根深い。ガラの悪そうな自称冒険者の言う事だったので、話半分だと思って聞いていたが、それにしても無茶苦茶だ。

予想外に強いのが出てくるとしてもキヤタピラーとかその程度だと影夫は思ってたのだ。

(まあどうけつ熊とかじゃなくてよかった、のか?)

「すつごく、つよかったよね……はあ……あんなに苦戦しちゃうなんて、私って弱いんだ……」

ミリアはがつくりと肩を落としているがとんでもない。

敵が悪すぎただけだ。それで勝てたということのほうがすごい。暗黒闘気の方があつたはいえすさまじいことだ。

「ミリアは充分すごいよ。アイツはもつと強くなってから戦うのが普通なんだよ。なんで初陣があんな化けモンなんだよ」

「そうなの?」

「そうだよ！ まったく最初はスライムとかおおがらすだろうが！ おおなめくじでもいいけどさ!」

「なんだあばれザルって！ ここはアツサラーム周辺かっての！ 口マリア直後の悪夢再びってか。ハハッ!!」

「いやそれ以上だよな！ アリアハンからあばれザルがでるようなもんだ!! なんだその糞ゲー!!」

「??」

恐怖の反動で、テンションが上がりすぎてミリアには通じないことを喚きだす影夫。

「はあ~~~~~ホンつとやばかった、心臓があつたら怖すぎて止まってるぞ」

「うん、私もすごい怖くてどうしていいかわからなかったよ……」

「いやあミリアはそれでもちゃんと戦えてたから凄いよ。俺なんかもう必死なばかりで、なんかもう全然ダメ」

「ううん、お兄ちゃんの指示のおかげだよ」

ホントなさけないなあ。と影夫はしょんぼりする。

ミリアは少女とは思えないほど奮戦して必死に戦っていたのに、自分分は防御は任せろ！　と言ったくせにミリアの足を引つ張ってしまった。

最後に結局使わないでおこうと思った暗黒闘気を使わせてしまったし。

(しかし、暗黒闘気については、使わせないようにするより扱いを制御できるように練習するべきかもしれない……)

この世界は弱者に厳しい。今は平和な世だが、のちのち大魔王軍の侵攻もある。ミリアとともに力をつけて方が一の時にもどうにかできるようになっておかないといけない。

影夫の前世の世界と違い、力がモノをいう世界だ。手遅れになってから力不足を嘆いても遅いのだ。

「くそー！　頑張るぞー！」

「わたしもがんばる!!」

「よし！　そうと決まったら飯を食おう!!　しこたま食うんだ！　明日からのために!!」

「うん！　安心しちゃったらなんかおなかすごいペコペコだよ!!」

意識すると我慢しがたいほどにお腹がすいている。

影夫はミリアの体を補助してまで、街へと急いで戻るのだった。

☆☆☆☆☆☆

「んがもぐぐがんぐつー！」

「ぐしやもぐぺろりつ、ぐぐぐぐぐぐつ」

なじみの店のいつもの個室。

そこには魔人がふたりいた。

食欲という名の。

ふたりは会話もせず一心不乱に肉を貪りパンをかじっては呑み込む。

食事のバランスも考えて野菜もバリバリと食べていく……  
そして1時間後。

「がははは!! 食いも食ったな御代はなんと129ゴールドだ!」

「お、おいし、かった……」

「そうだろうそうだろう! ほれ、これでいい」

指を一本立ててニカッと笑うマスター。

この人はミリアが相当気に入っているのかくるたびに割引してくる。

まあ毎日通っているし、毎回こんなに食べるわけではないとはいえ、50ゴールド分は最低でも食べるから上客であるとは思う。

ありがたく好意は頂戴し、ミリアは100ゴールド金貨で支払いを済まして店を出た。

「またこいよ!」

「う、うん」

ミリアはぎこちなくもオヤジさんと話せるようになってきていて、影夫はとても嬉しい。

この調子で少しずつ誰に対しても慣れていってもらえれば……。  
すぐには難しいだろうけど……

「食った食った」

「たべたねえ〜お兄ちゃんの体も重くなってるもん」

「あ、やっぱわかるか? でも時間が経つと消えてるみたいなんだからどここいつてるんだろうなあ、暗黒闘気になってんのかなあ?」

「さあ。よくわかんない〜」

「ま、出さなくていいのはいいな。屁もでないし下痢にもならない」

「もう、お兄ちゃん下品だよ」

しかしと影夫は思う。

謎生物である自分とはかくミリアはどうなっているのだろうか。  
大食いの大人5人分くらいは食っているはずだ。どこにそんなに入っているのか。そして太らないのか。運動もいっぱいしてるし成

長期だからいいのかもしれないが。

「よしあとは宿にもどって」

「もどって?」

「寝る!!」

電灯はないし、安宿にあるような照明は暗いので基本的に夜になると薄暗い部屋で駄弁るか、寝るしかない。

夜更かしすることが難しいので健康的ともいえるが、元現代人としては微妙に退屈でもある。

とはいえ、今日にくたくただし、極度の緊張から解放された後なので、そんなことも関係なく深く眠れそうだ。

「そうふぁね、わたふいもねむひ……」

「わ、まだ寝るなよ」

「んー……すう……むにゃ……」

影夫はミリアの体を動かして、宿に帰り着くと洗顔と歯磨きを済ませ、ベッドに倒れこむなり、ミリアと一緒に寝入るのだった。

## 成長

それから2ヶ月半ものあいだ、ふたりは早朝に街の外へ出かけ、体がクタクタになるまでモンスターとの戦闘をして、飯屋でたらふく食って爆睡するという生活を繰り返していた。

日々、戦いを繰り返す中で、ミリアと影夫は、力の使いかた、効率のいい闘い方を覚え、身体は鍛えられていった。

そして、新しい技や戦いのスタイルも考え、色々と試して物にしていった。

その甲斐あって今では――

「上からきたぞ、あばれザルだ!」

「りようかい!」

木の上から飛び掛ってくるあばれザル。

自重を利用したその一撃は華奢なミリアを踏み潰すと思われたが寸前で吹き飛んだ。

「暗黒魔弾!」

暗黒闘気の塊がぶち当たったのだ。

1週間前にくらべて威力もあがり、溜めの時間も少ない。影夫と相談して開発した新技であった。

「ぎゃはっ、死ねえ!」

ミリアは逆手にナイフを握り、暗黒闘気を流し込み黒く光る刀身を心臓を目掛けて突きこんだ。

「ぎゃおおおっっ」

黒い塊に覆われた禍々しい刃はえぐるようにあばれザルの肉を切り裂き、断末魔の雄たけびとともに絶命させた。

「ふう」

「いやあ楽勝だなー。暗黒闘気があれば負けることはない、と」

「じゃあ次だ正面からくるぞ! 今度は呪文でいくか」

「うん!!」

雄たけびに刺激されたのか坂の上から猛烈な勢いで新たなあばれザルが突進してくる。

だが。

「ヒヤドー！」

「バギー！」

「ぎやぎやうっ！」

距離さえ離れていれば何の問題もない。

「ギラー！」

「バギー！」

影夫と交互にはなつ呪文は、あばれザルを仰け反らせてひるませ、苦痛に足を止めさせて、一方的な展開を生んだ。

「とどめにメラー！」

虫の息のあばれザルが燃え尽きて絶命する。

これまた結果は楽勝。

「もう一匹きたよ！」

「今度は接近戦だ！ 暗黒闘気は使わない！ 攻防分離で防御は任せろ、攻撃は任せた！」

「わかったー！」

「ぎやぎやううっ！」

道の脇の茂みから飛び出してきた新手のあばれザル。

その突進を影夫は触手で受け止めた。ただし今回は、力を受け流すことが出来た。正面から受けずに斜めに逸らすように角度をつけたのだ。ミリアへの負担も軽く、力をそらされて弾かれるようにあばれザルは転がった。

「今だー！」

「はあっ！ どりゃあー！」

ミリアが左右に持った毒蛾のナイフで交互に切りつける。

「ぎやう、ぐおんっ！」

暴れザルも拳を返すが、転がった状態では力は発揮できない。しかも攻撃は影夫が斜めに受け流しているので一つもあたらなかった。

今回は影夫がミリアの足首に巻きついて強化しているので踏ん張



りも効く。体勢はブレない。

「しっ、はっ、やっ、このっ」

あばれザルの皮膚は強靱だ。刃渡りが短く、切れ味もそれなりではない毒蛾のナイフでは急所に当てない限り致命傷は無理だ。

しかも今は2刀流なので余計に攻撃は浅い。

「がっ!？」

だがそれでいい。通算5度目の斬撃で、あばれザルは全身に麻痺毒がまわって動けなくなった。

「このっ!」

ミリアは、力が抜けて無防備になったその喉を横薙ぎに切り裂き、絶命させる。

「ナイス!」

「っと。後ろからさらにもう一匹! 今度は俺がやるよ。身体の主導権を渡してくれ」

「うん。ちよつとつかれたからおまかせするね」

ミリアはナイフをシースに戻して、息を切らせながらひらひらと手を横に振った。

それと同時に影夫は、ずらずと自らの半身をミリアの体内へと埋め込み、肉体の主導権を貰う。

影夫は、パツパと両手を閉じては開き、操作と身体感覚を確認しつつ、軽くストレッチをしてあばれザルに向き直る。

「ぎゃおおおん!!」

「エビルソーサー!」

ミリアの左手に黒く小さな盾が出現し、突進の勢いをそのままに振りぬかれた右腕の一撃を完全に受け止める。

ズリズリズリ! と土煙をたててミリアの身体は後ずさるが、盾は健在。攻撃は通らない。

全身の暗黒闘気を手のひらに圧縮して作った盾はとても強固なのだ。

「どっせーい!」

あばれザルが思わずひるんだ次の瞬間その盾を投げつける。

「ぐぎやおおおおんん」

命中するなり、盾は破裂して爆発を起こす。

あばれザルは、その衝撃で吹き飛ばされて地面に転がりもだえ苦しんだ。

「せえつ、のお……パラサイトブレード！」

すかさずミリアの肩から出ている上半身部分を影触手にして瞬時に曲刀を形成する。そして勢いよく振り下ろして、その首を一撃で切り飛ばした。

「うしつ、これでおわりだな」

「うん。周囲には何もいないみたい」

「ぶはあっー、生き返るなあー」

影夫はごろんと地面に寝そべり、ミリアのサイドポーチから水筒を取り出して喉を潤した。

「うん、疲れたあ」

ミリアもそのよこにちよこんと座って、水筒から水をこくこくと飲み、一息つく。

「そういえば、お兄ちゃんが使ってた技、強いし、何だかカッコいいよね」

「あーあれか。まあパクリだけだなあ」

「パクリってなに？」

「あーなんつーか、他の人が考えたのを勝手に真似した技ってことだよ」

「へえ〜真似っこした技なんだね」

「格好いいのは当然だろうな！好きな作品だし!!」

あの盾も、鋭利な刃も、暗黒闘気の身体を自由に変形、圧縮ができることがわかってから試してみたものだ。

暗黒闘気を圧縮していくと、硬くなるというか、物質化するのだ。そして、その強度は圧縮の度合いに比例して天井知らずに上がっていく。

まあだからこそ闘魔最終掌は神の金属とも言われるオリハルコンを砕けるわけだ。

なので、ぐつと身体をちぢこませて圧縮すると、盾にも刃にもすることが出来る。

ただし今の影夫の暗黒闘気量では、1つ刃の手を作り出すので精一杯だ。

その刃も強度不足であり、オリハルコンに勝てるようなレベルではない。

精々、てつ装備といった程度だろうか。

それでも振り回して速度をつければ中々の威力はあるのだが、強敵相手には通じなさそうだ。

ちなみにミリアの身体から暗黒闘気の手を伸ばすときは、ミリアの肩からよきつと出す形になるので、肩から黒い手が生えているみたいに見える。

なので、あまり人前では出来ない技である。誰もが納得するような上手い口実とか、言い訳が思いつけば問題なくなるのだが、そうそう思い付きもしない。

「おつと忘れてた。ホイミー！」

忘れないうちに戦いで減った暗黒闘気を元に戻しておく。

「あれ？・ミリアも怪我してるじゃないか」

「え？ あ。ほんとだ」

「ホイミー」

ミリアは暗黒闘気を使うと無意識に限界以上の力を発揮してしまいうらしい。

なので戦闘後彼女の身体には微細な損傷が残っている事が多い。

影夫がミリアの身体を操る際も、気をつけているが知らないうちに過度の負担をかけてしまうことがある。

普通なら、かなりまずい事態であるのだが、回復呪文は実に偉大である。

一体どういう原理なのかわからないが、怪我どころか体力までもが回復するのだ。

現代世界の感覚で考えると、まったくもって凄いの一言だ。

怪我だけでなく、殆どの病気ですら直してしまうという万能さだ。

細菌やウイルスをも回復呪文で殺しているというのか。しかも有害なものだけを選んで。

本当に、一体どういうことなのだろうか。

「まだ戦えるな。よし、じゃあ今日のうちに群れを潰しておくか」

「りようかーい」

影夫とミリアはさらに山中へと入っていくのだった。

数時間後。ガーナの街周辺にいたあばれザルの群れは全滅していた。

## 解体

「よーしそれじゃあ、剥ぎ剥ぎタイムといくかー」

「おー」

ゲームやアニメと違い、モンスターを倒してもゴールドや宝石は落ちない。

ゴールドを稼ごうと思えば、死体から魔法素材や皮や肉を剥ぎ取るしかない。

だが、解体作業というのはグロいし、とても重労働だ。

日本では野生動物を狩る機会も解体することも殆どない。それどころか死体すら見ないくらいだ。

見るのは切り分けられてパック詰めにされた肉なのだから。

いっぱいいっぱいだった初戦の日はともかく、以後モンスターを倒すたびに彼はもったいない精神とグロいのは嫌だという気持ちの間で激しく葛藤しつつもモンスターの死体はその場に捨ておいてきた。

ミアは、戦いを終える度に葛藤している影夫の様子を不思議そうに見ていたが、ある時、解体なら私がやるよと言い出した。

影夫は子供にグロいことをさせるのは、と反対したのだがそれは完全に彼のお門違いだった。

ウサギや鳥などを狩って捌くのは普通のことであり、ミアも母から教わりこなせるらしい。

力が必要な猪や熊のような解体は大人がやっているところを見ただけで手伝いはさせてもらえなかつたらしいが。

そういう世界なので当然といえば当然であったが、ミアにとって忌避感も気持ち悪さもない。

むしろ生き物としてはミアのほうが健全であるともいえた。

「ふんふん〜♪」

ミアが鼻歌交じりに、皮を剥ぎ、肉をパーツ別に切り分けていく。

その際、内臓部分も捨てずに取っておく。薬に使ったりするらしいので売れるのだ。

「あはは。ぐちやぐちや。赤くてきれい〜♪」

ミリアは毒蛾のナイフに暗黒闘気を纏わせて切れ味を高めながら解体に勤しんでいるので、いい訓練にもなっていそうだ。

しかし、暗黒闘気を出すと、昂ぶるからなのか言動や微妙に物騒になるのはどうにかならないのだろうか。

「く……この……」

その横で影夫も黙々と作業をしていたが、ミリアほど手先が器用ではないので苦戦している。

彼は暗黒闘気を右手に集め、圧縮硬化させてナイフ状の刃を作って解体を行っていた。

しかし、ミリアと違ってその手元は大変危なっかしい。

何度も切り損ねたり自分の体を切ったりしながら、どうにか作業を進めていた。

前世で手先が微妙に不器用だった性質は転生しても受け継がれるようだ。

「んしよ……これで、おわりつと。お兄ちゃんもそれで最後？」

「ああ。でも……こりやあひでえや」

影夫は自分が解体した皮や肉を見る。

酷い出来だ。皮は傷がついていくつも寸断されていて、肉も繊維に逆らってきつて切り口がズタズタであったり、骨に身が多く残ってしまっていたりした。

こんな状態では売値も低いものになってしまうだろう。

「えつと……ど、どんまい？」

惨めに打ちひしがれているとポンポンと生暖かい表情でミリアが軽く叩いてなぐさめてきてくれる。

「なぐさめてくれてありがとよ、じゃあいつものようにたのむよ」

「うん。ヒヤド、ヒヤド、ヒヤドー！」

ミリアが肉の山を冷凍した上で保存用に氷をいくつも作り出す。溶け始める前に影夫が急いで馬車へと肉を積み込んでいく。

「こっちはやつとくから、ミリアは汚れを落としてきていいよ」

「はーっ」

血まみれで街へ帰る訳にはいかないので、刃物や体や服をきれいに  
する必要がある。

馬車の中にはきれいな水が入った樽も持ってきてあるのでそれで  
きれいに洗うのだ。

「ごめんお兄ちゃん、手が届かないから背中拭いてー!」

「あいよ」

積み込み作業をしていると、ミリアからお呼びがかかり、影夫はミ  
リアの元へと向かうのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ふいーしかし、いつまでも馬車移動つてのはなあ」

積み込みが終わり、肉や毛皮でずっしりと重たくなった馬車を眺め  
て影夫はごちる。

何せ大きいし、ゴムタイヤもスプリングもないので、悪路を通ると  
すぐに調子が悪くなってしまふ。振動も凄いので乗り心地は大変微  
妙である。

ゲームみたいに森や山中をガンガン踏破できるようなものではな  
いのだ。

「といつても、馬車以外にちょうどいい乗り物がないからなあ」

「小回りの効く4輪駆動の軽トラでもあれば最高なのに」

「よんりんくどうのけいとらあ?」

「ああ。俺はあれが好きなんだよ。実家においてる愛車がここにあれ  
ばなあ。あ、でも燃料がないからすぐにガス欠か」

「ふうん。それって、前に言ってたぜんせのおはなしなの?」

「そうだよ」

「ねえまたいつぱい聞かせて! お兄ちゃんのいた世界のこともつと  
知りたいの!」

「ああ、いいよ」

夕暮れがふたりを照らす中、興味津々なミリアに色々な前世の話を  
聞かせながら、帰路につくのだった。

## 凱旋

「お！ こども勇者のおかえりだぞ！」

「今日も討伐か。小さいのにすごいよな」

ガーナの街の見張り達はミリアの馬車を見かけるなり、楽しげに仲間と盛り上がる。

「今日は……つてすごいな馬車がいっぱいになるほどか」

「これだけあれば群れは全滅じゃないか？」

「あ、うん……」

見張りの男はフレンドリーに対応して、目前にやってきた馬車を覗き込む。

「おお！ 聞いたかみんな、群れを全滅させたってさ！」

「みんなに知らせてやれ！ 喜ぶぞ！」

「すごい！ ありがとうミリアちゃん」

「あ……えっ、と……」

「あ、ゴメンゴメン。引き止めちゃったね。通っていいよ。ミリアちゃんなら問題なし！」

見張り達は盛り上がって騒ぎ出したが、困った風になっているミリアに慌てて許可をだして、街の中へと通してくれた。

「お兄ちゃんやりすぎだよ……」

「め、面目ない……」

ガーナの街にミリアと影夫が来てから早3ヶ月が過ぎており、もはや町でミリアのことを知らぬものはいなかった。

影夫が愛想よく可愛く振舞ったというだけではない。

年端もいかない少女が、倒したモンスターを毎日街へ持ち帰っては売りさばくのだ。

目立たないはずがない。

その結果、僧侶と魔法使いの呪文を使いこなし、ナイフ捌きも達人である。という具合に、影夫の能力もまじった形で過大評価されたミ



リアの噂が街中を駆け巡ることになる。

噂が大きくなりすぎて、町長さんがやってきて、街周辺に住み着いたあばれザルの群れを一掃してくれないかと直談判してくるほどだ。

彼は善良な人物であるようで、無理はしないでくれ、とミアの身を案じつつも、報酬もしつかりと約束してくれた。

それも、ミアが子供だからと足元をみた金額ではなく、5000Gもの大金だ。

その上ですがるようにお願いされたので、断りきれずに影夫はそれを請け負ってしまった。

ミアは他人と関わりを持つのは嫌そうだったが、修行になるし、収入にもなるし、みんなも助かるからと、どうにか説き伏せた。

そして訓練がてらの討伐を続けて、今日に至っているというわけだ。

討伐するたびに知名度も評判もうなぎのぼりで、『こども勇者』『未来の勇者』『運生まれの救世主』などと色々な呼び方もされている。

ミアが街に戻ってくるとちよつとした人ばかりが出来るくらいだ。

「こども勇者ミアの凱旋って感じかな」

「も、もう……」

影夫は大好きなミアが評価され賞賛されるのは素直に喜び嬉しがっていたが、彼女は複雑そうにしている。

「でも、色んな人に褒められたり感謝されると嬉しいだろ？」

「嫌じゃないけど……でも私はお兄ちゃんだけでいいよ。他の人達に言われても、困っちゃうもん」

街の人たちは好奇心だけでミアの噂をしているわけではない。実際に困っていたので、それを解決してくれた彼女に感謝しているのだ。

まあ娯楽が少ないので話題にするにはちょうどいいということもあるかもしれないが。

「ミアさん、聞きましたよー」

「あれ？ どうしたんですか町長さん。こんなところで？」

大通りを場所で移動していると何故か町長がミリアを待ち構えていた。

お偉いさんとの話はミリアに任せるわけにもいかないので影夫が対応する。

「討伐の件ですよ！ 群れを全滅させたんですって？」

「はい。住処にしていた洞窟を見つけて根絶やしにしたので、一掃できたはずです。念のため明日にでも搜索隊を向かわせてみてください」

「よくやってくれた！ ありがとうありがとう!!」

町長はミリアの腕を握ってぶんぶんとふって喜んでいる。

なんだなんだと街の住人も集まってきて、討伐の話聞き、街中が大騒ぎになる。

「すごいぞ！ ありがとう！」

「これで狩りにいける！」

「商人もやってくるぞ！」

「こども勇者ミリアばんざい！」

「お嬢！ はなしは聞いたぜ！」

あたりが騒然となる中、居酒屋のマスターが駆け寄ってきてバシバシとミリアの背中を叩いてくる。

傍らには店員もいる。彼は普段だるそうな表情をしているが、今日は笑みを浮かべて嬉しそうな様子だった。

「これでお前さんにやあ頭があがらなくなっちゃったな！ 今日はおごりだ。好きなだけ食っていってくれよ!!」

「しかし、お嬢がそんなツワモノとはなあ！ あばれザルは熟練兵士でも勝てない相手だって話だぞ？」

今日のマスターは普段より5割増しの声のデカさと豪快な笑いっぷりで、一際機嫌がいい。

どうもあばれザルの群れは、町へやってくる商人や、狩りや採集の邪魔になっていたらしく、街中がほとほと困っていたようだ。

もしかして最初にガーナの街で村の物品を売りさばいた時に、妙に

高値で売れたのはそのためだったのかもしれない。

「おい、街を救った勇者さまをいつもの個室に案内しろ！」

めでたいめでたいと喜び騒ぐマスターの好意にあずかり、ふたりは今日もたらふく食べて栄養をつけた。

その日一日、街は討伐祝いでお祭り騒ぎになるのだった――

## 発覚

討伐依頼を終えた翌日。

ミリアが部屋をとっている宿に、町長が訪ねてきた。

「それで町長さん。話というのは何でしょうか？」

影夫はミリアの身体を操りつつ、宿部屋の粗末なベッドにちよこんと腰掛けて、正面にいる町長に問いかける。

部屋にある粗末な木の椅子に座った町長は背筋をピンと伸ばして、真剣な様子で口を開いた。

「今日は大事なお話をしなくてははいけません」

「大事な話、ですか？」

「はい。実はこの前、ミリアさんの故郷であるタネパ村に向かった役人から、村人が殺されているという報告を受けました」

「……！」

影夫は内心、冷や汗をかく。村人が死に絶えていることがついに発覚してしまったのだ。

「村人の遺体は不自然に埋められており、金品財宝が盗られていたところ、ミリアさんはこの前、大量の宝石や装備品やらを売りに来たそうですね？」

だが、影夫は必要以上に取り乱すことはない。

こんなこともあろうかと影夫は、嘘話を考えており、対策ができているからだ。

『村は食い詰めた野盗団に襲われて全滅。かろうじて自分ひとりだけが貴重品を持たされて村から逃がされた』というものだ。不自然に埋められた死体については、野盗団の隠蔽工作によるものという、設定だ。

「それは……」

その設定を当事者視点で証言という形で話していこう。

くれぐれもミリア視点で気づけないようなことは話さないように注意しながら……。

そう思い、ミリアの口を開いた影夫であったが、町長はそれを遮つ

て、決定的な言葉を発してしまった。

「ミリアさん。その役人が言っておりましたよ。この事件はミリアさんのご家族が魔物と結託して、村人を殺させたのではないか、とね」  
「っ!!! コイツ!!!」

(おい、止めるミリア。落ち着け!)

町長の台詞にミリアが激情を露にして殺意を滾らせた。

影夫が少しでも気を緩めれば主導権を奪い返され、すぐにでも町長を殺してしまいそうなほどだった。

「……………っ!」

殺してやると心の中で喚いているミリアを抑えつつ、影夫は焦りに焦った。

この場で町長を殺すのは絶対にまずい。犯人が一目瞭然なうえに、街にいられなくなるのは当然として、国から手配される事態になるだろう。

ミリアが暴発しないうちに、この場から逃げ出すべきかもしれないと影夫は窓の様子を窺う。

この宿部屋は2階ではあるが、身体能力的に飛び降りても問題はなさそうだし、いよいよよとなれば。と影夫は覚悟を決めた。

「しかしです。私はそうは思っていません。その役人は元村長と結託して税金をごまかしていた、その疑いがあります」

「それに、心優しく強くあられるミリアさんを見る限り、貴方も、貴方を育まれたご家族も、そのようなことはなさらないはずです」

(ミリアとりあえず落ち着けよ。この人は分かってくれてるみたいだからな?)

(う、うん…………)

影夫は町長の言葉に、心底安堵する。

家族を侮辱されたと激昂していたミリアも少し、落ち着いたようだ。

「ミリアさん、事情をご存知でしたら、どうかお聞かせ願えませんか?」

(いいか? ミリア?)

(いいよ。本当のことは伝えておきたいから……)

「わかりました……」

影夫の存在はややこしくなるので話さないが、家族を殺され、追い詰められたことで秘められた力が覚醒したということにして、後はありのままを話した。

「申し訳ありませんでした」

ミリアから語られた話を聞き終えた町長は深々と頭を下げた。

「元村長の不正の兆候については掴んでいたのです。でも証拠が掴めなかった」

「証拠もなしに捕まえるわけにはいきません。動くに動けなかったのですが、そんなことは言い訳にもなりません」

「私の無能の所為で貴方の家族を失わせてしまいました。いまさら謝っても遅いでしょうが……本当にすみませんでした」

「村のことはミリアさんの事を隠しつつ、うまく後処理しておきましょう。それと、元村長と結託していた役人の処罰も厳正に行うことをお約束いたします」

「そうですか……これ、つかってください」

影夫は、念のために村から持ち出していた村長の不正記録を町長に渡す。

もし、村人殺害が発覚した場合、反論に使うと影夫がどうぐぶくろにいれてミリアに持ち歩かせていたものだ。

「これは……ありがたい。決定的な証拠になります。ふむ、しかし……ここまでとは。これほど明確で長期にわたる不正をはたらいたのです。役人はおそらく処刑でしょうね」

パラパラと記録を流し見して、ため息をつく町長。

「ミリアさんについてはこの街の住人として身分登録しておきます。もちろん身分証明も発行しましょう」

「後は、私名義の紹介状を数枚渡しておきますからご自由に使ってください。このくらいの償いしか出来なくて申し訳ありませんが……」  
「いえ、十分です。ありがとうございます。それである、村の財産についてなのですが、その、返金などはどうしましょうか」

「さて？ ミリアさんがあの村の財産を換金したのは、元村長から命じられて嫌々行ったことでしょうか？」 元村長は家を増築しようとしていて資金が必要だったのですから」

「しかし、不幸にも金のことを嗅ぎつけた野盗の群れに村は襲われて全滅。ミリアさんだけが村に残った金品を託されてら逃がされた。そういうことだったのでは？」

「あ、ありがとうございます。でもいいんですか？ 不正なお金なら国に返さない」と

「何のお礼だか分かりませんが受け取っておきます。ちなみにね、この街で元村長さんはならずものを雇ってあこぎな商売もしていたようでして。国に還すお金は充分にあるんですよ」

「というわけでミリアさん。あなたはこの街の恩人であり、住人なのです。いつまでもここに住んでくれてもいいのです。むしろその方がありがたいですが……」

「いえ、すみませんが来週にでも街を出る予定です。行く場所がありますし、私はもつと強くなる必要がありますので」

「……わかりました。でもいつでも戻ってきてくださいね。この街は貴方の故郷なのですから。それでは」

町長は残念そうにしつつも無理な引き止めはせず、帰っていった。

☆☆☆☆☆☆

それから1週間。

影夫はよくしてくれた町長へのお礼や喜んでくれる皆のためもあって、街のために精力的に働いた。

ミリアも、皆のためとは口では言わないものの、影夫に付き合って精一杯頑張った。

町長が帰った翌日は街周辺の残党捜索に加わり、群れからはぐれて単独行動をしていたあばれザルの生き残りを2匹討伐した。

その後影夫は、昔からあばれザルの生息地として人々に避けられてきた広大な森が、ガーナから馬車で半日ほど進んだところにあると聞

きつけて、ついでだからとその調査を買って出た。

その結果、分かったのは、あまりにもあばれザルが増えすぎていることだった。

様子見のつもりで森に入って数分も経たないうちに十数匹の集団に襲い掛かられたほどだ。

おそらくガーナの街周辺にやってきた群れは、森の中での食料の奪い合いに負けた連中なのだろう。

その報告を町長にした後影夫とミアは、残りの5日間で容赦なくあばれザルを間引いていった。

あまりに数があるので、しとめた獲物を運びきれず、町長から運搬用馬車を数台を借りる事態になったりした。

なお、間引きを行う際は、おだやかな心を取り戻した個体もいるかもしれないので、殺意をもって襲ってきたものだけを討伐した。

そうじゃないと無差別に殺しまくると偽勇者と一緒にしてしまうからだ。

もつともあつちは無抵抗な魔物を専門に狙っていたのだけど。

ともかく、5日間の間引きで250匹ものあばれザルを仕留めることが出来た。

ここまで減らせば、しばらくは大丈夫だろう。

ちなみに間引きのおかげで、街はちよつとした特需状態になっていた。

あばれザルの加工肉が街中で安価かつ大量に売られ、皮は様々に加工されて流通し、内臓や骨、シツポを原料とした薬の類も安価に売られたりした。

よそから訪れた商人がそれらを大量購入していたり、物々交換で近くの農村から作物を買いつけることができたりしたので、ミアは街の住人達からさらに持て囃されることになったのだった。



## 武器

そしてついに、ガーナの街を旅立つときがやってきた。

「またいつでも来いよな！ 好きなだけ肉食わせてやるからな！」

「ガーナの勇者ミリアちゃんばんざい！」

「またきておくれよおー」

「わーわー！」

討伐後の時のように街の人たちは皆、大騒ぎしながら見送ってくれる。

「ミリアさん。これを持って行ってください。街の皆の気持ちです。」

町長が街の皆を代表して、大きなズダ袋をミリアに手渡す。

「この街にある最強の武器です。自由に使ってください。他に良い武器があるなら売ってしまってもかまいません」

「あ、あり、がとう……」

「いえ。こちらこそです。あばれザルに殺された人は多くいたので。だから皆ミリアさんにお礼がしたいのですよ」

「名残惜しいですが、では……」

町長がその場を下がると街の人々は一齐にエールを送ってくれる。

「こども勇者のたびだちだ！」

「がんばれよー！！」

「もっと活躍してくれよな！」

「勇者アバン以上になって、自慢させてくれー！」

「いつでももどってこいよー！」

影夫は声援を背に、ゆっくりと馬車を走らせて街を後にした。

少し進んで街が見えなくなったところで、影夫がミリアの身体から出て、ミリアの隣の御者台に腰掛ける。

すると、ミリアが影夫の身体に抱きついてきながら、寂しそうに口を開いた。

「あの街の人たち……みんないいひとだったね」

「ああ、そうだな」

「あの街の人みたいな人ばかりだったらよかったのに……」

ミリアは悲しそうな、複雑な表情でボソリと言って押し黙った。

「そうだな……」

影夫はミリアの頭をナデながら思う。

この街の住人はすでにミリアを強く信用しており、心から信頼してくれている。

たとえ誰かがミリアに反感を抱いて、貶めたりはめようとしても、町長をはじめとして味方になってくれる人は多いだろう。

旅なんてやめるべきかもしれない。

元々影夫は、ミリアのためにデルムリン島に行こうとしていたわけで、ガーナの街が安住の地になり得るのならもう旅をする意味はないと言えた。

「なあミリア。やっぱり旅はやめてあの街に住もうか？」

「え？」

「あそこで暮らしながら、たまに魔物退治でもやってさ。のんびり暮らしたほうがいいんじゃないか？」

「俺達には絶対に旅しなきゃいけない理由もないんだしさ」

ミリアにとってもこの街は住み心地が良かったのだろう。

頭をうつむかせて、迷うそぶりを見せる。

「ダメだよ」

数瞬後、じつと答えを待つ影夫に、小さいながらも明確にミリアがそう答えた。

「お兄ちゃん言ってたよね、何年後か分からないけど、いつか大魔王軍がくるって」

「そうしたら、世界中の国が攻められちゃって、きっとあの街も危ないよ。その時に弱いままだったら、私もお兄ちゃんも街の人も……みんな死んじゃう」

「そう、だな」

影夫はミリアに求められるまま、前世のことを話していた。

その中で、『ダイの大冒険』という原作のことも話していた。

漫画といっても伝わらないので、前世にはこの世界の事が、お話に

なって伝わっていた、と説明したが。

その時のミリアは、大魔王が攻めてきても別にいい。誰が死のうがお兄ちゃんだけがいればいいからと言っていたのだが、やはりこの街で少し変化があったらしい。

「旅はしようよ。強くなってから街に戻ってくればいいよ」

「それでいいのか？ 本気で大魔王軍と戦うことを考えると、きつと辛くてきつい旅になる」

「でも、地上にいたら逃げられないんでしょ？ 街の人たちとお兄ちゃんが全員安全に逃げ込める場所なんてないんだよね？」

チクリ。と影夫の胸が痛む。現代育ちの影夫には、自分達だけ安全ならばいいというのは罪悪感がある考え方だからだ。

やっぱり、可能な限り理不尽に死ぬ人は少ないほうがいい。

「そうだな、大丈夫そうな場所はあるけどすでに住んでる人たちがいる上に、そこが絶対安全とは言いきれない」

デルムリン島は孤島であるだけに小さいとはいえ街が丸ごと移住するのは不可能だろう。

人間がそんなに押しかけたらモンスター達の住処を奪うことにもなりかねない。

「じゃあいこうよ。他の人たちはどうでもいいけど、あの街の人たちが死んじやうのは、ちよつとだけ嫌だから」

「ああ」

そんな言い草のミリアではあるが、影夫は彼女をとがめようとも論そうともしない。

影夫はただ、死んだ家族と影夫しかいなかったミリアの世界が少し広がったらしいことを嬉しく思うのだった。

「あー！ そういえばあの袋って何が入ってるの？」

「そうだな。中を見てみるか。街で一番の武器って言ったたく、なんだろう」

しんみりとした雰囲気打ち破るように、ミリアが首をかしげて、

町長から手渡された大きくて重たいずた袋を持ち上げながら首をか  
しげた。

「どたまかなづちだったら笑えるよな」

「笑えないよー!」

影夫はミリアに背中を勢いよくバシバシ叩かれる。

「どうやら、どたまかなづちで戦う自分を想像してしまったみたい  
だ。」

「つてこのあたりでもどたまかなづち売ってるのか?」

「え? うん。去年かな? 行商人さんが売りに来て実演してたよ」

「すつごくかっこ悪かった! 攻防一体の完璧な武具なんだって言っ  
ただけど誰も買わなかったなあ」

「まあそりゃあそうだろうなあ。つていうか頭を振って戦うつてこ  
と自体は別にいいとしても、かなづち部分を重くすると首や肩が尋常  
じゃなく凝るよな。」

「しかも激しく振り回すとめまいや頭痛も凄そうだ。頭の血管や脳  
細胞が死にまくるんじゃないか?」

「よっぽど売れ残りの処分に困ってるんだらうなあ」

「なにせ復興中で物入りなパプニカでもダブついているみたいだっ  
たし。」

「いや、わざわざ売りにくるほうがコストが掛かるか? 趣味で作っ

て採算度外視で売ったりしてるのかもな」

「よし、今度1つ買ってミリアに」

「もうっ! いいからはやく中見ようよ!」

「はいはい」

「からかおうと思ったら怒られてしまった。」

影夫はゴメンゴメンとあやまりつつ袋から慎重に取り出す。

「なにこれ? おつきいね」

「これは……まさかこれは」

「お……」

影夫は驚愕していた。

なんでよりにもよってコレなんだよ、と。

「おおばさまだと!？」

攻撃力は高めでも値段が高いので購入することはまずないであろう武器。

見た目のインパクトがすごく、悪そうで強そうなのがまたネタ装備っぽさをかもしだしている。

大体これミリアのサイズに合うのだろうか? いや、そもそもこれミリアに装備……できるのか?

「これどうやってつかうの?」

「えっと、まずは腕にはめるんだ。それでその取っ手を持ってぐっと引けば」

すると、シャキン! という軽快な金属音とともに刃先が閉じる。

「わ! すごい! コレ面白い!!」

ミリアはすぐくにこやかに、腕につけた巨大バサミをシャキンシャキンと何度も開閉させた。

きやつきやとはしゃいでやっているのを見てるとおもちゃであるかのように思える。

「サイズもぴったりだね!」

ミリアでも扱えるように腕をはめる位置や取っ手の位置は変えてあるし、肩の部分まですっぽりと嵌められるようになっており、子供の身体でも刃の重さを無理なく支えられるようになっていて、刃は大きいままであり、ミリアの身長の手頃な長さがある。

武器の命である刃は小さくできないというこだわりなのだろうか?

?

「……子供用おおさまみってなんだよ」

正直これはどうなのだろうか。

(子供におおばさま……可愛いおんなのこと巨大な刃物……ドレス姿とおおばさま……)

影夫の頭に素敵な想像図が思い浮かぶ。

これで戦っていると凄い光景になりそうだ。

これに装備を変えたら、ミリアは暗殺者風ロリ少女から、処刑人風ロリ少女になってしまうのか。

ミリアがどんだん厨二病小説のヒロインみたくなっていったまっまっている。

「お、重くないか？ 使えるか？ 使えないなら使わないでもいいんだぞ？」

「んーちよつと重いかな。長い間戦うと疲れるかも。あとは慣れるまで敵に当てるのが難しそうかな？ でも、慣れれば大丈夫そうだよ」

「う、うーん」

正直これは悩む。街の人の善意だしこれを使いたいが……

「じゃあとりあえずしばらく使ってみるか。だめなら毒蛾のナイフに戻そう」

## 試斬

「ウウ……オオ……!」

「夜になった途端、お出ましか」

馬車を囲んでいるのは、バリイドドック達。

昼には出歩かない夜行性のモンスターで、ゾンビ犬のようなヤツラだ。

「さっそくこれのばんだね!」

「あ、おい!」

ミリアがおおばさみを構えて馬車から躍り出る。

「ウウ……アアア……!」

生者であるミリアの姿を、腐った眼と鼻で間近に感じ取ったバリイドドック達は、唸るように呻いて一斉にミリアに飛び掛かる。

「こつちだよワンちゃん」

ゾンビ化した犬であるためかその動きは比較的緩慢であり、ミリアはサイドステップで軽々と噛み付きをかわす。

それと同時に、一番近くにいる敵の横つ面におおばさみを突き出し思い切り取っ手を引いた。

「そおれえ!」

おおさばみは安々と腐肉を切り裂き、頭蓋骨をも砕いてバリイドドッグの顔をぐちゃりと潰してしまった。

「くさあゝい! でもきもちいいゝ!」

「ほうら、こつちこつち!」

ミリアは恍惚としつつ、再び飛び掛ってきた犬達を避けて今度は首をはさみこむ。

「ちよつきんこ!」

「あはっ。今度は綺麗に切れた。うーん、なかなかコツがいるね」

今度は骨をも断ち切り、ズバンと切り落とした。力や挟み方にコツがあるようだ。

「どんどん練習しよつと」

戦いの気配を感じ取り、邪悪なモンスター達が近寄ってきていた。今度はバリイドドックだけではない。遠目にだが、バンパイアらしき影が見える。

「つたく、万一もあるから一人で飛び出るなよ」

ぶつくさと文句を言いながら影夫がミアアの身体に半身を埋め込み、肩から黒い手を伸ばすいつものスタイルをとる。

おおばさみが右肩に装着されているので微妙に手が出しづらかったが、暗黒闘気のボディーは自由に変形できるので問題はなかった。

「次は闘気を使っちゃおうつと。いいよね？」

「ああ。闘気の扱いには慣れていけないからな。使用制限とかはもう気にしなくていいよ」

「やったあー！」

「あ、でも使いすぎてると時は注意するからな。言うことは聞くように」

「はーい！ じゃあさっそくー！」

「んぐぐつ……いー！」

ミアアが表情を歪めて力をこめると全身からドス黒い暗黒闘気のオーラが噴出する。

「きやはっー！」

ニタリと狂笑を浮かべたミアアがそれを右腕に集めて、おおばさみに纏わせていく。

「ギャキヤーー！」

ミアアが動かないので隙ありと見たのか、バンパイアが右腕を振り上げヒヤドを放とうとする。

「やらせるかー！」

だが、影夫が暗黒闘気の腕を伸ばして腕の先に形成した刃でその右腕を斬り落とした。

「ギィ!?」

「死んじゃえー！」

跳躍してバンパイアの懐に飛び込んだミアアが右腕を突き出してその巨大なはさみで胴体をはさみ込み、一気に切断した。

「ガギャッー！」



暗黒闘気を纏わせたおおざさみの刃の切れ味は鋭く、さつくりとバンパイアの胴体を両断する。

鳩尾の下から真つ二つにされたバンパイアは2つにわかれて地面に倒れ込み自らの血溜まりに沈んだ。

「相手がこどもだとおもって、舐めるのはダメだな」

バンパイアはミリアを見て、無力な子供だと判断したらしい。

折角空を飛べるのだから、高空からヒヤドを撃ち下ろせば反撃は難しかっただろうに、それをせずにバカ正直に正面から飛び掛って襲ってきやがったのだ。

凶暴化の所為で理性が働いていないか知らないかお粗末な判断だ。

(しかし、俺も人型にちかい魔物の惨殺死体を見ても作ってもなんと  
も思わなくなってきたな。俺の感性がやばいかも)

(まあ今回は、襲ってきたんだからしようがないし、理性と知性がなくて  
会話が通じない相手なら別に問題はないか)

影夫は、知的生命体はむやみに殺すべきではないと知っている人間だ。

知的生命かどうかは理性と知性があるかどうかで判断すべきと思  
っているので今回の場合は良心が痛まないのもセーフと言えた。

「迷わず成仏してくれ」

「くふ。いいつ、これいいよおにいちゃん！」

「そうだな。次右から来てるから気をつけろよ」

ミリアがはしゃいでいると、接近してきたバリイドドックが腐った  
汁を垂らしながら、襲いかかってきていた。

「うつとおしいなあ！」

影夫の注意でミリアが咄嗟に身体を捻ったために、バリイドドック  
の噛みつきはミリアを捕らえることができず、空を噛んだ。

「死ねえ！」

肉をかみ締めることが出来なかった彼の頭は、次の瞬間には暗黒闘  
気を纏った刃によって真つ二つにされていた。

断ち切る、というよりは、紙でも切っているかのような綺麗な断面  
だ。

「すごいねっ、さつきは潰れたのに！ さくつてきれちゃった！」  
「ああ。やっぱり暗黒闘気を集中して纏わせると威力があがるな。たぶん闘気剣状態になっているんだろう」

原作でノヴァが使っていた闘気剣の暗黒闘気版といったところだろうか。

今までの戦いでも刃に暗黒闘気を伝わらせていたが、そのときは暗黒闘気の集中度と密度が違うのだ。

ただ単に、武器に暗黒闘気をどばつと注ぎ込んだ状態だとそれなりの威力しか上昇しない。刃が補強されて多少鋭さを増す程度だ。

だが、全身で高めた暗黒闘気を集中させて武器に伝わらせると、圧縮されて物質化した暗黒闘気が刃を覆う状態となる。

こうなると、暗黒闘気そのものを叩きつけているようなものとなり、暗黒闘気の特性もよく活かすことが出来るのだ。

今回ミリアは半分程度の暗黒闘気を使っている。

全力で暗黒闘気を迸らせながら刃に集めれば、さらに威力はあがりそうだ。

今のミリアの力量や身体能力からすると、ノヴァが使うノーザン・グランブレードには劣るだろうが、劣化版くらいにはなるかもしれない。

「こくんなに凄いだから、技の名前考えなくっちゃ。なにがいいかなお兄ちゃん？」

「ミリアが決めたらいいよ。うんと格好いい名前を考えないとな？」

「うん！」

元氣よく返事をするミリアだったが、まだ戦いの途中だ。

厄介なことに、戦いで流れる血や汗や、声といったものが周囲のモンスターを呼び寄せてしまうらしい。

「ヴァー……」

「アアー……」

「オオ……」

呻き声をあげながら、現れたのはくさった死体の群れだった。

「とりあえず今は敵に集中だ」

「もう。早く考えたいのに！」

「さっさとみなごろしにして終わらせちやおっと！」

早く終わらせようと張り切るミリアだったのだが……押し寄せる  
モンスター群は絶えなかった。

結局、その夜ふたりは朝日が昇るまで、戦い続けるハメになった。

## 敵意

ドン！ と古びた木の板が殴りつけられる音が辺りに響き、積もった埃が宙に舞った。

小さな村の草臥れた宿屋のカウンターを、影夫がミアアの手で激しく打ちつけたのだ。

ミアアの拳を痛めるかもしれないことを失念するほどに、影夫は怒っていた。

「馬鹿なことを言わないでください！ そこには一泊10Gと書いてあります!!」

「これは知り合い用の値札だ。あんたよそ者だろ？ よそ者は100Gなんだよ」

徹夜でモンスターとの戦いをした翌日。

睡眠不足と疲労からか、熱を出したミアアを休ませるため、街道沿いにあつた小さな村に影夫とミアアはやってきていた。

だが、この村は様子がおかしく、村人がみな一様に探るような視線でミアアをじろじろと眺めては敵意を隠さない態度をとるのだ。

（そんなに人をいれたくないんだったら、塀でも作って鎖国しとけよ）  
「もういいつ、ほかをあたります！」

「勝手にしな」

しっしつと手で追い払われながら、ミアアの身体を借りた影夫はぼったくりボロ宿を飛び出した。

（お兄ちゃん……ここ、やだよ……）

ミアアも村の異様で不穏な雰囲気にあてられたのか、そわそわとして不安げな様子声を上げて心の声で訴えかけてくる。

いっそのこと、泊まらずに馬車の中で寝たほうがマシかもしれない、と影夫は思うがやはり馬車で休んでも寝心地は悪いし、環境もよくない。

（ごめん。でもミアアの身体を休めなきゃダメだから、な）

（うん……）

(ミリア。難しいかもしれないけど、外の様子は気にしないでくれ。俺がいるから心配しなくていいよ。……ほんとごめん)

(わかった……)

影夫は、ミストバーンと違い、憑依した相手の魂を支配して眠らせたり封じたりはできない。

自発的に眠ってくれればいいが、こんな不穏な雰囲気では緊張して不安になってしまいうだろうから、それも望めない。

(くるんじゃなかった……)

村の中を歩いていると、家の中から、道端から、そこらじゅうからじろじろと見てくる村人の視線を無視しながら、村にもう一軒ある宿へと影夫は入っていく。

「すみません、一泊」

「帰っておくれ、よそものはお断りだよ」

「そんな馬鹿な！　じゃあ誰なら泊めるっていうんです！　村人が宿に泊まるわけじゃないでしょうに！」

「うるさいよ。宿はもう一軒あるだろ？　そつちにいきな」

その宿の女主人はミリアの姿を見るなり、言葉をさえぎって追い出してきた。

追い出すなり、塩まで撒いている始末だ。

現代と違い、それなりに高価であるはずの塩を撒いてまで嫌うというのか。

「なんなんだ、本当になんなんだよこの村は……」

「お前さん、よそものじゃろう？」

げんなりして、元の宿に戻ろうと歩いている影夫に老人が近寄って話しかけてきた。

「そうですよ。悪いですか？」

「……悪いことは言わん、出て行ったほうがいい」

「そうしたいのは山々ですが、体調が悪くて……休まないといけませんから」

「そうか。じゃがせめて事情だけでもしっておいたほうがええじゃろう……」

ひそやかな声で老人が語るるところによると、この村から開拓に出た若者たちが作った村が近くにあるのだが、そこが盗賊団に襲われて全滅したらしいのだ。

なんでも盗賊団は、旅人に偽装させた斥候役を村に紛れ込ませ、中から手引きをさせて村人達の抵抗を封じ、皆殺しにして金品を奪ったのだとか。

その生き残りが村に逃げてきており、村全体がよそ者に対して疑心暗鬼になっているのだという。

（そうか。昨日のアンデッドモンスターの群れはそういうことだったのか）

内心で、昨日のやけにしつこく量の多いモンスターの集団の正体について、影夫は納得していた。

悲惨な集団死などがあって、複数の強い怨念や無念が残ると、その場に濃厚な邪気が生まれ、空気が淀む。

すると、その近くにある死体がその邪気で動く魔物と化すことがあるのだ。

あのモンスターどもは全滅した村からあらわれていたのか。

「村の皆はのう、息子か娘か、甥や姪か、孫か、叔父叔母か。いずれかの親類が、全滅した村に移住していたもんでな」

「今は皆、怒りと悲しみでどうしようもなくなくなっておるのじゃよ」

「天涯孤独のわしだけが、冷静でいられたというわけじゃ。もう誰もわしの言うことを聞かんし……どうしようもないんじゃ」

「……そうですか」

確かに同情は出来る、気持ちも分かる。

だからって、無関係な人にまでこんな陰湿なことをする必要はないだろうに。

はつきりと疑いを言ってくれて正面から気が済むで調べてくれれば誤解の解きようもあるのに。

影夫は内心のむかむかを抑えつつ、老人と別れて宿に戻った。

「おや。泊まらないんじゃないのか？」

「いえ、ここしかないようですので」

「そうか。宿代は300Gだぜ」

「え？」

「値上がりしたんだよ。素直に金を出せばよかったのによ。ほれどうするんだ。また値上がりするかもしれないねえぞ」

ブチ切れそうになるのを必死にこらえて影夫は、ゴールドを叩きつけるようにテーブルにおく。

「く……これでいいんでしょう！」

「毎度あり。部屋は2階だ。好きな部屋を使ってくれていいが妙な真似はするなよ」

「っ……」

ドタドタを音を鳴らして2階へ上り、階段に一番近い部屋に入る。

想像どおり、埃の積もったベッドを軽く綺麗にして、影夫はミリアの身体をベッドに寝かせるのだった。

(ミリア、大丈夫か?)

(うん。でも、ちよつと疲れちゃった……寝るね)

(ああ。側においてやるからな安心して寝たらいいよ)

影夫達は今から朝までトイレ以外に部屋を出ることはない。

こんな村で出てくるような食事は怖くて口に出来ないし、不穏な動きをしないか監視されているようなことを老人がいつていた。

疑われるのも馬鹿らしいし、村人の顔なんてみたくもないから丁度いい。

幸い水か湯で戻しながら食べるタイプの乾パンのような携帯食をもつてきてある。

美味しくはないし病人にはふさわしいとはいえない食事だが、我慢するしかない。

ここに来るまでにホイミは掛けてある。ホイミによる体力回復と休息で、明日にはおそろく治るだろう。

(それじゃおやすみミリア)

(おやすみなさい……)

翌日。

ミアの体調がよくなったのでふたりは、一秒でもこんな村にいたくないとばかりに、急いで村を後にした。

村から出る際、馬車に探られた形跡があることに気づいて、むかつ腹が立ったが、盗賊一味かどうかの確認をしただけのようで、物は取られていなかったのも、影夫もミアもどうか我慢ができた。

もし、嫌がらせでミアの母のドレスを汚されたり破られたり盗まれたりしていたらきつとあの村は終わっていただろう。

いや。正確には、終わらせていただろうから、彼らの最後の理性は彼らの命を救った形になった。

「あの村、いつか滅ぶな」

「……」

あんなことを毎度毎度していたら、いつか旅人や冒険者と小競り合いから争いになり、その果てに殺し合いになるだろう。

(そうになったら、因果応報いい気味だ。被害者だからってだれかれかまわらず当り散らしてもいいってわけじゃないんだぞ)

単に疑われるだけならまだしも、無関係なのに露骨な敵意を向けた上で、散々にぼったくるのは理屈が通らない。

復讐なら加害者に思う存分すればいいだろう。それを咎めるつもりも非難もしない。

だが、それが出来そうにないからといって、弱そうな女の子を標的にするのは許しがたい。

卑劣で、強い敵意を向けられて尚、相手を深く思いやって許してやれるほど聖人君子ではない影夫は、そう吐き捨てながら馬車を進めたのだった。



## 喜悦

「ひとおーっ！」

グギンツ、と鈍い金属音が響き、何かが宙へと飛び、びちびちと液体が勢いよく溢れ出る音が鳴る。

「て、てめえ!!」

「なめんなメスガキっ！」

「囲め！」

激昂した男達が4方向からはさみうちにするようにミリアに斬りかかった。

猛毒を塗りこんである剣の刃は掠るだけで少女に致命傷を与えるはずである。

それが彼ら山賊団の常套手段であり、知恵だった。

「遅いし、弱いよ」

しかしその刃は届かない。

ミリアの左右の肩から生え出た黒い触手がすべての刃を受け止め根元から折ってしまっていたのだ。

「あ……?」

男達は事態を理解することは出来なかった。次の瞬間、ミリアは素早く跳躍して男の首に刃を当てていたからだ。

「ふたあーっ」

「みいっーっう！」

グヂュンミチンツと水気を含んだ金属が擦れる音が2つ続いて鳴り響く。

その度に宙に生首が舞い、赤い水を噴き出す肉の噴水が出来上がる。

「ば、ばけも」

「よっつう！ あはははは！ 楽しいなあ！ 最高だよ！」

おののく男だが最後まで言いきれぬうちに息の根を止められる。

「あ……ああ……」

山賊達は、いつものように山道で獲物を待ち伏せし、皆で取り囲ん

でいつせいに襲い掛かっていた。

今日もそれですべてが上手くいき、彼らは獣欲を満たして大金を得ることが出来る——はずだった。

なのに。なのにこれは何だ？

男は事態が理解出来なかった。

「や、やめっ、く、くるなああ!!」

血を浴びて唾うミリアの姿は、訳も分からず混乱する生き残りの男に激しい恐怖を与え、

彼を一目散に逃亡させた。

訳が分からない。だけど、逃げろ逃げろと男の本能ががなりたて、ひたすらに恐慌する。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

もつれる足で転がるように必死に走って駆けていく。

「あは。逃げられると思った?」

ミリアは猛然と彼の後を追う。

迫り来る恐怖に彼は完全にパニックとなり、己が肉体の限界にせまる速度で走りぬけた。

しかし。

「はっ、ひいっ!?!」

「わたしはねえ、敵は絶対逃がさないんだよ！ きやはははっ!!」

無常にも限界まで肉体を酷使できるのはミリアとて同じだった。

しかも盗賊崩れなんかとは鍛え方が違う。

闘気による初歩的な肉体強化をも行える彼女は、彼に軽々と追いつき、おおばさみの刃を彼の首へとむける。

「あひやはははは、これでえっ、いつつめえ!!」

断末魔を発することさえできず、彼は命を散らした。

「はあはあ……いいい！ ほんとこれいいよお兄ちゃん！ 私気に入っちゃったあー！」

「はいはい。もうちよつと落ち着いて戦闘できないのかよ。あぶなっかしいぞ」

「だつてえ……たかぶつちやうんだもん。それに、私ちゃんとやったよね？ 敵かどうかはしつかり確認したし……問題ないもくん」

ミリアの言はそのとおりだったが、彼女の昂ぶりかたは少しおかしかった。

やはり前の村で村人達がむけてきた排他と敵意といった負の感情が鬱憤になっていたのだろうか。

不快な思いをさせられただけでなく、ミリアの精神にまで悪影響を与えたのだとしたら、実に迷惑な連中だ。と影夫は憤慨した。

「そりやそうだけどよお。もうちよつと節度を持ってだなあ、楽しむようなことはだなあ……」

「はいゴメンなさい」

「こら。まだ話はおわってないぞ！」

ケラケラと笑いながら謝るミリアに本当に反省しているのかと思いつつ、影夫はお説教を続ける。

そして周囲を警戒しながら、馬車のもとへと戻ろうとしたところで、ミリアが首を傾げながら足を止めた。

「あれ？　なんかいるね。あの藪の向こう。やつらの生き残りがいるのかな？」

「ん？　ああ。ほんとだな。偵察か連絡役が逃げてたか？　まあほつといてもいいだろうけど」

「ダメだよお兄ちゃん！　放っておいたら誰かがまた襲われちゃうんだよ？　いいの？」

ミリアの主張は、戦いたいのが為の口実にすぎないのが見え見えだったが、正論であるだけに影夫も止められなかった。

なにせミリアを見るなりニタニタしながら、奪って犯して遊んでやると襲い掛かってきたような救いようのない山賊連中であるし、もつともだ。

「しようがないか。でも、戦意がないなら見逃せよ？」

「はいはいわかってます。敵意のない相手は殺さない。だよね」

「つたくもう……ほんとわかってんのかよ」

お説教は聞き飽きたと、ミリアが苦笑しながら耳をふさぎながら言う。

影夫はため息をつきつっもしようがないので、戦闘に備えるのだっ

た。

## 誤算

ミリアと影夫は、気配を殺しつつ、藪の向こうにいる誰かの元へと歩みよつていく。

「誰です？　そこにいるのは分かっていますよ」

しかし、気配を悟られてしまったのか、静かだが強い口調で男が声を掛けてきた。

「おいミリア、慎重にいったほうがいいんじゃないか」

「大丈夫だよ。それよりさっさとこつ。はやくしないと逃げちゃうかも」

その声を聞いた影夫はどこか嫌な予感がしたが、高揚したままのミリアは忠告を聞かず、薄笑いを浮かべて足早に声のほうへと進んでしまう。

「なっ……」

藪を越えたところにいた男は、青髪巻き毛で、伊達眼鏡をしている一見すると優男風の……どうみてもアバン・デ・ジニユールⅢ世。

つまり、勇者アバンだった。

「なっ……」

思わぬ原作人物との突然の遭遇に影夫は絶句して驚愕する。

一方アバンのほうも、邪悪な気配を感じて剣を向けてみれば出てきたのは10歳くらいの可愛らしい少女。

これには彼も面食らってしまった。

しかし邪気は間違いなくその少女から放たれており、血塗れの格好で邪悪な形相を浮かべている。

彼女の半身に装着された禍々しいおおばさみからは、真新しい人間の血が滴り落ちており、殺戮の事後であることも窺えた。

「剣を向けた？　じゃあお前は敵だね！」

「敵は殺さなきゃ……ねえ」

舌なめずりをしたミリアは、おおばさみの刃をいとおしげになでた。

「あはははは。ちようどよかった。ちよつともものたりなかったんだよ

！」

「お、おい、ミリア!?」

影夫は必死になって止めようと声を掛ける。  
しかしそれはよくなかった。

影夫が声を発したことで、アバンはミリアの身体にひつついている影夫の存在に気づき、暗黒闘気の魔物が、罪なき少女に憑りつき操っていると誤解してしまったのだ。

「ひやはははは! 死ね死ねッ!」

極度の興奮状態にあるミリアは影夫の声にも反応せず、おおばさみを構えてアバンに切りかかる。

「や、やめなさいっ!」

さすがにアバンはむぎむぎやられることはなかった。

しかし少女を傷つけるわけにはいかず、反撃は出来ずに身をかわすだけしかできない。

「うざいなあつ、ちよこまかと!」

「くっ!? はやく武器をしまいなさい!」

「っ。こいつ強い!? お兄ちゃん、闘気を使うよ!!」

ミリアは、右手に作り出した暗黒闘気を刃へと伝わらせ、おおばさみを強化していく。

「暗黒処刑術!」

圧縮された暗黒闘気を纏った刃は漆黒に輝き、切れ味を増し、これでつけられた傷は回復呪文を受け付けないという凶悪な武器と化す。

暗黒闘気剣（ミリア命名：暗黒処刑術）は、並の相手なら必ず殺せる技である。

「殺す殺す殺す殺す!」

「ぐっ、お、落ち着きなさい! あなたは操られているのです!」

「あひやひは、死ねえ!」

「は、話を聞きなさい!」

「ミリア!!」

「が、あ、ああっ!?!」

影夫もアバンに合わせてミリアを止めようと、彼女の右手から離れ

て、暗黒闘気の体をミリアに纏わりつかせる。

「くっ、貴様あつー！」

その様子を見てアバンが激昂する。

「えええっ!?!」

ミリアの身動きを暗黒闘気で封じこめる影夫の姿は、傍目には少女を操り苦しめる元凶にしか見えないからだだった。

影夫はミリアの暴走を止めようとしているのだが、アバンの説得に耳を貸さないように苦痛を与えているように取られてしまう。

ここに至つてようやく大きな誤解があることに影夫は気付く。

「こ、これは違う、俺はー！」

「なんで!?! お兄ちゃん、どうして邪魔するの!?! 敵は殺せつて言つたよね!?!」

「お兄ちゃんどいて! そいつ殺せない!!」

「こ、ここここ、こちらミリアあ!!」

ミリアがとんでもないことを言い出す。

たしかに影夫は敵ならば殺すのも仕方ないと言つたが、積極的に殺せとは言っていない。

この言い方じゃ影夫が洗脳したみたいになしか聞こえない。

「こんな小さな少女を……!」

アバンは、ミリアが暗黒闘気の魔物を兄と呼んだことで全ての事情を察した。

あの魔物は年端も行かぬ少女に憑りつき、甘言を弄して自らを兄だと刷り込み、肉親の情を利用して少女を暗黒の戦士に仕立て上げたのだ。

おそらくこの少女は孤児か何かで孤独であつたのだろう。そこを魔物が利用した。

「貴様は……下衆にも劣る卑劣!」

「ちが、誤解だつて! アバンさん!」

「っ!?!」

影夫はパニックのあまりさらに墓穴を掘る。

初対面のはずの彼を名前で呼んでしまう。

原作知識、なんていうことがアバンにはわかるはずもない。  
それがさらに誤解を深めてしまった。

「私を知って狙うとは。もしか、ハドラーの手先……!?!」

「いや、違いますね。ハドラーならばこのような手は使わないはず!

誰の差し金です?」

「お、おおお、おちつけ、そうじゃない! おいミリア、お前から説明しろよ!!」

もはや自分が何を言っても嘘か妄言に聞こえるだろうと、ミリア自身から説明させようとする。

もつとも、ミリアに言わせたところで、そう思わせているとか、言わせていると思われるだけなのだが。

影夫にとつての最善はミリアを操り逃げることだ。

しかし、完全なパニックでそれが思いつかない。

「ああああああっ!!」 死ね死ね死ねえっ!」

「ぐっ、ぐあううう……こらあミリア! あとでお仕置きだからなあ!!」

そうこうするうちに、殺意を滾らせたミリアが影夫の拘束を振り切ってしまった。

負の感情をありのまま丸出しにしている今のミリアは、暗黒闘気の手を抜き出すのに最適の状態だ。

うろたえて力を発揮しきれない影夫よりも、力が勝るのだ。

パニック状態に陥った影夫の傀儡掌もどきでは、これ以上止め切れなかった。

「どうして!?! 私いい子だよお兄ちゃん!!」

「なんで怒るの!?! 私が弱いから!?! みんなの仇を殺せないから!?!」

今のミリアはもう完全にタガが外れていた。

精神が高ぶりすぎてあの事件の記憶が混濁しているほどだ。

正直なところ影夫はミリアの狂気を侮っていた。

自分の前では歳相応の少女らしさを見せて甘えてくるし、ガーナの町でおちついていて、歳相応のはしやぎぶりもよく見られるようになっていた。



だから、徐々にだが傷は癒えつつある……そんな風に感じていたのだ。

だがそれは誤りだった。トラウマが簡単に消え去ることなどない。表面上目立たないようになるだけできつかけがあればフラッシュバックともに悪夢は蘇る。

排他的な村での悪意でトラウマをゆさぶられ、山賊たちを殺して興奮状態になった彼女は完全にあの時に戻っていた。

「ま、まてミリアー！」

「ごめんお兄ちゃん。すぐ殺すから!!」

「ママの仇！ パパの仇！ お兄ちゃんのかたきいっ!!」

「ぐっ!? これが私への答えというわけか！」

「死ね死ね死ね死ねっ、死んでよおおお!!」

「殺さなきや、殺さなきや、殺さなきやああ!!!」

ミリアは喚きながら、ポロポロと泣いていた。

泣きながらも必死にアバンの身体を断ち切ろうとおおばさみを振り回す。

しかしそのすべてがいなされ、むなしく空を斬るばかりだ。

憎い敵を殺せない。大事な物を奪われたのに、仇すら取れない。それはミリアにとって絶望を超える悪夢であった。

影夫は悲痛なミリアな姿を見て、自らの迂闊さを心底呪いながら説得を諦め、ミリアを連れてこの場から逃げようと決意する。

だがときすでに遅し。

ミリアは己がすべての力を振りしぼり、つい先日影夫と一緒にやって作り出した新技を放つ寸前だった。

「消し飛べ!! 暗黒ッ、闘殺砲おッ！」

ミリアが両手のひらをアバンの方へと突き出し、身体中から全力でかき集めた巨大な暗黒闘気弾（ミリア命名・暗黒闘殺砲）を撃ち放つ。

「ぐっ、空裂斬！」

回避は間に合わないかと判断したアバンはとっさに光の闘気技で迎撃する。

ふたつの技がぶつかり合い……撃ち勝ったアバンの光の闘気がミ

リアに迫った。

「え？」

ミリアは迫り来る空裂斬を避けるでもなく呆然とみていた。

「う、そ……」

ミリアにとつて、大好きな兄と一緒に考えて特訓したこの技は世界で一番強いんだと思っていた。

何よりも大事な絆の技であつたから。

それが目の前で碎かれた衝撃に動けなかつたのだ。

「あ、あああ……」

光の鬨気に飲み込まれる寸前でミリアはとっさに目をつぶる。

(ごめんなさいお兄ちゃん……)

だが、いつまで経つてもミリアには何の衝撃もこなかつた。

その代わり。よく知っている冷たいけど心地よくて優しく感触が伝わってくる。

「ミリア……」

「お、兄ちゃん？ え？ えっ？」

「大丈夫か……痛いところはないか？」

「う、うん……」

「そうか、よかつた」

ぱちくり。と不思議そうにミリアが答える。

放心した状態で、優しく抱きつかれて正気に戻つたようだった。

(ごめんミリア。最初からこうすればよかつたんだよな)

「すまん、お前を止められなかつた……肝心な時にパニックって、妹を辛い目に合わせて、情けない兄貴だな俺」

「お、お兄ちゃん……？」

苦痛に顔を歪める影夫だが一番痛いのは心の痛みだ。

アバンの空裂斬自体は相殺で威力が弱まっていたのと、最初から手加減して放たれていたものであつたことが幸いした。

しばらく養生すれば治りそうなくらいのダメージで済んでいる。

「すまないアバンさん。あんたにも迷惑かけちゃった……」

「え、はい……？」

アバンもまさか魔物が少女を身を挺して庇うとは思ってなかったのだろう。困惑して目が泳いでいる。

元祖勇者の珍しくも情けない絵だ。貴重なのではないだろうか？と痛みを堪えながら影夫はふと思った。

「お兄ちゃん……わ、わたし……わたしが……わたしのせい、で……」  
「大丈夫だよ、ちよつと痛むだけだ。ミリアのおかげで助かったよありがとう」

状況を飲み込めてきたミリアが、自分を責め苛む前に、影夫は彼女の頭を優しくナデナデしてやる。

「ミリアのせいじゃないよ。俺が泡食つてた馬鹿だっただけだ」

「あう……うう……ぐす、うええ……」

ミリアはしやくりあげながら、影夫にしがみついてわんわんと泣きはじめた。

「ひぐつ、えぐつ、ぐしゅ……！」

これで、とりあえずこの場は収まった。

「アバンさん。変に誤解させて悪かった。信じられないかもしれないけど、俺はこの子を救いたくて一緒にいるんだ」

「な……しかし、いや……」

啞然とするアバンだが、彼の言葉にウソは感じられない。ゆっくりとおだやかな口調だが、強い意思も感じる。

少女を優しくあやす様は、邪悪な暗黒闘気の塊であるはずなのにぬくもりすら感じる光景だ。

「申し訳ありません、私は……！」

アバンは自分がとんでもない誤解をしていたことに気付いた。あの魔物は悪い者ではなく、壊れた少女を救うためにもにいたのだ。それを攻撃し、むやみに彼女の傷を広げた拳句、心優しい彼にも危害を加えてしまった。

「無理もないよ。俺だって同じ光景を見たら同じ反応をすると思う」

「あんたと違う形で会っていれば、ミリアのことをお願いしようと思ってたんだが……今日は出直すよ」

「お待たせミリア。さあ行こう」

「ぐしゅ……ほんと、に……ごめんなさい」

「もういいって。次からは気をつけような？」

「うん……ぐす……ふえ……」

「じゃあもうこの話は終わりだ。泣くのも終わりだぞ。ほら、鼻ちーん」

「うゝん……ずずずじゅっ!!」

罪悪感に泣く妹を兄が優しく慰める。手をつないで、歩くふたりの後姿は強い絆で結ばれた兄弟以外の何者でもなかった。

「ヒュンケルの事も、今回も。私は……一体何をしているのか!」

アバンは世界を救った勇者などと持て囃されている自分を自嘲した。

あの魔物のほうがよっぽど正しいことをしている。

どこかでいい気になっていたのかもしれない。増長があったのかもしれない。

自分の所業の嘆かわしさに力なくなだれるのだった。

## キャラクターステータス2 旅立ち編『誤算』時点

☆旅立ち編『誤算』時点のステータス☆

【ミリア】

職業：魔道戦士

種族：人間

性別：おんな

レベル：10

・そうび

おおばさみ（こうげき+47）

形見の髪飾り（うんのよさ+10）

形見のドレス（しゅび+10）

影夫のペンダント（+0）

・つよさ

ちから：28

すばやさ：40

たいりよく：28

かしこさ：17

うんのよさ：35

さいだいHP：56

さいだいMP：24

こうげき力：75

しゅび力：30

※左手でどくがのナイフに所持も可能。

・特技、呪文、特殊能力

メラ

メラミ（契約のみ）

ギラ

ベギラマ（契約のみ）

イオ（契約のみ）

イオラ（契約のみ）

ヒヤド

ヒヤダルコ（契約のみ）

マホトラ（契約のみ）

ラリホー（契約のみ）

マホトーン（契約のみ）

暗黒魔弾（※暗黒闘気弾のこと）

暗黒処刑術（※暗黒闘気剣のこと）

暗黒闘殺砲（※暗黒闘気砲のこと）

暗黒戦士達の残留思念（暗黒闘気の使用が可能になる。また、感情の昂ぶりとともに武器の取り扱いや武人の体捌きや戦術を無意識に行使できるようにもなる。一種の呪いであり、放置すれば殺戮を好む戦闘狂に変貌していく）

※暗黒闘気によるダメージは回復を受け付けない。

※暗黒闘殺砲使用後は数ターン暗黒闘気使用不可＋暗黒闘気の反動によるダメージあり（影夫が体内残留する暗黒闘気を吸収可能）

〔クロス・カゲオ〕

職業：暗黒騎士

種族：暗黒闘気生命体

性別：おとこ

レベル：??

・そうび

暗黒闘気の刃（さいだいHPの半分の値をこうげきに＋）

暗黒闘気の防御手（さいだいHPの半分の値をしゅびに＋）

※さいだいHPが暗黒闘気の総量を示し、暗黒闘気の量が多いほど、強度が上がる。

・つよさ

ちから：18

すばやさ：14

たいりよく：25

かしこさ：???（知識基準がDQ世界と異なる）

うんのよさ：255

さいだいHP：50

さいだいMP：26

こうげき力：43（回復不能&物理防御半分無効）

しゅび力：32（物理、呪文、氷炎耐性50%）

・特技、呪文、特殊能力

ホイミ

ベホイミ（契約のみ）

キアリー

キアリク（契約のみ）

ザメハ

バギ

バギマ（契約のみ）

マホトラ（契約のみ）

インパス

トラマナ（契約のみ）

マヌーサ（契約のみ）

ニフラム（契約のみ）

### 【連携形態】

ミリアが主となり、影夫が肩から暗黒闘気の手だけを出している状態。

ふたりがひとりとして動くので1ターン2回行動に相当。基本的にミリアが攻撃して影夫は防御や回復を担当。

・そうび

ミリアに準ずる。

・つよさ

本体部分はミリアのつよさ。

暗黒闘気の手の部分のみ影夫のつよさ。

・特技、呪文、特殊能力

各個人に準ずる。

【融合形態】

ミリアが影夫を体内に取り込んだ状態。

1ターン2回行動。

・そうび

ミリアに準ずる。

・つよさ

影夫との融合によりミリアのステータス値に影夫分が加算される。  
他者の命令は受け付けない。

暗黒闘気との親和性が爆発的に上昇し、影夫の暗黒闘気を自在に操れる。

融合時には、暗黒戦士達の残留思念を活用し尽くすことが可能で、殺戮を繰り返し続けた歴戦の暗黒戦士達の技能と戦闘術を行使できる。

・特技、呪文（使用可能のみ）  
各個人に準ずる。



## 休息

「うーん。どうしたものか」

宿部屋の一室。

ベッドの中ですうすうと寝息を立ててお昼寝中のミリアの横で、頭を抱えた影夫は深く悩んでいた。

アバンとの一件があつて以来どこか元気がない様子のミリアを励ましたいと思つているのだ。

しかしここで影夫の女性経験のなさが顔を出す。

落ち込む女の人をどうフォローすればいいのやら検討がつかないのである。

「高級レストランでの豪華でムーディーな食事とか、ブランドもののプレゼント、はたまた宝石やアクセサリとかかな?」

貧弱な彼の頭の中の知識には、そういったものを女性にプレゼントすると喜ばれるとインプットしてあつた。

「あれ? 違うような……?」

実際のところ10歳の女の子にそんなものを本気でプレゼントする30すぎの男なんて気持ち悪いだろう。喜んでくれるだろうが間違つている気がする影夫。

彼の偏つた知識は、おぼろげに聞いた恋愛とかスイーツ?とかいうような女性をくどいたり誘つたりする際のものだ。

しかもラインナップ的に間違いではないが、どうせ女性はそういうものなんでしょう? という非モテ男特有の穿つた見方になつている部分があつた。

「あ。そうかミリアは子供だもんな。女の子の子供が喜ぶもの。ゲームや少女漫画、はないだろうから……可愛いオモチャとか、人形とかかな?」

「人形。いや、ぬいぐるみのほうがいいか。むむつ。これは名案かも」  
危なく10歳児に貢ぐアラサー男になるところだった影夫は、どうにかまともそうな結論に達した。

「よし。そうと決まれば……」

影夫はさつそくミリアの身体へと入り込み、意識のないその身体を操って、街へとくり出した。

「わあーいろいろあるなあ」

「いらつしやいおじようちゃん。好きなだけ見ていってくれよ」

街の大通りには、露天から店舗から多数の店が軒を連ねていた。

数日前から影夫とミリアが滞在しているこのメルンザの街は、山間や森林部といったベンガーナ国の辺境から、物や人が集まる地なのだ。

温暖で交通の便がよく、海に面していることもあって、ベンガーナの第二の心臓というべき物流の街であり、多くの人が集まる街でもある。

ベンガーナの辺境から中央へ、もしくは中央から辺境へ。行く際に必ず通過する通過地点なのだ。

それだけに街のにぎわいもたいしたもので、ガーナの街の10倍くらいの規模があるように思える。

「うーん。どれがいいかなあ」

「何が欲しいんだい？」

今影夫が目当ての品を物色しに来ているのは、雑多な雑貨を扱うお店だ。

子供向けの品もたくさんおいてある。

「ぬいぐるみはありますか？」

「ああ、あるよ。ほら、ここだよ」

人の良さそうなおじさんがニコニコしながら、売り場の一角に案内してくれた。

「それじゃあ、気に入ったものをじっくり選んでおくれ」

店内には他にも子供を連れた家族連れなどがいて、兄弟姉妹ではしゃいでいたり、友達同士であれでもないこれでもない物色している子達もいる。

(本来ならミリアもあの中にもいたかもしれない……)

「もう、聞き分けのないこといわないの！」

「やだやだ買って買って！」

聞こえてきた声に影夫が背後を振り向くと、ダダをこねて半泣きの子が母親の腰に抱きついてぶんぶんと首を振っており、母親が店を出ようとするのを引き止めていた。

「まわりの迷惑になるから、大声を出しちゃダメよ」

「だってえ……欲しいんだもん。なんでもするから、おねがいっ。お手伝いっばいするから！」

「ふう。しょうがない子ねえ。本当に、家のお手伝い頑張れるの？」

「うん！ 頑張る！ いい子になるよ！」

「そう。怠けたら返しにくるからね？」

「ありがとうママ!!」

泣き顔から一転、満面の笑顔でぴよんぴよんとはしゃぐ少女は、ミアより小さいくらいの子だろうか。

影夫はやっぱ子供はあああるべきだと思った。

それは親が子供の我侷を全て受け入れて、躰をしない、ということではない。

悪いことは叱られつつも、甘えや我侷を受け入れてもらえるような経験が子供にはいっぱい必要だということ。

両親や祖父母は、影夫をそのように育てくれた。自分はとても幸せだった。だから、今度は自分が誰かにそうする番だ。

(大人になる前に肉親を奪われたミアに、色々としてあげられるのは俺だけなんだ。もっともっどがんばらないと)

心を新たにした影夫は、棚の上に鎮座していた、もこもこした30センチくらいの可愛いネコのぬいぐるみを指差し、店主のおじさんに声をかける。

「すみません。このぬいぐるみください」

「ああ。それはほかのより少し高いけど、おこづかいは足りるかい？」

「これでいいですか？」

影夫はじゃらっと10枚のゴールドを店主に手渡した。

「大丈夫だよ。ちよっとまってね」

店主は、そういうと丁寧にフアンシー柄の布でぬいぐるみを包んで、リボンをつけてくれた。

「はいどうぞおまたせ。大事にするんだよ」

「はいー」

店主から渡されたぬいぐるみを抱えて、ミリアの身体を動かす影夫がペこりとおじぎする。

「おや？ おじようちゃん。目の下に隈が出来てるね。夜は早く寝ないとパパやママに怒られちゃうよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

目の下の隈は影夫が入り込んでいるせいなのだが、影夫は気に掛けなかった店主にもう一度ペこりとおじぎをして店を後にするのだった。

「……ふあふ……ふあー。おはよ……お兄ちゃん」

宿部屋に戻って、影夫がミリアの身体から抜け出たとき、ちようどミリアが目を覚ました。

「ああごめん。起こしちゃったか？」

「ううん。へーきい……」

寝ぼけ眼なミリアに、影夫は濡れたタオルを用意して手渡してあげる。

「はふー」

「ごしごしと顔を拭いて、ふああとミリアがあくびまじりの息を吐いた。

「はい。プレゼントだよミリア」

「え？」

影夫がミリアの前に布に包まれたぬいぐるみをおいてあげると、きよとんとした顔でミリアが首をかしげる。

「どうして？ わたしのせいでお兄ちゃんを怪我させちゃったのに……悪い子だよ、わたし……」

影夫はあのかことは全然気にしないでいいと何度も言っていたが、やはりまだひきずっていたようで、ミリアは悲しげにうつむいてい

る。

「なあミリア。いい子だから大事にされて、悪い子だったら大事にされないとかじゃないんだよ。ミリアは大事な俺の家族だから、例え失敗しちゃっても悪い子になっても、色々してあげたいんだ」

「ふえ……」

頭を撫でながら抱きしめてそういつてあげるとミリアは、ぐすぐすと鼻をならして震えだした。

「もちろん、いい子にしたら、ご褒美はあげるけどね。でも、いい子じゃなくなつたつて、ミリアは本当に大事な大家族なんだ。だからこの前みたいな痛い思いをしちゃっても俺は全然平気なんだ。だからもう気にしないでいいよ」

「お、お兄ちゃん、ありがとう……だいすきい……!」

「ああ、俺もだよミリア。ほら。受け取ってくれよ」

影夫は手を伸ばして、ネコのぬいぐるみを包装布から取り出し、ミリアに渡してやる。

「う、ん……大事にする、ね。お兄ちゃん!」

ミリアはぎゅつとぬいぐるみを抱きしめ、満面の笑みで影夫に微笑むのだった。

ちなみに。

1週間ほどメルンザの街に滞在している間、影夫は改めてアバンの行方を捜したが、彼に関する情報は何一つ得られなかった。

1週間の間に、影夫が負っていた空裂斬の傷は完全に癒えたし、ミリアの心身もすっかり落ち着いて普段の調子を取り戻したので、ふたりはベンガーナへの旅路を再開するのだった。

## 自称

必死の形相で女が山道を走っていた。

髪をかき乱し、一目散に駆ける彼女の背後には、黒く巨大な獣が迫っていた。

「ああ、あああつ!？」

女が足を取られ、地面に転がったことで逃走劇は終わりを迎える。

女に追いついた獣は立ち上がって、咆哮を放つ。

「ぐおおおおおツツ!!」

「いやあああああああ!!!」

女性は逃げることもできず、悲鳴を上げて地面に倒れこみ、身体を震わせる。

3メートルにも及ぶ巨体を揺らしたごうけつ熊は丸太のような腕を振り上げ……

「は〜いストップ。おいたはダメだよ、おつきなクマさん」

ミアアの右肩から生えていた触手の黒刃が伸びてごうけつ熊の胸をぎゅぐゅとえぐる。

「ぎゃおおおおお!？」

「ちっ、このー!」

ごうけつ熊は痛みに仰け反りながら怒りの形相をミアアへと向けるが、次の瞬間。

彼の右腕がミアアの左肩から生えた暗黒闘気の凶手により斬り飛ばされた。

ちなみに『凶手』とは、影夫の暗黒闘気ボディを変形させて作った、伸縮可能な腕の先に刃がついたものだ。凶手と命名したのはもちろんミアアである。

「がぐおおお!」

「もうっ!・ むずかしいなあ」

痛みと激怒で荒ぶるごうけつ熊の左腕がミアアへと振り下ろされたその瞬間。

彼のその首は跳ね飛ばされ、その巨体を地面へと倒れこませること

になった。

足元で倒れこんだまま動かない女性を、ミリアは一瞥もせずによろ。とため息をつく。

「はあ。お兄ちゃん、これで一匹ずつやるのはめんどくさいよ。おおばさま使っちゃだめ？」

「ダメだって、それじゃ修行になんないだろ」

その声がするとともに、ミリアの肩から生えていた触手は引っ込み、ミリアの首元に黒い影状の顔が浮かび上がる。

「じゃあ、わたしがお兄ちゃんの身体を動かすつてのはやめようよ。すつごく難しいんだから。さつき2回も失敗しちゃったし。わたしは自前の闘気を使うから、お兄ちゃんは自分で動いてよ」

「難しいからこそ慣れておかないとな。俺が寝てる間に敵がきたり、俺がへまして気絶することがあってもミリアが俺を動かせるなら安心だろう？」

「うーそれはそうだけど……」

まあまあと不満げなミリアを宥める。

これも訓練、修行の一つなのだ。

難しいからこそやっておくべきことだ。他人の暗黒闘気を自由自在に動かし操れるようになれば、傀儡掌みたいな技も使えるようになるそうだし。

「いつそのことバーサーカーモードになっちゃだめ？ 面白くて一気に終わるし、お手軽だよー」

「絶対ダメ！ あれ訳わかんなくなるだろ。俺も意識がなくなるし誰が止めるんだよ。その場にいる人を誰も彼も皆殺しにしちやいそうだ」

バーサーカーモードとミリアが名づけたのは、ミリアが影夫を体内へと取り込み、完全なシンクロ状態になるモードのことだ。

ようするに村人をみなごろしにしたときの状態である。

「それにあれは、ミリアにもよくないよ。俺はお前が心配なんだ、やめてくれよな」

「はあい……」

頬を膨らませつつ嫌々承諾してくれたが不満げなミリア。

影夫は手を伸ばして頭を撫でてどうにか宥める。

「あ、あの……」

いつのまにか意識を取り戻して啞然とミリアを見上げていた女性  
が、おそろるおそろる声をかけてくる。

「あ」

そこで普通にしゃべってしまった影夫は見られてしまったこ  
とに気付いた。

気絶していたと思ったがそうではなかったらしい。

「あなたは……いったい？ それに、その、首元の。しゃべっているの  
は?? あの黒い刃はなんだったのですか？」

助かった直後に矢継ぎ早に質問を飛ばしてくるのは、ミリアを魔物  
の仲間だと疑っているからだろうか。それともパニックの余波か。

「あ、ああー。その……俺はなんていうか」

「……………」

慌てる影夫を余所に、ミリアはすつと目を細めて彼女を冷たく見据  
えた。

彼女が影夫の正体に気付き、それを拒むそぶりを見せたら誰かに伝  
えられる前に処分しようと考えているのだ。

この女性は、教会に属する女性が羽織るシスターローブを身に着け  
ている。聖職者であれば影夫を赦おうとするだろう。

大事な家族を攻撃するならば明確な敵だ。敵に対してミリアは容  
赦はしないつもりであった。

いつでも処分を終えられるように、ミリアは右手に暗黒闘気を集め  
はじめた。

「ま、まさか、魔物……」

「あれだ！俺はインテリジェンスアームズだよ!!」

ミリアの意図に気付いた影夫は大慌てで、ごまかそうと嘘八百を口  
にした。

彼女を無差別殺人者にしないために影夫は必死だった。

「い、いんてりじえ……えっ?」



「知らねえか？ 神に作られし伝説の武具ってやつだよ。えっとそのー、意思を持ち、勇者のみが扱える、勇者と共に戦う武具なんだ！」  
「あ……！ ー もしや、あなたはガーナの勇者さま?!」

勇者という単語が出たことで、その女性はある旅人から聞いた話を思い出した。

幼い少女の勇者がガーナの街に現われ、凶暴なまものの群れを倒して救ったのだという噂を。

「それだよそれ！ おでれえたな、知ってたのか！ 俺はクロスつてんだヨロシクな姉ちゃん！ んでコイツはミア。無口だけど強くて優しい勇者さまなんだぜ！」

どこかのアニメかゲームで見たような、陽気な相棒武器風のキャラ作りをしながら影夫は猛然と言葉のマシンガンをシスターに投げつける。

とにかく丸め込んで雰囲気でごまかすしかない。

「勇者さま……！」

「お願いいたします！ 村を助けてください！ 村が大変なんです！」

「むら……?」

「はい！ この先の村です！ 魔物の群れが突然襲ってきて!!」

「そりゃあ一大事だな！ おいミアア！ こりやあぜひと村の皆さんを助けないとなあ！ なんてったって、ミアアは勇者だもんな。よっしゃいこうぜー！」

「えー。めんど」

「そうか！ そうだよな！ この姉ちゃんをここに放っていくのは心配だよなあ！ そりゃそーだ！ がははははっ！」

「ちが」

「よしっ、おい姉ちゃん。これをやるから危なくなったら使えよ！」

影夫はミアアが勇者にふさわしくない言動をみせないようにその言葉を遮りながら必死に誤魔化しつつ、彼女の腰の道具袋からカメラのつばさを取り出してシスターに手渡した。

「あんたはここで待つとけ。魔物に襲われたらどっか安全な街にでも

飛べばいい！ 村は俺達に任しとけって！ じゃあいくぞミリア！  
いざゆかんつ、どこかのだれかの笑顔のためにー!!」  
影夫は有無を言わず、ミリアの足を強引に動かして村の方向へと  
駆けさせていった。

## 勇者

「ぎゃああー！」

「イアンがやられた！」

「くそつ、怪物どもめ!! くらえ！」

「そこだ囲め! みなでかかるぞ！」

村では激戦が繰り広げられていた。

村に攻め寄せている魔物の群れは、リカントの集団だった。

襲われている村人達は、農具や木こり斧を振り回して必死に抵抗をしている。

「グル、グガア!!」

「ぐああー！」

「ダメだ! もう持たない……」

リカントの集団は本能のままに暴れているので統率が取れていないがその身体能力は高く、村人達を圧倒していた。

このまま放っておくと1時間もしないうちに全員が皆殺しになるだろう。

「ヒヤダルコー！」

「バギー！」

だがその時、リカント達の背後から呪文の嵐が襲う。

「ガアアツ!?!」

不意打ちをうけたリカント達は無防備に呪文を受け、4体が凍りつくと同時に、真空の刃で砕かれた。

「おおーすごい威力だなミリア! さすが中級呪文！」

「へへーん。すごいでしょ」

「お見逸れしたよ。初めて使えたにしちゃ出来だ。ジャンジャンいくぞ」

リカント達は一斉に振り返ると、ミリアに向かって襲い掛かってくる。

「ヒヤダルコー！」

「バギー！」

だがその途中、さらに3体が氷漬けとなり、残りの8体も動きが鈍った。

「オラオラ！ 俺も新呪文を見せてやるぜ」

すかさず影夫はミリアの肩から両手を伸ばし、リカント達へと向ける。

「バギマー！」

バギよりも数段大きく力強い真空の渦がリカントの群れに襲いかかった。

その結果、リカントのうち2体が頸動脈と喉笛を切り裂かれ絶命し、残るは6体。

「わあー！ お兄ちゃんすごいね！」

「そうだろうそうだろう！ 切り裂かれる場所は運しだいだから、あてにするとやばいけどな」

バギ系は折角放つても運が悪いと頬が切れるだけで終わったりする事もあるダメージ幅の大きな呪文なのだ。

「グギャツオオーー!!!」

そうこうするうちに、残る6体のリカントが怒りの形相でミリアの目前に迫っていた。

「後はミリアに任せる。これも修行のひとつだな。できるか？」

そういつて影夫は自分の身体の主導権をミリアに渡す。

「お兄ちゃんは過保護すぎ！ こんなやつら余裕だもん」

ミリアはまず、正面から突撃してくるリカントの懐に飛び込み、おはさみでその胴体を両断した。

「グエアアア!？」

「つう……」

断末魔の叫びを漏らしたりリカント。

だが、彼は絶命間際にミリアの左腕を爪で浅く引き裂くことに成功していた。

「ミリア、残りが一斉に来るぞ」

「むうー」

その隙を見逃さず、5体のリカントが腕を押さえてよろめくミリア

に、一斉に襲い掛かってくる。

「くっ、このお！」

ミリアはどうか、顔と腹と首を狙ってきた3体の攻撃を、影夫の身体を操作して作り出した凶手を伸ばして、受け流すことが出来た。しかし、残る2体には手が回らず、間合いに飛び込まれてしまう。

「まずっ」

左半身を狙ってふり下ろされた爪はミリアへの直撃コースにのって迫ってきていた。

無理な体勢から攻撃を受け流した所為でミリアの足はもつれており、バックステップもサイドステップも封じられた格好である。

このままでは危ないと影夫が助太刀をしようと思った瞬間。

ミリアは天性の勘の良さのなせる業か、はたまた闘争本能によるものなのか。

上半身を前のめりに傾けて、そのまま正面のリカントに向けて倒れこんでいた。

「ややああっ！」

「ガッ!？」

予想もしないミリアの動きに、リカント達の爪は空を切る。

それと同時に、勢いをつけて倒れこんだミリアの頭が、リカントの鳩尾へとぶち当たり、その動きを止めた。

咄嗟に頭部に暗黒闘気を込めたことでその一撃は想像以上に重く、リカントは悶絶する。

「あはっ」

ミリアは無防備になったその腹に、右手を突いてニタリと笑みを浮かべた。

「イオー！」

悲鳴を上げる暇もなく、リカントは爆殺死体と化した。が、近距離でイオを使ったことにより、ミリア自身もダメージを受けて後ろに吹き飛ばされた。

「あぐっ……いたあ……」

攻撃と後退を同時に実現したファインプレーで、ミリアに不利だっ

た超接近戦から再び、数メートル離れて対峙しあう戦闘距離へと戻すことが出来た。

「乱暴だけど凄いな。でも大丈夫か？」

「ぜんっぜん平気！」

残る4体は、無傷で健在。

イオの衝撃の影響ですぐに立ち上がることができないミリアに向け、彼らはいっせいに突進してきていた。

「回復は？」

「いない。1人でたおすもん！」

ミリアは意地になっっているようだ。

苦笑しつつも影夫は本当に危なくなつた際の助勢にそなえて押し黙った。

「足が動かなくなつて！」

ミリアは影夫の凶手を操作して地面を勢いよく叩き、数メートル上空へと身体を躍らせた。

「暗黒魔弾！」

ミリアは上空から暗黒魔弾を撃ち下ろすことで、リカント1体の頭部を吹き飛ばして仕留めつつ、反動を利用して落下位置を調整する。

「死ねえ！」

自由落下の勢いのまま、側にいた1体の肩の上に着地して、その首をおおばさみの刃で挟みこみ、その首を斬り落とした。

「ギャオオオ!!!」

「ガアアッ!!」

「あぐっ!？」

首を失つて地面に崩れ落ちるリカントとともに、ミリアは地面にへたり込んで膝をつく。

そこに残る2体が、仇討ちとばかりに大きく腕を振り上げ、必殺の爪撃を繰り出した。

「オグッ!？」

今度こそ攻撃が直撃すると思われたが、間一髪。

ミリアはリカント達の懐に向け、凶手の刃を伸ばしてその心臓を串

刺しにしていた。

「はあッはあッ……！」

「ホイミ、ホイミ、ホイミ、ホイミ！」

身体中に傷を作ったミリアに影夫は慌ててホイミ連発をかけて彼女の傷を癒していった。

「ああッ、滅茶苦茶ハラハラした。最後の攻撃なんて間に合わないかと思って心臓が止まるかと思ったぞ」

「ふう、はあ……う、ん……でも何とか、いけたあ」

「すごいよミリア。本当に一人で勝っちゃったな」

「えへへ、ちよつと疲れたけど、このくらいとーぜんだよ」

「よくがんばったよえらいな」

「えへへ！」

影夫に褒められたミリアは、無邪気な笑みを浮かべて照れくさそうに喜んだ。

「な、なんだああの子……一気にリカントどもをかたづけちまいやがった」

「シスターが呼んだ救援か？」

「それにしちやくるのが早すぎだろ！」

「あんな子供なのに、異常じゃないか？」

「黒くて物騒な腕みたいなものとか、でっかいはさみ……ちよつとおっかないよな」

ミリアと影夫をよそに、村人達は顔を見合わせひそひそ話をしていた。

助かったのはありがたいが得体の知れないのが出てきて困惑しているのだ。

「おいアンター！ いったい何者だ!!」

「……………」

村人達が走り寄ってきて話しかけてくると、ミリアはビクリと震える。

疑わしい表情で警戒をしながら見つめられて上手く声が出せないようだ。

「あ……う……」

「あ？ なんだって？」

「おい、やっぱり怪しいぞ」

「ああ、なんか変な感じがする……油断するなよみんな！ 囲め！」  
「く、くる、な……！」

複数人に囲まれてあびせかけられる敵意に身を震わせるミリア。

このままではまずい、と影夫は焦る。またいつかのフラッシュバックが起こればトラウマを思い出して、暴れてしまうだろう。

あわてて影夫がミリアの身体を操ろうとした次の瞬間。

ミリアが不意に何か柔らかいものに抱きつかれた。

「ミリアさん！ クロスさん！ 大丈夫ですか!？」

「なんだあつ!? ってさっきの姉ちゃんじゃないか!」

「黒いのが、しゃ、しゃべったー!!!」

「さては魔物か!？」

「シスター離れろ!」

「違いますッ!!」

村人が影夫に武器を向けたのをシスターが即座に怒って止めてくれた。

影夫は心底ほつとする。ミリアの心は不安定であり、感情の沸点が低いから刺激をすることはやめて欲しい。

「このお方はガーナの勇者ミリアさんです！ そしてこちらの黒い方は、勇者さまと共に戦う伝説の武器さまなんです!」

「ええー!？」

「本当かよ?」

「いや、俺は行商人が話してたのを聞いたぞ!」

「つてことは、本物……?」

(ナイスだシスター!)

影夫は内心喝采を送りつつも口を開く。

ふてぶてしくも不機嫌に言葉を並び立てていった。

「やいやいやいてめえら!! ひでえ誤解をしゃがって! このインテリジェンスアームズたるクロスさんを魔物扱いとはふてえやつらだ



ぜ！ 俺はなあ、神が作りし伝説の逸品なんだぞ!!」

「そうです！ 助けてもらったのに武器を向けるなんてひどいですよ！ 反省してください！」

「それにしろよ！ ミリアはよお、傷だらけになっても皆を助けようとした女の子の勇者さまだぞ！ 人が勇者を信じられないとは世も末だなあおい！」

「う……す、すまない……おふたりさん」

「俺たち疑り深くなっちまってたようだ……」

シスターの尻馬に乗って、罪悪感を煽る言い方で反論を封じる。これですっかり信じてもらえただろう。

村人から信頼されているらしいシスターの口添えとそれを裏付ける噂もある。これでもう疑われることはなさそうだ。

「ところでよお、リカントはあれで最後か？ まだいるならこの勇者ミリア様と伝説の武具クロスさんに、どーんと頼ってくれよ！」

「あ、ああ。襲ってきたのはあいつらだけだ」

とそこに、一人の男が駆け込んできた。

「シスター来てくれ！ イアンのやつが死にそうなんだ!!」

「いまいきます!!」

「俺達も行くぞミリア！ 役に立てるかもしれねえ！」

「……………」

影夫の言葉にコクン。と首を振ったミリアはシスターの後を付いていった。

「う……」

「ホイミ……」

シスターの手に淡い光が出て、地面に横たわるイアン青年を回復させる。

しかし、傷口がかなり深くて内臓までを傷つけているため、回復しきれなかった。

ベテランの僧侶や賢者でもなければ、傷口と体力を同時に回復させることは出来ない。

傷が深すぎるために、ホイミで少しずつ治している余裕もなさそう

だ。ほとんど呼吸が止まっていて心臓も今にも止まりそうなのだ。

「っ……あ」

「しっかりして！ ホイミ」

シスターは懸命にホイミを掛け続けるが状況は変わらず悪化していつている。

「勇者さま、どうかお力を……私一人では」

「おっと。俺がやるよ。ミリアは回復呪文は扱えねえんだ」

ミリアにすぐるシスターにそう答えた影夫が、ミリアの肩から黒い影手を生やして伸ばし、イアン青年にかざす。

「お願いします、クロスさん……」

その光景に村人はぎよつとするが、シスターが信頼しきっている様子を見て、何も言わず治療を見守った。

(こりややばいな。ふたりがかりのホイミでもたぶん……)

「ああ。とっておきを使ってみるぜ」

未だ成功はしたことがない呪文ではあるが影夫には今の自分の力量では出来そうだと感じていた。それを使う。

「地にあまねく偉大なる癒しの精霊たちよ。その大いなる癒しの力を我に分け与えたまえ……べホイミ!!」

まばゆい光が影夫の手から放たれ、イアン青年の傷を急速にふさぎ、治していく。

「ぐ……やべ」

「クロスさん!？」

多少ではあるが影夫の力量は及んでいなかった。

力量を超える高度な呪文は反動をもたらす。ホイミ数発分あつたはずの魔法力が急速に枯渇していき、強い疲労感が蓄積していく。

「あ……ぐ……」

だが、呪文の失敗は目の前の人間の死を意味する。影夫は苦しくともやめるわけにはいかない。

「残りの魔法力全部もっていけえー！」

身体の中から搾り出すように魔法力を出し切り、どうにか詠唱を終える。

それと同時にベホイミは無事成功し、イアン青年は穏やかな呼吸をし始めた。

「あくくもうからっぽ。なんにもでねえ」

「すげえ！ イアンが助かった!!」

「勇者様と伝説の武具様万歳！」

「良かった。本当によかったです！」

村人たちは抱き合って喜びあっており、シスターはうれし涙を浮かべてミリアに抱きつきながら、影夫の手に頼りしている。

「あ、あんたたち本当にありがとう！ さっきのお詫びも兼ねてぜひ歓迎させてくれ！」

そんな中。イアン青年にすがりついて喜んでいたおっさんが、地をこすり付けんばかりの勢いで感謝を伝え、歓迎の宴に誘ってき

た。

（お兄ちゃん、どうするの？）  
（まあちょうど夜も近いし今日はここで泊まっていこうぜ。うまい飯もくえるかもしれないしな）

（もう……お兄ちゃんはちよつと何にでも首をつっこみすぎだよ）  
（う……まあしようがないだろ。ほつとけないんだから）

「じゃあお世話になるぜ、よろしくな」

「聞いたかみんな！ 村をあげて勇者さまを歓迎するぞ!!」

「オーー!!」

## 好色

そして夜。返り血で汚れた服や身体を小綺麗にして、影夫とミリアは村の宴に出席していた。

キャンプファイヤーのような巨大な焚き火を囲んで村人達が輪になり、最上位の上座にミリアが座っており、その横にはいかにも肉体系といった感じのマッチョで渋い村長が座っていた。

影夫はというとミリアの首元に顔を覗かせていた。さすがに魔物そのものにはしか見えない真の姿はさせないので装備品っぽくミリアにくつついているのだ。

ちなみに、ミリアの横には侍女のようにシスターがついており、世話係ということになっていた。

仮にも聖職者を使用人扱いにしてもいいのかとは影夫は思ったが、シスター自身が望んだことらしい。

「勇者ミリア様と伝説の武器クロス殿。今回は本当に世話になった。心ばかりのお礼ですまないが、楽しんでほしい」

「んー、出来ることをやっただけだから、そんな大げさに言われるほどじゃねえって。なあミリア」

「……………ん」

影夫の言葉に合わせてミリアがコクンと首を縦に振る。

「いや、息子イアンを助けてもらったのだ。感謝に堪えない。そもそも村が襲われたのはイアンが彼らの縄張りに入り込んだのが原因なのだ。もし死んだとて自業自得だ」

「そうか……………イアン君が」

「うむ。だが、目の前であいつが死に掛けているのをみると涙が止まらなかったし、助かった時には心から嬉しかった。あの馬鹿の所為で村人全員が死ぬところだったというのに」

「まあ親っていか家族ってのはそういうもんだと思うぜ。もつとも、罰はきつちり与えないとダメだとは思うがな」

「それよりさつさと宴を始めようぜ！ 村の皆もそのほうがいいよな！？」

演技口調で影夫はしんみりムードを吹き飛ばすように、周囲を煽る。

すると、『そうだそうだ』『早く食わせろ』『勇者様を餓死させるつもりかー!』などと村人達がはやし立てる声が返ってきて俄かに盛り上がり始めた。

「おほん。歳をとると話がなくなっていけませんな。それでは……勇者ミリア様と、クロス殿に乾杯!」

「かんぱーい!」

村の代表として、村長が乾杯の音頭を取り、宴が始まった。

「さあさあ! 勇者どのお飲みください! 果実の搾り汁です!」

「う、うん……」

「リカントの丸焼きもそろそろ食べ時ですよ!」

「あ、ありがと……」

ミリアは次々に食べ物や飲み物を持ってくる村人相手に気圧されつつも、それらを受け取り、食べ始めた。

なお、仕留めたりカントの死体はすべて村に寄付した。宴の負担もあるだろうし、今回のことで被害も出たであろうから。

その代わり、ここに来るまでに倒したモンスター達の皮や素材を村の物資や金と交換してもらったから、お互いに損はない。winwinの関係のうちだろう。

「むぐ……おいしい」

人見知りで人間不信状態であるミリアも、食べ始めるととたんにエンジンが掛かる。

鬱憤や疲労を吹き飛ばすかのように猛然とした勢いで肉にかぶりついてはスープを飲み干していった。

「んがごくぱくむしやんぐごく……!!」

「おお! すごい食べっぷりだ!」

「さすが勇者さま! 豪快ですなあ」

「おい! いっぱいあるんだとん焼けよ、果実汁もあるだけもつてこい! 勇者さまにひもじい思いをさせるな!」

「はい！ 村の名誉にかけて！」

ドツワハハハと村人たちは笑い騒いでいる。

ミリアはその食べっぷりと飲みっぷりで、何度も皆を沸かせ盛り上げていた。

どこの世界、いつの時代も大食いや早食いの類は盛り上がるらしい。ミリアはフードファイターとしても一流の実力者だ。

「クロスさん……は食べないんですか？」

「んあ？ ああそうだったな。ぼちぼち俺も食っていくか……ってこらミリア、頭を揺らすな！ これじゃあ食えないだろ！」

夢中で食物を口に放り込んで食っているミリアの首ではとても落ち着いて食事はとれない。

「んぐんぐあむっ！」

「やれやれ聞いちゃいねえなあ」

「あの、クロスさん、よければ一時的に私に移ってくればいかがでしょうか？ そうしたら食べられるかと思えます」

「え？ いいのか？ お、俺みたいなのとその、肌が触れ合うことになっちゃうけど。い、いい、嫌じゃない、かなあ？」

実はこのシスター。大変な美少女である。

艶やかなロングの黒髪を清楚に束ねた地味だけど清潔感のある髪型。

整った顔立ちだが、ふわっとした柔和な表情をいつも浮かべている。

ゆったりとしたシスターローブのおかげでわかりづらいが、女性として出るべきところはしっかりと出ており、清楚系アイドルにでもなれてしまいそうな魅力的な美少女である。

そんなシスターからの思いがけない提案に、影夫は途端にしどろもどろになってしまった。

若くてピチピチな女の子と肌を触れ合う！ そう意識して影夫はすっかり舞い上がってしまった。

「ふふふ、嫌などとんでもない。私と村の恩人のお方ですから」

「そ、そそうかあ？ じゃ、じゃあ……」

影夫はしゆるしゆると姿を変えてシスターの首元へとぴったりと身体を這わせる。

「ん……あん……」

ひんやりとして肌に染みるような独特の感覚にシスターが吐息を漏らして身体を震わせた。

「ただ、大丈夫？ い、嫌ならすぐっ、退きます……」

「ありがとうございます。でも少しつめたくて声が出ただけですよ」

影夫はすっかり前世のヘタレぶりを発揮していた。

シスターは若い。前世でいうところの女子高生くらいの歳に見える。

年上趣味である影夫だが、充分に守備範囲内の女性だ。恋愛対象としても、などと意識をしてみ、彼はガチガチに緊張していた。

今までの反応から、好感度は高そうだ。

しかもだ。

今の影夫は、ちよつと痩せ気味のオークみいだった前世の醜い身体じゃない。

今までミリアと一緒に過ごす中で、ミリアが影夫の容姿に引いたり嫌がることはなかったし、小言を言われることもなかった。

まあ、家族のような関係という補正があるので割り引く必要があるだろうが悪くなさそうだ。

生まれ変わって得たこの身体は意外と女受けがいいのかもしれない。

ということだ。今まで諦めきっていたことも、もしかしたら、もしかするのだろうか？

そのことが脳裏によぎった影夫はもう止まることができなかった。

次々に都合のいい空想やIFを考えてしまう。

上手くいけばお付き合いから結婚したりしちゃうかもしれない。

あの、夢にまで見た彼女や嫁がこの手に!?

告白は、人気のない大きな木の下でして……その場で実は私もなんてOKしてもらえてはじめてのキスしちゃったり。

その後付き合い始めたふたりだけど距離感が掴めなくても離れられなくて手を握るところから先に進めなくて……でも夏の夜に勇気出した彼女から夜のお誘いを受けて……!!

ひとつになった後で、責任はとるよなんてプロポーズして、結婚して子供は3人で……いつまでも仲がよくて……。

きやつきやうふふな空想から人生の展望まで際限なく影夫の脳裏を駆け巡りつづける。さながら妄想ビツクバンだった。

30過ぎた童貞中年の気持ち悪さが大爆発。

中学生レベルで停滞したままの恋愛感を、15年以上も煮詰め続けるようになるかといういい例だった。

「そそそそうかい？ そ、その、痛かったりしたら言ってるね？」

「はい……ん、ふう……」

そうするうちに影夫は移動を終えてシスターに貼りついた状態になった。

(う、おおおおお、おおおお、こ、これが若い女の子の肌のかんじょくうううう!!)

(あ、あああ温かくて柔らかくて吸いつくようであ、すべすべしててえ、ふおおおおお!!)

「わ、わが生涯に一片の悔いなし……」

「ク、クロスさん……?」

「あ!! な、なんでもないよ。えっとそのあの……あう」

「くすくすくす。そんなに慌てなくて大丈夫ですよ。さあどうぞ……」

「ど、どどどどどどうぞ?! え? ええ? わ、わわわたしををた、たべべべべべ!」

完全に乗り移った目的を忘れた影夫が、あらぬ勘違いでパニックまくっていた。

「? あ、すみません。私がお取りしたほうがいいですよね」

「へ? あ。ああつ、そ、そうです。お願いしますっ」

「えっと……はい、アーンしてください」

シスターはキモくキヨドル影夫の様子を天使の天然ぶりでスルー



して、彼の食事の世話をし始めた。

（お、おとおおとおおとおおあ。あーん。あーんですか。女性からのあーん！　これがキモ男には決して許されないという伝説のあーん!!）

「あ、あああああーん」

「もぐ……う、美味しい、うう……せ、世界一美味しいです……生きててよかったあ。でも、今死んでもいいです……この幸せが永遠になるなら……」

「おおげさなクロスさん……」

口を手をあてて、柔和に微笑むシスターの笑顔は影夫をさらに魅了してしまう。

30代の影夫は心の隅で自分なんかじゃダメだと思いつつも青い果実の甘い匂いと感触にデレデレのスケベオヤジ状態だった。

「クロスさんって普段は女性にお優しいしやべり方をするんですね」

「え？　なにがですか？」

「ほら。今話してるみたいですよ。紳士なんですね！」

非モテを極めてきた影夫は、女性に優しくされながら好意のそぶりを見せられるとほんとうにもう、ダメだった。

イッパツで好きになってしまう。コノ人だったら自分を受け入れてくれるんじゃないかってすぐ期待して甘えたくなくなってしまふ。

「そ、そうですか？　でも当然のことです、女性を守るのが男の役目ですから！（キリッ）」

JKという言葉が影夫の脳内にリフレインして、天使のようなJKという奇跡的な存在に出会えたことを感謝した。

そして下心丸出しの気持ち悪いことをドヤ顔で言い放つ。

現代なら嫌悪か嘲笑の的であろうが、素朴な時代の純朴な女性には真面目な紳士としてうつつたようだ。

命の恩人であるということも大いに関係しているであろうが。

「クロスさんは本当に素晴らしい方ですね。はい、もうひとつどうぞ……あーん」

「あーん、でへへへへ。も、もっと食べたいかなあ……あ、あーん」

ん」

「はい、たくさんどうぞ」

影夫はもう調子に乗り出してシスターに甘えていた。

じぶんからアーンを要求し、口に運ばれるお肉をもきゅもきゅと頬張る。

女性の肌を感じながらの食事。生まれて初めて味わう夢のような体験に、これ以上ないくらい完全に舞い上がっていた。

「も、もつとお、もつとください……あーっーん」

「はい……あつ、そんなに一度にたべては……」

「あーっーんっ、ぐへへ、んぐ!? んんっーっ!」

涎も垂れんばかりの蕩け顔で肉の塊を一度に口に入れてしまい、中で痞えてしまう。

影夫の口は、某猫型ロボットの四次元ポケットのように入り口が狭くても中の空間にすっと入っていつてしまう謎の構造になっているが、本人が半分寝ぼけていたので、詰まってしまったのだ。

「たいへん! 早くお飲み物を……んっ……あん」

シスターはあわててワイングラスを首に当て、傾けてくれる。

口からコクコクと影夫は飲んだが、シスターも慌てるあまり液体を零してそれは胸元へと垂れおちてしまう。

「おつと。いけない……っ」

「あ、クロスさん……そこは……はあん」

影夫はもつたいたない精神と、女性の肌を汚してはいけないという思いつから咄嗟に身体を這わせて垂れ落ちた液体を舐め取りに服の下にもぐらせてしまった。

「へ……? あ?!」

あつ。と気付くと彼は桃源郷に到達していた。

ぷるぷるとして柔らかでなだらかなふたつの山。

その山を半ばまで登頂しかけてしまっていた。

(あたためた? ……こんにやくゼリー? いや、それよりもぷるんなめらかで少し弾力は弱い? でもすごく、ここちいい……)

「お、おとおお……っ!」

(やわらかくてあったかくていいにおいで、あまくとろけてこのままとけてしまいそうだ……)

「あ、あんっ」

思わず力をこめると、ぷるんたゆんと豊かな乙女の肌はゆれて形を崩す。

そこで影夫は正気を取り戻した。

「あ、あわわわわわ、ちちちち、ちがちがちが、こ、こここここれは誤解なんです、決していやらしい意図ではなくてあのそのー!」

「い、いえ……大丈夫です……」

「あああああつ、ご、ごめんなさい! 嫌わないで、なっ、なんでもしますからあ!!」

キョドリまくって、土下座の勢いで謝りまくる影夫。

と、その時。横から声が掛かった。

「おー兄ーちやーん?」

「ひい!」

その声の方をみた影夫はすくみ上がる。

髪の毛を逆立たせた鬼がそこにはいた。

「な、に、を、し、て、る、の、かなあ?」

「ミ、ミリア!? こ、こここれはだな、た、ただご飯を食べていただけだ!」

「ふう、ん……お兄ちゃんのごはんって、おっぱいなんだあ? お兄

ちゃんって、赤ちゃんだったんだね?」

「うぐっ!」

オツパイをまさぐったことは見事に見られてしまっていたらしい。

「か、勝手にわたしからはなれて、他の女の人のおっぱいでデレデレして!」

「あわわ」

「わ、わたしのことは子ども扱いするくせに! シスターさんならいいんだあ。へええ」

「ちが」

「お、おつきなおっぱいが好きなんだ? そうだよねえ、わ、わたしの



## 告白

「……オハヨウ、オニイチャン」

暗い闇の中にあつた意識が、地獄から響くような恐ろしい声で呼び戻される。

「う、うあああつ!」

跳ね起きた影夫が身を震わせると、そこはベッドの上だった。

「ク、クロスさん?」

「へ? シスターさん。こ、こっちは?」

ベッドの脇の椅子にはシスターさんが座っていて、ビックリした表情で影夫を見ていた。

影夫は、ミリアに気絶させられたときは首元にくつついていた状態の姿だったが、今の格好は普段の姿……魔物の姿だった。

「おはようございますクロスさん」

「あ、おはようございます。えつと……シスターさん」

「あ、私の名前はリースと言います。それとここは教会の救護室です」  
「り、リースさん……この姿は、あの……」

わたふたとあわてる影夫だったが、リースは軽く首を傾げた後、感心した風にのんびりと口を開いた。

「クロスさんって、人間みたいな姿にもなれるんですね」

「あ、ああーそう、実はそうなんです。どんな形にも伸縮自在が売りの成長する万能の武具なんですよね。だから人間っぽくなるのだから朝飯前です!」

「どんな形にもって、本当にすごい伝説の武具様なのですね、クロスさん」

柔和に笑うリースの表情には、一切の疑いも敵意も警戒心もない。シャドーという影夫の見た目にそっくりな魔物を見たことがないのか、それとも魔物の姿形でも、悪い存在ではないと心から信頼してくれているのだろうか。

(よく考えたら、リースさんの歳から考えたら物心ついたころには平和な時代だもんな。そこらに生息する野良魔物ならともかく、シャ

ドーみたいな変り種は見たことがなくても普通か)

ともかく内心ほっとする影夫であった。

「それで、お体は大丈夫ですか？ 昨日は派手に飛ばされてしまったから凄く心配していたんです。痛みがあるところなどはありませんか？」

そつとリースが影夫の手をとって心配そうな表情を浮かべた。

若い女性にあまり接してこなかった影夫は、リースの仕草と言動のすべてにドキドキしてしまう。

(あつたかいなあ……それに、かすかにいいにおいが……)

「だ、大丈夫です」

「よかった……」

変に意識した影夫が緊張にガチガチになった時。ミリアが駆け込んできた。

「起きた？ お兄……あー！ またくつついてる!？」

リースにすがりついていた影夫を見るなり、ミリアの目元が吊りあがり、怒ってますとばかりにビシツつと影夫を指差した。

「お仕置きが足りないみたいだねお兄ちゃん！ ふふふふふ……お兄ちゃんには、ツンデレ虚無娘流の駄犬躰術が、ひ、ひひ、ひつようかしらあ!？」

「ひいいい、か、勘弁してくれえ!!」

「ああっ!?! もっとくつついた!?! うううー離れて! くつついちやダメええ!!!」

脅えた影夫は思わず側のリースに身を寄せてくつついてしまう。

それを見て、さらに半泣きで怒るミリアに掴まれた影夫は力づくでリースさんから引き剥がされ、全力で抱きしめられた。

「いででで!! お、おちつけミリア! その、これはだなあ、アクシデントであつて! いわゆる一つの不可抗力ラッキースケベなんだあ!」

「お、お兄ちゃんは私のものだもん!! 他の人にくつついちゃだめなの!」

「な、なんだよそれ! お、俺だつてなあ、あ、相手が許してくれるな

ら、可愛い女の子とお近づきになりたいぞ！」

「もう何よ！ お兄ちゃん最低！ JK好きの変態オヤジ！ ブルセラマニア！ 変質者!! 変態！ 変態！ 変態!!」

「ぐはあッ！」

影夫は自らが吹き込んだ知識で心に大ダメージを負った。

何故自分は年端もいかぬ少女にそんなかわしい言葉と知識を教えてしまったのか。影夫は深く後悔しながら、胸を押さえようなどれる。

「ごめんねミリアちゃん。お兄ちゃんを取ろうとしたわけじゃないのよ」

「……………う——」

影夫が撃沈してからしばらく、宥めようとするリースと兄を取られまいと警戒するミリアの間で緊迫した空気が流れていた。

「お、おちつけてミリア。リースさんは何も悪いことはしてないんだ」

女性経験に欠け、デリカシーのない影夫はリースの肩を持つような言い方でミリアを宥めようとしてしまい、ミリアの感情を決壊させてしまった。

「な、なんでお兄ちゃん…………その人ばかり…………！」

「お、おいミリア？」

「やだあ…………お、兄ちゃん、とらないでえ…………えぐっ、お兄ちゃん…………すてないでえ」

「ば、ばか！ 俺がミリアを捨てたりするはずないだろ！」

深く傷ついてしまった様子のミリアに慌てふためく影夫。

「俺達は家族なんだからな、何があっても捨てるなんてありえないよ。ミリアが嫌がっても、ずっとくっついていくくらいに思ってるんだからな！」

「ぐす…………ほんど？」

実体に戻り、抱きしめながらミリアの頭を撫で撫でする。

こうしながら言い聞かせるくらいしか影夫にはなす術はない。

「も、もう離れないでいてくれる？」

「あ、ああ……わ、わかったよ」

「他の女の人にデレデレしない?」

「え!? それはむずかし」

「えぐ……ふえ」

「あああああつ、わかつたしない! 大体この身体じゃだいたいナニもデキないしなあ! ミリアの側にいないと俺きつと死んじやうし……もう二度とデレデレなんてしないよ!」

「ほんと?」

「う、うんうんもちろん! だ、だから泣くのはやめてくれよ。な、なんでもするからさ」

「うん、ぐしゅ……」

ようやく落ち着いたミリアの様子にほつと安堵の息を漏らす影夫。

リースが微笑ましいようなものを見る目でふたりを見ていた。

「ミリアちゃんはクロスさんのことが大好きなんです。本当に大事な絆で結ばれている家族……素敵だと思います。私は孤児で家族はいませんけど、私にもいつか……そんな人ができればと思います」

おだやかな笑顔でそう言う。

「あ、れ? リース……さんは、お兄ちゃんのことってどう思ってるの?」

「? クロスさん、ですか? 好きですよ。もちろんミリアちゃんのことです。私を含めたこの村を救ってくださった大切な恩人ですもの」

「じゃ、じゃあ! お、男の人として好きなわけじゃ、ないの?」

「??? クロスさんは武器さま、ですよね?」

至極当たり前のことだが。

影夫は恋愛対象の異性として認識などされていなかった。

自らを伝説の武具とのたまう御仁に、種族の垣根を超えて簡単に惚れてしまうチヨロインなんて存在するはずがなかった。

「あ、あああ、そ、そうですねー。あはは、あはははは。いやあそりゃあ、い、いい人間の男性がいたら幸せな絆もつくれちゃいますよねえ。ひ、ひひひ非人間相手なんかじゃなくってえー」



わかっていたのに。

こうなつて当然なのに。

期待した自分が馬鹿で愚かで間抜けなのに。

勝手に舞い上がっていた影夫の心は勝手に奈落の底へと落ちていった。

「ははははは……」

馬車の御者台。

そこにはどんよりと陰鬱で不穏な雰囲気を漂わせる一匹の魔物――影夫がいた。

「え、えつと……お兄ちゃん……その……」

「いいんだ。そういう事を変に期待した俺がウルトラバカだったんだ」

身体を折りたたみ、膝を抱えるような格好でいじけきっている影夫。

「そうだよ。前世で散々思い知ってたつてのによ、優しくされたらすぐこれだよ。舞い上がって期待して凶に乗って勝手に落ち込んで。ははは。マジ笑えるよな」

ぶつぶつと口走りながら乾いた笑みで自嘲する。

「こつちにきてさ、俺は太った中年じゃあなくなっただけだし、人間でもなくなっただよな……そりゃ女性に相手になんかさされるわけねえよなあ」

すすけた背中中、うなだれながら、黒い雰囲気をもわもわと放つ。

影夫はあの後、村長に出立の挨拶をしているときも、村人に見送られて村を出るときも、村を出てからも、ずっとこの調子であった。

「はっ。死んでも直らねえってやつ？ 死ぬ前も死んだ後も俺は女性に相手にしてもらえない、好きになつてもらえない星の元に生まれてきたんだからよ」

「まあしょうがねえよな。女性はよお、俺なんて非リアで間抜けで調子乗りの中年なんか触れちゃあならねえんだ」

「女性ってのは、すげえ尊いんだ。綺麗で優しくて美しくて情に溢れ

てて心が強い。ただの女である時も、母になった後も、年老いてからすらも。女性は、ほんとうに素晴らしいんだよ」

「だからさ、俺が相手にされないのも当然のことで、神聖さを穢さないために必要で当然なことなんだよな。世の中上手くできてるよ。俺は一生女性との恋愛に縁はないんだろうけどしょうがないんだ……運命なんだよ」

ズンズンと被害妄想をいつまでも延々と垂れ流し続け、話のスケールを世界レベルにまで広げる影夫。

とにかくこと女性に関しては豆腐メンタルの極みである彼はウジウジと自虐しながら正当化していた。

「お、お兄ちゃん！ わ、わたしは違うよ、お兄ちゃんのこと好きだもん！」

「今はな……もつと大きくなったらミリアだつてきつと、俺のことなんて……嫌いになっちゃうよ」

「そんなことないよー」

「加齢臭くさいとか、超キモいんだけど。ウザ！ とか、ちよーありえないんですけどーとかいってさ、やっぱイケメンっしょーって感じのイマドキのスィーツギヤルになっちゃうんだあ！ う、ううう……捨てないでえ、ミリアあ」

影夫は被害妄想を爆発させてミリアに泣きついた。

小さな女の子にすがりついて甘えて泣いている30代は、色々と終わっていた。

「だ、大丈夫だよ、わたしはぜったいそんなことしないもん」

「あ、ああああ……ミ、ミリアああ……」

ミリアはいつも影夫がしているように撫で撫でしながら優しく慰めてくれる。

影夫はミリアに天使を感じてありがたやありがたやと拝み倒す。

「それに、わ、わたしなら、い、いつでもその、お、女としても、い、い、いっていかあ……」

「へ？」

「ぱ、ぱばとままも、はだかできつついたりして……好きな人同士っ

て、あ、ああいうこと、するんでしょ？ い、いいよ……」

とんでもないミアアの発言に影夫の頭はパンクした。

すがり付いて泣いたり、捨てないでと懇願したものの、影夫は子供に本気で発情するほど危ない人間ではない。

影夫の肉体的に無理だとはおもうが、万一出来たとしてもそういう行為をミアアといたすつもりはまったくくない。

「ダメだダメだミアア！ 俺は紳士なんだ、例えキモオタの変態でも変態という名の紳士なんだ！ イエスロリーターノータッチ！ それが世界の掟なんだ!!」

「お兄ちゃん……わたしのこと、嫌いなのか？」

「ぐ、おおお。な、なんという破壊力!？」

刹那の一目惚れだったとはいえ、失恋直後でさびしい影夫は、ちよつと胸がキュンとしてしまう。

「ミアア……」

「お、お兄ちゃん……」

影夫はゆつくりとミアアの肩を掴む。

ミアアも影夫を見つめ……

「えっと。俺を慰めるための、冗談だよな？」

「本気だよ！ わたしお兄ちゃんが好き！ だから……」

そういつてきゆつと目をつぶるミアア。

そのしぐさと言葉に真剣さを感じて、適当に茶化して場をごまかさうかと思っていた影夫も、真面目に答えることにした。

「ミアアはさ、まだ小さいんだ。自分じゃ大人だっと思うかもしれなけれど、心も身体もまだ大きくなっていく途中で、未発達なんだ」「……………」

「えっと、だからな、そういう男女のことにまだミアアの心と身体は耐えられないんだ。しちやだめだし、させちやだめなんだよ」

「で、でも……」

「俺は、しないよ。ミアアが嫌だからじゃないよ。逆なんだ。すごく大事だから、酷いことをしたくないんだよ」

「やだよわたし……大人になるまでなんて待ってたら、他の誰かに

「……お兄ちゃんとられちゃうもん」

「そんな物好きはいないと思うけど……分かったよ。じゃあミアアが大人になるまで、俺は他の人とそういうことはしないって約束するよ」

「やくそく……」

「うん。だからぜんぜん焦らなくていい。大きくなっても、まだミアアの気持ちが変わってなかったら、その時にまたそういう話はしような？」

「うん……」

ミアアは子供だ。それに、寂しさや失った家族を求めるように、強い依存を影夫にたいしてしている。

好きという感情は本当だろうが男女のそれではないだろう。依存した相手から身体を捧げると言われて受け入れるのは卑劣極まりない行為だ。

だからといって、ミアアが抱いている気持ちはまやかしなんだと頭ごなしに否定するのは間違いだとも影夫は思う。

例えば状況がそうさせたんだとしても、ミアアが感じて想っていることは彼女にとって間違いなく本当のことなのだから。

それを否定することは、ミアアの人格を否定することだ。

ミアアは不幸にも傷つけられて心が歪んでいるのだろうが、その歪み込みでミアアなんだから。

今の彼女の気持ちを認めた上で、傷が癒えるのをゆっくりと待つべきだと影夫は思っている。

(ああでも、これだと光源氏計画みたいだな)

そういえばかなり昔のネットのニュースで実際にそんなことをしようとした男の話があったのを見ていた。

実にキモいやつがいるなあと思っていたがそれは今の自分にも当てはまりかねないと自戒する。

ミアアの意思を最大限尊重し、無理強いはもちろん、誘導にならないように注意しようと影夫は思った。

## 勇者編

### 成金

「ベンガーナの街に到着！」

街の入り口には見張りの兵士がいたが特にトラブルもなく街へとはいることが出来た。

さすがに小さい少女の一人旅には驚かれ、心配されたものの、多忙で苦しい村のために健気に独りでお使いをする少女という設定で影夫は演技してのりきった。

何度か言葉が何度もつかえたが、その年齢と大役の所為だと思ってくれたのか見張りの兵士はすっかり騙されてくれた。

その上、何かの足しになればと賓客身分の証明書類までくれた。

これは本来、外国のお金持ちなどに渡すものらしい。そんな適当に渡してしまっているのだろうかと思つたが、身元の証明証とかではないし、これでツケがきくわけでもない。

この人はベンガーナが認めたお金持ってる人だよ。くらいのもものらしい。あまり意味がない気もするが、もらえるものはもらっておいた。

『じゃあまずは宿をとるかー』

「うん」

馬車を預けたふたりは街中を歩いていく。

街中では影夫は姿を見せるわけにはいかないので、ミリアと一体化している状態だ。といっても合体ではなく、乗り移った上で操らないし意識を奪わない状態といったところか。

ミリアの顔や肌の一部に暗黒闘気の黒い模様が出てしまうが、まあ見る人が見なければわかるまい。

それにしてもベンガーナの街は大きい。

ベンガーナ王国の首都だけあって、人の賑わいも凄いが大きな建物が本当に多い。

大きな建物がたくさんあるだけに人口の密集具合も凄いものがあ

り、人が多くて道でぶつかりそうになるのを避けて歩いていく感覚は、前世での生活を思い出したほどだった。

「どこに泊まるの？」

『旅の疲れを取る意味でも高級宿でもいつてみるかな。長旅だったけどミリアは頑張ったからご褒美だよ。そこで骨休みといくか』

「わあ、ほんと!? どんな部屋かな。楽しみー」

途中、住人から宿の場所を聞きながら豪華で大きな宿屋にふたりは入っていった。

「きゃあきゃあー!」

ふつかふかでスプリングがきいた高級ベッド。その上で、ミリアは大はしやぎで跳ねて遊んでいる。

「壊すなよ。きつと高いぞ」

(つていうかこの世界にはバネがあるのか。村の馬車についてないからてつきりないかとおもってたけど少数生産はできるのかも?)

「はーいー!」

ぴよんぴよん跳ねるのに飽きたのか、今度はふわふわの絨毯敷きの床を転がっている。

土足厳禁の部屋なので汚くはない。

さすが超高級宿というべきか床で寝ても快適そうだった。

家具などの調度品も上品だが気品にあふれて高級そうなものばかり。しかも大きな風呂が部屋についている。その上豪華なことに大理石製の。

電気はないが、魔法なんかの応用なのだろうか? お湯が使えるし、室内に明るい照明もある。まるで歴史あるヨーロッパの高級ホテルのようだ。

一泊1000ゴールドの値段は伊達ではないということか。

「うう……セレブになったみたいだ」

影夫は感動していた。

前世ではとてもではないがこんな高級宿に泊まったことはない。

金持ちどころか、中小企業で働いていた彼には無縁だったのだ。テ

レビで高級ホテルや金持ちの豪邸特集を見ては自分との落差に、情けなく惨めな気分になったものだった。

だが、今はその立場にいるのだ。

影夫の所持金は現在42587ゴールド。

旅の道中でも、影夫とミリアは出会ったモンスターをせっせと倒しては、その素材を売り払ってお金を貯めてきた。

その甲斐あって今では所持金は4万ゴールドの大台を突破しているのだ。

「くくく、ききき、かかか……っ！」

日本円換算で大体、4200万円ほどを持っているようなイメージであろうか。まさに大金である。

セレブというには物足りない気もするが、影夫とミリアほどの実力があれば魔物を倒しまくればいくらでも金は手にはいる。

そのことは、モンスターの素材を売る中で気付いていた。モンスター退治はじつに儲かるのだ。

望めば面白いように金を稼げる。

影夫とミリアは立派にセレブの仲間になっていたのだ！

「俺は今、金持ちだ！ 大金持ちなんだ！ ワープアなんかじゃない！！ 唸るほど金を持っていて、いくらでも増やせる大金持ちなんやあーあ」

奇声を発しながら影夫は幸福感に浸っていた。

影夫はいっぱしの欲を持つ立派な俗物である。

親の教育のおかげで、良識があつて自制が利くお人よしであるが、その本性は人間味に溢れているのだ。

だから彼は、『贅沢は肌合わない』とか、『広い部屋は落ち着かない。俺は小さい部屋でいいよ』みたいな、ラノベ主人公が言いそうなお話は言わないし、思わない！！

「前世の金持ちどもお！ くやしいか！ くやしいだろうなあ。ワープア童貞中年に負けたんだからよお！ くやしいのうくやしいのう！！ ぐひゃひゃひゃひゃ！！」

金持ちに対してやつかみと羨望が鬱屈していた分、彼は思う存分前

世の分まで金持ち気分を満喫していた。

「わあ〜す〜す〜い！ 見て見てお兄ちゃん!!」

「んん？」

いつの間にかミリアは部屋のベランダにでて景色を見ていた。呼ばれて影夫もそばに行ってみる。

部屋の広さが半端ではないので、移動もけっこう大変だ。

そんな感慨を抱くと、自分が王侯貴族が暮らすような部屋にいるのだ。ということを実感して、影夫の卑しい心はさらに満たされる。

「あ……すごいな。これは……まさに絶景だな」

「すごい綺麗だよね……」

高級宿は景観のよい場所に建っており、影夫達の部屋は上層階にあるため、街を一望できた。

大都市ベンガーナとはいえ、機械文明都市ではない。影夫の前世の感覚よりも緑が豊富で綺麗な海も見える。

コンクリートジャングルでも、自然一辺倒でもなく、調和の取れた美しい景色だ。

普段なら、人がゴミのようだ！ とネタのひとつでもいって、はしゃぐであろう影夫も思わず押し黙ってじっと風景を眺める。

「ふわあ〜」

ミリアもじつくりと楽しむように景色を眺める。彼女の場合は今までずっと内陸の田舎暮らしだったこともあって、なおさらこの光景は感動的であろう。

「すごいね……」

「ああ……」

芸術的な景色に感動して影夫の心が洗われる。すると先ほどまでの自分の言動がものすごく恥ずかしく感じられた。

（俺ってやつは……俗物と僻みと嫉妬丸出しではしゃいで悦に入ってた……うう……これじゃ前世で死ぬほど軽蔑してた下品な金持ち連中と似たようなものじゃないか！）

（自制しなきゃな。儲かるなら何でもやるような銭ゲバ連中のようになるなんて絶対嫌だ。俺がこの世でもっとも許せない連中のように



は……他人を踏みつけ犠牲にしてあくどく儲けるような存在にはならないようにしよう！)

大きなお金をある程度自由にできる立場になってしまったということは変えられないし、あえて捨てようとも思わないが、良心と人間性だけは失わないようにしよう。と思うのであった。

☆☆☆☆☆☆

「いつてらっしやいませお嬢さま」

執事服を着込んだ白髪で白髭の従業員に見送られ、ミリアは宿を出た。

この人の名前は絶対にセバスチャンだろうな。影夫はそう思った。影夫はお忍びでベンガーナに遊びにきたお金持ち令嬢という設定で宿に泊まっていた。

従者もいないので、心配されたが、ひそかに護衛がついているからなどごまかしつつも、ガーナの街の紹介状やら賓客証明書などをつかって納得させていた。

「今日はどうするの?」

「うーん。ぶらぶら観光がてら街の散策でもするか」

「うん! はやくいこつ!」

「はは。そんな焦らなくても街は逃げたりしないって」

それから影夫とミリアはベンガーナの街のあちこちをうろうろ歩いた。

大通りの屋台で買い食いをしたり、オープンカフェスタイルの飲食店で名物料理を飲み食いをしたり、街の人に名所やお店の話を聞いたりした。

「わあ! これおいしい!」

「これもなかなかいけるな」

串焼きを食べたり、焼きたてクレープもどきを食べたり(ガレットとかいうらしい)、名物店のベリーパイを食べたり。

主に食べてばかりだったが、ふたりは観光を楽しんだ。

影夫は全身を出すことができないのだが、ミリアの手の平に小さな顔を作って食べるなど、工夫をすることで一緒に食事をする事ができた。

「はーお腹いっぱい。次はどこいこつか?」

「そうだなあ。よし。街の南にいつてみるか、目指すはデパートだ」  
「ではーと?」

「お城みたいのでっかいお店だよ。何でも売ってるわ、エレベーターはあるわでもかくすごいんだよ」

「おもしろそう! 南だよね」

「あつ……そっちは」

影夫がとめる暇もなく、ミリアは駆け出して、細い路地の中に入っていく。

「いけねえなお嬢ちゃ……ぐええっ!」

うっかり裏路地に入っすぐ。お約束とばかりにナイフをもった男に襲われかけたが、速攻で影夫が手を伸ばして殴り飛ばして気絶させた。

「てめえ! ぐぎゃああ!」

挟み撃ちを狙っていたのだろう。背後で激昂しながら襲ってきた男がいたのでそいつも影夫が殴って気絶させる。

こうまで迅速にしばき倒したのは、ミリアに任せると凶手で殺しかねないからだ。

さすがに街中で殺人は……相手がいかに悪人であろうがまずいだろう。

過剰防衛扱いになってしまいそうだし。

「殺さないの?」

「街中じゃまずいんだよ。あと何でもかんでも殺すとか言うなよ。まあ強盗か誘拐未遂だから身包み剥いで転がしとけばいいだろ」

「じゃあ、はぎはぎたーいむだね!」

「そういわれると悪いことしてるみたいだな。因果応報を教えるてやっているんだよ、これは教育なんだ。という事にしておこう」

影夫は鮮やかに男のふところをまさぐり、金品を奪った。

そして彼らの服を脱がすとそれをネジって紐代わりにして、彼らを縛り上げていく。

汚い男の裸をミリアに見せたくないのので、彼女の目をふさぎながらの作業だ。

「よし。晒し物にしてやるか」

ちょうど表通りの人影が少なかったので、道の真ん中にWシヤチホコのポーズでおもしろおかしく放置しておいた。

近くには彼らのナイフや盗みの道具なども一緒に転がしてあるから、警備隊に捕まるだろうし、裏の世界ではいい笑い物になるだろう。ここまでするのは、影夫もミリアを襲おうとした連中に対して怒っていたからだった。

「よっしゃ、デパートに急ごうぜ」

「うん！」

背後から聞こえてきた女性の悲鳴と男達の怒声を聞き流し、影夫とミリアは道を急いだ。

## 買物

馬鹿でかいレンガ造りの建物の前で、ミリアがぴよんぴよんはしゃいでいた。

「すごいすごい！ おっきいね！」

『なかなか圧巻だな』

影夫の前世でいうと、大きめの総合スーパーと同じくらいだろうか。

さすがに東京や大阪にあるようなデパートよりは小さいので影夫としてはそこまでの感動はないがミリアにしてみれば見たこともない巨大建築なのでとても楽しげだ。

「エレベーター乗りたい！ はやくー！」

『待て待て。まずは1階からみていこうぜ』

エレベーターの前まで走りだそうとするのと、制止して、案内板を見る。1階から順に上へのぼりながら見ていくのが良さそうだ。

「あれ？ 地下には行かないの？」

『地下は食料品だからな。食いもんはここまでに屋台でつまんじやつたし、食材を買って帰っても調理する場所がないからいかない』

「ふうん。じゃあ今度きたときには寄ろうね！ でもなんで地下で食べ物売ってるのかな？」

『食べ物や食材の中にはけっこう匂いが強いものがあるよな？ 匂

いって下のほうに向かって広がるらしいんだ。だからデパートの上のほうにあると匂いが下の階に漂っちゃうんだ。地下ならそんな心配はないからな』

「うーん。食べ物の匂いだったらおいしそうでいいにおいだけど、ダメなの？」

『お腹いっぱい有的时候きに食べ物の匂いがプンプンすると嫌だし、余計な匂いが商品についても問題だし、魚とか腐りやすかったり嫌な匂いがしやすいものがあるからやっぱり問題なんだよ』

「へえーそうなんだ。お兄ちゃん物知りだね」

『まあな！』

影夫のうんちくにミリアはふむふむと首を動かして感心しきりだった。

影夫も前世で知った雑学がこんなところで役に立つとは思いつつも得意げだ。

「エレベーターは乗らないの?」

『1階はここだぞ。2階にいくときにな』

「えー。ぶう……」

『我慢我慢。まあ早く乗りたい気持ちはわかるけどさ。えっと1階フロアはつと……宝石・装飾品だな』

影夫に促され、ミリアが玄関口のドアからそのままデパートの中へとはいると、ガラスケースの中に様々な宝石やアクセサリが陳列されていた。

男連れの大人の女性や、恰幅のいい中年男などが主な客層らしく、店の中で商品をあれこれと見ていた。

当然、お客達の中にミリアと同年代の子供はいない。

店員から追い出されることはなかったが、背伸びしてオシヤレしたがる女の子を見るような微笑ましい視線がちらほらと飛んでくる。

ひとりの少女が目立つは当然なので、気にせず、影夫とミリアはお目当ての品を物色していく。

綺麗なだけの宝石や装飾品に用はない。冒険の役に立ちそうなものを探していく、が。

『うーん。いのりのゆびわが1つ5000G。他に有用そうな装飾品はなしか……買い物はパスだな』

「あることはあるみたいだったけど……売ってなかったね」

「まさか、ちからのゆびわやいのちのゆびわなんかが国宝級のアイテム扱いとはな。よく考えれば永続的に効果を発揮する装備って凄いもんな。そりゃあ貴重だよな」

魔法玉などの材料がとても貴重な上に、それらを加工できるレベルの職人がほとんどいないらしく、手に入れるのは無理そうだった。

いのりのゆびわに関しては何れも便利ではあるがかなり高い。これなら魔法の聖水のほうがいいかもしれない。

正直、1階の収穫はなしも同然だった。

「じゃー2階の書籍フロアにいくぞ。エレベーターにGO!」

「わぁーい!」

ミリアはどたたと走ってエレベーターに入り込み、えいやつと床の石版を踏む。するとガガヒューンと床が動いてふたりをあつという間に2階へと運んでくれた。

ミリアは喜んで石を何度も踏もうとするので、影夫としては壊れやしないか心配だった。

しかしどう考えてもこのエレベーターの動力が謎であるが、魔法力かなにかだろうか？

『はあ!? 日本語じゃねえの!? えええ!? この呪文書読めねえぞ……』

ミリアの身体越しに、呪文書に目を通した影夫は愕然としてしまう。

今まで手に入れた呪文書は日本語で記述されていたのに。と影夫は読めない字を見て大弱りだ。

「ミリア。ちよい体を借りるぞ!」

「うん」

「ちよつと店員さーん!」

影夫はミリアの身体で近くにいた店員を呼び寄せると、ベテランといった風な初老の店員がにこやかに対応してくれた。

「いかがいたしましたか?」

「あの、呪文書についてなんですが……かかれています文字って何種類かあるのですか? 読めないものがあつたんですけど……」

「はい。書物に使われる文字は、大まかにわけて4種類ございます」

「よ、よんしゆるい……」

(なんてこった。全部読もうとおもったら3つも言語を覚ええないといけないのかよ!)

「まずは1つ目、低級呪文や入門レベルの呪文書。こちらは、なるべく多くの方が読めるように今世界中で使われている文字にて書かれて

おります」

これは今まで影夫が手に入れてきた呪文書のものだ。つまりは日本語の文字。

ちなみにデパートのアドバルーンや看板も日本語文章であり、基本的にこの世界で使われている言葉はこれだ。

「次に2つ目、高度な極大呪文などを記した呪文書。こちらは、魔術文字で書かれております」

これが今影夫が手にしている呪文書の文字。くねくねしたよくわからない文字が並んでいる。いかにも古文書って感じ。

「次に3つ目、失われし呪文や、秘法や呪法が書かれている古文書。こちらは古代文字にて書かれております」

これは、手元にはないが、象形文字に近いもので、カクカクとして解読も難易度が高いのだとか。

「次の4つ目、魔族が扱う呪文や、禁呪法などについて書かれている魔族の書物。こちらは魔族文字で書かれております」

これは店員も言葉を濁してあまり教えてくれないが、きつと原作で鏡を使った通信呪文とかで送られてきていた文字なんだろう。

「うーん……読めないと困るなあ」

店員の説明に影夫は盛大に顔を歪め、本の山が陳列されている本棚を睨みつける。

威厳のありそうな分厚い本や古めかしい本やはやはり、背表紙からして読めない。

(やっぱり3つとも覚える必要があるよなあ。魔族の呪文や禁呪文なんかは覚えておいたら切り札になるし、使わずとも知っていれば対策が出来るだろう。原作にはでてこなかった呪文や呪法もあるかもしれない)

影夫は、それらの文字を覚ええないという選択肢がないことに暗澹とした。

しかし、しかし3つかあ。と前世で英語が苦手であった影夫は内心愚痴る。

追い詰められないと努力しきれない彼は興味のない暗記科目は大

の苦手だった。

どちらかというとき影夫は、基本の公式さえ覚えていれば、直感を頼りに論理の組み立て、推察を重ねて解いていける数学などの方が得意なのだ。

とはいえ、これは受験勉強などではなく、生き死にに直結する大問題である。

究極的にはどれだけ勉強が出来なかりと死ぬことはなかった前世とは違うのだ。

しかも、今は守るべき存在もいる。自分が死ぬのも嫌だがミリアが死ぬのはもつと耐えられないだろう。

好きだ嫌いなどと贅沢をいう余地などないのだ。

(しっかし。思うんだが、何故この世界の住人達は自らを鍛えないのだろうか?)

影夫はこの世界の住人達の暢気というか、危機感の薄さが常々気になっていた。

国内にいる限り犯罪以外では死ぬか生きるかなんてことにはならなかった前世世界ならばともかく、何かあったら簡単に死ぬ世界なのにどうという神経をしてるんだろうか。

ハドラーが倒されたとはいえ、第二第三のハドラーが来たらと何故考えないのか。

最終的に勇者が倒してくれるかもしれないが、それまでに死ぬかもしれないというのに。

(最低限の護身術と逃亡用アイテムの1つでも持つておくべきだろうに)

思考の海に入り込んだミリアに店員がうかがうように声を掛けてくる。

「当店では、魔族の書物以外のすべてを取り扱っております。お客様は、どちらをお求めでしょうか?」

(ともかく好き嫌いだの苦手だの言ってる場合じゃないよな)

「あ、あの……魔術文字や古代文字や魔族文字の辞書や解説書の類は……ありませんか? 読めるようにならないとダメなんです」



「魔術文字の習得には手引きや指南書がごございます。古代文字については、解読を試みた学者の書物などはありますが、それらを纏めた辞書というものは存在しておりません。魔族文字についてはその……先の魔王との戦いや、危険性ゆえに禁書指定されており、まともな店では扱うことはごいません」

「……すると、書物を買って漁って、片っ端から勉強しながら自力で読み解いていくしかないのかあ」

参考書も教師も無しで、書物を頼りに読み進めて覚えていく。

まるで幕末に手探りで英語を勉強しているような環境だ。

前途多難ぶりに内心大きなため息を吐く。

「……さしでがましいようですがお客様。呪文の習得にせよ、文字の学習にせよ独学というのはおやめになられたほうがよろしいかと思えます。書物では伝えきれない教えや危険もごございますし、道を誤らぬためにも、まずはどなたかの弟子になられて師より教わるのがよろしいかと存じます。書籍の購入はその後になさるべきでしょう」

影夫が難しい顔で唸っていると店員が忠告をくれる。

何人か同じような客を見てきたのだろうか。忠告は正直ありがたい。たしかに自己流で学んだ末に大きなミスをしでかしたらことだ。

「いや、ありがとうございます。ご忠告どおり誰かに教えを仰ぐことにします」

この店員さんは実に良心的である。素人相手だから適当に売りつけてくるかと思いきや、販売機会を逃してまで真摯に教えてくれた。

「その時には、ここで呪文書を買わせてもらいますね」

「お待ちいたしております」

書籍の購入もアテがはずれた影夫達は3階に来ていた。

『さすがの品揃えだな、魔法の聖水どころかエルフの飲み薬まであったぞ』

「力の種とかはなかったね。あれば楽なのにー」

『まあそれはなあ。期待してなかったししょうがない。月1入荷があるかないかじゃ、難しいよ。しかもその都度オークションに掛かるからたぶん糞高いんだろうし』

何のリスクもなしに自らを強化できるんだ。金はあるけど命は掛けたくないみたいな連中がわんさと欲しがりそうだな。

金持ちの馬鹿親が、見栄のために子に食わせたりもしてそうだな。糞の役にも立たないだろうにもつたいないことこの上ない。

「まったく。成長が止まってから使うべきだろうが種は！ 戦いもしねえのに種をつかうんじゃないやねえよボケが」

まあ、一番需要があるのがうつくしそうらしいが。

(うつくしそうだけで満足しとけっての)

「じゃない。MP回復手段の確保だけはしっかりしておくかー」

キメラの翼や薬草などのアイテムはすでに十分な備蓄があるので、魔法の聖水を10個とエルフの飲み薬を2個買った。

これだけで12000Gもしたが、もしもの時の命には変えられないと思って、断腸の思いで影夫は散財するのだった。

## 予約

『よっしゃー！ いやいよお待ちかねの武器購入だぞミリア！』  
「うんっ、早く早くっ！」

エレベーターで4階に上がるなり、どたどたとミリアが走って商品の陳列棚をぐつと覗き込んだ。

こんぼう、どうのつるぎ、はがねのつるぎ、おおかなづち……色々な武器がいつぱいだ。

「ねえねえ、これなんかどうかな!？」

「あ、あっちもいいよね！」

「うーん。そっちのもよさそう！ 多すぎて迷っちゃうよお」

おおはしやぎのミリアがてつのオノやバトルアックスを手を持ってきてニコニコする。

『お、おい……?』

影夫としては店員を呼んでさっさと買い物を決まそうと思っていたが、玩具売り場にいる子供みたいに歳相応の姿を見せるミリアを見て考え直す。

(シヨツピングに付き合うつもりでじっくりと買い物をするか)

「ねえ、お兄ちゃんはどれがいいと思う?」

くさりがま、のこぎりがたな までもを抱えてミリアは実に楽しそうだ。

『なんでチョイスがどれもちよつと物騒なんだよ』

「え? カッコいいよね?」

『……カ、カッコいいかはともかく、攻撃力が落ちるものはダメだぞ。あとバトルアックスは大きすぎて扱えないだろう。身長的に』

「えー?」

『だーめ。要らないものは買わないからね。もどしてきなさい』

「はぁーい」

しぶしぶミリアは武器を棚に戻す。聞き分けのない子ならヤダヤダって暴れるだろうに実にミリアは良い子である。

ちなみに影夫は駄々をこねて泣きべそをかいていたクソガキだっ

たので、聞き分けのいい子をみると、偉いなあと感動しておこづかいをあげたくなってしまう。

ちなみにどうでもいいが、ミアアの身長は130センチくらいなのに、大人用の武器をいくつも抱きかかえて走り回れる怪力と体力は凄い。

さすがおおばさみを使いこなすだけはある。

両親が戦士か武闘家の血を引いていたのか、はたまた暗黒闘気による影響なのか。

実に不思議な光景だ。周囲の客や店員も目を丸くしている。

「でもどうしよつかあ、色々武器はあるけど……おおばさみより強く使えそうなのはあまりないよ?」

『ううーん。さつき抱えてたバトルアックスは重さ的に使えそうなのか?』

「え? 片手だと重いけど両手だと大丈夫だよ。あ、でも振り回したりしたら身体が浮いちやうかも……そうなるうちよつと使いにくいかなあ」

『つ、使えないこともないのか。ミアア……おそろしい子ツ!』

「えっへん」

『まあーとりあえずバトルアックスは保留だな。他の武器を探そうぜ』

「はーい! うんしようんしょ……」

とたとたとフロアを走りまわり、ごそごそとミアアが次々に武器を漁り探す。

投売りの中古武器コーナーから、飾りに使う武器模型まで、手当たりしだい漁っていく。

「これはどう?」

『うお!? こりやふぶぎのつるぎ!! ってなんだこりやレプリカかよ!』

「こつちは?」

『おおかなづちかあ。悪くはないよな。モコツチ! ってかんじでいいな』

「それはちよつと嫌かなあ……」

「きやつ!? なにこれ、ピリピリするよ……もうっ!」

『そりやホーリーランスだ。糞、こいつも俺達を拒むのか。ったく!』  
「いたあつ! これもビリつてきたー!」

『おのれゾンビキラーム、こいつまで俺らを拒むのか! ふざけやがって!』

それから小一時間ほどフロア中を探し回ったが、良さそうな武器が見つからなかった。

どうにか使えそうなのはおおかなづちやバトルアックスだが……正直両手持ちの武器だと動きが制限されてしまうし、劇的な攻撃力アップも望めない。微妙であろう。

『いつそ特注オリジナル武器のほうがいいかもな』

「とくちゆくって? 特別な武器なの?」

『つまり、僕が考えたカツコイイオリジナル武器! を作ってもらうってことだ』

「おおおつ、おもしろそうだね!」

キラキラと瞳を輝かせるミリア。

ノリがいいミリアの様子に影夫もテンションがあがってヒートアップしていく。

『例えば……りりよくの剣とか、光魔の剣とかがあったら強くてカツコよくな?』

「ギロチンアックスとか肉斬り包丁なんかもおもしろそうだよ!」

『ミリアはそういう系好きだなあ。いっそのこと魔法玉で動力を仕込んでチェーンソーにしてもらおうか? 真空呪文で動かした鎖状の刃でぐちやぐちやー! ってミンチにする凶悪武器!』

「欲しい欲しい! 絶対使いたい!」

『よおーし。今度職人を探して頼んでみるかな』

「やったー!」

ぼくのかんがえたかつこいい武器を発表しあって盛り上がるミリアと影夫。

傍から見ると見ると少女が独り言言いながら大はしやぎという変

な光景だが、怪力ぶりを目撃されているからは、特に声を掛けられたり、からかわれたりといったこともなかった。

『ああそうだ。デパートじゃなくなつて闇市で探すのもありかもな。わけありの一品があるかもしれないし、もしかしたら呪い装備もあるかも』

「のろいの武器……かつこよきそうだね。どんなの？」

『そうだな……はかいのつるぎ、もろはのつるぎ、まじんのオノ、みなごろしのけん！ どうだ強そうだろう！』

「わあわあわあ！ 絶対買おう！」

『まあ呪いの反動とかも試す必要もあるから、入手できてもすぐに使うのは無理だけど』

ミリアが喜ぶので影夫はついつい話し込んでしまったが、ろくに良さそうな武器を見つけられていなかった。

つよくてかつこいい武器の話は楽しいけれど、買うに値するものはないかちやんと調べないと買物にならない。と影夫が思いなおす。

『とりあえず俺らの知らない情報があるかもしれないから店員に聞くぞ？ お買物もう楽しんだら？』

「うん！ いいよ」

「満悦のミリアから、身体の主導権をもらい店員を呼ぶ。」

「すみませーん！ 強い武器を見せてもらえませんか！」

「いらつしやいませお嬢さま。こちらの聖なるナイフなどはいかがでしょうか。力の弱いお子様や女性でも扱い易く、護身用として大変人気……」

「あ。大丈夫です。私力あるので。ほら、今使ってるのこれです。ふふふ。これより強い武器をみせてくださいね？」

店員が嫌いな武器を薦めてくるので、影夫はムスツとしつつ、袋に入れて背中に背負っているおおばさみを見せた。

おおばさみは、おどろおどろしい見た目なだけに街中で装備したまま歩くわけにいかないからこういう収納をしている。刃だしっぱなしだとあぶないし。

「も、もうしわけありませんお嬢さま……!」

魔物の血をすって、鈍い光を放っているおおばさみの刃は実に剣呑とした雰囲気だ。

もつと使い続けたらの呪われるのではないだろうか。

「そ、そうなりますと、こちらのおおかなづち、バトルアックス、ゾンビキラーがございます」

店員が盛大に顔を引き攣らせながらも、軽妙なセールストークをしてくる。

さすがにプロだと影夫は妙な感心をしてしまった。

「ドラゴンキラーはないんですか?」

「申し訳ございませんが品切れとなっております。入荷予定もございません。といいますのも魔王が倒されてから、ドラゴンは人里には出てこなくなりましたので必要とするお客様がおられず……」

「売れない武器を仕入れても意味はないと?」

「かなり割高なものですから。どうしてもというお客様のご注文も受け付けておりますが……オーダーメイドの形ですのでどうしてお値段の方は30000Gほどは掛かってしまうかと思えます」

「わかりましたドラゴンキラーは諦めます。何か特別な逸品とかはないんですか? ほら、これ……私はこういうものなんです」

ふところから、賓客証明書を出して見せる。ついでにガーナの街の紹介状もだ。

「少々お待ちください……」

書類を見ると神妙な顔で一度引っ込んだ店員だがすぐに戻ってきて笑顔で話し始めた。

「特別なお客様のために、数量限定販売のゆうわくの剣がございます」

「ゆうわくの剣……たしか特殊効果があるんですよね? 値段も教えてください」

ゆうわくの剣。ゲームでは非売品なので期待はしていなかったが、入荷するのか。特殊効果もあるし片手で扱えるであろうし、これは悪くない選択だ。

また剣であることも意味が大きい。これなら剣技を習得すれば使

えそうだ。アバン流の技なんか覚えた時にはいいかもしれない。

おおばさみじゃあ、大地斬や海波斬は無理だろうからな。

「お客様は博識でございますねその通りです。『惑え』の言葉でメダパニの呪文の効果を発揮します。それだけではなく、斬りつけた相手を一定の確率で混乱させることもございます」

「それはすごいー！」

なんとびつくりDQ3の道具効果とDQ5での攻撃時の効果が両方ついているらしい。

「今回の品はベンガーナ王宮随一と名高いかの有名な鍛冶屋、ジャンクの作であり、しかも……厳選された一級品の魔法玉とパプニカ産の魔法金属を贅沢に使っているというまさに逸品になっております。お値段は17000Gでございます」

(ミリアいいよな?)

(えーでも、チェーンソーやオリジナル武器はー? それにおおばさみはお気に入りに入りなただけどなあ)

(じゃあこの剣で稼いで買おうぜ。おおばさみは鍛えなおしや強化を試してみるとい一手もあるぞ)

(しよーがないなあ)

心の中でミリアに話しかけて相談。物騒な武器を欲しがるミリアをどうにかなだめて、影夫は賛成してもらえた。

「ただ……何分見た目にも美しく華麗な逸品であるため、購入を望まれるお客様は多く……現在予約待ちの状態です。申し訳ございませんが半年ほどお時間をいただくこととなります」

「買います。予約をしておいてください」

多少割高だし半年も待つ必要があるがその価値はある。

「ありがとうございます」

「あ、あと。今度おおばさみの強化についての相談もお願いしたいのですがいいですか?」

「はい、かしこまりました。いつでもお越しく下さいませ」

大きな買い物であったが戦力の増強に成功した。ゆうわくの剣はしばらく待つ必要があるがそれまではおおばさみでいいだろう。



『さて。5階は服鎧だが……ミリアはどうしたい?』

「このドレスのままがいいけど……強いのに変えた方がいいよねやっぱり。ここで買っていいの?」

『もちろん。となるとどれを買えばいいか……』

「軽く動きやすいのがいいと思うよ。鎧とかじゃ動きにくくなっちゃうもん」

たしかにミリアのスタイルは小柄な体を生かしてすばやく動きまわし、暗黒闘気をこめた強烈な一撃を加えていくものだから動きが鈍ると攻防ともにまずいだらう。

『だなあ。いくら頑丈な鎧を装備しても、それ以上の力で碎かれたらおしまいだし、そもそもミリアは受け止めて耐えるには体重も体格もないからな。基本的に回避ゲーになると思うから……みかわしの服かな?』

俺とミリアは5階で頭を悩ませていた。ミリアの思い入れもあるし、防具を変えらるとなると何を選ぶかも決めなくてはいけない。

「みかわしの服だね、どこかなあ」

『服はこっちみたいだな……えーとそこのつきあたりらへん』

「あれ? お兄ちゃんあれなあに? すごく高いけど」

きよろきよろと周囲を見渡しながら歩いてきたミリアがエロティックにディスプレイされたあやしげなソレをみつめて声を上げた。

『んー? って!? あ、あぶない水着……あれはだめだ。ミリアには関係ないからな。さ、早く行こう』

「えー? 何それえ……ってわわ、これすごい……! かげきだね……」

単なる紐のようなソレが着衣だと理解してミリアは頬を染めた。

「でも、ちよつと着てみたいかも……お兄ちゃん喜んでくれる?」

『よ、よろこばねえよ! お、大人の女性が着るものだからミリアはダメだって! それに守備力だつてないんだから……』

展示品の側に解説パネルがあり、力強い文字であぶない水着のすば

らしさが力説されていた。

「このあぶない水着は、当店専属の腕利き職人が腕によりをかけて製作した究極の防具というべき逸品です。

防御力こそないものの、どんなに激しく動こうが一切ズレず脱げず、切れたり破れたり燃えたりも致しません。

ギリギリでありつつも一線は決して越えることはないのです。限りなくあぶなく、なのにセーフティ。

あなたに極上のあぶない体験をお約束いたします」

そのギリギリを極めるためだけにパプニカの超高級魔法布を使用し、高価な魔宝石の欠片をふんだんに使用して、一流の術師による法術とルーンをも駆使しているらしい。

目玉が飛び出るほどお高いのは、それゆえの値段なのだから。

（なんだその無駄な情熱は。そして使い道はなんなんだ。プレイ？何かのプレイなのか）

決してこれはミリアに着せるわけにはいかない。教育上よくないのはもちろんだが、ミリアが戦場のロリ痴女になってしまう。

その上にマントでも羽織ったりしたらどう見てもこども変質者が爆誕だ。ロリ痴女勇者とか、あぶないこども勇者とか呼ばれてしまいうさである。

しかもそれを着させたのは自分の仕事だと思われてしまうだろう。一体どんな風に思われるかわかったものではない。

そう、例えば……リースから向けられる冷たい軽蔑の視線を想像した影夫は、恐ろしすぎて震え上がった。

「わたし、これがいいっ！」

『ダメ！ 絶対にダメ！』

「むうー……っ！」

『あつ、そうだ！ 形見のドレスを装備に仕立ててもらうことは出来ないかな？』

「え？そんなことできるの？」

「よし。できるか聞いてみようぜ！ 店員さーん」

むくれるミリアをよそに影夫は慌てて話を逸らし、身体の主導権を

もらって店員のもとへと駆け寄る。

「はい。何をお求めでしょうか」

「えっと、このドレスを防具に仕立て直してもらうことはできますか？」

「そうでございますね……当店の方から職人に依頼をしてオーダーメイドの形をお願いしますことはできるかと思えます。既製品よりも少々お値段は張ると思いますが大丈夫でしょうか？」

金は問題ない。まだ2万ゴールドくらい余裕がある。

「それじゃあこのドレスをみかわしの服の効果をつける形で防具に仕立てることはできますか？」

「みかわしの服は特殊な法術とルーンによって身体の反射神経を高め、回避力を高めていますので問題はないと思います。そちらのドレスの布地は……パプニカ布のようですね。これならば素材的にも問題ありません」

ミリアの提案に少し考え込んだ店員だったが、テキパキと対応してくれる。

「あと、できれば頑丈にできませんか？ 防御力を高めるといふよりは耐久性を高めて長く使えるようにお願いしたいのですが。追加料金が発生してもかまいません」

「……できるだけ善処いたします。職人に要望はお伝えしておきます。後日に結果をお知らせしますのでお手数ですがご来店のお願いいたします。また、それ以後も何度かご相談をしながら制作していくことになりましたがよろしいでしょうか？」

「それで大丈夫です。よろしく願います」

「ありがとうございます。それではこちらの書類への記入と前金につきまして……」

その後発注書を書いたり、前金を支払ったり、賓客証明書を見せて手続きをしてみた。

「買った買った！」

「いっぱい買ったね、ありがとうお兄ちゃん！」

デパートから出てきたときにはあたりはすっかり闇に染まっていた。

くるくるとミリアがその場でまわってひらひらと白いワンピースを靡かせる。

これはドレスを仕立て直すために脱いで渡さなければいけないなかったので、急遽ミリアに買ってプレゼントした服だ。

着替えのことは店員に言われるまで考えてなかったからちよつと恥ずかしかったが、ミリアが喜んでくれてなによりだ。

「いつもミリアは頑張ってくれてるし、良い子だからね。地下で飯食ってくか〜」

「うん〜」

ちなみに宿の飯は、別料金だ。

専用コックによるフルコースダイナーも味わえるが、ミリアも影夫もテーブルマナーやはろくにしらない。

一発で令嬢の嘘がばれるので頼んでいない。宿側も、お忍びの令嬢であることだし市井のものを食べたいのだと解釈してくれたようだ。

「商品は後日馬車へ積み込んでもらえるから、飯食ったら後は帰るだけだな」

大金が動く契約をいくつか交わしたからだろうか、店から宿までサービスで送迎馬車まで出してくれるのだ。

その後、地下の飯屋でも盛大に飯を食い、デパートをさらに潤わせたふたりだった。

啖呵

デパートでの買い物から二日後、影夫達は宿を引き払っていた。

3日間の宿代が3000G。

ゆうわくの剣で約17000G。

魔法の聖水とエルフの飲み薬で12000G。

形見のドレスのみかわし化で約7000G。

デパートの高級店でのドカ食いで500Gほど使ったので残りは3000ゴールドほどしかない。

「休むのも今日で終わりだ。そろそろ動き出すとするか」

「うん。身体が鈍っちゃうもんね。それで、どうするの？ 適当に魔物退治でもする？」

「いや、冒険者に仕事を斡旋する酒場があるらしい。そこへ行って魔物退治の依頼を探すんだ。金にもなるし、冒険者として活動する以上、顔見せが必要だろうからな」

「ん〜、まかせる！」

よくわからないといった感じで首を傾げながら、ミリアが笑う。

「任せろ！ とういうわけでミリアは昼寝でもしておいてくれ。あとは俺がやつとくから」

影夫は念のためにミリアを寝かせておくことにした。

影夫の勝手なイメージだが、冒険者の集う場所なんかだと粗野で粗暴で柄の悪い連中がたむろしてそうだからだ。

☆☆☆☆☆☆

「あの、何か依頼はありませんか？」

影夫は冒険者の酒場に入って、店のマスターらしき女性に声を掛ける。

眼光鋭く、長く綺麗な青髪を乱暴にポニーテイルで纏めている女性だ。

その身にまとう覇気や威厳からしてこの人がおそらく、酒場をとり

しきるルイーダであろう。

「ウチにやあ子供にうけさせる依頼なんてありやしないよ」

ミリアを鋭くねめつけ、彼女は冷たく言った。

『ルイーダの酒場』

ここには、村や国といった公的機関、街の商家や金持ち、果てはただの一個人からのもの等、様々な依頼が集まってくる。

冒険者と依頼者の仲介を行っているのだ。

といってもファンタジーものなんかであるような冒険者ギルドほどまともな組織ではない。

ごろつきの傭兵崩れや粗暴な悪漢がその腕力で日銭を稼ぎ、酒に溺れるだけの場所だ。

ハドラーが倒されて以降、まっとうな連中はすでにカタギの仕事に復帰するか家庭を持つなどして冒険者をやめているので、今は余計に酷い有様らしい。

それでも社会からは必要とされているので、今でも存続している。そんな吹き溜りであるが故に、この冒険者は素行や柄の悪さも咎められず、過去の犯罪歴も問われない。

ルイーダを舐めたり、酒場のメンツを潰さなければ、どんな人間であろうが依頼を受けてもいいのだ。

冒険者ギルドというよりは、ヤクザが経営しているチンピラ向け職安みたいだと影夫は感じた。

実際その認識は正しいだろう。

チンピラに仕事をやらせて稼がせた金を、酒や料理や賭博によって吐き出させる仕組みであるのだ。

貸金業にも手を出しているようで、そのあたりが実に裏社会の組織っぽかった。

そんな連中を束ねるルイーダとて、鬼ではない。

明らかに分かってなさそうな相手には一応忠告をくれる。

今みたいに。

「分かったら怪我しないうちに帰りな」

ルイーダの瞳には、有無を言わさぬ迫力があつた。

思わず、影夫の背筋に寒気が走る。

国から仕事をとってこれるくらいだから各方面に顔もきくのだろう。彼女が裏社会でどれだけ幅を利かせているのか想像するだけで恐ろしい。

「ぎやはははは！　なんだお嬢ちゃん、この店にやあミルクは置いてないぜー！」

「そうだそうだ！　おうちに帰ってママのおっぱいでも吸つとけ!!」

「何年かして美人になってたら、アッチの冒険にやあ付き合ってもやるよ！　ひやはははは」

「俺は今のままでもいいぜえ、可愛がってやろうかあ？」

「変態お兄ちゃんでもいいなら相手してくれるつてよお！」

周囲からミリアに向けて次々と罵声や嘲笑が飛んでくる。

冒険者同士のいざこざに酒場は関与しない。

だから小さな女の子相手に下卑た怒声や卑猥な罵声が浴びせられても酒場のマスターは止めようもしない。

（下品で野蛮なDQNどもめ。ミリアの意識を眠らせておいて正解だった……こんな連中悪影響しかあたえねえ！）

こういった連中は前世時代から影夫がもつとも嫌う類の人間だ。

今すぐにもこんな連中の側に居たくない。

だが、冒険者の酒場がない街ならばともかく、あるのに無視するわけにもいかない。

「た、単独がダメなら、共同の依頼でもいいです！」

うるさい外野を無視して、影夫はカウンターに身を乗り出し、ルイーダをお願いする。

この人が承諾すれば誰も文句は言えないだろう。

「私これでも強いつもりです、迷惑も掛けません」

だから、一生懸命影夫は頼み込んだ。

「おい!?　聞いたか!?　この嬢ちゃんは子守をしてくれるお兄さんを探してるみたいだぜ!!」

「はははははは！　いいか、ここは腕利きのつええヤツラが集まる場所

だが、お優しい保父のおじちゃんはいねえんだよ！」

「うるさいよアンタら。アタシがしゃべれないだろうが」

その一声で外野はぴったりと声を止ませる。

「単独であろうが共同であろうが、お嬢ちゃんに依頼は任せられないね。これ飲んでおとなしく帰んな」

コン。とミリアの前にミルクの入ったコップが置かれる。

「おい嬢ちゃん、保護者をお探しなら、おめえにぴったりのお兄さんとお姉さんがいるぜえ。ひよろひよろの軟弱でヘタレ小僧だがよお。俺達よりかは優しくして、PTを組めばお似合いかもな！」

無精ひげの中年男が、ミリアにずいっと下卑た顔を近づけてせせら笑ってくる。

ろくに身体も洗っていないのかひどく臭いので影夫は顔をしかめた。

「ぎやははは、すげえぞ、スライムに殺されそうなPTになるぜ！ ああそうだ、万年みそつかすのまぞっほとへろへろのやつも加えてやれよ！ 最弱PT誕生だなおい！」

「よかったな、5人もいたらガキと無能の集まりでもスライムにやあ勝てるぞ！ スライム討伐依頼なんてないけどな！」

「そりやあそうだ！ ぎやははは」

DQN冒険者どもはそういって、酒場の端っこで縮こまるように座っていた4人を無理やりに引っ張り出してきた。

あまりの言い草に、4人の中で一番若い青年が震えながら声を張り上げた。

「て、てめえら……！」

「ああん!？」

「ひ……」

だがすぐまれてすぐに声が出せなくなっとうつむいてしまった。

「はっ！ だっらしねえ奴。たまにやあ殴ってこいや。ぶっ殺してやるからよおー！」

「玉ついてんのかガキ！」

「立派なのは格好だけかよ、勇者さまよお！」



その4人組をみて影夫は驚愕していた。

みるからに、DQ3の勇者、戦士、僧侶、魔法使い。といった格好だった。

彼らは、原作キャラだ。

「おい、玉なしのガキ！ 連れの姉ちゃん使わせてくれよ！ 金は弾むぜ？」

「俺も混ぜろよ！ 俺らで天国に連れてってやるぜ！」

女子高生くらいの年齢である女僧侶に、DQN冒険者達は腰をカクカクさせながら卑猥な罵声を浴びせ始めた。

「ぐ……………くう……………」

「でろりん……………私はいいから……………」

「ひい……………」

「っ……………」

でろりん、へろへろ、ずるぼん、まぞっほ の偽勇者ご一行。

しかし原作に出てきた彼らとは少し違いがあった。

全体的にみな歳が若く、態度もまだ駆け出しといった感じである。

まぞっほだけは老人だが、原作よりもさらに情けなく自信なさげだった。

話を聞く限りではこの4人はまだPTも組んでないようだ。

おそらくここで4人は酷い扱いや罵倒を受けながらも、同じ立場かつ気の合う仲間として意気投合して偽勇者PTを結成するに至るのだろう。

「へへっ、だまってねえでイッパツいくらか言えよ。30Gか？」

「いわねーってことたあタダでいってことじゃねえのか？」

「へへ。たっぷりと可愛がってやらねえと！」

「ひっ……………」

言い返せないずるぼんに卑劣なことをいい続ける連中を影夫は睨みつけていた。

禿げ上がった小男がニヤけ顔でずるぼんの胸に手を伸ばしているのだ。

「やめ」

触れる前に屑の腕をへし折ってやる、と影夫が飛び掛らんとした瞬間。

「……お嬢ちゃん、この4人と組むんなら依頼をうけさせてやるよ」

「「「え?」」」」

影夫とでろりんたちの声が重なる。

それほどにルイーダの提案は予想外だった。

「ぎやはははは、マジかよ! 姐御も人が悪いぜ!」

「可哀想になあ、あいつら全員死体だぜ!」

それはDQN冒険者達も同じだったようで、一瞬目を丸くしたがすぐにまたでろりん達に絡みだす。

しかしそれ以上はルイーダが許さなかった。

「だまれって言うてるだろう。返事が聞こえないだろうが!」

「っ……!?!」

「で、どうするんだい? 依頼は、グリズリーの群れの討伐だ」

「グ、グリズリーって、姉御は本気なのかよ?」

「お、俺達でもかなわねえようなやべえ相手じゃねえか。姐御はあいつらをマジで殺す気だ……」

「役立たずのゴミに用はないってか。女子供や老人相手でも容赦ねえな……」

ルイーダの言葉を聞いた連中は小声で囁きあっている。

「いつとくが遊びじゃないよ。モンスターは殺す気で襲ってくるし、依頼放棄も認めないからね。出来なきや死ぬ。それでもいいんだね?」

「やります、やらせてください」

ぶっそうなルイーダの言葉に動揺して顔を見合わせていたでろりん達だが、影夫は迷いなく即答する。

グリズリーの群れは手ごわいだろう。だが、戦力的に何の問題もない。

「いいだろう。これが依頼書だ。詳細はそれを見な。あと、期限は厳守だ。気をつけるんだね」

「おいお前、何を勝手に……」

「大丈夫ですよでろりんさん。私達はあんな野蛮人どもとは違うんですから。力を合わせれば余裕です」

「……つ、このガキイツー……」

影夫の言い草にDQN冒険者達がいきりたつ。

喚きながら拳を振り上げるもの、顔を真っ赤にしてテーブルを殴りつけるもの、食い物を投げつけてくるもの、様々に怒りを表現していた。

影夫は内心、まるで猿の群れだと心底軽蔑しながら、吐き捨てる。

「私達は正式に依頼を受けた。なのに文句をつけるのはルイーダさんの顔に泥を塗り、喧嘩を売るってことになるんだけど。あなた達はそれでいいと?」

「……てめえ……!」

「くくく。言うじゃないかお嬢ちゃん。あんたの言うとおりだ。分かったねおまえら。命が惜しけりゃ口出しも邪魔立ても無用だよ」

「……へ、へい……」

忌々しげに睨んでくるDQN冒険者共を、影夫はあえて全力のニタニタ顔で挑発し、茹蟠になるくらい怒らせながら、酒場から出て行った。

(へえ。ちよつと感心だ)

しかし、影夫の思った以上にルイーダの躰は行き届いているようだ。

我慢の効かなさそうな連中に見えたが後を追ってきたり、絡んでくる馬鹿はいない。

「皆さん。とりあえず、私の宿にいきましょうか」

影夫は、ビビりながら後をついてきたでろりん達とともに、打ち合わせのために宿へと戻るのだった。

## 師事

「おいお前！ 勝手にあんなこといってどうしてくれるんだよ！」

「そ、そうよ。グ、グリズリーの集団なんて、か、かかか、勝てるわけがないじゃない！」

「だかといって依頼放棄も無理じゃ。そんなことをすれば二度と冒険者の酒場は利用できまい……」

「こ、こ、困るぞー！」

「も、もうダメだあ、俺達は死ぬか一生日陰暮らしなんだー！ 一体どうしてくれるんだ！」

宿の部屋にはいるなり、でろりん達は狼狽しながら、影夫に向かって怒りつけてくる。

「まあ落ち着いて。ほら、この依頼は急ぎじゃないんだ。期限は厳守とはいえ3ヶ月近く余裕がある。だからまず2ヶ月を使って……」

影夫はベッドに座り込み、自信満々な仕草ででろりん達に依頼書を見せながら語る。

どうでもいいが、昨日までいた高級宿とは違いスプリングも効いていない普通の木のベッドなので快適さが薄い。

「使って？ あ！ わかった。誰かすげえ強い助っ人でもいるんだな！? そいつらを呼ぶんだろ？」

すがりつくようにでろりんが、影夫の前で這い蹲った。  
そうだと行ってくれと懇願するような情けない表情である。

「んなのいるわけないって。2ヶ月で修行するの」

「修行って……お前、そんな強いのか？ こんな子供……しかも女の子なの？」

「まあ、私は割と強い方だとは思うよ」

（おーいミリア。おきてるか？）

（さっき起きたところだよお兄ちゃん）

ミリアは起きていた。

影夫は宿に戻ってから、遮断していたミリアの五感の共有を戻して

いたのだ。

それと同時にでろりんたちが慌てふためいて騒いだ声で目が覚めたのだろう。

(話は聞いてたよな。悪いけどこのまま話を進めるぞ?)

(うんいいよ。知らない人はちよつと怖いけど、力は必要だもんね)

(大丈夫だって。この人達は弱気で情けないんだけど、根っこは悪人じゃないんだ。それこいつらは色々と分かりやすいヤツラだから、変に疑う必要もないしな)

(うん、それはちよつと分かるかも……)

「む。もしやおぬし、こども勇者ミリアではあるまいか? ガーナの街に少女の勇者が現れたとかいう噂を聞いたことがあるんじゃないか? ……」

「ああ? んな噂、俺はしらねえぞ」

「お、俺も知らない……」

「私も聞いたことないわねえ」

(まあ田舎で有名といつてもこの程度か)

「最近の噂じゃから皆はまだ知らんのじゃろうな。何でも……人々を困らせるモンスターの群れをたつた一人で何百と打ち倒し、ベンガーナ各地の街や村を救ったんだそうじゃ。高度な攻撃呪文と回復呪文をあやつり、神より与えられし伝説の武具を自在に使いこなす、神に選ばれた少女!」

「お、おおお! そりゃあマジか!? なんだよあんたすつごい奴だつたんだな。それなら一安心だぜ」

「よかったあ……もうっ! 人生が終わったかと思っっちゃったわよ!」

「ほんとほんと」

「いやあ一時はほんとにどうなることかと思っただけどよ……まあ確かにあんた程の人に鍛えててもらえりゃ、俺達でも少しは勝てる見込みが……」

何か勘違いしたでろりん達のはしやぎなら、地獄にホトケだと安堵しきっている。

だが残念ながらそれは間違いだ。

「違うよ」

「はあ?」

「いや、だから。私が」

「お前が?」

「あなた達に教わるの。魔法の師匠なんていなかったから魔術文字も読めないし、魔法力の使い方とかも正直適当っていうか、感覚なんだよね。剣術や武道なんてのも習ったことないし、てんで素人だからなあ。あなた達は多少かじってるんでしょう? 私を弟子にしてください!」

「……」

「……」

「はあああああッ!?」  
でろりんが大げさなりアクションで驚愕しながら後ろに飛びのき、ヒクヒクと手足を震わせた。

他の3人も彼に合わせるようにモンクの叫びのポーズや頭を抱えたりといったコミカルなポーズをとっている。

「……」

「……」  
でろりん達は今度こそパニックになって宿の部屋の中で転がりまわった。

へろへろなんかは図体がデカイのでイスやテーブルなどにぶち当たっていて、盛大に壊してしまっている。

(これは俺が弁償することになるのか……?)

呆然と彼らが落ち着くのを影夫は待つしかなかった。

「で、落ち着いた?」

宿の部屋でベッドの端に座った影夫が、はあはあと息を荒げて床に座り込む4人に声を掛ける。

「落ち着いてる場合かつ、くそっそんなのでよく依頼なんて……よくも俺達を巻き込んだなあ!!」

「そんなにいきり立たなくても大丈夫だよ。勝算はあるんだって。っていうかあなた達、そこそこ強いでしょう?」

怒り心頭のでろりんが泣きそうな顔で掴みかかってくるが、影夫はやんわりとその手をポンポンと叩きながら宥めてやる。

(なんでこんなに弱気なんだろう。原作の時点より弱いかもしれないけど雑魚ではないはずなのに)

「え？ ま、まあそれなりに自信はある程度には鍛えてたけどさ。剣もそこそこ使えると思うし、イオラとかの呪文も使える、けど……でもグリズリーなんてなあ」

「そうじゃのう、キャタピラー程度ならどうにでも出来ると思うが……」

「そうよ！ 私なんてか弱いレディなのよ!? そんなのと戦えるわけないでしょう！」

「お、俺も力じゃ勝てないと、お、思う……」

「まあまあみんな落ち着いて。もっと気楽に考えようよ」

泣き言の大合唱をまあまあとどうにか宥めつつ、影夫は身振り手振りを交えて、安心させるように話を続けていく。

影夫はあくまでも強気で不適な態度をとり、自信に溢れる余裕ぶりを4人に見せた。

自信がなかったり弱気になっている人間は、こうやって安心させる必要があることを影夫は経験から知っているから、あえてそう演じてみせているのだ。

「最悪、採算を無視すればどうにでもなるよ？ 怖がらなくても大丈夫。油断さえしなきゃ絶対に死にはしないよ。超余裕だね」

「な、なんの根拠で……本当かよ？」

半信半疑ながら、でろりん達は自信満々な影夫にすがるように見つけてくる。

「そうだな……例えばだよ、へろへろとでろりんが、まぞつほと私を担いで逃げ回りながら、魔法を撃ちまくってアウトレンジするとかどうかな。魔法力が切れたら、魔法の聖水で回復すればいいよ」

「う、うーん……」

「それに、おとり作戦で私が敵をひきつけている間に、あなた達が背後から奇襲で倒すってのもいいよね。つまり挟みうち。単純だけど効

果が高い戦術だよ」

「まあたしかに……」

「あらかじめ罫を仕掛けておいた場所に誘導するのもいいかもしれない。とまあこんな具合に、相手が魔王みたいな奴じゃないなら、やりようなんていくらでもあるんだよ」

「そ、そうだな。そう考えると、大丈夫そうかも……」

「そうね、なんだかいけそうな気がしてきたわ。私のバギマで足止めもしたら、良さそうよね」

「わしは安全な場所から、ひたすら呪文を撃てばいいんじゃないかな。呪文の威力には自信がないんじゃないが、魔法力切れを気にする必要がないなら、数でおぎなえるかのう」

「お、俺も、逃げるのは自信があるんだな！」

いくつか思いついた戦法を自信ありげに話してみるとでろりん達は徐々にノリ気になってきた。

（まあ実際の戦いではそこまで思い通りにはいかないけどね。でも修行期間もあるし、俺達と模擬戦で鍛錬すれば十分強くなれるからいけそうだな。でろりん達の弱気さがちよつと心配だけど、そこは自信がつくようにしてあげたら大丈夫かな）

「ま、どうしても万が一の保険が欲しいっていうなら、全員にキメラの翼をあげてもいいよ。やばくなったら撤退して、何度でも出直せばいいだけだし」

「よおーし、やれそうな気がしてきた！　がんばろうぜみんな！」

「……お……！」

相手が強敵とはいえ、勝てそうであるし、万一負けても生き残れる。そんな確信ができたのか、4人はノリノリで円陣を組んで手を合わせ、掛け声なんてかけていた。

さすがは原作での4人PT。息もぴったりで相性は良さそうだな。

「それじゃ、決定だねお師匠様たち。ご指導のほどよろしくお願いします」

口調を丁寧な物に変え、影夫が一礼を試みせる。

それと同時に影夫はミリアの身体から這い出て、首元に顔を



作った。

「お、おい……う？」

「む……」

怪訝な顔を浮かべ、でろりん達が突然出てきた黒い顔に困惑する。まぞつほは勘がするどいのか目を細めている。彼がビビッていないのは敵意を出していないからだろうか。

「お師匠様達、今まで話していたのは実は私なのです。だましてすみません。私の名前はクロス。ミリアを助けて一緒に旅をしています。神に作られし意思を持つ武具、インテリジェンスアームズです」

「ほらミリア、お師匠様たちにご挨拶をしような？」

「うん……よ、よろしくお願いします」

影夫が促すと、ミリアはおどおどしながらもペコリと頭を下げる。なんだかんだで、知らない人にも少しずつ慣れてきたようで、何よりだ。

（良かった。敵意の村や勇者アバンの一件やらがあつて、さらに人間不信や苦手意識が強くなつていないか心配だったんだ）

でろりん達が思い切り情けない格好をさらして、裏表なくギャーギャーと騒いでいたからそれが良かったのかもしれない。

小悪党で勇気に欠ける彼らは自分の命優先だが、逆に分かりやすいからミリアからすると得体の知れない怖さは薄いのだろう。

「か、可愛い……可愛いわよミリアちゃん！」

「ふあっ!？」

「もうつ、何よ、随分こまっしやくれた子だと思つてたら、クロスがしゃべつてたのね。ミリアちゃんたらすつごく可愛いじゃない……！ 妹にしちやいたいくらいよ！」

「え、えつとその……お、お兄ちゃん助けて……」

伏し目がちにおどおどする小動物のようなミリアの仕草を見て、ずるぼんが飛びついて頬ずりしはじめ。

ずるぼんは可愛い物好きなのか、ミリアを撫でさすつて可愛がつていて、ミリアがおろおろしている。

影夫はふたりの光景に微妙に百合っぽいいけない雰囲気を感じ

取って鼻の下を伸ばした。JKとロリの百合。実にイケナイ、そして素晴らしいと影夫は思った。

それに別の意味でも影夫は実にすばらしいと思っていた。

（ぐへへ。法衣ごしに伝わってくる感触が気持ちいい……ってだめだだめだ。まだ大騒ぎになるとまずい！）

ミリアの首元に巻きついていている影夫には押し付けられるずるぼんのおっぱいの感触が伝わってくるので思わずニヤけそうになる。

だが、それでえらい目に合ったことを思い出し煩惱を振り払った。

その姿はまるで嫁の尻に敷かれて脅える男のようである。

「なるほどのお、つまりクロスは、ミリアの兄代わり親代わりというところなんじゃな」

「はい、ミリアは事情があつて、他人への不信感と恐怖心があるから、俺が補佐しているんです。ほっとけないですしその……約束もありますし」

「事情？」

「まあそのあたりは無理には聞かんほうがいいじゃろうて」

「あ、そうだな、すまん」

影夫が事情を説明したものでどうか口ごもっているとまぞっほが事情を察して詮索を控えてくれる。

さすがは年長者、ありがたい配慮だった。

「お気遣いありがとうございます。まぞっほ師匠。でろりん師匠もありがとうございます」

ありがたい気遣いに影夫はペコリと黒い顔を動かして礼を述べる。

だが、でろりん達はなんだか微妙な顔で気まずそうにしていた。

なんだろうか、と影夫は疑問符を浮かべる。

「あ〜ちよつといいかクロス？」

「はい。何でしょうか？」

「えつとな、敬語は止めてくれ。なんか背中がむずがゆいんだよ」

ほりぽりと頭を掻きながら照れくさそうに言ってくるでろりん。

てつきり敬われると調子にのって偉ぶるかと思っていた影夫はきよとんとしてしまう。

「え？ でも、これから教えるを請うことになる師匠ですからけじめはつけないといけませんし……」

「いいんだよ、俺だってそんな師匠とか先生とか言われるほどすごくもねえんだから」

「まあそうじやのう、ワシは修行の途中で逃げ出したからのう、それが、まさか師匠になるとは……」

「まぞっほもか？ 実は俺もそうなんだよ」

「あ、私も私もお師匠がホントいばってばかりの嫌な奴でさ」

「皆そうなのか？ 俺もだ」

「「「なくんだ俺ら全員一緒じゃないか！」「」」

肩を組んで4人が笑いあう。

先生にためぐちかあ、と影夫は渋い思いでごちる。

影夫としては、前世で見かけたような不良や反社会的な人間のようにはなりたくないという思いもある。

「というわけじゃ。わしらはお主らに教えるがかしこまらんでいい。口調もあらためなくてよいぞ」

「うーんそれでいいのかなあ。けじめというか、先生のような目上の人にはやっぱり……」

「お兄ちゃんってそういうところすごく気にするもんね」

ずるぼんに抱きかかえられながら、ミリアが素晴らしいながら首元をすりすりしてくる。

「礼儀は大事だからな」

「それを弁えておるなら問題ないわい。ふつうにしゃべればよい。あれじゃ、師匠というよりは、同志とか仲間に教えてもらおうと思えばよい」

「ふう、わかりま……わかったよ。礼儀や敬意を欠くのは調子にのつてるみたいで嫌なんだけどなあ」

「でもわたしはちよつとホツとしたかも？ あまり堅いのは苦手だもん」

「ミリアちゃんは、ありのままでもいいのよ。可愛い子が妙にかしこまつちや変よ。あと、私のことはお姉ちゃんって呼べばいいからね

？」

「う、うん……」

今後の方針も決まり、自己紹介も終わった俺達は、ワイワイと騒ぎながら親交を深めていくのだった。

## 学習

宿の部屋で影夫はテーブルに突っ伏し頭を悩ませていた。

そんな彼にコツンとゲンコツが落とされる。

「こりゃ。また間違えとるぞ。ここのスペルはこうじゃ。文法の訳もおかしい」

「あ、ごめん。えーとこれは……あ、そうか大地の精霊って解釈すればいいのかな？」

ふむふむ、と感心しつつ、ノート代わりに購入した分厚い白紙の本に羽ペンを走らせて翻訳文と表現をメモしていく。

しかし、と影夫はごちる。魔術言語は妙に持つてまわったような言い回しが多い。詩的表現というか慣用表現というか……直訳では意味がわかりづらいので、覚えるのが大変だ。

「そうじゃ。しかし妙な感じじゃのう。伝説の武具とやらに魔術文字の講義とは」

そう言ながら、伝説の武具のう、と疑わしげに一瞥してくる。影夫は今魔物の姿である。でろりん達には装備形態とは別に普段の形態があるとして説明済みだ。

まぞっほ以外はそういうものかと素直に受け入れたが、まぞっほは邪気でも感じているのか少し疑わしげだ。

神の作った云々という嘘を見抜いたのかもしれない。とはいえ警戒や敵意はないし追求もしてこないからお互いに何も言わないが。

「いやあ俺の方が変な違和感があるよ。修行から逃げたって言ってたけど、ものすごい知識量だ」

「馬鹿モン、わしが苦手なのは実技と実戦じゃ。こういう座学は弟子の中でもピカイチじゃったんじゃぞ」

おほん、と胸をはるまぞっほ。しかし得意になるだけはあ。現に影夫はすごく苦労しているのだ。

影夫としては前世で苦手だった英語のほうがよほどシンプルでわかりやすいと思っていた。

そんな難解な魔術言語も古代語もばっちり読めてしまうまぞっほ

は本当に凄い。さすがに完璧ではないが、資料探しや推測も得意なので、解読作業はお手の物なのだ。

「そりゃ助かるよ、これで古文書や高度な呪文書も読める」

「別に教えるのはいいんじゃないが、おぬしは魔法使いの呪文がほとんど使えぬというのに酔狂な奴じゃな。おそらく見つかる呪文の多くは使えぬぞ?」

まぞつほが理解できないとばかりに、怪訝そうな表情でしみじみと言ってくる。

まぞつほも自分と同じで無駄な努力とか嫌いなタイプなのか。と影夫は内心想いつつ、同類からの疑問に苦笑で答える。

「別にいい。俺が覚えるのはミリアに教えるためだからな。こういうの苦手らしいから代わりに俺がやらないとダメなんだよ。それに何でも子どもにやらせて怠けてる大人とか最低だろ?」

「殊勝な心がけじゃな」

「やめてくれよ、当たり前のことだよ。それとな、大人の俺なら難しい事も噛み砕いて要点だけ伝えることができる。効率の面でもこれがベストだよ」

ひげをいじくりながら、なるほどのう、と感心したように頷くまぞつほ。

「そうか。なんていうか、りっぱな保護者じゃのう?」

「まあーな。つとすまん。ここは、どういう意味だっけ?」

「どれどれ……ってここは前にも教えたじゃろ」

「あーすみません……」

頭を悩ませつつも影夫は必死で言語習得に励むのだった。

☆☆☆☆☆☆

まぞつほの授業が終わると次はずるぼんからの授業である。

ずるぼんに教わるのは僧侶としての基礎や、呪文の扱い方などだ。

今までは本を見ながら自己流であったからやっぱり問題は多かった。

「ホイミー!」

「ちよつ、馬鹿！ そんな力任せに魔法力を叩きこんでどうすんの！  
攻撃呪文じゃないのよ、加減しなさい！」

「ええっ？ でも前はこれで上手くいったんだけど……」

足を怪我した子猫を相手に回復呪文の練習中。

呪文を掛けるなり影夫はするぼんに手をはたかれて怒られてしまった。

「それはたまたま問題が出なかっただけよ。今後はこんな回復呪文の  
掛け方したら絶対にダメなんだからね」

「うーん。早く治ったほうがいいと思うんだけど」

怪我をしている状況は一刻を争う事態が多い。

特に激戦の最中とかだったら悠長に回復できないだろう。

原作でもレオナのベホマの回復がすぐにできなかつたりしていた  
が、ああいうのはまずいんじゃないか。と影夫は思ってしまった。

それだけにするぼんの言う事は理解できても納得できなかった。

そんな影夫にするぼんは、大きなため息をついて真剣な表情にな  
る。

「いい？ 肉体が受け入れられる回復の速度と魔法力の量つてのがあ  
んのよ。特にベホイミとかベホマを使う場合には絶対気をつけなさ  
い。助けようと思った相手を殺したくなければ患者の状態を良く見  
極めなくちゃダメなのよ。分かった？」

真面目な表情で諭してくるするぼんに言われて、影夫もようやくピ  
ンときた。

原作でもあった過剰回復を恐れているのだろう。

「ごめん。俺がアホだった。要するにマホイミになっちゃうってこと  
だな。そりゃあたしかに危険だよな」

「はあ？ マホイミ？ なによそれ」

するぼんはマホイミを知らないらしく怪訝な顔だ。

使い手が居なくなつたと原作で言ってたくらいだから知らないの  
だろう。

「古代の大僧侶の切り札呪文だったけかな。敵に回復呪文を過剰にな  
るまで掛けるんだよ。くらつた奴は回復しすぎて死ぬ。回復のし過

ぎで死ぬんだからもはや助かる手はなくて文字通り必殺ってわけだ」「な、何よそれ……なんでそんなひどいこと考えつくのよ、そんなの、おそろしいどころの話じゃないわよ……」

影夫の話をきいてずるぼんは顔を真っ青にしている。こういう反応をみるに、意外と常識人なんだなあと思ふ。

「ま、相手が死ぬまで呪文をかける必要があるから魔法力の消費はベホイミの数倍で多用はできないし、使いどころが難しいらしいけどな」

「……もういいわ、そんな物騒な話は終わりよ。さっさと練習にもどんなさい！」

「わかった……ホイミ」

「こら！ 今度は魔法力を弱めすぎ。それじゃあちゃんと回復しないわよ。それに、手元が雑になってる！」

「難しいなあ……」

ずるぼんはなかなかのスパルタぶりだった。

と言つても言葉がきつめなだけで、教え方も意外なほど丁寧である。

影夫は盛大に怒られて凹みつつも、修行に励んでいくのだった。



## 修行

影夫が苦勞している頃。ミリアは宿の中庭で、でろりんと訓練をしていた。

「やつ、はあっ！」

「ダメだ、力任せになってるぞ、もつと丁寧にやれ。それじゃあ簡単にいなされる。ほれっ」

ミリアが訓練用の木剣ですばやく斬りかかるが、でろりに軽く払われ、剣先をそらされた。

訓練なので暗黒闘気の使用はなしというルールになっている。純粹の剣術の勝負となると素人であるミリアはでろりに手も足もでない。

「きや!?! くう……このおっ」

「おっ、そうそう。そんな調子だ。だが今度は足元がお留守だな。てりやつ」

「わわわっ!! もうっ! ややこしいっ難しいっごちやごちやしていやっ!」

足払いで地面にごろごろと転がされ、苛立つてうーうーと唸るミアア。

彼女は今まで主に力押し of 戦い方をしてきたが故に、剣術のような技術は、とてもめんどくさくてまどろっこしく感じられるのだ。

「ま、嫌ならお前のやり方でもいいぞ。でもな、それじゃあ俺に負け続ける。言っておくが俺は大して強くない。そんな相手にいいようにされているのかよ?」

「ぐくっ、まだまだあっ！」

でろりに軽く挑発されると、ミリアは悔しげに顔を歪め、負けじと飛び掛かっていった。

そんなミリアをでろりんは少し眩しいものをみるような目で見つめる。

「いい根性してんなあ。その意気だ。お前は筋がいいぜ、俺とは違っ

てな。負けん気と根性つてのは大事だ。凹まされてへこたれる奴は中途半端にしかねえ。俺みたいにな」

「てやあつ！ はああつ！ このこのおつ！」

ミリアはでろりんにも何度か斬りかかり、すばやさを重視しての連続攻撃をしかけていく。

小さい猟犬が必死に獲物に食いついていくようにミリアはでろりんにもいくらか防がれようとも、攻撃の手を止めなかった。

「このつ、ううつ、やああつ！」

「……聞こえてねえか。一心不乱のひたむきさつてのも、大事なのに俺に欠けてるもんだよな」

そのうちに、ミリアはただ闇雲に斬りつけるだけでなく攻撃に変化をつけ始めた。

「はあつ、はあはあつ……！」

斬り上げからの振り下ろし、横薙ぎからの斬り返し、突きからの変化など、手数と変化をつけて、どうにかしてでろりんを翻弄しようとミリアは懸命だ。

連続攻撃で呼吸は乱れ、肩で息をするほどだ。頭も朦朧としているだろうに、ミリアはどうすれば攻撃が当たるか、あてられるか必死で考えて攻め手を実行していく。

「へえつ、やるじゃねえか……上達が早いな」

雑にならないようにミリアなりに意識をしつつ、懸命に剣をふるって、でろりんに一撃を入れようと頑張り続けた。

「ふうつ、はっはっはあ、ああつ……！」

「すげえな……」

数分か数十分か。酸欠に近いほど息苦しいミリアにとって永遠にも感じられるくらい攻撃を続けていると、気迫が天に通じたのか、でろりんが少し押し込まれて後ずさった。

それをチャンスと見たミリアは烈火のように攻めかかっていく。

「でもなあ。師匠の真似事なんざしてるんだ。俺にも意地つてもんが出ちまうよな！ ふんつ、はあつ、とあああ！」

だが、やはり経験の差は大きかった。

「でろりんが剣先をひねってミリアの剣をはね上げ、足で蹴り飛ばすとそれで勝負は決まってしまった。」

「あ、ぐっ……」

ミリアにもう立ち上がる余力はない。

地に這いつくばったまま、ただ呼吸を荒くして、滝のように流れていく汗に塗れるばかりだ。

「ふう……今日はここまでだ。後は基礎訓練をやって体を休めておくんだぞ。クロスが言っていた筋トレと柔軟運動も忘れずにな」

「はあっはあっはぐっ……う、んっ……あり、がとう……ごさい、ました……」

「おう。明日もここに来るようにな。へろへろが修行をつけてくれるから」

でろりんが立ち去った後も、地面に大の字で寝たまま息を荒げ続けるミリアは突き抜けるように青い天を仰いだ。

今まで、ミリアは影夫とふたりだけで、魔物や賊と戦ってきた。

アバン相手に不覚をとることもあつたが、それでも自分はかなり強いんだと思っていた。

でもそれは大きな間違いで、まったくのダメダメであつたと自覚させられた。

「がんばらなきゃ……」

ミリアは悔しいと思う反面、分かって良かったとも思う。これが戦場だったら、そこで終わってしまったのだから。

ミリアと影夫は一心同体。ミリアがふがないと影夫の身も危うい。

影夫は、本来は他人であるはずの自分のためにすごく頑張ってくれている。

だから自分もつと頑張らなきゃだめなんだと、彼女は身体に活を入れて立ち上がった。

「……くうっ」

疲れ果てた身体は痛みという悲鳴を上げるが、それを噛み殺して、ミリアは自主訓練と筋トレを続けていくのだった。

☆☆☆☆☆☆

「戦いの中で自分で学べ。どうにかして俺を倒してみろ！」

へろへろは開口一番そういつて、木剣を構えて突進してくる。

それはミリアとしても望むところであった。先日でろりんが散々転がされたが、そう言われるまでもなく、思いつきりやってみたかった。

だからコクリとうなずくとミリアはすぐさま木剣でへろへろを迎え撃っていく。

「でりやああー！」

「ぐあうっ！」

「ふんぬっ、ふはあっ、とああああっ！」

「あぐっ、くっっ！」

さすがは戦士といえる力をもって攻めてくるへろへろにミリアは防戦一方だ。

体重移動や受け流しの技が未熟なため、両手持ちにした木剣で攻撃を正面から受け止め、足を踏ん張って耐えるしかない。

しかしそうするとミリアの持ち味である速度が殺され、反撃の暇がないのだ。

「そらっどうした！ まだまだいくぞー！」

「うあっ、はあっ、くっ、たあああっ！」

「甘い！ おかえしだ」

どうにか隙をうかがい、でろりんがやってきたように、足による一撃でへろへろの体勢を崩し、たたみかけようとする。

「きゃあああっ?! はあはあ……」

だが軽い一撃では受け止められしまい、逆に反撃を受けて吹き飛ばされる。

「寝るんじゃないすぐに立て！ 敵は待つてくれないぞー！」

「ぐうううっ、はあっ、うあっ、でりやああ」

ミリアは跳ねるように起き上がって飛び掛り、がむしやらに斬りつけていく。

力ではへろへろに敵わないので大振りではなく、小さな動きで急所

を狙いながらすばやい攻撃を繰り返した。

「そうだ！ 追い込まれた時ほど攻勢に出ろ。下手に守ってもジリ貧だ！ お前ならにできる！ やってみせろ！」

「うんっ！ たあああっ！」

勢いにのったミリアだったが、攻撃に夢中になるあまり無防備に隙を見せてしまい、へろへろの鋭い一撃を胴に食らって地面に叩きつけられた。

「あぐあっ!?!」

「防御が疎かだ！ 攻勢は捨て身じゃないぞ！ 相手の反撃は常に意識しろ、ギリギリを見極めて攻撃させるな！」

生まれたての小鹿のように足を震わせながら、すぐに立ち上がったミリアは剣を構え、再びへろへろに立ち向かっていく。

「ぐうっ、このっ、このこのっ、てりやあああ！」

「いいぞ。いい気迫だ。お前は強くなる。限界を超えろ！」

へろへろにも次第に熱が入ってきたことで、この修練は終了時間を定めずに延々と続いていくことになった。

結局、日が暮れたあたりでミリアが一步も動けなくなるまで続いたのだ。

## 変化

「989、990、991、992……」

深夜、訓練で疲れ果てた影夫とミリアが宿の部屋でぐっすりと眠っているとき、でろりんは愛剣を握り締め、宿の中庭で素振りをしていった。

「ちよつとどうしたのよでろりん。あんたが鍛錬なんて珍しい……」

妙なものを見たといった怪訝そうな表情でずるぼんがその場に現れ、でろりに話しかける。

幼い頃からの腐れ縁であり悪友でもあるずるぼんにとってもそれほどに珍しいものだったのだ。でろりんが真面目にコツコツ練習をしている、というような光景は。

「んー、まあ。ちよつとくらいやつとかねえとな。教えるってのは柄じゃねえし、難しくてな。教えれば教えるほど自分の粗が見えてたまらねえんだ」

「へえくふうん。それで熱血してんのね。ま、珍しいというかなんていうか……正直、似合わないわよ?」

「うっせえ。自覚はあるっての。口だけで女の子の弟子に負けてるのなんざ大人としてカッコ悪いんだよ」

「男の子の意地って奴? あんたも可愛いところあるじゃない。もつとひねくれた奴だと思ってたけど?」

ニヤニヤとずるぼんがでろりんをからかった。

だが、でろりんは逆にずるぼんを指差し、ニヤリと笑う。

「ま。自分でも意外だよ。てかお前の人の事いえねえだろ」  
「う……」

「あのずるぼんが、瞑想とはねえ。金とオシャレにしか興味ないんじゃないのか?」

そう、ずるぼんはずるぼんで深夜だというのに僧侶の正装をして、手には聖本まで持っている。

それは僧侶が瞑想修練の際に好んでする格好だった。

つまり彼女も自主訓練に励むつもりだったということだ。

「う、うっさい。別にいいでしょ。あ、あたしも曲りなりに先生なんだから、勉強しないといけないのよ」

「ほー。ずるぼんセンセも大変だねえ。気持ちはわかるけどよ」

ずるぼんは柄でもない努力を揶揄されて恥ずかしいのかプイッと顔をそらしつつ、話題をそらすように真面目な顔を取り繕う。

「だ、大体クロスが悪いのよ。なんなのよあいつは。アホみたいにやる気満々で、叱られても怒鳴られても頑張っちゃってさ。気迫が並じゃないっていうか……ちよつとおかしいくらいよ」

「そりゃ同感だな。魔王も消えて平和になったつてのにあのふたりの必死さはなんだ？ 食うに困ってるってわけでもねえのに、レベルアップの速度が尋常じゃねえよ。おかげですぐに追い抜かれちまいそうだし」

「ふおっふおっふお。まあ出来る弟子をもつと師匠先生は辛いつてことじゃのう」

お互いに愚痴を言い合うでろりん達のもとにまぞっほも現われる。

その手には魔道書があり、杖も持っている。

どうやら彼も魔法の練習でもしようと思われたらしかった。

「なんだまぞっほ。お前もかよ」

「そうじゃよ。兄者に教えておった師匠もこんな気持ちじゃったのかのう……安穩としとつたらあつという間に先生から弟子へと転落じゃ。年寄りが子供の弟子になったらこんなに恥ずかしいこともないわな」

まぞっほは、ふうとため息をついて、長年愛用している杖で宿の廊下から中庭へと出てきてでろりん達の方に歩いてくる新たな人影を指し示した。

「ほれあつちをみてみい。へろへろも同じみたいじゃな。アヤツも年上の意地じゃろうなあ」

そう。これは年上の意地だ。意地の一念で元気いっぱい若い連中に負けてなるものかと珍しくも皆が努力している。

影夫とミリアのひたむきで純粋な頑張り方は何故か周囲を巻き込んで、俺も少しはやるかと駆り立たせるものがあつた。

お互いのために努力し合うふたりの姿は、すごく純粹で綺麗なものに見える。

純粹に頑張っていたころの自分を思い出してしまうのかもしれない。

「何でも中途半端で、途中で投げ出しとったワシらが、どこまでできるかわからんが……ちつとはきばってみるかのう」

「はあく……あたしは熱血とか努力ってガラじゃないのに」

「ははは、そりやワシもじゃ。なんだかぬしらとは何かと気が合うのう」

「ああ。なんつーかこう、お仲間って感じがするよな。依頼が終わったら正式にPTでも組むか」

「「異議なくし！」」

「ほっほっほ。息もぴったりじゃ」

でろりん達は親睦を深めつつ、各々が研鑽に励んでいく。

ミリアと影夫を弟子として教えていることで、彼らも少しずつ影響をうけて変わっていくのだった。

☆☆☆☆☆

影夫とミリアの宿の部屋。

粗末な木テーブルを何個もに並べて作った即席のダイナーテーブルの上には山のような料理が並べられており、猛烈な勢いでミリアと影夫がそれらを平らげていた。

「んがごくむしゃぱくっ!!」

「がつがつがつ!!」

「お、お前ら滅茶苦茶食うなあ」

「食べる量と体の大きさが明らかにおかしいんじゃが……」

「もう！ほんとにどんだけ食べるのよっ。作っても作っても追いつかないじゃない！」

宿の自炊所から料理皿を運んできたずるぼんが、乱暴に部屋のドアを開けて影夫を怒鳴りつけた。

「っていうかクロスは武具の癖になんでご飯を食べるのよ!? あんた絶対におかしいわ！」



喚くずるぼんの気持ちがでろりん達にはよくわかった。

彼らもいくらなんでもとあきれていたのだ。

「ぼんはほほっひっへも、くへるほほはほーはへーはろー！（そんなこといっても食えるモンはしよーがねえーだろ）」

「もうっ、何言ってるかわからないわよ馬鹿！ 食費はあんたらが全部出しなさいよ！」

ずるぼんは、可愛がっているミリアの前でお姉さん気取りで炊事食事を買ってでていたのだが、まさかふたりがこんなに食べるとは思ってもいなかった。

今までは宿の自炊所は使わず、各々が適当に外食をしていたので分からなかったのだ。

「はっへ、はらはほふふるはめひはっ、ひふほうはんはほんへっ！ ほひいはんっ！（だって身体をつくるためにはひっつようなんだもんね、お兄ちゃん）」

「ほうだぞっ、んぐっ、ひふいふひようほあほは、ひぬほろふう！ ほれはほやくほふはんはほっ！（そうだぞ、きつい修行の後には、死ぬほど食う！ それがおやくそくなんだぞ）」

「飲み込んでしゃべりなさいよ馬鹿クロス！ 汚いでしようが！」

飯を食いながら大声で主張する影夫をずるぼんが空のお盆ではたいた。

たしかに汚いし行儀も悪かった。

テンションが落ち着いた影夫はちよつと反省しつつ、ジョツキに入った果実汁をぐくぐくと飲み干して口の中の食べ物を胃に流し込む。

「んぐっぐくふはあっー。すまんすまん。てかお前らももつと食えよな。死ぬほど修行して、精一杯頭も使って、たくさん遊んで、しこたま食って、いっぱい寝るのが強くなる極意なんだからさ。かの亀仙流がそうなんだぞ？」

「はあ？ カメセン流？ んな流派きいたことがねえぞ」

「武道の流派か？ 武神流なら聞いたことあるが俺もしらない」

「わしも知らんのう……」

「その、なんだ……掲載誌も同じだし、強くなる原則も大体一緒だろ、たぶん。だからこれがベストなんだよ!」

「あんたがナニを言っているのか、わけがわからないわ……」

「あむつ。ごくつ。お兄ちゃんはたまにわけがわからないことをいうけど、気にしないでね。まあ独り言みたいな感じ? だから」

でろりんの疑問を華麗にスルーして、熱くなった影夫が前世の人間しかわからないメタなネタをペラペラしゃべる。

影夫は、どうせ分からないだろうとテンションに任せてデタラメ言っているのだ。

「でろりん達も最近頑張ってるんだろ? じゃあもつと食わないとな。安心しろ、食費は全部俺らが出すから食い放題だ!」

「おおつ、マジか!」

「食いだめだ! くうぞおおー」

「ワシもたまには腹いっぱい食べるとするかのう」

まあ高級食材をふんだんに使ったりでもない限り自炊の金額はそれほど大したことはない。

これまで、あまり積極的に依頼をこなせなかったらしく、でろりん達は装備と日々の生活を維持するだけで結構カツカツで節制生活だったらしい。

なので、影夫のオゴリ宣言に男連中は素直に喜び、さっそく影夫達と一緒に料理をかきこみはじめた。

「っ……うう……」

だがずるぼんだけが、料理に手を伸ばそうとしては引っ込めて、迷っていた。

体重でも気にしているのかと思うと、可愛いところもあるんだなと影夫が思う。

ずるぼんといえば容姿は平均以上なのに、その性格や顔芸により残念美人といった印象を影夫は持っていた。

しかし、実際に接してみると、口うるさくて罵倒まじりながらもなんだかんだで面倒見はいいし、家事全般も普通以上にこなせる。

服や宝石が大好きで、浪費癖があるものの、生活が破綻しない程度に自制できる理性もある。

ずるぼんは、実はかなりの嫁力をもつ女性なのだ。

こんな具合に影夫の中でずるぼんの株は上昇中なのであった。

「遠慮なく食べばいいって。いつも世話になってるから気にするなよ」

ただし、あまりにも気安い感じと微妙な残念ぶりから恋愛対象として影夫は見えない。

逆に言う大変な緊張や舞い上がり方をせずに済み、リリースの時のような醜態をさらさずに済んでいた。

「体重なんてきにすんなって！ 食ったらその分動けばいいんだから」

「そ、そうかしら？」

「そうなんだよ！ ま、食ってから考えればいいって」

「でも作るのが忙しすぎて食べる暇ないんだけど」

「あーすまん。俺はもう食べ終わるからこれ以上は作らなくていい。

次からはちゃんと俺とミアも料理を手伝うよ」

「俺も手伝おう。こう見えて、家事は得意だ」

「一緒に食べようよ、ずるぼんお姉ちゃん！」

「ごいつもこういつてんだ、ずるぼん。思い切り食いまくろうぜ!!」

その場の全員にすすめられ、ずるぼんも皆に混じって食事を楽しんでいった。

## 成果

「えっと、この訳はこういうことでもいいのかな？」

「いや、違うぞ。ここは特殊な活用形の種類で……こう読むんじゃないかの。ほれ、ここに意味がつかっているじゃろう」

「あ！ ほんとだ。うーんそことのつながりは盲点だったな。いやあさすがお師匠だ」

「ほっほっほ。ま、たまたまじゃよ。それでのここの解釈はワシはこうじゃと思うのじゃが……」

「あ、ここかあ。ここはたしか……この本に注釈があったと……えーと、あっそれで正解」

影夫はまぞっほと共に古文書の解読に挑んでいた。

覚えたての語彙を駆使して、解読メモやノートを見ながら、少しずつ読み解いていく。

難解な表現や擦れたり破れて読めない部分を推測したりで四苦八苦しつても一定の成果をあげていた。

「しかしお主は一体何なんじゃ。あっという間に魔術言語も古代言語も身につけるとは」

「いやあ自分でもびっくり。本来努力は苦手だけど命が掛かっているし、今は守るものもあるからなあ。必死にならざるをえないんだよ。っと。ここの意味はと……えーとたしかこの本の……あ、ここか。ふむふむ」

「しかしこの付箋というやつは便利じゃのう。本がベタつくのがたまに傷じやが、よくこんなのおもいつくわい。すごいこのう」

「解読を効率的に進めるにあたって影夫は手作りの付箋を作り、活用していた。

とはいえ、前世世界にあったもののほどの機能性や便利さはない。

この世界の糊をつけると張り付いてはがれないか、べつとりと糊が残って汚れてしまうからだ。薄めた糊で代用しているが、本にダメージを与えてしまっている。

それでも便利なので目をつぶっているが。

「いや、知ってたものを再現しただけだって。まぞっほ師匠の解説のほうで凄いつて。表現も分かりやすいし、意識にしても今風にしつつ元の意味も損なっていない。才能ってやつだなあ」

「腐ってもお師匠じゃからのう。もつとも、実技はもうミリアに負けておるがな……」

そう、呪文の威力においてすでに現時点でミリアはまぞっほを上回っている。

これは集中力もあるが、精神面も大きく影響していた。心から強くなりたいたいと思つて必死に頑張っているから伸びるのも早かつたのだ。

あとは資質と適正の差だろうか。ミリアは戦闘……それも攻撃に關してはやたらと勘がよかつたり異様に上達が早いところがある。

「まあそれはひとそれぞれでしょ。ミリアは逆に座学が大の苦手で古文書の解説なんか絶対に無理だろうし。得手不得手つてやつ。師匠は座学に、ミリアは実践に秀でてるつてことですよ」

影夫が羽ペンを口にくわえ、うーんと解説作業を続けながら、かるーいノリでしゃべくる。

まぞっほは師匠として複雑な気持ちのようだが……影夫は前世で誰かに負けるなんてことは山のように経験したし、年下や後輩に負けることも普通に何度も体験してるので慣れたものだ。

それとは逆に、どんなに努力しても、所詮は器用貧乏でしかないはずの影夫に勝てない人も見てきているので、彼はもうどこか達観していた。

羨みや嫉妬はあるが、ある意味しようがないと諦めて他のことにめをむけることを覚えている。

それに、反則ぞろいの大魔王軍の侵略が数年後に迫った切羽詰った状態におかれていると、嫉妬や苦惱で時間を浪費する贅沢はできなかった。

ミリアのためにも才能ががどうたらとウジウジするよりは自分には何が出来るか、どうやって先を目指すかを考えたほうが建設的だ。

「まあ世の中にはどっちも出来るすごい奴もいるがの……」

「いや、そんなのは一握りの超天才でしょ。んなのと比べるだけ無駄

だよ」

でろりんもそうだが、偽勇者PTは皆一様に自己評価が低い。

影夫も前世でそうだったから気持は分かる。自分の事が信じられないのだ。

辛いことから逃げ出している後ろめたさと自覚からどうしても自信が持てない、自信が持てないから逃げ出してしまふ、この悪循環だろう。

「大体お師匠は充分に天才だって。座学は抜群に出来るし、実技も人並みの魔法使い以上にはこなせるじゃないですか。世の人間なんて大抵は人並みかそれ以下ばっかりなんだから」

克服するためには、どこかできつかけを作り成功体験を積んで少しずつ自信をつけねばならないだろうが挑戦することに臆病になつていとそれもままならなかった。

影夫は少しでも彼らを後押しする意味もあつて、多少大げさにまぞっほを持ち上げる。

「そんなもんかのう」

「そんなものなんです。以上、雑談終わり。解説を続けましょう。いやあ今度はどんなすごい呪文なのかなあ。楽しみだ」

これまでに影夫とまぞっほは、高度な呪文書や古文書を読みあさつて多数の呪文の契約と使いかたを発見していた。

この時点でメラゾーマ、ヒヤダイン、マヒヤド、イオナズン、ラリホーム、シャナク、フバーハ、マホキテ、マホステ、アストロン、モシヤス、レムオル、アバカムを見つけていた。

原作でアバンやマトリフや三賢者が教えたり使ったりしていたから普通にあると思つてた呪文が失われた古代の呪文であつたりして、新鮮な発見があつた。

いくつかの呪文は、学者や大魔道士や国に仕える重鎮だからこそ知りえたわけだったとは……

「しかし、名のある魔法使いは呪文大全とか纏めて出版しないのかよ？ 古文書を漁ることではしか見つけられない古代呪文がいっぱいあるとかほんとに一体どうなつてんの？」

影夫の大きな疑問にして不満がそれである。高度または珍しい呪文の知識が共有されていない。

だから知りたいと思った人間は全員が1から古文書を漁って調べることが出る。こんなに馬鹿らしいことはない。当然入手困難な古文書にある呪文は失伝寸前か、細々と弟子に伝授される程度だ。

古文書は経年劣化や災害で失われる一方で増えることはなく減る一方だ。

こんな状態で集合知もなにもあったものじゃない。数と連携という人類の利点を完全に無駄にしている。そのことが影夫は実に腹立たしかった。

「いや、それで普通じゃろう。俗人なら苦勞して得た知識を簡単には他人に渡さんじゃろうし、善人なら力をむやみに広めるのは争いを生むとして公開を控えるじゃろうからな」

「いやだねえそういうの。こういう知識は共有して広めるべきだよ絶対。それをしてれば絶対前の魔王戦も何割か楽になったはずなのに。そりゃ悪用はされるかもしれないが収支は絶対プラスだよ。可能性を恐れるよりも発展を望むべきだ」

前世の影響もあって、現代的な視点で心底影夫はそう思う。

「そもそも知識や研究とかってのはある程度情報公開をして有能な連中が相争わないと発展しないぞ。特許とか著作権とかがないからかもしれないけど……後で俺が絶対に纏め本を出してやる！」

「それも口語文で記述して凶案も入れまくった超分かりやすい実用書としてだ！ 字が読めない子供でも理解できるのが理想だな。呪文という素晴らしいものをお高く止まった連中の遊び道具ではおわらせん！」

影夫は気炎を吐いて暗い情熱を燃やす。既得権益もリスクもしたることか。進歩と発展のために犠牲はつき物なのだ。

「変わった奴じゃのう……そんなものを作ったら、世界中から敵視されるというのに……ワシの名前は絶対に入れるんじゃないぞ」

「ま、実際に未熟な子供にイオナズンを教えても使えないんで意味ないんだけど。最初は入門レベルの呪文書をさらにわかりやすくした

ものかな？」

「やれやれ、ワシは本当に一切協力せんから勝手にやるがいいわい。それで、解読の方はやめるのかの？」

「いやー！解読が優先！失伝呪文や秘呪文を見つけ出し、身につけ操る！それが男の浪漫ですから！お師匠も胸躍るでしょ？自分だけの秘呪文を数多操り、敵を翻弄する大魔法使いになるんだぞ！」

「ほっほっほ。たしかに年甲斐もなく燃えてくるのう。よし、ワシも本腰をいれてみるとするかの」

「さすがあー！いよつ、スペルマスターまぞつほー！」

影夫はまぞつほをのせて、ふたりはその日の遅くまで古文書解読にいそしむのだった。

☆☆☆☆☆☆

「ベホイミ……」

影夫が手で抱いている大きい野良猫にベホイミをかける。折れていた両足が治り、擦り傷切り傷なども綺麗に治っていく。

その様子をよこでじつとみていたずるぼんだが、回復呪文が終わるなり、満足げにうなずいた。

「うん、問題はないわね。今日の授業はこれで終わりよ、ご苦労様」

「痛いところはないかい、猫ちゃん？」

腕の中の猫を撫でさすりモフリながら、影夫は姿勢を崩してだらりとだらける。

「うーんやつぱり猫はいいなあ。そういえば前も怪我猫だったけどどうなってるんだ？」

「ベンガーナは栄えた街だから馬車もよく走ってるの。犬は避けたら、馬車が通らないところを抜けたりするんだけど、猫はなんでかよく轢かれちゃうのよね」

「あー猫は後ろに下がれないとかいうやつか。可哀想な習性だよな」

ニャーニャーと影夫の手の中で鳴いている猫をさらにモフモフなでさすり頬ずりしながら影夫がごちる。こう見えて影夫は猫派だった。



「フシャーー!」

「いででっ」

過剰なスキンシップに怒った猫に引つかかれ、悲鳴を上げた影夫が地面にべたんと横たわった。

魔物形態なので、力を抜いて寝転がると影夫の体はびろーんと伸びて、本当に影みたいになる。

試したことはないが影に擬態したり、影から影へワープしたりできるかもしれない。前世での創作物のネタ的に。

「なにやってるのよ……」

「失敗失敗。しかし、回復呪文って、気疲れが凄いやな……危なくなないように手早く回復呪文をかけるのって超しんどい」

「そりゃあそうよ。でもパプニカで習ったりしたらもっと大変なんだから。動きに全部型があつてね、何年も練習させられたりするのよ?」

「なんでそんなことを? 別に動きがどんなでも効果は同じだろう? あ。もしかして何か効率的な動きがあるとか、深い教えなのかな?」

「違うわよ。あそこは歴史も深いし格式高い国だから儀礼や儀式に呪文をつかうの。だから見た目がとても大事なのよね」

「うへえ。そういうの絶対やだなあ。見栄えのためだけに型の練習つて」

パプニカで呪文習わなくてよかったとしみじみする影夫。

もつとも、さらに補足してくれたはずのぼんによると、民間は実用重視な使い手もいっぱいいるらしいから一概には決め付けられないみたいだけど。

「あ、ところでさ、レベルってあるのか? ほら、なんていうか、強さを表すやつ」

「はあ? んなのあるに決まってるでしょ、あんた教会行ったことないの?」

何を当たり前前のごとを、と怪訝そうな顔で影夫は見つめられる。

そんな顔をされても影夫にはどうしようもない。教会にいくわけ

にはいかないがそれを認めてしまうのも問題だろう。

「きよ、教会はちよつとまずいんだよ……」

「あんた、何やったのよ？ シスターに痴漢でもした？」

「うぐつ」

「したんだ？ ふーん」

へーほーふーん、と軽蔑のまなざしが飛んできて影夫は針の筵だ。

ミリアがこの場にいらなくてよかった。もし一緒になってやってきたら罪悪感で死んでしまうかもしれない。

「ち、違うってそれとは違う理由でいけないんだよ。そうだ、ずるぼんは俺のレベルは見れないのか？ 神のおつげでレベルが分かるんだろ？」

「んなの無理に決まってるでしょ。長年修行するか、よほどの素質がないとあんなの出来ないわよ。大体私は僧侶であって、シスターじゃないの！ やり方だつてわかんないし」

「じゃあ試したことないってわけか。よし、じゃあやってみようぜ。出来るかもしれないし。ほら、教会で使うおつげの書もあるから、試してみようぜ！」

ジャジャーンと効果音をつけながら、一冊の本をずるぼんの前に叩き置く。

「やってみるのは別にいいけど。ってなんでそんなものを持つてるのよ……」

「闇市ってすげーよな？」

「盗品じゃないの！」

「馬鹿、人聞きが悪いことをいうなよ。俺はちゃんと確かめたけど正規の放出品だつて言ってたぞ。この出会いを神に感謝だな」

「そんなわけ……はあもういいわ」

ぬけぬけと影夫が言うと、盛大なためいきをついてずるぼんはおつげの書を受け取った。

……数分後。

どよよん、といった空気があたりを支配していた。

「はあーやつぱりあたしには無理だったわね」

「いやあそうでもないって。レベル数は分かったし。レベル15かあ。まあーまだまだだな」

「充分だと思うけど。熟練兵士でも2桁になってる人は少ないわよね？」

「逆にそれは低すぎるだろう……しっかし成長についてはよくわからねえよなあ」

前々からの疑問を口に出す。

今までずっと影夫は余裕で倒せる相手と戦っても殆ど成長していない気がしていた。

逆に苦戦した場合は力量が伸びている。その因果関係が気になってついこの世界について訊ねてしまう。

「何がよ？」

「いやあさ、スライムばかり倒しても成長できないのがなあ」

「別に不思議でもないでしょ。レベルが上がるかどうかはその戦いが経験と成長の糧になるかどうかってことなんだから」

「うーん。」

「何の苦労も努力もせずスライムを倒しても、それはもはや戦いじゃなくて作業なのよ」

まったくもってその通りで反論のしようもないその影夫は沈黙するしかない。

「……まあ言われてみりゃその通りだよな」

「楽しんでレベルアップなんて考えるなって私の先生も言ってたわよ。イケすかない先生だったけどそれは同意見だわ」

「そうかあ……」

「苦労すればするほど、苦戦すればするほど、敵が強ければ強いほどレベルはあがるのよ。現実ってホントいやよね」

「まったくだ。楽しいゲームも現実になったとたんこれだよ」

「レベルアップっていうのはね、魂の成長らしいわよ。魂を成長させるんだから苦労も当然よね」

「楽に成長なしか。耳が痛いぜ。前世的に」

影夫は前世で楽なほうに流れてしまい、その結果潰れそうな中小企業の平社員に甘んじてしまっている過去がある。

この心の痛みはよく心に刻んでおこうと思った。

☆☆☆☆☆☆

そして1ヶ月後。

驚異的な速度で成長した影夫とミリアは早くも卒業の時を迎えていた。

「お前ら本当に無茶苦茶だな！」

「あきれてものがいえんわい」

「どういう身体と才能してんのよ」

「化物じゃないのか？」

「ひ、ひでえなオイ！」

「むううー、何よみんな！」

影夫とミリアが怒りながら失礼な言葉を呆れ顔で放ったでろりん達をバンバシとはたく。

「つたく、みんな素直じゃねえな！」

「クロス達が非常識だから呆れてるだけよ」

「1ヶ月で教えることがなくなるどころか追い抜かれるとかどうなつてんだよお前ら」

「ほっほっほ。まあワシは専門が座学じゃから追い抜くも追い越すもないがのう。解説はワシのほうが得意じゃし」

「ずりーなまぞっほは。やれやれ。今日で師匠はお役御免か。今からは俺らが弟子かな」

まぞっほをのぞく3人が嬉しそうな悔しそうな複雑な表情を浮かべる。

が、その言葉には同意できない影夫であった。

「いや、そりや違うだろう。師匠は師匠だよ。力が上回ろうが何年経とうがね。それにそんだけ早く強くなったってことは、師匠が教えるのが上手だったことだし、胸をはってくれよ」

「そうだよ！ みんなのおかげで強くなれたんだよ。ありがとう！」

「俺達は絶対敬意と恩は忘れない。師匠たちのおかげで俺らは素人か

ら脱却できたんだ。だから感謝してるよ。お師匠さん達」

そういつて、ミリアとともに深く頭を下げる。

普段の馬鹿騒ぎはどこへやら。しんみりとした空気が流れる。卒業の日というのはどの世界でもこんな雰囲気であった。

その日一日は卒業の祝いということで、全員で町へ繰り出して飲み食いをしたり、まったりと過ごしたのだった。

無論影夫はミリアの身体に隠れての外出だったのだが。

## 進歩

「暗黒処刑術！ うりやああ！ おまえも死ねええっ!!」

ミリアは跳躍とともに暗黒闘気を刃に伝わらせた一撃でグリズリーの額から上を斬り飛ばすと、すかさず次の獲物へと飛びついて、首を跳ね飛ばした。

以前と違い、着地の勢いを殺さずに横っ飛びの動きに利用する等、動きに隙や無駄がなくなっている。

でろりんやへろへろを相手に訓練したことが見事に活かされていた。

「すげーなミリア。細かい動きが見違えてる！」

「グオオオっ!!」

「あはっ、おそすぎだよっ！」

「ギャウウウウッー!!」

仲間をやられて怒り狂ったグリズリーが鋭い爪を向けてくるが、ミリアは着地と同時に身を転がして回避し、起き上がり様に飛び掛ってその胴体をジヨキリと切断する。

グリズリーの胴回りは太く真つ二つに切断はできないが、脊椎を断ち切られては立っていられず、崩れ落ちて絶命した。

「ギャオオオっ!!」

「腕ええっ！ 足いい！ 首いいっ！」

続いて3体のグリズリー達が一斉にミリアへと飛び掛ってくる。

正面から差し出された丸太のような右腕を斬り落としながら、同時に影夫の凶手を使い、2体が繰り出してきた爪撃を受け止めた。

「オアアアッ!?!」

攻撃の衝撃で体が飛ばされるがそれも計算ずくであり、すばやく着地すると別のグリズリーの右足へと飛びついて、ぎつくりと斬り落とす。

片足を失い、体勢を崩して崩れ落ちる身体に飛び乗り、その首を寸断。

痛みに仰け反ったり、隙を見せたグリズリーから次々にその命を

失っていく。

「次は俺だ！」

「うんっ、がんばってね！」

ミリアの奮戦を見た影夫が張りきってミリアから自らの主導権を受け取る。

早速凶手の刀を作り出し、ミリアの左右から近づいてきていたグリズリーの首をスパンと刎ねる。

「残りはまとめていくぞー！」

「バギマ、バギマ！」

前方に群れている5匹のグリズリー達に向け影夫が両手からバギマを放ち、真空の突風で身動きを封じる。

「ミリア今だ！ あの技！」

「はあああ……きえてなくなれええっ、暗黒っ、闘殺砲お！」

ミリアは突き出した両手に全身の暗黒闘気を集めて、巨大な暗黒闘気の塊を撃ち込むと射線上にいたグリズリー達は一撃で皆殺しになった。

「よっしやー！（やったあ！）」

「あいつら、滅茶苦茶だ……」

「へろへろ！ 俺達もやってやろうじゃねえか！ 師匠の意地をみせてやろうぜ！」

呆然とミリアと影夫の虐殺劇を見ていたへろへろにでろりんが発破をかけて、彼らも戦闘体制に入る。

「熱血してるわねでろりんったら。似合わないけど。バギマ！」

「ベギラマ！」

「イオラ！！」

「殴り合いは俺に任せろ！ うおおおお！！！」

まずは呪文による遠距離攻撃が放たれると同時に、へろへろがグリズリーめがけて突撃していった。

「ギラ！ ヒヤダルコ！」

「バギ！ バギ！」

「メラ！ イオ！」

グリズリー達が距離をつめてくる間に、まぞつほが後方から次々に呪文を撃ち放ち、ずるぼんとでろりんは中衛として呪文を放って、傷ついたグリズリーにトドメをさしていく。

「でりやああつ！」

でろりん達に近づいてくるグリズリーは、前衛を受け持つへろへろが一手に引き受けている。

片手で鉄のたてを構え、その剛力を生かして攻撃を受け止めつつ、隙を見て鉄のオノで斬りかかっている。

影夫とミリアに負けず劣らず、でろりん達も順調なペースでグリズリーを駆逐していく。

「ぐうああつ!？」

「ずるぼん、へろへろを治療だ。敵は俺が！」

「はいよ、ベホイミー！」

その途中、3匹に同時に殴りかかれて防御し損ねたへろへろが吹き飛ばされたが、すかさずでろりんが前に出てグリズリー達を引きつけ、その間にずるぼんが治療に当たる。

「ずるぼん！ 一匹そつちに……」

「おつと、やらせはせんぞい、メラミー！」

ずるぼんの背後から飛び掛ったグリズリーがいたが、まぞつほの呪文によって倒される。

でろりん達は、この戦いが4人パーティでの初陣だというのに、抜群のコンビネーションを見せていた。

「おおー、師匠たちやるじゃないか。息がぴったり。まるで歴戦のパーティだな？」

「ああ、そうだな！ こいつらとはすげえやりやすい」

「またせたなリーダー！ 戦線復帰だ！ うおおお!!」

完全回復を果たしたへろへろが渾身の一撃で、でろりんが相手にしていたグリズリーの頭を鉄の斧でかち割った。

「バギマー！ でろりん、アンタは前衛のほうがいいよ！ 援護はあたしとまぞつほに任せなさい」



「りよーかい。ってリーダーは俺だぞ！」

「はいはい。それでOKでいい？ リーダー？」

「いいぞ！ でりゃああー！」

軽口を叩きながら、でろりんとへろへろはグリズリーの攻撃をいなし受け止め、斬り、殴りかかる。

「ヒヤド！ メラ！ ほっほっほ。まったく負ける気がせんもう。こんな気持ちになったのは初めてじゃー！」

まぞっほが周囲を警戒しつつ、脅威になりそうな相手を的確に妨害し、攻撃を加えていく。

「これも、クロス達との模擬戦が役に立ったのう」

でろりん達から一通り指導を受けたミリアと影夫は、彼ら4人を相手に模擬戦を何度かしていたのだ。

模擬戦も最初の頃は実戦経験の差で、ミリアと影夫が勝っていたが、でろりん達も弟子に負けっぱなしは悔しいと奮起した。

4人で連携の訓練をしたり、知恵を出しあった結果、卒業間近の頃には勝率は五分かむしろでろりん達が優勢となっていた。

連携の巧みさや息を合わせることで相手の実力を封じることがも、連続攻撃で反撃の隙を与えずに倒しきることもできたのだ。

その経験が役に立っていた。

4人が力を合わせれば、敵の集団や格上の敵でも勝ち目があると知っていることで緊張や脅えも薄れており、実力を遺憾なく発揮できてもいた。

「クロス！ 敵の残りはあとどれだけいるんだ？」

「んと、茂みの向こうから、そっちに向かってやってきているのが12体いるな。俺達のそばには6体だ。それで打ち止めみたいだ！」

影夫は周囲の邪気を感じ取り、索敵に使う。

邪悪な気配がない人間や怪物は見つけられないが、悪意や強い害意を持った相手は索敵できる。暗黒闘気リーダーと彼は秘かに名づけて呼んでいるが実に便利な能力だった。

「うっしやっ！ みんなもうひと踏ん張りだ！ 油断はすんなよ！」

「「りよーかいー！」」

でろりんがリーダーらしく号令をかけ、息を合わせて残敵を掃討していくのだった。

## 反省

ミリアの身体を借りた影夫は、ルイーダの酒場の中にいた。少し前まででかいジョッキでエールをあおって、あーだこーだとかだを巻いていた冒険者連中が、じろりとミリアの姿をねめつけている。

(相変わらず柄が悪いな……)

よく見れば冒険者達のミリアに対する反応は様々だ。

ミリアのことを知らなくて女の子がいることにぎよつとしている者も居れば、興味なさげに一瞥しただけで再び酒を傾けはじめる者もいる。

ルイーダの勘気に触れるのが怖いのか、脅えたように視線を逸らした者もいた。

そんな中、以前に絡んできたDQN冒険者どもはというと、獲物を見つけたとばかりにミリアを見るなり、いきなり罵声を飛ばし始めていた。

「ああつ？ あのガキまだ逃げてなかったのかよ！」

「期限は来月だぜ！ 逃げるなら今のうちだぞ！」

「無理して死ぬんじゃないぞ。ぎやはははは!!」

まともに相手にするだけ無駄なので影夫は一瞥もくれずに彼らを無視。

さつさと腰の道具袋から書類を取り出してルイーダへと渡す。

「依頼達成しました。これがその証明。グリズリーの素材買取の証明書です。念のため、後で調査してください。狩り残しがあれば宿にまで一報をお願いします」

「……たしかに確認したよ。依頼達成おめでとうさん。報酬はこれだ」

ルイーダはミリアが差し出した依頼書を一瞥し、カウンターの上に金貨の詰まった袋をドンと置いた。

ミリアは袋を持ち上げると中身も見ずに道具袋の中へと押し込んだ。

後は帰るだけ。影夫は糞どもの掃き溜めからなるべく早く帰りたいのだ。

「ありがとうございます」

「金額の確認はしないのかい？」

「あなたを信用していますから。小銭を掠めるようなつまらない真似はしないでしよう。するような人なら次からお付き合いはしないだけです」

「ま、待ちやがれ！」

そのまま踵を返そうとするが、DQN冒険者達に取り囲まれてしまう。

「……何の用ですか？」

「おまえなんか達成できるわけねえ！」

「偽造だ！　だまそうったってそうはいかねえぞ！」

彼らは影夫が不正をしたと決めつけ、怒鳴り散らしながら、威圧するように顔を近づけたり、床を踏み鳴らして脅してきた。

だが、前世の影夫ならばともかく、人外となり力もつけた彼は少しの緊張も恐怖も感じない。

全力で殺しに掛かってくるモンスター達に比べれば吼える馬鹿はうるさいだけだ。

「……変ないいがかりはそのくらいにしたほうがよいと思いますよ。人のことにいちいち口を出すのもやめるべきですね」

「黙れ！　さっきの証明つてのは偽造屋に作らせたもんだろ！　てめえが金持ちのご令嬢だって、調べはついてんだ！」

「てめえ俺らを舐めてんだろ！　死にてえのか！」

動じない影夫に苛立ったのだろう。大げさに腕を振り上げ、顔を近づけて耳元で馬鹿が怒鳴りつけてくる。

影夫の心中に更なる苛々が募っていく。

（クソどもが。前世からお前らのような奴には虫唾が走るんだよ）

弱いと思った相手を威圧して悦に浸る馬鹿は、影夫が憎しみすら覚える種類の人間である

「ふうん。貴方たちはルイーダさんが偽造も見抜けない間抜けだつて言うんですね」

「……っ!?!」

だから薄笑いを浮かべて、そう言い返してやる。それだけで喚いていた連中は真っ青になって絶句した。

「へえ? そうなのかい。アタシも舐められたもんだね」

「う……」

「そ、そうじゃねえ! あ、姐御を、馬鹿にする気はこれぽっちもねえよ!!」

「このガキツ、口が廻るからって調子こいてんじゃねえ!」

口元に笑みを浮かべてルイーダがそう言うのとDQN達はすくみあがったが、すぐに恐怖をぐまかすためなのか、ミリアを罵り始めた。

「ブッコロス!!」

馬鹿の中でも飛びぬけた一人は罵るだけでは飽き足らず、怒りの感情のままに身体を動かし、ミリアに殴りかかってくる。

拳の角度からして男が狙っているのはミリアの小さな顔だった。

(こいつ……!?)

男の行動を理解した影夫は瞬時に下衆への怒りで心が染まり、暗黒闘気を纏わせた手で、振りぬかれた男の拳を受け止めた。

「なあっ!?!」

罵るだけならば穩便に済ませようとは思っていたが、向こうから手を出してきたなら話は別だ。

こういうクズは痛い目をみないと。力で押さえつけられないと理解しないだろう。

「自分より弱い相手を、それも女の子を殴るなんて最低だって、誰かに教わらなかつたのか」

こいつはミリアを殴ろうとした。そのことが影夫を強く怒らせていた。

こども、それも女の子に手を出そうとする野蛮なゴミを躡けるのに

影夫は遠慮するつもりはなかった。

「ぎっ……あ、は、はなしやがれっ……」

「先に手を出したのはお前だ」

ギチギチと鬨気と力を込めて男の拳を圧搾していく。

ミリアの手は小さく、華奢に見えるが、幾多の戦いや修行で鍛えられた力は並ではない。

暗黒鬨気をまとっているならばなおさらだ。

アイアンクローを本気でやれば、普通の人間をトマトのように潰すこともできるくらいなのだ。

「拳を向けたってことは、拳がなくなる覚悟はあるよな」

「ひっ、ひ……!!」

めきりめきりと男の拳が軋み、激痛がその男を襲う。

男が慌ててミリアの手を振り払おうとしたり、全身の力を込めて引っこ抜こうとする。

しかし、拳は掴まれたまま微動だにせず、逃れることなど出来はしなかった。

「あ……あ……っ」

骨の限界を超えた瞬間。男の拳はあっけなく折れ砕けた。

「ぐぎっ!?!」

ググヨンと肉と骨がつぶれる音が響き、少し遅れてびちゃびちゃと血が床へと垂れ落ちる音がそれに続いた。

無茶な力で折れてへし曲がった骨の一部が、肉と皮を突き破って外へと白い姿を見せている。

「あああああッ!?!」

影夫が手を離してやると、男は砕けた手を押さえ悲鳴を上げて、床に転がりのた打ち回った。

「よく聞けゴミニ虫ども」

すかさず影夫は、喚き散らす男の顔面を足蹴にして無理やりに黙らせ、殺気を込めて口を開く。

「私は、お前らみたいな連中が死ぬほど嫌いだ。次に気に障ったら駆除してやる」

最後に、鬨気を込めた蹴りで地面の男を店外へと蹴り飛ばしてルイーダの元へもどり、影夫は頭を下げた。

「お騒がせしてすみませんでした」

「ふふ、お嬢ちゃんは見えた目と違って凄腕だね。依頼は1人ですか？」

流血沙汰を気にしたそぶりも見せずにルイーダは興味深げに聞いてくる。

このくらいの荒事は茶飯事なのだろう。視界の端では身体のごつい酒場の店員が血で汚れた床を掃除し始めていた。

その手際は手馴れており、店員もなんら動揺していない。

「いえ。もちろんでろりんさんの協力あってこそです。彼らは素晴らしい技能と知識をお持ちなので、弟子にしてもらいました」

「へえ？ あの子らがねえ」

「本当ですよ。一月前の時点でも酒場でトップクラスに強かったのは彼らでしょう。私は短気な性質ですが、彼らは心が広いので争いを避けていたようですけどね？」

影夫はそういって、背後で黙り込む連中を舐めるように見渡している。

面白いように全員が震えあがっている。間違って本職のヤクザに因縁をつけてしまったチンピラ連中の反応みたいだな、と影夫は思った。

「もつともオイタが過ぎた人には後でお礼があるかもしれませんがね。かわいいそうに」

「「ひ、いいいい……！」」

思い当たる節があったのか数人が転がるように店を飛び出し、それにつられて残りろくでなしどもも逃げていった。

店に残ったのはルイーダと、まともと思われる冒険者グループ数組くらいだった。

「……あんな馬鹿どもでもそれなりの使い道はあるからね、あまり虐めないでやっておくれよ。今は粹がっている連中も、数年もすれば弁えて大人しくなるもんさ」

「……私はそれが一番むかつくんです。後で改めるくらいなら最初か

ら粹がるんじやない」

影夫はそう吐き捨てる。

前世時代から素行の悪い連中に対して溜まっていた鬱憤が顔を覗かせ、止められなくなる。

「散々他人に迷惑かけておいて、今は更正しましたからみたいな顔でぬけぬけと一般人の仲間いり。人様にかけて迷惑や責任をとるやつなんか殆どいない！ 恥知らずにも愚かな過去を得意げに話す奴までいる始末……死ねばいいのに」

「アンタ、ずいぶん育ちがいいんだね。本当のお嬢さまかい？ にしては妙なところもあるねえ。ま、詮索はしないけどさ」

影夫が散々に連中を糾弾しているとルイーダは面白そうに見つめてくる。

「あいつらはさ。あんたと違って賢く生きる術も知識も躰も、何も受けれなかったんだ。甘えが許されない環境だったのもあるかもしれないね。ま、あんな連中にも色々あるのさ」

諭すように言うルイーダの言葉に影夫は思わず言葉を詰まらせた。

あの手の連中の事情なんて想像したこともなかった。

両親は金持ちではなかったので影夫はずっと自分が普通に育ったと思っていたが、もしかすると肉親や親戚、恩師に至るまで接した大人が皆まともな人ばかりだったというのは、

ずいぶんと贅沢な家庭環境だったのではなからうか。と影夫は思った。

そうだとすると自分がそんなことも斟酌できない狭量な人間に思えた。

相手の立場で考えてあげなさいとは、両親にいつか言われた教えであり、実践できているつもりであった。そのことを影夫は恥じる。

（人それぞれ事情がある。確かにそうだ。むろんそれで何もかも許される免罪符にはなりはしないし行動に対する責任は取る必要はあるけれど）

「そうですね……すみません。大人げなかったです」

「ふふふ、本当にあんたは変な子供だね。まあとにかく。これからも



よろしく頼むよ。あんた達は頼りになりそうだ」

「はい。あ、そうだ今ある依頼書の一覧の写しをいただけますか？」

「あいよちよつと待ってな……ほらよ」

「ありがとうございます」

カウンターの棚から、書類をあさり、その中の何枚かをルイーダさんは手渡してくれた。

影夫はペコリと頭を下げて、ルイーダの酒場を後にする。

外で転がり気絶していたろくでなしは、店員が綺麗に片付け終えていた。

善人？

「これが報酬の9000G。それでこっちが、モンスターの素材やらを売ってできた9573Gだ」

でろりん達が待つ宿屋の部屋に帰ってきた影夫は、ゴールドの詰まった2つの袋をドンとテーブルの上におく。

身体の主導権をミリアに戻して、自分はいつものようにミリアの首にまき、話を続ける。

「んで、報酬の分配は頭数で割っていいか？　でろりんたちが4人と、ミリアが1人だからひとりあたり3600Gにして、端数の573Gは当面の宿や食費や道具代などの共同出費に使うのがいいだろうな」  
「あれ？　ちよつと待ってお兄ちゃん。皆で使うお金が573Gじゃ足りなくなるんじゃない？」

「ああ。でも次の依頼で出た端数をまた足せばいいから大丈夫。毎回の端数を足していったらたぶんあまるんじゃないかな」

「お、おい待てよ。お前の計算がはいつてないぞ？」

「あ！　ホントだ。いいの？」

「ああ。俺は人間じゃないからカウントには入れないほうがいいだろう」

「そういうわけにも……なあ？　お前もちゃんと戦ってたし」  
「俺も、あまりよくないと思う……」

でろりんが困惑と申し訳なさそうな顔で仲間と顔を見合わせた。  
(なんだよこいつら。原作じゃ立派な小悪党のくせに変なところが律儀つーか真面目だな。へろへろはもつとがめついい性格なんじゃないのかよ)

テーブルの上においてあった果実汁が注がれたジョッキを、ミリアが手に持ってコクコクと飲んでる。ミリアは細かいことはよく分からないと影夫に任せきり。

でろりんたちは気まずそうな様子だ。

なんとなく沈黙が支配する中、ずるぼんが盛大なため息を吐いた。

「馬鹿ねクロス、最初から欲のないことを言うんじゃないわよ。普通

は最初にふっかけてから少しずつ譲歩してみせるのが定石でしょうが」

「いや、ソレは知ってるけど……じゃあ今回だけってことで。師匠たちには指導もしてもらったお礼だとおもってくれればいいよ」

「なにさりげなく私たちが受け入れやすい理由までつけてんのよ。どっただけお人よしのよ。どこでもそんな調子じゃないでしょうね？」

「そーだよ。お兄ちゃんはいつもへんにお人よしというか、気前がいいっていうか……困っている人がいたらお金でも何でもあげちゃいそうなんだよ」

「クロス、あんたどんだけよ？ 救える人は全部救いたいとか思っちゃってんの？ 人助けが大好きで生き甲斐になっちゃってる痛い奴なの？」

影夫がずるぼんに呆れ顔で問い詰めてくる。

が、影夫は、全力でありえない馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばして言い返す。

「はっ、ありえねえ。俺が聖人君子なわけないだろ。大体『苦しむ人はみんな助けるんだ、うおおお！』なんて熱血するような奴は気持ち悪いからむしろ嫌いなんだぞ」

「はあ。そんな無自覚なことばっかり言ったら、いつか抱えきれなくなつて破滅しちゃつても知らないわよ？」

「だから俺はそんなんじゃないって。俺なんか所詮、とんだ俗物の小市民なんだからな。募金なんかしたこともないし、よその国の不幸ごととも他人事にしか思わないんだぞ？ これのどこが善人だ？」

影夫は、理不尽な不幸で苦しむ人間には救いの手が差し伸べられるべき。と思うが、甘えや自らの悪行からの自業自得で苦しむ連中には冷酷だ。

彼は、組織や社会の秩序を大事に思う人間だ。だから反抗者も許せないが組織や社会を腐らせる寄生虫やダニも許せないのだ。

そんな自分のことを彼は酷い人間であると思っっている。善人ならば分け隔てなく全ての人間を救おうとするだろうが、そんなつもりはさらさらない。

明らかな悪人の不幸は助けるどころかむしろ酷い目にあわせて思い知らせて見せしめにした上で唾をはきかけて社会から抹殺か追放したほうがいいとすら思っているのだ。

「大体、人助けたつて余裕がある時によつぽど困つてる人にしかしねえんだ。死にそうになつてる人とか。それくらいは普通だろ。破壊もしねえよ」

こんな冷酷で外道な自分のどこが身を滅ぼすような善人に見えるのか理解に苦しむ。と影夫は内心で愚痴る。

だが、そんな影夫の内心はずるぼんには通じない。現代の基準とこの世界の基準は違うのだ。

「はあ、徹底的に自覚なしつてわけね。こんなんじやミリアも大変ね……。いい？ ミリア。クロスのがバカが暴走したらあなたがとめなきやダメよ」

「うん！ 絶対にとめるよ。ずるぼんお姉ちゃん」

いつのまにやらミリアとずるぼんはかなり仲良くなっている。

近所の頼れるお姉さんといった関係だろうか。背伸びがしたいおませな年頃のミリアとしては、色々女としての教えを乞いたいのだろう。

正直嫌な予感がする影夫だったが、ミリアの世界が広がるのは嬉しいので止めることもなかった。

「そうよミリア。男はバカな生き物なのよ。女が上手に手綱を握らないと男はダメなんだから……。それにはまずね……」

「うんうん……」

案の定、熱が入ってきたずるぼんがミリアに妙なことを吹き込み始める。

「ま、待てつてふたりとも。話が脱線してるぞ」

あわてて影夫が話を戻す。

「とにかく、あんたはもつとしつかりしなさいよ。お金は大事なんだから、欲張れとは言わないけど、正当な取り分は主張しなさいよね」  
「いや、でも、ずるぼんも金は多くもらえるほうがいいだろ？ 宝石や服もいっぱい買えるんだぞ。だから今回は俺の分はいいって」

「そ、それはまあたしかに……ってバカ！　そういうことじゃないわよ!!」

ずるぼんも、不機嫌そうに影夫に文句をつけてくる。

ミリアもずるぼんに同調して、そーだそーだとか言ってる。

兄としては嬉しいが、正直女同士でつるまれるのは複雑な気分だった。

(でろりんといい、へろへろといいずるぼんといい、まぞっほといい、こいつらこんないい感じの連中だったっけ？　原作が始まるまでに何か心が大きく歪むことがあるのか?)

「クロスよ。ずるぼんはお主を気遣って、心配しておるのじゃよ。ワシは好意は素直に受け入れるのがよいと思うがのう」

「はあ。いや、今回はお礼込みであんた達に多く渡したいんだってほんとに。頼むから受け取ってくれよ」

「しようがないわね！　じゃあ今回だけよ！次からはちゃんとおんたの分も頭割りに入れるからね！　ミリアのためなんだから嫌とは言わせないわよ」

なぜか偉そうに宣告してくるずるぼん。ミリアもその横でうんうんと大きく頷いている。

(なんで俺が悪いみたいになっっているんだ?)

「わ、わかったよ……」

ずるぼんとミリアはいつの間にか姉妹のように息もぴったりなっていた。

(まあ俺以外にも懐いてくれるのはいいことなんだけど、ずるぼんとミリアの組み合わせはかなり厄介だなあ。やりづらい……)

「ほっほっほっほ。報酬を押し付けあう光景なんざはじめてみたわい。取り合うのはうんざりするほどみたのにのう」

「やれやれだな」

まぞっほは愉快そうに笑い、でろりんは呆れ顔で、へろへろは我関せず。

味方が居ない中で、影夫はずるぼんに言われるままになるしかなかった……。

その後、影夫とミアは、でろりん達と依頼をこなしながら、修行をする日々を送っていった。

グリズリー討伐以後は、ルイーダに腕利き連中と認識されたおかげで、高レベルでない手ごわい案件や緊急案件などがよく回ってくるようになっていた。

それから二ヶ月。

その戦いと鍛錬の日々の中で、影夫たち6人はゆっくりとしかし着実に力をつけていった。

## 休日

修行と戦いの合間……力をつけようと必死で頑張る戦士達にも休日はあった。

ミリアは休日返上で動こうとしていたけど、影夫が止めて週に1度の休日を作ったのだ。

子供が月月火水木金金はあんまりだろう。情操教育もふさわしくあるまいという影夫の判断である。子供は遊ぶことも仕事のうちなのだ、と影夫は強く主張した。

とはいえ。ミリアにとっては力をつける修行は遊びのような感覚なので、影夫は若干空回り気味だったりもする。

現に今もミリアは中庭で自主的にまぞつほと魔法の修行中だ。

それでは休日の影夫は何をしているのかということ――

「こつちがこうで、ここがこれ……と。ふんふんふーん♪」

影夫たちが宿泊する宿の部屋。

鼻歌交じりに影夫が、小さな骨のようなものをパズルのように組み合わせ、動物の骨格模型のようなものを作っていた。

「この骨はと……あれ？ どこだ……むう」

出来映えを立体的に確認するため骨と骨は糊でくっつけつつ、小さな骨の組み込みに唸りながら骨格模型を少しずつ作り上げている。

影夫がこの骨格模型を作り出したのは2週間前。修行や戦いの合間を縫って製作を進めていたのだ。

「ぎつと喜ぶだなろうなー」

獣医志望でもなかったので、正解の形がよく分からない中、細かい骨と骨の組み合わせを考えてつなげていくのは大変な根気の要る作業。

普段の影夫なら音を上げるところだが、これはプレゼントなのだ。これで無邪気に喜ぶであろうミリアの顔を想像すると苦にはならなかった。

それと同時に、これは影夫のためでもある。

「ちつきな骨さん、あなたはどこの骨さんなの〜？」

ふりふりと楽しげに暗黒闘気の身体をゆすりつつ、デレデレと垂れ目で怪しく笑いながら、気持悪い影夫であった。

「よしっ、完成。くうー苦節2週間の努力が報われた！」

とそこに宿の部屋の扉が開いて乱入者が現れる。

「ただいまー！ な、何してんのよクロス……」

「あ、おかえりずるぼん」

部屋に入るなり、気持悪い言動をしているクロスにドン引きしたずるぼん。

彼女はこの宿部屋の主だ。

（でもまあ、ずるぼんとはいえ、ピチピチの女の子と同棲することになるとはなあ。何か違う気もするけど）

でろりん達と影夫は、宿泊費を抑えるためなるべく大部屋を借りて共同生活を送っている。

当初、でろりんを含め男達は、一番大きな部屋を1つだけ借りようとしたのだが、ずるぼんに年頃のレディがふたりもいるんだからちやんと考えなさい！ と一喝されてしまい、男女の部屋は分けることになった。

普通に考えて影夫も男部屋だが、ミリアが寂しがるので結局影夫は女部屋で寝泊りすることになった。

これがリースや年頃の美少女との相部屋だったのなら影夫は極度の緊張でもたないところだが、生憎ずるぼんはあまり異性という感じがしないし、ミリアは妹のような感覚なので、何も問題はない。

女性陣が着替える時はミリアの体の中で感覚遮断して終わるのを待てばいいだけだ。

（しっかし、女の子が住んでると何か部屋がいいにおいになるんだよね。男の部屋なんて汗と脂で臭いだけなのに。なんでだろうな？）

とりとめもないことをぼんやりと考えていた影夫だったが、なんだかドン引きしているようなずるぼんの様子に正気に戻った。



「あ、おかえりじゃないわよ。その不気味なものは何よ？ それ……  
どうするんのよ」

びびり顔を引き攣らせながら、ずるぼんが指差してくる。

ずるぼんもやはり女性であるので不気味な骨の標本は気持悪いらしい。

「ああ、これか。ミリアへのプレゼントだよ」

「はあーっ……クロス。ちよつとはなしがあるわ」

「なんだよ？」

頭痛を堪えるようなしぐさをしながら、ずるぼんは影夫が作業を続けるテーブルの正面に椅子をおいてどかっとなり込んだ。

ビシッと人差し指を影夫に突きつけてくる。

「いい？ そりゃあね、あの子はそういうの好きだっていうのは分かるわよ。それに好きな人からのプレゼントは何だって嬉しいのもそのとおりだから喜んでくれるでしょうよ」

「だろ？ 調達が大変だったんだよ。ほら見てくれよ。この骨、本物なんだぞ」

影夫が手をぎゅーんと伸ばしてずるぼんの顔の前に見せる。

「ちよつ、顔に近づけないでよっ」

思わず、ぱしんと影夫の手を叩いてブロックするずるぼん。

「いやあー手に入れるのに苦労したよ。不幸にも馬車に轢かれて死んじゃった猫をでろりんを探してきてもらったんだ。それを火葬して骨を調達できたんだよ」

「あ、あんたね……」

ずるぼんは今度こそドン引きしていた。影夫はミリアを邪心なく可愛がっているのです、何だかんだ言って、優しい奴だと思っていた。

だが、こういう死体の利用や冒流のようなことを平気でするなら少し考えを改めないといけないかもしれないと思いかけて……

「あ、ちゃんと供養はしたからな！ 骨も一部を中庭に埋めて、お墓を作ったから成仏してくれると思う。生魚もいっぱい供えたし！」

それってどうなのよ。腐った魚で異臭騒ぎになって宿が迷惑する

んじゃないの？　と思いつつも、ずるぼんは死体を面白半分で冒瀆したわけではないと知り、暴落しかけた影夫の評価を保留にした。

「はあ……それはいいとしてよ？　仮にも女の子へのプレゼントなんだからもうちよつと可愛いものにも出来なかつたの？　ミリアが肌身離さずを持つてるネコのぬいぐるみとかよ。あれをプレゼントできるのに、なんでその次が骨の猫なのよ……」

ずるぼんの疑問は当然であった。無論影夫もそのことは分かっている。それでもこのプレゼントはベストな選択であるのだ。

「ふっふっふ。甘い、甘いぞずるぼん。これは可愛くてミリアが喜び、俺も色々と便利になって助かるというスーパープレゼントなんだ」

そう言いながら、影夫はにゅつと手を伸ばして、組みあがった猫の骨格に手をかざし……骨に向けて暗黒闘気を放出した。

すると……カタ……カタカタカタと骨が少しずつ動きだす。

「ひっ、はっ、へあっ!？」

その様子を驚きと恐怖に引き攣らせ、奇声を出してしまうずるぼん。

影夫が手を動かし、指を動かすたびに骨猫が歩いたり座ったり色々な動作をしていく。

「動く骨の猫ちゃん！　どうだー面白いだろ?」

その動きはまだぎこちなく、骨同士をくつつけていた糊がパラパラと粉になって落ちていているが、動きに問題はなさそうだった。操作に慣れると動きもスムーズになるだろう。

暗黒闘気で操っている間は、暗黒闘気が潤滑油や間接の代わりになつて骨と骨を包んでつないで動かせるようになる。

そうでなければ『がいこつ』は動けない。

今影夫が使っているのは、原作にあったからと秘かに練習していた闘魔傀儡掌もどきである。

暗黒闘気を手から細い糸状にして放出し、軀や死体を自由に操るといふ技であるということしか分からないので思考錯誤が必要であったがついに動かせるまでになっていた。

「な、な……うーん……」

面白顔の百面相をしたままのずるぼんだったが、骨猫が顎の骨をカクカクさせて笑うような仕草をさせて見せたところで、気絶してしまった。

「あ。やべ……どうしよう……」

ずるぼんはもつと図太いと思っていたが、やはりそこは女性。それを失念していた影夫の失態だった。

「ほつとくのはまずいか」

椅子の背もたれにもたれかかってだらんと体の力を抜いているずるぼんを、手を伸ばしてゆつくりとお姫様抱っこで持ち上げると、優しくベッドへと横たえて、毛布をかけてやった。

「ふう……やれやれ。ずるぼん相手でも、ベッドに運ぶってのは、きんちよ」

パタン。と影夫の背後から音がした。

「あ……」

「ただいまお兄ちゃん。ところで……ずるぼんお姉ちゃんと、ベッドで、いったい、何を、してるの？」

ミアアが部屋に戻ってきたのだ。

「あ。ちがっ」

「おーにいーちゃんー？ またなの？ またなんだね。お兄ちゃんは どうしていつも女の人に手を出すのかな？ 女たらしなの？」

女の敵なの？ 死ぬの？」

「ぐはあっー！」

がしりとミアアに肩を掴まれた影夫は、逃げることも許されず、静かにでも容赦ない言葉責めを、誤解が解けるまでされ続けるのだった。

### 閑話休題。

どうにかこうにか誤解は解けて安堵した影夫は、本題に戻ることにした。

「え、えっとミアア。あのな……」

「ふーん、だっ」

「うっ。機嫌直してくれよ。ほら、プレゼントだぞー」

ベッドに座って、不機嫌そうにツーンとしているミリアに影夫は骨猫を手を持って見せる。

「えっ？・ほんと……？　わあっ♪　骨の猫ちゃんだー」

目を輝かせながら、とたとたと歩み寄ってくるミリアに見せるように、影夫は骨猫を直立させて、執事のように一礼させてみた。

「あ!?　動いてる!?　すごいすごい！　傀儡掌できたんだね！　私にも出来る?」

「ああ、後で教えるよ。それよりも……そのネコのぬいぐるみをちよつと貸してくれるか?」

「うんいいよ。どうするの?」

影夫は、ミリアが腕の中に抱えているぬいぐるみを貸してもらおう。

「これをこうして……」

ぬいぐるみの背中についてある複数のボタンをはずしていき、背中の裂け目から中の詰め物はずし、中身を抜き取っていく。

このぬいぐるみは、こうやって中身が簡単に交換できるように工夫されている。

中の詰め物が、現代で使われるような素材とは違ってつぶれやすく傷みやすいので、このようになっていたのだ。

「これで……完成!」

しばらくごそごそと作業を続けた後、ぬいぐるみを元に戻して、影夫が咳払いとともに指と腕をくいくいつと動かす。

すると……

「ゴホン。さあさあお立会い。世にも珍しい動く猫のぬいぐるみだよ!」

デフォルメされて丸っこくてファンシーなぬいぐるみが、てくてくと四足歩行をしたと思えば、身体をしながら威嚇のポーズをとつた。

そうかと思えばごろんとねそべり、顔を撫でるしぐさを披露してく。

「ヤアこんにちは、ボクは生きるぬいぐるみ猫のクロス。今日からミ

リアがボクのご主人様だニヤー」

裏声でそんな台詞を言わせつつ、身振り手振りを交えてコミカルに影夫は猫のぬいぐるみを動かした。

そしてぴよんと跳躍させてミリアの腕の中に飛び込ませて、とんと腕を軽く叩いてみせる。

「かわいい、かわいいかわいいかわいいわいっ!! お兄ちゃんありがとう！」

影夫がやったことは、ぬいぐるみの中に骨を入れることだった。無論骨だけでは抱き心地が悪いので、骨の間から周囲に至るまでを詰め物でこんもりと包んである。

おかげで抱き心地も良いようだ。

動くぬいぐるみ。それは実にかわいらしかった。中身が骨でなければ女性は皆虜になるだろう。いや、男だっってこの可愛さには夢中であらう。

「驚くのはまだ早いぜ！ なんとこのぬいぐるみは……」

そういつた影夫がその場からすつとかき消えた。

「え？ お兄ちゃん？」

「ふふ、俺ならここだぜー！ とうっ！」

ミリアの腕に抱かれているぬいぐるみが、彼女の身体を這い上がるように登っていき、頭の上でごろんと横になった。

そのぬいぐるみの顔には影夫の目が浮かび上がっている。

シャドーという魔物に似た姿であるとはいえ、影夫は釣り目の邪悪な表情はあまりしないので、垂れ目である。可愛いぬいぐるみの本体とあわさると意外と可愛い表情だ。

ちなみにぬいぐるみの表面に出している目はちゃんと物を見るこ  
とが出来る。音も響いて聞こえるので影夫として不便はなく、問題な  
しだ。

「ふわっ、わあっ！ お兄ちゃんがはいつたの!？」

「ふふふ。忍法（違うけど）ぬいぐるみになるの術だー！」

くるんつとミリアの頭の上から跳んだ影夫は、座るミリアのふとももの上に着地して、ビシツつとミリアを指差し決めポーズをとってみ

せた。

「ミリア以外の意識がある生命体には憑り付けないけど、軀には憑依できるんだぜ？　これで街中でも一緒に動いて行動できるようにするぞ。ふたりでいっぱい遊ぼうな、ミリア」

「うん！　ありがとう!!」

喜びいっぱいのミリアは影夫が入ったぬいぐるみを抱き寄せ、力いっぱい抱きしめた。

憑依していると暗黒闘気の効果で頑丈になるので潰れはしないが、ちよつと骨が軋む。

「わふっ……いや。にやーんのほうがいいか。ぐっ、ぐるじい……」

「あつ、ごめんなさいっ……」

あわてて力を抜いたミリアの腕から影夫はぴよんと脱出して、床の上になんちよんと着地。

「コホン。ボクと契約して、魔法少女になってよ！　なんちやつて」

影夫はポーズをつけて、某きゅっぷいの真似を試みる。

存在の怪しさとか、黒い感じはわりと似ているかもしれない。

「なるー！」

「いや、ダメだぞ。可愛い姿で調子のいいことを言うやつに騙されちやダメだからな？」

魔法を使えるかという意味では、ミリアはすでに魔法少女だけど。と思いつつ、影夫は契約を即答で結ぼうとするミリアに突っ込みを入れる。

二足歩行をしながら前足でパシンと突っ込みを入れる姿は、とても愛らしい。

「戦う少女といえばマスコットキャラ。やっぱりミリアみたいな可愛い女の子にはこういうのが必要だよなー。きゅっぷい」

再び跳躍して、ミリアの肩の上ののつて、そんなことを言ってみる影夫。

「ねえねえ。さっそく街に行こうよー！」

「今日はもう日が暮れるからだーめ。また明日だな」

「えーっ」

すぐにでも街へ飛び出しそうなミアを宥めたり、意識を取り戻したずるぼんが、動くぬいぐるみの可愛さに抱きしめて頬ずりした結果、ミアが拗ねて騒ぎになったり、そんなこんなで騒がしく休日は過ぎていくのだった。

## 好調

「はあああつ……暗黒処刑術！」

「バギマ……！」

影夫達はルイーダから緊急で頼まれた依頼をこなすべく、ベンガーナ岬にある海辺の洞窟にもぐっていた。

「うりやあつ！ はあつ！」

「ベギラマ！」

「イオラ！」

「バギマ！」

次から次へと洞窟の奥から押し寄せてくるモンスターの群れを全員で迎撃する。

しびれくらげ、マーマン、スライムつむり、うみうし等それほど手ごわい連中ではないがとにかく数が多い。

「もうつ、次から次へとお、うつとおしいよお！ 死んじやええ！」

「落ち着けミリア！ イラついて雑になって隙が出来てるぞ！ ちいっ！」

ミリアが暗黒闘気を伝わらせたおおばさみの刃をぶんぶん振り回し、雑魚モンスターどもをなで斬りにする。

おおばさみは刃で挟まずとも、スライスするように横薙ぎに斬ることもできる。

威力は落ちると、おおばさみを掴んだ状態で腕をふることになるため、力が込めきれず、固い敵を捻じ切るのが難しいので雑魚を纏めて切り払うのに便利な程度の使い道しかないが。

イラつくミリアに生まれた死角と隙を影夫が凶手を伸ばしてカバーする。

ちなみに戦闘になる際は、影夫はぬいぐるみ状態ではなく、いつものようにミリアの体から手だけを出している状態である。

しかし、倒す端から次から次へと仲間を呼ばれてしまう。

「くそつ、本当にキリがないな。だいおうイカ風情が手をかけさせやがって……洞窟丸ごと爆破したいぜ！」



「お兄ちゃん！ 全力全開の暗黒闘殺砲なら入り口あたりの天井を崩すことは出来るかも。ほんとにやっちゃおう？」

「それで終わりにできればどれだけいいか……！」

今回の依頼内容は、海辺の洞窟に住み着いたモンスター達の排除である。

ベンガーナの街から目と鼻の先の場所なのでここに凶暴なモンスター達が集まると街の安全が大きく損なわれてしまう。海上交通が遮断されるとベンガーナの街はやっていけないので死活問題となりつつあるのだ。

洞窟の入り口を潰して封じ込めるとい一手もだめだ。

中で海とつながっているので出入りが自由なのだ。こうなるとただ単に安全な巣を提供することになってしまう。

「クロス！ あまり俺達から離れるなよ。数に吞まれるぞ！」

「ああつわかった！ ミリア聞いてたろ、一旦でろりん達のとこに戻るぞ」

「うんっ！」

すべての原因は、ベンガーナ海周辺を統べる主であると思われるだいたいおうイカだそうだ。

数回の討伐に失敗しているベンガーナ国からの情報提供によって判明している。

主が洞窟に住み着いたせいで、凶暴な海のモンスターが寄り集まっているのだ。

魔王の邪悪な意思がなくとも元々凶暴な素質をもつモンスターは多くいる。

そんな連中をだいたいおうイカが周辺海域から根こそぎ大量に集めていると思われるのでこの数である。

「で……どうするのよ？ このまま戦い続けちゃ、ヌシのところを辿りつく前に魔法力がつきちやうわよ？」

「ここで雑魚を限界まで狩って、撤退すべきだろうな」

「ワシもクロスの意見に賛成じゃ。無謀は避けるべきじゃな」

「それしかなさそうだな……イオラ！」

「消し飛べええつ、暗黒闘殺砲ツ……!」

それから全力で戦い続けて小一時間。

倒し続けたモンスター死骸が周囲に山となって築かれていたが、あふれ出てくるモンスターの数は減る様子 wasn't なかった。

「バギマ! やば……クロス! 魔法力が切れそうよ!」

「ベギラマ! ワシももう少しですつからかんじゃぞ!」

「ち、しょうがねえか。うっしや! じゃあ俺とミリアで敵は引き受けたつ。でろりん達は、死んだ海産物を馬車へ運び込んでくれ! あと、傷まないように氷系呪文かけといて!」

「!」「あいよ!」

結局、影夫達は戦利品の海の幸を山と積んで逃げ帰るのだった。

☆☆☆☆

「はあ〜つ、くそがああ!」

「キリがねえなあ、今回も間引きだけか〜」

「儲かるからいいんだけどね、私はこういうコツコツしたほうが好きよ」

「うーもう飽きたよ、同じことばかりじゃつまんない」

「我慢しろつてミリア。きっと次で品切れになるさ」

「うん……てえい!」

「おう、野郎どもお、ひきあげだ」

「!」「おー!」

「なんなのよそのノリは……」

洞窟に出向いては間引きを繰り返すことすでに10回。

今回も海の幸を山と積んで逃げ帰るのだった。

あまりの量に運搬用の馬車を急遽仕立てる必要が出たくらい、毎度毎度嫌になるほど雑魚ばかり倒していた。

おかげで、デパートやら商店の仕入れ担当やらが何人もでろりん達の前に来てきて、次回の討伐時期を聞いてきたり、優先的に取引がしたいと贈り物をしてくる始末。

なんだか影夫達はやり手の漁師か何かになってもなった気分である。影夫達が海の幸を売りさばく広場は、勇者市場などと呼ばれ始め、勇者討伐の一品としてブランド化されたり、偽造品が出回るほど。勇者関連の商品やグッズが街のあちこちで売られるようになり、ベインガーナででろりんやミリアの名前が有名になってしまった。

☆☆☆☆☆☆

影夫達一行はようやくたどり着いた洞窟の奥でだいおうイカに一齐攻撃をしかけていた。

「くそが！　さんざんてこずらせやがって！　思い知らせてやるからなあッ！　クソイカがあ!!」

これまで都合20回も雑魚の間引きばかりやるハメになっていた影夫達は苛立ちの絶頂だった。

ただっぴろくじめじめした洞窟内を探索するのは、体力的にも精神的にも疲労が大きく、滑りやすい床や水溜りや潮しぶきがうっとおしい。

しかも洞窟の中は空間が限られるので呪文を使ったり暴れるのにも制限が出て、フラストレーションがたまるのだ。

ずるぼん&ミリアの女性陣も、潮の匂いが身体に染みつくし、塩気で肌や髪の毛が傷むしで、大変ご立腹である。

「でりゃあ!!」

「はっ、遅いぜ!」

「死んじやえええっつ!」

「女の怒りを思い知りな!　バギマ!」

「ほっほっほ、年寄りを怒らせてはいかんな」

だいおうイカの末路は可哀想なくらいだった。

攻撃を仕掛けても、剣で斬られ、鉄塊で殴り飛ばされ、呪文で斬られたり焼かれたり爆発させられたり、と完全無欠に封じられて何も出来ないままに、息の根を止められた。

「くきよおおおおおーッ!?!」

「あーご愁傷様」

思わず影夫が手を合わせてしまうほど、あっという間に大王イカは屠られ、断末魔の叫びとともに新鮮な死骸をその場に晒した。

「天罰観面！って感じね」

ぷすぷすとこげたり切り刻まれたイカの身体。

でろりん達は汚物を見るような目で見つめているが、影夫とミリアは違った。

「おいしそう……」

「たしかに……さしみ、丸焼き、イカ焼き、ゲソ煮込み、イカリング……やべ、くいたい！」

影夫は前世の美味しいイカ料理を思い出したから。ミリアは影夫から聞いた前世の料理に憧れて。ともかくふたりは食べたくてしようがなかった。

「さっそく食べようよ！」

「そうだな、新鮮なほうが美味しいもんな」

「生でお刺身は無理かな？」

「そのままじゃ寄生虫で危ないぞ。一旦氷漬けにして殺さないと。それに生だとぬめりが強いからな。とりあえず今はゲソ焼きだ！」

「うんっ！ メラっ……」

ミリアがナイフで小分けに切り分けたゲソをいくつも刀身に刺してメラで焼いていく。

「おおーいいにおいだ。うまそう。」

「じゃあお先にいただきまーす、んぐもぐっ……美味し〜！」

メラの炎が消えると同時に、ミリアはゲソ焼きにかぶりつく。

海水のおかげで味付けは不要。天然の調味料となっている。

取りたてを丸焼きで食す。豪快にしてこれ以上ない贅沢であった。

「あ、くそつずるいぞミリア。俺にもナイフ貸してくれよ。メラも頼むぞ」

「はあいつ……んぐんぐ。めらっ……」

ほおばりながら、ミリアがどくがのナイフを渡し、メラの炎を生み出す。

おおばさみを装備したとはいえ、ナイフシースにはどくがのナイフ

は2本とも普段から刺している。

緊急時のための備えだったがこういうときにも役に立つ。痺れるのが怖いがどういう仕組みか斬りつけ以外では痺れることはないので大丈夫だった。

刀身に塗った毒で痺れさせる仕組みではないのだ。それならば毎回塗らないと効果ないはずだからな。

「あれ？」

影夫はゲソを焼いて……そこででろりん達の様子がおかしいことに気付いた。

でろりん達は4人で抱き合いおぞましげに震えている。

「「「な、ななな何やってんだよお前ら!」「」」

「はあ? どうしたってんだ?」

「ミリア! そんなの食べるのやめなさい! おなか壊すわよ!」

「え? やだよ、美味しいもん! ずるぼんお姉ちゃんもどう?」

「「「ひいいい……」」」

「なんだよ、お前らイカ食わないのかもつたいない」

(え? ダイの世界でイカ食わないのか。ヨーロッパ風だからか? あ

れ? イカは大丈夫なんじゃなかったっけ?)

「マジか。こんなうまいのに食わず嫌いするなんてなあ。ミリア、ゲ

ソ焼きを4人に食わせてやれ!」

「はくく! みんなおいしいよ!」

「お、おおお、落ち着きなさいミリア!? わ、わた、わたし、ひいいいっ

!? きやーっ!」

「「「ひいいいっ、来るなあ……!」」」

ミリアがゲソ焼きを手に迫ると4人は悲鳴を上げて後ずさりしていく。

いくらなんでもそんなに怖がることもないのにと思いつつも、ずるぼんのあまりの脅えぶりに影夫はイタズラ心をおさえられなくなつた。

完全に女扱いしていないずるぼん相手であり、しかも日頃小言や説教が煩いので、影夫は遠慮というものがなかった。

「ふひひっ、ほーれ、ずるぼん、生のイカ足だぞ〜」

「ぬるぬるのぐちよぐちよで、ねつとりしてて、ひいひい!! あぶぶぶぶつ! きゃあきゃあ!」

影夫が生のイカの足をべっちよりとずるぼんへ投げつけた。

新鮮さゆえにまだうねうねと動いている足がずるぼんの腕や首元を這い、ずるぼんが悲鳴を上げて腰を抜かす。

「ぎやはははは、おもしろー!!」

「あ、あああ、あんたクロス、覚えてなさいよ!」

「ああ〜? きこえんなあ〜!」

「ひいひい!! や、やめ……きゃあああ!」

イカの足に絡みつかれてぬるぬるになったずるぼんが激怒するが、影夫は弱みにつけ込み、嗜虐心丸出しでイカの足をもう一本投げつけていた。

「きゃはは、待て待てー!」

「いや、やめろー!」

一方ミリアも逃げまどう男衆を追い掛け回していた。

おおばさみの刃にさしたゲソを片手に走り回っているが危ないのではないだろうかと思いつつも、デリカシーなく笑うのだった。

## 油断

「ごめんなさいっ！」

「っ……うう……」

「お兄ちゃんが泣かしたー！ ろくでなしー！」

「わ、悪かった！ ごめんなさい！ あやまります！ このとおりです！」

恐怖のあまり失禁してベソをかき出したずるぼんを見て急速に正気を取り戻した影夫は、Dr. ワ○リーばりのジャンピング土下座で謝り倒していた。

ずるぼんのことは半ば女扱いしていなかったものの、泣かれてしまふほど追い詰めてしまったとなると罪悪感が凄い。

ホトホト困り果てひたすらに謝るしかなかった。

「本当にごめんなさい！ なんでもするからゆるしてください！」

冷静になれば女性にしてよい行いではない。恐怖のあまりちびらせてしまったのも大変よくない。

女性の尊厳や羞恥心を大いに傷つけてしまったと影夫はもうどう償って良いか分からないくらいの罪悪感でいっぱいだった。

「ごわがっだんだがらあ！ と泣き怒る彼女に自分から高額なプレゼントを約束し、二度としないと誓い、何でもいう事を聞くなどと影夫は口約束の大盤振る舞いをしていった。

「さすがにあれはいかんのう」

「まあたしかに少しやりすぎだったよな」

「いい葉だろ」

男3人衆は、針の筵状態で何でもかんでも差し出して謝り倒す影夫をみながらゲソ焼きをほおばっていた。

見た目の気持ち悪さと、常識という先入観から食べるなんてオゾマシイと思っていたが、追いかけてこの挙句口に放りこまれたら、普通に美味しくはまってしまっていた。

「おいずるぼん、もう許してやれよ」

「そろそろ戻ろうぜ」

「今後のことは宿でかんがえればよいじやろ」

いつまでも終わらない謝罪を無言で責め睨むざるぼん。さすがに終わらないのででろりん達が声をかけ、ミリアが手を引く。

「ほら、お姉ちゃんいこ？」

「うん……」

「お、俺はなんてことを……も、もう絶交かな……あはは……俺ってやつあ……やつあよお……」

「クロス……許してあげるけど……水に流して欲しかったら、分かっているわよね？」

「は、はいいい！ 何でもさせていただきます、許していただけるんですかつ、ありがとうございます！」

すれ違い間際、つぶやいたざるぼんの声に許してもらえる希望を感じて影夫は歓喜する。

しばらく影夫は言いなりになるだろうが、許してもらえたことが何よりも嬉しかった。

影夫は人間関係がギスギスしたり強く嫌われたり険悪になったりするの辛いのだ。

「ふ、ふんだ……おぼえてなさいよ」

「は、ははー誠心誠意尽くさせていただきます！」

大喜びでへこへこしながらずるぼんに媚びる情けない姿に少し溜飲をさげたのかずるぼんも怒らせていた目尻を下げて表情をゆるめ、足元の影夫を見下ろしている。

怒気が収まったのを感じてさらに忠誠を誓いだす影夫。

「むう……お兄ちゃんサイテー」

「ええ!? 何故だミリアー！」

ミリアはそんな光景を見て不穏なものを感じ取ったのか不機嫌になつて影夫をなじった。

「なんだありや。あほらし。やってられるかよ」

「まあまあリーダー」

「あやつらもおかしな関係じやのう」

「おい、おまえらさつさと……」



呆れモードの3人が腰を上げてずるぼん達に声をかけようとして、言葉を失った。

ずるぼんの背後にあった横穴の物影で、黒く巨大な影がうごめいていたのだ。

「ずるぼん後ろ!!」

「え?」

でろりんの声で咄嗟に振り返ったずるぼんは、目の前に振り下ろされんとしている鞭のようになる軟体の触手腕を、見た。

「あ……」

「ふえ?」

限界まで引き絞られた弓が放たれるように、振り下ろされたそれ。

触手腕は残像を残しながら、少し前を歩いているミリアの頭を潰す軌道で迫っているが、ミリアはそれに気づいておらず逃れることは不可能だった。

可愛がっている妹分のミリアが死ぬ。そう思ったらずるぼんの身体は勝手に動いていた。

ミリアを突き飛ばし、触手の軌道上に自らを割り込ませていたのだ。

「っ……!」

これでミリアは大怪我をしても死ぬことはなくなった。

ミリアが死ぬ運命は回避できた。だがずるぼんが死の運命にとらわれた。

体勢を崩しているずるぼんは回避などできるはずもない。

逃れえぬ死に、ずるぼんが目をつぶった。

その時。

「おおおっ」

衝撃とともにずるぼんとその側にいたミリアが横っ飛びに吹き飛ばされた。

「っ……あがああっ!!」

ふたりを吹き飛ばしてその代わりに強烈な一撃を無防備に受け止めたのは影夫であった。

「あぐ、うう……」

「クロス!」

「お兄ちゃん!」

たった一撃で、物理攻撃に強いはずの影夫の体の表面は大きく抉り削られ、体の半分近くの暗黒闘気が四散してしまった。

「お兄つ、お兄ちゃん!」

「うぐ……あ……がつ……」

「おに、おにおにいちや……ああ、あああああ……!!?!」  
体を半分吹き飛ばされて弱々しく呻き声をあげる兄の惨状を見て……ミリアは激しく取り乱し絶叫する。

「お兄ちゃんを……よくもつ、よくもおおおつ!!」

一瞬で怒りと憎悪に染まったミリアの身体から爆発的に暗黒闘気が噴き上がった。

それと同時に四散して周囲を漂っていた影夫の暗黒闘気の一部がミリアの体内へと流れ込み、ミリアの顔と腕に黒い紋様が浮かんで明滅して瞳が赤く輝く。

「ああああアアアアアツツ……!!」

全身に溢れたチカラを誇示するように雄たけびを上げ、殺戮衝動のままに敵を睨みつける。

「ころしてやる……ころすッ!」

「落ち着け馬鹿! やめろ!!」

ミリアは駆けつけてきたでろりんの制止も聞かずに、その軟体生物……クラーゴンに飛び掛かっていった。

## 解体

「死ねええええ……!」

10本もの足が一斉にミアアに襲い掛かる。

大王イカと同じ本数であるがその力も早さも足捌きも比べ物にならないかった。

「ぐっ、こんなっ、ものおっ……!!!」

ミアアは右手のおおばさみと、左手に握ったどくがのナイフで触手を迎えうつ。暗黒闘気を宿らせた刃は強靱な触手をもたやすく斬り飛ばした。

だが、手数が圧倒的に違った。のこる8本の触手がミアアを殴り叩き突き飛ばし薙ぎ払ってくる。

「がっ、げ、ぎい、ぐっ、げえっ、ぐ、があ、ごおっ!」

骨がへし折れ、肉が抉れるに違いない程の強烈な8つの打撃攻撃。

「「ミアア!」」

「いやああああっっ!!」

ミアアはそれをまともに食らったのだ。この場の誰もが彼女は死んだ。そう思った。

しかし。

「くひ。くひひひひやひゃあああっっ!!!」

爆発的に噴き上がるほどの暗黒闘気を!体中にめぐらせていたミアアには通じなかった。

如何に脆い人間の肉体といえども強大な闘気を帯びれば限りなく強固となる。

それは光の闘気であろうが、暗黒闘気であろうが変わりはない。

ミアアの全身は鋼鉄並みの強度と化しているのだ。

クラーゴンはミアアに、軽く叩いた程度のダメージしか与えることができなかった。

「オオオオオオオオオツツ!!!」

次は自分の番とばかりに!ミアアは右手のおおばさみを振るい、さら

に1本の触手を挟み切るとともに、左手のどくがのナイフでもう1本の触手を挟み突き、無茶苦茶に滅多突きにしてズタズタにした。

「グギャツ！ギャオアアツ!!」

クラーゴンは、ミリアへの攻撃に意味はないと本能的に判断したのか、のこり6本となった触手でミリアの武器を狙い撃った。

「っ!」

4本の触手によっておおばさみの刃は3つにへし折られる。

それと同時にミリアのどくがのナイフも、2本の触手に絡みとられて遠くに投げ捨てられてしまった。

「あはっ……あははははっ!　ぶきがなければ……わたしが、なんもできないと、おもったの?」

ミリアは自らの左手に絡みついていた触手のうちの1本を、右手でそつと掴むとそのままぐちゃりと指を差し入れ、握り締めた。

クラーゴンの触手は軟体だが強靱で鋼の剣であろうとも簡単に絶ちきるの難しい。

それなのに、いとも簡単にミリアの小さな掌はそれを粉碎していた。

噴出する鬨気が小さく華奢な女の子の手を凶器へと変えてしまっていた。

「ぎやううっ!」

「ぶきなんかなくても……わたしはっ、ぜったいに、おまえをつ、ころすっ!」

痛みと驚きに悲鳴を上げるクラーゴンであったが、ミリアの攻撃はさらに続く。

「ああああアアアアアツツツ!!!」

暗黒鬨気を纏わせた手刀による強烈な一撃。

それで、左手に絡み付いていたもう1本の触手をこともなげに絶ちきった。

「ギ、ギャーツ!」

クラーゴンは恐怖に震える。

目の前の小さな生き物は、脅威だ。この生き物はこのままでは間違

いなく自分を殺す。

この生物を自由にさせてはいけない。クラーゴンは本能的にそう察して、4本の触手をミリアの両手両足に絡み付かせて空中に引き上げた。

「ミリアッ！ 今、たすけっ」

クラーゴンの怪力でミリアの小さな体が思い切り引つ張られたら、バラバラにされかねない。そう判断したでろりん達があわてて加勢をしようとするが、その必要はなかった。

「あはっ。ふふふ。綱引き？ わたしと綱引きがしたいの？」

ミリアが無理やりに引き伸ばされた四肢にぐっと力を込めて、引つ張り返す。

すると強烈な力で引き返された触手はぎちぎちに張り詰め、軋みを上げた。

「ギツ、ギヤツ……!？」

「そおれっ、そおれっ♪ うんとこしよーどっこいしよー!」

クラーゴンは必死になって触手に力を込め、どうにかミリアの四肢をもぎり取ろうとする。

クラーゴンが引けばミリアも引き、ミリアが引けばクラーゴンも引き返した。

「きやはははっ、がんばれがんばれ！ がんばらないとお……死んじやうよおっ?」

命を掛けた綱引きが続く。ミリアは影夫から教えてもらったこの競技を無邪気に楽しんでた。数度、綱引きが続いた後。

突然、ミチミチツブチリツ。と断裂する肉繊維の音がしたかと思うと、引つ張り合う力の負荷に耐え切れなくなった4つの触手が内から弾ける様に千切れ飛んだ。

「ぎあーんねんでした……わたしのかち！ あひやひやひやひやっ!」

「……イ……ッ……!？」

全ての触手腕を失ったクラーゴンが声にならない声を漏らして恐怖に震えた……次の瞬間。空中に投げ出されたミリアがクラーゴン





## 慟哭

「あははははははっ、はは、は……っ」  
狂ったように笑い続けていたミリア。

だが、糸が切れた人形のように突然ミリアはその場に崩れ落ちる。目先の敵を倒して安心し、強大な暗黒闘気を使役した反動もあって、気絶してしまったのだ。

それは致命的にまづい事態だった。

「ミ……ミリアアアッ！ 逃げなさいっ！ 今すぐっ!!」  
必死になつてずるぼんが叫ぶが、ミリアが声に応えることはなかった。

そのままゆつくりと崩れ落ちていき、地面へと倒れこむ直前で、絡み合い束ねられた10本の触手によつて殴り飛ばされ、激しく吹き飛ばされた。

「ギャガアアッー!!」

そう。クラーゴンは1匹だけではなかったのだ。

今まではミリアの強大な力に襲いかかることができずに潜んでいたが、彼女の力が急速に萎んでいくのを見て、ミリアの背後から忍び寄り、隙を窺っていた。

そのクラーゴンは仲間を屠ったこの小さな生き物のことが憎かった。

だが強大な力を侮ることもしない。ゆえに渾身の力による奇襲を選んだのだ。

「大丈夫かっ！」

「が、あ……っ……」

地面に何度も打ち付けられながらも、水切り石のように激しく跳ね飛んできたミリアをへろへろが身体を張って受け止め、すかさずずるぼんがベホイミを掛ける。

その一方で影夫にはでろりんが回復呪文を掛けていた。

「おにい……ちゃん……」



治療を受けてもミリアはうわごとをうめくばかりだ。意識は失ってはいいが、朦朧としている。

そのあまりに儂い姿に、でろりん達が動揺する。「うそだろ。さっきあんなにバケモンみたいに強かったのに、なんでこんなあつさり……」

「バケモンなんて言うんじゃないわよ！ 私も、怖かったけど、やつぱりミリアはミリアよ。女の子なのよ……」

「じゃ、じゃが、あんなとんでもない……魔物、いや。それ以上の恐ろしさじゃった……」

先ほどの恐ろしいミリアの姿と今の儂いミリアの落差に、困惑するでろりん達。

ミリアと一番親しく、どうにか擁護しようとするずるぼんでさえも、困惑が隠しきれない。

「あれは、闘気の方だ」

それを見て、黙っていたへろへろが口を開く。

「え？」

「俺の故郷リングエアにも闘気の使い手がいた。ただの棒切れでも、強い闘気を通せば鋼を切り裂くことができる。それと同じだ」

へろへろは、リングエアで修行していた頃、実際に闘気の取り扱いを習っていたし、同門の弟子が闘気剣を使うところを見たこともあった。

実は、へろへろの怪力も闘気による身体強化の恩恵であつたりする。修行の途中で逃げてしまったので、闘気剣や闘気砲はまともに出来ないのだが。

「……………」

へろへろの言ったことは単なる推測だった。

実際、リングエアで教えているのは生命力そのものに近い無属性の闘気であり、ミリアの暗黒闘気とは違う。

禍々しさも、物騒で殺戮を楽しむような言動になることもないはずなのだ。

だが、へろへろはそれ以上の口をつぐんだ。言ったところでミリアを追い詰めてしまうだけだと思ったのだ。

「な、なんだ、そうなのかよ……びびっちゃまったぞ」

「そんな技があるとはの……」

「そうよね。ちよつと物騒な技だったけど、技は技。ミリアはミリアよね……」

へろへろの言葉を聞いたでろりん達がほつとした様子で、ミリアへの態度を柔らかい以前のものへと戻すのを見て、へろへろはこれだいいと思った。

「そんなことよりミリアだ。大丈夫なのか？」

「……難しい状態だわ。全身のダメージが大きすぎてすぐに回復出来ないの。どうにか死にはしないけど……数日はまともに動けないと思う」

（俺のせいだ、全部俺の……！）

でろりんのホイミで少し楽になって頭が回るようになってきた影夫は、己を責め苛んだ。

なんという油断。なんて迂闊な阿呆ぶりであろうか。

影夫は心底自分を罵倒した。確実に、防ぐ手段があったのだ。

影夫なら少し意識を集中させて周囲の邪気をサーチすればアイツらの存在に気づけたし、奇襲も防げたというのに。

影夫さえしつかりしていれば、ずるぼんとミリアを庇って死に掛ける間抜けなこともなかったし、その結果ミリアに無茶をやらせて半死半生にさせることもなかった。

（油断した。つい、ゲームみたいに……くそ！）

影夫にはどこか前世の感覚が残ってしまっていた。

最近のゲームではダンジョンのボスを倒せばそのダンジョンはもう安全になることが多いから、その感覚を無意識に抱いてしまっていた。

だがゲームと現実が違う。戦いには本当に命が掛かっている、死ぬか生きるかのリアルなものなのだということは、彼も分かっているつもりだった。

だけど、影夫は討伐を繰り返し、戦闘に慣れてしまっていた。少しずつ緩んだ意識が油断を産み、最悪の状況で危機を招いてしまったのだ。

その拳句がこれだ。影夫もミリアも大怪我を負って足手まとい。逃げるにしても、誰かがこの場に残って足止めしておかないとダメそうだ。

まさに絶体絶命。

この状況を、誰かがなんとかしなくてはいけない。

(誰が？ 誰がだつて？ 俺しかないだろうが)

そう。原因を作った自分が責任を取らないとだめだ。

「こりやあダメだ……でろりん、俺をおいてにげ、ろ……ミリアはちやんとつれてけよ」

「バ、バカいうなよ、逃げるときはおまえも連れて行くぞ！」

「たのむよ……あいつは、クラーゴンなんだ。糞強いのはでろりん達も、見ただろ？ 一匹はミリアが倒したけど、もう戦えない。お前らだけじゃ、戦っても殺される」

影夫は必死に危機的状況を訴えかける。

影夫は知識から軟体生物はクラーゴンであると判断していた。アレフガルドの海の悪夢。クソ高い体力をもち、3回攻撃かつ痛恨まで放つというトラウマモンスターだ。

リアルに戦うとなると、ゲーム以上に厄介な相手のように思えた。でろりん達には勝てない相手だろう。

「時間は俺が稼ぐ。ミリアをたのんだぞ……」

「何言ってるんだよ!? さっさと回復させてとつと皆で退却すればいいだろ！」

「無理だ……俺がここで残って食い止めるしか、ない」

完全回復するまで、呪文を何度も掛けるような悠長な真似はクラーゴンが許してくれないだろう。

クラーゴンはミリアを未だに警戒しているのか、遠くから様子を見ているが、じりじりと距離をつめてきており、いまにも飛び掛ってきてそうだ。

それに、洞窟から逃げる途中にも魔物と戦いながら逃げなくてはいけないことを考えると捨石となる足止めが絶対に必要なのだ。

一旦はこのボス部屋から出て行った雑魚達が遠くから様子を窺っている気配が影夫に感じられる。影夫たちが進退窮まったところで雪崩れ込む気なのだろう。

だから影夫は決めた。ミリアだけは絶対に死なせるわけにはいかないのだ。

「ダ、ダ、メっ……ダメだよ」

「ミリア？ おきちやダメよ！」

影夫の言葉が聞こえたのだろう。

息を荒げて朦朧としていたミリアがぐぐつと上半身を起こして、全身の激しい痛みに呻きながらも必死で影夫のところまで這いずってくる。

「ぐ……あぐつ、うう……お、にいちゃん……」

涙を流しながら、ミリアが影夫にすがりついた。

「ダ、ダメだよ、そんなの、ぜったいいや！ 逃げるなら、お兄ちゃんも一緒じゃないとダメなの！」

「わがままをいうんじゃない……でろりん、ミリアだけは絶対死なせるな……退路は、死んでもまもってやるから」

「くそ！ なんとかならねーのかよまぞっほり！」

「だめじゃ、どうくつの中ではキメラの翼も使えんし、リレミトを使えるものもおらん」

「じゃあ、背負って逃げるのはどうなんだ？」

「だめじゃ。帰り道にも魔物はあるじゃろ。足が鈍ったところに追いつかれては挟みうちになるわい」

「そんな……」

「じゃ、じゃあやつぱり……」

「二「クロスを見捨てて、逃げるしか……？」」

影夫が顔見知り程度の仲であれば、でろりん達は一も二もなく逃げていただろう。

しかしそうではない。友人であり弟子であり、自分達に多少の自信

と努力をはじめるときっかけをくれた恩人でもあるのだ。

「いやああああああああっ!! ぜったいダメツ! ダメだよっ、ダメ! ダメなのおっ!! 一人にしないでお兄ちゃんっ……!!」

「さっさといけでろりん! ミリアを逃がし損ねたら絶対にゆるさねえからな」

「ぐしゅっ、えぐっ……やらよおっ……そんなの、もうやらあ……! おにいちゃんのうそつきっ、守ってくれるって、一緒にいてくれるって言ったのに!!」

影夫は、泣き喚きすがりついてくるミリアの頭をゆっくりと優しくなでる。

「ごめんな。ミリア……」

「いやいやいやああっ……! ひぐっ、えぐっ……!」

「クロス、あんた……!」

「たのむ。ずるぼん……」

考え直せと言おうとしたずるぼんをさえぎり、静かだが有無を言わせぬ声で影夫が言う、誰も声を出せなくなってしまう。

あたりには、ミリアがしゃくりあげる音のみが響く。

「いやああっ、やだやだやだあ……! おねがいみんな、あいつを倒してっ、お兄ちゃんを助けてええ!」

「で、でも……」

ミリアが一縷の望みにすがりつく。自分を鍛えてくれた師匠達に、必死に懇願する。

しかし、敵はまごうことなき強者であり、影夫やミリアですら簡単に半死半生にされてしまったのだ。

でろりん達もできればどうにかしてやりたい。だけれども、臆病で怖がりな彼らはどうしても臆してしまう。

でろりん達は、少女の必死の願いを聞き入れてやれず、気まずくて彼女から視線を逸らし、返答も返せない。

「……」

「なん、で……みんな……?」

でろりん達の反応と態度は、ミアアと親しかったのに裏切った村人達が見せていたものと同じであった。

「うそ……だよね……みんなは、ちがう、よね……？」

「……………」

「みんなも……おにいちゃんをころすの？ しんじてたのに……わたし、わたし、みんなのことだいきだつたのに!!」

ミアアの脳裏にトラウマがフラッシュバックする。またしても、心を許し、信じていた人達によって、大切な人を失ってしまう。

「どうして……っ？」

爆発する感情が、暗黒闘気の奔流を生み出し、ミアアの体から激しく噴き上がらせた。

無茶がたたって壊れかけた肉体が、全身を蝕む暗黒闘気に悲鳴を上げ、激痛をミアアに伝える。

だけど、今のミアアには体の痛みなんて感じる余裕はなかった。心がそれ以上に張り裂けそうで苦しいのだから。

「ちがうよね!? みんなは、やさしくてつよくて……むらのひとたちとはちがうよね!」

「……………」

「ちがうって言うてよ……!!!」

洞窟の中に悲痛なミアアの声が響き渡った……

## 勇気

「あ、あああ……」

絶望しかけたミリアは突然、力強く抱きしめられた。

クロスとは違うぬくもりと柔らかさ。それが強くミリアへと伝わってきて、彼女をつかの間の正気へと揺り戻した。

「……………っ」

ずるぼんは、吹っ切るように唇をきつくかみ締め、一際強くミリアを抱きしめる。

「ずるぼんお姉、ちゃん……?」

「違うわ……私は、ミリアもクロスも絶対に見捨てたりしない」

ビクツと身をすくませたミリアの背をやさしくさすり、言い聞かせように、はつきりと言いつつ切った。

「バカクロス！ あんたが死んでどうするのよ!? ミリアをひとりぼっちにさせる気なの!?!」

泣きながら絶望に沈むミリアを見て……死ぬ覚悟をきめた影夫を見て……ずるぼんはふたりを絶対に見捨てることなど出来ないといわめき、怒っていた。

「……………すわ。……………してやるわよ!」

「え……………」

「倒す！ あんなくされイカ、私が倒してやるって言うてんの！ だからクロスが死ぬ必要なんかないのよ!」

言葉とは裏腹にずるぼんは震えていた。当然だろう。影夫を見捨てられないなら自分が代わりに戦うしかない。勝てるはずもない相手と。

「ふっ、ふざけんずるぼん!」

影夫は、ずるぼんの無茶な言い草に怒る。今は冗談を言ったり世迷いごとを言っている暇はないのだ。

今は警戒しているクラーゴンの様子見が終われば、逃げるのが難しくなってしまうだろうから。

「ふざけてんのはあんたよ！ あんたが死んじやったらミリアはもう

立ち直れないってわかってんの!？」

しかし、ずるぼんは一步も譲らず、怒鳴り返す。

「ずるぼん……」

わずかに震えながらも必死に声を上げるずるぼんの様子を見て、でろりんはきつと彼女は怖かったのだろうと思った。その気持ちはでろりんにもよく分かった。

でろりん達にとって、クロスは、親しい仲間であり、弟子であり、妹分であるミリアの大切な存在だ。すでに見捨てるのが恐ろしいと思うほどに絆は深まってしまっている。

見殺しになどしたら、己のあまりの罪深さに生涯、いや死後にまで後悔し、苦しみ続けることになるだろう。それはきつと死よりも恐ろしい。

「……くそっ」

彼の心は一つの結論を出していた。愚かで馬鹿で柄でもない行動だ。

するぼんと同じで、今もでろりんの身体の震えは止まらないし、恐怖は全然なくなるらない。

「……やってやる。やってやろうじゃねえか」

だけど。でろりんにも男として、師匠として、意地があった。

そしてそれはでろりんだけではない。へろへろもそうであり、まぞっほも全身を震わせながらも同じ想いであったのだ。

「ずるぼん……俺らもやるぞ」

「へへ、弟子を捨てて逃げるなんて師匠失格だからな?」

「こ、こんな情けないワシを、尊敬してくれる初めての弟子なんじゃ……ここは年長者が、ひとつ気張らんな……!」

でろりん達は顔を見合わせ、ずるぼんの肩を叩く。

それですべてが決した。

「おいまぞっほ、頼む」

「了解じゃ……ラリホー」

「な、に……を?」



ずるぼんは、ラリホーが利いて地面にくったりと倒れこんだ彼の横に、優しくミリアを横たえた。

「みんな……？」

「もう大丈夫。あなたはクロスと一緒にここで待つてなさいね。あんなやつ、お姉ちゃんたちがかるーくぶっ倒してやるから」

「つてわけだミリア……こわい思いさせて悪かった。でももう大丈夫だからな」

きよとんとするミリアにずるぼん達は優しく声をかけ、頭を撫でる。

「ううん……やくにたてなくて、わがままいって、ごめんね……」

「さあ、起きてちゃ傷にさわるから寝てなさいね、ミリア」

「……うん」

「あとはワシらに任せておけ……ラリホー」

全員がミリアを撫でたところでまぞつほがラリホーでミリアを眠らせた。

臆病で弱つちい、偽物勇者達の挑戦が今より始まる――

「で、実際どうする？ 攻撃は強烈、タフさは相当、何よりあの手数……あらゆる点で格上だぞ」

「正直、ワシにはどうしようもないのう。試したこともない新呪文ならあるが……この場で都合よく使えるとは、のう」

「俺も、練習してた技はあるが不完全だ」

でろりん達は震える足を押さえながら、作戦を練る。がクロスとミリアを一瞬で戦闘不能に追いやる強敵への打つ手は正直言ってなかった。

「ま、まずいか……どうしようも……」

（いえ、あるわ。たったひとつだけ。分が悪い賭になつちやうけど……これしかない。ええいつ、女は度胸よ！）

ずるぼんはクロスから渡されていた非常用の魔法の聖水をすべて飲み干し、決意が鈍らないうちに覚悟を決めた。

今は全員がやると決めている。しかしでろりん達4人は元来臆病

で勇気と根性に欠けるのだ。

時間を経つたたびに決意は薄れ、弱虫の虫が騒ぎ出し、元に戻ってしまっただろう。

だから、とにかく考える暇も余裕もなくなるほど動くしかない。そう思い、ずるぼんは口を開いた。

「みんな、聞いて……私にはたぶん決まれば絶対に勝てるって切り札がある」

「「本当か!?!」」

「説明の時間はないからしないわ。とにかく、突っ込むから、援護しないよね!!」

でろりん達の決意に期限があるように、クラーゴンも待っててくれな

い。  
警戒対象であったミアアが昏睡したことで、様子をやめて触手を振り回し近づいてきているクラーゴンに向けて、ずるぼんが猛然と突進をはじめた。

「待ってって! くつ、イオラ! おい、お前も呪文使えよ!」

「ダメよ、魔法力の無駄遣いは出来ないの!」

「くそつ、あと数発で打ち止めだからなツ、イオラ!」

ずるぼんの後をおいかけ、でろりんが併走しながら、イオラをお見舞いしてクラーゴンの体勢を崩しつつ、ずるぼん目掛けて襲いくる触手を弾くように斬り払っていく。

だが、その足の数は多い。攻撃回数が多すぎて、このままずるぼんを守りきって、クラーゴンにまでたどり着くのは不可能だと瞬時に悟った。

「しゃあねえつ、おいつ、へろへろ、俺達が囷になるぞ!」

「っ?! 了解だ!」

後を走ってついてきてたへろへろに声をかけ、でろりとへろへろは、ずるぼんの側から離れ、左右から別々にクラーゴンへと向かっていく。

「イオラ! ボケイカが、こつちに来やがれ! 食い殺してやる!

イオラッ! ど畜生お、もうやけくそだあつ! イオラ!」

でろりんは、恐怖と臆病の虫を押さえ込むかのように喚き散らしながら、威力も狙いもお構いなしにやみくもに呪文を放ち、クラーゴンの気を引く。

「ふううんっ！ どりゃああー!!」

へろへろも、影夫から譲り受けていたサブウエポンの聖なるナイフをクラーゴンの顔に目掛けて次々に投げつけ、襲ってきた触手を鉄のオノで思い切り斬り飛ばし、クラーゴンを怒らせる。

「グアウウウウ……!!」

「ぐっ?」

「ぐああ?」

だが、クラーゴンとのレベル差は並ではない。ふたりは粘った末に武器を弾かれ、触手に殴り飛ばされた挙句に掴まれてしまう。

ここまでに彼らが必死になってようやく潰せたのは触手5本のみ。それでも十分上出来と言えた。

「ぎゃああああ！ いてえよ畜生！ 柄でもねえことするんじやなかったー!!」

「ぎっ……くそおお……!」

でろりんとへろへろは必死にもがきあばれるが、ふたりを掴む触手は手を緩めず、逆に強烈に締め上げて、握りつぶそうとしてくる。

そんな中――

「な、情けない……ワシが、ワシだけが……!」

まぞっほは、ひとりだけで、ただただ震えていた。

でろりんとへろへろは自ら囿となり、命を賭けた。死んでしまうかもしれないのに、勇気を見せたのだ。ずるぼんは仲間を信じて一心不乱に死地へと飛び込んでいる。

なのに自分だけが、無様に震えて動けなかった。

弟子を救いたいと思い、協力を申し出ておいてこの醜態。まぞっほは心底自分を呪い、罵倒した。

「ワ、ワシは、ワシは……すまん……どうしても、動けないんじやああ!!」

そしてそんな風に思っているのに、まぞっほの足は震えるばかりで  
一歩も前に進めないのだ。

それどころか、逃げだそうとしてしまいそうなるのを必死で止める  
だけで精一杯であった。

「ワシに兄者や師匠のような勇気があれば……！」

それが、まぞっほにはどうしようもなく情けなく、涙が流れて止ま  
らない。

「ぎゃああああーっ!!」

まぞっほが葛藤に苦しんでいると、めきめきと骨の碎ける音ととも  
にへろへろの悲鳴があたりに響いた。

へろへろは、単純な性格だ。

だからこそ一度決めたら必死に役目をはたそうとした。

武器を失っても体に巻きつく触手に噛み付き、爪を立て、がむしや  
らに抵抗を続けて気を引いていた。

そしてその意図は成功し、だからこそへろへろは渾身の力で体を碎  
かれたのだ。

「へろへろ!? ちくしょうが!」

「ひ、ひい……! ワシ、は……は……ワシはあ……」

「てめえまぞっほおおっ!! なんとかしやがれええ!!」

「あしが……」

「おまえは魔法使いだろうが! 足が動かなくても、手は動くだろ!

魔法は使えるだろうが!!」

「で、でも、ワシは……」

「てめえもおれらの仲間なら、ちったあ根性見せやがれ! 腰抜け魔

法使いっ!!」

でろりんがまぞっほに絶叫する。

それと同時に。

「ぐあああっつ、いでええええっつっつーっー!!」

でろりんも触手によつて骨を砕かれてぐつたりとうなだれた。

「でろりん……い！へろへろ……い！」

懸命に役目を果たしたへろへろとでろりんの姿。

それを見せられても、まっぞほの心からは未だ恐怖は消えないし、胸に勇気の欠片はなかった。

そんな簡単に人の根っこは変わらないし、変わらない。

だが、しかし。自分と似た境遇で同じように臆病でありながら、立派な勇姿を見せ続ける若い仲間達を見て、無駄に重ねてきただけの年月の重みが、負けられないという意地へと少しずつだが、変わっていく。

『勇者とは、勇気あるものツ！そして真の勇気とは打算なきものツ！！相手の強さによって出したり引つ込めたりするのは、本当の勇気じゃなあいつ！』

いつか師匠に言われた、教えられた言葉が脳裏に蘇る。

今、でろりん達は、紛れもない勇者になっていた。

「ワシは、ワシはツ……い！」

なのに自分は臆病ものままでいいのか。

この上、また逃げ出してそれでいいのか。

仲間達と一緒に勇者になりたくないのか。

先んじて勇者になった彼らは自分達の仲間であり、大切な者たちだ。どうしても守らねばならない者たちもいる。

「でろりん、へろへろ、ずるぼんよ！ワシに、ワシにも勇気を分けてくれ……い！」

この瞬間、まっぞほの臆病な心に仲間たちからもらったちいさな勇気がたしかに宿った。

「ワシは、1人ではないツ！皆がいるなら、ワシだって、勇気の欠片くらい、絞り出してみせる!!」

最初にずるぼんが見せた勇気の欠片は、でろりんやへろへろの心へと伝播し、最後にまっぞほの胸に宿った。

彼らの勇気の欠片は、アバンの使徒達のそれよりも、ちいさくよわい。

だけどそれなら。

1人じゃ勇気が足りないならば、4人が勇気を合わせればいい。

そうすれば、臆病で弱つちい偽物も、紛うことなき本物になれるの  
だ……！

## 死力

「みんな……すまん。本当にふがいなくて、すまなかった！」

まぞつほは、握り締めた右手を天にむけて勢いよく突き上げると全身から掻き集めた魔法力をこめる。

「メラゾーマ……!!」

唱えるのは、新呪文。

今まで、契約はできても使えなかった高等呪文だが、胸に宿った小さな勇気が今、必要な奇跡を呼び寄せる。

「遅れながら……ワシも、命を賭ける……!!」

仲間が作りあげつつあるチャンスをさらに磐石とするのは、まぞつほの仕事である。

怖かろうが何だろうが、これは譲れないのだと。勇気を得ても未だ震える弱い己に必死に言い聞かせ、命を賭けた無茶を実行した。

「メラ・ゾー・マ……!!」

それは、クロスから聞いたことがあった禁呪法まがいの技であった。

寿命を縮めると聞いて、絶対に使わないでおこうと心に決めていた……その無茶は成功した。

だが、その代償は大きい。人間ごときが魔法力の溜めをせずに、身体中から魔法力を搾り集めてメラゾーマ3発を瞬時に作ったのだ。

足りない魔法力の代わりに生命力が消費された挙句、呪文同時使用の大きすぎる負荷も脳をはじめとした全身に無理を強いた。彼の寿命は確実に縮んだだろう。

「フィンガー……フレア……ボムズ!!!」

右手を振りぬきクラーゴンに3発のメラゾーマを撃ち放つ!

それと同時に肉体を蝕む大きな反動を受け、心臓を押さえて彼はその場に倒れこんだ。

「ナイスよ、まぞつほ! これで届くわっ……!!」

まぞつほが命を縮めて放った3つの巨大な火炎球はクラーゴンの顔から胴体までを炎で包んでその動きを封じた。

クラーゴンは、もはやずるぼんにかまう余裕はなく、捕まえていたへろへろやでろりんをもその場に投げ捨てて、苦しみ悶えた。

その隙を突いて、ついにずるぼんは、クラーゴンの顔の真下へとたどり着き、触手の一本に飛び掛って思い切り抱きついた。

クラーゴンの胴体を燃やす炎が彼女にもふりかかって、髪や肌を焦がしたが、そんなことには構わず必死に食らいついていく。

「喰らいなさいっ!! ベホイミ、ベホイミ!」

ずるぼんは、両手から出来る限りありったけの回復呪文をクラーゴンに叩き込んだ。

彼女が狙っているのは、いつかクロスから聞いた恐ろしい呪文。

生物を必ず殺せるという過剰回復呪文であった。

だが、足りない。注ぎ込む回復呪文の威力が弱くて、ただ単に回復させているだけだ。

後一步及ばず、回復を過剰にすることができない。敵を有利にしているだけの無為の状態が続いてしまう。

「くっ……ベホイミ、ベホイミ……ベホイミ!」

(そんなっ、私じゃ無理なの……?)

このままではまずいと、ずるぼんは焦る。かすかに脳裏に浮かぶのは今だ試したことのない完全回復呪文。

あれが使えれば、起死回生となる。だけど、自分なんかには、回復呪文の効果もクロスに劣っているような自分が土壇場で成功させることなんてと逡巡してしまう。

「ずるぼん! 今気張らずにいつ気張るんじやああ!?! ワシでも……こんな、臆病な老いぼれでも奇跡を起こせたんじや……お主ならできる!」

「最初から無茶なのは分かってんだろうが! ならばびびってんじやねえ! 俺達でクロスやミリアを守ってやるんだろうが!」

「やれえずるぼん! これでダメなら全員仲よくお陀仏だ!」

「俺達は、お前にすべてを賭けるッ!!」



仲間達の声を聞きながら、ずるぼんはちらりと、部屋の隅で並んで眠っているミリアと影夫を一瞥する。

それでずるぼんは、悟った。自分に出来そうとか、出来ないとか、そんな話じゃない。何が何でもやってみせるだけ。それしかないのだと。

こんな勇者みたいな考えは絶対に自分の柄じゃない。そんな器でもないと思う。そんなことは彼女自身が嫌というほど分かっている。

けれど、やらなきゃダメだから。

家族同然ともいえる大事な仲間達を失うなんて、絶対許せないから。

だから！

「起こしてやるわよ、奇跡くらいっ！　っ……完全回復呪文！」

ずるぼんは屹然と魔法力を高めて完全回復呪文を試み……見事に成功した。

回復魔力の光で淡く輝いていたずるぼんの両手が、眩い光を放ち出し、一段階上の回復力を生み出していく。

「ぐ、うううう……はあはあ……どう!?　私のベホマは最高、でしょうがあ!!」

ベホマの強い回復力が一気に流れ込んだことで、ついに過剰となったその力がクラーゴンの肉体を破壊し始めた。

「さあ、たらふく喰らいなさい。クロス直伝のお……過剰回復呪文をッ!!」

ずるぼんが触れていた部分からクラーゴンの肉体がまるで枯れるように変色して、死んでいく。

「ギャオオッー!?　ギャウッー!」

本能で危機を察知したクラーゴンが苦しんでいる場合ではないと、炎に巻かれつつも残っている4本の触手を振り回して、ずるぼんを殴り飛ばそうとする。

「やらせる、かあッーッー!!」

だが。

ずるぼんを振り払おうとする触手の1本目は、自ら回復して駆けつけたでろりんがどうにか斬り飛ばした。

しかし、その反動で剣がへし折れてしまい、彼は武器を失った。

「ベギラマアツー!!」

2本目の触手はまぞつほが、残った全魔法力をつぎ込んだ渾身のベギラマで焼き切った。

「決めるんじゃ! ずるぼんっ……!!」

それと同時に完全に魔法力と体力を使い果たして、彼はその場で絶する。

「……闘気砲ツ!」

3本目の触手は、肋骨の一部と左腕に大腿骨をへし折られていたへろへろが、苦痛を堪えながら、身体中からかき集めた闘気を、右手の人差し指と中指のみに集中させて触手の根元に撃ち放って千切り飛ばした。

「ずるぼんっ、後は任せたっ……!」

それと同時に未完成技ゆえにへろへろは闘気の使いすぎて気絶する。

「へっ! クロスのヤローに出来てっ、俺にできねえってこたあねえよなあっ!!」

武器を失い4本目の触手への迎撃手段を失ったでろりんは、とっさに触手目掛けて体当たりをしかけ、自らが攻撃を受けることでずるぼんを庇った。

「渾身の最後っ屁、食らいやがれえっ、イオ!」

しかも、彼は触手に殴り飛ばされる瞬間、イオの呪文を零距离で叩き込んで、4本目の触手を道連れにしていた。

「やれええーっ! ずるぼんっ!!」

でろりんはエールを送るとともに、殴られた衝撃と自ら使ったイオの爆風で吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、意識を失う。

3人が死力を尽くして捧げた献身は、結実する。

「ギャグアアアッー!!」

その間にもずるぼんの手により膨大な回復魔力は注ぎ続けられており、壊死する細胞も全身へと急速に広がっていた。

死んだ組織が朽ちる勢いも猛烈で、地面の上にぼとぼと腐れ落ちていく。

もはやなりふり構わずクラীগオンが、しがみつくずるぼんを振りほどこうと触手を激しく振り回し、思い切り地面にも叩きつけた。

離すまでやめないとばかりに、ずるぼんは何度も何度も地面に打ち付けられる。

「あぐっ、がつ、ぎっ、がはあぁっ……!!」

強い衝撃が幾度となくずるぼんの背中へと伝わり、何度も苦悶の吐息を吐かせた。

だが、彼女は全力で手足を絡めるのを決してやめず、獣のように歯で噛みついてまで必死に食い下がった。

「しんでもぜつたい、離さない! 皆が作ったこのチャンス、逃せるわけがっ、ないでしょうがあああッー!!」

ずるぼんは、回復呪文の眩く輝く光を一際激しく全身から迸らせ、搾り出すように全魔法力を出し尽くしていく。

「うううああああああああああああああッッ!! ……マホイミィィイツ!!」

「ギャウウウウウーッ??!!」

ずるぼんの魔法力が真正銘の空っぽになると同時に、クラীগオンは断末魔の絶叫を上げ、息途絶える。

その巨体を地面に倒れ込ませ、朽ちて脆くなった肉体組織をあたりにぐしやりとぶちまけた。

ベンガーナ海域を支配する主達が倒されたことで、雑魚の魔物達は、今度こそ一目散に逃げ出していく。

ずるぼんたちが、勝ったのだ。

「はあはあ……ざまあみなさい……私達の、勝ちよっ!」

勝利の叫びを上げると同時に、ずるぼんも気絶するのだった。

——軒並み死力を尽くして気絶した面々が起きるのは、それからしばらく後であった。

☆☆☆☆☆☆

洞窟から出てすぐのところにある浅瀬の岩場。

でろりん、ずるぼん、へろへろ、まぞつほの4人はその巨岩の1つに座り込み、海を眺めて呆然としていた。

「なあ。リーダーよお……」

「なんだよへろへろ」

「あいつ、強かったな」

「そうだな。無茶苦茶な奴だったよ」

「そうじゃのう。この世のものとは思えんくらいじゃったわい」

「そんなのとよく戦ったわよねえ。私達がさ」

「しかも勝って生き延びたなんてな……」

「すごいな……」

「信じられねえよ。ありえねえって……」

「……」

そういつてまた4人は無言になる。

そんな4人に海辺の強い日差しは容赦なく照りつけて皮膚をじりじりと熱する。

寄せては返す波は冷たい海水のしぶきも運んでくる。

今、4人の感覚はともつもなく研ぎ澄まされていて、五感の全てが新鮮で鮮烈に感じられた。

今彼らが感じとっている世界は、まぶしく鮮明、熱くて冷たくて、生臭くて芳しくて、醜く美しく、痛くて気持ちいい、煩くて静かだった。

まるで生まれ変わって、すべてが新鮮で多感であった子供時代に戻っているかのようだった。

「夢じゃないんじゃない……ほれ、あれを見てみい」

まぞつほが指差す先では影夫とミリアが仲良く寄り添い合い、馬車の荷台ですやすやと眠っていた。

微笑ましい仲睦まじい兄妹の寝姿だ。

「俺達が、助けたんだな……」

「こんなワシが……」

「俺が……」

「私が……」

「そうだよな。間違いなく、俺達がやったんだ」

「のう皆……ラリホーが覚めた後、泣きながら感謝してくれたときのこと。覚えておるか？」

「わすれるわけない……だってあれは……」

「だよなあ。なんつーか……ほんとたまらねえよな」

クラーゴンを倒した後のことをもう一度思い返し、安らかに吐息を立てる影夫とミリアを見ていたら、じわじわとした実感が4人を襲ってくる。

死力を尽くして仲間と協力しあい、大事な友と弟子を守るため、強大な敵に立ち向かい、力を合わせて打ち倒した。

まるでどこかの英雄譚。本当の勇者たちのような行為を自分達が成し遂げた。

中途半端で自己評価も低く、逃げ腰であった彼らは今まで生きてきて一度も味わったことのないとてつもない達成感を覚えていた。

「くうくうくうくうくうくう」

歓喜、幸福、充実、充足。ありとあらゆるポジティブな感情が4人の心に溢れている。

とてもではないが感情を抑えきれず、各々は地面を叩いたり、砂を投げたり、空を見上げたり、胸を叩いたりして、それぞれに身体の内から湧き上がる最高の気分を味わっていた。

今日のことは絶対に死ぬ間際ですら忘れないだろうと確信できる4人であった。

「……ちくしょう、さいごうの、きぶんじゃねえか！」

4人は打ち震えて泣いていた。嬉し涙など初めてだった。

悔しくて流す以外の涙を自分達が流すことが出来るなんて思ってもいなかった。

彼らは自分達の中の何かが、確かに変わったことを感じていた。

今日、4人の心に刻まれた経験と記憶は彼らのこれからの人生を確実に大きく変えることになるだろう。

## 遭遇

クラーゴン討伐の翌日。

疲れ果てて宿で眠っているでろりん達を置いて、ルイーダへ討伐依頼の顛末を報告しにいった影夫は、ルイーダに真摯に謝られた。

誤情報をよこした国にこのけじめを取らせると豪語し、とりあえずの謝罪金だとして10倍に増やした報酬をくれた。

いくらなんでも20万ゴールドの報酬は法外だと影夫は言ったが、けじめだとして押し付けるように渡してきた。

さらにルイーダは、金はあくまで組織としてのけじめなので、個人としての信義に基づく侘びの助力をさせてくれないかとも言ってきた。

今回の情報ミスについては、ルイーダに大きな責任はないと影夫は思っている。国から言われたことを伝えただけで、彼女には何かする能力も義務もなかっただろうから。情報の信憑性について確認だとしてたというし。なのに偉そうな役人が酒場女風情は黙って従え的な態度だったらしい。

そんなに気にすることないのに、いい人だなあと影夫は申し訳なく思いつつ、ルイーダの好意に甘えることにした。

「それで、強い武器が欲しいんだって？」

「ああ。ミアアの武器が壊されたんだが、デパートで予約してた武器がキャンセルになってあてがなくなっただよ」

影夫はネコのぬいぐるみ（ネコぐるみ）の手足を動かし、ミアアに抱かれたままやれやれとしぐさを取る。

ミアアの怪我と消耗した体力はずるぼんのベホマで回復しているし、暗黒闘気の反動や影響は影夫が取り除いたので、ミアアはもうピンピンの健康体だ。

原作だと、暗黒闘気によるダメージは回復にかなり時間がかかったし、影夫による暗黒闘気の除去が可能というのはかなり大きなアドバンテージじゃないかと思う。

「……………」

ミリアはというと、最初は情報ミスに怒っていて、ルイーダに冷たく当たっていたが、影夫がどうしようもなかったんだからと宥めつつ、彼がルイーダを許してしまったので、ちよつと不機嫌そうに出されたミルクをこくこく飲んで黙っている。

「何でもその鍛冶屋が大臣と揉めたんだとか言ってたよ。一方的キャンセルのお詫びにと、どくがのナイフをタダでもらったけど……やっぱメインウエポンがないとなあ」

しかし……デパートで注文したとき、店員が鍛冶屋ジャンクとかいってたが、大臣と喧嘩するエピソードからして、ポップのオヤジだったようだ。

この時期にランカークスへ引越して、近所の山の中に隠れ住んでいるロン・ベルクと出会って友人になるってことかな？ と影夫は考える。

一瞬すぐにもランカークスにいつてロン・ベルクに会いにいかとも考えたが、やはり伝手がないと無理だろう。

ミストバーンの仲間の間違われたら、バーンの元に戻るつもりはないと追いつ返されるだろうし、原作の気難しさじゃ頑張っても仲良くできそうな要素があまりなさそうだ。

ミリアが真魔剛竜剣をへし折れるなら話は別なんだろうけど。

「つたく、大臣と揉めるのは勝手だけどき、請けた仕事はやってもらいたいもんだな。高名な鍛冶屋なら」

「ああそれは、その大臣つてのが手を回したんだろうね。デパートに圧力を掛けて仕事を回させないようにしたのさ」

「うへえ。なんだその無能大臣の典型みたいなやつ」

実に迷惑千万だ。

でろりんの折れた武器を作ってもらったりしようかと考えていたのでこれでそのあても外れた。

「でも、強い武器か……裏のほうで探せばあるかもしれないね」

「お!? 本当？ 金はちゃんと払うからできれば頼むぜ！」

「金はいらないさ。けじめってやつだ。ただ、表に出せない類の品に



なつちまうから勇者さまにはふわしくないかもね……それでもいいかい？」

「ああ！ 強けりゃ盗品でも、呪いの武器でも何でもいいからな！ 俺が制御を手伝えば呪いの武器でもミリアがあつかえるかもしれないんだよ」

「へえ……そいつはすごいね」

「だけどどこにも売ってないんだよなあ。闇市にならあると思ったのに」

ルイーダの目がきらりと光る。

強力だが強烈なデメリットがついて回る呪いの武器。

そんな武器を彼女は実際に何回か見たことがあった。

扱いに困る物が多いが、有効活用できるならこれ以上なく強力な武器になるだろう。

それに呪いの武器はまともな人間なら所有を嫌がるし、威力に魅かれて購入したところで、デメリットや呪いの存在で結局持て余すことも多いから、市場価値はたいしたことない。

呪いの武器自体がかなりの希少品である上に、まともに取り引もされてないから、足繁く盗品市や闇市に通ったとしても見つけるのはほぼ無理だろう。

裏世界に顔が利くルイーダにしか呪い装備の入手は出来ず、品物自体は安価に手に入る。これは彼女にとって都合がいい状況だ。

「呪いの武器は殆ど出回らないんだけど、伝手をあたってみるよ」

「はかいのつるぎとか、みなごろしの剣でしょ？ すつごく悪かつこいいいんだろなあ……はやくみたいねお兄ちゃん！」

「勇者のお嬢ちゃんは、そういうのが好きなのかい？」

「うん」

「そうか、それじゃあ頑張って探しておくよ」

興味のある話題が出てすっかり機嫌の戻ったミリアの様子に安堵したルイーダは、おかわりのミルクをミリアのジョッキに注いでやり、微笑を浮かべる。

「ほんと、ルイーダさんに話してよかったよ。信頼できる人みたいだ

しき」

「そいつは光栄だね。期待に応えられるようにするよ」

すでにルイーダは影夫の人となりを理解していた。

ルイーダが分析するに、彼は信頼と信義を重視する性格の人物だ。

彼のようなタイプは害意や悪意に敏感だ。奪ったり騙そうとする  
と以後は警戒されて二度と心からの信頼をされないだろう。

特に彼が一番大事にしている『家族』や『仲間』といった部分は彼の  
逆鱗といえる。

逆にいえば一度信頼されてしまえば裏切らない限り、付き合いやすい  
性格でもあるだろう。

安定志向で諍いを嫌うので、彼のほうから裏切りや策謀をしかけて  
くるということがないからだ。

ルイーダが弁えて誠実な振る舞いをすれば、良い関係を維持するこ  
とができる相手と彼女は見た。

(しかし、伝説の武具なのに、えらく人間臭いことだねえ。こどもの保  
護者もやってるし……そこらの人間よりもよっぽど人間らしい)

ルイーダはちらりとカウンターの上で身体を伸ばして寛いでいる  
ネコぐるみ姿の影夫を見る。

ミリアを大事にしていることは普段の言動でよく分かる。

自分を含めて食わせ物がおおい人間よりもよっぽど真つ当に、『人  
間』をしている。

(このころ姿も変わるし、おもしろいやつだよ)

最初は、ミリアの姿を借りて、次はミリアの首にくつついて、今度  
はネコのぬいぐるみ姿だ。

ちなみにいい年齢のルイーダをしても思わず抱きしめたい可愛さ  
だが、手下の手前もあり我慢していたりする。

(いつまでも、いい関係でいたいものだね)

そう思いつつ、ルイーダは脳裏ではすでに算盤がはじかれていた。

彼は、見ず知らずの他人よりも信頼を置いた相手との付き合いを優  
先するだろうから、ルイーダが勇者ミリアへの各種依頼や各種交渉の  
独占窓口になることで、彼女の影響力は大きくなる。

大きくなった影響力を使えばルイーダはますます権力と富を増す事が出来る。

無論、一方的搾取は信頼を損ねるので論外。きっちりと彼らにも恩恵を渡しておけば皆が幸せになれるだろう。

要は、ルイーダが得をすれば彼らも得をするようにしておけばいい。利用ではなく協力の形だ。

「ごちそうさまー！」

「じゃあいくかミリア。装備の件はお願いしますね！」

ぴよんとカウンターから飛び跳ねたネコぐるみ影夫は彼の定位置であるミリアの腕の中へと飛び込んで、彼女とともに酒場を出て行った。

☆☆☆☆☆☆

ミリアがベンガーナの街の中を鼻歌まじりで歩きながら歩いていた。もちろん、その手には影夫が抱えられていて一緒にいる。

「ごっはんーっ、おいしいごっはんー♪」

「上手い飯は明日への活力だよな。ミリアは何食いたいんだ？」

「ハンバーグ！」

「そればかりだなあー」

転生の定番ということで、影夫はこっちにはない料理を作ったりもしていた。

さまざまな作品でネタになるだけあってハンバーグは鉄板だった。

安い肉でも手間をかけて美味しくできるのは魅力だ。

でろりん達も気に入っておりすっかり彼らの間で定番メニューとなっっている。

「まあいいやデパートでみかわしドレスを受け取ったら、地下で材料買って帰るか」

「野菜もちゃんと食べるんだぞ？」

「わかったー！」

とたとたと小走りでミリアはデパートへの道を急ぐ。

形見のドレスは、みかわし効果をつけてもらっていたが、今日デパートに届いたらしい。

今のミリアはというと影夫が以前プレゼントした白いワンピースを着ている。腰のナイフシースやくくりつけられた道具袋が若干ミスマッチだが町の人は特に気にすることもない。

「こつちが近道っー♪」

「あ。そっちは……」

ミリアはいつぞやの裏道に飛び込んでいく。

崩れかけたレンガの建物の間をとおり、ゴミをまたいで小走りに駆け抜けていった。

いつもは人相の悪い男やくたびれた物乞いがいるものだが何故か今日はいない。

「待ちやがれこのガキツ！」

「捕まえて売り飛ばしてやる！」

影夫が不思議に思っていると、どたどたと走り回る音にふたり組の男の怒声が聞こえてきた。誰も居ないのは犯罪にかかわりあいたくないためか。

「あー……」

「なんだろ？」

「馬鹿が誘拐をもくろんでるみたいだな。よし、助けるぞ」

「えー、はやくハンバーグたべたいのに」

「ビッグハンバーグにしてあげるから！」

「はやくたすけないとたいへんっー」

「つともう、現金だなあ」

黒い長髪を揺らしながら、声のほうへと急ぐミリア。

「くっ……」

「散々てこずらせやがって！」

「もう逃げられねえぞ」

袋小路になっている建物と建物の間。

そこに一人の少女が追い詰められていた。

歳のころは10くらいだろうか。ミリアと同じくらい。

長い金髪の少女で、気が強そうな顔をしている。

今も誘拐犯達を睨んでいる。

それにしてもその少女は、身なりがかなりいい。どこかの令嬢だろうか。

「うわー……あいつら、チンピラの誘拐犯がいかにも言いそうなこと言ってるよ」

「おやくそくってやつ？」

あまりに分かりやすい奴らに思わず影夫が言葉を漏らし、ミリアがあわせる。

そんな、緊張感のない少女の声にそいつらが振り返る。

「誰だ!？」

「なん……て、てめえはいつかのガキ!!」

影夫はそいつらに見覚えがあった。いつか裏道に入ったミリアを襲ってきたチンピラふたりぐみだ。

歯抜けのハゲチビと、ガリヒゲノツポという中々目立つ風貌だ。

「？」

「昔Wしゃちほこポーズで往来に放り出しただろ」

「あーいたねそんなの。ほら、お兄ちゃん。わたしが言ったとおりでしょ。こんなのは反省なんかしないんだから生きてるだけ無駄なんだよ」

「な、何ひとりでぶつぶついつてやがる!」

「てめえこの前はよくも!」

チンピラのうち、歯抜けのチビのほうが、おろかにもミリアにナイフを向けてしまう。

「あーあ……敵になっちゃった。くすくす。こんなのに、お兄ちゃんが情けを掛ける価値なんてないよね!」

「お、おい殺すなよ。ほんとに殺すなよな!」

ナイフシースから右手でどくがのナイフを抜刀し、ミリアは舌なめずり。

それと同時に前傾姿勢になって、ぐつと膝に力をためる。

「ガキがナイフもつてもおままごとなん……だあつ!?」

「おままごがどうしたの?」

たったの一呼吸。

その一瞬で、3Mほどの距離をつめたミリアがハゲチビを蹴倒して喉仏の上にかかとをめり込ませた。

きちんとナイフを持った手は左足で踏みつけて封じている。

「てめっ」

「動いたらこいつ殺す」

ミリアはガリヒゲノツポにそう言つて、動きを止めさせる。

「殺すなつて!」

「ちよつとおどすだけだよ」

「あ……ひ……」

「ねえ。どうして反省できないの?」

「た、たす……」

「助けてつて言った人を助けたこと、ある? ないよね?」

「あう……つ」

「ないんだね。残念でし」

「ま、まってつ! もういいつ!」

ドンツ、とミリアが予想外のほうから突き飛ばされて体勢が崩れる。

「逃げなさいつ! 悪いことはもうしないこと!」

「は、はひいつ!!」

狙っていた金髪の少女に助けられて呆然としていたチンピラふたりだが、転がるように逃げていった。

「いたたた……助けてあげたのに……もう」

「やりすぎよあなた! 何も殺そうとすることはしないでしよう!」

「あなたには関係ないよ」

怒った顔で言ってくる同年代の少女に、ミリアはめんどくさそうに言い捨てる。

「ごらっ、ミリア」

「あいたつ」

ミリアの腕から抜け出した影夫が肩に乗って、ぷにぷにの頬にぽかりと猫の手ぱんちをお見舞いする。

直立して腰に手を当て、影夫はお説教モードだ。

「殺す気はなかったもん。潰すだけにするつもりだったから……たぶん死なないよ」

「殺しだけじゃなくて、殺しかけるのも禁止な!」

「だってそれじゃあ、あいつら反省しないよ。いつか誰かの大事な家族があいつらに殺されたらどうするの?」

「だからって、まだやつてもないのに罰したらダメだろ。反省しないかもってのはわかるけどさ。それは俺がちゃんと考えておくから」

「はあ〜い」

しよぼんとした感じに肩を落とすミリア。

ミリアは、言われたことは守るのだけど、不満があることについては言葉の裏や綾を利用して出来るだけ過激にやりたがるので困る。

(ミリアとしては、悪人は全部誰かの家族を奪うかもしれない凶悪な可能性に見えちゃうんだらうけど……)

まあ結果的にあそこまで怖い目を見たら、真つ当に働くようになるかもしれない。裏道で2度ミリアに会っているから、犯罪をすると殺しに来ると恐怖するかもしれないし。

しかし骨の髄まで恐怖を刻み込んで反省させるっていうのもダメなように思う。更正ってそんな簡単にいかないと思うし、大体個人がそういうことしちゃうダメだらう。

かといって、前は衛兵に捕まったと思うけど懲りずにまた悪さしてるしなあ。

あ。そうだ今度からルイーダに預けると言う手もありかも。と影夫は思った。

ああいう手合いの扱いにも慣れているだろうし、なんだかんだいって柄の悪い冒険者達をずっと飼いならしているし、大丈夫そうだ。

「なにそれ!?　しゃべるぬいぐるみ?　キヤーかわいい!」

「わっ!?!」

「あつ……ダメツ！ お兄ちゃんを返して!!」

「おねがい、ちよつとだけ貸してよ」

「私以外はダメなのツ！」

影夫がそんなことを考えていると突然、謎の金髪少女が影夫を抱きしめ頬ずりしてきた。

それに怒ったミリアが奪還しようとして、女の子の間で引っ張り合いになるのだった。



## 友達

「うう、っー！」

「わ、悪かった、わ……そんなに大事とは思わなかった、のよ……」  
影夫を取り戻したミリアが彼を胸に抱きながら、金髪少女にうなづいている。

金髪少女もミリアがよっほど大事にしてることが分かったのだろう、気まずげに謝っていた。

目をそらして小声であることから、素直になれない意地っ張りさを感じさせた。

「うう、っー……」

「あーもうっ！ 無理に取った私が悪かったわ。ごめん！」

尚も止まないミリアの非難の視線とうめき声について心が折れたのか、すつきりしない状況を嫌がったのか、金髪少女はミリアの正面を向いてきつぱりと謝罪する。

「ほらミリア。あの子は謝ったよ。許してあげなきゃな？」

「うん……もういいよ」

「そう。よかったわ！ えつとあなた……自己紹介まだだったわね。私はレオナよ！ あなたの名前は？」

「ミリア……」

先ほどの謝罪を引きずることなく、からつとした態度で笑みを浮かべている金髪少女がレオナと名乗ると、ボソリとつぶやくようにミリアがしぶしぶ返事する。

（っ!?!）

ミリアとレオナが自己紹介をしている最中、影夫はびっくりしてした。彼女が原作キャラ……レオナ姫その人であったからだ。

金髪の子な見た目とか、性格とか口調とか声とかで嫌な予感がしつつも、まさかパプニカのお姫様だし、ないよなあと思っていたが大正解だった。

（あーどうすりゃいいんだ？ ってレオナ姫がなぜこんな裏道に？

と、というか何故悪漢に追われてるんだ?」

「ねえミリア。その動く猫のぬいぐるみはなんて名前なの?」

「クロスお兄ちゃん……」

「お兄さん?」

「あ。ああ……俺はクロス。ミリアの兄をしてるんだよろしくな。レオナ!」

疑問符だらけであった影夫だが自己紹介を求められたので、猫の手をぐっとレオナにむける。

気分的には親指を上たててグッドサインだが、猫の手なので雰囲気のみ。

「猫のぬいぐるみがお兄さんだなんて、変なの! あはは、ミリアってば変わってるのねえ」

「っ……うう、っ」

「あ、ああー。わ、私はちよつとそう思っただけで……わ、悪かったわよ、笑ったりして……もう、なんなのよ」

「……っ」

プイッ。つと音が聞こえそうなくらい不機嫌ですとばかりに頬を膨らませてあさつての方向を見るミリア。

レオナは自分が言ったことで相手を怒らせたので気まずげだが、ぬいぐるみ程度のことでは何故そんなに怒るのかと不満そうでもある。

「まあまあミリア。俺は気にしてないよ。俺も自分じゃ変だっと思っし……謝ってるんだからさ」

(うわあ、相性よくないなこのふたり)

影夫はこういう空気が苦手だ。

同年代なのだしどうか仲良くなれないだろうか。

「言っつていいことと、悪いことがあるもん! 許したくない」

「ミリア……」

「大体、変つていうなら、あの子の家族のほうがおかしいよ。子供が裏道に迷い込むのをほっとくなんて、ろくな親じゃないよね」

「……なんですすつて!」

「だつてそうだよ! 家族の面倒をちゃんと見ないなんて最低だつて

お兄ちゃんがいつも言ってるよ。お兄ちゃんは、ちゃんとミリアの面倒見てくれてるよ。でも、あなたの親は違うよね。こんなところで誘拐されそうになってたもん！」

「ぐぐっ……」

ふふん。と得意げに言ったミリアが胸をはる。

咄嗟に言い返せなかったレオナは言葉に詰まって悔しげに眉を歪ませた。

「それに、助けてあげたのに、お礼も言わずに突き飛ばしてくるし、親の躰もちやんとできてないんだね」

「取り消しなさいっ……っ！」

「お前こそ……っ！」

竜虎激突。ではないだろうが、ふたりの少女がにらみ合う。

(やば……)

これには、影夫は頭を抱えた。

救いはミリアが本気で暴力に訴えたりしないことだろうか。

これは常日頃影夫が口酸っぱくなるほど言ってる薫陶が生きていた。

子供は大事にしなきゃ、子供に暴力はダメ、と教えられ、実際に彼がミリアをとんでも大事にしているの、ミリアも子供を殺そうとか、そういうことは思わないようだ。

トラウマである村人を連想させる悪人の大人以外にはミリアも感覚や常識は少しずつ矯正されつつあった。といっても、暗黒闘気を使うと昂ぶってどうなるかわかったものではなくなるのだが。

「そんなに言われて悔しいなら、私と決闘しよっか？」

「け、けっとう？」

自らを強く睨みつけてくるレオナを見て、そんな物騒なことを言い始めるミリア。

本気の力比べをする気なら止めなければいけない。レオナの命が危ない。と影夫が焦る。

「そう。由緒ある決闘法……ほっぺたつねりあいつこだよ。お兄ちゃんが子供同士で白黒つけるときはこれで決闘するんだって言った。

勝者は敗者に1つ命令できるの」

「そんなの、聞いたことないわよ！」

「なーんだ負けるのが怖いんだあ？ ふふ、大丈夫だよ。弱い人はいじめちゃダメって知ってるもん。ちゃんと、手加減してあげるし闘気も使わないよ。だから、安心して負けていいよ？」

「こんのおつバカにしてっ！ 受けてたつわ！ あなたこそ手加減したから負けたなんて、言い訳しないでよね！」

(口からでまかせ言った俺ナイス！)

影夫は普段前世でのことをあれこれとミリアに話している。

せがんでくるミリアに応えてのことだが、興がのってくるといわなくともいいようなことも大げさに調子に乗ってしまう。

いままでに余計なことを教えて失敗も多かったが、基本的にかわいらしい冗談や、面白いウソ常識のような悪戯な嘘が多い。今回はそれが功を奏した。

「こによっー！」

「はにゅよおっー！」

「きいっー！」

「ぐぎぎっ……！」

ミリアとレオナの激しい決闘が目の前で繰り広げられる。

お互いに両手で頬をつねり、伸ばしたり押し込んだり。

「あやまりなひやひい……！」

「あにやはこひよっ……！」

「こによこのによこによっー！」

「ほはえはっ、はやまひゅまひえっ、ひゅねるほ、ひやめないっ！」

「ううっ、まへなひいんらふあらあっ……！」

勝負はやはりミリアが優勢。レオナは目に涙をためて半泣きになっているが、ミリアはふふんと笑っている。

レオナの姫さんもこの時点では10歳前後の子供。姫としての英才教育は受けているだろうけど、ミリアのように修羅場は経験してはいまい。土台が違う。

だが、レオナは持ち前の気の強さと意地っぱりさでいつまでも降参しようとしなない。

これ以上白熱すると青痣が残るだろう。ホイミで回復すればいいかもしれないが、子供の喧嘩にしてはやりすぎになりそうだった。

「ふたりともそこまで！ それ以上いけない……」

「ふえっ……?？」

影夫はふたりが頬をつねりあっている腕の上を歩いて、最初にミアア、次にレオナの顔元に歩いて行って頬をつねる腕をちよんちよんとつついた。

「ほら、ふたりとも手を離しなさい。勝負はおしまいだ」

「ふふん。私の判定勝ちだね。何を命令しようかなあ。私は親の躰がなっていないダメな子ですって言いながら土下座がいいかな！」

「うう……」

影夫が促すと最初にミアアがしぶしぶ手を放し、レオナもそれに続く。

ミアアが勝ったのは自分とばかりに優越感に満ちた目でレオナを眺め、レオナは半泣きで悔しげにうつむいていた。

「ミアア、今のは引き分けだぞ。命令もなし」

「えー!? どうしてお兄ちゃん！ 大体、もうちよつとで勝てたのになんで止めたの！」

「これ以上したら怪我するだろ。レオナはそこまで頑張って耐え切ったんだから勝負はついてない。だから引き分けだ」

「ぶー」

不満げなミアアがつねられて赤くなった頬を膨らませる。

そんなミアアの肩の上に影夫は腰掛け、彼女の頬に猫の手を置いて口をひらく。

「なあミアア、なんで喧嘩になったと思う?？」

「え? それはそいつがお兄ちゃんのこと変だつて。家族だったらかしいなんて言うからだよ！」

「じゃあレオナ。なんで痛いのが我慢してまでミアアに勝とうとしたんだ?？」

影夫はびよこんと飛んで、レオナの肩の上に着地。

ミリアと同じく赤くなっているレオナの頬をつつつきながらそう言う。

「お父様とお母様を馬鹿にされたからよ！」

「そうだな。ミリアは兄と慕う俺、レオナは親。どっちも大事な家族のために怒って喧嘩したんだ」

「それは……」

「最初にミリアを傷つけることを言ったのはレオナだ。でも、それ以上にとくさん言い返したのがミリア。どっちも悪いよな？」

「……」

「ふたりとも自分に非があったのに喧嘩してしまった。こういう時、どうすればいいんだろうな？」

「……うん。そう、そうよね。改めて言うわ。ごめんなさい。これからは言葉に気をつけるようにする。私だって、家族のことを変とかおかしいって言われたら腹が立つもの」

「……私も、言いすぎちゃった。ごめんなさい。私もパパとママが駄もできない酷い親だなんて言われたら、すごく怒ると思うから」

ふたりが頭を下げて謝りあう。

その様子を見た影夫は満足げに大きくうなずいて、腕を組み、大仰に宣言した。

「よし、じゃあふたりはこれで友達だな!!」

「え？」

「自己紹介もしたし、喧嘩したけど謝り合って許しあえた。仲直りできたんだ。だから今からふたりは友達だ！ さあ、握手だ握手！」

影夫が、ミリアの手を引き、レオナと手をつながせる。

「ほら、何か言葉、友達の第一歩を言って！」

「これからよろしくねミリア！」

「……私こそ、よろしくレオナ」

他人と打ち解けたり、相互理解するには、共通点を探してそれを共有認識とすればいい。

ああ、この人も自分と同じところがあるんだ。と思えば人は他人を受け入れやすい。少なくとも理解のきっかけにはなる。そういうものだと影夫は経験上知っていた。

違う部分を探してお前はおかしいと非難しあうよりも、同じところを見つけて認め合ったほうがいい。

やりすぎれば都合のいいことしか言い合わない馴れ合いになるけど、そこは周囲の大人がきちんと導けばいいだけだ。

少なくとも、無意味に傷つけあうよりはよっぽど幸せだろう。

姫という立場上、同年代の友人が今までのいなかったレオナ。

家族を失う事件によって、友人を作れなかったミリア。

戸惑いがあるのがぎこちなさげ握手しているふたり。

そのふたりの子供に初めての友達が出来た瞬間だった。

「ところでレオナはなんでこんなところにいたんだ？ 親御さんが心配してるんじゃないか」

影夫はレオナの立場と性格を知っているので大体察していたが、あえてそうたずねる。

「え？ それはその……ごによ……」

「事情があるなら話してみろよ。協力できるかもしれないし。なあミリア」

「うん」

「えっとね……」

影夫の予想通り、レオナは父親にねだってベンガーナに連れてきてもらったそうだ。

だけど、お付きや護衛が姫としての自覚がなんだかんだ、格式や伝統があーだこーだとうるさかったり、全然自由にさせてくれなくて、嫌になったらしい。

予定も行動も全部勝手に決められていて、デパートも最終日に決められた場所を少し見るだけなんだとか。

父親にお願いしても単独行動を許してくれないので、仮病を使って寝込んだふりをして宿の窓から脱出し、ひとりでデパートに向かう

としたらしい。

その途中で、裏道に迷い込み、そこでチンピラに追われて……ということだった。

レオナはその説明の途中でパプニカの姫だとも明かし、姫の前に人間なんだからたまにはやりたいようにしたい、と憤慨していた。

「ふーん。お姫さまも大変なんだね」

「そうなのよミリア！ まったく、よその国に遊びに来たときくらいは自由にさせて欲しいわ！」

「レオナ、ちよつとかわいそう」

そういうしがらみがないミリアからすると毎日予定が詰まってるようなレオナはかなり窮屈そうに見えるようだ。

「まだ仮病はバレてないんだよな？」

「え？ うん。夜までゆっくり休ませてって言ったから、寝てると思っただけにはこないと思うけど……」

それがどうかしたのだろうかと首をかしげるレオナに影夫はにやりと笑いかける。

「よし、一緒にデパートにいこうぜ。そこで買い物をした後、宿に帰って晩飯を作るんだが、ついでに一緒に遊んで飯も食ってけよ」

「いいの!？」

てつきり宿に連れ帰されると思ってたんだらう。

レオナが飛び跳ねんばかりに喜んだ。

「いい。子供はのびのび遊ぶもんだからな。でもウソをついて勝手にひとりで宿を抜け出したのはいけないことだ。あとで正直にちゃんと謝ること。約束できるか？」

「うん！ わかったわ」

影夫とて、姫としての立場には重い責任や重大な義務が伴うのは知っている。だからこそ王権が許されるのであるし、贅沢もできる。

だからといって、王族であろうが子供は子供だ。たまには子供らしくおもいきり羽ものばせなきゃ可哀想だらう。

ウソについて無断で逃げ出し、姫という立場を半ば投げた事へのけじめはつけないとダメだ。でもそのうえで思いつきり今日は遊べば



いい。

影夫の目が届く範囲なら危険もない。邪気を感じられるし、回復呪文も使えるのだし。

「はやくいこつ！ 今日の夜ご飯はね、ハンバーグなんだよ！」

「はんばーぐ？ なにそれ」

「とにかくすつごく美味しいの。お兄ちゃんが教えてくれたんだよ」

「へえ〜ミリアのお兄さんは料理の知識もあるのね」

「何でも知ってて強いし優しいし、とにかくすごいんだよ！」

ミリアがレオナの手を引いて、デパートへと走り出す。

どうなることかと思っただが、ミリアは初めての友達ともどうにか上手くやれそうだった。

☆☆☆☆☆☆

「すごいわ！ パプニカのお城よりおおきいなんて!？」

「ふふーん、こんなので驚いちやダメだよ。エレベーターに乗ったことある？ ガガガひゅーんって動いてすごいんだから」

「何それ、乗ってみたい！」

デパートに着くなり、びつくりするレオナを、ミリアが先導しながら自分がおどろいた場所や感動した部分を得意げに話したかと思うと――

「うわっ!? ほんとに部屋が動いてる!？」

「この石版を踏むだけで好きなどころにいけちゃうの。便利でしょ？」

「パプニカのお城にもつかないかしら……」

「つけたら呼んでね遊びにいききたいから」

「わかったわ」

「……それは無理じゃないかなあ」

「じゃあ、次は私が石版を踏むわね！」

「あ、こら！ エレベーターは遊び道具じゃないんだぞ！」

エレベーターでは、ふたりがはしやぎあいながら上がったり下がったりしたものだから店員にじと目で見られ、影夫がお説教をすることになったり――

「ほらこれっ、すごいんだよ。大人の女の人が男の人をのうさつする時に着るの!」

「うわあー! 過激いー。でも、ちよっと着てみたいかも」

「だよね! なのにお兄ちゃんを着ちやだめって言うんだよ」

「バダックみたいなことなのね」

「俺を年寄り扱いするなよ。ほら、ふたりには10年早いからいくぞ。こういうのは教育上よくありません!」

「は〜い」

服飾コーナーでは、アレが可愛いコレがいい、それはカツコわるいなどと批評しあいながら、着れもしない大人用の女性服やドレス、防具等を見てまわり、あぶない水着にあこがれてみたり――

「これが私のオススメの『のこぎりがたな』! ほらほら、刃が波打ってとつても痛そうで、かっこいいでしょー」

「そんなのダメよ、悪人の武器みたい。それよりもこっちの『はじやのつるぎ』よ。勇者の武器といえばこれよね〜。正義の剣って感じが最高ね」

「えーレオナって趣味わるーい。大体それレプリカだから実戦で使えないよ。まだ感覚がお子様なんだね」

「何よ。ミリアこそ、悪党みたいな武器ばかり好むなんて悪趣味じゃない!」

「……決闘!」

「望むところだわ!!」

「ここらお前らこんなところで迷惑だろうが。やめろよ!」

武器コーナーでは、正義って感じの武器を好むレオナと悪っぽい武器を好むミリアが喧嘩をはじめたり――

「へえ、食べ物ってこういう風に売ってるのね」

「おーさすがはお姫様だな。見たことないのか。社会勉強になるから、いっぱい見ておくといいよ」

「わかったわー！ え？ ちょっとミリア！ お金払ってないのに食べたら泥棒よー！」

「ふふふ。これはね、試食なんだよ。タダで食べていいの。気に入ったら買わないとダメだけどね」

「試してもらって購入を促す……よくできた仕組みね。どれ、私も」  
「あ、ダメだよ、それはテイクアウト用の売り物！ 泥棒になっちゃだよ。こっちのが試食、ちっちゃく切られてるでしょ？」

「え？ そういうのもあるのね」

「ふたりとも。試食もいいけどハンバーグの材料忘れるなよ」

「あ!?! たいへん、おにくおにくっ！」

食料品コーナーでは、子供がよくやるような試食コーナー荒らしになりかけるのを止めたりした。

デパートに居る間、影夫はふたりのお守りにてんてこ舞いだった。

ミリアだけでもはしゃぐと大変だが、今日はレオナも一緒だ。

ふたりを叱ったり宥めたり、仲裁したりと影夫は気が休まる暇もなかったが、無邪気なふたりの笑みに癒されたのだった。

その後もミリアとレオナははしゃぎ続けた。

デパートからの帰り道に、ルイーダの酒場に寄って、レオナの失踪騒ぎになった場合の対応を頼みつつ、途中にある美味しい屋台でふたりに違う味のガレットを1つずつ買ってやったら、並んで歩きながら、食べ合いつこしてたり――

宿にもどった後、でろりん達にレオナを紹介すると、ベンガーナで話題の勇者でろりん一行だと知ってレオナがびっくりしたり、ミリアも勇者だと知ってもっとびっくりしたり――

料理に手を出すのも初めてのようでおっかなびっくりしていたが、ずるぼんとミリアに教えられながらいびつなハンバーグをこねて

作って、笑いあっていたり――

焼きたてハンバーグの味は、レオナに大好評で、ミアと取り合いをするほどだった。

「また会おうね、レオナ」

「絶対よ。いつでもパパニカの城まで遊びにきて！ ミリアとお兄さんならフリーパスよ」

パパニカの人たち（バダックさんもいた）が宿まで迎えにきて、お別れの時間になった時には半ベソになって帰りたくなさそうだったが、皆が心配しているからと影夫やでろりん達が諭すと、ミアと再会の約束をして帰っていった。

今日だけで、ミアにはとても大きな絆ができたんじゃないだろうか。そう思うと影夫は心から嬉しいのだった。

## 伝授

真昼間の宿の中庭。ちよつとした空き地程度の広さのあるそこで、影夫はでろりん猫掴みされながらやってきていた。

プラインプラインと手足を揺らしながら運ばれる影夫。

「なあでろりんよ。知らないかもしれないがこの持ち方はダメなんだから。それに、ぬいぐるみボディが傷むからやめてくれ」

「え？ そうなのかすまん」

丁度目的地についたことで、影夫は両手で抱えなおされてそのまま地面に下ろされた。

「で、こんなところに連れてきて何の用だよ？」

「とりあえずこれを見てくれ……イオリイオリ！」

「うおっ!？」

突然、でろりんが両手にイオリを出して影夫に見せる。

「なにすんだよ、あぶねーな。はやくしまえ」

「ああ」

「……で、それがどうしたんだ？」

凄いとかよりもこんな場所で危ないじゃないかと影夫は思いつつたずねた。

「クロス、俺にもなんか必殺技を教えてくださいよ！ ずるぼんにはマホイミ、まぞっほにはフィンガーフレアボムズ、へろへろには闘気砲を教えたつてのに俺には何もなしかよ!? ずるいだろ!!」

「あく……いや、教えたつていうか、こんな技があるらしいよつて話をしただけなんだけど……」

「とりあえず俺なりに色々頑張ってみたが、イオリじゃ同時に5発どころか、3発すら出せないんだよ。さっきみせた2発が限界だ。これじゃあ必殺技にしちゃあ弱いだろ」

「んな贅沢な……」

呪文の同時使用は凄いいことだ。中級呪文で同じ魔法とはいえ、これができるやつは一握りだろう。

影夫も練習中だが、これが実に難しいのだ。右手と左手にそれぞれ

糸を持って同時に穴に通そうとする感じだろうか。

ちなみに別の呪文の同時使用とかはもはや人間をやめているレベルだ。

右手で針の糸を通しながら左手を文章を書くようなもので、んなことできるかという感じなのだ。

「かといってマホイミも難しい。頑張つて新しくベホイミを使えるようになったんだが、それじゃあ回復力が弱すぎてとてもじゃないがマホイミになりそうにないんだよ」

「そりゃなあ、ずるぼんが成功したのだからって奇跡的なことだと思つて。古代のすごい僧侶の決め技とかだったんだから」

ずるぼんのアレだつてぎりぎりだったらしいし、たぶんマホイミ一発で魔法力はほぼ空っぽだろう。

僧侶のずるぼんでそこまでギリギリなんだから、やつぱ難しいだろう。

「闘気砲……はそれなりに使えた。だが威力が弱すぎてすなおにイオラ使うほうがマシなんだよ。威力あげようとしたら死に掛けた。あ、死んだと思つてマジびびつたぞ。こういうわけでもうお手上げなんだよ」

「へえ……いろいろやつてたんだな。でもそんなだけでできれば凄いいじゃねえか？」

というか今さっきつくつたイオラ2連発が必殺技でいいんじゃないだろうか。イオナズン級とは言わないけど、かなり強いとは思つ。フィンガーフレアボムズよりは威力はないが集団には強そうだ。

闘気砲もイオとイオラの中間くらいの威力なら魔法力が尽きた時につかえばいいかもしれない。

「凄いつて……これじゃあ中途半端でダメだろ！」

「でも、勇者つて本来そういうもんだぞ。戦士より力はないし、呪文も魔法使いや僧侶よりはできない。でも勇者には勇気つて武器がある。それさえあればいいつて偉い人も言つてたぞ」

影夫は内心驚きつつ感心していた。そんなに積極的に頑張つていたとは。結局どれも中途半端になつてしまった感じだが、本来、勇者

ならそんなもんだらう。ダイが規格外すぎるのだ。

アバンも大概ではあるが。

「バカ、俺だけに必殺技がないとかカツコつかねえだろ。勇者とか言われてるのに、そんなんじや恥ずかしいっての。大体、いざつてときに足手まといになるだろ！ 何かいいアイデアをくれよ！ なあつ、頼むよ」

「……うーん」

仲間の足をひっぱりたくない、皆を守れる力がほしいというでろりの気持ちは痛いほどわかる。

男としても、カツコつきたい、かつこ悪いのは嫌だという気持ちもよくわかった影夫である。

「そうだな……」

影夫は思案にくれて、原作の技ネタを思い返す。

「かの勇者アバンが使う技とか？」

「おおお！ そういうのだよそういうの！」

「大地を斬る大地斬、海を斬る海波斬、空を斬る空裂斬、そしてすべてを斬るのが、アバンストラッシュ！ 人間が扱う技としてはほぼ最強だろうな」

「そりゃあいい！ 教えてくれ」

「無理だ。俺は概念を知ってるだけだからな。てか、マホイミもフレアボムズも闘気砲も全部アイデアを出しただけだから、そこからは努力次第だ」

「……うーん。そつか。まあそれでも何とかやってみるから詳しく教えてくれよ」

影夫はでろりんに原作で語られていたアバン流の技の理屈を推測を交えながら伝えていく。

「まず大地斬だが、自分の力を無駄なく出し切るって技らしい。動きの無駄をなくす必要がある。身体中が疲労困憊になるまで修行した後、剣で大岩を真っ二つに斬るって修行をきいたことがある」

「動きの無駄か。なくすのは大変そうだ」

「次に海波斬だが、炎や氷といった形の無い物を高速の剣圧で切り裂

く技らしい。すばやく衝撃波が発生するくらいに剣を振りぬぎ、狙った場所に放てるようになれば修得完了ってところか。修行方法としては、ぶつつけ本番で呪文か炎を実際に撃ってもらって成功させないと怪我するって状況で頑張るんだ。背水の陣ってやつだな」

「習得があぶねーが、便利そうだな」

「そして空裂斬だが……心の目で見抜いた敵の弱点とか本性の部分に溜めて高めた光の闘気を撃ちはなって貫くって技だ。修行方法は、光の闘気を扱えるようになった上で、目隠しして木刀で稽古すると、目隠しして闘気を感じる練習をするらしい。」

「ふむふむ……」

でろりんは腰のポーチからメモ紙と羽ペンを取り出してメモを取りつつ、熱心にきいている。

影夫はメモの速度に合わせてつつ、ゆっくりと話を続けていく。

「最後にアバンスストラッシュだが……剣を片手で逆手もちにして、斜め上に斬り上げる感じで放つんだっかな。えっと推測だけど地海空を極めないとダメな技だから、無駄なく効率的に力を発揮しながら、素早い剣捌きで、光の闘気を込めて放つ技なんじゃないかと思う。闘気を飛ばす遠距離攻撃型のアバンスストラッシュアローってのと、直接相手に斬りつける近接型のアバンスストラッシュブレイクってのがある。あと、アローで飛ばした闘気に追いつきブレイクを重ねるというクロスって技もあるがタイミングが難しすぎて人間には不可能らしい」

「ふう、疲れた」

長々と説明を終え、影夫はだらけて地面の草の上に寝っころがる。メモを腰のポーチにしまったでろりんは何やら思案にくれていた。

「でだ。でろりんがアバンスストラッシュを使おうとすると、大きな問題がある」

「空裂斬が俺にできるかどうかだろ？」

「ああ。分かるか。光の闘気を扱う必要があるだけあって、正しき心を持ち、正義の志を持った……ぶっちゃけ正義の味方じゃねえとつかえねえだろう」



「自分で言うとは虚しいけどな、俺はとてもんな柄じゃねえなあ……空裂斬ができないとどうなる?」

「アバンストラッシュが紛いものになる。威力も大きく落ちるし、破邪のような特性もでないだろう。何か手を考えないとダメだな」

「うーん……分かった。サンキューなクロス。後は色々考えて俺なりにやってみるよ」

悩んでいる様子だったが、試行錯誤は後でじっくりとするつもりなのだろう。

でろりんのその様子や、自分なりに考えて色々試して強くなるうとしている姿勢を見て、影夫は彼が一片向けている様子に感心する。

ふさぎこんだ様子も、焦っている様子もなく、自然体に自分に出ることを為そうとしている。自分などよりよほど前向きでまっすぐで、人間として好感が持てた。

案外本当の勇者になるかもしれない。と影夫は思った。

「参考になるか分からないけど、俺の知ってる技や呪文の概念をもっと教えるよ」

「おっマジか! そりゃ助かるぜ!」

「えーと腕に全身の闘気を集中させて相手に向かって放出する技があつて……」

「ふむふむ」

その日、朝になるまで思いつく限り、影夫はでろりんに概念を教え、ふたりで検討を重ねるのだった。

☆☆☆☆☆☆

「第一回、古文書解読成果報告会を行う!」

宿の女子部屋に集められたでろりん達とミリアの5人を木のテーブルの上から影夫が見下ろしながら宣言を行う。

5人は宿部屋の木の床の上に体育座りをさせられており、影夫は手を組んで直立し、偉そうなポーズだ。

「はあ? なによそれ」

「なにつて、俺とまぞつほ師匠が古文書から見つけたすごいもんを発表しようってことだよ！」

馬鹿馬鹿しい、といった態度を丸出しなずるぼんに、影夫がビシッと指をさす。

「なんでわざわざこんなことを？」

「それだでろりん！ 古文書解読は、強力な呪文や秘術を得るための大事なもんだ、だがそれを理解しないやつがいる！」

「私っていいたいの？ クロス」

「う……そ、そうだよ。古文書を買うたびに無駄遣いとか、男の浪漫とか馬鹿みたいとかいうじゃねーか」

ずるぼんがじとめでクロスを見る。

「あのね、別に私も普通に買うなら文句はないわよ。でもクロス、あんなのつぎ込みかたが異常なのよ。店にあった古文書全部買い占めてきたり、古文書が部屋に入りきらなくてももう1部屋借りて物置にするし、あんなに一体どうすんのよ」

「うっ!？」

「私も、限度があると思うけどなあ。あんまり買いすぎるとこの街を出る時に邪魔になるよね？」

「そーよね。ミリアもそう思うわよねえ」

「それに、無駄になっちゃう本も多いし……この前解読した本、ただの日記帳だったんでしょ？ 同じ本の重複もいっぱいあるよね」

「そうだけどき！ でもたまに凄い呪文が見つかるんだよ！ これは男の浪漫なんだよ」

今日も今日とて食料の買出しに出かけたはずが山のように古書を買い込んでいた影夫に、ミリアはじとーっとした目を向け、ずるぼんも一緒に呆れ顔だ。

(ミリア、ハンバーグの材料買い忘れたのを根に持つてるのか……)  
「それだけじゃないぞ。金銀財宝の宝の在処が分かるかもしれない。どうだ？ それでも無駄か？」

埋蔵金の発掘番組を見てワクワクした少年時代を思い出しながら、影夫は浪漫を胸に溢れさせる。

しかし、女性陣の反応は冷たい。

「見つければね。どんな確率なのよそれ」

いつか本当に金銀財宝を見つけ、羨ましがらせてやる。なんて思いつつ、適当にずるぼんの言葉を流す。

「それよりも、装備とか道具にお金かけたほうがいいんじゃないの？」  
男の浪漫に興味はなく、低確率で不確かなことに金と労力をつぎ込む絵空事にしか思えないのだろう。

ほとんど趣味というか遊んでると思われているらしい。それも成果の報告を大々的に行わなつたせいだ。だからこその報告会である。「真面目な話だが、強大な武器や呪文の手がかりが見つかるかもしれないから大事な作業なんだ。前のクラーゴンだって、ザキの呪文を覚えてたら、もつと楽に倒せたはずだ」

「それは……」

「まあ、ちょっといきすぎにみえるかもしれないけど必要なことなんだよ。面白さ優先でただ無駄遣いしてるわけじゃないんだ。分かってくれるか？」

「わ、わかつたわよ……でも、限度は考えなさいよね。いらぬ古文書の処分もちゃんとするのよ」

「ああ、わかつた。ミリア、忘れたハンバーグはまたあとでいっぱいくってあげるから勘弁してくれよな」

「ほんと？ 私もなにかお手伝いしよつか？」

「まぞつほ師匠とふたりでやってるから大丈夫だよ。ミリアは好きなことしておいてくれな」

「うん、わかつた」

「でだ、古文書解読の成果は……」

前の段階で見つけていた呪文は『メラゾーマ、ヒヤダイン、マヒヤド、イオナズン、ラリホーマ、シヤナク、フバーハ、マホキテ、マホステ、アストロン、モシヤス、レムオル、アバカム』である。

それから今までに新しく発見していたのが『ザオラル、レミィラ、フローミ、レミィラーマ、ラナリオン、ラナルータ、マホカトール、リレミト』だった。

「すごいじゃないクロス！ 蘇生呪文や破邪呪文をみつけるなんて……あれなんて王家に仕えるとか高名な賢者や僧侶の弟子にならないと契約できないのに」

「だろ？ まだみつけないけどさ、ザオリクとかもあるかもしれないじゃないか。そういうのを皆にちゃんと成果報告して契約のためのメモも作ってもってきてあるんだ。ためしておいてくれ」

影夫はテーブルから飛び降りて、小脇に抱えた契約について記したメモ用紙数枚を纏めたものを一人一人に手渡していく。

「ん？ 俺の分もあるのか。呪文はつかえないと思うぞ」

「俺は、魔法使いに僧侶の呪文はつかえないと思ってた。思い込んでたんだよ。だがきいてみるとまぞつほ師匠は真空呪文が使えるって話じゃないか」

「あーそうなのかまぞつほ？ 使つてるところみたことねえぞ……」

「つかえるわい。じゃが普通に他の呪文のほうが有用な場面が多かったからつかってなかっただけじゃよ」

影夫も完全に忘れていたが、まぞつほは真空呪文が使えるのである。それをまぞつほ本人から聞いた影夫は変な先入観は捨てようと思ったのだ。

とはいえ軽々しく職の垣根を越えて皆が呪文を覚えまくれるってことはないと思うが。

「そうなんだよ。だからさ、これからは契約は全員に試してもらおうし、魔法力を高めるメデイーションも自主的にやってもらいたい」

「えー！ 私瞑想きらいー」

「だーめ！ 魔法力が高まるってことは威力があがるってことだぞ。メラゾーマやベギラゴンやイオナズンがへなちよこだったら嫌だろ？」

「それは、そうだけど……」

「じゃあ各自契約は済ましておいてくれ。その後使えるか試して使える呪文は皆に報告すること。仲間なら誰が何を使えるかは知っておかなきゃな」

「それじゃまぞつほ師匠。一緒に解説頑張ろうぜー」

「了解じゃ」

「あ、待ちなさいクロス。解読が終わって要らない本や役に立たなかった本の分別と処分を手伝ってあげるから、私も行くわ」

「そりやたすかる、ありがとうな」

「ずるぼんお姉ちゃんがやるなら、わたしもやるよ！」

「じゃ、いっしょにやりましょうねミリア」

「へろへろ、俺らは中庭でさっそく契約ためそうぜ」

「わかった」

第一回古文書解読成果報告会はこうして閉会するのであった。

## 代償

「うーん。なんだか、あまり悪い感じがしないね」  
「だよなあ」

鉄の鎖ががんじがらめに幾重にも巻かれて封印されている木製の棺おけの前で影夫とミリアが首を捻っていた。

「いやいや、何言ってるんだよ。十分嫌な気配しまくりにゃねえか!」  
「そうよ。さつきから漏れてくる気配だけで寒気が止まらないのよ。本当に危ないわよ!」

影夫とミリアは今日、ルイーダから届けられた呪いの武器の制御を試してみようとしていたのだ。

万が一に備えて、ベンガーナの街の郊外で試すこととし、でろりん達に立ち会いを頼み、もしもの時はシャナクで解呪してくれないかとお願ひしていた。

「そうかあ? ちょっと悪いかもってくらいだよなミリア」  
「うん。少し背筋がひんやりする程度だよな。みんな、おおげさなんだから」

「でも、呪いの武器を棺おけに収納するとか凝ってるなあ。ルイーダさんも案外おちやめだよな」

「すごい雰囲気でもいいよね! 今からこれに入るのはお前だ! とか敵の目の前で取り出して装備しちゃったり?」

「ひゃーっ、後で絶対背中かゆくなくなるぞそれ!」  
街の外なので影夫は普段のシャドーの姿だ。

ミリアと影夫は一緒に笑いあって、呪いの武器を振り回す未来予想図を描いて、あーでもないこーでもない胸を膨らませている。

「なんで和気藹々と楽しそうなんだよ、おまえらおかしいぞ! まじでやめとけって!」

「その武器は、殺気立ってて不吉だな……」

「万一があつたらどうするんじや。わしのシャナクが本当に効くかもわからんのじゃぞ?」

「いや。いける。このくらいの邪気ならたぶん制御できるんだって。万が一やばそうだったら俺の手をぶった切って無理やり装備をはずしてくれ。最悪そうすれば解決だ」

予想以上にびびっているでろりん達をなだめつつ、影夫は武器が納められた棺おけに手を伸ばす。

「とりあえず俺が……」

手の先で刃を作り、幾重にもまかれた鎖を断ち切って、棺おけを開ける。

「お……」

ぶわっ、と邪気のプレッシャーがミリアと影夫の身体を揺さぶり、ミリアの黒髪を揺らした。

『さあ早く！早く手に取れ！』と訴えかけてきているかのようだ。

「もろはのつるぎ、か」

「すごいすごいっ、この痛そうで悪そうなデザインがかっこいいね！」  
持ち手の方へも刃が向かっており、持ち主もろとも傷つけるようなデザイン。

これで傷つけられたらさぞや痛く傷口が大変なことになるだろうと思われるまがしい刃の形状。

さらに込められた怨念が目に見えているように剣全体からうっすらと黒い霧のようなものが立ち昇っているようにも見える。

だが、やはりそこまで深刻な邪悪さは感じられなかった。

ミリアが暗黒戦殺砲を放つときのほうがよっぽど禍々しいくらいだ。

そもそもこのコンセプトが、自分が傷ついてでも相手により大きなダメージを、という捨て身に近いものなので、きつと呪いも弱いのだろう。

「最初はまあこんなところからだろうな」

拍子抜けするとともに影夫は安堵する。

呪い武器といっても色々ある。

はかいのつるぎや、みなごろしの剣などはどう考えても邪悪さや凶悪さの面でこれよりも上だろう。

ここはゲームのDQ世界ではなく、ダイの大冒険なのだ。  
つまり一口に呪い武器といっても、物によって呪いの強さがことなるはずなのだ。

現に、ラリホーのような呪文は敵の力量によって効く効かないが左右されるといふ設定になっている。

(ちよつと失念してたけどいきなり凄いい呪い武器を使おうとするのは無謀だよな……危ないところだった)

呪い武器を使えそうだと影夫は伝えていたが、万一の場合や、最初に扱おうということを考え、ルイードはあえて一番邪気の薄いものを用意してくれたのだろう。

(やっぱりいい人だなあ)

もろはのつるぎというチョイスにルイードの心遣いを感じる影夫であった。

「さて、やるか!」

「がんばってー! お兄ちゃん!」

「っ……!?!」

柄を握った瞬間、影夫の体を、ぞわぞわつと悪寒が走りじんわりと体の中へと染み渡るように広がっていった。

影夫は心なしか、心がささくれ立っている気がした。

なんていうか、何か発散したくても出来ない状況の苛々感に近いと  
いうか、動きたくても動けないくらいの窮屈さと暴れてやりたいとい  
う気持ちがある。

だが、それだけだ。何か意識を奪われるとか、どうしようもなく破壊衝動に襲われるということはない。

30歳の冬。クリスマスやバレンタインの夜に街を歩いた時に抱いた怒りや嫉妬や絶望よりもはつきりいって下なのだ。

「どう?」

「なんともないな。ちよつと体うずいて苛々するくらいか。威力は……ってあれ? なんか上手く動かせないっていうか、変だな。ってくそつ、俺には装備できないってことか!」

いらだつた影夫は放り込むように棺おけの中にもろはのつるぎを



戻し、顔を顰めた。

「はいはいはいっ！ 次わたしだよ、わたしが装備する!!」

彼と入れ違うように、ミリアが身を乗り出して棺おけの中を覗き込む。

「ん……じゃあやってみるか。念のためミリアと同化しとくぞ」

「うん。じゃあいくよ〜それっ」

ぶわっ！ とミリアが掴んだ瞬間。もろはのつるぎの全体から黒い瘴気が噴き出してミリアを包み込んだ。

「わっ……っ？」

「ミリア離しなさいっ！ あぶないわよ！」

「天上に住まう穢れなき精霊達よ、忌まわしき呪いを砕く力を……」

悲鳴まじりの声をずるぼんがあげ、まぞっほは杖を構えて魔法力を高めはじめた。

ミリアの危機に全力のシヤナクを放とうとしているのだ。

「まって！ このくらいっ、平気だよ！ ハアアアアッー！」  
シヤナクが使われる寸前。

ミリアが咆哮とともに暗黒闘気を噴き出させていく。

「このおッ……暗黒衝烈破ア！」

ひととき激しく暗黒闘気の衝撃波を撒き散らされたかと思うと、ミリアを包む瘴気の靄はきれいさっぱり消し飛んでいた。

暗黒闘気の波動の余波で、黒髪を揺らめかせるミリア。

その瞳は赤く変化しており、肌には黒い紋様がうつすらと明滅していたが、狂化や精神操作をされている気配はなかった。

「やれやれ。大丈夫そうだよかった。手助けが必要かとおもったよ」

「あは。中に入ろうとしてきたけど大丈夫。ちよつと躡けてあげたらおとなしくなったから」

ミリアは嬉しそうにそういつて右手で握ったもろはのつるぎを縦薙ぎに振ったり、横薙ぎに振ったりして感触を確かめていく。

邪気と怨念を撒き散らしていたもろはのつるぎは、観念したかのよ

うにミリアの為すがままに揮われており、勝手気ままな野良から従順なペットに落ちた動物のようだった。

「何だろ……ふふふ。なんだかとってもいい気分なの！ 体が軽くて、なんでもできちゃいそう！ もう何も怖くないって感じだよ！」  
そりやあ逆にやばいんじゃないのかと思いつつ、影夫は異常のなさそうなミリアの様子に安堵して肩から手をだし、首元に顔を出すいつものスタイルにもどった。

「マジでお前らなんでもありだな！」

「呪いを抑えこむなど初めて聞いたわい」

「その剣、自分を刺しそうで怖いな……」

あつけにとられていたでろりん達も問題がなさそうな様子に安堵したのか、まじまじともろはのつるぎを観察したり、感心したりしていく。

「へえーこれがミリアの闘気技なのか。呪いまでねじふせちゃうなんてすげーな。俺にもつかえねえかなあー。便利そうだし」

「でもなんかちよつと物騒よね、前も思ったけど目元はぎらつくし、言葉もどこかおかしくなるみたいだし、どこか不穏なのよねえ」

「すごいのを、ちよつと研究したいくらいじゃわい」

わいわいと、輪になって皆で談笑する。

暗黒闘気を使っても特に何もなくて影夫はほっと安堵した。

「うっしや、次は威力の確認しようぜ！ 刃があたりそうになったら受け止めるからまかせとけ！」

「いつくよっー！ はああっ！ やあっ！ たあっ！」

ミリアは、近くにあった大人の胴周りよりも太い大きな木に向けてもろはのつるぎを横薙ぎに思いつき振りぬいた。

「きやつ！？」

「うおっ!？」

グオンという空気を激しく切り裂く音がなったかと思うと、暗黒闘気を纏った刀身は、まるで紙でも裂くかのように木を一撃で断ち切ってしまった。

想像以上の切れ味があっただけではない。確実にミリア自身の力が増していたが故の結果であった。

「これ、いい。いいよこれっ！ もろはのつるぎすつぐく、いいー！」  
「んーなんかへんだな……」

「そおれ！ きやはっ！ なにこれ！ なにこれなにこれえ!! 最高だよー！」

ミリアが剣を薙ぐと木は次々に伐採されていく。  
岩でさえも、簡単にかち割ってしまう。

時おり内側を向いている刃にミリアの体が触れそうになるがその度に影夫が凶手で受け止めて防ぐので呪いのデメリットも特にならない。怖いぐらいに、呪いの武器を扱っているのというのに順調だった。

「ほらっ！ きこえる?! 空気が斬れてるんだよー！」

ミリアが手首のスナップをきかせて思い切りすばやく振りぬけば、真空の刃までもが発生して飛んでいく。

「あれ海波斬じゃねーのか!？」

「呪いの武器ってすごいよね！ 今のミリアなら魔王にも勝てるんじゃない?！」

「実際に魔王をみたことがないからわからんがのう。あるいは本当に……」

体が普段よりも強く素早く動くのがよほど楽しいのだろう。

ミリアはそのあたりを無茶苦茶に走り回って目につく木々や大きな岩をぶった切っている。

(何が起こってる……?)

いくらなんでも異様だった。

ミリアの全身の瞬発力が跳ね上がっている。呪いの武器が強いとかそういう問題じゃない。

(まるで全身の筋肉が今までより格段に強くなっているような……まさか!?)

「筋肉が100%の力で動いてんのか!？」

「おいミリア！ 今すぐ動くのをやめるんだ！ その動きを続けるのはやばいー！」

影夫がその現象に思い当たると同時に、へろへろがその危険性に顔を真っ青にしてミリアを制止した。

戦士や武道家は、普段はセーブされている力を意図的により発揮できるように鍛錬をする。

へろへろはその際に危険性についても師から教えられていたのだ。戦士や武道家の技術による力のリミッター解除は一瞬だが、ミリアはもう10分かかく全力を発揮したままだ。

だというのに、ミリアの身体は普通の人間のものだ。

そのようなことをすれば……

「なんで？ ぜんぜんへいつ」

「やべえっー」

「き……あ、れ……？」

必死の呼びかけに振り返ったミリアが突然立っていられなくなり、その場に倒れ込んでいく。

「あがつ、ぎっ……かはっ、はっ、あっ……」

「ベホイミ……」

とつさに影夫が手で受け止めて、優しく地面に横たえさせて回復呪文をかけていく。

ろくに動く事もできないのか、ミリアはその場で手足をヒクヒクさせ、苦しげに荒い息を漏らしていた。

よく見れば、体のあちこちにうっ血や痣が出来ている。

ミリアの鼻や口からは血が垂れており、内臓へのダメージも窺えた。

「なん、で……いたっ……い？」

剣を振り回していたときは脳内麻薬か何かで痛みが分からなかったのだから、今は全身が痛いようで、うめいていた。

「ミリアしっかりしなさいっ……ベホマ」

あわてて駆けつけてきたずるぼんもベホマで回復していく。

「あつ。ふたりががりじゃマホイミにならないか？」

「そのくらい計算してるわ！ 大丈夫、あんたのとあわせても過剰に

ならないようにゆっくりにしてるから……それより呪文に集中しなさいよね」

「あ、ああ。大丈夫か、しっかりしろよミリア」

ぐったりと動かないミリアをふたりがかりで治療していくのだった。

「もうあんな剣捨てちゃったほうがいいんじゃない？ 危ないわよ」

「うーん……そうだなあいくら強くても使うたびにミリアが酷いことになるんじゃないなあ」

「俺は、ふつうの剣をさがしたほうがいいとおもうぞ」

「でも、攻撃力がなあ……いつそ駄目元でランカークスにいつてみるべきか？」

ミリアの治療が終わった後、影夫とでろりん達は呪い武器の危険性をようやく認識して、どうしたものかと頭を悩ませていた。

もろはのつるぎの反動は、刃そのもののダメージではなく、無意識にセーブしている肉体の限界を發揮させるが故の反動だった。

よくよく考えれば武器の扱いになれていれば、刃が内側にも向いていようがなんだろうが、そうそう己を傷つけることはないはずなのだ。

それでデメリットをなくせるような上手い話はなかったというわけだ。

「やだ……私、使いたいよ！ 強くてかっこいいんだもん。暗黒闘気の通りもすごくよくって相性もぴったりなの！」

ミリアはもろはのつるぎが気に入ったようで、大事そうに抱えて嫌々と駄々をこねはじめた。

そうはいつても影夫達も心配だ。ミリアの気持ちは尊重したいが、戦うたびに壊れるなんて賛同できない。

「それでもやっぱり危険すぎるよなあ？」

「そうじゃのう、今は平和な世なのだし、強い武器に固執せずとも……」

「私は反対よ、体を壊してまで戦うなんて、やっちゃだめなのよ」

「でも、でも……」

でろりん達に反対される中、ミリアはちらちらと影夫をみながら、もどかしげに言葉を濁すしかできなかつた。

でろりん達は大魔王軍がやってくることを知らない。

故に彼らからはそれに備えて力をつけようとしているミリアの姿が異様で痛ましく思えるのだろう。仲が深まったがゆえに、心配して何とか止めようとしてくれている。

悩ましいところだった。影夫としてもできれば使って欲しくないけど、大魔王軍との戦いを視野に入れると、そうも言ってられないだろうし、ミリア本人も乗り気だ。

「うーん。反動で身体が壊れるって問題は、戦闘中に俺がずっと回復し続ければ、たぶん大丈夫だと思う」

「そうだよね！ お兄ちゃんもそう思うよね！」

「まあそうだなあ」

がぼつと影夫にだきついて、ミリアは頬ずりして甘える。

甘えられて嬉しそうにしている影夫は、何でも言うことを利いてしまうダメ兄貴の姿そのものだった。

「……」

そうまでして必死に使いたがられてはでろりん達も無理強いもできない。

「仕方ないわね、でもできるだけ、普段は使わないようにしないとだめよ」

「うん！」

まだ傷の残る足の裏やふくらはぎに回復呪文を掛けながらずるぼんは、嘆息するのだった。

## 謁見

それから3ヶ月が経っていた。

でろりん達と影夫&ミリアは依頼をこなしてこなしてこなしまくった。

さすがに低レベルな依頼には手を出さなかったが、周辺の盗賊団の壊滅から、凶暴な魔物の数が増えすぎた山の間引き、ダンジョン化した森や洞窟の掃討と封鎖、要人護衛など、多種多様な依頼をこなしまくった。

そしてついに……今では、ミリアやでろりん達でないと達成が難しいような高レベルな依頼はなくなってしまった。

魔物達も凶悪な悪人どもも、ベンガーナに近づけば即壊滅させられるために寄り付かなくなったのだ。

おかげで世界一といわれるほどに安全な都市となったベンガーナは貿易拠点としてますます栄えていたが、影夫達は開店休業状態になっていた。

「こんにちはー」

「ミリアのお嬢ちゃんか。あいにくだが依頼ならないよ。低レベルな依頼は多すぎて困るくらいあるけどね。まったく人手が足りないよ」

「そうかあ……平和なのはいいんだけどなあ」

ミリアの胸元に抱きかかえられている影夫は、そう言っただけ息をつく。

ここ2週間ほどは、本当にやることがない。

報酬も経験も期待できなさそうな低レベル依頼をこなすくらいなら古文書あさりでもしていたほうがまだ。

ちなみにクラーゴンの討伐後くらいに、影夫は自らが変幻自在の姿を持つ伝説の武具であり、勇者ミリアを見込んで手助けしているという話はすでにリーダーダに話してある。

「姐御、次の依頼は？」

「これだよ、さっさと行って稼いできな！」

「あいよっ！」

あわただしく酒場に戻ってきた冒険者が、依頼書を受け取るなりまた走り出て行った。

彼は、以前にミリアに絡んできた馬鹿の一人だ。

ルイーダによる矯正が功を奏したのか知らないが、それ以後はチンピラぶりはなりを潜め、低レベル依頼が溢れる今では勤労青年になっていた。

堅実な貯蓄もしているようで今度付き合っていた彼女と結婚するらしい。

仲間達にも慕われているらしいし、前途も明るそうだ。

ちなみにすでに彼からは絡んだことへの謝罪を受けており、影夫は許していた。

もつとも、許さないと自分が小さい人間みたいで嫌だからという渋々な理由からではあるが。

元々嫌いな類の人間だっただけに、いくら謝ろうがお前が愚かだった過去は永久に消えないと拒絶してやりたかった。

「あーあなんだよアイツ、まともになっちまって。なんだかなあ」

影夫は面白くない。昔悪かった奴の典型的更正ストーリーといった感じがすごく気に入らない。

将来社会的に成功でもしちやいそうな変貌振りとりア充ぶりだ。

「くそっ、なんだよ。DQNからリア充になるとか最悪だ！」

「お兄ちゃんああいうの嫌いだもんねえー」

大嫌いな奴が、幸せいっぱいというのは影夫には大変面白くなかった。思い切り不幸になったらメシウマしてやったのに。と怨念を撒き散らす。

一度嫌うと根に持って嫌い続け、祝福する気持ちかわかないあたり、影夫の狭量さと俗物ぶりがうかがえた。

仮にあの青年が影夫に一生掛かって払うくらいの金を山と積んだ



り、物理的にケジメをつけるなら影夫も心から許せたのだろうが、ただの土下座謝罪だけで大嫌いな人間を許せるほど人間が出来ていないのであった。

その土下座が本当に心からの誠意なのか、熱した鉄板の上で試してやりたかった。ともかく気に入らないのだ。

「そんなことより、今日は話があるんだ。きてくれてちようどよかったよ」

「話？ 依頼……じゃないよな？」

「違うさ。王様からの呼び出しだね」

「はあ？」

想像もしていなかった言葉に間抜けな声を出す影夫。

「おうさま？ ベンガーナのいちばんえらいひと？」

「そうだよミリアお嬢ちゃん。あんた達の活躍を何度も聞いたみたいでね、ぜひとも会いたいそうだ。褒美もとらせるって話だよ」

「わあ！ すごいねお兄ちゃん」

ミリアは素直な反応を見せるが、影夫としてはきな臭いものを感じざるをおえない。

原作ではベンガーナ王はちよつと嫌な人物ではなかったか。傲慢な感じがあったような……。

「ちよ、ちよつと待って……んなうまい話があるのか？ 変な企みとかじゃないだろうな？」

「滅多なことを言うもんじゃないよ。王がだまし討ちなんて真似なんざしやしないさ」

「いや、逆に断言できるほどお綺麗な王だとそれはそれでこの国が心配だけど……」

「どこの国でもそんなもんさ。まあ、神に仕えし一族の末裔ってことで権威を保って、建国以来ずっと王族やってるんだから、外道なことなんざ表立つてはできないってわけだ。暗殺とか強制勧誘とか、そういうのはないと言っている。そんなことしたら明日からベンガーナ

王は世界中から爪弾きで笑いものだろうからね」

「そうか。じゃあまあ素直に出向くか……やべ正装なんてもってないぞ」

「あんたらは貴族様じゃないんだ。普段の格好でいいよ。清潔にしておけばそれでいいさ。言つとくけど呪いの品なんてもっていくんじゃないよ。城にいれてくれないからね」

「ああ、分かった。つまりDQ1ってことだな」

「おーなるほどと、影夫は合点した。つまりDQ1のあれだ。」

懐かしい思い出が蘇り思わずにんまりとする。HP1で城の外に追い出されたつけ。

「はあ？ まあとにかく呪い武器はミアリアのお嬢ちゃんに持たせるんじゃないよ」

「わかったよ。でも、うう、緊張するなあ……」

影夫は前世を含めて、王族みたいな偉い人と会う経験はない。ましてや国のトップになんて会えるはずもない。

影夫は権威や肩書きに弱い性格なので歴史ある国の王様との面会はとても緊張をする。

「け、敬語ちゃんと言えるかなあ……失礼にあたらないといいんだけどなあ……」

とはいえベンガーナは祖国ではないのでまだしも気は楽なほうである。もし、前世で同様のことがあったら影夫は緊張のあまり何もしゃべれないのは確実だっただろう。

「お兄ちゃんががんばって！ 私はいつもどおりお任せするね」

「ミアリアは気楽でいいよなあ」

「……変な奴だねえ。凶悪なモンスターと戦うほうがよっぽど怖いとおもぅがね」

「いやあ、そっちは最悪逃げりゃあいいけど、偉い人からは逃げられないからなー」

「ともかく、日時は明日の正午だ。くれぐれも遅れるんじゃないよ」

「あ……」

「なんだい？」

その時影夫は気づいた。

呪いの武器が城に入れないなら暗黒闘気の自分もアウトなのではないかと。

(やべ……でも、ミリアを一人で行かせるわけにも……)

「あ、いや。もろはのつるぎは置いていくけどさ、呪いの武器が持ち込めないってどうやって見つけるのかなって。何か神官とか神父が見張りでもやってるのかなーって思っただけだ」

「城でしているのは装備品と荷物のチェックだけだよ。呪いの武器はそこで没収になるってわけさ。神官や神父なんて忙しい連中を城の入り口に張り付けとくような真似なんかできやしないよ。大体、招いた勇者相手にそんなことしたら、信用してませんって言うてるようなもんじゃないか。だから形式上の検査だけだ」

「へーそうなんだ。勉強になったなあー」

持ち物検査だけなら、事前にミリアの身体の中に隠れておけばチェックをすり抜けて城に入れる。

ほっと安堵する影夫であった。

☆☆☆☆☆

「ほう、そなたたちが最近話題の……」

ベンガーナの王、クルテマツカVII世が立派にはやした髭を撫でながら、興味ぶかげにミリアたちを一瞥する。

「は。左から、ガーナの勇者ミリア様、ベンガーナの勇者でろりん様、僧侶するぼん様、戦士へろへろ様、魔法使いまぞっほ様となっております」

すかさず、御付の者が補足をいれて、ミリアたちを王へ紹介した。

この間、ミリア達は全員平伏中だ。原作でのロモス王やテラン王は気安いおじいさんな感じだが、クルテマツカVII世はいかにもいった王様なので謁見ではそれなりに礼儀を守る必要がある。

「すると5人PTなのか？ 珍しいな」

「いえ、ミリアどのはお一人での活動を主としておられます。神の作りし伝説の武器殿とともに旅をなされているとか」

「面をあげよ」

「「「は……」」」

王の直接の配下ではないで、許可を一度辞退してくみたくない面倒な作法は免除されているので、全員が即座に顔を上げる。

ベンガーナ王は、原作で見たイメージよりも若い。バリバリ働く新進気鋭の若社長のようだと思つた。

「お初にお目にかかりますクルテマツカ陛下」

「こうしてみると、まだかなり若い。ミリアといつたか、そなた等そこの子供と変わらぬ歳ではないか。それで本当に戦えるのか？　ん？」

「は……若輩者ではございますが、皆の助力を得て日々努力させていただいております」

「ははは！　殊勝にして謙虚か。実に感心なことだ。ワシは年寄り大臣どもにまだまだ若いと侮られ、怒鳴り散らすことも多いが、そなたのほうがよほど大人であるな」

「は、はあ……」

ぽかんとしてしまった影夫inミリアを見て、豪快に笑い、してやったりとニタリと笑う。

原作から高圧的な嫌な王なのだろうと思っていたが、まだ若いからだろうか？と影夫は脳裏で首をかしげる。

影夫には分からないが、実はクラーゴンの討伐や影夫とでろりん達でこれまでにこなした依頼が関係している。

本来なら、これらの問題はクルテマツカ王がベンガーナ王軍を大量投入して解決するはずだった。自国と軍隊の力を過信するようになったのは、その事が契機になっていたのだ。

「そなたらの働き、まことに見事である。おかげで王都はますます栄えた。礼を言おう。褒美もいくばくか用意してある」

パチンと王が指を鳴らすと、従者達が金貨や宝石の詰まった宝箱を持ってきて、開けて見せてくる。

すべてをあわせれば50万ゴールドはありそうだ。

「ワシとしてはそなた達をベンガーナ公認の勇者と認め、さらなる支援もしたいと思っておった……しかしだ、軍の整備を進める大臣がうるさくてな」

こほん。と咳払いを一つして、でろりん達をゆっくりと見回してくる。

「自称勇者等に金を渡したところで無駄になる、と。それよりも我が国の軍事技術の粋を集めた戦車と軍船の整備を進めるために資金を投じるべきだとな」

何が言いたいのか？と影夫は内心首をかしげる。見せておいて褒美はなしとはまさか言わないだろうし、意図が分からない。

「その大臣の言はワシにも一理あるように思えるのだ。これからは兵器の時代であるとワシも思っている。そこでだ、我が軍と一度手合わせをして勇者の力とやらを見せてはもらえぬであろうか？」

ベンガーナ王は挑戦的に笑いかけてくる。

力比べをしようというのだ。自らが信じる新しい兵器の力と勇者の力で。

「無論、勝敗に関わらずこの褒美は授けよう。それに、我が軍団に勝つことがあれば我が国に伝わる伝説の装備品も授けようではないか。いかがかな？」

影夫に不快感はなかった。むしろ、勇者にただすがるのでなく、国として独立自存の意気込みをもつのは好ましく思えた。それに、勝敗に関係なく褒美を渡そうというのもそうだ。

「承りました。存分に競い合いましよう」

「うむ。それでは明日の正午より王城の庭にて手合わせを行うとする。本日は我が城に滞在なされよ。それでかまわぬかな？」

「承知いたしました」

## 伝説

王が招いた客人。それも勇者一行ともなると扱いは素晴らしい。宿泊する部屋は、広くて豪華な城の客室である。もちろん全員が個室だ。

さらに食事も山海の珍味が並ぶ豪華なものであった。

食後のミリアの部屋。そこにでろりん達がやってきて手合わせの作戦会議をしていた。

「で、軍隊と勝負と言ってたが、どんな相手なんだろうな？」

「そうだな。城の中庭だろうし、軍船の類はないはずだ。となると相手はベンガーナ王ご自慢の戦車部隊だな」

「戦車あくなによそれ？」

「大砲を積んで自走する兵器だ。鋼鉄の装甲で身を固めており、外からの生半可な攻撃は一切受け付けない。高い機動性で縦横無尽に走り回り、敵をその巨砲にて粉碎するのだ！」

「お、おいおい！ んなの相手に勝てんのかよ!? へ、下手したら俺ら……」

「ああ。死んじまうだろうな……数え切れないバラバラの肉片となつて……迷わず成仏しろよ?」

「二ひいいいいー!?」

影夫が軽く脅すように言ってみると面白いように脅えだすでろりん達。

実力についてもこのあたりの性格は変わらない。まあ持ち味だとは思うが。

「なんて冗談だよ。それは技術が発展したらの話。実際は、単なる軽量化された牽引砲を扱う部隊みたいだから大丈夫だよ」

「馬鹿クロス！ 脅かすんじゃないわよ！」

「ぐえつ、ごめんごめん」

震え上がっていたずるぼんに、影夫はぐわんぐわんと振り回され

る。ちよつと脅しすぎたようだ。

「で、大砲なんてのを相手にどう戦うんだ？」

「大砲なんていっても照準器もない上にろくな工作機械もなしに手作りされた兵器と弾にすぎない。人間サイズの的をまともに狙えるわけはないはずだ。どうせ弾も石か金属球だろうし」

「き、金属球って！ 当たったらやばいんじゃないか？」

「別に俺らを殺すのが目的じゃない。というか殺すわけにはいかないんだ。王が勇者を招いた末に殺したりしてみろ。外聞が悪いどころじゃないぞ。目撃者も多すぎてもみ消しも無理だろう。おそらく万全の救護体制を取るだろうし、弾も訓練用の模擬弾かもなるほど、と安堵した様子のでろりん達。安堵したら欲が出てきたのか、4人はそれぞれ顔をだらしなく緩めていた。

「ふむふむ……それで勝てばお宝か。王家に伝わる伝説の逸品！ 楽しみだなあおい！」

「売れば大金になるな！」

「売らずに使つてもよさそうじゃのう」

「アンタたち、分かつてるね？ お宝はいただきだよ？」

「」「ガッテン承知い！」「」

調子にのってノリノリになるでろりん達。小悪党ぶりも健在だった。

☆☆☆☆☆☆

「それではこれより、模擬試合を始める！」

「うっし、打ち合わせどおりに！」

「」「了解！ お宝ゲットするぞー！」「」

「射撃よーい、目標……」

王の合図とともに模擬戦が始まる。それと同時にでろりん達は全員が一斉に散開した。

バラバラになって各自が別の方向から正面500M先あたりにいるベンガーナ戦車隊へと走り寄っていく。

「隊長！ 目標が全員散開しました！」

「うろたえるな、各個に射撃開始！」

「てえー！」

戦車隊の一斉射撃が降り注ぐ。

皆が散開したために、狙いはバラバラに分散しており、影夫の意図通りだ。

ちなみに砲弾は殺傷をふせぐためか、頑丈な木の球に布を幾重にも巻きつけたものになっているようだ。

そのために威力も低く、木の球を粉碎しないように火薬量も少ないのだろう。弾速も意外と遅いように思われた。

「うおっと」

「こりやあぶねえ。が、なんとかできるな」

「つきやーきやー!?!」

「はあつ、はあつ、う、運動は年寄りにはきついのう」

でろりんへろへろ、ミリア&影夫は、砲撃を回避もしくは防御できる身体能力があり、当たっても平気な体力もある。

だが、ずるぼんとまぞつほはそういうわけにもいかない。想定以上に危なっかしい。

「ずるぼんとまぞつほはやばいか。ふたりともミリアの元に集合してくれ！ 俺とミリアが弾丸を防ぐから背後に隠れろ！」

「作戦変更かクロス!?!」

「おうつ！ そっちは臨機応変にやってくれ散開してかく乱すればどうにでもできるはずだ！」

「んじや俺らは適当にやらせてもらうぞ。いくぜへろへろ！」

「まかせろ！」

「まぞつほとずるぼんに飛んでくる弾は俺に任せろ。ミリアは正面から飛んでくる弾を頼むぞ」

「りよーかいだよ！」

影夫は2本の凶手を出し、ミリアは両手を突き出し、暗黒闘気を圧縮した大きな盾を作り出して、砲撃にそなえる。

『ほお……あれが変幻自在の伝説の武器とやらか』



『勇者ミリア殿が手から出した盾もそうなのか?』

『いや。闘気の種類じゃないか。リングイア戦士が使う闘気剣の盾版ということなのでは?』

『ううむすごい。さすがは勇者様だ』

『だが、あれで砲撃に耐えられるのか!?!』

試合を観覧していた王や側近の大臣たちは影夫とミリアの作り出した暗黒闘気の手や盾を見て、どよめいている。

「有効弾なし!」

「ええい! 狙いを正面の3人にしぼれ! 照準は適当でよい、とにかく撃って撃って撃ちまくれ! 散開して接近してくる2人には、戦士どもを差し向けろ!」

「はっ!」

ベンガーナ戦車隊がろくに照準をつけずに雨あられと砲弾を撃ち放ってきた。

「ほいつ、はっ、とっ! ミリア防ぎきれるか?」

「きやつ……うんっ、なんとかいけるよ!」

影夫は凶手を振り回して降り注いでくる直撃コースの砲弾を弾き、ミリアは飛んでくる砲弾を盾で正面から受け止め、防ぎ続ける。ずるぼんとまぞっほはバギマでミリア達の周囲を覆い、地面にぶつかって飛び散る砲弾の破片や跳弾を防ぐ。

『ほう! 見事だな』

『ミリア殿も凄いが、ずるぼん殿とまぞっほ殿の息もぴったりだ。的確に援護している』

『馬鹿な! 砲撃がこうもたやすく無効化されてしまうとは!?!』

観覧席の王達は、ミリアと影夫の力量に感心するもの、コンビネーションの見事さに着目するもの、戦車部隊の攻撃が通じないことに動揺するものなど、さまざまな反応だ。

『やはりわしの言うとおりだったじゃろうて。最新の兵器だ大砲だなどといっても金の掛かるオモチャにすぎんと。本当に優れた強者には通じぬわ』

『ぬう……しかし、勇者の数は揃えられませんぞ。それに国に属せぬ者を国防の要とするなど無責任にすぎる!』

『じゃからわしは、王軍に迎え入れるべきだといっておる! 一人一人を將軍の地位での。戦車部隊を廃止すれば予算もつくわ!』

『馬鹿な! 兵器は今後の世界の趨勢をも変えうるものですぞ!』

『議論は後にせよ。今は勇者殿の戦いぶり和我が軍の奮戦をしかと見るのだ。今後我が国が何をどうすればよいのか答えはここにあるはずだ』

喧々諤々の議論が始まるが、王はそれを止める。

この立会いをじっくりしっかりと目に焼きつけないことには議論がただの感情論になるからだ。

しっかりと経過と結果を見て、何をどうすればよいのか、じっくり考えていけばよいと王は思っていた。

『ずるぼん、まぞつほ、次に連中が装填に入ったら反撃だ! 今のこの距離ならあたる!』

「わかったわ」

「ほいほいつ」

「今だよお兄ちゃん!」

「よつしやあつ、全員一斉に攻撃開始! バギマ!」

「バキマツ」

「メラミ!」

「メラゾーマ!」

影夫とずるぼんがはなったバギマの渦に、まぞつほとミリアの火炎呪文が巻き込まれて、炎の渦となって戦車部隊を襲った。

激しい炎が戦車部隊を包んで、砲撃用の火薬が引火したり、兵士の服に火がついて大混乱に陥ってしまう。

「ぐあああつ!?!」

「ひるむなつ、射撃を続けろ!」

「オラオラ俺を忘れてるぜ。イオラ、イオラ!」

「闘気砲ツ……!」

でろりんとへろへろが混乱中の彼らに遠距離攻撃を加える。

今回のへろへろはクラークゴンの時と違い、気絶することはない。殺さないように威力を抑えているのもあるが、日々続けている闘気コントロールの練習の成果だった。

でろりん達に差し向けられていた戦士達は、近接用の槍のみを装備した一団であるため、遠距離攻撃手段は持たない。

接近しないとどうすることもできず、戦車部隊がやられるのを見ているしかなかった。

「そこまで！ 勝者は、勇者でろりん達と勇者ミリアである」

まともに砲撃できなくなった時点で、ベンガーナ王が勝利判定を下した。

『おおなんと。真の強者が相手となるとこうまで一方的な戦いになるとは……』

『今後も戦車部隊を使うとすると、このままではいけませんな』

『某が思うに、機動力の問題では。近づけぬほど動きまわりながら砲撃ができれば……』

『砲撃精度の問題では。まぐれ当たりしか期待できぬのでは……』

『やはり威力の問題でしょう。もつと威力があれば防御されてもダメージは与えられる』

『足りぬのはすべてではないか。あらゆるものが足りぬよ。まだまだ未熟な技術なのだ。配備よりも技術開発を優先すべきだ』

『そもそもだ。軍事の前にまずは内政をより磐石とすべきなのだ。そうでないと軍備拡張どころか維持すらできぬのだからな』

『しかし！』

それと同時に、王の側に侍る側近や大臣達が口角泡を飛ばしての熱い議論を始めるのだった。

☆☆☆☆☆☆

「うおーすげえ!!」

「金貨に銀貨、宝石が山とあるぞー！」

「ご、50万ゴールド以上ありそうじゃな」

「素敵！ 宝石は全部私のものだからね！」

「こらこら、おまえら。そんなもんより伝説の武具だろ！」

「なにかななにかなあ〜♪」

ベンガーナ王城の中にある一室。

そこで影夫達は、授けられた褒美の金銀財宝と武具に目の色を変えていた。

「「「うおおおこれはああ!」「「「「」

さらに皆が各人に1つずつ与えられた宝箱を開ける。

でろりんにはふぶきのつるぎ、

へろへろにはまじんのオノ、

ずるぼんにはしゆくふくのつえ、

まぞっほにはふしぎなぼうし、

ミリアには、輝石の指輪と聖石の指輪が下賜されていた。

王家に伝わる武具の品々というだけあって、優秀な装備や逸品がたくさんだ。

影夫が一番びつくりしたのは、それぞれ輝石と聖石がはめこまれている2つの指輪だ。

アバンの家系しかその製法は知らないはずだったと思うが何故ベンガーナ王家にあるのだろうか？

過去にアバンの先祖が献上していたのだろうか？

「お兄ちゃんお兄ちゃん！ 指輪はめて？」

「ん？ はいはい……」

思案にふけていた影夫にミリアがおねだりしてくる。

苦笑しつつも、左右の人差し指に指輪をはめようとした。

「あ、そこじゃなくて薬指にしてよ！」

「こ、こらっ。それじゃ変な意味になっちゃうだろ？」

「ええーダメなのお？」

「えーじゃない。大体指輪のサイズも合わないだろ。あ……指輪のサイズは調整できるのか。芸が細かいな」

「それじゃあやっぱり薬指がいいよ！ ねえねえお願いっ！」

「……ダーメー！」

ミリアの願いをすげなく却下して影夫は人差し指に指輪をはめる。

「ぶうー」

意識的に指輪を使ったり発動したりするにはこの位置がやりやすいためであらうから。

大体、婚約の証の指輪はこんなごっこじゃなくて本当に愛する人と結ばれるときにこそ嵌めるべきなのだ。

「見て見てお兄ちゃん！ 似合う？」

「ああ、清楚で控えめなデザインだからいい感じだな」

少しの間膨れていたが、子供らしい切り替えの早さでミリアは大はしゃぎしながら、影夫に見せてははしゃいで喜んでいった。

影夫としても2つの指輪が入ったのは大変嬉しい。

魔法の威力を増幅できる性質を持つ輝石と、魔法力を蓄積できる聖石があれば今後の戦いでもおおいに役立つだろう。

余談であるがアバンのしるしと同じ輝石ではないのは幸いであつたともいえる。輝石には破邪の力があるためミリアとの相性はよくなかつただろうから。その点ただの輝石と聖石ならば問題はない。

影夫もミリアもご満悦である。

「すげえ……」

一方、でろりんはぶぶきのつるぎを手に取り、思わず見惚れていた。手に持っただけでヒシヒシとこの武器の切れ味、威力を感じるかのようだった。

へろへろもオノに頬ずりしてぐふぐふと喜んでいるし、まぞっほも頭に被ってみたりして嬉しそうだ。

ずるぼんは、美術品のような見た目が気に入ったのか、早速装備していた。

## 招宴

そしてその夜。

「勇者でろりん様、へろへろ様、ずるぼん様、まぞつほ様、勇者ミリア様のご入場！」

係りの掛け声と共に、でろりん達が晩餐会場へと入る。

城内にあるデカくて広い晩餐会場は、巨大で豪華なシャンデリアが部屋全体を明るく照らしていて、立派な調度品が居並び、絨毯もふかふかであり、さすがはベンガーナの王城といった絢爛さがあった。

「おお、あれがベンガーナの勇者でろりん様か」

「まあ素敵。なんて勇ましく凛々しいお姿なんでしょう。ぽっ」

「おお！あれがベンガーナ王家に代々伝わるふぶきのつるぎ……実にお似合いだ」

「ほう、あれがガーナの勇者ミリア様。本当にお小さいのに軍との手合わせでは大活躍であったとか……こども勇者の噂は本当であったか」

城の晩餐会と聞いていたが、その空気は非常にいい。

影夫は、性悪貴族や強欲大臣などがのさばり、ギスギスして敵対的で、擦り寄ってくるヤツラも嫉妬の悪意や利用してやろうという下心をもつ連中ばかりといった想像をしていたのだがまったく違う。

うだつがあがらない万年平社員であった影夫はエリート連中や金持ちは鼻持ちならなくて、権力欲丸出しで他人を蹴落とすのをなんとも思っていないような人で多いという印象をもっていた。

創作物でも大抵悪役であったこともあってそんなイメージだったのだが肩透かしだった。

それも当然だった。問題行動が見られる人物は王によって事前に排除されていたのだ。

昔、影夫がガーナの街の町長にわたした不正の証拠。

あれがベンガーナの国に巢食う汚職と談合を行う大臣一派を炙り出すことになった。タネパの村の村長はそれら一派につながる者

だったのだ。

この事態を重くみた王が徹底調査と全面的解決を強く指示。その結果、芋蔓式に不正に手を染めていた連中が一斉に排除されていたのだ。

無自覚なところでベンガーナに大きな影響を及ぼしていた影夫とミリアは、尊敬や敬意、憧れや感謝といった、好意的な視線や感情を受けつつ、係りの人に連れられるままにでろりん達は王のもとへと歩いていき、王の前で手をつけて跪こうとした。

「勇者でろりん、勇者ミリアよ。今宵は無礼講。礼儀や作法など不要だぞ」

「は、はあ……」

「ふふふ、そなたらはもうベンガーナ公認の勇者達なのだ。そなたらが無闇に平伏させているとまるでワシが傲慢な暴君のようではないか」

ベンガーナ王はそう言っただろりん達に手を差し伸べてまで、立たせた。

こういう行為をしてもいいのだろうか。と影夫は内心首を傾げた。個人的には大変好感をもてるが、王の権威上好ましくない行為だと思ふのだが……この世界の王は、絶対王政に近いと思われるほど権限を持つている。余計にまずいと思うのだが、神の使者の末裔の血を権威として、万民がそれを認めて誰も侵そうとはしないので、問題ない、ということなのだろうか？

御付の人達や、周囲の参加者たちも普通に微笑ましそうに見ているだけであり、影夫はますます拍子抜けしてしまう。

「今宵の主役はそなたら勇者達だ。ゆるりと楽しむがいい」  
「はい」

王主催ともなれば堅苦しくてマナーにうるさそうだったり、田舎者はバカにされるイメージもあったが、立食形式であり、とても砕けた場であった。

なんだかちよつと高級なレストランのバイキングみたいな雰囲気である。

「うひよー！　　すげえご馳走だあ！」

「食いだめだ、死ぬほど食いだめをするぞ！」

「ちよつと落ち着きなさいよ！　　恥ずかしいでしょ？」

「ほっほっほ。酒も美味しいのう」

「んぐごくぱくもぐつごつくん！」

「むしゃぱくごくりっ、んがんぐツ……！」

「あつ、ミリアまで!?　　もうっ……こうなったらヤケよっ！　　食べ尽くしてやるわ！」

影夫をのぞいた全員はマナーも知ったこつちやないと、料理を山盛り取り皿にのつけて猛烈な勢いで食いまくっていた。

喉が詰まれば高級果実酒や果実汁で流し込む。

食べ始めのころは周囲は啞然としていたが、すぐにさすがは勇者豪快だと和やかムードになっている。

(ちくしょう！　　俺の分も持って帰れよな！)

お偉いさんの前で魔物の姿を晒すわけにもいかず、影夫はひとり涎を我慢しつつ悶々とするのだった。

ずらりと並んでいた料理を思いつきり食べまくって、満足したから寝ると言い出したミリアから身体の主導権をもらった影夫は、周囲の目を盗んで手の平に作り出した口からこっそり飲み食いしながらくつろいでいた。

と、そこに愉快げな笑みを浮かべたベンガーナ王がやってきた。

「あ、クルテマツカ陛下。さきほどはすみません……あまりのご馳走にハメをはずしてしまいました……」

「はははっ、楽しんでもらえてなりよりだ。それと、口調もくだけたままでよいぞ」

「はい。あ、すみません料理が余ったら持って帰ってもいいですか？」

「あいわかった。後で申し付けておこう」

「ありがとうございますー！」

ペコリと頭を下げる。これで影夫も後でご馳走を味わうことが出来る。味を想像して思わず涎がたれそうになる。

「そなた達は本当に見えていて飽きない。あけすけで面白くて痛快だ



な」

「あ、いえ……お恥ずかしいことです」

「それはそうと、勇者ミアリアとしての意見が少し聞きたいのだがよいか？」

「は、はい。何でしょうか？」

「実際に戦ってみて、戦車部隊をどう思う？ 役に立たぬものであると思うか？」

「いえ。使いどころを間違えなければ有用であると思います。ただ、剣や魔法の素質に優れた精鋭部隊が扱うよりも、人並みレベルの兵士達に扱わせるべきでしょうね」

「ふむ……？」

「大砲は誰が扱おうが威力は変わりません。故に人並み程度の兵士であつても、イオやイオラ並みの破壊力を発揮できるとするのは大きな強みだと思います。逆に言えば誰が使おうが基本的に同じ威力ではないのが問題でしょう」

「ワシや大臣としては国軍の柱にすえたいと思っっているのだがな？」

「突出した強者が存在しないような戦いで使うならば主力足りえると思います。しかし仮に魔王の軍勢を相手取るのは難しいのではないのでしょうか」

「……」

「勇者アバンや魔王ハドラーといった強者に通じないのは当然として、ドラゴンやヒドラ相手にも苦戦すると見ていいでしょう」

原作でも、超竜軍団のドラゴン達の皮膚を貫けなかった。それどころか衝撃によるダメージすらも与えることができていなかった。やはり強者相手に大砲で対処するのは厳しい世界だ。

「ですので2段階構えでいくべきでしょうね。戦車部隊と、呪文や武術の達人を集めた精鋭部隊です。雑魚の軍勢は戦車部隊で抑え、強者には精鋭部隊で相手取る。それがよいかと」

本音をいえば精鋭ばかりを山と揃えられるのが理想だけど人材にはどうしても限りがある。それを火器を装備した部隊で埋めるのが現実的な形だろう。

「……もつともな意見だ。参考にさせてもらおう」

感心しきりといった様子で、ベンガーナ王が何度もうなづく。とはいえ、影夫の意見がどれほど役に立つかというと微妙だろう。強者であれば人外レベルの力を発揮できる世界だ。

なにせオリハルコンの武器を使った竜の騎士が放ったとはいえ、竜闘気をこめた大地斬程度で動く巨城がまっぷつになるくらいなのだから。

（今のミリアですら、もろはのつるぎを使って暗黒闘気を込めた渾身の一撃を放てばちよつとした軍艦なら真つ二つにできそうだし）

所詮ベンガーナの戦車や大砲程度では戦力の補完や多少の底上げにしか貢献できないだろう。

火器兵器の類でまともに大魔王バーンと張り合おうと思うなら、戦略核兵器の山でもないが無理そうだ。

「しかしそなたには、将としての才もあるのだな。いやはや驚いた。將軍としてわが国に迎えたいくらいだ」

「いえとんでもない。私なんか指揮の経験はありませんし、軍学の知識もいい加減な素人ですよ」

ゲームやアニメを入り口にしてちよつと興味を持って調べた知識がある程度であり、そんなに深い造詣があるわけでもないのだ。一般人よりは多少知っている程度である。

生兵法は怪我のもとだと身をもって影夫は知っている。聞きかじった知識は穴だらけであり、本当に危ういのだ。

「ところで貴殿はパプニカのレオナ姫と友人になられたとか？」

「は……ええ、ええ。そうですがどこでそのようなお話を？」

「うむ、先日まで滞在していたパプニカ王との会談の場でその話が出たのだ。娘に初めて対等な友が出来たようだ、と喜んでおった。それが噂に聞く勇者ミリアであるとも」

「そ、そうですか」

レオナは初めての友人のことを周囲に話しまくったらしい。よっぽど嬉しかったのだろう。

まあ別に口止めもしていないけど、脱走を手伝ったようなものなの

で大丈夫だろうかとも思う。

喜んでいたのなら、好意的に捕らえてもらえているのだと思うのだけれども。

「それはもう、見事な親ば……いや溺愛ぶりでわが事のように喜んでおったよ。まあパパニカ王の気持ちも分かる。対等で飾らない付き合いが出来る友というのは王族にとっては本当に貴重だからな。王族の立場と国という壁が、な」

影夫はそれをきいて王族も色々と本当に大変なのだと思う。

国民には立場上どうしても謙った態度を取られるし、顔を合わせる事が多い他国の者たちには地位や立場がある為、真の友人とするのが難しい。

国の利害対立もあるし、私的感情で国を動かすのもまずいためだろう。

そういう意味で公的な地位や立場があやふやで感覚がほぼ一般人に近いミリアは友人として気兼ねなしで付き合えるいいポジションといえる。

(原作でのレオナの我侷や気ままな態度は寂しさの裏返しだったんだろうか)

そういえばレオナもダイと出会った後、交流を深めていくうちにちよつとずつ丸くなっていった気がする。

ミリアがレオナの初めての友達になって、いい影響を与ええれば素敵なことだ。と影夫はしみじみと思った

(え……あれ？ それってダイのポジションじゃね？)

初めての友達というのは特別なものがあるだろう。物心ついてすぐに友達が当たり前だったならともかく、10歳になってようやくやってきました友達。

(レオナがダイじゃなくてミリアに惚れて百合になったりしないよな……?)

原作の頃だから14歳ごろの思春期の姿のふたりで、脳裏に一瞬いけない想像をしてしまう影夫。

ミリアがその気になるとはあまり思わないが、ふたりともかなりの美少女であるだけに考えるだけでドキドキする。

『ミリア、もう離さないわ。私達はいつまでも一緒に、ね』

『ダメだよレオナ。き、気持ちは嬉しいけど、私には、お、お兄ちゃんがいるの！』

『じゃあ3人ならどう？ クロスなら私も好きだし……皆で一緒になりましたよ』

『それなら……いいよ』

(つて、なんて事考えてるんだ俺！)

いつのまにか影夫がJCハーレムを作るといふ妄想になってしまつてあわてて正氣に戻る。

中学二年生を侍らせる妄想をする中年男はちよつと洒落にならない。い。

影夫にとつて救いだつたのは心の声は、伝えようと思わないかぎりミリアに伝わらないことだつただろう。

こんな妄想が伝わつたら影夫は恥ずかしさで死んでしまう。

「周囲が配下ばかりでは無意識のうちに他者を慮ることを忘れてしまうことがある。清く正しくあろうと心に誓つていてもついそうなつてしまうのだ。ワシも同じだつた。友人と意見のぶつけ合いや喧嘩をして気づかされたものだ」

影夫が脳裏のいけない妄想を追い払っている間、ベンガーナ王はしみじみと懐かしい目で友人との思い出に浸っていた。

「若人を見ていると、自分の若い頃を思い出して心が洗われる気がする……という歳寄り臭いか。ワシとてまだ38なのだからな」

「え、ええそうですね。陛下はまだえーとその……これからこの国をよりよくお導きしていただきたく……あー」

十分に若いですと10歳児が言うのも、嫌味か皮肉に当たる気がして、なんと切り替えてよいかしどろもどろになつてしまう影夫。

「あの、勇者さま。よろしければ戦いのお話をお聞かせください！」と、そこに意を決した様子で歳若い貴族の少女がやってきた。

彼女はキラキラとした憧れのまなざしでミリアを見つめている。

歳若いとはいえJKくらいの年齢みたいなので、なんだか妙な絵面である。

「ほう、ワシにもぜひとも聞かせてくれ」

「は、はいええと。はじめて戦った相手は、とても大きく強い凶暴な……」

話を始めつつ、ちらりとでろりん達の様子を見ると、人だかりの中心で武勇伝を身振り手振りを交えてノリノリで披露しており、大変盛り上がっていた。

若く綺麗な女性も大勢うつとりと話に聞き入っており、でろりん達は大層モテていた。

目つきが若干悪いものの美形のでろりん、筋肉が雄々しいマツチヨなへろへろ、渋いインテリ爺さんなまぞつほ。それぞれ好みが違う女性達にモテていた。

ずるぼんだけは醒めた目でカツコつける仲間達を見ていたが。

それを横目で見ながらもげてしまえと呪詛を放つ影夫。

彼は自分も続けとばかりに、身振り手振りに芝居がかった抑揚を交え、若い貴族の少女に向けて、英雄譚を語って聞かせていった。

そして影夫は余計な暴走で勇者ミリアに恋する少女を生み出すことになるのだった。

そんなこんなで、その後もご馳走と楽しい語らいと友好的なふれあいを楽しんだ一行であった。

## 表明

「ふああーあ、最近暇だなあ」

「つたくせつかくの新装備も出番がなくて泣いてるよな」

宿の男部屋に集まった影夫やでろりん達6人はグダグダとくだをまいていた。

とにかく暇でしようがないのだ。

「そろそろ、この街から出るほうがいいかもしれないわね」  
「そうだな」

戦車部隊と模擬戦をしてから1週間。

相変わらず強敵を倒すような依頼はない。

古文書の類もデパートにあった分はおろか、露天や市場のものも買  
いあさり、闇市にも足しげく通って解読し尽くした感がある。

なので、門外不出の古文書とか極度の稀少本とか伝説レベルの古書  
以外は大体読んでしまっただろう。

少数ながら写本があるようなものは大体読んでいたと自負してい  
た。何冊もダブリが出るくらいには。

影夫とまぞつほが景気よく買うので、古い本に見せかけた偽書や紛  
い物売り出す店も出る始末で、そろそろ解読作業はダメそうだ。

信頼できる店に未所持の貴重書を探しておいて貰うようには伝え  
ているが入荷がいつになるかなんてわかりやしない。

ちなみに、読み終えた本は解読時につかったメモをつけてベンガー  
ナ王に献上した。

これで少しでもベンガーナの力が増強されればいいのだが。

ちなみに念のため手元には、古文書から要点を抜き出した自作の本  
を残してある。読んだ本の数が多いので最低限にまとめたものの分  
厚い本5冊分ほどになってしまつて微妙にかさ張っていたりする。

(しっかし、世界の中心とまで言われるほどになったベンガーナに  
何ヶ月もいたのにアバンとは会えなかつたな)

影夫はひそかにアバンとの再会を期待していたのだが、まったくダ

メだった。王にもルイーダにもアバンの足取りを追いそうな情報はなかった。影夫としては大変残念である。

足跡を残さないようにしているというか、身分を隠して放浪している感じなのだろうか。いざいざ会おうと思うと全然会えないからとても困る。

というか何故そんなことをする必要があるので疑問でもある。結果的に世界をすくう弟子とは会えているがカールで塾や学校でも開いて世界から生徒を募った方が効率は良さそうなのに……。フローラ女王がよつぽど結婚を迫ったから逃げたんだろうか？

謎である。

「でろりん達はこの先の予定はあるのか？」

「俺らは、特に目的も定めずに各国をうろろしながらボチボチ魔物の討伐やらをしていくよ。お前らはどうするんだ？」

そう、それが問題だ。以前、ルイーダにハドラーが倒された時期を聞いてみたことがあった。

さすがにこういつた時間情報に正確であるようで、11年と6ヶ月と3日が経っているのだと教えてくれた。

（ハドラーが死んでから15年でバーン襲来。覚えておいてよかったあ）

そうなるとバーンが攻めてくるまで残りは大体3年と6ヶ月だ。季節や暦の概念がない世界らしいので、現実にはいえないが、そのあたりにほくろすることはほぼ確実といえる。

この期間で世界中をまわりながら少しでも実力をつけ装備を整えるようにしなくてはいけない。

「そうか。俺らは世界各地をまわりながら力をつけるよ」

「おぬしらまだ強くなる気か？ 魔王はすでにおらぬというのに……何故じゃ？」

「いや、魔王が倒されたっていつても、いつ別の奴が出てきてもおかしくないだろ。また強い奴がきてから慌てるのかよ？ 大体どの国も平和ボケがすぎるんだよ。何かあつてから慌てても遅いんだぞ！」

まぞつほが怪訝そうに探りを入れてくるが、影夫は危惧だけを語って詳細は言わない。

今後行動をともにする一蓮托生の仲になるならともかく迂闊に吹聴もできない。でろりん達なら教えても大丈夫だとは思うが……いやおうなしに巻き込むことになってしまう。

「まあそりやあたしかにな。しゃーねえな。俺らもボチボチ鍛えておくか」

「弟子に置いてけぼりにされるのは嫌じゃしろう」

「ちよつとでろりん。それならクロス達についていけばいいじゃない？ 別に行く宛てもないんでしょ？」

「……それは止めた方がいいな」

ずるぼんが名案とばかりに提案したが、影夫としてそれは賛同しかねる。おそらく魔王軍との抗争に彼らを巻き込んでしまうからだ。

「はあ？ なんでよ？ 何か後ろめたいことでもあるわけ？ 今更遠慮してるわけでもないんでしょ？」

「……………」

「なんとか言いなさいよ！」

ずるぼんが詰め寄るが、影夫は無言だ。ミアアも何も言わない。気持ちは同じなのだ。

「……クロスよ、そろそろ話してはどうじゃ。おぬしは何か重大なことを知っておるのじゃろう？ ワシらを巻き込みたくないから話さず遠ざけようとしておる、といったところかの？ 隠し事があるのはわかっておるぞ」

前々から節々に感じてたのだろう。まぞつほが諭すように言ってくる。影夫は迷う。

言ってしまったって巻き込んでもいいのだろうか。だけど黙って白を切りとおせるほど影夫は強くはない。心は弱くて優柔不断、本音は助けが欲しい仲間が欲しい。だから口を開いてしまう。

「……いいのか？ これを知っちゃったらもう後戻りはできないんだぞ」

「何言ってるのよ、水臭いこと言ってるんじゃないわよ。いいからさっ



さと言いなさい！」

「わかった……」

ずるぼんの言葉にでろりん達もうなずく。言うところなるのに相手に判断を委ねてしまった影夫の弱さであった。

「俺はこのまま何もしなければ訪れる未来が見える能力がある……それはいいか？」

「ん……そりゃあ予知、あるいは神託といったところか？」

「ああ。その一部だけ具体的なモンだと思ってくれればいい。つか信じてくれるのか？ 証拠も何もないんだぞ」

「バカね、疑うくらいなら最初から話なんて聞かないわよ！ いいから続きを話さない！」

「教え子の言葉を疑うほど師匠として腐っちゃいないぜ？」

「ほっほっほそういうことじゃ」

随分な信頼ぶりに苦笑しつつ、影夫は口を開いていく。

「今から3年後に魔界の神と崇められる大魔王バーンが地上を破壊しにくる」

「「……っ!？」」

「いいか、征服じゃない。地上の破壊、消滅させるためにくるんだ。魔界の大地に太陽をもたらすためにな。故に世界中どこへ逃げようがどうにもならないってわけだ。まさに人類に逃げ場なし、だな」

絶句する一同に冷徹に告げる。

「アバンはどうした、今度も勇者アバンが倒してくれるんだろ？ そうなんだろう!？」

「アバンだけじゃないわよ、勇者パーティがいたはずでしょう？ 彼らが何とかしてくれるんじゃない……!？」

希望にすぎるでろりんとずるぼんに首を横に振って応え、影夫は言葉が続ける。

「アバンやその仲間は実力的あるいは年齢的に問題にならない。この世で最強の存在と謳われる伝説の竜の騎士すらも軽く凌駕するんだぞ。人間の勇者や老人がきばってもかすり傷もあたえられねえだろうよ」

「……そ、それじゃあ世界の終わりじゃねえか！」

「あ、あと3年しか生きられないっての……!? そんな！」

「……まだ続きがあるんじゃないだろうか？」

「ああ。最終的に大魔王は倒される。竜の騎士と人間のハーフである勇者ダイがバーンを倒すんだ」

「な、なんだ、おどかすなよ」

「だが、世界中の被害は甚大だ。すくなくともカール、リングア、オーザムはことごとく壊滅。パプニカも一度は廃墟になったし、ロモスも王城が攻められるほどの大被害を受けた。このベンガーナも王都が竜の軍団に蹂躪されるんだぜ？」

「バーンが倒されるまでに、一体何人が死んだことやら……軽く全人類の半数以上は死んだだろうな」

「ひっ……」

ダイの事を聞き安堵したでろりんらだが、世界の半分が蹂躪されるという言葉に顔を蒼白にさせる。

「それでおぬしはどうするつもりじゃ？ まさか……？」

「さすがに大魔王バーンに直接相対するのは勇者に任せるつもりだよ。とても俺やミリアの手に負えないからな。俺達は力をつけてガーナの街やベンガーナを守りたいと思っている。できれば他の国もだけどな」

「せ、世界を半分滅ぼすやつらと戦って大丈夫なのかよ？」

「大魔王バーンとその幹部は反則レベルの強さだが、最初のうちのハドラーやその手下なら多少は戦いようがあるんだ。バランだけは勝ち目がないが……」

「……」

「で、ソレを聞いても俺らと一緒に来るのか？ 正直何が出てくるかわからんぞ。バーンに目をつけられでもしたら魔王軍総がかりってこともある。命の保障なんざあるわけがない」

なるべくならでろりん達を巻き込みたくない。話しておいてそんな矛盾したことを思いつつ、影夫は脅すように声を掛ける。

「そ、それは……でも……」

「あ、あんたらはどうするんのよ？ たったふたりでそんな連中を相手にする気!？」

「ああ。俺とミリアは、やる……」

「馬鹿じゃないの！ 何でそんな危険だって分かって、死に行くような真似をするのよ!? 大魔王が倒されるまで安全な場所に隠れてればいいじゃない！ 世界の半分が死ぬっていつでも顔も見たことがない人達のためになんて命を投げ捨てるのよ!? それもミリアを巻き込んで！ 馬鹿じゃないの!？」

ずるぼんが涙目で掴みかかってくる。本気で心配してくれているのが伝わり、影夫は言葉に詰まる。

見知らぬ人間大多数よりも、親しい人間をとる、か。普通の人間ならそうだよな。影夫自身もそうしそう思う。

影夫が何も知らず、理不尽リアルな死というものを実感できずにいたら、ずるぼんの言う通りになっていたかもしれない。

しかしすでにこの目で実際にミリアの兄が殺されるのを見て、ミリアの怒りと苦しみと慟哭を見ていた。

影夫は知っているし、差し出せる手もある。それなのに――

「……出来るわけない……わけがないんだよ」  
「え……?」

あんな事が、大規模に世界中で行われるのだ。影夫にはそんなことは絶対に許せなかった。

「何もしなきゃ確実に死ぬ人間が大量にいるって分かってるのに、見てみぬ振りなんて出来るわけないだろ!? そんなの俺が殺したようなもんじゃねえか。出来ないことをしようっていうんじゃないんだ。出来る範囲で頑張つて、ちよつとばかり無茶をするだけだ」

俺が皆を助けるんだ、とか自分が正義などとは思わない。ただ、目の前に手を伸ばせば助けられるかもしれない人がいるのに、むぎむぎ見捨てるなんて良心が許さず、人道に悖るのは人として恥ずかしい。

影夫は両親にもご先祖様にもお天道様にも世間様にも顔向けできないような醜態を晒したくなかった。

「でも……」

「綺麗事がはびこり、愚かしくもおめでたい先進国の人間ってのは、重大な人権侵害をみると憤って我慢できないもんなんだよ。それが手の届く場所ならなおさらな」

こんなのは所詮、傲慢な現代人のわがままであり偽善の押し売りだ。

バーンがやろうとしているのは魔界の解放だ。侵略であるが、魔界を救うという大義を向こうももっている。それを知りながら野蛮や理不尽を許せないという感情論で影夫は否定しようとしている。

「いいねえ。精々魔王軍の連中に、甘い甘い現代人の偽善と傲慢を押し付けてやろうじゃねえか！ 殴りつけて押し付けるのはお国の流儀からははずれちまうけどな。クククツ！」

テンションがあがって前世の話を垂れ流しながらヒヒヒ、と引き攣り笑いを始める影夫を見て、決死の覚悟ゆえの狂騒だと勘違いしたのか、でろりん達が悲痛そうな表情を浮かべて、沈痛な空気があたりに広がる。

「で、でも……！」

「クロス……お前っ！」

「なに、心配すんなって。えらそうなこと言ったけどさ、俺にとって一番大事なのは身内の仲間……ミリアの命だ。いよいよとなったら盛大にトンズラぶっこくから！ 別に俺は正義の味方じゃないんだからな」

影夫は、ニカッと笑ってそれらを吹き飛ばすようにおどけて見せた。

半ば冗談だがミリアが死になれれば見捨てても逃げるというのは本気である。矜持を捨てても守るべきものはある。

（無定見かつ無節操で日和見主義か。我ながら実に日本人らしくていいねえ。能天気なお人好しって、よくずるぼんにも言われるし、やっぱり俺日本人なんだなあ）

「さあどうする？ 無理に俺達に付き合うことは……」

「(ちや(ちやうるさいわよ!!)」

「ず、ずるぼん？」

「さつきからなんなのよ！ 私は顔も知らない他人が死のうが知ったこつちやないわ。けどね、あんたが、ミアアが危ない目をするのはほっとけないのよー！」

「でもな……」

「ふん。どうせとめたつて無駄なんでしょ。ミアアもクロスに従うだろうし。だったら私が一緒にいくしかないじゃない。文句は言わせないわ、いいわね!？」

「はあ……わかったよ。んで、でろりん達はどうするんだ？」

「ん、こうなつたらざるぼんの奴は意地でもついてくだろうし、3人PTでやるつてのもしまらねえからな。しゃーねえな、俺らもいちよきばるか」

「そうか。有力な戦力が増えて正直助かるよ。な、ミアア？」

「うん。みんな一緒のほうが楽しいから好き！ これからもよろしくねー！」

「よしよしミアア。あたしが一人前のレディに育ててあげるからね？」

「二俺らともよろしく頼むぜ？」

「はあ、いい、えへへ！」

ミアアは嬉しそうだ。

仲良くなつたでろりん達と壁を作つたままというのはさびしそうだったからこれでよかったのかもしれない。

(……俺に、万が一があつてもミアアや今後のことを託せるしな)

「よお、し、そうと決まれば景気付けだ、飲んで騒ぐぞー！」

「二二異議なく、し！」

6人はその日、宿から苦情が来るほどに飲んで食べて騒ぎまくるのだった。

## 搜索

「……みんないないね」

「行っちゃまったな」

翌朝。影夫とミリアが起きたらでろりん達はいなかった。

別に逃げたのではない。

宿に残されていた書き置きには、師匠の元へ戻り、今度こそ修行をやり通してくる、とあった。

投げ出して、逃げ出した過去に直面するのは新しく何かをするよりもきつと辛い。

それでも、彼らは決着をつけにもどったのだ。

(がんばれよ……)

影夫としてもそれがいいと思う。修行に実戦、格上相手の死闘を経て、彼らは確実に強くなっている。

とはいえやはり一部の基礎が固まりきっていない部分があるし、受けていない教えもある。それらはきつと成長が伸び悩んだところに技術面でも精神面でも大きな壁となってしまうだろう。

「……ほっほっほ。でろりん達は行ったか」

「ってまぞっほ師匠、なんでここにいるんだ？」

影夫がしんみりしていると、いきなり宿の扉を開けてまぞっほが入ってきた。

思わずぽかんと口をあけた影夫に、まぞっほは笑いかける。

「ワシの師匠はとっくに他界しておるんじやよ。代わりにマトリフ兄者に教えを乞おうと思っただんじやが、どこにいるか検討もつかん。未來視でわからんかとおもうての」

「ああ、そっか。マトリフさんの居場所ならなら大体分かるぞ。えつと、パプニカのバルジ島付近のどこかの島。そこの洞窟の中だな……」

影夫は原作を思い出しながらそう伝える。

「えらく具体的にわかるんじゃないのう」

「そりゃあ大魔道士マトリフは、勇者一行のへぼ魔法使いを世界一の天才大魔道士にまで育て上げた人だからな。それに、超威力のオリジナル呪文やらも編み出していたし、凄い人だから有名なのさ」

「……そうか。いや、勇者アバンとともに世界を救ったくらいじゃし、あの兄者ならその程度は出来て当然か」

何故かどこか懐かしさと悲しさの入り混じる声でぼそりともらす。

「丁度いいや。俺らもマトリフさんに会いたいと思ってただけで、いきなり行っても怪しまれるだろうし、困ってたんだよ。さっさとルーラとトベルルーラ覚えないと不便でしょうがない」

「ふむ……古文書ではみつけれなかったからのう。師匠のところで教えておった呪文じゃが、ワシには使えん。契約だけはすましてあるが……」

とんでもない爆弾発言をしてくるまぞっほ。

契約済みだったとは影夫も思ってもみなかった。

「なんだよ!? それなら契約の魔法陣わかるんじゃないのか? はやくいってくれよ」

「ワシは修行途中で逃げたんじゃぞ? まだ教えてもらっておらんわい」

「まあそれならしゃーないか。とりあえず王宮に向かおう」

「なんで王宮?」

きよとんとミリアが首をかしげる。

普通なら、海路でパプニカだろう。

しかしバルジの大渦のあたりは船で近寄るのは不向きというか危険なのだ。

パプニカでレオナのコネを利用して……はミリアの友達を露骨に利用するようで気がひけた。少なくともどうにもならなくなっただけなら泣きつくべきだろう。

「困ったら何でも言え、ワシに任せよって王様言ってたからな。気球貸してもらおうぜ!」

「気球!? やったあ! 早く乗りたい!!」

「うんうん。実は俺も乗ってみたかったんだよな」  
「おぬしら……：礼儀正しいのか厚かましいのかようわからんやつじやな」

まぞっほに呆れられながら、ベンガーナの王宮へと向かうのだった。

☆☆☆☆☆☆

数時間、3人はベンガーナの所有する気球船にのって空の旅に出た。  
いた。

「すごいすごい！ 見て見て、ベンガーナの街があんなにちっちゃくなっちゃった！」

「すごいこのう。空から眺めると案外王都も小さなものじゃな」

「あ、知ってるよ！ 見ろ、人がゴミのようだ！ って奴だね」

「いや、それは違うぞミリア……」

「そうなの？」

「それよりミリア。気をつけないと落ちちやうぞ」

「はぁーい」

ミリアは小さくなっていくベンガーナの街を見下ろしながら大はしやぎ。

気球船の縁に乗りかかって身を乗り出すようにしているので、あわてて影夫が注意する。

ミリアが落ちたら猫ぐるみに入って彼女の肩に座っている彼も一緒に落下してしまう。

「せかいつてこんなにひろくて大きいんだね！」

「本当に絶景じゃのう……」

この世界では空を飛んだことがある人間は一握りであるし、高層建築もあまりないために、空の高みから見下ろすというのはなかなか体験できるものではない。それだけに感動もひとしおのようだ。

「トベルーラが使えれば自力で見れたはずの光景か……胸にくるものがあるわい……」



「しっかし、気球なんてよく貸してくれたよな。人員つきで」

そう、気球の操縦は影夫達には出来ない。

そのためベンガーナの人間が乗っているのだ。

「ぬしばかり働かせてすまんの」

「はっ、自分は勇者様方の助力になれて光栄であります！」

そういつてきびきびと動いているのは、アキームであった。

この時代はまだ隊長の身分ではないようだが、彼の頭はこの時点から輝いて光を放っていた。

そんなこんなで影夫達が空のたびを満喫して過ごしていると、眼下に群島が見えてくる。

「ご報告いたします。このあたりがバルジ島周辺の群島地帯になります！」

「うおーすごいな！ あっという間にパプニカか」

「便利なものじゃな」

「もつといっぱい作ればいいのに！ 毎日でも乗って動かせばたのしいと思うー！」

「金がかかるんじやろ……船に比べて物も人も少ししか積めんようじゃし」

「なるほどなあ」

楽しい空のたびは数時間で終わり、さっそくマトリフ搜索が始まった。

「さてすぐに見つかればいいけど、この島の数じゃ結構骨だな……」

眼下に見える島の数は多い。

しかもここに見える島はバルジ島周辺諸島のごく一部だ。

「兄者は洞窟の中に住んでるんじやろ？ それならば島の1つ1つをしらみつぶしにするしかないのう」

「何日掛かるやら。一日も早くルーラおぼえたいのになあ」

影夫は思案にくれる。下手をすると数週間。搜索のためだけに費やすのは無駄が多い。

それに、時間が掛かってしまうと何度もベンガーナに補給に戻る必

要が出てさらに面倒だし王宮にも大きな負担をかけてしまう。

何か手はないかと、思案にくれる影夫だったが、ミリアがあつ。と手を叩いた。

「じゃあじゃあ！ 洞窟から出てきてもらえるように騒いでみるってどうかな？」

「名案かもな。大声で呼べば……まぞつほ師匠の声に反応して出てきてくれるかも」

名案、だとミリアの頭を撫で撫でする影夫だったが、どうやら腹案がまだあるらしい。

得意げな顔で、両手を振り上げて、手の平に爆裂呪文を作り出した。

「それもあるけど……こうすればもつとはやいよ……イオ、イオッ！」

「うおおおい、何してんだ!?!」

ミリアが放った爆裂呪文は、眼下にあつた島の1つにぶち当たって派手な炸裂音をあげて小さく地面を揺らした。

「爆裂呪文を島に打ち込みまくる！ そうすれば絶対気づくし何事だろって出てくるよ！ イオイオイオッ！」

「む、無茶苦茶じゃ！ あ、兄者が怒ったらどうする!?! いや絶対に怒るわい。やめるんじゃミリア！」

「そうだあぶないからやめなさい！ 洞窟が崩れたらマトリフさんが生き埋めになるだろ!?!」

「大丈夫！ 威力は抑えてるし、地面ねらってるから！ マトリフって人はすごい大魔道士なんだよね？ 魔法を使いまくってたら、絶対に気づくと思う！ イオイオッ！」

「そ、そりやあまあ。一理、あるが……」

たしかにミリアが言うとおり、片っ端から見えた島に呪文を撃ち込めば効率がいい。

「ほらっ、お兄ちゃんもはやく！ バギでもいいから打ち込んだら気づいてもらえるよ！」

「まあそうだよな。信号弾の代わりと思えば合理的か……バギツ!!」

「あ、あああ……な、なにを」

影夫までもが呪文を島々へと放ちだした頃によく、唾然として

硬直していたアキームが青い顔で影夫達を止めようとする。  
しかし。

「ま、ままま、待たんかおぬしらああー！」

「俺はバギしかつかえんから、まぞっほ師匠もイオつかってくれよ。  
責任は俺がとるからさ。バギバギイー！」

「こ、こうなりややけじゃ！ イオ、イオっ！」

「きやははっ！ イオツ、イオツ！」

「バギ、バギッ！」

「お、おやめ……あああ……!?!」

必死に影夫をとめようとしたまぞっほまで呪文を島へと打ち始める始末。

アキームは止めようとするも、3人は初級呪文を手当たり次第に群島に向かって放っており、眼下の島が呪文の爆撃に晒されていつていた。

「もう、終わりだ……」

ベンガーナの気球がパプニカの所有する島（無人島であろうが領土は領土）に呪文による無差別爆撃を加えてしまったのだ。

初級呪文であり、殺傷や施設への損害を与えてはいないとはいえ、れっきとした軍事行動として取られるだろう。

これが露見すれば、外交問題になりかねない。

下手をすればベンガーナの軍備増強傾向とリンクされて、他の国も口を出してきて大きな国際問題になってしまいかもしれない。

その際に責任を問われるのは、アキームだろう。

「す、すまないみんな……」

アキームの脳裏にまだ小さい弟や、自分のベンガーナ王軍入りを祝ってくれた両親の姿が浮かんではいきえた。

死罪にはならないだろうが、目指していた隊長の座にはもうつけないだろう。一平卒の給料では家族を養うのは苦勞しそうだ。

「てめえら、何しやがる!!」

絶望するアキームをさらに絶望させたのは、怒り心頭のマトリフの

姿であった。

普段マトリフが漁場に行っている場所が呪文の被害を受けていたのだ。

仕掛けた罟や網も全部無茶苦茶だろう。

「あ、兄者!?! お、おおお、怒ってるぞ! クロス、一体どうしてくれるんじゃ!」

「まぞっほも一緒になってやったじゃないか!」

「マトリフって人、すぐに見つかってよかったね」

慌てふためくまぞっほと影夫。

ミリアは、どこ吹く風といったところで、目的を果たして満足していた。

「そこを動くんじゃねーぞ!」

杖を握ったマトリフが気球に向けて、猛然とかつとんでくる。

遠距離から魔力光線が飛んできていたら気球は撃墜だろうが、それをしないのはマトリフの優しさではない。

そんなもんで済ましてやる気がないということだ。

とっ捕まえて甚振ってやる気なのだ。

逃げようとしたら呪文を打ち込んででも止めてやる。そう言わんばかりに握った杖には強い魔法力が込められていた。

「あああ……マ、マトリフってまさ、まさか……」

アキームの頭が真っ白になる。

名前とすさまじい魔法力から推測するに……あの老人はかの有名な大魔道士なのではないか、と。

そうだとすれば、そんな大人物を怒らせ、敵対した自分はもう完全に終わった。

左遷どころの話ではない。軍どころか国からの追放処分もありえる。

いや、それどころかマトリフという人物は偏屈で気難しい人間であるというし、怒らせた以上、生きて帰れるかすら分からない。

「覚悟できてんだろ？なあオイ！」

「ま、まぞっほ師匠、なんとか説得してくれー！」

「ひ、ひいいっ!? ワシはしらん、何もしらん！」

「きやははっ、こんなに揺れて動くなんて、じえつとこーすたーみたいだね！」

気球の床に身を隠しておびえるまぞっほ達は、マトリフによって気球ごと引き摺り下ろされ、島へと手荒く上陸させられることになるのだった。

## 試練

マトリフが激しくうねる魔法力のオーラを放出しながら、地面に墜させられた気球に向けて杖を向けていた。

「てめえら、いい度胸してるじゃねえか。ああ？」

すぐにでも強大な呪文が放たれ、気球もろとも爆発四散させられてしまいそうだ。

想定以上に怒っている様子に影夫は慌てて猫ぐるみの中から這いで、ミリアの体内に潜み首に顔だけを出した。

(ミリア。まぞっほ師匠とアキームに被害がいかないように俺達で受け止めるぞ。あの呪文があるから大丈夫だ)  
(うん)

ミリアは、気球のゴンドラ部分から身を乗り出して地面に降り立ち、マトリフのほうへ一歩足を進めた。

「マホステー！」

影夫は最近習得したばかりの呪文、マホステを唱える。これはとっておきの対呪文用の切り札だ。

紫色の霧がミリアの周囲に立ち込めて、魔法力を遮断するバリアと化した。

これであらゆる呪文を防げるはずだ。

魔法力そのものの遮断という性質は反則級の特長である。おそろくメドローアですら遮断できるのではないだろうか。

(……まあそんなに上手い話はないだろうけどな)

ラリホーが効くかどうかの判定に相手の力量が関係するのがダイ世界のルール。相手の力量しだいという傾向があるのだ。

DQ4では無条件で完全な呪文遮断ができたからといって、ここでもそうとは限らない。

だが、少なくとも多少の軽減には使えるだろう。と影夫はこの呪文に賭けた。

「ほう。ずいぶんおもしれえモンを使うじゃねえか。だが、俺にそん

なもんが通じると思うか？」

マトリフは杖を掲げてそこに自身の強大な魔法力を集めていく。

「いいことを教えてやる。使い手以上の魔法力を直接ぶつけれりゃ、かき消えるんだよ」

マトリフが放ったまばゆい魔法力の波動はいとも簡単にミリアが纏っていたマホステを消し飛ばした。

（やっぱりか！ まぞっほ師匠の呪文は防げたけどマトリフクラスにや通じないか……）

（どうする？ 倒しちゃう？）

（無理だろうし、攻撃しちゃうもつと怒らせるだけだろうな。元々悪いのはこっちだ。暗黒闘気の全力で防御するぞ）

「てめえらはこれで終わりだ！」

「っ……責任はとらなきゃ、ね」

「監督不行き届きは保護者の責任ってな。ふたりでとめるぞ！」

すかさず影夫はミリアの肩から凶手を伸ばし飛んでくるであろう呪文に備えた。

ミリアも両手に暗黒闘気の盾を出現させて待ち構える。

暗黒闘気は魔法との相性が良く、干渉をしやすいのだ。

原作においてミストバーンは放たれた魔法を増幅して打ち返すということをしていた。

彼とは性質や素質が異なるので影夫やミリアに同じことはできない。

大体マトリフは力量が上すぎて打ち返す真似を簡単にゆるしてもらえるものではない。

しかし、物質化するほど凝縮した暗黒闘気であれば呪文を軽減することくらいはできる。

「歯あ食いしばれや。お仕置きの時間だ！」

「あ、兄者待ってくれ！ ワシらは敵ではない！ 用があってきただけなんじゃ!!」

ついにマトリフが杖を掲げていよいよ呪文を放つ、その寸前でまぞつほが転がるようにゴンドラから這い出て、始まりかけた戦いとめようとした。

「あ？ 誰かと思えばまぞつほじゃねえか。」

「あ、兄者……ひ、久しぶりで、その……」

「師匠んところからおめえが夜逃げして以来か。んで、何の用だ。もしくだらねえ事だったらためえもろともきつい置きをくれてやる」

杖をまぞつほに向けるようにしてギロリとマトリフがまぞつほを睨みつける。

ひっと声をもらしつつも、意を決してまぞつほは声を張り上げた。

「ワシに修行をつけてほしい！」

「あん？ ……どうい風風の吹き回しだ。てめえがんなことを頼んでくるなんてよ」

「頼む兄者。師匠亡き今、兄者にしか頼めないんじゃ……」

「断る。んなことをして俺に何の得がある？」

まぞつほの意外な申し出に、ピクリとかすかに頬を揺らしたマトリフだが、即座に却下した。

「あ、あのっ、ごめんなさい。呪文を撃つたのはわたしが勝手にやったの。まぞつほ師匠は、乗せられただけだよ！ だからお願い！」

「……師匠だと？ 先生なんざやってんのか」

「弟子に教わってばかりの不肖の師匠じゃが……頼む兄者。ワシの全財産、20万ゴールドを授業料として渡してもいい。じゃから！」

「ほう。用意がいいじゃねえか。だが興味はねえな」

「後生じゃ！ ワシらには兄者の教えと必要とする事情がある……なんでもするから頼む兄者！」

ついに弟子の前だというのに、見栄も張らず恥も恐れず、まぞつほは躊躇いなく土下座を始めた。

以前の彼からは考えられなかったその姿勢は微かにマトリフの心打った。

「分かった。俺と勝負しろ。認めさせることが出来たら事情とやらを聞いてやる。その上で気が済むまで鍛えてやろうじゃねえか」



「そ、そんな……ワシなんか兄者と……?!」

「嫌なら帰れ」

「わかった。やる……やってみせる!」

まぞっほは、覚悟を決めて立ち上がり、マトリフに相對する。

「あ、すまん。ちよつと待つてくれ……」

(周囲に魔物は……やはり居ないか)

マトリフがまぞっほと勝負を始めようとする直前、影夫は割り入った。

影夫は、氣球でバジル島にやってきた時から、周囲の邪氣を探つて、悪魔の目玉のような偵察役の魔物がいないかチェックしていた。

マトリフは魔王軍にマークされていると思ひ、マトリフがやってきてからも何度か探つてはいたのだが一向にその氣配はなかった。

(ミリア、周囲に魔物はいないか?)

(え? いないと思うけど……どうしたのお兄ちゃん)

「何だあ?」

「あ、いや……悪魔の目玉みたいな見張りがいたら、排除しとかないとまずいと思つたんだが……居ないみたいなんだ。おかしいな」

「ああ? そういや昔はちよろちよろうつとおしいのが張りついてやがったな……だがもう10年以上側にはきてねえぞ」

「え? そ、そうなのか? なんでだ?」

「しらねえよ」

魔王軍の監視下にある……とすっかり思っていたが実に拍子抜けだった。

(でもよく考えたら人間を舐めきつてる魔王軍の連中のことだ。最初は監視したけど、平和の中でただ暮らすだけなのを見て、途中で監視を打ち切つたとか? ……ありえる)

バーンは元々人間なんて相手にもしてないしな。精々アバンくらいだった、気にしていたのは。

直接脅威を味わつたはずのハドラーにしてもバーンからもらつた強い肉体に慢心してたし。元々見下している人間のことなんて気にもしないか。宿敵であるアバンは別として。

(……なるほど。ハドラー戦では閃華裂光拳もメドロアも見せてないはずだから、なおのこと脅威に思われてないってことか)

「見張りを心配するなんざおもしれえモンを見せてもらえらんだよなあ。いくぜ！ イオ、イオ、イオ、イオ、イオ！」

「ぐっ……！」

「おらおら、どうしたまぞっほ、認めさせるんだろうが」

両手から次々にイオの嵐を投げつけながら、必死に逃げ惑うまぞっほに向けマトリフが中指立てて挑発する。

「逃げるだけか？ てめえは何も変わっちゃいねえんだな」

「く……ベギラマッ！」

その挑発にのり、まぞっほは右手を握りこみ、己が扱える最大級の閃熱呪文を放つ。

仲間と一緒に死闘を乗り越えたまぞっほのベギラマは並の魔法使いのものよりも威力が大きくなっていく。

金色に輝く閃熱がマトリフへと迫っていく。

「ほう、使えるようになってたか……ベギラマ」

こともなげに突き出した左手からマトリフも閃熱呪文を放つ。右手で鼻をほじりながらの余裕の態度。

「ちったあ腕をあげたようだな」

閃熱呪文同士のぶつかり合いは、マトリフが明らかに手を抜いているというのに、まぞっほが徐々に押されてしまっていた。

「ぐぐっ……！ くうっ……あ、兄者はやはりとんでもない！」

さすがはまぞっほに強く劣等感と敗北感を刻み込んだ兄弟子である。確実に強くなっていたというのにそこには圧倒的实力差があった。

しかし、まぞっほはそれでも己の成長を実感していた。昔であれば、鏝迫り合いにすらならなかったのだから。

だから、まぞっほは一心不乱に、弟子や仲間と出会って変わった己を信じ、呪文に力を籠め続ける。

「負けるわけにはああっ……いかんのじゃあ！」

その甲斐あって、押し込まれた閃熱呪文はまぞっほに殺到するギリギリで雲散した。

ついに呪文が切れるまで耐え切ったのだ。

「はあはあはあっ……」

「俺様の呪文を受けきったのは褒めてやる……だが！ その程度じゃ、認めてやれねえな」

ニタアと、人の悪い笑顔を浮かべ、マトリフは両手で炎のアーチを作り出す。

「そ、それはまさか……!?!」

それは、かの魔王ハドラーですら使うことが出来ない極大閃熱呪文ベギラゴン。

「ベギラゴン」

圧倒的熱量を誇る閃熱の柱が、両手を組んだマトリフの手から放たれた。

「……さあどう防ぐ？」

マトリフはそう言いつつもまぞっほの次の行動にあたりをつけていた。

おそらく奴は極大呪文から逃げ出すはずだ。そうなったら姿勢が崩れたところにイオラの嵐をお見舞いしてやろうと思っていた。それでチエックメイトだ。

「ワシはもう、昔とは違うッ！ ベギラマァーッ！」

だがマトリフの予想は外れてしまう。

まぞっほはその場から一步も引かず、むしろ足を広げてその場に踏ん張るようにしてベギラマを放った。

「ほう。らしくねえな。見ねえ間に何があつたんだ？」

なまじ頭がよく、物事を考えすぎるあまりに臆病で慎重なばかりの小賢しい性格であつたまぞっほとは思えない行動だ。

まるで無鉄砲なガキのように恐れを知らない無謀な行動に、マトリフは首を傾げる。

「おめえにそれだけ覚悟をきめさせる事情つてのに興味が出てきたぜ……」

だがそれだけでは不合格だ。必死こいて覚悟を見せたとはいえ、ただ無鉄砲なだけでは、合格点はやれない。

「なんとかしてみせろ」

ベギラゴンは、ベギラマで受け止められるほど甘くはない。若干速度を落としただけでまぞっほ目掛けて突き進んでいた。

このままではまぞっほはベギラゴンの直撃を受けてしまう。

「……ベギ、ラマアーツー」

だが、まぞっほは左手からもベギラマを撃ち放つことでベギラゴンを押しとどめた。

2本の火線は大魔道士のベギラゴンを直撃寸前であるものの、どうにか受け止めていた。

「カカカツ！ 呪文の同時使用か。やるじゃねえかまぞっほ。何があつたのか知らねえが見違えていやがる！」

笑いながらマトリフが少し魔法力を箆めると、それだけであっけなく均衡は崩れた。

まぞっほは殺到してきた呪文を受けて吹き飛ばされてしまう。

とはいえ、呪文の威力は殆ど相殺することができているためダメージはほぼない。

まぎれもなく、まぞっほはマトリフのベギラゴンを防いで見せたのだ。

「及第点をやろうじゃねえか」

「は、はあはあっ……まだだ兄者！ ワシの一撃……それでワシのすべてを見極めてくれ……！」

マトリフから合格をもらったが、まぞっほにはまだ余力があつた。余力を残して兄弟子に認められるなんてしたくはなかった。

変わった自分の全てを見定めて欲しかったのだ。

マトリフは不肖の弟子なんかには、ひねくれていると分かりにくい。色々目掛けてくれたと思う。それを裏切り、逃げ出した自分の過去への贖罪と決別の宣言だった。

「おもしろえ。通じるかどうかやってみやがれ！」

人を食ったような笑みから、微笑へと表情をかえてマトリフは足を

広げて構えを取る。

変わったと言う弟弟子の全力を本気で受け止めてやるという表明だ。

「ありがとう、兄者……はああああ！」

再び立ち上がったまぞっほは残ったすべての魔法力を練り上げ高めて右手へと集めていく。

一切の出し惜しみはしない。自らの全てを切り札に賭けた。

「メ・ラ・ゾー・マッ！」

5本の指先に5発のメラゾーマを作り出す。

「……フィンガーフレアボムズ!!」

右手から放たれた5発のメラゾーマがマトリフへと迫る。

マトリフの逃げ場をふさぐように少しずつ位置をずらして放たれた5発の火炎球がマトリフを炎で包み込んだ。

「……フバーハ！」

しかしその炎はマトリフの全身から噴き出すように現われた魔法力の光膜によってさえぎられ、3発が虚しく雲散させられる。

「ちっ、小癩な……」

残る2発がマトリフに迫る。

杖を持つては迎撃が間に合わないと判断したマトリフはそれを投げ捨て、その手に直接魔法力を纏わせる。

異なる呪文であろうが同時に2つ扱えるマトリフにとって、素手の両手を使わさせられるというのは、本気にさせられたということだ。

苛立ちと感心の混じった感情を抱きながら、マトリフは左右から迫るメラゾーマの炎を、腕を交差して伸ばしてわしづかむ。そしてそのまま力づくで握りつぶした。

ぷすぷすと、炎の弾は掻き消えるが、彼も無傷ではない。両手が軽い火傷を負ってしまった。

まぞっほの切り札は、弟弟子の服と手を焦がすことしかできなかつた。

しかし、世界最強の大魔道士の服を焦がして手に傷を負わせることができたともいえた。

間違はなくそれは凡百の魔法使いにはできないことだ。

まぞっほはそれを成し遂げた。

「うぐ……はあはあっ……い！」

そしてまぞっほは代償に苦しむ。クラーゴンに放った時は3発だが今回は5発。あの時よりも実力がついているとはいえ、ただの人間には荷が重過ぎるのだ。

またもや確実に寿命は縮んだだろう。

「おい。自分が何をしたのか分かってんのか？」

「こうでもないかと兄者は認めてくれないと思った……兄者は強くて、厳しいからな」

「ちっ。ついてこい。事情ってやつを聞かせてもらおうじゃねえか」

「そ、それじゃあ兄者……？」

「この俺様に正面からぶつかって、両手を呪文で焦がしてみせたんだ。及第以上の合格をくれてやるよ。望みどおり鍛えてやろうじゃねえか」

パンパンと煤のついたロープをはたいて払ったマトリフは、まぞっほのケツを蹴り上げ、そういつてさっさと洞窟へと歩き出していた。

## 旧交

洞窟の中。ボロつちい木のテーブルを挟んで椅子にすわり、まぞっほはマトリフと向かい合っていた。

大魔王に関する事情の説明をする前にまず、まぞっほは逃げてからの自分の生きてきた道をマトリフに語った。

それが今は亡き師匠と何かと指導してくれていた兄弟子を裏切った過去へのけじめだと思ったからだ。

最初は、情けねえやらろくでもねえやらと、こき下ろされてばかりだったが、影夫やミリアとの出会いのあたりから考え込むようにマトリフの言葉数は減る。

そしてクラゴンとの死闘の話に入ると秘蔵のワインを持ち出してきてまぞっほに飲ませつつ、自らもパプニカの名酒で喉を潤し始め、ふたりは語らいあっていた。

「そうか。今じやてめえが押しも押されぬ勇者ご一行たあな……」

「いやあ……皆のおかげで一步踏ん張れただけで、後は成り行きでいつの間にか……変わったのは本当に仲間や弟子達が勇気をくれたおかげで……へへ」

万感を込めたようなマトリフの言葉にまぞっほは頭を掻いて心底照れくさそうに笑う。

「それを言えるってこたあ、本気で一皮剥けやがったか……変われば変わるもんだな」

まぞっほは修行時代からずっと、マトリフには説教や小言を言われ続けるばかりで見返せたことなんてなかった。

遅ればせながらではあるものの、才能に溢れ規格外の天才であった兄弟子にしみじみとそう言わせたのだと思うと、なんだか、認められた気がしてまぞっほは胸が温かくなる。

「ワシも少しはマシになったろう、兄者？」

「おせえよ。つといてえところだが、きつとあの世の師匠も喜んでるだろうぜ」

「そうかの……」

改めて思い返してみても、まぞっほは師匠に怒られてばかりだった。

あの時は自分でも酷いと思うくらい弱気と情けなさの塊だったからろう。と苦笑する。

じゃが兄者の言うとおり、今の自分を見たなら師匠も認めてくれるのだろうか。そう思うと少しまぞっほの心が軽くなった。

「兄弟子のよしみだ。師匠への義理もある。安心しろ。てめえはきつちりと鍛え直してやる。師匠を越えるほどにな」

「ああ。ありがとう兄者」

「礼はいらねえ。師匠以上の地獄の特訓だからな。俺は師匠みたいに追いかけて連れ戻してやったりはしねえぞ。カカカ、いつでも逃げ出していいんだぜ？」

師匠は、辛さに耐えかねてまぞっほが逃げるたびに連れ戻し鍛えてくれた。

自分など放っておけばいいのにわざわざ手間をかけて連れ戻し、やり直す機会を何度もくれた。

思えば自分はなんてことをしたのだろうかと思う。

それを裏切り続け、ついには追いかけられないように知恵を振り絞ってまで逃げ出したのだから。

昔は逃げ出せたことに安堵したものが、当時の自分を殴りつけてやりたくなる愚かさで最低さだった。

「今度こそ大丈夫だ、兄者」

「へっ、そうかい。つたくつまんねえな。からかい甲斐がなくなりやがって」

「兄者はひどいなあ……」

ちびちびと酒を口に含みながら、やわらかいムードで話は弾む。

「ひでえのはてめえだ。おそすぎるから師匠が仲間外れになっちまった」

「面目ない……」

そこからふたりは無言になって、亡くなった師匠に酒を捧げるよう



に飲んでいった。

そんな中、ふと思いつくようにマトリフがつぶやく。

「なんて偶然だ。今日は師匠の命日じゃねえか」

「今日が師匠の……」

「いつかあの世で会ったら精々詫びるんだな。拳骨くらいで許してくれるだろうよ」

ふたりが酒を飲み始めたのは夕方からであったが、その日は昔話を交えつつ、飲み明かした。

途中、まぞつほが事情のことについても話そうとすることもあったがこんな日に野暮を抜かすなとマトリフに叩かれ、今日の時間はすべて亡き師匠に捧げることになったのだった。

☆☆☆☆☆☆

「おそいねー。まぞつほししよーにマトリフさん……」

「んーああ。まあ同じ師匠に習ってた弟子同士、旧交でもあったためてるんじゃないか？」

寝袋代わりとマトリフに渡された布切れに包まれたミリアがぼやく。

影夫はというと魔物の姿で、古めかしい本が並ぶ本棚を探っていた「ふうーん。意地悪そうな人だったけど、ししよーいじめられてないかなあ」

「マトリフさんは捻くれてるし冷たく見えるけど、根はいい人だから大丈夫だろ。って、こりゃ失伝呪文書じゃねえか！ ラッキー」

影夫は掘り出し物を見つけてほくそ笑む。

もちろんマトリフの許可は得ている。

この部屋のもんは好きにしたいから待ってるこのことだ。

「魔族文字の書物まであるなんて、ここは宝の山だな！ 最高！」

「はあーまたはじまっちゃった。こうなると長いんだから……もう寝ちやおつかなあ」

古書マニアと化した影夫を見て、深いため息をついてミリアはおや

すみなさーいと目を閉じてしまう。

「そういうなって強力な呪文を覚えられたらミリアも嬉しいだろ？」

お。ベギラゴンキター！」

「そうだけど……え!? ベギラゴン!?!」

「いよっしゃー。魔族文字であろうが俺に読めねえもんはねえぜ。まぞっほ師匠様々だな」

「わたしもてっだうよ！」

「こうなったら、片っ端から漁って全部契約してやろうぜ！」

「うん！」

極大閃熱呪文というインパクトのある餌は効果抜群で、布切れの寝袋から弾かれるように飛び出したミリアが影夫の側にすりよってくる。

ちなみにその後、影夫が片っ端から部屋の古書を読んだと知ったマトリフがまぞっほに、軽々しく魔族文字なんぞ教えてんじやねえと拳骨を食らわしていた。

☆☆☆☆☆☆

「……………」

影夫とミリアが張り切って家捜しに励んでいる時。

アキームは外で黙々と気球を修繕していた。

見習い騎士時代には、寮に入って一人暮らしをしなければいけない以上、裁縫は騎士のたしなみの1つである。貧乏騎士時代には装備の繕いも自分ですべてやらなくてはいけないことであるし。

「生きててよかった……」

勇者ミリアからやまぞっほからは巻き込んでしまった詫びをされた上で、後で自分も手伝うから今は休んでくれと言われていたが、実直な騎士としてさぼるような真似はできなかつた。

アキームの任務は、勇者ミリアとまぞっほの助力をして帰還することだ。帰り道は自力でどうにかするからといわれているのでベンガーナの王宮に戻れば任務は完了だった。

「あれが勇者と呼ばれる人たちの戦いか」

まぞつほとマトリフの立会いは彼も見えていた。

自分ならばきつと、何も出来ないままにまぞつほ殿に打ちのめされているだろうに、マトリフ殿はさらにその上を行っていた。

ベンガーナ王軍が模擬戦で勇者達に負けたと聞いたときは自分が隊長であればそんな無様は晒さなかつたのに、と憤つたものだが、強者の戦いを間近でみて身に染みた。とてもではないがそんなレベルではない。

「私も軍ももつと鍛えなおさねばならない。王に一刻も早い許可をいただかねば……」

強者の前では張子の虎も同然なのだ。

聡明であられるベンガーナ王のことだから自分以上の案があるだろうが少しでも力を役立てたかった。

翌朝、アキームは気球の修繕を終えてひとりでベンガーナへと戻っていた。

余談だが、帰り際に迷惑料として、ミアとまぞつほから数百G相当の宝石を渡されそうになって、貰う貰わないと押し問答になり、最終的に王軍への援助と言う形で受け取ってもらうことになったりするようなことがあったりした。

## 会議

「……ってわけだ」

翌朝、改めて全員で話し合いの場を持っていた。

大魔王に関する詳しい事情の説明ということで話したのは影夫だ。

ちなみに影夫は当初、マトリフに対して敬語でしゃべろうとしたのだが、普通にしゃべれと命じられていた。

なのでしようがなく同年代に対する口調で話している。

彼曰く『俺は舐めてくる奴を許さねえが、へつらったり年寄り扱いしてくる奴も大嫌いなんだよ』だとか。

「なるほどな。てめえらの事情は分かった。しかし、異世界なんてのがあるとはな。しかも予言書なんてモンもあるたあな」

影夫は、違う世界で生きていたが、ある時気付いたら暗黒闘気の生命体であったことから、すべてを話していた。

原作知識についても特に隠す意味はないし、まぞつほたちもすでに違う形ではあるが大筋を話しているので包み隠さず全部正直に伝えられている。

ただし、漫画原作については伏せている。あなたは創作物の登場人物ですというのは憚られたからだ。

ダイの大冒険世界の歴史を予言する書と伝承が伝わっているという形で影夫は話していた。

「おぬしは暗黒闘気生命体じゃったのか……道理で邪悪な気配を感じたわけじゃ。すぐに悪い奴ではないと分かって気にしなくなつたが……きちんと話して欲しかったのう」

「ごめん。話しそびれてさ……」

「ワシらはもう仲間じゃよ。でろりん達も真実を話して欲しかろう。たとえ正体がなんであれ拒まんよ。そのくらい濃密な付き合いをしたんじゃからのう」

「ミストさんと同じ存在でも、お兄ちゃんは悪い人じゃないって、おししょーたちならきつと分かってくれるよ」

「ああ、そうだな。次に会った時にちゃんとみんなにも話すよ」

和氣藹々と話し込む3人だが、熟考していたマトリフがふいに口を開いた。

「クロスって言ったか？ 勘違いしてるようだがてめえはミストってやつと同じじゃねえぞ」

「ええ？ な、なんでだ？」

思っても寄らない言葉に影夫は啞然としてしまう。

（俺とミストとの違いはあったけど、それは力が劣っているからだと思っていたのだが、違うのか？）

「てめえは真正銘の『神から授かった魂を持つ生命』なんだよ。だが、ミストってやつは、暗黒闘気の思念体だ。そいつは仮初の生命、擬似生命体にすぎねえんだよ」

「じゃあ何で俺は？ あつ。前世が人間だからか」

「たぶんな。何かの理由で、前世での死後にお前の魂は、この世界に迷い込んだ。その直後に暗黒闘気思念体に取り込まれたんだろうよ」

「と、取り込まれたってマジか!? じゃあそいつが目を覚ましたら俺は魂が消されるのか!？」

「え？ えええつ！ そんなの絶対ダメだよ！ た、大変つ、どうすればいいの!？」

ミストは憑依先の魂を消し去れるといていた。同じことを影夫がやられたら、彼は死んでしまうことになってしまう。

「心配いらねえよ。神から授かった魂は強い。ミストって奴以外には魂を操ったり消すなんて真似はできねえ。逆にいえばそれが可能な野郎はとんでもない化け物ってことだが」

「ミストは身体を凝縮すりゃ、オリハルコンだって軽々砕けるくらいだもんなあ」

「てめえは取り込まれたが逆に乗っ取った。その結果、『神に祝福された魂を持つ暗黒闘気生命体』なんていうおもしれえモンができあがったわけだ」

単なる憑依だと思っていたが、そういう仕組みと経緯だったとは。影夫はマトリフの推測に感嘆した。

こういう事例はマトリフでも見たことも聞いたことも無いらしく、

まぞつほと一緒に興味深げに見つめられた。

爺さんふたりに興味津々で見つめられても嬉しくない影夫であった。

「そういうわけだからためえは回復呪文で回復できるし、鍛えることで成長できる。だがミストって野郎にやそんな真似はできねえんだろ?」

それもその通りであった。

そういえば金属生命体のヒムも、作られた人形からハドラーの魂の影響で真の生命体へと生まれ変わってからは回復も成長もできるようになっていた。

「……むう」

考えてみればミストとの違いとしては他にも色々ある。

ミストは物理攻撃が完全に無効だったはずだし、影夫のような暗黒闘気の物質化はできなかったじゃなかったっけか。

「つまりお兄ちゃんはずごい! ってことだね」

「え?! ま、まあそうなのかなあ。成長の余地があるってのは救いか。今は弱いけどレベル上げていけばいつかはミスト以上に、なれるかな」

「ほらあやつぱり!」

ミリアはまるで自分のことのように誇らしげにお兄ちゃんすごいってはいしゃいでいる。

影夫も、そこまで言ってもらえば嬉しい。久々にミリアの頭をいっぱい撫で撫でしてあげつつ、成長すべく頑張るぞと気合を入れたのだった。

「んで、予言の話だが……魔界の神か。とんでもねえのがきやがるな」  
「ああ。大魔王バーン……正直お手上げな相手だよ。伝説と奇跡の集合体である勇者ダイに任せるしかないと思う」

「……だが何もせずに放っておく気はねえんだろ?」

そう。マトリフの言うとおりだ。

正面からぶつかるにはあまりにも強大な敵だが出来る限りの悲劇

は防ぎたい。

「知ってる以上、出来るだけはしたい。とりあえず、魔王軍の注意をひきつけ、俺らの対処に手を取らせようと思ってる」

早々に魔王軍に目をつけられることになるが、なにせ暗黒闘気を扱う勇者に暗黒闘気生命体だ。

隠しようがないし、どの道いつかはバレることになる。

それならいつそ開き直って制約なしに思い切り動き回ったほうが被害を抑えられるだろうと影夫は思ったのだ。

(それに俺とミリアには心強い仲間もいる……)

心強いことにでろりん達の協力が得られることは確定済みだ。本気になった彼らの助力は凄く心強い。元々全員DQ3が元ネタなだけあって、素質や潜在能力はとても高いものがある。

規格外ぞろいのアバンの使徒並とまではいかないだろうが、それに準ずる活躍は十分期待できる。しかも原作知識と3年半という準備時間があるのだ。

下手をするとある程度は上回れる可能性すらある。

「ある時は正面から、ある時はゲリラ的に。全世界でやつらの邪魔をしまくってオーザム、パプニカ、カール、リングアをどうにか滅亡させないようになりたいと思ってる」

心強い仲間に加えて、影夫とミリアはベンガーナ王にコネをもっている。

各国への支援や援助をお願いすることができるかもしれない。戦後の主導権を握るためとか、各国への経済進出や利権の担保なども絡めて交渉を薦めれば説得もしやすいだろう。

さらにベンガーナ以外への伝手もある。パプニカの次期女王であるレオナは、ミリアの友達だから、彼らの手を借りることもできるかもしれない。

全ての国の滅亡は防ぎきれないかもしれないが、できる限り一般市民を避難させたいところだ。

「しかし、それをするときダイ達にかなりの影響がありそうじゃの……というかすでにダイが勇者になったり勇者アバンと出会うきっかけ

が消えているのう」

「まあそれは適当に仕込めるから大丈夫だと思う。俺らが筋書き通りにするよ。都合が付かなきゃ師匠達に頼むことになるかもしれないが」

「ワシらは別に構わんよ」

落ちぶれた悪役を演じてみるのも楽しかろうと笑ってみせる。本来のワシらはそういう役割じゃったようだし。と楽しげだ。

「問題は敵の出方だな。てめえのせいで、勇者という存在自体が強く警戒されてダイがいきなり強敵とぶつかる、つてのもありうる」

「くそ、どうやってソレを防ぐかだな……主人公補正や神の涙パワーがあるが限度があるだろうし何か手を打たないと……」

影夫は、ダイの竜の騎士としての力と、ゴメちやんの奇跡に強く期待していたが、さすがに最初の敵がバランだったりした日にはどうしようもないだろう。

その可能性はまずないだろうが、原作から外れた以上どうなっても不思議はない。

「そうなる、最悪の状況になっても彼らを逃がせるように俺らが一緒に行動するしかないか？」

「それだと各国が攻められ放題じゃろ？　さすがにワシらだけでは厳しい」

「師匠達にダイ達との同行とフォローを頼むって手もあるが、戦力として有力なんだ、世界各地で遊撃してもらわなきゃだし」

影夫とミリアがダイ達にくっついていくという案も、でろりん達がかっついていく案も戦力の無駄が多くていまひとつ。

「ダイとポップとマアムを今すぐ会わせた上で、師匠連中全員で死ぬほど鍛えまくるってのはどうだろ？」

「アバンは重点的に監視されてる可能性が高いのに、俺やブロキーナまで集結して弟子育成なんかしたら目立ってしょうがねえだろうが。それこそいきなり魔王軍総攻撃バラン込みになりかねねえよ」

アバン、マトリフ、ブロキーナが最初からいきなりアバンの使徒を完成させるといふ魔改造案は敢え無く潰えた。



(みつちり修行するたって、死闘なしだと成長速度も微妙そうだしやっぱり机上の空論か……)

打つ手なしだと影夫は頭を抱えたが、風にまぞつほが手を打つ。

「ふむ。アイテムや物資の補助ならどうじゃ？ 回復アイテムやキメラの翼があれば苦戦しても自力でなんとかできるし、いざとなれば逃げられるじゃろ」

「悪かねえ案だな。だが、本物の勇者ご一行だつてんなら、街を助けるために戦つてる場合なんかは逃げねえだろうよ」

「むう……だけどマームは、全滅が確定した状況ならちゃんと逃げようとしてたし、無為に死ぬことはないと思う」

「アイテム援助の方針でいくのがよさそうじゃの」

「後は、神の涙の奇跡に期待するしかないな。事前に知っているおかげで最後の願いがなくてもピラアオブバーンが投下されても爆発を阻止できる。その分神の涙を酷使しても問題ないだろう……いけるな」

「結局、敵の出方やダイ一行のフォローは逐一様子を見ながら、臨機応変に対応するしかないじゃろうな。情報収集と伝達手段を構築しないとまずいのう」

「悪魔の目玉みたいな偵察要員がいればいいんだが無理だしな。つて待てよ！ まぞつほは水晶使えたよな？」

影夫の脳裏に名案がひらめく。

映像による偵察手段なら人間にもある。おあつらえ向きにまぞつほが使い手じゃないかと。

「あれは精々5キロ圏内が限界で、しかもあらかじめ狙った場所しか見れん。邪悪を感じ取る力があれば偵察にも使えるんじゃないじゃろうがのう」

「じゃあ最初に俺が周囲の邪気を感じて、まぞつほ師匠にその場所を教えるとかどうだ？」

「感覚じゃから齟齬はあるじゃろうが、それなりにはいけるかの。じゃがワシ1人では限界があるわい」

「水晶の使い手つていうとあとはメルルとナバラのばあさんくらい

か。まぞっほみたいなの隠れた使い手を探せないかな？」

「勘違いしてるようだが、こいつが水晶を扱えるのは特に珍しい素質持ちだからだ。普通は占い師くらいにしか使えねえよ」

占い師の分野にまで手を出せるまぞっほはやっぱり凄い才能があるようだ。

ゼネラリストとして抜群の才能があるじゃないか。

彼自身はマトリフに比較して何かと卑下しているが、違う分野の天才ってだけなんじゃないかと影夫は思う。

「占い師か。ルイーダやベンガーナ王に頼めば探せないかな？」

「占い師っていうとテランが本場だったんだがよ、あそこはもう人がいねえからな……それ以外の国の占い師は紛い物だらけでダメだろうよ」

「ったく。邪悪を察知するリーダー機能に限定的ながら通信機能もあって、早期警戒に抜群に役立つという現代兵器も真っ青な優秀ぶりなのに……」

（本当に占い師はすげー使えるのにもったい無い。情報戦が死ぬほど有利になるチート職なんだぞ！ しかも武力にならないからテランの国是にも反しないのになあ……軍事利用云々はさておいてもほぼ独占業なら外貨を稼げまくると思うし他人の役にも立てると思うのに……テランってほんとよくわからないや）

原作でも影夫はあまりあの国のあり方が理解できなかった。

影夫には諦念と無気力が支配する国にしか見えない。

別に武器の発展を危惧して厭うのは自由だと思う。理想主義がすぎる気もするが、影夫にも平和は大事で争いが嫌だという王の気持ちは理解できる。

だからって道具や技術の発展までを否定するのはどうかと思う。

（その結果、残り人口わずか50人足らずで後は滅亡していくだけ。人間ってのは家族を子々孫々受け継いでこそ、絶やさず存続してこそだろうに）

影夫は両親にそう言われ、お前もいつか愛する人と出会って結婚して次に世代を紡ぐのだと教わった。無理はしなくていい、ただ人並み

にいきてさえくれれば、それが幸せなんだからと。

彼が尊敬している教師も、ある日自らの平凡さや普通の人生を送つてよいかを悩む彼に熱く語り諭していた。

そのことを影夫は思い返す。

放課後の校舎。中学生の影夫は進路に悩んでいた。

彼は自分をもっと特別で親や皆を幸せにできるはずだと思つてしたが、彼の学力は理数が若干優れているものの平均より多少上くらい  
の平凡なものでしかなく運動面もみるべきものはない。これでいい  
のか、どうすればいいのか悩んで恩師に相談していたのだ。

『影夫君。人類はゆっくりとだが、日々輝かしい理想の未来へ向かつて歩んでいる。その歩みはとでも遅くなつたり一時的に後ろを振り返つて止まることもある。だが歩むのを止めたり、後ろに向かつて歩いてはいけないんだよ』

『先生。でも、私は普通の人間でしかないみたいです。醜い欲もあつて清く正しくないし、発明や発見なんかでも人類の歩みに貢献できるなんて思えないんです』

『それでいい。皆の一步が積み重なつて人類は前に進んでいるからだ。影夫君、君もその人類の一員だ。ささやかに家庭を作り、ありふれた職について慎ましく暮らすことになつたとしても、他人を害さないかぎりそれは立派な人類への貢献なんだ』

『普通で、いいんでしょうか……？』

『歩みさえ止めなければね。人間たらんとし、人の営みを続けるのならばだ。皆の一步が君のためになり、君の一步もまた皆のためになる。人類史とは獣である事を辞めた人類が血と涙と汗を流して前へと進み、築きあげてきたものだ。歩みを止めることは千億もの彼らの軌跡への冒涇だ』

『生きるって重いんですね……』

『そうだ。だからこそ命は尊く大事なんだ。生き方は個人の自由だ、しかし、自分の命だから好きにしてよいということはない。君は大丈夫だと思いが自殺だけはしてはいけないよ』

『はは、そんな勇氣ありませんから大丈夫です』

『それは安心だ。なあ影夫君、私が生きているうちは人類が辿り着くべき理想の社会、文明は訪れないだろう。現実には辛く厳しい。だが。もしかしたら君が生きているうちに誰も争わず皆が幸せで平和な世になるかもしれない。それを私の代わりに見て欲しい。無理だったなら君の子、孫に託して欲しい』

『はい先生！ 人類のために平凡に生き抜いてバトンを渡して死んでみせます！』

『はは。君は素直で賢い本当に素晴らしい生徒だ。君のような生徒と出会えてよかった。困ったこと悩んだことがあればいつでも相談に乗ろう。そして君が社会人になった時、誰かにそうしてあげてくれ。今日より明日は素晴らしい。そうなるように皆で生きようじゃないかと』

『先生……そうですね、平凡でも良い明日のために……わかりました！』

もちろん彼自身も彼らの言葉をただ無批判に受け入れたのではない。おかしなことを言っていないか自分なりに考えたけど、彼らに悪意や誘導の類はないと感じたし何より彼らは心から善良だった。

彼らに諭されるたびに、そうなんだろうか？と考えてみるもの、やっぱりそうなんだろう。と思えた。そしてその度に影夫は立派で凄いと彼らへの尊敬を強めてきた。

そうやって大きくなった影夫の心の中では信奉する彼らの教えや言葉は『正しい』ものだった。

前世では、影夫は結婚して子を為すどころか恋人さえ作れなかった。

生まれ変わっても、子を為すことが出来そうのない魔物になってしまった。

彼はもう両親と教師に託された想いは守れない。だからせめて、その手伝いがしたい。前世で立派だった大人達のように自分もなろう

と思っていた。それが愛されたのに正しくあれなかった自分の罪、贖罪だと感じていた。

だからこそ影夫から見たら、テランの人々の在り方は理解不能だった。何故正しく生きられないと思ってしまう。生き方は自由だけど、生き延び、先に紡ぐこともできるはずなのに滅びに向かって生きるなんて身勝手で人類全体への冒瀆だとすら思ってしまう。

逆にテランの人々から見ると影夫の考えは異様だろう。緩やかな日本の伝統的家意識と、理想主義的進歩史観者のチャンポンなどという思考の人間は。

彼らからすると何故自然にありのまま生きようとしなのかと思うだろう。種族としての分を超えた領域に人間を進ませようなどおこがましい。神への冒瀆であると思うだろう。

神が居て人類に苦難を与えたとするならば。影夫はその苦難は人類への試練であり挑戦であり、人類は団結し手を携えあつて克服し乗り越えねばならないと思う。

テランの人々は神が人類に苦難を与えたとするならば、それは罪であり罰であるとありのまま受け入れるべきと考える。

そういう違いにすぎないが、双方は分かり合えない。育った環境や思想が違いすぎるからだ。

どちらが良いとか悪いではなく、ただ違っていて、大きな隔たりがあるだけ。

(まあいい。わけが分からないし気に入らないし腹が立つけど、無理じいや強要はしちゃダメだからな。自由だ。なら義務もといいたくなるけれど、考えてもしょうがない)

考えてもきつと理解は不能だろう、彼らは彼らだと影夫は意識を戻した。

「ふう。とりあえず魔王軍の初期侵攻はどうする？　そこは基本的には変わらないと思うから、詰めれば対応はできそうだけど。じゃあ初

期侵攻についての対策プランは……」

途中からとうとうと始め、寝始めたミリアをよそに影夫達は詳細プランをつめていくのだった。

## 自覚

打ち合わせが終わった後、影夫はマトリフに一人残るように言われていた。

「それじゃ先に行ってるよお兄ちゃん」

「あ、ああ。俺も話が終わったらいくよ」

まぞっほとミリアは、マトリフの指示で洞窟の外に自主訓練をやりに出ていった。

「……………」

しばらく、マトリフは影夫をじっとみたまま無言だったが、外のふたりに声が届かないのを確認して口を開く。

「でだ。てめえはどうやって強くなる気だ？」

「どうって……………修行をつけてもらいたいんですが。まずは専門分野の魔法に関してをと……………」

「そうじゃねえよ。今のままじゃてめえらは中途半端に使えねえ奴になるだろうが。その話だ」

「そ……………そんなことはないって。俺はゆくゆくはマホイミを切り札にしようと思うし、ミリアと力を合わせれば呪い装備も扱えるし、それにもしかしたらミリアはメドロアも使えるかもしれない！ そうすれば……………」

「てめえらは魔法使いや僧侶か？ 違うだろうが。鬪気の話だよ」

じろりと睨まれ、身じろぎながら、今まで顔を背けていた問題をマトリフに突きつけられてしまう。

「てめえのやり方じゃ、暗黒鬪気の本質は引き出せねえ。今はあのガキンちよの心がどこか壊れてるから成立してるんだ。てめえが頑張れば頑張るほど、あいつは弱くなる」

影夫は息を呑む。

それはずつと影夫が目を逸らしてきた問題だった。

「かといって光の鬪気もダメだ。あのガキンちよ……………ミリアは人間を信じて守りたいと思ってないし、お前は正義って言葉に胡散臭さを感じてる類の輩だろ？ そんな奴らに光の鬪気は扱えねえよ」

マトリフの言うとおり影夫達は闇がダメになったら光ということ  
は出来ない。

彼らはヒュンケルではないのだ。

「責めてるわけじゃない。てめえがしてるのは善いことだ。ガキを魔  
道に落としたくねえって気持ちも分かる。だがな……中途半端なの  
はやめろ。破滅するだけだ」

二律背反だった。

影夫が教えられた価値観ではミリアを守り正しく導く事も、理不尽  
に殺される罪もない人達を守るのも、やるべき『正しい』ことだ。

だからどちらも取らなくてはいけなくて無意識に目を逸らしてき  
た。

「強くなるうなんて思わず、戦いをやめて安全地帯で引っ込んで。予  
言に沿ってすすめば最終的に勝てるって分かってんだ。後の事は、ま  
ぞっほ達に任せときゃいい」

「っ……………」

「いいか。皆を救って、あのガキの心も癒して、危険も避けて、強く  
なって、敵を倒したいなんぎ虫が良すぎるんだよ」

そう、言われても。影夫は決められず、捨てられない。

「だ、だからさ。それはっ、ゆ、優先順位はミリアが最上位で、残りは  
出来るだけっていう感じでやる……無理はしないから……それに、闘  
気がダメでも、た、戦いようはあるはずだし……何とかできるって」

「あ？ てめえ、それをマジで言ってるやがんのか？ ああ？」

「っ……………」

影夫は、今まで言ってきた、どっちつかずの方針に縋りつくが、影  
夫の肩を強く掴んで、本気の怒気を放つマトリフの迫力に、言葉を続  
けられなくなる。

「なんで口ごもる？ 思ったことを言え」

年上の信頼できる人間に本気で怒られている状況に直面して、影夫  
の建前は崩れ、影夫の弱気と本音が漏れてしまう。

「だ、だって、どっちもやらなきゃ……そうじゃないとダメだから……  
じゃなきゃ『正しく』ないから。俺は、まともであるべきで……でも



……」

「いいから、結論を言え。お前はとうするんだ」

「……う、うう……マ、マトリフさん。俺は、俺は一体、ど、どうすればいいんでしょうか……？」

睨まれたまま決断を迫られ、影夫は決めかねた挙句に、マトリフにすがって答えを求めてしまった。

「馬鹿が。俺はてめえの意思を聞いてるんだ」

青筋をたてたマトリフが影夫の胸倉を掴む。

「あぐっ……」

「他人の言うとおりにしてりや楽だろうよ。悩まなくていいし、上手くいかなくても他人の所為にできる。上手くいきや褒めてもらえるもんなあオイ」

影夫は心臓をわしづかみにされたような感覚を覚える。

良識ある大人ぶった姿という皮を剥がされ、子供の頃に刷り込まれた大人の言うことをよくきく良い子としての影夫が暴きだされてしまった。

「それはっ、でも……！ だからって……」

「甘ったれてんじゃねえ！ そんなままじゃ、いつかてめえの所為でミリアは死ぬ」

「っ!？」

影夫は背筋が凍りつく感覚を味わった。

ミリアが自分の所為で死ぬ？ 想像して頭が真っ白になってしまった。

「魔王軍との戦いが始まったら今までのようにはいかねえぞ」

それは、そうだ。

魔王軍はこれまで影夫達が戦ってきた怪物や賊連中とは違う。

地上を消し去るといふ確固たる目的を持って、戦いを挑んでくるのだ。

「断言してやる。多数の命か、ミリアの命かどっちかを選ぶ。そんな状況になったらてめえは決断できねえ」

「う……あ……」

「そうだよな、今までずっとめえ自身で決めてこなかったもんな。決めかねた挙句に、誰か助けてください教えてくださいって戦場で喚くことだろうよ」

そんなことはない！ と影夫は言いたかった。

見ず知らずの人間とミリアなら大事なのはミリアに決まってる。過去にずるぼんに言ったし、自分でもそう思っている。

だけど、それは自らの価値観に背くことだ。刷り込まれたルールを自ら決断して捨てることだ。してこなかったことだ。難しいだろう。

「さあ言え。てめえ自身は一体どうしたい、何をどうする？」

「うっ……ああ……」

影夫は胸のあたりを押さえて、小さく呻く。

頭の中を感情や思考がぐちゃぐちゃに飛び交い、まともに考えられない状態だった。

「ち。すぐには無理か……1日やる。答えを出しとけ」

マトリフは、呻き声を上げるばかりになってしまった影夫を突き飛ばすとそのまま洞窟の外で行ってしまった。

☆☆☆☆☆☆

「……はあ」

ぼんやりと、洞窟の入り口で影夫は器用に暗黒闘気の身体を折りたたんで体育座りをして、月を見上げていた。

「はあ……」

マトリフが洞窟を去ってから半日。

義務や他人の教えじゃない、自分の意思。隠された心の本音。

それを探して、彼はそれらしきものを見つけていた。

「そりゃあやつぱり怖いって。戦いなんか嫌だし痛い思いも辛い思いもしたくない。大体俺は努力とかしたくないんだよな。静かで乱れることがなくて苦労もしない暮らしを安全な場所で送りたいよ。原作云々は、ダイ達とでろりん達に任せておけば、原作よりも良くなるだろうし、それがいい……」

影夫にとって落胆すべき酷い本音であり、直視したくなかった醜い自分の本性であった。

自分が立派な人間とは思っていなかったが、ここまで情けないとも思っていなかった。

少しはまともなんだ、最低じゃないんだって思っていたのに、突き詰めて考えた結果炙り出されたのがこれだ。

影夫は心底情けなくため息をつく。

「情けなくて、弱っちいなあ……所詮俺の根っこはそんなところか。小市民以下の凡人崩れが人々を助けるとか滅びる国を救う云々とか間違ってたんだよ……」

その時。

「ただいまーお兄ちゃん！」

砲弾でも落ちてきたかのような衝撃で地面が揺れ、影夫は柔らかな人影に飛びつかれて地面に転がった。

「なあ……っ!？」

あわてて、人影をみると身体のあちこちに切り傷やすり傷をいっぱい作った土まみれのミリアがにしし、と笑顔を浮かべていた。

「ど、どうしたんだ？」

「ねえ聞いて！ ルーラでできるようになったよ！ これでお兄ちゃん役に立てるよね？」

「う……」

純真で疑うことを知らないように見えるその無邪気な笑顔が、今の影夫にはあまりにもまぶしく直視できなかった。

自分はこんなにも情けなくて醜いのに、彼女は自分を一片も疑っていない。

そのことが居たたまれず、堪えられない。

「いいんだ。ミリアもう……」

「え?」

「ミリアは俺なんかをすごいって言うってくれるけど、そんなことなかったんだ。もう戦うのはやめよう。デルムリン島に行つてき、住ま

せてもらえばいい。そこなら何も心配ない。痛くも怖くも何も無いから……」

「んー。お兄ちゃん？ それは、私のためなの？」

影夫は一瞬、『ああ、ミリアが大事だからだよ』みたいなきれいな言葉を言い掛けたが、ぐつと堪えて、弱い本音を正直にさらけ出した。

「ち、ちがうよ。俺が弱いから、情けない俺が怖くなったからさ。ミリアの所為じゃないんだよ」

「でも、ガーナの街の人はどうするの？」

きよとんとした表情で首をかしげるミリア。

「ごめん、俺にはどうすることも出来ない。魔王軍に知られてミストバーンが来たら俺達じゃ勝てない。同族なんだ、目をつけるだろうし、そうなったらミリアも狙われる。俺には、どうしようもないんだ……」

「……お兄ちゃん、震えてる。怖いのか？」

「え？」

きゅつと小さな身体で抱きしめられて、影夫はようやく自分の状態に気づいた。

影夫は脅え、震えていた。

「あ、れ？」

どうしてだろう。震えに気づくと、涙までが溢れてきた。

なんで、こういう涙なのか影夫には自分の感情が分からない。

これからは苦痛がない安全な場所で、家族と一緒に穏やかに暮らすのに。

それが自分の望みであるはずなのに。

「んしょつと……よしよし」

ふいにミリアが、影夫の身体をよじ登ると、頭に手を伸ばして頭を撫で始めた。

ゆっくりと優しく、安心させるようになだめるような手つきでミリアは撫で続ける。

「私が泣いた時こうしてくれたから、おかえしだよ」

「うぐ……あ……」

「家族は、お互いに助け合うもの。辛い時には泣いてもいいんだよ。側にいてあげるから。そう言ってくれたから……今度はわたしの番。よしよし……」

「あぐ……う……ミリアあ……」

小さな手のぬくもり。不覚にも影夫は涙を止められなかった。

むしろぽろぽろとこぼれて止まらない。情けない嗚咽が漏れるばかり。

何分くらいそうしていただろうか。不意にミリアが口を開く。

「お兄ちゃんは、どうしたいの？」

「おれ、は……でも……」

「私の事は気にしないで。お兄ちゃんがしたいことが、私の望みだから」

「っ……」

透明な声で純真に話すミリアの姿に、思わず影夫は息が詰まる。

「だ、だめだって……自分で決めなきゃ。俺なんか任せずにミリア自身の意思を持っていいんだ、望んでいいんだ。何でも協力してあげるからさ……」

「違うんだよ。これはね間違いなく私の願いなの。嘘なんかじゃない本当の気持ち……」

小さな胸の前に手を置き、目を閉じてミリアは自分の気持ちをゆつくりと真摯に告げていく。

「お兄ちゃんは、全てをなくした私に、ぬくもりをくれた。側にいてくれた。家族になってくれた。だから、私はどうなってもいい。お兄ちゃんの役に立ちたい」

喜んで自分を捧げようとするミリアのあまりに切なく痛々しく健気な姿に、影夫はミリアを抱きしめて影夫は涙を流した。

「お兄ちゃん？」

「俺は……」

ああ、そうだ。自分はミリアのような境遇の子をこれ以上増やしたくない。

一方的な理不尽に苦しめられる事になる人達を見捨てて逃げるの

が嫌だったんだ。

この気持ちに理屈や他人の教えは関係ない。

自分の中から自然に湧きあがってくる思いなんだから。

それと同時に、ミアアのことを大事に思っけて守りたい心を直したいとも、強く強く思っけている。

その両方が自分の望みで願いなんだ。

何のことはない。ずっと前からごく自然にやっけてきたことだ。

それがそのまま自分の望みだった。胸を張っけて、それを選べばいい。

それだけのことだったんだ。

ミアアがそれを教えてくれた。

「俺は、ミアアを守りたい。でも俺は魔王軍に苦しめられる皆も救いたいんだ。ミアアに痛い思いをさせると、辛い目もあわせると思っけて。ごめんミアア。でも、それでも……」

「いつも大事にしてくれてありがとうお兄ちゃん。大丈夫。私は壊れちゃうことになっけても、死んじやうことになっけても、後悔なんてしないから」

ミアアはきゅっくと優しく抱きっけて、そう言っけてくれた。

影夫は、彼女を巻き込む己の所業を自覚させられ、歯を食いしばる。「ミアアだけに辛い思いはさせないさ。俺も一緒に必死に頑張るよ。家族だもん」

「うん！ 私達のちーとばわあーでがんばろうね！」

「ああ。そうだな！ 魔王軍連中の度肝を抜いてやろうぜ！」

「でも、でもね……」

不意に声のトーンを落とす、ミアアが影夫の身体におでこをっけてうっむく。

きゅっくと影夫の身体に回されていたミアアの手に力が入るのが影夫にも分かった。

「もしもダメだったら、死ぬときは一緒にだよ」

最後に一言そう言っけてミアアは、顔を挙げると影夫に向けて、何の濁りもない満面の笑顔を浮かべた。

「もちろんだ」

影夫は覚悟を決めた。影夫は自分で何がしたいのか分かった。だから、やりたいようにやって、その責任を取る。

ミリアを苦しめることになる結果の責任と償いは、命と人生をかけて取ってみせると決意した。

「ミリア。これからもよろしくな」

「うん！ わたしこそよろしくね！」

影夫の言葉にミリアは満面の笑顔で受け入れ、また強く抱きついてきた。

影夫がミリアの頭をなでていると……

「あいたあつ」

「あつごめん。傷が……ホイミン」

自分のことでもいいいいっぱいだつた影夫はミリアの傷を癒してあげることができていなかった。

そのことを恥ずかしく思いながら、傷を癒して土汚れを払ってあげるのだった。

## 解答

翌朝。

洞窟の寝床で自分に抱きついて眠っているミリアの身体からすり抜け、影夫はマトリフの元へと向かった。

マトリフはとうとうと外から帰ってきたばかりなのか、精根尽き果てて憔悴した様子そのままほを引きずりながら洞窟の入り口から姿を見せる。

「さあ、答えを聞かせてもらおうか」

「マトリフさん……すみません。俺はやっぱり、皆も救いたいし、ミリアもなるべく守りたい。虫がいいのは分かっています。でも、俺は、そうしたいんです!」

「……てめえマジで言ってるのか?」

「はい。俺は見過ごしたくない。全てが終わった後、ミリアに向かって俺はお前のために世界の半分を見捨てたんだと誇ることは出来ない。ミリアのご家族には申し訳ないけど……それでも!」

そこで影夫は一度言葉を区切り、意を決して強圧的に睨みつけてくるマトリフに向かって、言葉を吐き出していく。

「俺は、ミリアを危険に晒して彼女の心の傷を抉り広げ、もしかすると壊すことになるかもしれない。何だっしてあげるつもりだけど、確実に守ってあげられないかもしれない。それでも俺は……ミリアと一緒に、力をつけて少しでも多くの人を救いたい!」

そういつて影夫は目をつぶった。

結局、自分で決められなかった時と結論が一緒だ。

マトリフに馬鹿野郎と怒鳴られ殴られるか、見放されるか。

だが、どうなっても自分で決めたことだから受け入れるしかない。

「そうか。したいようにしやがれ」

「へ?」

こっつん、と頭が軽く叩かれただけでそう言われて、きよんととして影夫が目を開くと、そこにはニタリと人の悪い笑みを浮かべたマトリ



フがいた。

「俺、結局昨日といってることが同じなんだけど……?」

「自覚してすっかり考え直して、間違いなく覚悟をきめたらうが。ならそれはお前の判断だ。何を選ぶかは関係ねえんだよ」

「え、えええ!?!」

まるで騙された気分で、混乱して呻きながら影夫は頭を捻る。

「でも、俺の選択は、青臭くってガキみたいで……都合よすぎますって!」

「てめえにや仲間がいるだろうが。ミリアもそうだし、ここで伸びてるこいつもそうだ。てめえに足りない手の数や大きさは仲間が補ってくれる」

「そ、それはそうでしょうけど……そんな他力本願な……」

「頼りきるのはダメだ。そんなもん寄生だからな。だが大人が自覚を持ってお互い補いあうなら構わねえよ。一人じゃできねえことを一緒にやり遂げるのが仲間ってもんだ」

カカカ。と笑ってしてやったりの顔を見せるマトリフ。

「マトリフさん、騙しましたね……」

「俺はちゃんと自覚しやがれていったただけだ」

たしかに影夫は今まで無自覚だった。思考や感情が誰のものでって、意識はなかった。

(自分が選り自分で動いて自分で得るか。たしかに自覚したら目の前が開けた気がする)

影夫は今まで、追い詰められないと自力で努力が続かず、うだつが上がらなかつた。

前世で、どこか腑抜けていて魅力に欠けていたのも、何をするにもどこか他人事だった主体性の無さが原因だった。

ミリアを守るためと虚勢を張っていたがそれも今までは、自分自身で決めたことじゃなくて、流されていたものだった。

だが、影夫は気付いた。

これからは考えも感情も自覚して持てるだろう。好き嫌いはあるだろうが衝動的な偏見もおそらく自覚して自分で是非を決められる。

「まったく世話かけやがる、どいつもこいつもヒョッコばかりだぜ」  
「す、すみません……」

「さて、早速選択の責任を取ってもらおうか。死ぬほど辛い地獄の特訓のはじまりだ」

「は、はいっ！」

「きりきりついてきやがれ」

引きずっていたまぞっほを床に転がし、乱暴に毛布がわりの布切れを投げつけると、今度は影夫を引きずり洞窟の外へと向かう。

あれもこれもという欲張りな選択は茨の道。

戦いの中で、なるべく多くを拾うためには、何よりも力が要る。成長が必要で、そのために厳しい努力がいる。

だけど、自分でしつかり決めたことだから、影夫には前世とは違ってやり遂げられる気がしていた。

☆☆☆☆☆☆

「12、13、14……」

「ぐ、う、ああああッ……!!」

大粒の汗を大量に流しながらミリアが全身から魔法力そのものを噴き上がらせ、マトリフとぶつけ合っている。

ミリアは劣勢ながら必死に押し込められてくる魔法力を阻もうと押し返す。

「17、18」

「きやあっ……!?!」

悲鳴とともに吹き飛ばされたミリアが地面を転がった。

息を荒げて立ちあがれないほど疲弊しているが、その近くにはまぞっほも転がって疲労困憊の状態だった。

「魔法力の総量不足だ。もつとしつかりメデイーションをしやがれ」

「うん……ごめんなさい」

「よし、次だ」

「が、がんばってね〜」

「いよっしゃー!」

ひらひらと震える手を振って、エールを送るミアに、グッドサインで応え、影夫がマトリフの前に立って相對する――

「はあああつ……!」

「22、23……」

「ぐっ、ぎぎぎぎぎっ……!」

影夫は目を細め、口をきつく閉じて、黒い影の身体からゆっくりと靄を放ちつつ、魔法力を放出して、マトリフと競り合う。

「27、28、29……30」

「あがつ……!?!」

影夫も吹き飛ばされ、ミアの隣に転がる。

「30で気を抜いたな? 実戦なら死ぬぞ」

「は、はい……すみません」

だらりと影の身体を伸ばしながら、影夫も息も絶え絶えにバテバテになっていた。

「つたくてめえら揃いもそろって情けねえ。100近い俺相手に3人がかりでへばってどうする」

「くそっ、まだまだっ!」

「私もっ!」

「ワシも、寝てはおられん……!」

「威勢だけはいいな。まとめてかかってきやがれ」

その後、太陽が頭上に昇りきるまでの間、影夫達は3人がかりで何度も挑んだが、魔法力がからっぽになるまで結局歯が立たなかった。

さすがに終了間際にはマトリフの息も上がってきていたが、それだけだ。

想像以上の差があるのだと痛感した3人だった。

食事休憩を挟んで午後には。

「おらおらッ、ちんたら走ってんじゃねえよ!」

「ひいつ、はっはっはあっ……!」

休み暇は与えねえとばかりにまぞっほがマトリフによってアカイライに追い掛け回されて走り回っていた。

「さっさと逃げねえと切れ痔になっちまうぞー!」

マトリフがアカイライに蹴りを入れると、真空呪文が放たれてまぞっほのローブをすぱすぱと切り裂いた。

あわてて、まぞっほが速度を上げて、必死に走る。

「ひっ、ひいー!? し、心臓があーっ、はあっひいつ、あ、兄者あっ、もうっ、死んでしまう……!」

「ケケケ。死ぬ寸前にちやあんと回復してやる。心配せずに何度でも死に掛ける。それっ! 走れ走れ」

「ひいひいーっ!!」

60を超える老人にもポップにやらしたような恐ろしいしごきをするマトリフ。

ソレを見てあまりのドSぶりに引いていた影夫とミリアだが、彼らもすぐに終わりの無い扱きに苦しむ羽目になった。

「グルウツ! ガウ! ガアアツ!!」

「くっ、はぐっ……っう!!」

「ガアアアツ!!」

「おっ、ぐっ、ふっ、ぐぎいつ」

ミリアと影夫はとうとうけつぐまの攻撃をひたすら防ぎ続けるということをやらされていた。

反撃どころか呪文の使用も一切禁止で、避けるか防御を延々とさせられる。

最初は身体を大きく動かしてかわしていた彼らだが、そのうちに足が思うように動かなくなり、防御を続けていくがダメージの蓄積で堪え切れなくなり、またのろのろと攻撃を避け始め……それを繰り返していった。

限界を迎えるか集中が切れたところで、ふたりは無防備にけつぐまの爪を無防備で受けかけ……遠くから飛んできたマトリフのべ

ギラマで救われた。

「てめえら一瞬諦めたな？ 絶対に気持ちを切らすな。体力が尽きたら気力で動け。指一本でも動くうちは諦めるな」

「は、はひ……」

影夫達3人は、身体が限界を迎えるたびに回復呪文で強制的に復帰させられ、精根尽き果てて気絶するまで扱かれ続けるのだった。

そして、夕方。

影夫とミリアとまぞっほは3人横に並んで瞑想（メデイテーション）に励んでいた。

「……………」

「……………」

「……………」

3人が地面に頭をつけてうんうんと唸っていた。

ちなみに、影夫だけは重さがあまり無い為、頭に重しをつけられて固定されている。

この修練は油断すると眠りそうなイメージがあるが、実際は集中し忙しいために眠っている暇は無い。

メデイーションとは魔法力を練り上げ、作り上げた魔法力の塊を操作して体内を巡らせた後、雲散させてはまた練り上げることというのを何度も繰り返すものであるから、常に忙しく集中が必要だ。

練度が上がれば、呪文の制御の精度を高まり、呪文の溜めも短くなり、魔法力の総量も増える。

魔法使いや僧侶にとってダイレクトに力を高められる修練である。地味な修行がどちらかというと苦手な影夫達だが文句も言わずにこなしていくのだった。

日が暮れると、軽い座学の時間を挟んで食事の時間が始まった。

「うえ……もっつ、うう……食べる、自分で食べるから兄者離してくれ！」

「ちっ、最初からぐだぐだ言わずに食いやがれ」

疲労のあまり吐き気で食欲がないまぞっほは、イモリの丸焼きや、各種薬草のごった煮込みのような、身体には良さそうだけど普段でも食べたくない薬膳飯を無理やりに食わされていた。

辟易する美味しくない飯をもぞもぞと無理やり押し込むように食べるまぞっほだが、彼の目の前にいるふたりは様子が違う。

「んぐんぐっ、にがい！でも美味しいなあ」

「くうーまずいっ！もういっぱい！」

量だけはたんまりとある薬膳飯を猛烈に食べ、やたらと苦い薬草青汁や、エグみが凄いはずのどくけし茶をがぶ飲みしている。

「若さじやのう」

「てめえも、昔にまともになってりや若いうちに修行できたんだ」

「うう、面目ない……」

「ふん。まあそれでも手遅れじゃねえ。クロスの世界に生まれてなくてよかったな？ 回復呪文がないんだとよ。無茶な修行をしたらそのままお陀仏だ」

そう、原作で言及があつたが、消耗した体力や疲労の除去も回復呪文で行うことが出来るのだ。

もちろん、回復呪文で筋肉の疲労や体力回復をしても肉体はちゃんと頑強になっていく。超回復を損ねることは無いようだ。

まさに魔法である。

「飯食つたらさっさと寝やがれ」

自分の分の飯を食い終えたマトリフは、ド力食いをする影夫とミリアに言い捨てるとさっさと自分の寝床に引っ込むのだった。

「ふうー、つたく年寄りにや堪えるぜ……」

3人を同時に鍛えるマトリフの疲労も相当だ。

部屋に籠るなりベッドに寝転ぶ。

「ちっ……」

いつかアバンに言われたか。と昔を思い返していた。

『あなたは、口では冷たいことをいうが、心根は優しい方です。弟子でも育ててみればよいのでは？ きつといい師匠になると思いますが……』  
その時は、何を馬鹿なことを吐き捨てて否定したものだ……忌々しいがアバンが言ったとおりだったようだ。

パプニカの国王の相談役を辞めさせられた時には、もう誰かとするむことはないと思っていたが……3人も弟子が出来ちまうとは。

まぞっほに関しては、師匠からの預かり弟子みたいなものだが。

「世界の命運が掛かってんだ、しょうがねえか……ふん」

弟子達のまつすぐな姿や成長するさまを見てみると、悪くはないと思っている自分があるが、素直になれないマトリフは眉を顰めて目を閉じるのだった。

## へろへろと弟弟子

影夫達3人がマトリフに扱かれている頃、へろへろは故郷リングイアに帰ってきていた。

彼が今居るのはリングイアの王城の一角にあるリングイア戦士団の詰め所。

へろへろはそこで、一人の男に土下座していた。

「バウスン様、どうかお願いいたします！」

その男はリングイアの猛将バウスン。

リングイア戦士団を纏める団長であり、へろへろの師匠である。

「今更に戻りだっ!? あなたには恥というものがないのか！」

そこに冷たく投げかけられた言葉を発したのは、バウスンの息子のノヴァ。

へろへろとは、バウスンの元で修練に励んだ兄弟弟子の間柄である。

リングイアでは精強な戦士を確保するため、広く門戸を開いている。

へろへろはリングイア戦士を志して、バウスンに弟子入りしていた事があったのだ。

「よくも戻ってこれたものだ！ あなたを慕っていたボク達を捨て、期待を裏切って逃げた癖に!!」

「……もう一度、俺に修行をやり直させてください！」

へろへろは激しく責めたてるノヴァに一切の反論をしない。

周囲のリングイア戦士達からの厳しい威圧の視線も黙して受け入れ、辛そうに身を震わせながらも、彼はひたすらにバウスンに懇願し続ける。

「……何故戻ってきた？」

將軍という立場や王族貴族達とのつながりから、バウスンはベンガーナの勇者でろりんの一行について詳しい情報を知っていた。

バウスン自身としては、修行を投げ出して逃げた弟子が、どうやら一皮剥けて活躍していることに安堵の気持ちはあっても、恨みやわだ



かまりはなかった。

だから、敢えて責められることが分かっている、戻ってきた彼の真意が気になった。

「けじめ、です」

「……………」

「過去から逃げていては、前に進めないと思いました。未来を切り開くために今度こそやり直したいのです。どのような扱いでも構いません、どうか！」

頭を地面に数度擦りつけたへろへろは、全てを言い終わるとゆっくりと下げた頭を上げ、覚悟と決意をこめてバウスンを見つめる。

ずっと戦士団を率いてきたバウスンには、彼の本気が伝わった。

勇者PTの一員として栄達した彼が、ここまでしている。例え奴隷のように扱おうが、全てを受け入れる覚悟もあるのだろう。

ならば、受け入れても良い。バウスはそう思った。

「何を勝手なことを！」

「恥を知れ！」

「ノヴァ様のお気持ちを考えてことがあるのか!!」

しかしへろへろの本気と覚悟はバウスン以外には伝わらない。

真つ先にノヴァが激昂し、周囲の戦士団員達も追従する。

へろへろの言動は、単なる身勝手にしか彼らには感じられなかったのだ。

「……………ならば、ノヴァに勝て。それが出来れば認めよう」

「父上!? ボクにこんな臆病者と戦えと? ボク達を裏切った奴と戦

う意味なんかあるもんか!!」

特にノヴァの怒りは大きい。年齢こそ違うが、兄弟子であるへろへろとは、とても親しく付き合いがあったがゆえに。

だからこそ、彼はへろへろを実の兄のようにしていたし、へろへろも彼を本当の弟のように思っていた。

なのに、ある日突然へろへろは何も告げずに出奔したのだ。言葉ひとつで、許せることではない。

「へろへろ。ベンガーナで勇者一行をやっているそうだな」

「どうせでまかせに決まっている!!」

ノヴァがへろへろに向ける怒りと疑いは深い。

その様子にバウソンは小さくため息をつく。

「ノヴァ。お前も勇者を志すリングア戦士ならば、己の腕で真実を見極めてみる」

「くっ……いいでしょう。こんな奴、10秒で這い蹲らせてやる!!」

そして、練兵所の広場へと移動したノヴァとへろへろは、距離をとって向かいあった。

それを見届けるバウソンや戦士団員達は少し離れて見守っている。

「父上、さっさと合図をー!」

「……はじめ!」

「一撃で終わらせる!」

声がかかると共に、ノヴァは訓練用の木剣に闘気を纏わせ、へろへろめがけて一直線に切りかかる。

へろへろの間合いに踏み込んだと同時に、ノヴァから袈裟切りの一閃が放たれる。

「はあああっ!」

だが。年齢にそぐわないほどの鋭い動きと強い力によるその斬撃は……へろへろによって容易く弾き返された。

「えっ?」

呆けたような声が試合を見守っている戦士達から漏れる。

彼らが予想したのはなすすべもなく打ち倒されるへろへろの姿であったが、地面に転がっているのは戦士団で一番の実力を持つノヴァであった。

「闘気剣を使えるのか!?!」

へろへろの訓練用木剣にはノヴァよりも力強い闘気の纏わされていた。

自慢の怪力で振り払うように薙いだ一撃が、ノヴァの剣と身体を弾き飛ばしていたのだった。

「ぐっ……馬鹿な!」

ノヴァはへろへろが逃げた後もバウスンの下で鍛錬を続けていた。彼はけつして手を抜いたりサボっていたわけではない。

だが、戦士団の中で自分のみが飛びぬけて実力が突出しているという状況では増長と慢心が見えるようになっていた。

それに加えて、兄のように慕っていたへろへろが逃げたことも彼を歪ませていた。

そのことすらも、自分が強すぎたからだ。という思い込みにも繋がっていて、ノヴァの成長速度は間違いなく鈍っていた。

それに比べて、へろへろは違う。

たしかに彼が逃げた後、ノヴァとの実力差は開くばかりであった。

しかし、でろりん達仲間と出会い、ミリアや影夫の師匠となったことで大きく成長し、ギリギリの死闘をも乗り越えた。

そのことが彼を完全に生まれ変わらせていた。

修めることができなかった闘気の技術も独自で磨きをかけて扱えるようになっていたし、ミリアやでろりんと立会いや訓練を繰り返すことで武技も身に付けていたのだ。

特に大きいのが実戦経験だった。

ノヴァにはまだそれがない。

だからこそその力量差だった。

「何でだ！ 何でボクより強い!? 逃げ出したくせに！ 裏切ったくせに!!!」

「……すまない」

「認めないっ！ 認めないぞ！ ボクは強くてお前は弱い！」

すぐに立ち上がり、木剣を拾い上げたノヴァが闘気の勢いを先ほどよりも激しく切りかかる。

小さく、大きく、鋭く、鈍く。

さまざまに切り替えて虚実を混ぜて斬りかかる。

だがすべてをへろへろに受け止めいなされ、攻勢の勢いが悉く殺されてしまう。

「逃げたくせに！ 裏切り者の臆病者のくせに!!!」

ノヴァはさらに怒りを爆発させて必死に斬りかかるが、大降りになった攻撃はさらに軽くないなされ、逆に反撃の蹴りをうけて吹き飛ばされてしまう。

「ぐっ……くそっ！ ヒヤダイン！」

追い詰められたノヴァは、突如闘気剣を床に突き刺したかと思うと両手をへろへろに向けて突き出し、高度な氷系呪文を打ち放った。

「ボクの勝ちだ！」

猛吹雪に飲まれて姿が見えなくなったへろへろを見たノヴァは勝利を確信する。

氷系呪文で動きが鈍った相手を攻めるのが彼の必勝パターンである。

再び手にした闘気剣を構えたノヴァが斬りかかろうとしたその瞬間。

「はあああっ……闘気砲ツ!!」

へろへろが両手を組んで闘気を高め、吹雪にぶつけるように打ち放つと、ヒヤダインの吹雪は勢いを乱されて、相殺されるように雲散してしまった。

「な、なんで……なんでだよ」

ノヴァの自尊心が打ち崩されていく。

へろへろへのわだかまりと怒りをぶつけるように磨き続けて身に付けてきた呪文と力。

それを、今更戻ってきて上回るだなんて。とノヴァは憤りが収まらない。

「そんなにつよいののに何で逃げたんだ！ 何でボクを裏切ったんだよ!?!」

だが、それと同時に彼の冷静な部分が、かたくなに怒りを燃やす心に冷水を浴びせてくる。

彼が逃げたのには何か事情があったのではないか。

心を入れ替え、誤りを認めているのなら許すのが勇者を志す男としての筋ではないか。

「くそっ！ 認めない！」

へろへろと剣を打ち合わせていると、彼の素直で愚直な心と誠意が、否応なくノヴァに伝わってきてしまう。

裏切りを許せないのに、戦士としての自分が認めてしまいそうになってしまう。

「……………ここまでか」

「まだだ！ まだ認めるもんか!!」

ノヴァは勝利判定を言い渡そうとしたバウスの言葉を振りきって、全身から闘気を激しく噴き上がらせながら、天高く跳躍する。

彼が放とうとするのは未完成ながらも最強の威力を誇る彼の必殺技。

「勇者アバンの技すら上回る、最強の一撃をくらえ！」

「さてノヴァ！ その技はまだ……………」

バウスの制止に耳を貸さず、ノヴァは空中で大上段に構え、闘気剣を最大に噴き出させながら最強の一撃を繰り出す。

「ノーザンツ、グランブレードツ!!」

ノヴァが爆発的に放出した闘気量はへろへろを上回っていた。

しかも、空中から全力で振り下ろしていることよって、その威力は増している。

どう考えてもへろへろに打つ手はない。

「はあああああッ！」

対するへろへろは、最大限まで出力を高めた闘気剣を、剣先を地面に向けた斜めの構えで受け止めた。

ノヴァの絶技をまともに受け止めていれば、へろへろは負けていた。

「受け止められなければっ、受け流せばいい！」

「馬鹿な！」

だが、斜めに傾けた闘気剣にぶちあたったノーザングランブレードは振り下ろされた勢いのまま地面へと受け流される結果となる。

ノヴァの切り札は地面を抉り砕いて大きな穴をぶちあけたが、へろへろに傷はない。

「ぐっ！ どうして!? ……こん、なあっ……………」

「ノヴァ……すまない」

未完成な技ゆえに、闘気を放出しすぎて気絶したノヴァをへろへろが受け止めた。

「へろへろ」

バウスンが歩み寄ってへろへろの肩を叩く。

その顔は穏やかな笑顔だった。

「認めよう。お前は再び俺の弟子だ。もつとも教えることはそう多くなさそうだがな」

「はい！ 申し訳ございませんでした！ 不肖の弟子ですがよろしくお願いいたします！」

「では早速だが雑用をしてもらおう。馬鹿息子を医務室まで運んでくれ。場所は分かるな？」

「はいっ！」

へろへろは軽々とノヴァを持ち上げると医務室へと運んでいった。

☆☆☆☆☆☆

医務室。ベッドに横たわるノヴァは、額に置かれた冷たいタオルの感触で目を覚ました。

「へろへろ……兄さん？」

「大丈夫かノヴァ」

「そっか。ボクは、負けたのか……」

「ああ」

「また、弟子に戻るの？」

「師匠が認めてくれたからそうなる。嫌、か？」

「一つだけ聞かせて欲しい。どうしてあの時、逃げたの？」

「怖かったんだ……俺は」

へろへろは周囲の期待が怖かった。

あの頃の彼にはどうしても周囲が向けてくるような期待に自分なぞが応えられない気がしなかった。

そのプレッシャーは大きく、天賦の才を持つノヴァは日に日に力を

つけてくることに恐怖した。

素直に純粹な尊敬の目を向けてきたのはノヴァだけではない。

他の戦士達も、寡黙で実直で不器用ながら優しさがあるへろへろのことを理想の戦士として見ていたのだ。

違うのに。本当の自分は、こんなに臆病だし欲深いし気が小さいだけの小物なのに。

へろへろは周囲の目と本当の自分の落差に懊悩とする日々を送っていた。

それでも、へろへろが弟子達の中で最強であるうちはどうにか取り繕うことが出来ていた。

しかしある日、ノヴァがついにへろへろとの模擬試合で、彼を負けさせてしまった。

それが破局だった。

その日は偶然、ノヴァの誕生日であったので、へろへろが花を持たせて勝ちを譲ってくれたとノヴァは思っており、戦士団員達も同様だった。

しかし本当は違った。その時のへろへろは掛け値なしの全力だったのだ。

次に戦えば確実に負ける。そして今度はノヴァも実力で上回ったと知るだろう。

皆に本当の自分が露呈してしまう。親しい人達に失望され蔑視されるてしまう……へろへろはそれが凄く怖かった。

「だから、逃げてしまった……」

へろへろはノヴァに包み隠さずに懊悩と恐怖、自分の弱さを全て語った。

「失望なんて……するはずなのに」

「ああ、今ならば分かる。すまない」

そう、たとえノヴァに完敗しようとも、別に何でもなかったのだ。

ノヴァも敬愛する兄を越えたと喜びこそすれ、失望や蔑みなんて考えもしないはずだ。

そんなことすら分からなかったのは、ずっと自分のことしか考えて

いなかったからだろう。とへろへろは過去を振り返って素直に認めることができた。

「負けても、次勝てばいいだけだしな」

「そうだよー。兄さんはそんなこともわからなかったの？」

昔はとでもそんなこと考えられなかったけど、今ならばへろへろは前向きに考えることができた。

「情けなくてすまん。でも、もう大丈夫だ」

「まったく。そんなに不安で悩んでいたなら、言ってくればよかったのに」

「あの時は、自分の弱さや情けなさを見せる勇気が、なかったんだな……」

ぽりぽりと禿げ頭をかきながら自らの過去の失態に苦笑するへろへろ。

「なのに今じゃボクより強くなって、勇者一行の戦士様をしてるなんて……ずるいよ」

ノヴァは、そっぽをむいてむくれながらつぶやく。

「いや、ノヴァはリングアイアの勇者なんだろ？ そっちのほうがすごいじゃないか」

「うぐっ……」

ノヴァは自分こそが勇者であると常々自称していた。

戦士団の中で最強であったから、周囲からもそのように見られ、王や国民達からもちゃんと認められていたので、別に嘘ではない。

それでも、『ボクは勇者なんだぞ！』と名乗っていい気になっていた自分のことを冷静に思い返すと、ノヴァはとても恥ずかしくなった。

何せ無理をして使った未完成の切り札を使っても、へろへろに負けたのだ。

所詮、自分などはまだまだ未熟者、上には上がいるということだ。会ったことはないけれど、勇者でろりんやミリアという人は、もっとすごいのだろう。

自分などはまさに、井の中の蛙にすぎなかった。

それを思い知らされたのに、ノヴァ自身、不思議と気分はよかった。



張り詰めていたものがすつきりとなくなった気がしたのだ。胸がすつと軽くなつて、自然体に戻つたような爽快感が彼の心身にあつた。

「あれは自分で勝手に吹聴してただけだよ。勇者だなんておこがましかつた。ぼくなんてまだまだなんだから」

「それでも、皆がちやんと認めてたなら立派な勇者さ」

「あまり苛めないでよ。本当に恥ずかしいんだから」

「はは、すまんすまん」

今日、ノヴァは見失つていた目標を再び見つけた。

大きな背中の優しくして強い兄。自分が憧れた、目指すべきその姿。

「これからまたよろしく。兄さん」

「ああノヴァ。ほんとにすまなかつた。こちらこそよろしく頼む」

目指すべきへろへろ兄が帰ってきた！

その記念すべき日に寝てなど居られない。

「ようし、今日中に必殺技を完成させるぞ！ 兄さんも手伝ってくれるよね？」

「ああ、もちろんだとも！」

ノヴァはさつそくベッドから起き上がり、へろへろと共に鍛錬に励んでいくのだった。

## でろりんの師匠

「まさか師匠が……なあ」

修行をやり直すにあたり、生まれ故郷であるロモス王国に戻ってきていたでろりん。

しかし、彼は師匠の名前素性を何も知らなかった。

分かるのは、彼がロモス王の招聘を受けるほどの高名な戦士であることだけ。

そこでまず彼は、ロモス王シナナに謁見を願い、師匠について教えてもらったのだが、その結果——でろりんは驚愕することになった。

「勇者アバンPTの一人、戦士ロカとか」

でろりんは思い返す。

彼がまだミリアくらの年齢だった頃に、ロモスの王が主宰した『次世代の勇者を育てる』という催しで、指導をしていた男が彼の師匠である。

師匠は分かりやすく明けて透けで、意地っ張りで直情的でつかい子供みたいな人だった。

すごく強い人だが、かつて世界を救った勇者アバンPTメンバーの威厳はあまりないように思う。

クロスの話では、大魔王を倒す未来の勇者ダイPTメンバーの父親でもあるらしい。

「そんな凄い人の弟子に目をかけられてたとか、ありえねーだろ」

大勢のガキンチョに混じって、勇者になるんだ！なんて言って稽古ごっこをしていただけだったのだが、何故か師匠に気に入られて、すげえ勇者にしてやる！とスカウトされた。というのが弟子入りの経緯だった。

舞い上がったでろりんは、即日弟子入りを決めて、修業を受けることになった。

自分が特別に目をかけてもらえている、ということは、当時のでろりんにも分かったので、師匠の守備範囲外だった呪文については独学で修めて、楽しく前向きに努力を重ねる日々を送っていたのだが。

それも長くは続かなかつた。師匠の扱きは日に日に……際限なく過酷になっていき、死にそんな修行を嬉々として次々に課されていくようになってしまう。

ついにライオンヘッドと戦わされるに至って、恐怖心が爆発したでろりんは、師匠の下から逃げてしまった。

「慕っていた師匠を信じきる勇気さえあれば……」

でろりんは、あの時師匠を信じて逃げなければ。と思う。

命が危なくなったらちゃんと助けてくれただろうし、たとえ逃げてしまった後でも、すぐに戻って謝っていれば、きつとゲンコツ一発で許してくれたと思う。

信じる勇気、立ち向かう勇気、怒られる勇気。

どれか一つでいいから勇気があれば、師弟関係は終わらなかつただ。

そのくらい師匠は、厳しいけど、いいひとだった。

そのことは少年のでろりんにも分かつていたはずなのに、逃げてしまった。

「ま、そのおかげで仲間に出会ったし弟子も出来たから、何が幸いするかわかんねーな」

人間万事塞翁が馬。そう考えることが出来る余裕と勇気が今のでろりんにはある。

「……つと、こころか」

師匠との思い出、昔の修行時代を思い返しているうちに、でろりんは師匠が住んでいるというネイル村へと到着した。

「すまん。このあたりに口力って人はいないか？」

早速彼は、最初に見かけたピンク髪の少女に声をかける。

「えと、あなたは誰ですか？」

「あー、俺はでろりん。その、昔口力師匠の下で修行をしてた者で、その、久しぶりに、師匠にお会いしたくて……」

じとつとした目を向けてきて警戒している様子の少女を相手に、でろりんは、思わずしどろもどになってしまう。

「父さんのお弟子さん？ あ、私はマアムって言います」

「師匠の、娘さん？ それで、し、師匠はいるかな？」

「……父さん、病気なんです」

「病気!? うそだろ……あんな元気の塊みたいな人が。医者とか神官に見せたのか？」

マアムの言葉を聞いてでろりんは愕然とする。

殺しても死なない、そう思ってしまうほど強くて頑丈で生命力に溢れた人だったのに。

その人が床に臥せっているなんて信じられない思いだった。

「母さんの回復呪文でも、おじさんが作ってくれた薬でも治らなくて、先生もお手上げみたいで……もう、あまり長くはないって……」

「くそつ。俺は遅すぎたのか。そんな重い病気じゃ、俺が押し掛けちやまずいよな……」

さらに告げられる言葉とただならぬ様子にでろりんは悲痛な表情を浮かべる。

これじゃあ師匠に修行をつけてもらうどころの話じゃない。それどころか、会うだけでも負担になるかもしれない。

これ以上師匠に迷惑は掛けられなかった。

「伝言だけ、頼めるか？」

「ううん。父さんに会えるか聞いてみますから、ついてきてください！」

マアムはそう言って走り去り、でろりんはその後を追うのだった。

☆☆☆☆☆☆

ベッドの上で上半身を起こしている口力。

心配げなレイラが、夫に寄り添っており、彼を抱きかかえるようにして半身を支えて、付き添っている。

「……………」

でろりんは、師匠のその弱弱しい姿に、部屋に入るなり呆然と突っ立ってしまい、何の言葉も出せないでいた。

「よおでろりん。でつかくなりやがったなあ」

そんなでろりに、口力は二カつと笑いかけてくる。

弱っている身体の様子と違い、彼の仕草やらに怒りも悲壮感もない。昔のままの明るさと口調のままだ。

「……し、師匠。お、俺……」

「ま、座れよ」

立ち尽くすでろりに、口力はベッドの傍らに置かれた椅子をすすめる。

「お前がいなくなった時は、今のママムくらいの歳だったか？ 時が経つのは早いもんだ」

懐かしむように目を細めて、手を伸ばしてでろりの頭を乱暴にがしがしと撫でる。

懐かしい師匠のごつごつとした手で撫でられ、泣きそうになるのを堪えて、でろりんは口を開く。

「師匠、病気って……」

「ああ。どうも不治の病ってやつらしい。詳しい説明なんかは、マトリフのヤローに聞いたが、忘れちゃったなあ」

でろりんに対して、欠片も怒っていない穏やかな様子の師匠に、でろりんの感情が爆発してしまう。

「……何で」

「ん？」

「怒らないんですか!？ 俺はっ、師匠の期待を裏切って、逃げたのに!!」

言った。言ってしまった。でろりんは不安でいっぱいになりつつも、浴びせられるのが罵声でも拳でも受け入れようと目をつぶる。

「あれか……すまん、俺が悪かった」

「え？」

だが、でろりんにかけられた声は予想もしてなかった謝罪の言葉。でろりんが恐る恐る目を開くと、頭を下げている口力の姿があった。

「お前の才能に目が眩じまった。すげえ奴をみつけたってな。いつかアバン越えも夢じゃねえぞって思ったんだよ」

「そんな、俺なんて。どうにかついていくのが精一杯で、泣き言や弱音ばっかりだったし、あの時も泣き喚いて逃げた！」

「ありゃわざと無茶苦茶をしてたんだ。それでも、お前はついてきてみせた。こいつは一体どこまでいけるんだ!? って舞い上がっちゃまった。お前が追い詰められてるなんて、気付きもせずにな。師匠失格だ」

「…………でも」

『無理と無茶は違いますし、勇気と無謀も違いますよ！』なんて、アバンのヤローにもしこたま怒られてなあ。俺も心底後悔した。すまなかった。でろりん」

「師匠……俺、俺……！」

でろりんは、涙が流れ出るのが止まらなかった。

尊敬して慕っていた師匠から赦されるどころか謝ってもらえた。

ロカの元から逃げてからずっと溜め込んできた、罪悪感と後悔を洗い流すかのように、涙を流しながらロカに抱きつく。

「俺！ ずっと、師匠にあう勇気が無くて……怖くて……！」

「俺もだよ。家族や村のことを言い訳にして、追いかけてなかった。でけえ才能を潰した現実を見るのが、怖かったんだろうな……」

「そんなっ、俺の方こそ……」

師弟はそのまましばらく、互いに謝り気持ちを語り合った。

しばらくして落ち着いたでろりんは、椅子に座って、充血した目で恥ずかしげにしている。

「なあでろりん。俺のことをまだ師匠と思ってくれるなら、教えてくれないか」

「…………？」

「今までどうしてたか、今何をしているのか……聞かせてくれ。その目をみる限り、期待できそうだからよ」

「はいっ…………！」

でろりんは語った。

師匠の下から逃げ、それでも冒険者として最初は勇者を目指そうとしたこと。

しかし臆病と挫折の末に停滞したこと。

けれども弟子志願者や仲間との出会いで変わるきっかけを得て、仲間達と死力を尽くして協力しあい、勇者と呼ばれるようになったこと。

「でろりんは……俺なんかじゃ勿体ないくらいの子よ」

レイラは静かに夫に寄り添いながら、優しい笑みを浮かべて、ロカとでろりんを見つめた。

「よかったわねあなた。本当に……」

病魔に冒された夫が、心からの穏やかな笑みを浮かべていることがとても嬉しかった。

育てそこねた弟子のことをロカがずっと気に病んでいることを知っていただけに、夫の心残りがなくなっただけに深く安堵していた。

「アバンの奴に聞かせてやりたいぜ。俺が先に次の勇者をつくってやったぞってな。がはは、うぐっ……がはっ!？」

笑おうとしてロカは、胸を押さえて顔をゆがめ、咳込みだした。

でろりんが来て数時間、話し込んでいたのだ。疲れてしまったのかもしれない。

「し、師匠もういいですから、寝ていてください！俺、また出直しますから……」

「ぐっ……待てっ」

気遣うでろりんが伸ばした手を掴み、ロカが真剣な表情でじつと見つめる。

「……でろりん裏庭へ出ろ。技を、教えてやる」

「え?」

「あなた? その身体じゃ……」

「すまんレイラ。コイツを仕上げとかねえと死んでも死に切れねえんだ。これだけは譲れない」

「……分かりました。でも私もお手伝いしますからね」

「ああ……頼む」

そこに、部屋の外で覗いていたのか、マアムが飛び込んできて、ロ

カの前へと駆け寄ってきた。

無理をしようとしている父の身を案じあまり、涙目でロカに抱きついている。

「父さん！ 大丈夫？ 無理はやめてー！」

「悪いなマアム。こりやあ男のけじめってやつだよ。心配いらねえから、父さんの超カッコいいところみとけ。な？」

「うん……」

ロカはマアムの頭をなでると、レイラに手伝ってもらってゆっくりと立ち上がる。

立った直後はふらついているものの、ベッドの脇に置かれた戦士の魂である愛剣を持ってぎゅっと目をつぶると彼の身体の震えはピタリと止まる。

「うしっ！ 気合入れていくぜ」

目を開いた時には、ロカは歴戦の戦士の顔へと変貌していた。

「やっぱり無茶はダメです師匠……万が一があったら……」

「ダメだ。俺の戦士としての経験と人生をかけて出来上がった技なんだよ。これを教えてねえうちはロカ流免許皆伝はやれねえぞ」

「でも……」

でろりんとしては、そこまでしてくれる師匠の気持ちは涙が出るほどありがたかった。

しかし、無茶をさせた結果、最悪のことになったりしたら、レイラやマアムに申し訳が立たない。

「諦めて、師匠のカッコつけに付き合え。師匠の無茶振りに応えんのは弟子の義務ってやつだぞ」

「っ。お願いします!!」

「おう。いい返事だ」

こうして、でろりんはロカから秘技の伝授をされ、やり残していた修行をすべて終えるのだった――



## パプニカの賢者

ずるぼんは、パプニカのとある寂れた屋敷の中で一人の青年と相對していた。

その男の名は賢者バロン。

パプニカで新進気鋭の賢者として名を馳せていた、人物である。

「何の用だ？ 俺は暇じゃない。早く言え」

彼は幼子の頃より魔法の天才と称されて周囲に過度の期待をされながらも、見事応えて賢者として堂々たるエリート街道を歩んできた。

しかし今では、誰も話題に上げず、細々と実権のない名誉職に甘んじる日々を送っているだけの男である。

「お願い！ 私に修行の続きをして!!」

彼は、ずるぼんの元師匠であった。

声望を欲しいままとしていた頃。彼は多数の師弟を取っており、ずるぼんはその中の一人だったのだ。

「断る。帰れ」

しかし、バロンはずるぼんを冷たく見据えて言い放つ。

その瞳は冷たく剣呑なものが光っていた。

彼は見るからにやつれていたが、目だけが黒くギラついている。

今彼は逃げた弟子に関わる余裕などはないのだ。

心に秘めた野望の為に。

それは、ずるぼんにも分かっていた。

この男は、近い将来にパプニカ王家に牙を剥く予定なのだ。

それでも、ケジメをつけて前に進むため、怯むわけにはいかなかった。

「力が……力が欲しいの」

「ほう？」

目前に迫る大きすぎる脅威と世界の危機。

仲間とともに立ち向かう為に、彼女は力を蓄える必要がある。

そして本心から、切実に力を望むずるぼんの言葉はバロンに響い

た。

彼も、激しく力を欲しているが故に。

「今の私は僧侶としては途中半端なの。基礎が完成してないから。特に攻撃呪文ね。全然威力を引き出せていないのよ。当然だわ、修行途中だったんだもの」

「固執してた回復呪文はいいの？」

「ベホマはもう使えるわ。ザオラルも契約は済ませてある。あとは力量さえ使えば使えるようになると思うから当面はいいわ。それより今必要なのは攻撃呪文の力なのよ」

「ふん……」

バロンは、無精ひげの生えたアゴを撫でながら、ずるぼんを一瞥する。

彼は疑問を覚える。

ずるぼんは、力を選び好みする上に、どうにも腰の引けていた感じがあったのだが、今は気概に溢れるどころか、裏打ちされた自信すら感じられる。

弟子時代には虚勢は張つても、自信には欠けていたはずだ。

(何かあったか。俺の知ったことではないがな)

表舞台を去り、今では館に半ば籠りきりになっているバロンはずるぼん達の活躍を知らない。

彼女が、成長していることも知らないのだ。

「俺は忙しい。今パプニカには三賢者という優秀な奴らがいる。そっちへ行け」

「実は、ね。マホイミ……使えるけど……不完全なのよ。完成させたと思って思ってるんだけど……何か知らない？」

「マホイミだど!? 伝説の失伝呪文だぞ!!」

ずるぼんが、ぽつりと漏らした言葉をきいて、バロンの態度は一変する。

マホイミは古の偉大な僧侶が操ったという伝説の呪文である。

それはバロンが昔会得を試みて失敗していた呪文でもあった。

だからこそ聞き逃せなかった。

「本当よ。本来の契約などはしてないからマホイミというよりは、あくまで、マホイミもどきかしら？ お師匠の方が詳しいと思っただけど、契約の書とか持ってない？」

「いいか。その話は誰にも言うなよ。特にこの国の連中にはだ！」  
「ど、どうして？」

「マホイミを使えるとなればお前は迫害を受けるからだ！ 必ず殺すなんて物騒な呪文だ。無能な凡夫どもが騒ぐぞ」

「わ、わかったわ」

何か分からないが暗い実感をこめた迫力ある一言に、ずるぼんは素直にうなづく。

仲間もミリアも前向きに受け入れてくれただけに、彼女は恐れられる可能性には気付いていなかった。

「そうか。お前がマホイミをな……よし。ついてこい」

「何を……？」

「黙ってついてこい！」

言うなりバロンはずるぼんを古びた屋敷の奥へと引っ張り込み、さらに隠し階段を下りて地下へと降りていく。

(何……？)

無言で歩くバロンについていきつつ、不穏な雰囲気にするぼんは眉をしかめていた。

バロンからは敵意や害意は感じない。

むしろ、歩く速度もさりげなくあわせてくれるのを感じた。

そんな配慮は弟子だった頃には一度たりともしたことはなかったというのだ。

そのこともずるぼんに妙な胸騒ぎを起こさせた。

やがて階段をおりきった場所は、少し広めの宿屋の一室くらいの大さきの地下室になっており、その中央には、巨大な金属の鎧のようなものが鎮座していた。

「これは……鎧？ 違う」

それはあまりにも大きすぎた。鎧だとしたら巨人が着るようなサイズだ。

それにしても、足が異様に細くて絶対に入りそうにないから、巨人用の鎧でもない。

「レミール」

壁に掛かけられた薄暗い灯りだけでは全貌をつかめず、ずるぼんが困惑していると、バロンが、その鎧を照らして見せた。

「キラーマシーンだ。聞いたことがあるだろう。魔王ハドラーが作った勇者抹殺用の魔法兵器だ」

「……これがっ」

（クロスが言ってた魔王の兵器。もう持ってたのね！ でもまだ改造途中みたい？）

「動力源は魔力。魔王の邪悪な意思と指令を受けて動くようになってる。魔王亡きいまはただの置物だな」

「それが何故ここにあるの、お師匠は何をする気なの？」

ずるぼんは、探るように声を出してみる。

彼が未来でしかすることは聞いている。しかし、自ら確かめる必要があると思っただのだ。

「……ある男が閃いた。魔力で動くのならば改造すれば人間が動かせるのではないか。とな。そいつの頼みで改造中だ」

「何のために？」

「力を得て王に成ると。そいつは言っていた。権勢を誇って欲望を満たすためだ」

単なる私利私欲のためにレオナを殺すというの!? 瞬間的にずるぼんの顔に怒りの朱が指した。

彼女は思わず口を開きかけ……

「だが！ 俺の目的はそんなものではない!!」

「え？」

ギラついた目を輝かせ、バロンは激しくがなりたてた。

「俺の父も母も兄弟も！ 知人友人も！ 魔王ハドラーの地上侵略により死んだ!! 怪物どもになすすべもなく殺された!!!」

「……っ」

「力さえあれば。敵に備えてさえいれば。そんなことにはならなかつ

たのだ！　そして今、パプニカは同じ轍を踏もうとしている!!」

それを聞くなり、ずるぼんの顔が今度は蒼白になる。

クロスの語った未来視によると大魔王復活でパプニカは再び蹂躪されて亡国寸前まで追い詰められる。

そのことを何故かバロンが知っている。

もしや彼にも未来視が？　それともどこからか情報が漏れたのだろうか？　知っているなら、どうしたらいい？

ずるぼんの脳裏を混乱した思考が駆け巡る。

「なっ、なんでそれ、を」

「何？」

だがそれはずるぼんの思い過ぎだったようだ。

怪訝そうな態度を見せられたことで、彼女はどうか混乱から逃れて、一歩踏み込んでみた。

「なんでもない。それより再び侵略されるって確証があるの？」

「……ない。そうだ。未来のことなど分かるわけがない。いつかくるかもしれないなどと、おびえてはキリがない。この国の大臣連中はそう言った。そんなことだからパプニカは滅亡の危機に陥ったというのだ！」

「……そう」

どうやら、彼は何も知らないようだった。

未来を見透かしたような準備も、単に強い危機感からのものだったらしい。

「今パプニカには次時代の賢者、三賢者がいる。彼らは若いが俺に並ぶ実力と才能の持ち主だ。それが3人。他にも賢者はいるし、王に仕える神官も兵士も、数だけは増えた。もしもに備えた戦力は万全。ならば徒に恐れず民の安寧に心を砕くべきとも」

「……………」

「だが違う、違うのだ。質が全く違うのだ！　俺はこの目で魔王を見た。凡百を揃えようが無駄だ。俺や三賢者がいようともだ！　それが分かってない!!」

バロンの分析は概ね正しいと言えた。

ハドラーは、バロンらと同等以上の魔力を持ち、さらには武術の心得もある。

もし仮に魔法で互角だったとしても、腕力や体力の差で負けてしまう。

今のパプニカには、かつての大魔道士や勇者アバンほどの人材はいない。

ならば数でということだが、その見通しは甘い。魔王軍にも数があるのだ。

むしろ実際には、数の面でも劣勢なのはパプニカだろう。

中途半端な質の数を増やした程度では、結局歴史は繰り返すだけだ。

「その挙句、くだらぬ嫉妬や面子から、大魔道士マトリフ殿を追い出したりするのだ……救いようがない」

「それで、キラーマシーンってわけね」

「パプニカは二度と蹂躪させん。そのためなら何だってするし、何でも使う。とはいえそもそも本人が作ったものだからな。これを使っても勝てはしないだろうが……」

「でも、ないよりはずっと良いわね」

「……おまえは忌まないのか？」

一通りしゃべって、落ち着いたのか、バロンがゆつくりとずるぼんを見やった。

「守る為なんですよ？ 力が全てとか手段を選ばんとか言うのは賛成できないわよ。でも大事なものを守りたいってのはわかるし、力がなきやどうしようもないことはあるもの」

彼は肯定的な言葉が掛けられたのがとても意外だ、という表情だった。

「いいだろう。再修業の話受けてやる。だがお前にも手伝ってもらおうぞ」

「わかったわ。といっても雑用しかできないけどね……」

「構わん。一人でやるよりはマシだ。危険視されていなければ部品の調達もやりやすいだろう」

半分解体されて機械部がむき出しになっているキラーマシンの元へと歩み寄り、さつそくなにやら工具で作業を始めるバロン。

「ところでふと思ったんだけど、キラーマシンに乗り込んで操縦したら呪文はつかえないわよね？　操縦しながら呪文も扱えるようにしたら、いい線いくんじゃない？」

「無理だ。操縦しながら呪文の行使は出来ん。器用さとか習熟の問題ではなく不可能だ。2系統の魔力が必要になるからな」

「じゃあ二人乗りにすれば？ 『ニコイチ』で戦えばいいのよ」

ずるぼんが参考にしたのはクロスとミリアの戦い方だ。

一人で無理ならばあんなふうに対二対一体となって戦えば良さそうに思えたのだ。

「しかし……いや。いけるかもしれん。と言っても、今のところは人間の魔力で動かせるようにしないと始まらない」

「ま、それはそうよね」

話が途切れ、周囲を見渡したずるぼんはふと工具やらが置いてある机の上に古びた本が複数置いてあるのに気がつく。

「あ、これ魔族文字ね。魔、工学の技術書？　魔法金属の加工から魔力炉の基礎まで……？　ふうん、よくこんな手に入ったわね」

その本には大量の文字が書き込まれた手書きメモが挟まれていた。その光景は、ずるぼんにも馴染みのもので、バロンは技術書をどうにか解読をしようと試みているようだ。

が、はさんであるメモを見る限り解読は順調ではないようだった。

「キラーマシンと一緒に提供を受けたものだ。一応自前でも魔族文字の書物は集めているが……待て。お前は魔族文字が読めるのか!？」  
「まあね。知り合いが解読してて、その手伝いをしたことがあるから。というかお師匠は読めないのね。この国を代表する賢者だったのに……」

ずるぼんはパラパラと魔工学の本の頁をめくる。

難解な専門用語らしき部分はさすがに意味が分からないものの、普通に読むことは出来そうだった。

「ふん！　邪悪な魔族の呪文や技術の研究、それも禁呪法に近いよう

な魔法の研究がこの国で許されると思うか？ 魔族文字Ⅱ 邪悪で違法というわけだ」

「なるほどね。魔族への恐怖を感じ続けた故の拒絶反応……というのは穿ちすぎかしら。平和を脅かす高度な魔族技術の悪用や拡散を恐れられたといったところでしようね」

「愚かしい……悪用や拡散が怖いなら嚴重に対策をすればいいだけだ。魔族技術を知っていれば、仮に悪用されても対処できる。しかし、知らねばどうしようもない」

「そうねー。国が禁止してても、魔族が技術提供するとか、お師匠みたくに独自研究するかもしれないものねえ」

（実際そうなるわけだしね。もしダイが居なかったら、レオナ暗殺は成功して、その後パプニカはお師匠が支配してたでしようね）

「まあ益暗共の話はもういい。ともかく書物解読も手伝ってもらどうぞ。その代価は解読と研究成果の提供だ。望むなら装備や道具の類もくれてやる。それでいいな？」

「そつちも協力するわ。またよろしくね師匠」

「ああ」

ここに師弟の契約が成ったのだった。



## 世界へ旅立つ

影夫とミリアがマトリフの元で修行を始めて3ヶ月ほどが経っていた。

マトリフが知る限りの呪文の契約を済ませ、まぞつほを交えて魔法力の扱いの修行や瞑想、呪文を使つての実戦訓練等をこなす日々を送っていたのだが。

ある日唐突にマトリフに呼びつけられたミリアと影夫は、今日で卒業だと唐突に告げられていた。

「え？ もう終わりなの？」

「まだ3ヶ月くらいしか見てもらってないんだけど……」

「教えてやれるモンは全部教えた。あとは毎日基礎鍛錬をすりゃいい」

たしかに、ふたりはマトリフから、実戦での立ち回りや心構えについてといった事柄のような直接魔法に関わらないような、教えまでも受けていた。

「でもでもっ、メドローア使いたいよっ。すっごい威力で、すごいんだもん。覚えたほうがいいよねえお兄ちゃん」

「あれはすごい切り札になるからな。ミリアが覚えられるなら是非とも欲しい」

「でしょ！ やっぱ修行は続けなきゃ！」

「てめえにゃあ無理だつて何度も言っただろうが」

やっぱりソレか、とでも言いたげにマトリフが顔を顰めて、ギロリとふたりを睨む。

「いいか。これは向き不向きの問題なんだよ。てめえは細かい呪文の制御にむいてねえ。反面魔法力の放出や増幅なんかは得意だろ？」

「うん。難しくってややこしいことって嫌い！ 呪文はやっぱり、ぶわっ、ぎゅいーんっ、どかーんッて一気にやりたいもん」

「そういう奴にはメドローアは難しい。そこを努力で乗り越えるには時間が掛かる。何十年と費やせば分からねえが、んな余裕なんざねえだろうが」

「えー……むうう……！」

なおも洩るミリアは諦め切れないのか、右手に火炎呪文を出して、左手から氷系呪文を出そうと試し始めた。

が、うんうん唸って難しい顔をしているだけで、どうも両手同時に別の呪文を出すのは無理なようだ。氷系呪文が出れば炎系呪文が消えてしまう。

頭の中でごちゃごちゃになっているんだろう。

それを見ていると影夫も、メドローア習得はやはり諦めたほうが良さそうだと悟るしかない。

ここ3ヶ月隙を見ては練習を続けて、上達の気配がないのだ。

呪文の破壊力は順調に上がっているが、呪文行使の器用さはミリアにはないらしい。

「まあ、元々魔法は専門じゃないし、しょうがないか」

「あつ。そっか……剣の方も修行しなきゃ強くなれないよね。暗黒闘気もちやんと使ってあげなきゃ可哀想だしね」

「剣やら闘気の修行はアバンが適任なんだがな。ロカの野郎でも悪くないんだが……あいつはもう長くねえ」

「じゃあ、ロン・ベルクさんは？ すっごい剣の達人なんだよね、お兄ちゃん」

「ああ。大魔王がスカウトするほどの凄さだしな」

「それにうまくいけば新武器も作ってもらえるかも！」

「でもなあ。『最近知り合った』って言ってたからな。まだジャンクと出会ってないんじゃないか？ 参ったな……」

話が行き詰まった様子を見て、マトリフが古ぼけた世界地図を持ってきて、テーブルの上に広げ、カール王国を指差して見せた。

「まあそっちは行って確かめるしかねえな。他には危険だが手っ取り早く効果抜群な、実戦経験を積むって手もある。たとえば、『破邪の洞窟』とかでな」

「うわあ。ダンジョン攻略！ 洞窟探検！ 楽しそうっ！ ロン・ベルクさんを探しにいくかどっちがいいかなあ。迷っちゃうね！」

「そうだな。滅んでないカール王国に行っておくべきかも。ついでに

破邪の洞窟の使用許可貰ったり、アバンの書を見せてもらったりしく方がいいか。そのほうが後ででろりん達も助かるだろうし……うーん」

影夫は悩む。

地上で人間が力をつける上で、破邪の洞窟への挑戦は絶対に外せない。

本来の目的である破邪の呪文にはほぼ用はないが、深層階には失伝呪文に秘呪文の数々に、破邪の秘法を始めとする技術、使えるアイテムなどが手に入り、さらには強力なモンスターとの死闘による経験も積めるといふ最高の場所なのだ。

ミリアだけでなくでろりん達も間違いなく挑むことになるだろう場所だ。

でろりん達が忙しいうちにこっちで先に場所を押さえておくとか々と助かるだろう。

「ルーラ覚えてよかったあ。皆を連れてってあげられるねー」

「そうか、ルーラ先の問題もあつたな。今のうちに世界中にルーラで行けるようにしとくべきか。問題が起こってからじゃ遅いし、ピラアオブバーン対策に必須だしな。ミリアもそれでいいか？」

「うんいいよつ。ダンジョン攻略は皆で競争しながらしたほうが楽しそうだしね！」

「決まったようだな。ちょっと待つとけ……」

影夫が方針を決めたところで、マトリフが、羽ペンでさらさらと手紙のようなものをいくつか書いてよこしてきた。

ちらりと見る限り、マトリフの署名が入った紹介状らしい。

世界的に名を知られている上にアバンに近い人達と面識があるだけに彼の紹介は正直かなり助かる。

「持っていていけ。何かの役には立つだろ」

「サンキュー、マトリフさん、助かります！　そうと決まれば、ベンガーナの王宮へイッパツ頼むぜミリア！」

「りよ〜かいっ。ルーラ!!」

紹介状を受け取るなり、影夫はミリアが片手で抱いていた猫ぐるみ

ボディの中へ入ると、ミリアとともに洞窟の外へ走り出て、そのままルーラで飛び立った。

影夫とミリアが旅立った後。

マトリフは、洞窟の中に引っ込んで、机に向かっていた。

「破邪の洞窟を腰すえて攻略……か。境目を越えちまうな。つたく手間かけさせやがる」

一冊の古めかしい古文書を睨みつけながら、茶渋の染み込んだ粗い紙の束にさらさらとペンを走らせていくマトリフは、作業に没頭していくのだった。

## 奇跡の泉

「綺麗……神秘的な泉だね」

「ああ、なんていうか不思議な雰囲気だよな。霊地みたいな感じ？」  
水底まで見えてしまうような、綺麗で透き通った水が光を照らし、泉の周囲の緑を映えさせる。

清らかな泉の水と周囲の自然のコントラストは実に美しく、絵になつていた。

さすがは竜の騎士が傷を癒す場所である奇跡の泉だと、影夫とミリアは感嘆する。

そこは元アルキード王国の領土であり、今はベンガーナ領最南端で、アルゴ岬と呼ばれている場所にある泉である。

二人は、再びベンガーナ王宮に借りた気球船に乗ってこの地にやってきていた。

その気球船は操縦者であるアキームと共に、泉から少し離れた開けた平原で待機している。

「ここでバランスさんとソアラさんが出会ったんだね。ロマンチック……ん〜っ、すっごく美味しいね」

ミリアが泉の縁から手を伸ばして、手酌で水を掬い飲んで笑顔で浮かべている。

綺麗に澄んだ水は、体力回復効果もありそうで、まさに奇跡の水といったところか。

商魂たくましいベンガーナ商人なら商売の種にしそうだが、周囲に人気もなく、知られてもいないのは、一夜にして滅んだアルキード王国の土地であったという理由からなのか、単に知られていないからか。

「飲んでもいいけど、泉は汚さないように注意しような」

「うんっ、分かってる！」

彼の人にとって思い出深く神聖な土地であろうこの地を穢すような真似はしたくないので、影夫としても妙な商売っ気は出さず、ミリアに注意を促す。

「水筒でも持つてきたらよかったかな。あ、でも生水は保存が利かないか……まあ無理に持つて帰ることもないか」

必要になったらルーラで飛んでくれば良いだけ。必要な時にだけ奇跡の水を少し拝借させてもらえばいい。

「この泉で傷つき倒れた最強種族の騎士と心優しい人間のお姫様の出会いがあり、やがてふたりが結ばれて、そして冤罪の末の悲劇か。劇になってもおかしくなさそうな題材だよな」

竜の騎士を人間側から引き剥がし、味方に引き込むバーンの暗躍があつたかもしれない。

「んー、どうにも話が出来過ぎてるっていうか、誘導されてるように思えるな」

balan が追放されるまでの流れが気になる。原作の様子を見るに、本来調停者として強い自覚があつたようだし、その振る舞いは高潔な騎士然としていただろう。

地上はすでにハドラー亡き後で、彼が恐るべき竜の力を周囲に見せて恐怖させるような状況は起こり得なかつただろう。

(いくらハドラー侵攻の記憶が新しくともなあ)

そもそも彼は実は魔物らしいと讒言されたといつても見た目も血の色もまるつきり人間ではまるで証拠がないではないか。

それは巧妙に化けているからである。とか言い始めたら自分以外の全員が怪しいということになってしまう。

それともよほど猜疑心の強い地方だったのだろうか？ でもそうだとしたら当初 balan が王宮に招かれたという話がおかしいということになる。

「やっぱり、バーンが仕組んでたんだろうか……」

いくらなんでも高潔な振る舞いをする騎士を証拠もなしに、それも当初王自らが笑顔で招き入れた人物を、追放する流れになるのが自然とは思いがたい。

手練手管で少しづつ臆病で欲深い人達に疑念の種を植えつけ、恐怖と敵意を煽つて育てたのだろうか。

どうもそのあたりはキルバーンあたりが得意にしていそうな陰険

で搦め手の心理的トラップという感じもする。

やはり疑わしい。尤も、もはやソレを暴く証拠も何も無いが……。「あつ。単に騎士としてのバランスの高潔な振る舞いがあまりに度を越していたとか?」

性格的に不器用で実直で一本気すぎるのは原作からでも分かったし、空気もあまり読めなさそうに思える。

良かれと思つて誰に対しても正論や王道を説き、王への諫言も躊躇せず全方位に敵を作つて孤立して……とか?

「あー所詮は下衆の勘繰りだな。考えても答えなんか無いや」

「……バランスさんは、よっぽどソアラさんのことが大好きだったんだね」

「ん?」

「国を滅ぼして直接復讐は果たしたのに、止まらなくつて全人間を滅ぼそうとするくらいに。そっか、大事な家族をみんなうしなっちゃつたから、かな。喪失感でどうしようもなくて……」

まるで自分のことのように、ミアアが沈痛な様子で俯いてつぶやく。

きつと自分と重ね合わせて考えているんだろう。影夫は黙つたまま、ミアアの言葉を聞き続ける。

「私も同じ。クロスお兄ちゃんに出会えなかったら……そして復讐のために力をやるつて魔王軍に誘われたら、きつと同じことをしたよ」

「ミアアはさ、どう思う?」

「分かんない……人間を滅ぼそうとするのは、やつあたりで、ひどいなつて思うの。自分がやられたからつて、関係ない人にやり返すなんておかしいよ」

「……そうだな、外から見れば彼はおかしい。理不尽で悪ということになる」

苦悩していたミアアが、ぱつと顔を上げる。

「でもっ! 無理なんだよ。悲しくて苦しくて憎くて、心の中がまっくろになつて、止まれない、止まりたくないんだもん!! それが、そ

れが分かるから……悪だけど、おかしくない」

「そうだよな。おかしいけどおかしくなくて、自分じゃどうしようもない。だから人間には家族や友人や隣人が居るんだって俺は思う。俺やでろりん達がミリアの側にいるみたいにな」

影夫が優しくミリアの頭をなでてあげると、ミリアは感情移入して苦悩していた表情を和らげる。

「私、止めてあげたいよ。たぶんだけどソアラさんもそう思ってるんじゃないかな……」

「なら、止めてみるか。ダイが生きてるんだ。残された息子と一緒に生きてみるんだって説得してみればいい」

「だね。多分ケンカになるけど、それでも力尽くでも止めてあげたい！」

「じゃあいこうか」

「ちよつとまって……!」

ミリアはそういうと周囲の原っぱから点在して咲いていた野花を摘んできては、草で束ねて花束を作り始める。

「俺も手伝うよ」

影夫もねこぐるみ姿で周囲を走りまわり、花を探しては摘み集めてミリアに渡していく。

「できたー!」

「じゃあお祈りするか」

しばらく後。手先の器用なミリアは、一抱えの花束を作り上げ、泉の脇にお供えした。

影夫とミリアは並んで黙祷する。

「つぎのところにいこっ!!」

ミリアが影夫を肩の上ののせて、気球船の元へ走っていくのだった。



## ネイル村へ

アルゴ岬から気球船で飛び立ったふたりは、一路ロモスへ向かっていった。

といっても道中ミリアと影夫にすることはない。

気球船の操作をしているのはアキーム。

風を調べ、天測しながら地図を見たり、バルブをまわしたりと忙しそうである。

「あのく長々と付き合わせる事になっちゃって、アキームさんにも都合があるでしょうに迷惑かけてすみません」

「いえ。これはベンガーナ王よりの特命ですのでお気になさらないで下さい。全力で勇者さまを助力せよと仰せつかっておりますー」

「それでもです。旅先で俺達が側に居ない間は、好きに過ごしてもらって構いませんから。ゆっくりしておいてくださいね」

猫ぐるみ姿の影夫がぺこぺことアキームに頭を下げる。

世界一周のこの旅には数ヶ月はかかる予定だ。その間彼はずっとミリアと影夫の為に奔走することになる。

それが彼の任務であるとはいえ、影夫には気が引けてしようがなかった。

「ご配慮感謝いたします！　しかし自分も武人の端くれ。待機中は鍛錬でもさせてもらおういたします！」

アキームは、大げさなくらいの動作でミリアたちに頭を下げ、普段どおりの真面目くさった顔のまますらすらと言つてのける。

しかしそうなる余計に気が引けるのが影夫だった。

「じゃあせめて、何か希望があったら何でも言つて下さいね」

アキーム個人にもそうだが、ベンガーナ王国にも多くのお世話になつてしまつている。勇者の支援は名声を高めるとか、強者を取り込みたい等の狙いもあるのだろうが、影夫には借りが増えていくのがどうにも心苦しい。

魔王軍襲来の際に役に立つことで恩返ししますから。と心の中で罪悪感を打ち払い気にしないことにした。

「では、鍛錬をお願いできませんか。力をつけて王のお役に立ちたいのです！」

「わかりました！ いいよなミリア？」

「いいよ。たまに試合してあげるね」

「ご指導のほど、よろしくお願いいたします！」

深くお辞儀をしてアキームが嬉しそうに笑った。

原作でクロコダイスが認めただけのことはある武人ぶりであった。

できるだけ彼の希望に沿ってあげたいと影夫は思う。

「ところでさ、気球船って何で浮いてるの？」

「ガスのつぼから、浮遊ガスが出てそれで浮くのだから。くわしい作り方や仕組みは、自分には分かりかねます」

「すげー。ガスが無限に湧いてくるのか？ 無から有？ どうなってるんだ半端ないな!？」

「は、はあ。たしかに不可思議でありますね」

「あ、でもガスを生み出す部分が魔法具で、魔法力を使ってガスを生み出しているとか？ うーん。それならまあありえるのか……いやでもっ」

「あの、クロス殿……?？」

「あーまた始まつちやったあ。ほっといたらいいよ。聞こえてないから」

「はっ。仕事に戻らせていただきます！」

DQ4でもずっと不思議な乗り物だった気球に突っ込み、考えに耽り出した影夫は華麗に放置されるのだった……

「見てみてっ、あれが王宮かな!？」

眼下に王宮と城下町のような建物が見えてくる。

周囲が森に覆われている中にぽつりとある。

空から見下ろすとまるで森という海に浮かぶ島のようなだ。

「みたいだなー」

実際、中世はそんな感覚だったらしいと、影夫は昔どこかで読んだことがある。

ともかくあれが目的地であるロモスの城下町と王宮であろう。

「それじゃとつげきーつ、王宮の中にどーんと降りちやえー！」

「えっ……」

アキームが呆然とした様子で聞き返す。

パプニカでやったような無茶をまた……と顔色が蒼白になる。

「いやいや。奇襲じゃないんだから！　まず王宮に許可もらわないとな」

「えーめんどくさいね」

「アキームさん、ちよつと待っててください。ミリア行くよ……飛翔呪文！」

「よ、よかった……」

ミリアと影夫はトベルーラでロモスの城下町に降り立って、王宮に許可を貰いに向かう。

街の外側で気球は待機することとなり、アキームは心から安堵するのだった。

★★★

「よくきた勇者ミリアと伝説の武具殿！　ベンガーナでの活躍は耳にしておるぞ。邪悪な魔物に苦しむ幾多の集落を救い、勇者でろりんとともに凶悪な洞窟の主をもみごと討伐したのだから！」

「恐悦至極に存じます。勇者ミリアはまだまだ未熟で若輩ではございますが、今後とも精進を重ねていく所存にございます。さあミリアご挨拶を」

「こんにちは王様。よ、よろしくお願いします」

「ほっほっほ……こちらこそよろしく頼むよ」

影夫に促されたミリアは、ペこりと頭を下げた挨拶をする。

それを微笑ましそうげに見つめていたロモス王はまさに好々爺といった様子だった。

ミリアにお菓子をあげて、頭でもなでていそうな雰囲気、彼の人の良さが伝わってくる。

「噂には聞いていたが、勇者を導き、姿を自在に変える伝説の武具とはなんとも凄いものじゃなあ。ミリア殿」

「はいっ！」

「ほっほっほ。ロモスにも伝説の武具が伝っておるが、貴殿のような伝説の武具がいたとは……世の中は広いのう」

ロモスには覇者の冠と覇者の剣というオリハルコンで出来たまさに伝説の武具がある。

原作で確認されていて、人間が所有しているオリハルコン製装備はこのたった2つしかない。

冠や剣があるのだから、鎧やら盾やらがあってもよさそうではあるのだが……。

「して、何用かのう。勇者でろりんと同じ用件かの？」

「いえ、見聞を広める旅をしております、まずはご挨拶にうかがった次第でございます。ロモス国内を回る許可を頂きたく……」

「いいともいいとも。その代わりといつては何じやが、旅先で困っておる民がいれば助けてやってくれんか」

「無論でございます」

その後、ロモス王宮で食事会に招かれ歓待を受けた後、ネイル村へと向かうのであった。

★★★

「おい、あれはなんだ？」

「新種のモンスターか!？」

ネイル村は小さくてすぐ外は魔の森なので、騒がせてしまうことになるが仕方なく気球は村の広場へと降り立った。

「誰か乗ってるぞ……?」

「女の子?」

赤いドレスを着込んで猫のぬいぐるみを抱えている小さな少女の姿が見えたことで、泡を食っていた村人達の緊張がほぐれた。

もろはのつるぎは、気球の中の荷物入れに納めてあるので、見えな  
い。

今、ミリアが身につけているのは武器は腰のベルトにつけてあるナイフに納められたどくがのナイフ2本きりであり、それだけなら旅の護身用といった印象なので威圧感は薄い。

さらに、気球を操っているアキームは、ミリアの背後に控えているため、護衛の従者に見える。

つまりぱつと見だと、珍しい乗り物で物見遊山にきたお金持ちのご令嬢に見えるのだ。

「なんだよ、旅人か」

「ベンガーナの紋章が描いてあるぞ。あの国の商家の人じゃないか？」

「さすがお金持ち国。やることが豪儀だなあ」

何事かと集まってきた村の大人達は、各々の仕事に戻るため、その場から散っていった。

大人達と入れ替わりに、興味津々な村の子供達が気球の周りに集まり出す。

「空を飛ぶなんて、すっげー！」

「乗ってみたい！」

「俺もー！」

「私もー！」

ベタベタと気球船の籠部分を触り出した子供たちに、唯一この場に残った老人……村長が声をかける。

「これこれみんな。旅の人の乗り物を壊したらいかん。触るでないぞ」

「「はーい」」

「こんにちは、旅のお方。ベンガーナの方とお見受けするが、この小さな村にどのようなご用ですか」

「お騒がせしてすみません、他に降りれるところがなくて……私はクロス。この娘はミリアです。友人のでろりんさんがこちらに来てると聞いて会いに来たんです」

丁寧な村長の言葉に、執事風に一礼をして猫ぐるみ影夫が返答してみせる。

「ねこさんっ、かわいーっ♪ ねえおねーちゃん、さわってもいい？」

「う、うん……」

「ごろごろにやー」

「きゃーきゃー」

ビシッと決めた端から、影夫は女の子に撫で回されてしまう。子供たちにひたすらに撫で回され続ける影夫であった。

「ミリアか!? 急に来るからびっくりしたぞー!」

「ひさしぶりでろりん!」

「おう。今日も元気だな」

「うんっ!」

すっかり和んだ場となっていた広場に、騒ぎを聞きつけたのかでろりんが駆けつけてきた。

その傍らにはピンク髪の子をつれている。

「お? ちょっと男前になつたんじゃないか? 雰囲気違うぞ」

執拗に撫で回してくる女の子(ミーナというらしい)の魔の手から逃れた影夫が、ひよいっとでろりんの肩の上に走り乗る。

「そーかー? 自分じゃよくわかんねーよ」

ポリポリと頬を搔いて、でろりんはとぼけてみせる。

だが再修業で精強さが増して、卑屈さが薄れた今の彼がやると不思議と様になっているようにも見えた。

「お兄ちゃんこういうの、雰囲気いけめん? っていうんだっけ?」

「この裏切り者があつ!」

「アホか! いただつ、やめろ!」

ちよつと目つきの悪いクール系になりやがったとごちて、嫉妬の心が沸き上がった影夫は、でろりんの頬に猛然と猫パンチを食らわせ始める。

「あの、落ち着いてください!」

「あ、うん。ゴホン。えつと、ところでこのお嬢さんは? まさかでろ

りんの奴……ナデポニコポもやりたい放題か!」

「あくはいい、きもめんこじらせたお兄ちゃんはだまつてね」

「ぐああ……」

「それで、この子は誰なの?」

面倒くさくなりかけた影夫をサクつと言葉の刃で引き裂いたミリ

アが、呆れ顔のでろりんに見尋ねる。

「紹介するよ、この子はマアム。ミリアとおんなじくらいの歳になるか？ 仲良くしてやってくれよな」

「それとクロスをちよい借りるぞ。おいっ、いい加減正気に戻れよな！」

「くっ、はなせ！ お前は三枚目キャラじゃなかったのか!？」

「うるせえ！」

「ぎゃあ！ 鬨気をこめるんじゃない！」

一方、少し不安げな表情ででろりんを見送ったマアムはミリアの前に歩いてくるとすつと手を差し伸べていた。

「こんにちは。でろりんさんのお友達ですか？」

「うん。こんにちは。私はでろりん師匠のいちばん弟子なんだよ！」

ミリアとマアムが自己紹介をしている中、でろりんがようやく正気に戻った影夫に耳打ちする。

「でろりん、マアムと知り合いになったんだなあ。というか何でネイル村にいるんだ？」

「ふふふ。聞いて驚けクロス。マアムは俺の師匠の娘さんだ！」

「おっ、お前の師匠ってあの戦士ロカだったのかよ!？ やっぱ強いかな？」

「ああ。本気でやったら多分今の俺らじゃ勝てない。まあ呪文も効かない重病だから手合わせとかは無理だけだな」

「ねえお兄ちゃん。マトリフさんでも治せないのかな？ たぶん詳しいよね？」

それは残念とクロスがつぶやきを漏らしたところで、ミリアとマアムが話に加わってくる。

「マトリフおじさん？ 知り合いなの？」

「ああ、マアムさんは知ってるんだっけ。俺達の魔法の師匠なんだよ。あの人ならもしかしたら……」

「ううん。数日前に父さんの具合を見にきてくれて、薬もくれたんだけど……治すのは難しいって……」

そう言っつて、マアムがうつむく。どうやらロカの病はマトリフにも

お手上げらしい。

「うーん。その様子じゃ俺らは遠慮したほうがいいかな。武の師匠がいないから、せめてアドバイスでも。と思ったんだけど……負担をかけるわけにはいかないし」

原作で死没していたことから、彼の死は避けられそうにないのは分かっていたが、クロスとしてもとても残念な気持ちになる。

「いや。師匠に聞いてみる。孫弟子と聞いたたら会いたがると思うしな。ロカ師匠んとこへ行こう！」

「ししよーのししよーだから、だいししよーだね！　どんな人かなあ。楽しみ！」

「ミリア、病人さんだからさわいじやダメだよ」

「わかってるよ！」

「ごほんっ」

話がまとまったタイミングで、じつと気球に群がって触りたがる子供達をやりわりと止めてくれていた村長が、咳払いをして気球を指差した。

「話はまとまりましたかな。このまま広場に置かれておると皆が少々困りますゆえ、そうですね。ワシの家の横にでも移動してもらえんじやろうか」

「あ、待たせてしまつてすみません！　ごめんアキームさん！　気球の移動をお願いしますー！」

「了解しました。村長殿、場所の案内をお願いしますー！」

「わー！　ききゆう飛ばすの!?　乗せて乗せて!!」

「す、すぐ降りるんだぞ？」

「それでもいいから〜！」

「ずるい！　わたしも乗る〜！」

影夫らがロカの家に向かうと同時に、アキームは気球に子供を乗せて移動するのだった。

あまりに子供らが喜ぶので、結局村の上どころか、魔の森をくるつと一周する羽目になるアキームだった。



## 大工匠との出会い

「紹介するよ師匠、この子が俺の弟子のミリア。こっちがクロス。ミリアの保護者で、悪友みたいなもんです」

「えつとはじめましてロカさん。急に押しかけてしまつてすみません」

「こんにちは、ロカだいししよー！」

「おうつよろしくな。この俺に孫弟子か。人生分からねえもんだ」

でろりん連れられ、ロカの部屋までやってきた影夫とミリアは、彼と対面していた。

「俺達がお邪魔しちゃって、お加減は大丈夫ですか？」

「ああ、話すくらいなら問題ねえさ」

ロカはんなことは気にすんなとばかりに、軽く手を振る。

だが影夫が見たところ、かなり体調は悪そうだ。

頬はこけており、目の下には隈があり、髪や肌からも枯れ木のような生気の無さが感じられた。

体中の生命力が枯渇しかけていて、気力だけで生きているような危うい状態にすら見える。

回復呪文が効かない病という話だったので、影夫は暗黒闘気の影響がないか探ってみたのだが、何も感じなかったので、原因は違うようだ。

よくよく考えてみれば、ミスト級の濃厚な暗黒闘気でもない限りは、アバンやマトリフがなんとかしてしまいそうだが、彼らでもダメだったのだ。

分かる範囲で原因を考えてみるが影夫には思いつくことができなかった。

しようがないので、思考を打ち切り、話を再開することにする。

「そうだ、マトリフさんからの手紙を預かっています。な、ミリア？」

「はいっ！ ロカだいししよー！」

目の前でだからだと考えに耽っていると、ロカに負担をかけてしまうことになりかねない。

「届けてくれてありがとよ。あと俺のことは呼びたいように呼べばいいぞ。敬語もいらん」

「えへへ。わかったよ、だいししよー!」

ロカはミリアから手渡された手紙に目を通していく。

柔らかな表情で手紙を開いたロカは、真剣な表情になったかと思うと、ほう、と意外そうな笑みを浮かべた。

一体、何が書かれていたのだろうか。と周囲が疑問に思う中、ロカは、視線をでろりんに向ける。

「でろりん。ミリアに何を教えた？」

「剣術や実戦での立会いなんかについてと鍛え方を少し。師匠から受け売りとか勝手な解釈で教えたことも多いですけど」

「それでいい。自分なりに消化したモンを教えてやりやあいんだ。ご大層な一子相伝の流派とか秘伝とかじゃねえからな」

改めてロカは、ミリアとクロスをベッドの傍らに呼んで、ミリアの頭に手を乗せたと思ったら腕や手を触って観察したり、猫ぐるみに入ったクロスを凝視して手で持ち上げてみたりする。

「えつと……ロカさん？」

「だいししよー?」

一通りふたりを調べた後、ロカは唐突に真剣な表情になって、クロスとミリアをねめつけてくる。

「ミリア。なんでお前は暗黒闘気なんて物騒なモンを使うんだ?」  
「っ」

一瞬、ミリアはきゅつと、ドレスの裾を摘みながらも、怯まずにロカを見返してはつきりと言葉を紡ぐ。

「暗黒闘気は……この力は、私の絆だから」

「……絆か」

「ひとりぼっちになった私の側にいてくれるお兄ちゃんが与えてくれた力が暗黒闘気なの。この力はお兄ちゃんそのもので、大好きだから使う! 使い続ける!」

「んで、クロスって言ったか。お前暗黒闘気の魔物だろ? 何でこの娘に肩入れしてる?」

易々と影夫の正体を看破され、ミリアが影夫を守るようにきゅつと抱き寄せる。

不安げなミリアを落ち着けるようにミリアの手をさすって宥めつつ、影夫も言葉を紡ぐ。

「ミリアは俺の守るべき、かけがえのない大事な家族だから」

影夫は一点の迷いもなく、言い切る。

その言葉に嘘偽りなく、心からの言葉だった。

「ははっ。そうかそうか。お前らは気持ちのいい奴らだな！ 気に入った!!」

「ありがとっ、だいししよー!」

「しっかし、あのへそ曲がりの偏屈じじいを孫の世話を焼くじじいみたいにしちまうとは……とんだ人たらしどもだな」

手紙をひらひらと振りながら、口力が苦笑してみせる。

きつと魔王ハドラーと戦っていた頃のことを思い出しているんだろう。

「えつと師匠。暗黒闘気って何なんですか?」

場がなごんだところで、そろーっとでろりんが手を挙げた。

そういえばでろりんには、自らの正体もミリアの使う闘気の詳細も教えてなかったことに影夫は今更気付いた。

「ああ。闘気の種類で、負の感情を源にしてる。危なっかしいわおつかないわ、魔族が多用してるわで、人間の使い手は俺の知る限り誰もいねえな」

「どうやらでろりんは、暗黒闘気のこととはまったく知らなかったらしい。」

そのあたりの知識を教えてもらう前に逃げ出していたのだろうか。

「黙っててすまん！ 俺は元人間の暗黒闘気生命体なんだよ。誤解されるから嘘ついてたんだ」

「あくなんか時折ゾクつとしたのはそれでか」

「ごめんなさい……でろりんししよー」

「まあしょうがねえよ。会った時に教えられてたら、びびって逃げただだろっしな。気にすんなよ」

「……うん」

「大丈夫だ。今は別に怖くもなんともねえし、もう俺らは仲間なんだからな」

「うん！」

ぽんぽんと、不安げなミアアの頭に手を乗せて、でろりんが言う。

「それででろりんししよーの修行は順調なの？」

「ああ、すごい技も特訓中なんだぜ。使えるようになったらみせてやるよ」

「孫弟子にも修行つけてやりたいが、情けないぜ。つたく病の身がうらめしい」

「あっ!? ちょっと待っててねだししよー! レイラさんあれ貸してー!!」

急に思いついたようにミアアはマアムの家の中に駆け込んでいったかと思うと、すぐに玄関から飛び出して、そのままルーラでどこかに飛んで行ってしまった……

☆☆☆

「はあはあっ、だいししよー、これ飲んでみて!」

数十分後、大きな水がめを抱えたミアアがマアムとともに部屋に入ってきたかと思うと、マアムが素早く水をコップに入れて口力に差し出した。

「あっ。奇跡の泉の水か!」

「なんだそりゃ?」

清らかで生命の力が感じられるその水を見て、影夫は思い至った。たしかに生気を失い、生命力が枯れているような口力の身体には効くかもしれない。

「伝説の竜の騎士の傷をも癒すという癒しの力が込められた奇跡の泉の水。言ってみりやあ神様からの贈り物みたいな水だな」

「ありがとよ。わざわざ取りにいつてくれたのか」

「でも、生水で大丈夫かな。でも煮沸して効能が飛んだら意味ないし……」

「腹痛やら病気やらはホイミで治せる。俺のこの病以外ならな」

そういえば、そんなことは原作の設定にあった気がする。  
難病奇病の類以外は、怪我也病もぜんぶ回復呪文で治せるのだと  
か。

影夫が思い返しているうちに、ロカは奇跡の泉の水を飲み干してい  
た。

「どうかな？」

「ふうー。そうだな、力が湧いてくる気がするよ」

「ほんと!？」

「ああ。寿命が伸びたんじゃねえかな？」

「ありがとうミリア！」

それを聞いたママムは感極まって笑顔を浮かべながら、ミリアの手  
を掴んで手を上下に振ったり、抱きついたり、大はしゃぎだ。

「いいよ、だいししよーの為だもん。でも効いてよかったあ。無く  
なったらまた汲みにいくね！」

「ミリア！ お礼に、私の大好きな場所教えてあげるわ！ こっちよ  
!!」

「うんっ」

嬉しそうなママムがミリアをつれて外に飛び出ていくと、ロカは苦  
笑する。

「俺はずいぶん心配かけちゃってんだなあ」

「ママムは心優しい子ですからね……それで師匠。ほんとに効いたん  
ですか？」

「ああ。少しだが力が戻ってる。多少は生命力が戻ったんじゃない  
か」

「すごいな奇跡の泉！」

「正直、でろりんが仕上がるまで持たないと思ってたんだが、大丈夫そ  
うだ。その後に家族のために時間も取ってやれるかもしれねえ。ク  
ロス、ありがとう」

そういって、影夫に頭を下げたロカは、ベッドに身を横たえて瞳を  
閉じた。

「明日に備えて俺は寝る。クロスとミリアもしばらくウチに泊まって

いけ。アドバイスくらいならくれてやれるからな。明日から楽しみにしとけ。アバン越えをさせてやるからよ……zzz」

でろりん&ミリア&影夫は、ロカにアドバイスを受けつつ、連日実戦形式の手合わせと稽古を立ち上がれなくなるまで続けることになった。

## 修行の成果

「刃よ凍れー!」

でろりんが叫ぶと、ふぶきのつるぎの刀身が凍りつき、剣状の氷柱に変わる。

「アストロン!」

それと同時に影夫は威力と効果を極力絞ったアストロンをもちのつるぎにかけて、斬れない鈍器へと変貌させた。

「ありがとう」

「んじゃ、がんばれよ」

呪文を掛け終わったクロスがミアアの元を離れていく。

「いくよでろりんっ! ヤアアッ!」

ミアアは飛び込むように間合いをつめ、体重を乗せて勢いよくでろりんを斬りつけた。

「ふんっ!」

だが、ミアアの全力の一撃はでろりんによって弾かれるように防がれてしまう。

体勢を崩されるがミアアは構わずに、強引に剣を振り回して、がむしやらに連続攻撃で押し捲る猛攻策に出る。

「これならどうっ!? ふうっ、はあアッ!!」

「相変わらずのっ! 馬鹿力だがっ、甘いぜ!!」

ロカの元で修行しなおし、磨き直されたその剣技は一流の高みに上り詰めていた。

一撃が異様に重いミアアの斬撃の嵐を、でろりんは力の方向を見極めて打ち弾き、いなしていく。

「まだまだあっ! てりやてりやてりやあああっ!」

「うおっ?! させるかよー!」

さらに剣速を上げてミアアは猛然と斬りかかった。

剣がぶつかり合うたびに、砕けた氷が周囲に舞い散って、あたりは冷たい霧で覆われていく。

「はあはあっ……」

時に手首の捻りを利かせて勢いをねじ伏せ、時にはミリアの剣の勢いを利用して刃を大きく弾き続け、ついにでろりんはミリアの連続攻撃の全てを防ぎきった。

剣の技量はやはりでろりんが上だ。その上ここ3ヶ月は口力の元でみっちり再修業をしていたので、さらに上がっている。

対するミリアは戦闘勘に優れるがやはり技巧面では劣ってしまう。戦術としては、どうしても暗黒闘気の特性や呪い武器を活かした力押しになつてしまう。

「ほー。すげえもんだな」

力と速さのミリアと技のでろりんといった印象を受けた影夫は、小さな身体とすばしっこさから放たれるミリアの速く重い連続攻撃を凌ぎきるでろりんの方にむしろ感心した。

「でろりん、つよくなってる」

剣の軌道を変えたり、力を変えたり、死角から斬りつけようとしても、その悉くを防がれたことで、このまま攻めても無駄と判断したミリアはバックステップで距離をとり、切れてしまった息を整える。

「ふうー。ま、再修業の成果つてやつだ」

見た目には、でろりんは労なく攻撃をいなしていたように見えるが、実際には違う。

口力に叩きこまれた剣理と技巧で紙一重で防いでいるだけで、極度の集中を必要とするのだ。

瞬間的に、適切な迎撃法を判断して対処し、考える暇なく最善手を打ち続けなくてはいけないが故に消耗は大きい。

(即席修行と実戦でここまで使えるようになるとか、やっぱとんでもねえな……ミリアは)

師匠としての意地で涼しい顔をしているが彼の内心は冷や汗ものだった。

「次はこっちからいくぜ！ 荒れ狂え吹雪！」

でろりんがふぶきのつるぎを掲げると、ヒヤダルコ級の吹雪がミリ



アを襲う。

「っ……暗黒衝烈破！」

吹雪にさらされ、身体が徐々に埋まっていく中、ミリアは暗黒闘気の衝撃波を打ち返して吹雪の嵐を迎撃する。

「そんなの無駄」

「だろう、なあッ！」

ミリアが言い終わる前に、ミリアの死角から剣を振り下ろしていた。

でろりんは最初から、凍えさせて倒すなんてことができるとは思っていないかった。

ヒヤダルコはあくまで目くらましと狙いを隠すための布石。

「っあっ！」

「おらおらおらおらッ！」

身体に走った悪寒に従い、咄嗟に剣を死角の方へと振りぬいて辛うじてミリアは直撃を避けるが、それで体勢が崩れたところに、でろりんは容赦なく連続攻撃を仕掛けて押し込んでいく。

「ぐうっ……!!」

息もつかせないでろりんの攻勢で、防戦一方になったミリアはそれらを力任せに振り払って捌こうとする。

しかし、斬り、突き、払う。フェイントを織り交ぜた巧みな連続攻撃によって徐々に追い詰められ、氷の刀身が掠った肌に薄氷が張り、剣圧で小さな切り傷が出切るなど少しずつ傷つき動きも鈍っていつてしまう。

「このままじゃあ……っ」

それでもどうにか決定打を受けないのは、暗黒闘気による肉体強化の効果と優れた反射神経とみかわしドレスの効果のおかげだった。

「ほらほらどうした!? 怪我しないうちに降参したらどうだ。今のうちだぜ?」

元々ミリアは防御は苦手であり、性にもあつてないため、挑発混じりに攻められると、簡単に怒り狂う。

「こんのおっ！」

正面から飛び掛るように斬り付けたミアは、ふぶきのつるぎの刀身に、もろはのつるぎをぶちあてる。

力こそ強いが、いなされれば致命的な隙を造るだけの大振りの攻撃だった。

「はっ、これで終わりだぜ！」

「甘いねっ、暗黒破砕撃ッ！」

狙い通りに挑発が決まり、勝利を手にしたかに思えたでろりんだが、ミアが暗黒闘気の奔流を剣に一気に流し込むと形勢は逆転した。

「うおおっ!？」

「隙ありい！」

暗黒闘気流は、ふぶきのつるぎを覆う氷を一気に砕き尽くした上に、その余波で彼の手を軽く痺れさせてその剣を弾き落としたのだ。粉碎された氷の欠片が舞い散って光り輝き、周囲を激しい寒気が覆う。

「ちいつ。そう来たか！」

これででろりんは素手となった。

仮にどうにか剣を再び拾ったとしてもすぐに攻撃は出来ない。ふぶきのつるぎは切れ味が良過ぎて、氷の刃で覆った状態でなければミアを殺しかねないためだ。

「ふふーん。油断大敵だね？ 挑発に乗せられても、策があればいいんだよ！」

それがミアの狙いだった。

そうして、攻撃を封じている隙に勝負を決めようという作戦なのだ。

「じゃあししよー。頑張って逃げ回ってねー」

攻守逆転を確信して笑みを浮かべたミアが剣の柄を握りしめ、すぐに逃げようとするであろうでろりんとの間合いを詰めるべく跳躍した瞬間。

「いや、チェックメイトだ」

「へっ?？」

「腹に力いれるよー」

気が付くと殆ど抱きつくような距離に入り込んでいたでろりんが左手でミリアのお腹を軽くなでていた。

逃げるか、剣を拾いにいくとばかり思っていたミリアは思わず固まってしまう。

「イオッ！」

手加減されたとはいえ、腹部に零距离爆裂呪文をうけたミリアは吹き飛ばされてごろごろと地面を転がる。

彼女の手からはもろはのつるぎは離されており、対するでろりんはその隙に拾ってきていたふぶきのつるぎを構えてミリアに向けており、勝敗は一目瞭然だった。

「勝負あり、だな？」

「大丈夫かミリア!? ホイミ！」

慌てて駆け寄った影夫が地面に寝そべるミリアのダメージを回復させる。

「あぐう……お兄ちゃんありがとう」

「こらあーでろりん! もうちよつと手加減しやがれ!」

「おー……いつつつ。手加減はしたっつーの。しょうがねえだろ、俺も必死だったんだよ」

「そうは見えなかつたぞ!」

「いやいや。速えわ重いわでギリギリだったつての。紙一重だぞ!」

「しかしなあ。もうちよつとだな……」

呪文の余波で少し焦げた左手をさすりつつぼやくでろりんは、抗議を続けようとする影夫だが、小さな手が彼の体を掴んできたことで、止まる。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。真剣勝負なんだから痛いくらいは当たり前だよ」

「うーん……そりゃあそうなんだけどさ」

「そういうの、過保護っていうんだよ?」

「だあーわかった、俺が悪かったよ!」

「心配してくれて、ありがとね」

思わず過保護モードに入った影夫だったが、ミリア本人にそう言われては、何もいえない。

影夫もついでろりんに文句を言ってしまったが、真剣な立会いなのは分かっているのだ。

ただ少し激しく吹き飛ばされて心配になってしまっただけで。

「でも悔しいなあ。油断なんかしてなかったのに負けちゃうなんて」

「いや、ミリアの攻撃センスは凄いだろ？ その分防御に問題が多いけど。クロスフォローがなくなると問題が噴出してくるな……」

「うーん。防御は苦手なんだよ」

ミリアは腕組をしながら頭を捻る。

勝つためには防御技術も磨かなければいけないらしいというのは分かるが、ピンとこないのだろう。

「だいししよーはどうしたらいいと思う？」

「……さてな。短所をなくすのも、長所をもつとのばすのも、どっちも正解と言えるが」

「一撃必殺！ ってほうが格好よくて好みかな？ 攻撃伸ばしたい！

攻撃極振りにしたいよ！」

ふたりの試合を見届けていた口力は、正直なミリアの言葉に苦笑しつつ、言葉を続ける。

「ま。それはもつと後の話だ。攻撃も防御も未熟な部分があつて、伸びる余地があるから、今は総合力を高めとけ」

「うんっ！ ねえでろりん。いきなり暗黒処刑術とか暗黒闘殺砲をしてたら勝てたのかな？」

「あーその対策は考えてたぞ？ 大技は隙も大きいからな。最悪受けるのが無理なら、全力で回避に専念して隙を突くとかすればなんとかなるかと思ってたし」

「うーん。わたしってまだまだだなあ……」

勝てる見込みは薄かったと知り、はあつと、ミリアはため息を漏らす。

「やっぱりでろりんししよーはすごいね。勝ったと思ったのに負けた。修行の成果ってすごいね」

「いや、俺も課題が山のように出たさ。そもそもミリアに比べて非力な分、正面から強敵にぶつかった時にもうちよつと楽にさばけるようにしなきゃな。剣技の向上のみじゃ辛そうだ」

「まほー剣ができたらいいのにね」

「一応ふぶきのつるぎを使えば、斬ると同時にヒヤダルコとかはできるぜ。でもダメだな。威力が限られすぎだろ」

「中級呪文だもんね」

「ま、ぼちぼちやるしかねえな」

こうして、ロカに見守られ、時折助言を受けながら、でろりとミリアは修行を続けていくのだった。

## 迷えるマアムとお友達

奇跡の泉の水を口カにあげたお礼として、ミリアはマアムに連れられて、村外れにあるなだらかな丘の上にきていた。

さつそくミリアは草が生い茂る丘の上に、ごろごろと転がって伸びをしてみる。

「ふあくふつかふか。草のじゅうたんだね」

「ふふふ、もうすぐ花もいっぱい咲くのよ」

マアムにとってここは幼いころからよくここにきているお気に入りの場所。

元気いっぱいだったころの口カにここでよく遊んでもらったという思い出の場所でもある。

「あのね……ミリアは怖くないの？」

「何が？」

「戦うことや力をつけること。誰かを傷つけるかもしれない、力があるからこそ誰かを失うかもしれない、災いを呼ぶかもしれないこと……」

「怖くない。むしろ力がつくのは楽しいかな？」

「ミリアは強いよね。アバン先生と同じ。私は怖いわ……」

そういうと、マアムが三角座りで膝に顔を埋める。

「たまに思うの。もし父さんに力がなくなったら、魔王軍との戦いとか、この村を守るための戦いとかができなかつたら、病気で死ぬこともなかったんじゃないかって」

「んんんでも、それだと魔王軍を倒せなくって世界はハドラーのものになったかもしれないよ？」

「うん。父さんのしたことは、正しいし素晴らしいとも思うの。多くの人を守って、助けて……でも。それなのに、寿命を縮めて、もうすぐ病気で死んじゃうかもしれないなんて」

マアムは弱々しく、不安を吐露し、迷いを見せる。

ミリアは話に聞いていたマアムの人物像と違う様子に少し首をかしげた。

「うーん？」

ミリアは自分に重ねあわせて考えてみた。

クロスお兄ちゃんと出会う前……パパやママやお兄ちゃんが生きていた頃の自分は、今よりも弱かったと思う。

あの頃だったら、大好きな暗黒闘気の力も怖かったかもしれない。だから、マアムもおそらくは口力だいししよーが死んじやって、ソレを乗り越えて強くなるのかな。ミリアはそう思った。

「じゃあ、直接人を助ける力ならいいんじゃない？ 回復呪文とか」

「……おとしだったかな。アバン先生に稽古をつけてもらったの。その時に回復呪文も習って……『力なき正義もまた無力』だって教えてもらったの」

「うん……」

「その時は、なんて素晴らしいんだろう、その通りだなんて思って、頑張ってたんだけど……その後ね、村の子が拾ってきた大怪我した子犬を、助けてあげられなかった……」

マアムは身を震わせながら、言葉を続けていく。

涙を堪えているのか、その声は震えている。

「その場には私しかいなくて、助けてあげてって、頼まれて、必死で助けてあげようとしたんだけど……どうにかしなきゃって、焦って慌てて……結局助けられなかった。なんで助けられなかったのって泣かれちゃった。私もいっぱい……」

「泣いちゃったんだね」

「うん……私どうしたらよかったのかな。力があつて頼られて、助けられなくて。また同じことになったらどうしようって。それでも、何もしないことが正しいわけないのに。ほんと、弱いよね私……」

そこまで言って、マアムは『銃』のようなものを取り出して、ミリアへと手渡した。

「ミリアは凄いよ。私より年下なのに、大人びてて、使うのが難しい怖い力も正しく使って皆を守って笑顔にしている。とってもすごい勇者だよね……」

「……………」

「それね、先生にもらった銃なの。でも、私なんかが持つていいのかな。先生は私が使っているかぎり、誰かを救う力になるって言うてくれたけど、ミリアが持つてるほうがずっと——」

いい。そう言いかけたママムの声は、遮られる。

「本当はね、私だつてたまに怖いことはあるよ。でも力がなくて何もできないほうがもっと怖い……そう思ってるから」

「もっと、怖い……?」

「ママムが回復呪文を知らなかったら、助けようとすることもできなかったんだよ。何にも出来ずにただ見てるだけ。そつちのが怖いと思う」

「それは……」

「力があつてもなくても理不尽なことは起こっちゃうんだ。その時になつて、もっと力があれば！　っていう後悔は、もうしたくない。だから私は頑張ってる」

「そうなんだ……」

「うん。それに私は、誰かに守つてもらうだけのお姫様になるなんて我慢できないしね。自分に出来ることを精一杯して、殴つてくる奴には倍返しで殴りかえしてあげなきゃ気が済まないし！」

「ば、倍返しはどうか……?」

倍返しを強調して鼻息を荒くするミリアの言葉に、ママムは思わず気が抜けて小さく笑った。

「ママムはどうなの？　優しいだけで何もできないお姫様になりたい?」

「それは……ちよつといやかな」

「でしょ?　私の知ってるお姫様も、そんなのまっぴらゴメンよつて言うと思うし。もしもママムが『うん』つて言つてたら本当のお姫様より、お姫様っぽかつたかも?」

そう言われて苦笑するママムに、ミリアは魔弾銃を手渡し返して、その手に銃を握らせる。

「あのアバンのことだから、それも自分で考えて決めなさいつてことでこの銃を託したんじゃないかな。それできつとママムはお姫様





「……！」

「うう……ぐふっ」

「あはははははっ」

ズーンと音が聞こえそうなくらいに落ち込むねこぐるみ姿のクロスに、ぷりぷりと頬を赤らめながらお説教をしているミリアを見て、マアムは笑いがこみ上げて止まらなかった。

「クロスさんもお友達になってね……よろしく」

「俺のことは呼び捨てでいいよ！ こっちこそよろしく」

「ミリア、可愛いお兄さん、ちよつと貸してくれない？」

「いいけど……はい。どう？ お兄ちゃん、かわいいでしょ？」

「うん、かわいいね」

ねこぐるみボディのクロスがマアムに抱えられ、抱きしめられる。

「むぎゅっ……」

今は原作より数年も前。

まだマアムの胸は控えめなので、クロスとしても別に興奮したりはしない。

「お兄ちゃん？」

「なっ、なんだよミリア」

「んんん。なんでもない。信じてるからね」

「??？」

小首をかしげて不思議そうなマアムと冷や汗を流すクロスであった。

「ところでミリアってアバン先生に会ったことあるの？ そんな口ぶりだったけど」

「うん。昔、勘違いしてお兄ちゃんを攻撃したから。会ったら一発殴ってあげようと思ってる！」

「そ、そう……えっと。先生はすごく良い人で、悪気はなくて……その、お手柔らかにしてあげてね？」

「あーミリア。デコピンくらいにしておこうぜ？」

「えー？」

プンスカと鼻息荒くして憤るミリアを、マアムとクロスは慌てなが

ら宥めるのだった。

## パプニカへ

2週間後。影夫とミリアは、ネイル村を飛び立っていた。

「それじゃ、ポルトスの町とソフィアの港町にお願いします。場所はこことここ。まずはポルトスの町のほうに。それと、ロモスの山脈のどこかで一度休憩させてください。」

「はっ了解しました。地図をお借りいたします！」

「その、何とかって町で何かするの？」

「いや。ルーラでこれるようにするだけだよ」

「ふうん。ねえご飯くらいは食べようよ。美味しい料理があるかも！」

「まあそうするか」

ちなみに、ポルトスの町というのは、ピラア・オブ・バーンの落下地点となる場所であり、ソフィアの港町は、劇場版で出てくる港町のことである。

影夫は、好きな漫画と設定集を暗記するほどに何度も読み返すのが大好きであったために、ちよろつと出てきただけの町の名前もなんとか覚えていたのだ。

余談であるが影夫は、某漫画の白衣観音経やアニメ版のオリジナル経文も無駄に言えたりもするほどに、無駄な暗記は得意だった。

「あれ？ ブロキーナさんは探さないの？」

「うーん。『ロモスの山奥』ってだけじゃあ情報が少なすぎるんだよなあ」

ロモス王の話では例の翁はロモスの山奥をそのままに動き回っているらしく、ここにいけば会えるという場所はわからないらしい。

時折、ロモスの山で活動する猟師が出会ったという話があるが、場所も時間もバラバラなので手がかりはない。

「じゃあ爆裂呪文でもぶちこんで、反応をみるとか？」

「いやいや。山火事になったらどえらいことだぞ」

「や、やめていただけますと幸いです……」

原作ではマアムがすぐに見つけているみたいだったが、そんな幸運

は期待薄だろう。

そもそもミリアは武闘家ではないし、どうしても修行をつけてもらう意義は薄い。

悩んだ末に止むなく探索は中止に決めたのだ。

「でも残念。すつごい強い技とか使えるおじいさんなんだよね」

「まあー武術の神様って言われるくらいの人だし。あの歳でミストバーンと生身でやりあえるとかありえん人だよ」

ミリアの言うとおり、強力な技が山とあり、あの人の元で修行すれば剛の拳も柔の拳も極められそうだし、文字通りの必殺拳も覚えられるかもだしで影夫としては本当に残念ではあるのだ。

「そうだな、じゃあ3日だけ。探してみるか」

「見つかるといいね」

「あつ、降りるならあそこがいいな。アキームさん、そこをお願い」「了解です」

その後、ロモスの山奥のふもとにある村を拠点として、山をいくつか回ってみたものの、結局影夫達はブロキーナには出会うことは出来なかった。

搜索を諦めた一行は、ポルトスの町とソフィアの港町に寄りつつ、次なる国へ向かうのだった。

★★★

パプニカにつくなり、影夫とミリアはパプニカ王宮で王に謁見して、国内遊覧の許可を貰った。

そして今、王宮内の一室へと向かっていた。

「レーオナー！ 遊びましょー！」

「はぁーいミリア。いらっしやいー！」

ミリアの言動は、一国の姫に対する態度ではないが、レオナは気にしてないどころか嬉しそうだ。

謁見した時に、王様にもひとりの友人として接して欲しいと言われていたし、問題はなからう。

「それでねそれでねっ、今気球で世界一周旅行中なんだよー！」

「へえ、楽しそうでいいわね。パプニカではどこへ行く予定なの？」

「えつとね、ベルナの森でしょ。地底魔城跡に、あとパプニカ大礼拝堂も見るの！ 後は王都でも見物しようかなって」

ベルナの森というのは、ピラア・オブ・バーンの落下地点の1つであり、劇場版の舞台になった場所である。

なお、バルジ島が候補にあがらなかつたのは、マトリフの住処から大渦をはさんで見えているくらいの距離なので、わざわざ向かわなくても大丈夫だからである。

「またずいぶん変な観光の仕方ねえ。パプニカにはもつと栄えた町や風光明媚で知られた観光地もいっぱいあるわよ？」

確かにレオナからすると違和感があるだろう。

とはいえ原作のことは話すわけにはいかないし、変に固執して疑われるのもまずい。

「うーん、じゃあ途中の街くらいには寄っていくかあ」

「それなら私も着いて行くわ。パプニカ国内なら各地を見てるから詳しいいわよ。案内してあげる！」

「いやいや。姫さんなのに、フットワーク軽すぎるだろう！」

「国内なんだし別に平気よ。バダックは煩いだろうけど……絶対に逃げ切ってみせるわ！」

「大脱走だね！ 面白そう!!」

「……大丈夫かなあ」

数十分後。

影夫の心配したとおり、王宮は大騒ぎになっていた。

「ひめくっつ、今日は習い事がありますぞ！ お待ちくださいませっ！」

ええいつ、みなもの者、であえっ！ 姫様が逃げたぞ、追うのじゃあああっ!!」

「あはは、ゴメンねー。帰ったらやるから」

「バイバイ♪」

空を往く気球船を、バダックが地面に転がりながらも追いかけてつ、姫が逃げたと人を呼んで、ぎやあぎやあと大騒ぎを続ける。

あれじゃあ、レオナが帰ってくるまで王宮は上へ下へとてんやわんやの大騒動だろう。

本当にいいのかなあ。

楽しいレオナの横で、慌てふためくバダックに暢気に手を振って笑ってるミリアが羨ましい。

「おいおい本当に大丈夫なの？ 姫の誘拐にならないのかなあ」

「本人から付いてきてるんだから大丈夫なんじゃない？」

「ちゃんと後で彼らに説明してくれよ。迷惑も掛けたんだからフオローもしておくんだぞ」

「はいはい、ちゃんと分かっているわよ。ちゃんと後で謝るしお勉強もします。これでいい、クロスお兄さん？」

「平気だってお兄ちゃん。レオナの脱走はいつものことみたいだし……おてんば姫なのはみんなわかっているよ」

「ちよつとミリア、それどういう意味？」

「えー。そのまんまだよ。本気で騒いでたのはバダックさんだけだったもん。お城の人達はまたかって感じだったし、みんな慣れっこなんだよ」

「なによそれー？」

「むうー、合ってるでしょ？」

ミリアの物言いにカチンときたのか、レオナがずいっとミリアに近寄って頬を掴む。

負けじとミリアも頬をつまみ返して、むくれ顔を近寄せていき――

「ぶははははっ」

何がおかしいのか、少女ふたりは笑い合っていてじゃれていた。

「うーん、ようわからん」

女の子同士のやりとりに入っていけず、影夫はねこぐるみボディで気球船の籠の縁から身を乗り出して、眼下に広がる雄大なパプニカの自然を楽しむ。

「見てる分には自然は多いほうがいいなあ……」

「んー。しっかし、気球船ってのはやっぱりいいわねえ。パプニカでも早く導入しなくっちゃ」

いつの間にか、影夫の横に来ていたレオナが影夫のボディを抱き寄

せて、顎の下を撫で撫でしつつ、そんなことを言ってくる。

「って、遊び目的かよ」

「あら。真面目な用途よ。人を選ばず国内を早く移動できるもの。国内視察に、通信情報から軍事まで。用途は幅広いわ。作るのと維持にお金が掛かるけど保有すべきよ」

「もう一歩進んで飛行船でもつくりやあいんじゃないか。

ようは今の気球船をもっとでっかくして、動力をつけて、多くの物と人を運べるようにしたもんだが」

「へえー面白い発想ね。でも良さそう。空から多くの人や物が運べたら革命的なことだわ」

そう言いながら、チラリと気球船につんである野営道具や食料などの荷物の山を横目で盗み見るレオナ。

「うーん、やっぱりクロスお兄さんと一緒にいると刺激になるわね。ミリアと一緒になら楽しいし……（隠れて乗り込んだら、見つからないわよね）」

「んん?! 今小声で何か言ったか?」

「えっ? なんのことかしらあ?」

「どこを見てる! こっ所りもぐりこんで国外までついてくる気じゃないだろうな?」

「ふーんふん♪ あら〜見て見て、あれがパプニカでも有名な〜」

「おい! 露骨に白々しい態度はやめろよ! 本気についてくる気か!?!」

「あはは、退屈しなくて良さそうだね」

「笑いごとじゃねーよ!! 国外脱出したら本気でまずいだろ!」

「でも楽しくていいと思うけどな〜」

「うんうん、ミリアもそう思うわよねえ」

「……（どうかそれだけは、勘弁してください）」

視界の隅で、下手をすればパプニカ姫の誘拐になるかもしれないというとんでもない状況に、アキームが盛大に冷や汗を掻いているのは見なかったことにするのだった――



## ロモスの名もなき村での出来事。(閑話)

影夫とミリアは、ネイル村を後にして、ロモスの山の麓にある村にやってきていた。

「なんかさみしいところだね」

「なんだろうな、活気がないというか……」

気球船を村の広場に下ろしたのだが、この村の人達は冷たく一瞥しては無視して去っていくだけだ。

ネイル村では気球船を見た村人や子供たちが集まってきて騒ぎになったものだが。

「クロス殿、どうしますか?」

「ともかく、村長さんを探して話を聞いてみようか。アキームさんも一緒に来る?」

「いえ。どうにも妙な様子ですので、私は万一に備えて気球船を警備します。出立まで番をしておきますので、宿はおふたりだけでどうぞ」

「悪いけどお願いします。いくかミリア」

「うんっ。んしよっ」と

ねこぐるみ影夫を肩の上に乗せたミリアが気球船を降りたところで一人の目つきの悪い爺さんが歩いてきた。

「旅人か?」

「え、うん」

声の険しさにミリアは思わずうつむいて後ずさる。

じろりとミリアを見たその老人は、苦々しげに顔を歪めた。

「悪いことは言わん。死にたくなければさっさと村を出ることだ。とくにお嬢ちゃんのような子はな」

「え?」

「わしはこの村の長をしておる。用事があるなら好きにせい。じゃがなるべく早く村から出て行くことだ……」

言うだけ言って、老人は去っていった。

「やな感じ。余所者は帰れってこと?」

「うーん、なんか違う感じがしたけどなあ」

影夫には老人の悪意や害意が感じられなかった。警告というか忠告というか。そのように感じたのだ。

「ともかく宿を探そう！」

だがそんなことをいくら考えてもしようがない。

ミリアとともに宿を探して、村の中を走り回るのだった。

「はあく。宿はないし、村人には避けられてるし。気球船で野宿かなあ」

「ああ。まあ話しかけても無視されるんじや、泊めてもらえないし」

「しかしやっぱ変だぞこの村は。村人の数が少なすぎるし、態度もおかしすぎる」

影夫は、宿を探して村を回る間、大きすぎる違和感を覚えていた。村の広さとしてはネイル村よりも何倍も大きい。なのに人の数はまばらだ。

誰も住んでいないのか朽ちた家もチラホラと見掛ける。

それもやけに老人が多く、若い女性が少ない。

村人達の態度も、ミリアを見ると避ける態度で、話しかけても逃げてしまう。

何か尋常ならざる事態が村で起こっているように思えて仕方なかった。

「一体なんなんだ……」

「あ、女の子」

「ん？ ああ。ちゃんと子供もいるんだな……」

ミリアの目線の先には一人でつまらなさそうに、道端の石を蹴って歩いている女の子がいた。

ミリアよりも年下みたいで、見た感じ7、8歳くらいにみえる。

「おねーちゃん、だあれ？」

「私はミリアだよ。それでこっちがクロスお兄ちゃん」

「わあっ、猫さん？」

影夫は挨拶がわりに少女の肩へと飛びのって、その子に身体を摺り寄せた。

「ほら、撫でてあげて？」

「う、うん……かわいいね」

恐る恐るといった様子で猫ぐるみボディを撫でたその子は、リラックスしたのか次第に表情を緩めてくれる。

「えっと、おねーちゃんは旅人さん？」

「うん。泊めてくれるひとを探してたんだけど……皆逃げちゃうから、野宿しようかなあって」

「ねえおねーちゃん。よかつたら、ウチにくる？ 外のお話しも色々聞かせてほしいな」

「いいの？」

「うちはおばあちゃんふたりで、部屋も余ってるし大丈夫だと思う！」

こうして、まともな反応を返してくれる少女に出会ったことで、ミア達はようやく一息つけそうだった。

★★★

「ミアアお姉ちゃんすごいねっ。強そうな戦士さんや喋れる猫さんと世界を旅してるなんて、おとぎ話みたい！」

「そ、そうかな？」

「いいなあ……私なんか生まれて村から出たことないもん」

ミアアを家に招いてくれた少女——アリシアはすっかりミアアになついていた。

「そっか。じゃあ、大きくなったら、一緒に旅をしてみよっか？」

「ホント!? あ、でも……」

談笑をしながらの食事は楽しい。

アリシアの前でお姉さんぶってみせるミアアの姿を微笑ましく見つめる影夫。

この村に来てからは息が詰まることばかりだったので、彼はミアア

がりラックスしている様子にほっとしていた。

そこでふと、影夫は視線を感じる。

見るとこの家の主であるクロエお婆さんが見つめていた。

「あつ、すみません。寝床だけじゃなくって食事までお世話になってしまつて……」

「いえ、いいんですよ。この村は旅人も滅多に寄りませんからねえ。ほんとに孫も嬉しそうでこちらが御礼を言いたいくらいで……」

老婆は優しげに微笑んだ。

アリシアは両親を亡くしており、クロエお婆さんに育てられているらしい。

それにしても。家の広さは本来6、7人でも住めるようになつているので、何か事情があつたようだ。

だがそこはきつと事情があるのだろうと察した影夫はそれには触れず、食事に戻るのだった。

そして食後。

アリシアとミリアはふたりで食器を片しにとたとたと走りまわつている。

影夫はというと、ゴールドの詰まつた袋をクロエお婆さんに渡していた。

感謝の気持ちも込めて、一般的な宿賃の十倍以上が入っている。

「いやあ、すっかりお世話になつてしまつて。これ、食費と宿賃です」

「いえ、いいんですよ。孫のあんな楽しそうな顔ひさしぶりで……昔はこの村ももつとにぎやかで友達も多かつたのですが今では……ね」

「病気か何かですか？」

「え、ええ……そのようなもので。すっかり寂れてしまつてねえ」

寂しげにそう言うクロエお婆さんに、影夫は強引に袋を渡す。

「そうですね、やっぱりこれ受け取つてください」

「こんなに多く……いただけません」

「いえ、将来あの子が大きくなつたら、旅の資金にするとか」

「それは……どうもすみません」

「いえ、こちらこそ親切にさせていただいて……すっかりお世話になってしまいました」

「旅の方……本当にありがとうございます。あの子はずっと姉がいたらしいのに。って言うていましたから。これであの子も……いえ」

一瞬、泣きそうな表情になりつつも、お金を受け取るお婆さん。

影夫はその様子にも嫌な予感を覚える。

「え？」

「いえ。なんでもありません」

「あのっ。何か困っていることがあったら協力しますよ」

「ありがとうございます。でも、本当になんでもないのです」

「でも……」

影夫は胸騒ぎをとめられずに、クロエお婆さんに食い下がろうとする。

だが。

「ねえねえおねーちゃん、お部屋で遊ぼうよー」

「うんいいよ。ほらっおにーちゃんもはやくいこっー!!」

ミリアに引っ張られて、結局その日は話を続けることは出来なかった――

★★★

「うーんと。うーんと。これっ！ ふえっ……!?!」

影夫から一枚カードを引いたアリシアがガツクリと肩を落とす。

「ははは、残念ー」

「あちゃーババ引いちやった？ もう。お兄ちゃん大人げないんだからー！」

「そ、それは……いや、勝負の世界は厳しいんだ！ 本気でやってこそゲームは面白いんだよ」

じとつとした目で見えてくるミリアに居直って見せる影夫。

彼は、幼い子供にわざと負けてあげて、いやあ参った。強いなあ。なんて言っただげるような主人公気質ではなかった。

アリシアは幼いが故に仕草が素直で、分かりやすい。

影夫としては本気で泣かせるほどに勝つつもりはないものの、一位

になる気マンマンであった。

自分が一位になってアリシアを二位にしてあげて、ミリアには涙を呑んでもらおうなどと考えていたのだ。

「あうう。上がれると思っただのにい。また負けちやうのかなあ……」

「大丈夫だって、2番で上がったらいい。ミリアは単純で分かりやすいから勝てるって！」

「もう怒った！ アリシアちゃんババ渡して！ ふたりであくらつなお兄ちゃんを倒そう！」

「うんっ！ 頑張っておねえちゃん！」

アリシアが分かりやすくババを上にはずらして差し出すと、ミリアはそれを引く。

これでババはミリアに渡し、影夫は残り2枚。アリシアは残り2枚。ミリアが残り3枚という状況。

「2対1かよ!? 卑怯だぞ！」

ふたりが組んでしまうと、形勢は一気に影夫に不利となる。

反則行為ではあるが、影夫としても勝ちを狙う大人気なさを自覚している反面、小さな女の子ふたりが協力するのをやめさせるのまでは忍びなかった。

「べえっくだ。意地悪なお兄ちゃんなんかには負けないんだから！」

「ごめんさい猫のおにいちゃん。でも負けたくないの！」

「ふたりでやつつけちゃおうね！」

「うんっ！」

ミリアは、あつかんべーを影夫に見せつつ、アリシアの頭をなでる。

アリシアはミリアにくつつくように身を寄せていて、こそこそとナイショ話をしている。

完全に2対1の構図であり、しかも影夫は、悪役だった。

だがこれで影夫も小さなプライドにかけて、引くに引けなくなってしまう。

「ぐぬぬ……いいだろう！ ふたりまとめて倒してやる！ 勝つのは俺だ！」

「ふっふーん。さあ、ババを引いてねお兄ちゃん？」

ミリアが差し出すカードは3枚。

右のカードは、不自然に引きやすいように上にせりあがっている。中央のカードは、逆に引き抜にくいように下がっている。

左のカードは、一枚だけ妙に隣とのカードの距離があげられている。

「くっ！ いや、冷静になれ。心理作戦だ。これか……？ いや。これ！ と見せかけてこっち……？」

「あつ……」

影夫は迷うふりをしつつ、左から一枚ずつカードを抜く振りをしながら、反応を観察する。

そして中央のカードを握った時、ミリアが一瞬口元をほころばせるのを確認する。

「これがババか!？」

「……っ」

影夫がゆさぶりをかけるが、何も言うまいとミリアは口をつぐんで表情を消す。

だがもう遅い。影夫は勝利を確信していた。

「ふふふ。甘いミリア！ 俺を罠にかけようとしたのだろうか……」

一瞬、喜んだ様子を見せたミリア。

だが、それは罠なのだ。

「2対1が仇になったな！ アリシアちゃんの表情をみれば罠だと分かるぞー！」

「っ!？」

影夫はニヤリと意地悪く、勝ち誇った悪役の笑みを浮かべて、カードを引く。

「俺が欲しいカードは、これだぁーっ!!」

影夫は、ミリアが仕掛けた罠のカードを避けて引いたカードを手の中に入れて……驚愕する。

「バ、ババだとお!？」

「きゃははは！ ひっかかったひっかかったー！」

「ざんねんでしたー猫のおにいちゃん♪」

「しまったあああー!? 騙された!!」

「ふふっーんだ♪ お兄ちゃんのことくなく手を見抜けない私じゃないよ!!」

「ぐぬぬ……だがまだ分からん!」

不適にほくそ笑む影夫。

たしかにここでアリシアがババを引けば、ババは一周したただけとなり、勝負の行方はまだ分からない。

そして、影夫には策もある。

「ふふふ。さあ、引いてみてよアリシアちゃん!」

「んくとお。ど・れ・に・し・よ・う・かな……これ!」

「ぬおおお!!」

だが。幼いアリシアは、いともたやすく駆け引きを無視してカードを引いてしまう。

姑息にも子供が思わずとってしまうようにカードを出して策を仕掛けていた影夫だったがその目論見は完全に崩壊……運否天賦の勝負になってしまった。

そして姑息な策を弄する影夫に勝利の女神はそっぽを向いた。

「やったあー!」

もはや勝負は決した。

カードが揃い歓喜の声を上げるアリシアは、次の番でミリアにカードを引いて貰って一番で上がり。

ミリアも、アリシアから引いたカードで数字を揃えることが出来て、残りカードは1枚となり、自動的に順位は確定する。

「きやははは、お兄ちゃんのだべ! とんま! かっこわるーい!」

「ぐぬぬ……分かったよ。降参降参! 俺の負けです! かっこわるいよ!」

「それじゃー罰ゲームは何してもらおうっか」

「ちよっ、そんな話聞いてないぞ!!」

「今決めたもーん。そうだよねー♪」

「そうだもんねー♪」



「ふたりともひでえよ!!」

想定外の罰ゲームを科せられることになり涙目の影夫を見て、アリスアとミリアは心の底から愉快に笑うのだった。

★★★

「んごーすぴー」

「んーむにやにやつ……」

影夫を抱いて眠りこけていたミリアが寝返りで影夫を押しつぶす。

「んぶ……あぶつ。ぶはあつ……なつ、なんだあつ……くるし……こちらあつ、つぶれるう……!」

「ふえ……? なあにい……?」

必死のタツプで、眠り眼を擦りながらミリアが身体を起こす。

「なあにじゃないって。俺のボディが潰れちゃうところだったぞ!」

「ふあく。ごめんさあく……」

「つたく。俺なら最悪死なないけど、アリスアちゃんを潰すなよ!」

「だいじょーぶだよ。抱つこの癖はお兄ちゃんだけだから。つてあれ?」

そこでミリアがアリスアがいないことに気付く。

「トイレかな?」

「さあ……そうじゃないか」

アリスアはミリアより幼いとはいえ、寝ている最中にトイレに行っても別段おかしくもない。

「寝ぼけてたら、危ないかも!」

「いやあ、さすがに大丈夫だろ? ミリアも平気だろ?」

「私はお姉さんだから! アリスアはちっちゃい子だから、気をつけてあげなくっちゃ!」

「はいはい……」

影夫の身体を抱えて、ミリアはパタパタと小走りでトイレに向かうのだった……のだが。

数分後、元いた客間に戻ってくることになった。

「なんで!? 家のどこにもいない」

「アリシアちゃんだけじゃない。クロエお婆さんまでいない……」  
「どっかに出かけちゃったのかな？」

「こんな早朝にか？ 俺らに黙って……？」

影夫が指差す窓の外はまだ薄暗く、朝焼けの空が広がっている。

時刻については大体4時ごろだろうか。

「嫌な予感がする……村を探してみるぞ！」

「うん！」

ふたりは急いで身支度を整え、アリシアの家を飛び出した。

それから数十分後の、村長の家。

そこで数人の老人が苦渋に満ちた表情で話し合いをしていた。

「それで、あの娘は。アリシアは、行ったのか？」

「ああ。嫌がりもせずにな……なあ本当にいいのか？ せめてワシらが代わるわけには」

「ダメじゃ。山のヌシは老人が来ると怒り狂う。おぬしも分かっているじゃろうが」

「クソツ！ 子や孫を犠牲にして、老人が生き延びる……こんなことが許されるのか?！」

「代われるものなら、代わってやりたいが……」

「ヌシは、生かさず殺さずを見極めておる。ワシらを根絶やしにせず、じわじわと苦しむのを楽しんでいるんじゃないじゃろう」

「ぐうっ……もう我慢できん！ どうにかもう一度王に知らせられんか？ あの旅人に頼めばどうだ！ 強そうな護衛もいるぞ。とにかくクロモスがダメならベンガーナでもいい。お金持ち国ならきつと強い戦士も……」

「ダメだ。みなもわかっておるじゃろう……ヌシは、かの魔王ですら戦いを避けたという『獣王』だと言う話じゃ。事実、勝てなかったではないか。助けを求めても怒らせるだけじゃ。今度こそわしらは皆殺しになる、生贄で済むのならば……」

「くそつたれ！」

「……………」

「う、そ。あの子が、生贄……?」

村長の家の外。その窓のそばで呆然とミリアがつぶやいた。

村の中を搜索していたふたりは、何の手がかりも得られず最後に村長の家にやってきていたのだ。

そして窓辺で聞き耳を立てて、老人達の話聞いていた。

「どうしてっ!!」

そのあまりの内容に、ミリアは我慢できずに窓枠を掴んで身を宙に躍らせ、窓ガラスを蹴破って家の中へと転がり入って絶叫する。

その肩にちよこんと乗っている影夫とともに、やり場のない怒りを漲らせ、目を見開いて、老人達を睨みつける。

苦しげな表情を浮かべる老人達は、さらに眉をしかめさせて、うめくように声を出す。

「聞かれてしまったか……」

「どうして、なんであの娘が!?!」

「しょうが、ないのですじゃ……半年に一度。村の誰かが犠牲になって、皆が助かるなら……」

「しょうがなくはないよ!」

「村長さん、あんたなんで簡単に諦めてるんだよ!?! 子供が犠牲になるんだぞ!」

ミリアが我慢できないのと同じく、影夫も我慢ならなかった。

天真爛漫に笑ってミリアになついていたアリシア。

あんな小さい子が。ミリアと本当の姉妹のようだったあの微笑ましい光景が、生贄にされるなどで二度と見れないようになるなんて。

「よそ者が知ったことを言うな! 村長の娘は最初に生贄にいったんだぞ!」

「……っ!?!」

「それだけじゃない! 村の為に、村長の血縁者から次々に生贄になって……!」

「ワシらだって代われるものなら代わってやりたい。だがな、アイツは年寄りの肉は食わんのだ!!」

「ロモス王に知らせたこともあった！ 国一番の騎士が来てくれて……彼は強く素晴らしい人だった。しかし、その彼でもダメだったのだぞ!!」

老人達は溜め込んだ鬱憤を、怒声にのせて全てを話していく。

『獣王』の報復として村人の半数が殺された上、殺された騎士は相討ちになったというところで虚偽の報告をすることになった。

「なんだよそれ。なんなんだよ……」

影夫は老人達の話聞いて呆然となる。

ひど過ぎる。

平和を謳歌する今の世で。

誰にも知られることなく、助けを求めることも出来ずこの村はずっと悲惨な目にあい続けてきたのか。

「村長大変だ!」

そこへ、老人に比べるとまだ若い——といっても40を過ぎているような中年の男が駆け込んでくる。

「クロエ婆さんもヌシのところへ行ったらしい！ 自分を身代わりに孫を守る気だ!」

「馬鹿な……そんなことをすれば機嫌を損ねるぞ!」

その場がざわめく。

老人達は恐怖と不安におののき、戸惑うばかり。

ミリアはその場の雰囲気を見捨て、中年の男に掴みかかり、ぐつと服が破れんばかりに引っ張った。

「そいつはどこにいるの!?!」

「な、なんだよあんた」

「いいから早く！ 手遅れになる!!」

「む、村はずれの洞窟にいるが。村の入り口からまっすぐ進んだ山のふもと、だ」

「どいて!!」

そこまで聞いたミリアは、中年の男を突き飛ばすと弾丸のように村長の家を飛び出していった。

「レミーラ！」

「くっ……おねがいつ、間に合って！」

ミリアは、足場の悪い山道を必死に走りぬける。

影夫がレミーラで薄暗い周囲を照らし、木々や背の高い草が点在する山道を進んでいく。

暗黒闘気で強化されたミリアの全力走は全速力の野生獣よりも早いほど。

まるで風のようになって、彼女は山道を駆け抜けていく。

「くう……もつと早く」

「ミリア！ バランス取ってくれよ、バギマあ！」

「っ!? 大丈夫、いけるー！」

影夫はミリアの背中から手を生やすと、バギマで加速を付ける。

猛烈な突風に押され、推進力を増したミリアはもはや弾丸のようだった。

「見えた！ あの穴だ!!」

「間に合って……！」

ぽつかりと開いた洞窟の入り口にふたりは飛び込んでいった。

「どうか、どうかお願いいたしますヌシ様。生贄は私にしてください。

私はどうなっても構いません。ここにお金や宝石もあります。これでどうか、この子だけは」

ジメジメとして埃っぽく獣臭い匂いが充満する洞窟の奥。

そこでアリシアを抱き抱えたクロエが大きな影に向かって、必死に懇願している。

「ダメダ！ ババアノニクハマズイ！」

「そんな……どうか、どうかお願いいたします！」

「ウルサイ！ オレニメイレイスルナ！ オレハオウダ！ サカラウナ!!」

「ううう……」

その影が、叫ぶ度に洞窟がかすかに揺れる。

彼はこの洞窟の主であり、この周囲を縄張りとしているヌシであつ

た。

人語を解するモンスターであり、粗野で粗暴かつ凶暴で残忍な仕打ちを村に行ってきた張本人である。

「ミナゴロシダ」

その彼は今怒り狂っていた。

生贄の数をかなり我慢してやっているというのに、反抗してきた。

そのことが彼には許しがたい。

生贄を差し出させ、恐怖と絶望で言いなりになる村人を罵るのは愉快であったが、自分に対してお願いと言いつつ譲歩を迫り、何度もしつこく食い下がる。

そのことが彼をこの上なく苛つかせた。

人間の村は楽しめた玩具であったが、苛立たせるのならば壊すことに躊躇はなかった。

どこかでまた別の玩具を見つけなければいいだけだ。

「え……？」

「オレハ、イケニエ、スコシデガマンシテル。オマエ、シツコクサカラッタ!! ミナゴロシダ!」

「あ……あああ。そんな……」

「マズハ、ムスメダ、ツギハオマエダ! ヨロコベ!!」

「いやあああつ!」

ヌシは、脅えるアリシアににじり寄り、巨木のような腕を振り上げる。

「おゆるしを、どうかおゆるしを……!」

「ジャマダババア!」

「あつ……」

孫を助けようと必死にすがりつくクロエだったが、ヌシに蹴り飛ばされて宙を舞い、強かに洞窟の固い地面に打ち付けられる。

「おばあちゃん!? もういやあ、だれか……たすけてえー!」

涙をうかべたアリシアの悲痛な絶叫が洞窟に響く。

「グヒヒ、ナケ! サケベエエツ!!」

そこへ突然。小さな黒い影が突進してきて、ヌシにぶつかった。

「グッ、オオオオツツ!!」

あまりの激しい衝撃に、ヌシはその場から吹き飛ばされるように地面に倒れ付す。

「な、なに……?」

「早くお婆さんと一緒に逃げて!!」

何が起こったかわからず混乱するアリシア。

声をかけたミリアが指差すと、猫ぐるみ姿の影夫が倒れ付すクロエお婆さんの側で、手早く回復呪文をかけて終えていた。

「ああ……あなた方は……」

「くっ。急いで出来るだけ遠くに隠れてくれ!」

影夫はクロエお婆さんを庇うように前に出つつ、退避を促す。

あまり猶予はない。

ヌシはふらつきながらも立ち上がろうとしている。

その間によろよると立ち上がった老婆はどうかアリシアを抱えて、柱状の岩の物陰に身を隠した。

「はあっはあっはあっ。まにあつて、よかつたあ……!」

「ダメだよ! ミリアおねえちゃんも早くにげよう! おねえちゃんまで食べられちゃう!!」

「私なら、大丈夫」

「グオオオオオ!! オノレエエツ、ニガサン!」

アリシアに短く答えながら、ミリアの胸中に猛烈な怒りが湧き上がっていた。

家族の絆や温もりを奪おうとする存在はミリアにとって、憎悪の対象である。

ミリアの周囲には、ヌシが食べたと思われる骨が散乱している。

野生動物と思われるものから、人骨までである。

特に人骨には思いいれがあるのか、天上から吊るされていたり、乱雑ながら積み上げられて一種のオブジェにされているようなものさえある。

「グハハッ、マズハオマエカラ、クツテヤル!!」

「おねえちゃん……いやだよっ、もうやめてえー！！」

「グヒヒツイイゾー！ ナケー！ ワメケエツ！ オレヲタノシマセロオ  
!!」

ヌシは泣いて懇願するアリシアをニタリといやらしい笑みで見つめて楽しげにあざ笑う。

それが、ミリアの逆鱗に触れた。

「オマエみたいなのがッ！ この世にいるからあッー!!」

ミリアは、視界が赤く染まるかと思う程、怒り狂っていた。

山のヌシはだるだるに緩んだ肉体をもった怪物のトロール。

しかも、その下卑た表情は、大事な家族を奪ったタネパ村の村長を彷彿とさせて、憎悪と怒りをさらに増幅させる。

「滅ぼしてやる!!」

怒りと憎悪に呼応して、ミリアの体内の暗黒闘気がオーラのようになり立ち昇る。

「すうう……はああ……っ」

ミリアはぐつと足を広げて腰を落とし、右の拳をヌシに向けて、重心を低く構えた。

「はあああああああああッー!!」

深い呼吸とともに、ミリアの体内から爆発的に暗黒闘気が噴き上がっていく。

「おおおおおおおッ!!」

力の波動が周囲に伝わり、洞窟の岩にヒビを作り、埃をまきあげる。

黒い紋様が明滅する、怒りと憎悪に染まった顔で、ミリアはヌシを睨みつけた。

「グウツ!? ツツ、ツブレロオ!!」

本能的に気圧されたヌシは喚きながら、ミリアに向けて走りながら思い切り拳を振り下ろした。

「ああっ……!!」

ミリアの何倍もあるような巨体から振り押される力の籠った拳。

思わずアリシアとクロエは粉碎される少女の身体を想像して目をつぶってしまう。



「ふんっ！ はあ!!」

しかしミリアは、その打撃をこともなげに暗黒闘気を纏った手刀で弾くように打ち払った。

「こんなものだよ」

「ヌガア！ グオオオオーー！」

「おまえの拳なんてさあ！」

ヌシは怒りに任せて3度4度と拳を振るうがその全てを、ミリアは防ぎきる。

「ダメレエー！」

「……っ!？」

「ツカマエタゾ、シネエー！」

ヌシはミリアの拳を逃がさないとばかりに大きな手の平で包み込むようにして掴んだ。

「くっ……」

彼が手を握ると、ミリアの手はほとんど埋まったように見えるほどだった。

ヌシの馬鹿力によって、ミリアの骨はミシリミシリと軋みをあげる。

「ゲヒヤヒヤー！」

彼は下卑た笑いを爆発させた。

たしかに、この生意気な人間は、動きが素早く技量もあるようだ。だが、力の勝負に持ち込めばどうだ。

「あうっ……ぐああ……！」

拳に走った痛み表情をゆがめるミリア。

その様子を見た彼は勝利を確信した。

これまで散々人間を甚振り、その脆さと弱さを知り尽くしているのだ。

万一にも逃がさないように、しっかりと大きな手でミリアの拳を覆うように握り締める。

「ツブシテヤル！」

「つぶれるのは……お前だアッ！」

ミリアは逃げようともせず、力任せに拳をヌシに向けて押し込む。

真正面からぶつかり合つての力比べ。

どう考えても少女は非力で巨体のヌシが勝つ。

誰もがそう思う光景だった。

「おおおおオオツーーー!」

雄叫びとともにミリアの身体から黒い闘気が吹き上がった。

黒髪が吹き上がる黒い闘気で揺らめき、瞳が赤く光る。

「負けるもんか……っ!」

全身に伝播した暗黒闘気はミリアの肉体をさらに強化し、力をギリギリまで引き出していった。

「オマエなんかああああっ!! わたしが殺してやる!!!」

「グオオオ……バカナ!!」

そして、押し勝ったのはミリアだった。

自らの背丈の半分以下もないミリアに、ヌシはなす術もなく後退させられていく。

ヌシは力を入れても押し込まれ続けてしまう現実に驚愕して周囲を見渡し動揺していた。

「オレハツ! ジュウオウダゾ!!」

「嘘をつくな!! 獣王はっ! クロコダインはそんな人じゃない!!」

「シツテイルノカ!! オレノスベテヲウバツタ、アイツノナカマカアアツ!!」

「前の獣王……そんなやつがあー!」

ミリアが最後に勢いよく拳を振りぬいた。

それで完全にバランスを崩したヌシは地面に倒れこむ。

「ガアツ、グウツ!」

そこにミリアは馬乗りになつて、彼女は無駄のない鋭い軌道で小さな拳をヌシの体に叩きこんでいった。

「奪ったなっ! 殺したなっ! 踏み躪ったなアツ!」

「ガッ! グギヤアツ! ガハアツ!」

小柄な少女とは思えないほどの膂力でミリアが殴る度に、爆裂した



ヌシは木に衝突してへし折れるほどの衝撃を受けた。  
激しい衝撃のダメージでヌシは地面を転がり苦しみすぐには動けない。

「トドメー」

ミリアが腰からどくがのナイフを抜き取り、右手に持ち構える。急いだあまり、手持ちの武器はこれだけしかない。

しかしこれでは、ヌシの分厚い脂肪と筋肉の層を貫いて致命傷を与えるのは難しいであろうと思われた。

それ故にミリアは、影夫の力を借りる。

「お兄ちゃん……身体を使わせてー」

「おうよー」

影夫は猫ぐるみから出てミリアの体内へと入り込む。

素早くミリアはどくがのナイフを逆手に持ち直して、自分のお腹……おへそのあたりへと密着させた。

すかさず、どくがのナイフの剣先に向けて、影夫は自らの暗黒闘気体を伸ばして絡みつかせ始めていく。

「はああああああ……っ！」

ミリアは両手でゆっくりとお腹からナイフを引き抜くような動作を見せる。

するとそれにあわせて、お腹から暗黒闘気の刀身が生えるように形成されていく。

それは、影夫の肉体である暗黒闘気を圧縮した刃状に変形させてどくがのナイフから放出しているのだ。

ミリアの手の中に『クロスの剣』が出来上がっていく。

やがてソレは、一本の黒き剣となり、ミリアはそれを天に向けて掲げる。

「うああああああっ……っ！」

雄叫びとともに、さらにミリアは自身の暗黒闘気をクロスの刀身に纏わせた。

まばゆい闇の光が剣から放たれ、洞窟の入り口の篝火と月灯りの光を吸っているかのようになり、周囲に明滅する影を作り上げている。

「すごい！ おねえちゃんは勇者さまだったんだ！」

洞窟から出てきていたアリシアが声を上げる。

少女と老婆から見るとまるで、黒い光の剣が、少女の身体から出てきているよう。

それは伝説の勇者のようなおとぎ話の光景に思えた。

アリシアの胸は感激でいっぱいだった。

今日知り合ったばかりの優しいお姉ちゃん。

本当にあんな姉が欲しいと思っていた。

素敵で優しい彼女は、困った時に颯爽と助けてくれる勇者のお姉さんだったのだ！

「コロシテヤル!!」

一方、どうにか起き上がっていたヌシも近くの木を自慢の怪力でへし折って、ソレを抱えてミアリアに向けて怒り狂って突進してくる。

「おねえちゃん……がんばって！」

アリシアは声をかけつつも、かけらも心配していなかった。

だってミアリアお姉ちゃんは勇者だから。

勇者は必ず悪い奴をやっつけてくれるのだから。

「滅びろおおおお!!」

「シネエエエエ!!」

交差の瞬間に一閃。

鈍く激しい衝突音と衝撃が周囲に走る。

「……っ！」

「……っ!?!」

そして、交差した両者は、しばらく走って、動きが止める。

ヌシの持った巨木は真つ二つになっていた。

ニタリと、凶悪な笑みを浮かべるのはヌシ。

彼は巨木が折れるほどの威力で殴りつけてやったと、勝利を確信した。



出来ただろうに。

「ふう……」

ミリアは、再び剣をお腹へと突き刺すように動かして、兄の身体を自らの体内に戻していく。

お腹に飲み込まれていくように黒き刀身は消え去り、影夫の体はミリアの肩に抱きつくねこぐるみの中へと戻っていく。

「ミリア、おつかれさん」

「うん。間に合ってよかったよ」

影夫はミリアの肩の上にくっついていた猫の身体の中へと戻って、ぽんぽんと猫ぱんちでねぎらう。

「おねえちゃんー！ー」

そこへ、満面の笑みを浮かべた、幼女がミリアに抱きついてくる。

「アリシアちゃん。怪我はない？」

「うん！ ミリアおねえちゃんは、勇者さまだったんだね！」

「お兄ちゃんもだよ？」

「クロスの猫おにいちゃんもありがとう！」

「勇者さま、ありがとうございます！ これで、孫は、村は……救われます」

「うん。ほんとうに、良かった」

心からの笑みを浮かべるアリシアと、涙を流して喜んでいるクロエお婆さんを見て、

影夫とミリアも笑いあうのだった。

★★★

数日後。

ミリアと影夫は、ロモス王に謁見して、先代獣王の件を報告していた。

「なんとそのようなことが……すまぬ。ワシがふがないばかりに、村人たちは惨い目に遭い続けていたとは」

その話を聞いたロモス王は苦渋の表情で、自分を責めた。

かみ締められた唇から、血が流れるのではないかと思う程に、王の

悔恨は強いものだった。

「いえ、王様には知るすべはありませんでしたから。どうしようもなかったんです」

「民あつての国じゃ。国のために民を生贄にして、王が知らぬ顔などあつてはならんこと。すべては余の責任じゃ」

「王さま……」

「二度とこんなことが起こらぬように約束しよう。村にも出来るだけのことをする」

「はい、よろしくお願いします。村人達も喜ぶと思います」

民を思い、心を痛める王の真摯な言葉に影夫とミリアは背筋を伸ばして頭を下げる。

ロモス王は玉座をたつてゆつくりとふたりに近づいて、腰を落とし、てふたりの手を取る。

「勇者ミリアよ。村を救ってくれたこと、本当に感謝する。そなたこそ真の勇者。我が国を救ってくれた英雄じゃ！」

「んー。なんか照れくさいね、お兄ちゃん」

「まあ感謝の気持ちはありがたく受けておこうぜ」

「しかし……覇者の剣は本当に要らぬのか？ そなたのような勇者にこそ相応しいと思うのじゃが」

「はい。私にはお兄ちゃんがいますから」

胸を張って影夫を抱き寄せて抱きしめるミリア。

ロモス王はその仕草に思わず、孫をみるように顔をほころばせた。

「そうか。そうであつたな。しかし、せめてゴールドだけでも受け取つてはもらえぬか。せめてもの気持ちじゃ」

ロモス王の横にいる兵士がゴールドの詰まった宝箱を開けて、ふたりに向けて差し出した。

だが、ふたりは顔を見合わせてゆつくりと首を振る。

「そのお金はあの村のために使つてあげてください。あの村の子ども達が大きくなった時、旅行に行けるくらいに」

「あいわかった！ 勇者ミリアよ。今後ロモスは出来うる限り、そなたの助けとなろう！ 何か困ったことがあれば何でも言つて欲しい」



「はい！　ありがとうございます」

ミリアと影夫が頭を下げた瞬間、万雷の拍手が二人を包んだ。側で控えていた兵士達が心を打たれて、せずにはいられなかったのだ。

『勇者ミリアは凶悪な魔物を退治して村を救った。その上、ロモス王からの褒美を村の為に使って欲しいと辞退した』

その逸話は救われた村人達や、城の兵士達によって口々に話され、ロモス国民の間にも噂となつて広がっていくことになる。

『黒き神剣を振う勇者』『黒き高潔なる少女』の異名がロモス王国で生まれたのだった。

## レオナの選択

「あく楽しかったね！」

「ならいいんだけど……どこにでもある森だったでしょ？」

探索を終えたミリア一行は気球船で、パプニカの王都に向かっていった。

レオナはまだ探索先への疑問が消えないらしく、疑わしげな目でミリアと影夫をじと見する。

「いやあ、皆が必ず行くみたいな有名処より地元民しか知らないようなこれぞつてところに行くのが通の旅行なんだよ」

「木とか花とか、ロモスともベンガーナとも違ったよ？」

「まあ、それはそうだろうけど……」

「お土産もこーんなにたくさん♪ 私は大満足だよ」

「うんうん。きのこに山菜に果実……旅先での味覚狩りは外せないよな！」

まだ釈然としない様子のレオナに、ご満悦のミリアが大きな籠を抱えもって笑いかけると、影夫がわざとらしく追従してみせる。

そこには、ベルナの森でとってきた果実や山菜、きのこが山盛りになっっていた。

「あ、でも地底魔城跡のほうはちよつと残念だったかな。もう魔物がいないなんて。ダンジョン攻略したかったのに」

「そりやそうよ。何せ魔王の居城だったのよ？ 魔王亡き後、パプニカ総軍で残党を討伐して嚴重に封印処理。その後も定期的に見回りを欠かしていないわ」

本当だったら、中に入れないところなんだからね？ と自慢げに言いながら、レオナは感謝しなさいとばかり胸を張って見せる。

確かにレオナがいなければ、地底魔城跡を見張っている兵士とひと悶着することになっただろう。

「ははは。まあそりやあそうだよな。ほつとくと魔物の根城になったり盗賊がアジトにするかもしれないし……」

「ありがとレオナ♪ お礼にこの籠の食べ物をわけてあげる！」

「えっ、嬉しー、って、私も一緒に採ったじゃないの！ 元々貰う権利はあるわよ」

「じゃあ多めにあげる！」

「そう。あ、ありがと……」

「あーあ。でも地底魔城跡はほんとにガツカリだよ。宝箱も残ってないし、食べられるものもなくんにもなかったし、無駄足だったかなあ」

たしかに死火山の地底に食べ物はなйдろうなあと思影夫は思う。

当時の魔物たちの備蓄食料とかもとつくに腐っているだろうし。

一応宝物としては、『魂の貝殻』はあるんだろうが、あれはヒュンケル向けのイベントアイテムだしなあ。変に場所動かすとまずそうである。

「あつでも、あの闘技場はかつこよかったね。あそこで戦ってみたいなあ」

「ミリアは本当に食べることに戦うことが好きだな。サイヤ人かよ」

「どこの人よそれ？」

「んー、物語に出てくる宇宙最強の戦闘民族だな。死ぬほど飯食って超強いんだ」

「あはは、ミリアそつくし」

「ふっふっふ。スーパーミリア人にわたしはなるッ！ これで合ってるっ。」

「あはは、何よそれ〜」

「あ、ああ……うん。変なこと教え過ぎたか」

ミリアがポーズを決めてはしゃいでみせて、レオナは大受けしている。

なんか色々入り混じっててカオスなことになっていることに、影夫は自業自得ながら軽い頭痛と、恥ずかしさに悶えたくなった。

幸い、影夫以外にはよく分からないだろうが……。

「そろそろ着陸いたします。ご準備ください」

「あつ、ありがとうアキームさん」

話し込んでいるうちに、王宮についていたらしい。

アキームが気球船を操作して高度を落とし、中庭へと降りていく。

「ひくひくめくくくつ！ 待ちかねましたぞおー！！」

「あつ、バダックおじいさん……怒ってるね」

「げっ。ミ、ミリア一緒に謝ってくれない？」

「えー？」

「そ、そうね、夕餉はこれでなにか作ってもらいましょう。もちろんミリア達も招待するわよ！」

パプニカの王都は海に面した港町でもあるので、新鮮な魚介類も豊富だろう。

山の幸と海の幸を王宮の料理人が調理するのだ、贅沢な食事になりそう、案の定ミリアは速攻釣られてしまった。

「ほんと!? やったあ！ バダックおじいさんごめんさく！ わたしも行きたいっていったのがいけなかったんだよー！」

「ぬぬう……卑怯ですぞひめえー！」

ブンブンと大げさに拳を振り上げて、お説教をくれてやろうと気合を入れていたバダック

は、ミリアに謝られて氣勢をそがれてしまったようだ。

悔しげに振り上げた拳を下ろしてしまった。

「うんうん♪ これで万事収まったわね！」

「ミリアちよろいな……って、俺らがパプニカ王家の晩餐にお邪魔しちゃっていいのか？ 俺ら礼儀作法とかあまりできないぞ」

「そんなのいらないわよ。王族っていつでも人間なもの。四六時中お堅く過ごしてたらたまんないわ。食事時くらい立場も面倒な儀礼もなにもかも忘れて、気楽に楽しむべきなのよ」

「パプニカって格式高いとこだと思ってたけど、意外と碎けてるんだな……助かるけど」

「おじよーひんにご飯食べても美味しくないもんね」

その夜――。

レオナの父であるパプニカ王も交えた食事は楽しいものになった。

ミリアは最初、レオナの父に対して少し緊張というか人見知りして

いたが、レオナとじゃれあううちに、生来の無邪気さで身分差や相手の権威も気にせず楽しめていた。

パプニカ王は娘が友だちと一緒ににはしゃぐ姿を見て終始微笑ましげだった。

★★★

パプニカ王都滞在二日目。

「ってわけできくほんと嫌になっちゃうわけなのよ。いくら王族の義務って言ったってねえ。人間なんだから時には嫌になっちゃうのよ——」

「こつちもさ、大変なんだよ。お兄ちゃんったら、おっぱいおつきな女の人を見たらすぐに鼻の下延ばしちゃってさ、女の子の気持ちかわかってないんだよ——」

レオナの部屋で、ミリアとレオナはベッドに転がってだらけつつ、くつちやべっていた。

かれこれ話し込んで数十分。

取り留めなくポンポンと話題が浮かんでは消えていた。

(聞こえない聞こえない……読書に集中だ)

盛り上がるふたりを余所に、影夫は声も出さずに、レオナの部屋の本棚から拝借した本に集中しようとしていた。

パプニカの歴史と神についての本は興味深く、影夫はねこぐるみの手でペラペラと読み進めていく。

(ふむふむ……)

自分のことも話題に上がっているが、やれエツチだ、やれ女心をわかってないなどと、ひどい言われようである。

だが、そのとおりという自覚があるだけに言い返せず、女同士のマシガントークに割って入る気もないので、ミリアの腕の中で抱きしめられながら本を読みふける。

「ひめー！ そろそろお時間ですぞー！」

と、そこにドアの外からバダックが大声を掛けて来た。

「あくもうそんな時間かあ。ちよつと待って！ すぐ準備するわよ——！」

「勇者どの！ ひめが逃げないように見張っておいてくださいー！」  
レオナが怒鳴り返すと、バダツクはミリアに監視を頼んで、どたどたと走り去っていった。

先日の脱走騒ぎの再来を警戒しているようだ。

「……………どうしたの？」

「ごめんミリア。これから魔法の授業が……………あ、そうだ。ミリア達も受けてかない？」

「んー？ でも、パプニカって呪文を使うのに型の練習とかがあって、実戦向きじゃないって聞いたが……………役に立つのか？」

「えーめんどくさそう。実戦で使えないと意味ないよ！」

まあたしかにミリアが儀礼の型とか覚えても意味はない。

影夫としても、まったく同意見だった。

「それは大丈夫。実戦重視の先生だから」

「へえ、そんな人いるんだ」

「大臣達にはいい顔されたいんだけどね。私としても、儀礼でしか役に立たないお飾りの賢者になるなんて嫌だからその人に頼んでるのよ」

「へえー」

と感心しつつも、あまり意義はなさそうに影夫は思う。

マトリフ以上のことを教えられるのなら話は別だとは思いますがそんなことは無理だと思うし。

とはいえ他に急ぎの予定があるでもない。

ミリアも友達と一緒にいいだろうし、何か得るものはあるかもしれない、と影夫は反対することはなかった。

「なくんか陰気だし、ちよつと危ない感じもする人なんだけど。ま、根は悪くないと思うのよ。あつ、もう来た」

レオナがテーブルの上に本やら、羽ペンやらを用意して準備していると足音が聞こえてきた。

(つていうかお付のメイドとかにやらせたりしないんだな)

関係ないが、自分で教材にノートやらを準備して慌てるレオナを見て影夫はぼんやりとおもった。

パプニカ王の教育方針なんだろうか？

「姫様、失礼します」

扉がノックされて、賢者の格好をした青年がレオナの部屋に入ってきた。

「すみませんが、本日の講義を始める前には是非とも紹介したい人物がおりまして……」

「丁度よかった。こっちも紹介したい人が居るのよ。ほら、こっちきて」

「え、えつと、ミリアです。よろしくおねがいします」

レオナに手を引かれたミリアが影夫のねこぐるみをぎゅつと胸元で抱きしめて、ぺこりと頭を下げた。

そして、レオナの隣の椅子にちよこんと座る。

「急で悪いのだけど、この子にも一緒に教えてくれないかしら？」

「それは構いませんが、新しいご学友ですか？」

「ふふふ、何を隠そう。彼女こそ、いま巷で話題沸騰中の『勇者ミリア』なのよ！」

レオナはそう言って胸を張り、何故かドヤ顔で自慢してみせた。

だが、その青年には伝わらなかつたようだ。まさかという疑いの表情を浮かべた後、思案するようにミリアを見つめている。

「ふむ……あいにく世情に疎くて存じませんが……この少女が『勇者』なのですか？」

バロンには信じがたいようだ。

たしかに赤いドレスを来た華奢な黒髪の少女が勇者であるとは普通は思わないであろう。

「……………むう」

(いい加減こんな反応にも慣れたほうが楽だぞ)

ムツつとして小さく唸ったミリアを宥めるように影夫は前足で腕をさすってやる。

「ウツソー、バロン！ こども勇者の噂知らないの？ ベンガーナで活躍して名を挙げて、ベンガーナ王のお気に入り。気球船までポーンと貸すくらいにね」

「ほう……ああ、失礼こちらの紹介が遅れました。私は賢者バロンと申します」

「ふふふ、このバロンはね。ちよつと前まではパプニカを代表する賢者だったのよ。今じゃ私に魔法を教えているだけの世捨て人なんだけどね」

そういう人間でもない、と、礼儀作法にうるさくって困るのよ。とレオナは続けて愚痴る。

バロン以外の講師だと、周りに誰もいない場でも、王女と臣下の立場とか礼とかいって、ガチンガチンの敬語と態度を頑なに崩さなくて嫌なのだとか。

「えっ、あなたがあの、賢者バロンなの？」

「へえ、すごいじゃない。ベンガーナにまで名を知られてみたいよ？」

目の前の青年が後にレオナ暗殺を目論む人物だと分かって、思わずミリアは声に出してしまったが、レオナには違う意味に聞こえたようだった。

「いえ、俺などは……すみませんがそろそろ、連れを入室させても構いませんか」

「あ、忘れてた。待たせてごめんなさいね、入ってもらって頂戴」

「はい、おいつ、入っていいぞ！」

話し込んでいてすっかり忘れていたが、彼がレオナに紹介したい人物とは一体であろうか……考えて、影夫は警戒の視線をドアに向ける。

(まさか……テムジンか?)

そして、入室してきたのは――

「「ええっ！？」」

「あーっ！？」 なんでレオナとミリアとクロスがいるのよ!？」

部屋に入るなり、ずるぼんは知り合いであるレオナ、ミリア、クロスがいたことに目を丸くして、驚愕していた。

「どうやら何も聞かされずバロンにつれてこられていたらしい。」

「そもそもよ！ なんてお師匠がレオナのところに來てるのよ！」



「そりや俺は姫さまに呪文を教えているからな……それよりお前に姫さまと面識があつたとは驚いたぞ」

「ベンガーナで出会って友達になつたのよ」

バロンは魔族の力を取り入れようとした事が、問題視されて公職を追放されてしまつている身の上だ。

だがパプニカ王は、バロンの進言は退けたものの、動機は理解できるとして慈悲をかけ、彼を個人的に娘のレオナに魔法を教える教師として雇っているのだ。

「しかし勇者との繋がりがわからんが……」

「バロンは何も知らないのねえ。ずるぼんはね、『勇者ミリア』と同じ話題になつてる『勇者でろりん』パーティで僧侶やつてるのよ」

ずるぼんが師匠と呼んでいる以上、師弟関係のはずだが、弟子の近況も知らなかつたというバロンにレオナは呆れ顔だ。

「なにっ!? そうか……それでマホイミに。力をつけたい、ということだったのか」

「だから言つたでしょ、閉じこもりつきりで外に出ないから世の中に置いて行かれるって……」

さらに畳み掛けるようにずるぼんが小言を漏らす。

「くっ……何故言わなかつたんだ」

「言えるわけじゃないでしょ！ わたしは勇者さまの仲間になつたのよ。どう、凄いでしょ。なんて」

「つてどうか驚きだわ。バロンがずるぼんのお師匠さまだったなんてねえ。どう見ても、うさんくさ……あ。ごめんなさい」

「い、いえ。じ、事実ですから」

「あはははっそのとおり。師匠は陰気であやしい奴なのよ」  
「……………」

ずるぼんにまで、言われて無然とするバロンだが、凶星を突かれて激昂するといったようなことはなかった。

(彼がバロン……原作じゃ、もつとプライドが高くて野心が強くて妄念に囚われている感じだったか)

影夫は疑問を感じたが、弟子であるずるぼんと再会したことで変化

があつたがあつたのかも知れない。

「ま、ずるぼんの師匠なら信用しても大丈夫そうね。どうにも嫌な感じがして、どこまで信用していいか迷っていたのよねえ」

「ダメよレオナ、師匠は力が正義とか言っちゃいそうなの。でも、魔王軍ほどの邪悪じゃ……ない、の、かなあ」

「あははは、ずるぼんってば無理しちゃって」

「あ、のな……」

こめかみを揉んで、顔を引きつかせていたバロンだが、そこで大きくため息をついて顔を覆い、深呼吸をする。

そして、次の瞬間には真剣な表情を浮かべてレオナの前に跪いた。

「……レオナ姫、どうかお願いが……」

砕けていた室内の空気が、一気に緊迫する。

「魔王の遺物である兵器——キラーマシンを私は所持しております。これをパプニカの守りに使う許可をいただけませんかでしょうか」

「……それは真にパプニカのためですか？」

「パプニカの神に誓って。パプニカを二度と戦火で焼かれぬため、守るためでございます」

レオナは跪くバロンを射抜くような視線を見つめ、ゆっくりと瞼を閉じる。

「……私は邪悪な力に頼り、用いるべきではないと教えられてきて、私自身もそれが正しいと思っていました」

「姫……私はっ」

思わずバロンは頭をあげて声を荒げようとするが、レオナの強い言葉にかき消されることになった。

「しかし！ 私は最近思うのです。どのような力も使うもの次第ではないかと。正義のための力でも、悪人が用いれば悪しき力になるでしょう。その逆も然り。正しきことに使うのならば、魔王の遺産としてそれは正義の力になるでしょう」

毅然とした口調でレオナが言い切った。

「パプニカの姫レオナの名において、キラーマシンの保有および使用

の許可を出します」

「あつ、ありがとうございます……！」

「……といっても、実権なんて殆どなあんにもないんだけどね」

Baronが平伏して感謝を述べたところで、レオナは凜々しい姫としての仮面をぼろりと脱ぎ捨てた。

「どうにかお父様を説き伏せて見せるけど……隠し持つのを黙認してもらうのが精々でしょうねえ」

ずっとそのままだったら威厳とカリスマで格好いいのに。と思う影夫。

一方ミリアは、やっぱりレオナはこうじゃなくっちゃと思うのであった。

「先に言っておくけど人員の用意は無理よ。私のおこづかい程度なら多少融通できると思うけど、予算もその程度。もちろん、パプニカ王軍の籍なんかも取れないし、実権のある立場にはしてあげられないからね。それでもいいのかしら？」

「そのお言葉だけで十分でございます。研究と改造はわが資財と身命をなげうってでも……」

そう述べるBaronの顔は、和らいでいた。

将来に希望が繋がったのだ。

パプニカ王の子は彼女ひとり。いつか王女となり国を導くであろう彼女から理解と確約が得られた。

それは大きくて、確実な希望だった。

もはや焦る必要はない。

どの道まだキラーマシンの制御方法の研究もまだなのだ。

うかつに急ぐと暴走の危険もあるし、魔王軍の持ち物であったがゆえに慎重さが求められる。

パプニカを守るための力が人々を傷つけることになっては本末転倒だ。

思えば、ずるぼんが戻ってきてから彼の思惑は順調に進んだ

理解されない孤独と闇に吞まれそうになっていた自分にさした一筋の光明になった。

(……感謝するぞずるぼん)

彼女がもたらしてくれた希望は、彼の闇を和らげた。

待てばよいのであれば、強硬手段に出る必要などはない。

(あの男はもはや不要だ……)

バロンは今、パプニカ王家の血を引いているというテムジンとか言う司教から、現王家を打倒しようではないかと誘いを持ちかけられている。

奴は信念を持たず、王になって権勢を誇りたいだけの俗物だ。

次期女王の信認を得た今、キラーマシオンを手元に置いている今、やつのようなくずに価値はない……どころか、レオナの命を狙うテムジンは明確な敵であった。

「司教であるテムジンという男が、姫さまを亡き者にせんと謀っております」

一度は同志となっていたテムジンをバロンはいともたやすく売り渡した。

元々、テムジンに対しては嫌悪感を抱いており、利用しあうだけの仲であっただけに躊躇などは一切なかった。

「……なるほど、私が否といったら、その話に乗るつもりだったのね？」

「いえいえまさかそのような。それに賢明なる姫様であればお分かりいただけると思っております。成立する前提ではありません」

「……パプニカを守りたいという思いは素晴らしいものだけど何をしてもよいということではないし、事をいそげば本末転倒なことになるわよ？」

「ご忠告肝に銘じておきます」

バロンは内心で舌を巻いた。

10をすぎた程度の小娘であるが、大人顔負けの賢さだ。本質を捉える力も備えており、清濁あわせのむ器量までもを見せている。

(姫は稀代の名君となられるだろう。この姫がいて、勇者でろりん一行や勇者ミリアといった次代の勇者も育っている——)

バロンは、魔王ハドラーによってパプニカの王都が蹂躪されて以来

ずっと胸のうちに抱えていた焦燥と鬱屈が薄れていくのを感じた。

これまでずっと、目を閉じるたびに友人知人や家族の断末魔に無残な姿が脳裏をよぎる日々をおくってきた。

魔王軍の圧倒的な力に打ち勝てる力を求めたものの、大魔道士マトリフにはなんだかんだと弟子入りを断られ続け、そのうちに居場所も分からなくなった。

仕方なく、王宮で呪文を学んでみれば見栄えや形式ばかりを気にしたお上品な儀礼的なものでしかなくて落胆した。

ならばと独学で学べば、魔族の秘術や禁術を学ぼうとしたとして糾弾され書を取り上げられて研究を禁じられ迫害をうけた。

それでも魔王軍の遺産を活用しようとしたところ、公職を追放された。

自分以外の人間がすべからず無知蒙昧に見えて絶望した。

焦りと怒りと嘲りばかりが胸のうちに募ってろくに眠れず、力を渴望するばかりの毎日だった――

「それでは姫様、授業をはじめさせていただきます。よろしいでしょうか？」

「ほらクロスもミリアもずるぼんも突っ立ってないでこっちに座りなさいよ」

「ゴホン、それでは本日お教えいたします呪文は、氷系呪文の中でも――」

「ただどこれからは違うだろう。」

信ずるにたる希望を見つけたバロンはここ数年、浮かべたことのない柔らかな表情で、呪文の講義をしていくのだった。

レオナ姫さまご乱心!? 三賢者の直訴!

「何もいないダンジョンっていうのも不気味よね……幽霊でも出てきそう」

「あーあ。モンスターでも出たら実戦テストできるのにつ」

レオナはミリアと影夫、バロンとずるぼんを引き連れて地底魔城跡に来ていた。

その目的は、影夫とずるぼんの協力で早期に稼動が可能になったキラーマシンの動作テストのためだ。

わざわざバロンの自宅から大型馬車の中に隠して、ここまで運んで来てあり、今バロンが中にはいつて搭乗していた。

「いや、実戦はまだ出来ない。こうして歩かせるだけでも不安定だからな。戦闘機動は

まだ不可能だな……」

よくみれば、バロンが操るキラーマシンの歩きは少しぎこちない。ときおりバランスを欠いてふらふらとするし、足の動きもきしんでいるような、奇妙な動きだ。

そんな動きを数度続けたかと思うと、ゆつくりとキラーマシンは動きをとめてその場にへたり込んだ。

「ううむ、やはりバランスの制御には――」

「いや、魔法力の伝達の方式が――」

「たしかに、改良の余地は、しかし――」

キラーマシンの肩部には影夫がねこぐるみ姿でへばりついており、ああでもないこうでもないと言葉を交わしている。

「むしろ操縦者の技量が――」

「うーん。今度、まぞっほ師匠を連れてくるよ。マトリフさんの弟弟子でさ。こういうの向いてると思うから」

「それはありがたい!」

「ああ。今はとりあえず動けるように応急処置をしないと。原因は。っと……」

「ううむ。これは動力の方に問題があるのかも知れないな」

そしてそのままふたりは熱中しきつて、メカ弄りを始めてしまった。

「ほんと、男ってああいうの好きよねえ」

「……むう。難しい話はよくわかんないよー」

影夫が自分を放つてキラーマシンに夢中でいるのが面白くないのか、ぷくつと頬を膨らませたミリアがふてくされる。

「ま、細かいことは任せておけばいいのよ。んくでも時間かかりそう。ちよつと休憩しましょうか……はい、ミリア」

「うんー」

レオナは、さつとその場に敷き物をひくと、ミリアの手を引いて座り込み、焼き菓子と飲み物を用意し始めるのだった。

★★★

ともあれその後一行は、マシントラブルの度に休憩を挟みつつも、ところどころ壁や天井が崩れているダンジョンを奥へと進んでいく。

「んー？ 誰かずつとついてきてるよね。モンスターじゃないみたいだけど」

「はあーっ。こんな所まで……もういい加減勘弁してほしいわ」

「えっ。レオナすとーかーされてるの!?!」

「すとーかーってのは知らないけど……たぶん違うわよ。ついてきてるのは三賢者」

「さんけんじゃ……あつ、お兄ちゃんが話してた、人達？ たしか名前が、ア、アポ……なんとかさん？」

聞いたことがあるなあと、ミリアは唸って頭を捻った後、影夫から聞いた未来の話の思い出した。

「あら、ベンガーナでも名が売れてきてるの？ アポロ、マリッ、エイミの三人の賢者よ」

「ああ、そうそう！ その人達！」

「キラーマシンの保有などはおやめください！ って、もうしつっこくて困っちゃうのよ」

「ふうん。でも断ったんでしょ？」

メカ談義に夢中になりながら、前に行く影夫とバロンを指差すミリア。ア。

たしかに、三賢者の主張が認められていればあの光景はないであろう。

「そうなんだけど、諦めてくれなくてさあ。魔王軍の遺物など絶対に邪悪だと決めて掛かっているから、話になんないのよ」

「分からず屋で迷惑してるなら、私が『お話』してあげよつか？」

「そこまではね……彼らの気持ちも分かるのよ。どんな力も使いようつてのは、実際にミリアやクロスを見るまで実感できなかったしね」

「……レオナがいいならいいよ。私に絡んでくるわけじゃないし」

ミリアが、少し眉を顰めて後ろを振り返る。

レオナ達の少し後ろに、レミーラの光に照らされた三賢者がついてきている。

「なんか、弱そう」

「弱……って。そりやま勇者と比べたらそうだろうけど」

3賢者のリーダー格であるアポロは、でろりんと同じくらいの年齢にみえる。

でも実力的にはでろりんよりも劣っているような印象をミリアは受けた。

「「姫さまー」」

と、そこにアポロを先頭に三賢者が、走り寄ってきて膝をついて頭をたれる。

「ふう……あのねあなたたち、時と場所を選びなさいよ」

嗚呼、また始まるのかと頭に手を当てて、レオナはため息を漏らす。

「「申し訳ございませんー」」

地面に頭を擦り付けんばかりの勢いで、謝りつつも三人は強い口調で直訴を始める。

「今一度申し上げます。どうか、どうかお考えなおしてください。邪悪な力に頼るなど、してはならぬことです！」

「姫さまー！ アポロの言うとおりです。世界を脅かしたかの魔王の遺



産などを扱うなど正しいこととは思えません」

「パプニカには、鍛え上げた精鋭の兵、邪を祓う神官、そして私達のよ  
うな強力な賢者達がおります！ 邪悪な力など不要にごさいます！」

アポロを筆頭に、姉妹と思しき賢者の女性もそれに続いてレオナに  
必死で訴え始めた。

「アポロ、マリリン、エイミ……あなたたちが訴える危惧は分かっている  
わ。でもね」

レオナがうんざりするほど直訴を繰り返す三賢者達だが、彼らの危  
惧も理解できるものだけにレオナも対応に頭を悩ませてしまっ  
ている。

「私の答えは変わらないわ。力は使い手次第よ」

バロンが語る危惧も、三賢者が語る危惧も、まっとうな意見であり、  
両者ともに真にパプニカ王国を思つてのことである。

それだけに、判断を下すレオナとしてはとても難しいものがあ  
った。

それでも——レオナはバロンの意見を採る。

「危険性は承知してるわ。だから策を講じて、検証も十二分に行つて  
いる。かの大魔道士マトリフにも助力を乞うつもりよ」

「パプニカ王はすでに十分に備えをなされております！」

レオナとて、乱れる兆しもない天下泰平の世であればキラーマシンの  
保有などはしなかった。

アポロが述べるとおり、パプニカ王はハドラー戦役の犠牲から多く  
を学んでおり、国中の教会や神殿に食料を備蓄した地下の避難所を設  
けたり、街はずれの森の中に避難小屋を作ったりしている。

現時点でも、万が一には備えられているのだ。

もしも魔王が復活して、パプニカが壊滅状態にされても民の多くの  
数が生き延びられる。

そして脅威が去り次第、逞しく復興できるであろう。

武力に頼らずに備えをした、パプニカ王の手腕はまさに賢王の施策  
といえた。

「ええ。父の施策は素晴らしいものよ。そこにもう一つの備えがあれ

ば、万が一の時にさらに犠牲が減らせるわ」

今の世は、魔王が倒されて久しく、平和である。

レオナも、ミアアと出会う前までは、父のやり方だけで必要にして十分であると思っていた。

「アレを戦争とかで使うつもりはないわ。本当に、万が一に備えて秘密裏に保有しておくだけ」

レオナは将来、大魔王バーンが襲来することを知らない。

ただ、地上世界がまだ見ぬ脅威に備えようとしているかのような、舞台が整えられつつあるかのような、嫌な予感を覚えていた。

「嫌な予感がするのよ。パプニカもそれに備える必要がある……そんな気がするの」

「姫様……」

アバンに続くといわれる、勇者ミアア、勇者でろりん一行達は、皆こぞって生き急ぐように力をつけようとしているように見える。

そして、それに合わせるようにベンガーナも水面下であるが、いろいろと動いているのがレオナの耳にも入ってきている。

それらが、レオナがバロンの意見を採る決め手となっていた。

「……………（早く終わらないかなあ）」

隣でレオナが直訴を受けている中、ミアアはそっぽを向いて知らんふりをしていた。

三賢者と会うのははじめてであるし、自分が割って入ると不愉快なことになりそうに思ったのだ。

「すみませんがミアア殿！　こちらに来てもらってもよろしいですか？」

「ん、なあに？」

キラーマシーンの頭部を開いたバロンが、ミアアを呼び寄せると何事か耳打ちをしていった――

## 蹂躪のミリア

「万全を期して扱い、私欲のために使うことは決してないわ。私の名とパプニカの神に誓ってもいい。分かってくれるわね？」

レオナが三賢者と議論を始めて数十分。

未だ、話は終わらずにいた。

「ぐっ……しかし、それでも！ 邪悪なちからというものは、正しい心をも歪ませるのです。邪悪なものとは存在自体が危険で、許されないものなのです！」

「へえ……？」

アポロがそう叫んだところで、不意に冷え冷えとした声が周囲に響いた。

互いに譲らず言葉を戦わせていた三賢者とレオナは、冷水をぶつかけられたかのように、言葉を止めて、声のほうを振り返る。

「そうなんだあ」

ミリアは静かに怒っていた。

邪悪とされる、というだけで無条件に全否定することは、ミリアが大事にしている物を、排斥するも同じだった。

アポロの発言はミリアの地雷を踏み抜いてしまっていた。

「……もういいや」

「「え？」」

「これ以上、話し合っても無駄だよレオナ」

「ミ、ミリア……？」

「ねえ三賢者さん。邪悪なちからなんか頼らなくても自分達がいるから、パプニカは何も心配ないってことなんだよね？」

「え、ええ」

「そ、そうなのです。我ら三賢者がパプニカにいるかぎりそのような邪道は不要です」

「ふうーん」

断言する言葉を聞いて、目を細めたミリアは面白くなさそうに呟く。

「ふふ。じゃあさ……私くらい倒せるよね？」

ミリアは酷薄な笑みを浮かべて三賢者に言い放ち、手招きをしてみせた。

「やってみせてよ」

ミリアは、腕の中に抱えている影夫のねこぐるみをゆつくりと撫でた後、肩の上にちよこんと乗せると、三賢者に満面の笑みを向ける。

「え……あ……っ」

その様子を見てゾクリと、マリンの身体に怖気が走る。

他の二人も雰囲気飲まれてしまっている。

「な、何故そのようなことをっ」

「勇者さまと戦う意味はありません」

「ふうん……これでも？」

「ミ、ミリア……っ？」

『ごめんレオナ。バロンさんから頼まれたことを済ませちゃうよ。ちよつと痛いけど怪我しないようにするから我慢してね。お兄ちゃん、フオローお願いね？』

『ああ』

「え……な、なにっ？」

ゆつくりとレオナに近づいたミリアは軽く耳打ちをすると、そのまま両手をレオナの首に添えた。

「あつ、があつ……!？」

ミリアがゆつくりと両手を掲げるように持ち上げると、レオナの身体は宙に浮いてしまう。

ミリアの両腕からは暗黒闘気が靄となつてうつすらと溢れでており、苦悶に歪むレオナの表情の悲痛さと首吊りのような体勢もあつて、禍々しさを演出していた。

「がはっ……!？」

加減されているとはいえ、首吊りに近い状態では本当に苦しいため、ミリアの手に指をかけて逃れようともがく。

迫真のというより本気の苦悶の様子に、三賢者は慌てふためく。

「な、何をなさるのです!？」

「姫様を離してっ!」

「戦わないと、レオナを殺すよ」

「「なあっ!?!」」

「ねえ、三賢者さん。自分達の力に自信があるんでしよう? 邪道に頼らず正道を貫けるほどに! 正面から理不尽を跳ね除けられるんでしょ?」

「あぐっ……はっ……」

「早く決めなよ。首が折れるか窒息で、レオナが死んじゃうよお?

さあつ。さあさあさあつ!!」

「わ、分かったっ、戦うから離してくれっ!!」

アポロの悲痛な声を聞いたミリアは、そのままレオナを地面にゆっくりと下ろした。

レオナの首筋にはミリアの指跡がついており、影夫は慌てて駆け寄り、ホイミで治療する。

「げほっげほっげほっ……ッ!」

咳き込みながらもレオナは事情があることを察して声を出さずに、それでも非難の目をミリアに向ける。

(いくらなんでも、やり方つてもんがあるでしょうがっ……ミリア……あとでおぼえておきなさいよ……)

「悪いレオナ……」

「いいわ、後で訳は聞かせてもらうから。もういいからミリアのトコに戻るときなさい」

「すまない」

レオナに促された影夫は、すばやくまたミリアの肩の上へと駆け戻っていった。

「……いきなり主を殺されかけて、有無を言わず戦いに巻き込まれる……理不尽だよね」

「力を選び好みたいなら、力を示せてことだ……俺達に勝てるならキラーマシンはいらない。だよなレオナ?」

「そ、そうね。真つ当な手段で万事問題なければ私に異論はないわ。三賢者が勇者ミリアに勝てるならキラーマシンの保有はとりやめま

す

「……………」

その場でただ一人バロンは無言のまま、お手並み拝見と言った様子で様子見に徹していた。

「そうまで言われては我らも黙ってはおれません」

「そうよっ！」

「ね、姉さん、アポロ……」

「いいよ。あそんであげる」

三賢者は構えるが、ミリアはただ微笑を浮かべて突っ立ったまま。舐めるもいい加減にしてみらおうっ！ 火炎呪文<メラゾーマ>！

「火炎呪文<メラミ>！」

「火炎呪文<メラミ>ッ！」

巨大な火の玉が3つミリアに直撃し、激しく炎上する。

「……………」

炎の中の人影は動きを見せず、なす術もなく炎に巻かれているように見えた。

「や、やったの……？」

「まだだっ、手を緩めるな！ 氷系呪文<ヒヤダイン>！」

「氷系呪文<ヒヤダルコ>！」

「氷系呪文<ヒヤダルコ>！」

激しい3つ吹雪が炎に包まれるミリアを襲う。

激しい炎と吹雪の温度差は並の人間なら耐えられそうにないように見えた……が。

「……効かないね」

ミリアは、身じろぎもせずにもその場に無傷で佇んでいた。

その身に紫色の霧をまとって。

「……うそっ、無傷!？」

「どうする？ あなた達じゃマトリフししよーみたいに魔法の霧を吹き飛ばすなんて無理じゃないかな？」

「……マホステか。あらゆる呪文の効果を無効化する呪文だ！」

「大正解。さすがは三賢者のまとめ役だね」

「そんな、それじゃあどうしようもないじゃない……」

その反則的效果にエイミとマリリンが動揺するが、アポロは知っていたようだ。

「この呪文は賢者殺しって言ってもいい性能なんだよねえ。相手の呪文は無効にしつつ、一方的に攻撃できる！　こんな風に……ベギラマッ！」

「くっ、閃熱呪文<ベギラマ>！」

「閃熱呪文<ギラ>！」

「閃熱呪文<ギラ>！」

アポロとミリアの閃熱呪文の打ち合いは一瞬の拮抗するも、マリリンとエイミの加勢により、三賢者に軍配があがる。

「へえ。やるね」

押し込まれてきた閃熱はミリアの元にぶつかって爆発を起こした。

しかしマホステに守られたミリアはかわらず無傷で、圧倒的に有利な状況は変わっていない。

「でも、痛くもかゆくもないよ。降参かな？」

「エイミ、マリリン、俺に合わせてくれ！　ぬおおおお……中級爆裂呪文<イオラ>！」

「中級爆裂呪文<イオラ>！」

「中級爆裂呪文<イオラ>！」

最初にアポロが、少し遅れてマリリン姉妹が、イオラの光球をその手の中に作りあげていく。

「爆発でマホステを吹き飛ばそうってこと？」

アポロの発想はミリアにも理解できた。

マトリフのところで修行中、彼女も同じ発想をしたことがあったからだ。

だが、その試みは無駄でしかなかった。

仮に極大呪文であるイオナズンの爆発やバギクロスの竜巻で霧を吹き飛ばそうとしても無駄なのである。

マホステの霧はそもそも『呪文そのもの』を受け付けないのだから。

さすがに、大魔王バーン級の呪文なら話は変わるのだが、三賢者がその域に達しているはずもない。

「その余裕がいつまでも続くと思わないことだ！」

三賢者が掌に作り上げたイオラの光球が放たれて、ミリアの元へと飛翔していく。

「その手は私も試したよ。三賢者と名乗ってにおいて、私と同じ程度のの？」

ミリアは微動だにせずその場で見下したように悠然と立ち続ける。

「ふっ、霧そのものを物理的に吹き飛ばせばいいだけだ！」

三賢者の放ったイオラは、ミリア本人ではなく彼女の足元に叩き込まれた。

「なっ!?!」

地面に炸裂して生じた爆風と衝撃で、固い床は割れ削れて、塵が巻き上がり周囲を覆っていく。

「あたたっ、知らなかったなあ。賢き者って伊達じゃないんだね！」

舞い上がった粉塵が収まった時、ミリアを覆っていた紫霧は消え去っており、砕けた地面の破片および呪文の余波でミリアの手足は軽く傷を負っていた。

「ミリア殿！ あなたの奥の手は破られました。どうかそれ以上怪我しないうちに降参なさってください！」

「……すげえな三賢者、マホステを破っちまった」

「あはは。そうじゃなくっちゃ。でも降参はまだしてあげられないね」

ミリアはここまで、あえて呪文という三賢者の得意分野に付き合ってきた。

それは、彼らの力と意思を確かめる為の試しであったが、彼らはミリアとクロスの想定を超え、賢き者の証を見せた。

「ここからは、本気でいくから——」

ミリアは暗黒闘気の使用を解禁する。

途端に邪悪な気配を放つ黒いオーラがミリアの身体からゆらりと立ち昇り始める。



「躊躇してたら——死ぬよ?」

「っ!」

血を流すミリアを見て、一旦は躊躇う様子を見せたアポロ達だったが、本気の殺気を感じて悔りを捨てる。

「お兄ちゃん、手伝って」

「ああ、アレをやるのか?」

「うん」

影夫はねこぐるみボディから抜き出すと、ミリアの体内へともぐりこんでいき、自らの身体をミリアへと委ねた。

ミリアは自分で練り上げた暗黒闘気と、影夫の身体の暗黒闘気を、両の手に集めていく。

「はああああ……っ」

みるみるうちに、ミリアの掌の中の暗黒闘気の球は大きくなっていく。

「あれは、まずい! ふたりとも、一点集中だ! 俺に合わせて呪文を重ねろっ……ベギラマ!」

「ベギラマ!」

「ギラー!」

唯一回復呪文を得意とするマリリンだけはギラでそれ以外のふたりがベギラマで、ミリアの腹部という一点目掛けて3本の熱線が飛んでくる。

その精度、息の合い方はまさに三賢者の名に恥じないものだった。

「「いけええーっ!」」

3つの呪文は、重なり合うことによつて、ベギラゴンクラスの威力となっていた。

「くっ、ぐうっ……抑えっ、きれない……!?!」

ミリアは迫り来る極大の閃熱を両手の暗黒闘気で呪文を受け止め、堪えようとする。

しかし。

「「うおおおおおっ——!」」

「だめ、きやああああ——!?!」

ベギラゴン級の呪文を握り潰すなどできず、眩い光の中に飲み込まれた——と誰もが思った。

「……なくんてね、ざあんねんでした♪」

「どうなっている!?!」

「なによそれ……」

「な……な……」

信じられない光景に、三賢者たちは三者三様の反応で呆然としてしまふ。

「受け止めただけだよ」

ミリアは濃密な暗黒闘気でベギラゴンを包み受け止めていた。

閃熱呪文は効果を発揮することなく、闇の霧の中で行き場を失い、球状になって紫電を放ちながら暴れるように震えている。

「マホステじや、ない? マホカンタ!?!」

「違うわ、あれは即時反射のはずだし、呪文の威力も落ちるはずよ!」

「でも、あれは呪文が増幅されていっている……!」

そう。マリンの言うとおり、少しずつ閃熱の球は大きくなって増幅されていっている。

「あはっ……おおきくなあーれ、おおきくなあーれ♪」

これは原作でミストバーンが使っていた、暗黒闘気で呪文を包み、増幅して打ち返すという技であった。

それを今、ミリアは見事に再現しきっていた。

(まあ、実戦向きじゃない技なんだけどね)

マトリフやまぞつほどの修行の中で見つけた新技であるが、現時点では制限も多い。

ミストバーンの暗黒闘気とは量質に違いがあるため、ミリアと影夫が全力をあわせて集中しないと使えず、呪文の増幅にも時間が掛かる。

その上、受け止める呪文の威力にも上限があり、本気のマトリフやバーンが相手だと無理という具合に、欠点が多い。

それでも、並のベギラゴン程度は受け止めることは可能であり、魔法使いや賢者にとっては悪夢のような技となっていた。

「いづくよっーえいつ!」

「くっ、防御光幕呪文<フバーハ>!」

ミリアがバレーボールを打ち出すみたい増幅した閃熱球をアポロ達に向けて討ち放つと、回避が間に合わぬとみたアポロは咄嗟にフバーハを展開する。

「ぐああああっ!」

「くううううっ!?!」

「きやああああっー!?!」

光の微粒子を結晶化されたバリアはガラスが割るように突破されてしまい、

並のベギラゴン以上の呪文を受けて、三賢者は閃熱に焦がされながら吹き飛ばされ地面を転がっていく。

「ぐ……」

「……」

服をあちこちを焦がされ切りさかれた3人はすでに満身創痍だった。

フバーハで減衰したとはいえ、受けたダメージは大きく、アポロとマリリンなどは倒れこんだまま動くこともできない。

「ね、姉さん! しっかりして……ベホイミ!」

唯一エイミだけはふらつきながらも近くで倒れるマリリンにかけよって回復を試みる。

咄嗟に庇われたおかげで、一番の軽症であったのだ。

「させると思っ?」

「ひっ……っ」

だが、そんなことが黙って見過ごされるはずはない。

エイミはアイアンクローで顔面を掴まれて、暗黒闘気の奔流を叩きこまれてしまう。

「きやああああああああああああっ!!」

「やりすぎよっミリア!!」

焼かれるような激しい痛みでエイミは絶叫しながら痙攣するよう

にビクビクと身を震わせる。

「やめなさいミリアー！」

その痛ましさにレオナは見ていられずに駆け寄って、ミリアに継りつく。

「……………」

「あああつー…………… うつ……………あ……………」

だが、怒鳴られてもミリアは暗黒闘気を止めなかった。

そのうちに、エイミは息を吐きつくしたのか、全身の力をだらりと脱力させてしまう。

「オオオオオオオツー……………!!」

「お願いだからもうやめてよミリア!!」

雄叫びをあげたミリアは、力尽きたエイミを地面に放り捨て、レオナをひきずったまま、アポロとマリンのほうへと駆け出していく。

「あ……………あ」

「う……………」

絶望がアポロとマリンを襲っていた。

三賢者にとってミリアは強い、あまりにも圧倒的で強過ぎた。

「さあ、エイミさんと同じにしてあげるね……………」

「あがつ!!？」

「がはつ!!」

アポロとマリンは、同時に首を掴まれる。

小さなミリアの手だが、強い膂力で食い込んでくる指に苦悶の音が漏れる。

「もういいのミリア！ これ以上やる意味はないわ！」

「……………ダメだよ。こいつらはレオナに力を選び好みしろって言ったんだよ？ じゃあ見せてもらわないとダメだよね」

狂笑を浮かべて、ニタリとアポロとマリんに笑いかける。

「資格と覚悟をさあ!!」

「ひ……………ぐああああああつ!!」

「いや……………きやああああああ!!」

ふたりは訪れるであろう激痛と恐怖に、絞りだすように悲鳴を上げ

る。

「きゃははははっ!!」

ミリアの手からは力が込められて、ふたりの顔を焼き尽す暗黒闘気が……放たれなかった。

「はいおしまい。これ以上したらレオナに怒られちゃうからね。さつきまでのほただのお芝居。安心してね♪」

「え……?」

事態の急変に呆然としていたレオナだが、慌てて、地面に倒れ付しているエイミのもとへ駆け出していく。

「もう怒ってるわよー!」

レオナは地面に倒れたまま痛みにも悶え苦しんでいるエイミの容態がとにかく心配だった。

「エイミ動かないで今回復を……ベホイミ」

「あぐ……あああ……」

顔を押しさえて、苦悶し続けているエイミに慌ててレオナが回復呪文をかける。

「う、うそ?! 呪文が効かない……?!」

だが変化はない。それは当然であった。

暗黒闘気とはそういう性質のものだ。

「エイミ、あなた。か、顔が……」

必死に回復呪文をかけながらレオナはエイミの顔の悲惨な状態に絶句する。

彼女の顔は、ミリアの指の形に焼かれたかのように、暗黒闘気の醜い跡が残ってしまっている。

「うそでしょっ……?! 何がお芝居よミリア! クロスも何で止めてくれないの!?! こんな、意味のない残虐な行為!」

「意味はある。痛みで呪文を封じる戦術なんだよ」

「うん、私は殺す気で向かってくる相手のつもりで戦っただけだよ?」

「魔王軍ならばこれくらい楽しみながら平気でやるぞ。それとも戦いで、敵の慈悲や理性に期待するのか?」

レオナとしても、ミリアとクロスが言うことは分からないでもな

い。

でも、レオナは到底納得できなかった。

「レオナ、あの三人が迷惑だと言ってたよね？ だから現実を教え  
てあげただけだよ」

ミリアなりにレオナを思ってしまった事なのも分かる。

だけど、こんな取り返しが付かないことをして欲しくなかった。

「でもこんな……なにもっ……ここまで……！」

レオナは半泣きになって震えている。

「私のせいであつ、エイミが……！」

自分の不用意な言動がきっかけとなつて、エイミの顔に一生消えな  
い大きな傷をつけてしまった。

そう思うとレオナは震えが止まらなかつた。

「不測の事態とか、理不尽だつてね。いつだつて圧倒的で、屈服を迫つて  
くるの。私のときもそうだった。お兄ちゃんに会えなかつたらその  
まま死ぬしかなかったから」

「いやはや素晴らしい。よくぞやつてくださいました！ 勇者ミリア  
どの」

ここまで、沈黙を保っていたバロンは拍手とともに、倒れこんでい  
るアポロに歩み寄る。

「お前達は、理想を唱えたが力で屈服させられた。これで分かつただ  
ろう。力を選び好みするような贅沢は今のパプニカにはできない」

「……っ」

「パプニカの中心戦力は賢者だ。そしてそれは弱点でもある。

だが、キラーマシンがあれば呪文を封じられても対抗できる。安  
全には万全を期すことを約束する。それで納得してくれ」

「は、い……」

アポロは、現実を突きつけられて、是と答えるしかなかった。

これでもう三賢者は、レオナの判断に口を出すことはないであろ  
う。

「三賢者さん。手荒くしちゃってごめんなさい……ちよつとやりすぎちゃったかも」

「いえ、容赦せずにと頼んだのはこの俺で、責任も俺にある。どうか気になさらずに……三賢者よ、今回の事で恨むなら俺を恨め」

「……………」

バロンが罪を背負う覚悟を見せると、沈痛な空気があたりに流れる。

「あつ。エイミさんなら後遺症も傷も残ることはないから大丈夫だよ！ ねつ、お兄ちゃん」

「ああ。ちよいと失礼つ……」

ねこぐるみボディに戻った影夫がエイミへ駆け寄って、暗黒闘気を吸収し始めると、エイミの顔にへばりついてきた黒い傷はあっけなく消え去っていった。

「ん、これでもう大丈夫」

ミリアは皮膚の表面に暗黒闘気をべつとりと塗りつけるように放射していただけなので、実際のところエイミは傷を負っていないかったのだ。

霧状の暗黒闘気によって神経を刺激されていただけである。

つまり、催涙ガスを浴びたような状態がイメージとしては近いだろうか。

「はえ？ 痛くない……」

「うん、跡も残ってないね。痛かったでしょ？ ごめんね」

「い、いえ……もう平気ですから」

「エイミさん。刺激感が残ってたりはしないか？」

「だ、大丈夫です……」

「良かったああ……！ ほんとうに良かったわー！」

エイミが、嘘みたいに消えた痛みと傷に呆然とした様子で、顔をぺたぺたと触ると、レオナはエイミに抱きついて喜んだ。

「はあーっ。もうっ、びっくりさせないでよー！」

「本当にごめんなさいレオナ……怒ってる？」

「怒ってるわよ！ でも、私のためだったみたいだし、そもそもバロン

の差し金みたいだったから、貸し1で許してあげるわ」

和やかなムードに戻ったレオナやミリア達をヨソに、バロンはアポロに回復呪文を掛けてその場に座らせると、詰問を始めていた。

「それでアポロ。キラーマシンのことは誰から聞いたのか教えてもらうぞ」

「5日前にテムジン司教さまから……レオナ姫が邪悪な力に手を出そうとしている、と。あれは封印せねばならぬと言われて……」

「あの愚物か。なるほど、流刑前に仕込まれたか。今はバルジ島にいるがな」

「そんな……」

「私達、騙されてたの……?」

バロンの裏切りにより、すでにテムジンは暗殺と篡奪を企てた罪で、捕縛されている。

十分な証拠も証言もあり、処刑となるはずだったが、計画は始まったばかりであって未遂であった事から、私財没収の上バルジ島への島流しの刑となっていた。

だがテムジンは捕縛される前に、三賢者に情報を流して唆していたらしい。

そのあたりはさすがという他なかった。

「でも、あの方は清廉にして慈悲深い聖職者です！ 私財を投じて孤児院を運営するほどの……!」

「ああ。その孤児院で育てた子を高値で国外に売って稼いでいたがな。王も大層ご立腹であったぞ」

「な……!?!」

「すべては王位篡奪計画のためだ。キラーマシンを俺に預け、使わせて、姫の暗殺と篡奪を目論んでいたのだ」

「そんな……」

真実を知らされて、がつくりと肩を落とすところをみるとアポロは心底テムジンを信じて尊敬していたらしい。

「あっ」



その様子を眺めながら、テムジンの手際に妙な感心をしていた影夫だったが、重大なことに気付く。

「ちよつと待つてくれよ！ やばくないか？ パプニカ王や大臣達は、キラーマシン保有に反対なんだろう？ テムジンが話を他にも漏らしていたら……」

「いや。あの俗物のことだ。キラーマシンを取り戻す為、秘密裏に進めているはず。大臣あたりに漏れれば脅威と見なされて、即座の破壊措置になるからな」

「ああ、それもそうか……」

「三賢者よ、キラーマシンのことは黙っていてくれ。姫が責任を持つてあずかるといつている以上、主を信じるのが臣下の勤めだろう」

「わかりました。できることがあれば協力することもお約束いたします」

「ああ、パプニカの為だ。ぜひそうしてくれ」

「あら？ 信じるに値しない主など挿げ替えてしまおうと思っていたあなたが、臣下の心得を説くのかしら？」

「滅相もない。もしそうだとしても、もはやそんな必要はありませんよ」

こうして、三賢者もキラーマシン保有に関わることになり、パプニカの守りはさらに磐石となっていくのだった。

★★★

「本当にすまないなクロスどの」

「まあいいよ、あなたのきもちもちは分かるしな……あ、ずるぼんの奴、ここ……この訳間違えてるな」

「む……」

「んー駆動系統には問題なさそうだな、ネックはやつぱり制御系かあ」  
「いや、素材の問題もあるのでは。代替金属がパプニカ銀では……」

「やつぱ、まぞっほ師匠やマトリフさんに見てもらったほうがいいなこりや。直訳は出来ても意識とか特殊な言い回しなんかはわからない部分もあるし、俺も所詮素人だ」

「クロス殿やミリア殿は、あのマトリフ殿に魔法を習ったのだから？」  
「ああ。まぞつほ師匠のツテで頼み込んでどうにかね。普通なら絶対に弟子なんか取らないといってたけど」

「ふむ……」

「あ、消耗してる部品があるみたいだぞ。ここところは補修が必要だぞ。あーそれとここ、このケーブルを介して魔力を伝達しているはずだから、接続先はこつちじゃないか？」

不器用な影夫が内部構造を弄るとどうなるかわからない。

本を元に構造を理解して、不具合の元の箇所を指摘したり、原因を推測するくらいしかやくには立たない。

「クロス殿、助かります」

「ま、メカ弄りは浪漫だしな。不器用で実際に弄くれないのは残念だけど……後でまぞつほ師匠やマトリフさんとも相談してつと——メモメモ」

「なにからなにまですまない」

「なあに、対価は貰っているからいいよ」

ヒラヒラと古書を揺すってみせる。

そのほかにもバロンが保有する貴重なアイテムやらを複数譲り受けていた。

（とはいえ、古書による呪文探しもそろそろ重複が多くて微妙になつてきたな……）

極大呪文は全て見つけてしまったし、これ以上は魔界の書物とかでもみないと新しい発見はなさそうであった。

「クロス殿、ここなのですが……」

「ん？ ああ、そこはたぶん……」

ちなみに、ミリアとずるぼんはこの場にはいない。

影夫と別れての行動に少し不安げにしていたものの、ずるぼんやレオナと一緒にならばと、出かけていった。

今頃はみなで街に出向いたり、王宮で遊んでいるんだろう。

（ま、帰ってきたら話しを聞いてみるかー）

影夫は知らなかったが、実際には王都周辺の凶暴化モンスターや、盗賊を退治していたらしい。

姫がそんなことをするとか危険すぎてありえないのだが、ミリアが雑魚のモンスターや盗賊程度に遅れをとるはずもないし、ずるほんもついているから大丈夫だろう。

レオナの行動力にミリアの実行力が加わったらとめられるものはおらず、バダックは毎日頭を抱えて、パプニカ王は苦笑するばかりの日々になるのであった。

## リングアニアにて

パプニカを後にした影夫とミリアは、特に問題なくリングアニア王宮へと着いていた。

リングアニア領に入っただけで、性質の悪い賊の一団を見かけて、叩きのめして捕縛したが、特筆すべき出来事はその程度だった。

リングアニア王との謁見もスムーズに進み、捕縛した賊の引き渡して報告をし、褒美の言葉と報償金を授けられた。

さらに、リングアニア国内での活動の許可を得た上に、バウスン将軍率いるリングアニア戦士団の紹介までしてもらったことが出来た。

リングアニアに来た目的はルーラ登録とバウスン将軍およびノヴァと会っておくことなので、これでほぼ目的は達成できたことになる。

(つてわけで、後はまあ観光モードで。と言ったのは俺だけ……)

「はむむぐつ、黒パンとチーズとソーセージの相性が最高つ、牛乳との相性も抜群だね！」

リングアニア王との謁見を終えたミリアは、リングアニア戦士団からの迎えが来るまで、貴賓室で軽食を食べさせてもらいながらくつろいでいた。

「はい、どれもリングアニアを代表する食材ですから」

「あんぐんぐつ。おかわり！」

「くすつ、今お持ちいたしますね」

小さく笑ったメイドさんが、追加オーダーを頼みに部屋を出て行く。

「まあ、ほどほどにしておこうな……」

「なんで？」

「正式に招待された食事の場じゃないし、来てすぐに厚かましいのはほら……」

ベンガーナ王みために、仲良くなれば遠慮がなくなる影夫であるが、さすがに会ったばかりの王様にドカ食いの経費を押し付けるのは気が引けた。

「んー、そう？ いっぱい食べるのを喜んでくれそうな王様に見えたけど？」

「まあ、そうだけどな……」

たしかに、ミリアの言うとおりであった。

原作でほぼ出てこなかったリングイアは、城塞王国といわれているだけあって、岩山をくり貫いて作ったような、堅牢なつくりの軍事都市である。

要塞の中に街が入っているという感じだ。

リングイア王はまさに質実剛健といった佇まいで、歴戦の老戦士のような迫力があつた。

配下の者達はもちろん、民も何らかの武道を学んでいるものが多いらしく、尚武の気風が溢れている国だった。

金属資源が豊富なのか、武器も良質な物が多く、はがねの装備品が多く出回っていた。

もつとも、ミリア達が装備するには弱いものなので購入はしなかったが。

「じゃあ、王都でリングイア料理を食べ歩かないよね？ 自腹だし」

「そのほうが色々食べられると思うし、それがいいと思うぞ」

とそこで、ドアが数度ノックされる。

「リングイア戦士団より、勇者ミリア殿をお迎えに上がりました！」  
「あ、どうぞ〜」

リングイア戦士団の迎えというとバウスン將軍かノヴァが来るのかなど思っていた影夫だが、意外な人物が入室してきた。

「よう。久しぶりだな、ふたりとも」

「あつ。へろへろししょー！」

「へ、へろへろ!!? なんでここに？」

「俺の師匠はバウスン將軍だからな」

「うお。マジかあ！ なーんか、俺らが行く先々にみんながいるなあ」

「そうなのか？」

「ああ。まぞっほはバルジ島の近くの島にいる。でろりんは、ロモス

のネイル村で会って、ずるぼんはパプニカの王宮で会ったぞ」

「ほう……みんな元気だったか？」

「うんっ！ みんなすっごい元気だよ。がんばってだいししょーの下で修行してたよー！」

「それは何よりだ」

「しっかしみんな、師匠がビツクネームばっかだよなあ。そんな人らから認められてるし……すっごいよな」

「いや、俺らだけじゃ腐ってたままだったからな……」

「へろへろ兄さん！ 勇者殿は……この方は？」

そこに、ノヴァが入室してきて、ぬいぐるみを抱えたミリアを見て首をかしげる。

「ここにいるのが、勇者ミリアと伝説の生きる武具クロスだ」

「へ？ この女の子と……猫のぬいぐるみが……？」

「ああ。クロスは形を変えられる生きる武具だからな、今はこうだが戦いのときはミリアと一体になって闘うんだ」

「へえ、すごいですね。それにしてもこんな子が……でも、底知れぬ力を感じます。こう、威圧感のようなものがありますね」

ノヴァはじつとミリアを見つめていたが、その力を感じて、納得したように頷いた。

「あ、紹介が遅れました。ぼくはリングアイア戦士団のノヴァと言います」

「えっと、よろしくねノヴァさん」

「よろしくな！」

「はい！ おふたりは兄さんの恩人で戦友で凄腕だとか。よろしくお願ひします！」

ミリアと影夫の手をとって、握手しては頭を下げるノヴァ。

影夫にとって予想外なことに、ノヴァはかなり感じが良く腰の低い少年だった。

原作での壮絶に自己中心的な勇者という感じは一切なかった。

（ねえお兄ちゃん。話で聞いてた感じと違うね。もつと嫌な感じの人

じやなかったっけ?)

(うーん。へろへろとかなり親しそうだし、何かあったのかもな……?)

「えっと。さつきから気になってたんだけど、ふたりは兄弟なの?」

「あ、いえ。これはぼくが勝手にそう呼んでるだけで……」

「俺は本当の弟のように思ってるぞ」

「に、兄さん。はずかしいじゃないか……」

「はは、すまん」

「おおーへろへろがなんか頼れるお兄さんって感じだ! でろりん達  
といると、もうちよつとゆるい感じなんだけどなー」

「素晴らしいえばアニメでは、ゴメちゃんの真似をして、ぴっぴー!  
とかしてた事を思い出す影夫。」

本物の勇者になったからか、ギャグっぽい場面はまだ見てないけど、見てみたいなあと思うのであった。

「勇者さま、お食事をお持ち……あら」

「む。食事中だったのか」

「みんなも一緒に食べようよ!」

そこへ、メイドさんが大量の食事を運んできて、4人は食卓を囲むことになるのだった。

★★★

その後、へろへろとノヴァに連れられて、リングアイア戦士団とバウ  
スン将軍にあいさつをしたミリアと影夫は早速手合わせをしていた。

「ノーザンツ、グランツ! ブレードオオ!!」

「はああああああ……暗黒、両断撃!」

跳躍して噴出した闘気剣を大上段から振り下ろすノヴァ。

対するミリアは、濃密な暗黒闘気を纏ったもろはのつるぎを思い切り振り上げて斬りつける。

命中の瞬間、闘気が激突して爆発する。

「うわあああ!」

闘気のぶつかり合いが収まった時、勝敗は決していた。

ノヴァの闘気剣が折れてしまっており、彼自身も吹き飛ばされて地

面に転がっている。

「くっ……やはり通じない。兄さん相手でもダメだったし、この技は問題が多いかな……」

「ん。威力はあるけど……同格以上の相手には通じないかな。隙が大きいのと狙いがバレバレなのがまずいと思うよ。防御なり迎撃なりされちゃうから。誰かがひきつけてる間に背後からぶち込んだら効くと思うけどね」

「ありがとうございます。とても参考になりました……もっと工夫してみます」

「オリハルコン粉砕を目指して頑張つてね！」

「ええっ!? は、はい……」

ノヴァは、肩を落としてつつ、ブツブツと独り言をもらして難しい顔をし始める。

ミリアの激励は無茶振りもいいところであるが、実現できれば、かませっぽい扱いから脱却できるかもしれない。

「ところでミリア、それ新技か？」

「うん。両断撃はね、当てる瞬間に闘気をどばって流し込んで、爆発させてるの」

「命中の瞬間にのみ力を爆発させることで無駄を省く、か。考えることは同じだな」

「つてことは……?」

「ああ。ノヴァの必殺技に触発されてな。俺も作ってみた」

「ねえねえ! その技名前決まってるの?」

「いや、まだだが」

「じゃあわたしが考えてあげる!」

「それは構わないが、お手柔らかに頼む」

「ふふふ、安心してよ! お兄ちゃんとも相談して、ばっちり格好いいのにしてあげるからね!」

「あ、ああ……」

その後リンガイア戦士団の元で1週間ほど滞在し、へろへろやノヴァと試合をしたり、技の開発に精を出した後、出国するのだった。



## ランカークスにて

「はぐあむんぐほむつ」

リングイアを発ったミリア一行は翌日、ランカークス村へときていた。

目的の場所はジャンクの武器屋だが、到着した時にはもう夜。

まずはと急いで宿屋を取り、食事を取っていた。

「そほくはへほ、おいひいっ！」

「がつつがつつ……！」

「すまないが、追加の料理をお願いします。ひとまず5人前ほど。メニューはオススメで頼む」

アキームは、猛烈な勢いで食事を食べていくミリアと猫ぐるみモードの影夫の食事風景にもなれた様子で、びっくりしている宿の従業員に追加の料理をオーダーしている。

「は、はい……どんどんお持ちいたします！」

「あつ、アキームさんも遠慮しないでいいよ。どんどん食べちゃって！」

「ええ、自分も充分にいただいております」

「ぶはあつくおいし」

「お嬢ちゃん、いい飲みっぷりたべっぷりだねえー」

テーブルの上の料理すべてを平らげたミリア果汁入りのジョッキを勢いよく傾けてごくごく飲み干す。

ものすごい大食いの後、腰に手を当てて背をそらせて一気飲みという男前な姿に、周囲の中年男性客がはやし立てた。

ピューピューと口笛をふいているのもいる。

楽しいな酔っ払いたちなので悪意はなさそうである。

「ありがと。奢ってくれたらもつと見せてあげてもいいよ？」

「……あー、邪魔して悪かった」

面白そうだからからかった程度の酔客達には、大金を払ってまで構い続ける度胸はなかった。

100Gを軽く超えそうだけのそれもしようがないだろう。

「しっかしあしらい方もなれたもんだなあ」

「もうなれちゃったよ」

気球船の旅とは言っても、野営して雑魚寝では疲れは完全に取れないし、食事も貧相になってしまったため、極力宿を見つけたらそっちに泊まるようにしないといけない。

ベンガーナを発つてから、何回宿に泊まったことか。

影夫はもう数えてないが、ミリアが食事をするの大抵は見た目そぐわぬ大食いに、毎回周囲は驚き、面白がって何かしら絡まれることになる。

とはいえ悪気がある輩は殆どいないし、娯楽に餓えて面白そうなネタに群がっているというくらいで害はない人達なので問題はない。「二期一会つてことで、お大尽でもやって、皆でわいわいしてもいいと思うけど……ミリアは女の子だし変態がいるかもしれないし、危ないかあ」

「別に平気ー。でも知ってる人というほうが楽しいかな？」

「おまたせしました。お皿さげますねー」

「おねがいしますっ」

複数の女性店員によって大皿に乗った大量の料理が運ばれてきて、テーブルの上にとんとんと並べられていく。

周囲の酔客達はチラチラとミリアのほうを見て再びびつくりしているが、奢らされては困ると思っっているのか声は掛けてこない。

それでも『見ろよまだ食うぞ。スゲー』『大食い少女あらわる！』とかなんとか聞こえてくるので、話のネタにして盛り上がっているようだ。

「それではごゆっくり。追加注文あればドンドン言っておくれよ」

最後に肉料理を持ってきた恰幅のいい女将さんが、ホクホク顔で笑いかけて去っていった。

「あむあぐんぐつ。そういえば、この村って妙に豊かじゃない？ 食べ物豊富で美味しいのはいいんだけど、何でだろ」

ミリアが食べ続けながら、テーブルにずらりと並んだ料理の数々を見て首をかしげる。

豪快な肉料理に山盛りサラダ。炒めもの、揚げ物に蒸し料理、多様な料理が並んでいる。ミリアは飲めないがお酒の種類も豊富だ。

更に言うとこの村には宿が複数あって、気球船を預けられるほどの広い馬車置き場まであったりする。夜に飛び込みで宿泊出来るのも、人の出入りの多さや宿泊施設の余裕を感じさせる。

総合的に見て、ランカークス村は発展していて豊かであるようだ。原作でポップが言っていたような何もない田舎の村っていうのはただの憎まれ口だったのだろうか？

原作の絵を見る限り、村とはいっても、ネイル村などよりもかなり立派な建物が見る限り、村とはいっても、ネイル村などよりもかなり

「たしかにな。ネイル村に比べると全然違うよなあ。建物もレンガ造りで立派だし。ギルドメイン山脈の麓なんて僻地だろうに何でだろう？」

「それはですね、付近に鉱山があって、周囲の森林が豊富だからです。この町は資源採取と輸送のための拠点になっているのです」

ミリアが飲み干した果実汁のお代わりをピッチャーから注ぎながら、アキームがふたりに教えてくれる。

なるほど。資源が豊富で人が集まるなら、職人や商人も集まってきて発展するのは当然の流れだ。

「それとギルドメイン山脈に入るにはここを経由する必要がありますから狩人や旅人も多いのですよ」

「へえ、納得。ジャンクのおやつさんがここに店を構えたのも分かるな」

この村は鍛冶屋をするにはいい場所のように思えた。

材料や燃料、鍛冶道具の入手が容易で、需要も多いのだから。

「ごちそうさまでした！」

「俺もごちそうさま。んじゃ腹ごなしに中庭でも借りて運動でもするか。アキームさんはどうする？」

「ぜひともお願いします。一足先に準備をしてお待ちしておきますので、失礼！」

影夫の誘いに顔を輝かせたアキームが、脱兎のごとく席をたつて、

女将に支払いを済ませて中庭を借りる交渉を始めている。

生粋の武人であるアキームには、強い勇者であるミリアとの手合わせや鍛錬の時間が殊の外楽しいらしく、とても楽しそうな様子だ。

「いい人だねアキームさん」

「ああ。その上、能力面でも、交渉ことから気球船の操縦からメンテナンスに簡単な修理。野営時の設営や食料調達、炊事洗濯もお手の物。空気を読めて周囲に心配りもできるとかすごい人だよ」

アキームいわく、すべて一人前の騎士には必須のことなのでこのくらい当然らしいが。

長旅に付き合ってしまった上に、従者のように仕事をさせてしまうことに罪悪感をもっている影夫だが、本人が心から楽しそうにしてくれているのが救いだった。

翌朝。教会の鐘で起き出したミリアは、猫ぐるみ状態の影夫を抱えて、いの一番にジャンクの武器屋に向かった。

ちなみにアキームとは別行動である。自由に過ごしていいと伝えられているが、実直で勤勉である彼は、鍛錬か気球船の手入れでもしていることだろう。

「あつ、ここだね」

さっそく店内に入る。

「らっしやー……い」

「こんにちは」

ミリアが店に入ると、黒髪の少年がぼかんとした様子で、眺めてきた。

(ねえお兄ちゃん、あの子がポップ?)

(だな。そつくりだ)

「? なあに?」

「あ、な、なんでもねえー!」

(ははあ……ポップはませてるなあ)

(どういうこと?)

ミリアは可愛い少女である。

綺麗でつややかな長い黒髪、つぶらな瞳は綺麗で潤みを帯びていて、柔らかそうで小ぶりの唇も綺麗な形をしている。

体型そのものは歳相応に小柄な少女であるが決して貧相なわけではない。

鍛えられた身体はしなやかで柔軟性に富んでいて、モデルのような造形を作り上げており身に纏っている赤い厚手のドレスがその魅力をさらに引き出している。

柔らかい筋肉が生み出す所作は綺麗で優雅な印象を与えているが、その割に言動は天真爛漫なので近寄りがたいこともない。

戦う姿はまったく別だが、非戦闘モードのミリアは綺麗で可憐な美少女なのだ。

加えて、ポップとミリアは同年代。

ませてるポップ少年がミリアに見惚れてしまったのも無理はなからう。

「えっと、武器みてもいい？」

「あ、ああいいぜ！ 武器でも防具でも案内するよ！」

「強い武器はあるかな？」

「えっと、ナイフはこっちだ！」

「それじゃなくて、大人用の強い武器で！」

「ええっ？」

「あつ。わたしが弱いつて思ったでしょ！」

ミリアは腰に手をあててぶくつと頬を膨らませて抱き抱えているぬいぐるみに力を込める。

武器屋に行くたびに毎度の反応とやりとりではあるが、強さに自信を持っている彼女は弱いと思われるのが嫌いである。

「大人用のやつね。ほら、こんなの」

ミリアはそう言って、傍らにおいてあったバトルアックスを片手で持ち上げてぶんぶん振ってみせる。

「はええっ……!?!」

ポップ少年は、あんぐりと口を開いてしばたかさせた後、自分もバ

トルアックスを持ち上げようとし始めたが、ビクともしなかった。

「……ちよ、ちよつと待つといてくれ！ おやじーっ！」

常識外の客の出現に、手に負えないと思ったのか、ポップが店の奥に引っ込んでいった。

「しようがねえなあ、俺らで探すか」

「うん。見た目はちよつと不気味で、魔族っぽいデザインだっけ？」

「俺が知ってる奴はそうだな。あとはなんか凄みを感じるらしいとかくらいしか分かんらん」

猫ぐるみ影夫は、ミリアに抱かれたまま、ふたりで店内の武器を物色していく。

（やっぱり時期的にまだみたいだな）

（ざんねん……みたかったなあ）

ふたりしてがつくりと肩を落とす。

魔界の名工と呼ばれた人物の武器を一度手にしてみたくて楽しみにしていたのだ。

（せっかくだし他の武器も見ていこう、オリジナル武器とか置いているかもしれないし）

ロン・ベルクと思われる剣はまだなかったため、しようがなく、物色が続けるが変わった武器といえどたまかなづきがある程度だった。

（ミリア、どた……）

（ぜったい、やだー！）

影夫がからかおうとした矢先、言葉をさえぎって却下される。ぷくつと頬を膨らませたミリアはぎゅつと猫ぐるみボディを締め付けてくる。

（ぎぶぎぶ。悪かったって）

（もう……）

そうこうしているうちに、いかつい中年の男がのっそりと姿を見せる。

ポップの父親ジャンクである。

「嬢ちゃん。強い武器を探してるとか？」

「剣でも斧でもいいけどね、特別製の武器とかある？」

「うちの店じや精々バトルアックスだな」

「んーこんな剣みたいなのとかは？」

ミリアはとんとんと背中に背負っている大きな剣の鞘を叩く。

もろはのつるぎが中に収められている。

パプニカ滞在時に王家御用達のベテラン職人に作ってもらった特注の封印の鞘で、

パプニカ銀と特殊な法術により、鞘の中に邪気を封じ込めるように作られている。

（のろい武器だとバレてないみたいだね）

（パプニカの職人芸は大したもんだな）

そのおかげで街中や城の中にも、邪気を放つもろはのつるぎを持つていけるようになってきているのだ。

パツと見たかぎり、パプニカ銀の美しさとその意匠により、聖なる剣に見えてしまうくらいだ。

影夫は気に入っているのだが……

（私はあまり好きじゃないんだけどなあ。次に鞘を作る時はわたしがデザインするからね！）

ミリアの好みとは異なる見た目になったのは、周囲への印象を考えた影夫がそのように発注したためだ。

知らないうちに嫌いなデザインに決まったということ、彼女は未だにご立腹である。

（わかったよ……持ち歩けるか心配だなあ）

間違いない、凶悪なデザインになることは間違いない。

下手をすれば人骨で構成された鞘とかそんなことになりかねない。持ち歩くのは不可能になるだろう。

「剣か……ちよつとまっつてな」

（お！ あるのかな？）

（たのしみだね！）

「この店最強の剣だ」

期待して待つこと数分。ジャンクが持ってきた剣をしゃらんと鞘

から抜いて見せてくれる。

刃の部分がのこぎり状になっている……これはデパートでみたことがあるのこぎりがたなだ。

「これって……でもちよつと違うみたい」

刃の部分は緩く湾曲しており、ギザギザの刀身部分はよりスマートでシャープなデザインになっており、浅く溝が刻まれている等違いがある。

「のこぎりがたなを改良したもんだ。鋼をこれでもかかって鍛えぬいて、色々と工夫してみた」

凄みは感じないが、精悍さを感じる。

まちがいなくそこらのはがねの剣よりも強そうだ。

「試してみるかい？」

「うんっ」

……

……

……

ジャンクの家の庭の一角を借りて、藁束で試し斬りをさせてもらったミリア。

「切味が段違い。刃の形状のおかげで切り口が抉れてダメージが大きくなるね」

デパートにも売っていた普通ののこぎりがたなや、はがねのつるぎとも比較してみたが、1.5倍から2倍ほどの攻撃力がありそうだ。

さすがの腕と言ったところだろうが、すでにこれ以上の武器があるので必要性は薄い。

もろはのつるぎが手に入る前なら活躍しただろうだけに惜しい逸品だった。

（これ欲しい！ 強いし格好いいし！）

（でもミリアは使わないしな。ああそうだアキームにあげるか）

（うーん、たしかにお世話になってるし……この子も血を吸ったほうが輝きも増すよね！）

「これ買うよー！」



「毎度あり！ あんたいい買い物したぜ！」  
「うん」

ポップがはしやぎながらミリアの手を掴んでぶんぶんと振り回す。  
「じゃ、じゃあさ、この後俺と……」

「とつとと金を貰え！」

「いでえ！ わあつたよ。えつとこれって……いくらだろ？」

「5000Gだって前に教えたろうが！」

「5000Gになりまーす！」

ゴンゴンとゲンコツを喰らって泣き笑いしつつも、ポップが笑顔で  
値段を告げる。

（なんか、面白い子だね？）

（あー……そうだな）

「ちよつとまってね……ひいふうみい……はい、これでいい？」

「お、OKOK！ まいどあり〜！ じゃああらためて！ あのさっ」

「ポップ、お金を母さんに渡してこい」

「えー？ そりやねえよ。これから」

「いいからいけ！」

「はひいっ……ま、また後で会おうぜ！」

ひらひらと手を振りながら、調子よく言うそばたばたと家の奥へ  
走っていった。

（なんなんだろ？）

（さてな……）

ポップにアプローチされそうになっていることに欠片も気付かないミリアは不思議そうにポップを見つめていたがやがて、ジャンクの方  
方に向き直る。

本題に戻るようだ。

「もつと強い武器の心当たりとかなないかな？ ふぶきのつるぎを超え  
るようなのとか」

「そりやあ伝説級の武器じゃないか。こんな村にあるような代物じゃないぞ」

「でもほら、ジャンクさんって、ベンガーナで凄腕鍛冶屋してたんだよ

ね？」

「物知りだな……」

「ゆうわくの剣を注文したからね。キャンセルになっちゃったけど」

「……すまねえんだがあれなら作れない。デパートのツテがないと希少な魔宝玉や魔法金属が手に入らないからな」

「あれはもういいよ。今はこれを使ってるから……んしよつ。『もつつー』出ておいでー」

もろはのつるぎはミリアの体格だと、普通には抜けない。

そのため、暗黒闘気を注ぐことでもろはのつるぎを鞘から飛びさせて抜刀してみせた。

「うん、今日も元気だね」

飛び出たもろはのつるぎはミリアの手の中に吸い込まれるように収まり、それと同時に周囲に邪気が振り撒かれていく。

一部始終を見ていたジャンクは一瞬身構えたが、ミリアが平気な顔でニコニコしているのを見て、ぽかんと驚くばかりになった。

「あんたそりやあ……正気か!？」

『もつつー』はいい剣だよ。強いしカッコいいし、素直だしね……『もつつー』ハウスー!」

暗黒闘気を流してミリアが命じると、名残惜しそうにカタカタと刀身が動いた後、ふらふらと鞘の中に戻っていく。

カキン、と鞘の中に刀身が全て納まると漏れ出していた邪気は消え去った。

「えらいえらい。いいこだね」

つるぎの柄を撫でてミリアは微笑む。

ミリアは暗黒闘気という飴と鞭で、もろはのつるぎを完全に手懐けていた。

「こころなしか『もつつー』も、純粹に主人に懐いているようにすら見える。

「呪いの武器をペット扱いする奴がいるとは信じられんよ……」

「あのね、武器がないなら新しいの作れる？ 色々考えてきたんだ。お金はあるし、希少素材のツテもあるから考えてみてくれない？」

「面白そうだ。よし家に上がってくれ。茶も出す」

興味深げにうなづく客間に通されたミアは、さつそく温めていたアイディアをジャンクに話していくのだった……

「どれも面白い発想だ。だがな……」

「あーどれもやっぱダメかあ」

「やはり使い道が限定されすぎるだろう」

ミアがジャンクに頼もうとした武器は全部で3つ。

1つ目が『りりよくのつえ』のメカニズムを応用したりりよく剣ができないかというもの。

戦士には魔法力がほぼない上に豊富な生命力を闘気とし使った方が良い。

魔法使いや僧侶は杖を使った方が長所を伸ばせる。

勇者ならばと魔法力の使用と闘気技の同時運用をすれば……と思うところだがそれは魔法剣と同じで人間には無理なのだ。

辛うじて役立ちそうな場面としては、賢者が呪文の効かない相手と戦わなければならぬ時に使う場合だろう。

三賢者がヒュンケルと戦う場合とか、炎と氷を吸収するフレイザードと戦う場合には多少役に立つと思われる。

しかしそもそも、賢者は剣を扱えても得意ではないので所詮は付け焼刃でしかない。

「チェーンソーブレードは面白そうだったのになあ。お面つけてこの剣で戦えばきつとすごいかつこいいよ」

「まともな敵は寄りつかねえだろうな……」

2つ目に提案した『チェーンソーブレード』は駆動機構が複雑すぎる&刃に当たる部分が頻繁に磨耗してメンテナンスの手間が掛かる&常に動かさないといけないので駆動中は魔法力を常に消費してしまう　と問題点とデメリットの塊だった。

それに、闘気技を使う時も刃がガンガン回転しているとどうしても使いづらいと思われる。

結局、見た目の恐ろしさで威圧する用途とか、面白いというだけの

ネタ武器にしかならなさそうだ。

最後に提案した『ギロチンアクスやでつかい肉斬り包丁』は作れることは作れる。

が、特殊効果もなく、見た目が恐ろしい鉄塊のような武器になってしまふ。

攻撃力もはがねの大剣を一回り強くした感じになる代わりに巨大かつ重過ぎて人間には使いづらい武器になってしまふ。

「結局だめかあ。時間取らせちゃってごめんなさい」

「いや、面白いアイディアは刺激になる。ほとんどの客は、見た目特化の儀礼用か実用特化の武器を求めるばかりでな。そんなのばかりだとどうしても頭が固くなっちまう」

「じゃあ最後にあと一つだけ。えっと……この聖石には魔法力を溜め込む性質があるんだ。とある天才学者がこれを加工して中に呪文を込められるアイテムを作ったんだって」

「ほう……」

「そういう仕組みを武器につけたら、魔法と剣が同時に使えるってことにならない？」

「ううむ」

ミリアが指に嵌めている指輪を見せると、ジャンクは考えこむ。

「矢の先端につけて弓で撃つか？ いや、刀身に埋め込むとかすれば剣や槍でもいけるか……？」

「え？ できるの!?! 『もつつー』につけられないかな？」

「試行錯誤すれば、出来るかもしれないな。だが、その聖石つてのは貴重なんだから。失敗するかもしれないぞ。無駄になるとまずいんじゃないか？」

「あー。1個しかないね」

「まあやめとくべきだな」

まったく未知の素材を使って、一発で成功させるなんてことはまず不可能である。

「うーん、話はこれで終わりだね。あ、ついでにどくがのナイフの買い

替えもしとこつと」

「そうか。武器屋のおやじとしても助かる。ありがとよ嬢ちゃん」

「じゃあ、俺が案内してやるよ!」

「わわ、ちよつとまって……」

いつのまにか部屋に戻ってきていたポップがミリアを引つ張つて店のほうへ向かう。

微笑ましい光景だがポップにとって悲しいことに短い夢である。

ミリアはまったく気付いていないし、脈は欠片もなきそうだ。

そもそも彼にはマアム（ifルートとしてメルルという線もあるかも?）という運命の人がいるわけであるし、本気でべた惚れという様子でもなく、いい感じの女の子に粉かけてるだけであろうから、いい思い出ということになるのだろうか。

影夫はミリアの腕に抱きしめられながら、そんなことを考えたのだった。

……ちなみにその後。ジャンク特製ののこぎり刀・改は、アキームにプレゼントされた。

ちよつとした手間賃感覚だったのだが、かの鍛冶屋ジャンクの逸品を勇者殿から頂いたという事で彼は感激していた。

それから数年後。ミリアとの手合わせや、鍛錬によつてレベルアップした上に強力な武器までを手にしたことで、彼はベンガーナ王軍で頭角を現していき、ついには世界中に知られる武人になるのだがそれはまた別の話である。

テランでまったり

「のどかだなあ」

「ここが竜の神殿の湖なんだね……」

テランへ向かったミアは静かな湖畔の草原で寝そべっていた。彼女の傍らでは影夫も猫ぐるみすがたでだらしなく寝転んでいる。

「静か、だね……」

「だな」

テランの人口が少ない故か周囲には人気がなく、鳥のさえずりや風の音などが微かに周囲から聞こえる程度。

「何も無いね……」

「自然があるんだ。森に草に緑がいっぱいだよ……」

「なんだか、おちつくね」

「そうだなあ。人間も動物で自然の一種だもんなあ。海が母なら森は父だ。宇宙船地球号なんだよ」

「ふあ……なんかねむくなっちゃった」

「寝るか……」

「うん」

お日様と草と湖の匂いと温もりに包まれるふたりは心地よい気持ちで転寝をするのだった……

数時間後。気球船の縁にもたれたミアが眼下に広がる雄大な自然を眺めながら、肩に乗っている猫ぐるみの影夫に声をかける。

「テランってなんていうか、時間がゆっくり流れてるって感じだね」

「そうだな。すろーらいふだなあ」

テラン滞在中の行動はゆったりしたものだった。

豊富な自然と緑。人々は節度をもっていて、自然にしたがうというかありのままという感じであり、時間やお金に追われて、あくせくしている人はいない。

「郷に入りては郷に従え……ってね」

その中で自分達だけがあくせくする気もなれない。

テランに来てからふたりは心の張りが解れるような、リラックスした時間を過ごしている。

「アキームさん、王城へはあとどのくらい?」

「このまま1時間ほどでつけるかと思えます。到着後テラン王に謁見の申し込みを行ってきます」

「それまでのんびり遊覧飛行といくかあー」

「あつ、みてみて鳥の群れだよ」

「おつ、熊の親子が歩いてるぞ……」

「かわいいねー」

パプニカとはまた違った風光明媚さがいい。

なんというか、森と湖の国って感じである。元世界では北欧とかのイメージに近い? 気がする、と影夫はひとりごちる。

いつか、ベンガーナが発展の末に人々が疲れてきたのならばテランは、魂の静養地として人気が出そうだ。

元現代人として都会で汲々としていると自然の多い田舎で晴耕雨読な生活を送りたいと思ってしまう気持ちに影夫にはよく分かる。

「まあそれもいいところばかりじゃあないんだろうけど」

「何事もほどほどってこと?」

「さあなあ。いいところどりがしたいもんだねえ」

質素で素朴でスローライフなのはいいことだが、時にはそれが命取りになることもあるだろう。

事故や病気、食料不足などの緊急事態が起これば、物資と技術が不足していてなすすべがないこともあるだろう。

テランの人々は、生も死もあるがままで受け入れるらしいが、影夫は自らの俗さを知っているのです、到底そこまで超然とはできないだろうなと思う。

「所詮は俗物の俺なんかには悟りは開けそうにもないなあ。わかってたけど」

その後、テランの王城に着いたはいいものの、テラン王は病身ゆえに謁見は出来なかった。まあそれはしょうがないだろう。

国内では好きに動いて構わないそうなので、ふたりは2、3日かけてのんびり骨休みのテラン観光を楽しむのだった。





「あつそつか。もつたないよねー。私もなんか手伝おうか。メラで気球をあつたためてみるとか？」

「やめなさいっ燃えたらどうする！　こうなったらっ、俺らがトベルーラで気球船を押し上げるしかないか!？」

「クロスどの！　オーザムの港町が見えております！」

「え!?!　たっ、たすかったあああああ！」

白い息を吐きつつ、気球船を操作していたアキームが指を差す。

その先にはうつつすらと灯台らしき明かりが見えていた。

★★★

「そりやっ、やあっー！」

「おぶっ、やったな！　これでどうだあー！」

一面の銀世界が広がる雪原。

そこでミリアと影夫は雪玉をぶつけ合っていた。

「きゃーっ！　ばいがえしだよー!!」

「あぶぶぶっ、ちよつまっ、おうぶおっ!!」

猫ぐるみ姿で身体の小さい影夫が有利と思いきや、ミリアは雪玉をすごい勢いで作って連投してくるので、反撃も回避もままならず、影夫は雪に埋もれていく。

「それぞれそれっー！」

「がぼっ、ぎやぶふうう……」

「ミリアどの！　クロスどの！　設営完了いたしました！」

「あっ、はーい！」

「ぶはあっ！　助かった……ほら早くいこうぜ」

雪から顔を出した影夫は体についた雪をぶるぶると振り落として、ミリアの肩の上にちよこんと飛び乗る。

「おーすごい！　アキームさんは何でもできるなあ」

「ベンガーナ領には雪山もありますので、訓練もしているのです」

「わっ。中はあつたかい……」

アキームが作り上げた、氷ブロックと雪を組み合わせたかまくらの

中に入ったミリアと影夫が感嘆する。

ミリアが氷系呪文で作りだした固い氷とそこら中にある雪を材料に作られたにしては見事な出来だった。

外から見るよりも中は広く、暖かい。

かまぐらの中央には炭コンロが置いてあり、ぐつぐつとシチューが作られている。

「どうぞ。身体を暖めてください」

「あつ、ありがとう」

コンロを囲んで、座りこんだミリアと影夫にアキームがシチューをよそって渡してくれる。

「んぐんぐつ。おいしつ。それでお兄ちゃん。これからどうするの？」

「はふはふつ。ここに来るのが目的だったから、もう終わったぞ。後は遊ぶなり修行なりご自由にだなー」

王宮には既に行っており、王への挨拶も国内旅行の許可も得ている。

特に変わった出来事もなかったため、あとは将来ピラアオブバーンが落とされる雪原にあればそれで用事はお終いなのだった。

「えつ、そうなんだ。アキームさんも一緒に遊びたい？ それとも修行する？」

「自分はミリアどのお手合わせ願えればと……」

「いいよ。一休みしたらいいこっか」

「はい！ それでは自分は一足先に準備をしまいきます！」

軍人らしい早飯ぶりであつという間にシチューを平らげていたアキームは、装備品をまとめると外に飛び出ていった。

「いつでもアキームさんは真面目なんだね」

「王への忠誠のためなのかな。武人だなあ」

とまあこのように。

影夫達一行はオーザム滞在中、首都でオーザム料理を堪能したり、観光に回ったり、野良モンスターを退治したりしながら過ごすのだった。

## カールにて

「思った以上になんか、普通なとこだね」

「ロモスとベンガーナとパプニカを足して3で割った感じかな？」

そんなことを言いつつ、カール王国の城下町の大通りをミリアが歩き、影夫はその肩にのっかかって揺られながら頷いていた。

「そのくらいがちょうどいいのかもなあ」

ベンガーナほどの活気や派手さはないが、町で見かける品物や物資の豊富さはロモスやパプニカより勝っているように見えた。

ベンガーナは商人の国だけあって、発展ぶりは随一であり豊富な資本と物資を持っていて技術も優れている。

反面、貧富の格差は大きいし、欲が強く儲け主義にはしりがちみたいな悪い面も多い。

カール王国の街にある雰囲気はそうした面はあまり感じられない。大金持ちそうな人をあまり見かけないし、裏通りがスラムになつてるとかもないようだ。

「まっ。ちょこつと見ただけの感想だからほんとのところは分かんないけどな」

「でもよかつたあ。『勇者を生んだ光の国！』って聞いてたから、神聖な神殿みたいな国だったらどうしようって思ってたもん」

「神聖なる破邪の国とかだったら俺らはこれなかったかもな」

アバンが王都をマホカトールで覆うとかしてたら困るなあと思っていた影夫だったが杞憂のようだった。

「なんでしてないんだろ？ すれば安全だよな？ 私は嫌だけど」

「あんな結界を無限に設置できたら反則もいいところだし、維持できる数に制限があるんじゃないのか？」

「あ、そっかあ」

案外この考察は間違っていないだろうと影夫は思う。魂を基点に結界を張っているのだとしたら数には限りがあるだろう。

原作じゃアバン以外に、すごい破邪呪文を使ったのはレオナくらいだったし人海戦術で各国に結界をつつのも無理そうだ。

「まあとりあえず飯くうかー」

「カール料理おいしいといいね!」

「腹いっぱい美味しいもんを食ってこそだな!」

冒険者歓迎! 山盛り出来ます! 挑戦者募集! の張り紙がでているワイルドな店構えの飯屋に入る。

この日、大食い勝負で常連の巨漢に勝ったり、数百ゴールド分を猛烈に食べたことで、ミリアはカールの地でも『大食い勇者』としての異名が広まることになるのだった。

ミリアは世界中の飯屋で大食い姿を見せるため、世界中に大食い勇者の噂が知れ渡る日も近そうだ。

唯一テランでは、ドカ食いをしたら大迷惑になりそうで、大人しくしていたので、将来ミリアが女の子らしい恥じらいを覚える年頃になったら、テランが安住の地になるかもしれない。

★★★

カール王国の王宮。

ミリアと猫ぐるみ姿の影夫はカール王国の女王フローラに謁見しており、頭を垂れていた。

「……話はわかりました。破邪の洞窟は自由に入って構いません」

「ありがとうございます!」

フローラの言葉をうけて頭を少し上げて影夫は感謝の言葉を述べる。

「礼には及びません。元々あそこは神が試練を与える場。全ての人間に入る権利がありますから。それと……アバンの書についても閲覧許可を出しましょう」

(マトリフさんのコネってすげー。やっぱ世の中コネが物を言うよな)

そんなことを思いつつ、マトリフの手紙を読み終えて傍らの大臣へと手渡しているカールの女王フローラを、影夫はちらりと見上げる。

彼女は、容貌もスタイルも抜群に美しい。

微笑を浮かべているその姿はまさに、神が創りし奇跡の造形じやな

いだらうかと思ってしまうほど。

年齢は30代であるはずだが、凛として成熟した頼りがいのありそうな大人の女性といった雰囲気は影夫のストライクだった。

「ああ、フローラさまなんとお美しい……リアルな姿にお目見えでき  
て感激です！」

彼女にはアバンという心に決めた人がいるのは分かっているが、  
神々しいまでの美しさを感じた影夫は見惚れる。

（おおっ……！）

そしてふと気付く。

フローラ女王の綺麗なおみ足が見えている。

無論、女王たるものが過度にはしたない格好をするはずもなくふく  
らはぎのあたりまでが少し見えているだけだが、とても美しい生足で  
ある。

思わずぐへっつと影夫の表情がだらしなく――

（ちよつと、お兄ちゃん？）

（あつ。いやなんでもない！ 何も見てないぞ！）

（見たんだ……）

「お兄ちゃん。下からじろじろ見上げちゃ女王さまに失礼だよ？」

「あつ、いだだだつ。こらっこんな場所でっ」

ミリアが隣で頭を垂れている影夫の頭を掴んで床にこすりつける。

（やめろよ！）

（ふうんっ……？）

「もうっ！ 綺麗な人には誰彼構わず鼻の下伸ばして!!」

「すみません！ 俺が悪かったです!!」

「この前だつてさ。酒場でおっぱい大きな人にいっぱい可愛がられて

……まだ懲りないの？」

「ごめんなさいっ、許して！ もうしません!!」

「むうっくく！」

「ふふふ。愉快的方たちですね」

場所も考えずに自然体で説教を始めるミリアと、恥と痛みで醜態を  
さらす影夫。

思わずといった様子で、フローラ女王は嘖き出してしまふ。

「あ、ああの。恥ずかしいところをお見せして……すみません！」

「いえ、楽しませてもらいました」

微笑ましい物を見るような優しい表情でふたりを見つめながら――

「さて。用件はこれでおしまいですね。最後に……」

そこまで言ったフローラが表情を引き締め、女王然とした表情を見せる。

「勇者ミリアよ。1つだけ聞かせてください」

「えっ、うん？ あ、私あまり敬語とか難しくして。その。どうしよう

……お兄ちゃん？」

「ふふ。儀礼作法は不要ですよ。あなたのありのままの答えをきかせてください」

「は、はい」

「あなたは力を求めています。それも危険な力であるように思える。何故力を求めるのですか？ その力を何に使うのですか？」

「……わたしはわたしから家族を奪った輩が許せない。同じようなことをしている連中すべてが許せない！ そんな連中をのさばらせたくないから」

「……憎んでいるのですか？」

「人を憎むのはたぶん良くないと思うけど……憎い」

迷いつつも、ミリアは過去に思いをめぐらせて憎悪を漏らす。

「家族もろとも殺されかけて、力を得た。悪い奴らに罰を与えて、この手で裁いたこともあるよ」

漏れ出る殺気にその場は緊迫して、フローラは難しい顔をして厳しくミリアを見つめた。

「その事を後悔してない。事情を知っている人達はみんな、殺そうとしたほうが悪いから、しょうがなかったって言ってくれた。けど、他のやり様があったのかも？ って最近思えるの」

「……あなたは、悪を倒すのが正義の行いであると思わないのですか

？」

射抜くような視線で問いかけられ、ミアは少し悩むそぶりを見せて、頭をかしげる。

「悪……なのかな？ どうしようもない悪い人はいたよ。でも、多くの人たちは怖かっただけの弱い人達だったのかも。今は思えるの。だからって彼らのしたことは許せないけれど……問答無用で悪を殺せば正義っていうのは、ちよつと違うと思う……」

「あなたは『勇者ミア』と呼ばれています。あなたの信じる正義を教えてください」

「私は正義が分かんないし、信じられない。だからきつと私はみんなが言ってくれる『正義の勇者』なんかじゃないと思う」

「……………」

「殺されちゃった私の家族も、今のお兄ちゃんもね。私が悪いことをしたら、何が良くなかったか自分で考えなさいって言ってくれるから……時々考えてるの。誰が正しくて間違いで、何が正義で悪なのかなって」

「答えは、出たのですか？」

「……分かんない。考えても、考えても分からないよ！ 正しいと思っただことが後で考えたら違つてて、違うと思っただ後で正しいと思えたり……答えなんか出ないの」

「……………」

「でもなんとなく最近思うのは……考えなくなるのが良くないことで、悪になるのかなって。絶対に100%自分は正しくて相手が間違つてると確信したらきつと悪になるのかも」

「それが、たとえ正義の勇者であってもですか？」

「うん。例えば勇者アバンでもだよ。自らを絶対正義と信じて、問答無用で敵を皆殺しにしたらそれは……」

「正義に在らず。と？」

「だと思っけど……はつきりと答えは出てないの。でも、見過ごせない暴挙や理不尽はいっぱいあって、言葉だけじゃ分かってもらえなくて、どうしようもないから……私はもつと力が欲しい。それが危険な



力って言われて嫌われても。私には絆の力だから。大事に使うよ」

「……迷える勇者、ミリアよ。分からないままに強大な力を得るのはとても危険なことです。それは理解していますか?」

「私は短気で、すぐにカツとしちゃって。我慢できないこともあるかもしれないけど……なるべく気をつけようと思ってる。それに自分で止まれなくてもお兄ちゃんやでろりん達が止めてくれると信じてる。だからきつと、大丈夫だと思う。絶対とは言えないけど……」

それが今のミリアの本心だった。

悲劇の末に新しい家族である影夫だけになっていた彼女の世界は、でろりん達との出会いと交流と信頼の中で広げられた。

友達が出来て、不特定多数の人々とも出会いを繰り返す中で、いつしか大きく広がっていたのだ。

闇に染まって凍り付いていた彼女の世界は、善き人々に囲まれたことで温もりが戻っていた。

それに、旅をする中で家族が引き裂かれそうになる光景を見たこともミリアにとって大きかったのだろう。

平和になったはずの世でもそのようなことがある。

ましてや新生魔王軍が侵略を開始したら……そう想像したミリアが出した気持ちと答えだった。

「ううっ。な、なんて立派なんだ……! ミリアはかしこくて、優しくて素晴らしい子だあ……!」

「ちよ、ちよつと……もう。おおげさだよ」

思わず影夫はプルプル震えて感激してしまう。

ほっこりした空気が場に流れるが、フローラは言葉を重ねる。

「しかしあなたはもう十分に強い。平和になった今では過剰な力でしよう。今以上の力を求めるのは何故ですか?」

「十分なんかじゃないよつ。クラーゴンに負けちゃって、ししよー達が殺されそうになったし、私はもつともつと強くならなきゃ。すべてを倒せるくらいに!!」

「……空が落ちてくることにおびえる人のお話は知っていますか?」

私にはあなたが同じに見えます」

「どうして？ 魔王ハドラーが強くなって復活したり、もつと強い次の魔王が魔界から来たらどうするの？」

「……っ」

過剰な力を諫めるようなフローラの言葉に、純粹に投げかけられたミリアの疑問。

ミリアは未来の話を知っているからの発言でもある。

だがそれはカール王国を導くフローラや大臣たちにとって盲点でもあったのか、場は一転沈黙した。

「お、おいミリア……」

「いえ。彼女の言はもつともです」

魔王が勇者に倒された。今の世にはアバンがいる。だから安心で世界はもう平和なのだ、思っていたから。

世界中が戦禍に飲まれ、悲惨だったハドラー戦役の記憶が生々しいからこそ平和への想いは強く、力や争いをどこか忌避していたのかもしれない。とフローラは思う。

「たしかに今魔界からの侵攻があれば苦しいでしょう。アバンの肉体は最盛期を過ぎ、ロカは病に倒れ、レイラは現役を退いています。マトリフもブロキーナも老齢です」

「……フ、フローラさま」

フローラが世界を救った勇者一行の現状を述べると、そばにいた大臣が冷や汗を流す。

今ハドラーが復活すれば……危ういと思ったのだ。

とはいえ、最悪の可能性すべてに備えようとする神すら超える力を身につけるまで安心などできなくなってしまうだろう。

この問題は非常に難しいものでもある。

「カールも、世界も。過去に学んでいます。騎士団の数も質も大きく上がりました。装備品の質も上がっています。脅威を恐れて過度の軍備拡張に走れば民を苦しめ戦いをうむことになりかねない」

「むずかしいことはよくわからないけど。だから、わたしが強くなるしかないと思う」

「本当なら国こそが個人を守るべきで、個人に国が頼ることはしては

ならないのですが……すみません。国が確証もなく軽々と動いてはならないのです」

「別に気にしないよ。みんなが無理して戦争になったら困っちゃおうし……」

「いえ、あなたの言うことももつともです。国としても万が一には備えて出来ることを模索してみるわ」

最後に、そう言って、フローラ女王は微笑んだ。

どうやらこれでお話しは終わりのようだ。

「それと、アバンの書の写本も許可します。あなたが信頼する人物へ譲っても構いません。アバンの教えはあなたと仲間の力となるでしょう」

「え、ええっ？ いいのかな……？」

「あなたには良き師、良き仲間、良き家族がいるようです。彼らがいる限り、あなたが光を見失い、道を違えることはないでしょう。では、退出してくださいまして大丈夫です」

「ありがとうございます！ それでは……！」

フローラに許可をもらったミアと影夫はばたばたとその場を退いて城内の書庫を探しに走っていった。

後に残されたフローラは、憂いげにため息をつく。

「大臣。このごろのベンガーナの急速な軍備拡張は……彼女に影響を受けてのことなのでしょうね」

「そうですね……我が国も同様にいたしますか？」

「それではいたずらに世界の緊張を高めることになってしまいます。我が国にできることを模索しましょう」

「こういう時、アバンののが居れば心強いのですが」

「……そうですね」

世界を放浪して弟子作りをしているという想い人に複雑な気持ちを抱くフローラ。

「彼の人にはさっさと観念していただいて、王冠を戴いてもらいたいものですな」

「それで……大臣？」

「ゴホン！ 何はともあれ一度ベンガーナ王と会談してみるのが良いかもしれないな」

「ええ。協力しあうことができるかもしれないし、万が一が起こったときのためにも連絡は綿密なほうがよいでしょう」

ミリアと影夫の影響で、世界は少しずつ動いていくようであった……

## 仕込みと修行の終わり

ミリアと影夫が、でろりん達とともに破邪の洞窟の攻略を開始してから、3年近くの月日が経っていた。

魔王軍侵攻開始まで残り半年あまり。

「「「「かんぱーい!」」」」

ミリアとでろりん達一行はルイーダの酒場にある宴会用の個室の中でジョッキを打ち合わせ、一気に果実酒を煽っていた。

「「「「んぐんぐんぐ……っ!」」」」

影夫はねこぐるみ姿ながらビールをにくきゅうハンドで器用に掴んで、ぐびぐびと飲み干している。

ミリアだけはまだ14歳なのでお酒ではなく果実汁であるが、腰に手をあてて美味しそうに一気に煽っていた。

「ぷはあッ、うめええっ!」

「おいしーね!」

「そりやあ良かった。うちは酒場が本職なんだ、存分に味わっていつでもおくれよ」

カウンターにいるルイーダが声をかけたタイミングで、セクシーなバニーガールたちによつてご馳走が運ばれ、テーブルの上に所狭しと並べられていく。

「うーんさすがルイーダさんのお店はレベルが違うなあ」

「ぴっちぴちのほいーん、だな」

「ぷりっとしたお尻もかわいいのう」

「くうー、腰をくねっくねっして歩くのがいいよな!」

「うへへへ……っ」

「いやあねえ……男ってほんとにもう」

「フケツだよ!」

鼻の下を伸ばす男性陣にじとつとした視線を送るミリアとずるぼん。

うつ、と言葉に詰まった男性陣はお互いに顔を見合わせてあーいやーそのーとうろたえて、女性陣の顔色を窺い……みな目の線が交差

したところで――

「「「ははははは」」」

6人は、肩を組んでいっせいに笑いあった。

「これだよなあー。俺らはこういうノリが合ってるっての！ いやあここ数年ずーつと真面目面で似合わねえことしてからな」

「んぐっおぐっ。ほおーはへ、はぐはむむっ」

「ふまいっ、ふまいっ……あむあむあむむっ」

「ふたりとも相変わらずの食べっぷりねえ。変わらないただ一つの光景つてやつかしら」

2年とおよそ9ヶ月あまり。6人は今まで破邪の洞窟の攻略に掛かりきりだった。

集団で挑む場合同時に入れるのは4人までという制限があつたので、でろりん組とミリア組に別れて、それぞれ攻略に挑んできたのだが――

「まあ、何はともあれ本当に、お疲れさんだ」

「ほんとにね……もう二度とあそこには入りたくないわ」

「あれを作った神様つて、きつとすごく意地悪で嫌な人に違いないよ！」

遠い目でしみじみと言つたでろりんは、ずるぼんは深く頷き、ミリアは猛然と吼える。

なかばトラウマになるくらい、破邪の洞窟での攻略の日々は大変だった。

25階を越えた時から魔界のモンスターが出現を始め、

50階を越えた時には、上位種のモンスターに変化し、

100階を越えるともはや想像を絶するとしかいえないような最上位種のモンスターが山と出る上にトラップは凶悪なものとなり、

200階を越えたらもう、1階を潜り抜けるだけで幾度も死線をくぐるようなハメになった。

それに、手ごわかったのは何もモンスターだけではない。

あまりにも広大で複雑な大迷宮の中で、水や食料が尽きて倒れかけたり。

聖水が効かないフロアで野営できずに過労で倒れかけたり。難解で意地悪な謎解きの数々で立ち往生をくらったり。

リレミトの使えない洞窟内部で回復手段を切らしてしまい、死にそうになった仲間を抱えて必死に地上にもどったり。

死ぬ思いで踏破した瞬間、50階以上前に戻される罠で心が折られかけたり。

モンスターハウスのど真ん中で進退窮まったり。

ボスモンスターとの連戦につぐ連戦で死力も尽き掛けたり。

といった具合で、筆舌に尽くしがたいほど破邪の洞窟攻略は困難を極めた。

全員が口をそろえて、たった1人で挑んだ上に3ヶ月足らずで150階踏破したアバンは人間じゃねえよ！ と喚いたほどだ。

「でもその甲斐はあったよな。でろりん達、もう歴戦の勇者つて感じだぞ」

影夫の言うとおり、でろりん達4人は、屈強かつ雰囲気滲むような強者然とした面構えになっていた。

「褒めすぎると良くない。俺たちは調子に乗りやすいからな」

身体付きも精強そのものになっていて、特にへろへろなんかは鎧を脱ぐと筋肉ダルマとでも言いたくなるほどだ。

どれほどのパワーを秘めているのか、想像もつかないほどで、少なくとも現時点の人間の中で最も肉体的な力があると思われた。

「ま、せいぜい贗作レベルを極限まで上げたってとこだな！」

でろりんはぱつと見た目では分かりづらいが、柔軟な筋肉が全身をくまなく覆っていて、俊敏でありつつ力強さとスタミナが十二分に発揮される肉体になっている。

言動は以前と変わらぬものながら、相対していると重厚な迫力を覚える。

「とはいえ、力は確かについておるよ。もうヒドラでも何でも来いじゃの」

まぞっほは老人ゆえに筋肉のボリュームは以前とあまり変わっていないものの、一般人を遥かに凌ぐ身体能力を持ち、老成した雰囲気

と風格は賢き魔法使いといった風で、黙っていれば威厳すら感じる。「実際、レベルも60超えだものねえ。話半分だとして、本物換算だと30半ばちょいってところでしようけどね」

ずるぼんは、しなやかで柔らかい筋肉に覆われた俊敏な豹のような肉付きになっていた。

均整の取れた筋肉がついたおかげで、ウエスト、バスト、ヒップのラインも美しく、女性的な魅力も増している。

彼女が口を開かず顔芸もしなければ、どんな男をも魅了せずにはいられないだろうと思わせるほどだ。

「「そりゃあ言えてるー!」」

自虐的なずるぼんの物言いに、三人が同調する。

相変わらず、妙なところで自己評価の低いでろりん達であった。

「いやいや。タイマンでも軍団長クラスには勝てるだろう?」

「ねえって! お前なら余裕だろうけどな」

でろりんはひらひらと手の平を振りながら、表情をコミカルに崩してぐびぐびとジョッキを傾ける。

4人は確実に、すごく強くなった。

だというのに、まったく前と変わらない普段通りの様子。

これが彼らの持ち味だろうなあと、影夫はしみじみと思った。

「ミリアにクロスもすっかりツワモノって感じだもんな」

でろりんの言うとおり、たしかにふたりも強くなった。

新しい呪文も新技も習得し、身体能力も、闘気もはるかに強靱になっっている。

「自分じゃそこまで実感ないけど」

「いやー段違いだぜ?」

影夫は暗黒闘気の肉体ゆえに筋肉やらはないが、暗黒闘気の総量は増しており、その色はより黒く濃密になっている。

普通の人間なら精神に変調をきたしそうに思えるが、彼の精神に変調はなかった。

「でも……私……」

ミリアが悲しげに自らの胸に手を当てる。



すかつすかつ、つるぺったん。とでも効果音がつきそうな程、彼女の手に抵抗を受けずに胸とお腹を行き来した。

「これじゃあ……ママみたいな淑女になれないよ……」

胸に当てた手を下ろして、しょんぼりとした様子で呟く。

背丈もほぼ変わらず、胸の膨らみもほぼ変化なしだ。

いっぱい食べて運動して、肉体の成長にはこれ以上ない環境だったと思うのだが、何が原因なのか、背は伸びないまま。

ミリアが思い描いていたような『背はスラリと。胸はボンと豊満で。くびれはキュつと。お尻は可愛くぷりつとしてる』という理想の身体にならなかった。

「俺はありのままのミリアが好きだけどき、成長しないのは暗黒闘気のせいなのかな？　ごめんなミリア。俺の所為かも」

「そんなことない！　この力を捨てるくらいならちびっこいままでもいいもんっ」

ぷくつと頬を膨らませたミリアの頭をぽんぽんと撫でつつ、でろりんは影夫に向き直った。

「……いよいよ動くのか？」

「ああ、予定通りにな。でろりん達は？」

「お前らに同行するつもりだがよ。敵がいつ来るのか、細かい日時はわからねーんだよな？」

「ああ、およそ半年後くらいって程度なんだ。最悪一ヶ月程度の誤差はあるかもしれない」

「俺らは用事で抜けることもあるからな……一月を切ったらいつでも連絡取れるようにしておかないか？　何か会った時の集合場所と伝言はこの店でどうだ？」

「分かった」

とそこに、ルイータ自身が料理の載った大皿を抱えてテーブルまで運んできた。

「あいよ、追加の料理お待ち。酒もこれからじゃんじゃん持ってくるからね！」

素早い動きでバニーガール達が空になった食器をさげると、空いた

スペースにルイードがドデンと大皿を置く。

「お肉ももつといっぱいよろしく〜！」

「了解したよ、お嬢ちゃん。食べきれないほどもってきてやるさ」

「まーあれだ。みんなで焦らずぼちぼちやってこーぜ」

「」「意義なく〜し！」「」

でろりんの気の抜ける掛け声に、一同は運ばれてきた酒とジュースのジョッキを打ち合わせて、賛同の声を上げた。

6人の酒盛りは続き、夜はふけていくのだった……

## デルムリン島へ

「島が見えてきたわよ！」

「あの島が、デルムリン島じゃな」

「んでどうするんだリーダー？」

「へへ、決まってるんだろうが。世界に一匹しかいない幻の珍獣……  
ゴールデンメタルスライムを売り飛ばしやあ大金持ちだぜ！」

大きな船のその甲板で腕を組んだでろりんはそう言うと、ニヤリと  
生来の悪役顔を邪悪に歪ませて笑ってみせた。

「はいはい、偽勇者偽勇者。よくお似合いで」

「んだよ！ 必要なんだからしようがねえだろ！」

「まあまあ。よさんかふたりとも」

「ま、なるようにやるしかないと思うぞ」

ずるぼんがわざとらしい拍手と共に呆れ顔でしらくつとした目を  
向けるとでろりんがぶすくれ、まぞつほたちが宥めにかかる。

そんな、でろりん達の様子を少し離れたところから、影夫とミリア  
がじっと見つめていた。

「うーん……本気なら止めたほうがいいよなあ」

「そうなの？ でも、先のお話が変わっちゃうんじゃない？？」

「そりやそうだけど、やっぱなあ。まあ、でろりんもまさか本気じゃな  
いと思うけど……」

「ふふっ、本当の悪い事なんて、ししよーたちには向いてないもんね  
」

と——その時。

「クギヤアアッ！」

激しい水しぶきを上げて、マーマンが水上から飛び上がり、船の甲  
板に躍り上がってきた。

「勇者さまーっ！」

そのマーマンの背に乗っていた少年は、でろりん達の前へと飛び出  
して、4人をキラキラした目で見つめだす。

おそらくは、マーマン相手にちつともビビらなかったことに感嘆し

ているのだろう。

原作では、でろりん達は単に声も出ないほど驚いていただけだったのだが、今のでろりん達は少しも取り乱していない。

(おおー)

原作との変化を見た影夫は謎の感動を覚えていたが、そんな彼の内心をよそにダイ少年はでろりん達に駆け寄って、握手を求めている。

「おれダイですっ！ よろしく勇者さま」

「ああ、よろしくな……へっへっへ」

「ひっひっひ」

「くっくっく」

「ふふふ……」

なんだかんだでノリのいいずるぼん達も、でろりんに調子をあわせて偽勇者っぽい振る舞いを見せだした。

ここに、未来の勇者ダイと、元偽勇者でろりん達が出会った。

この出会いは、どうなっていくのだろうか。

原作と異なるでろりんとの邂逅は一体何を――

「ねえ君。なんで、私を無視するの？」

影夫のそんな想いと余韻をぶち壊すように。

ミリアは自分を見事にスルーして、背を向けてでろりんに挨拶をしているダイ少年の背中をつつんと小突いた。

「ねえねえねえ」

「あだだっ。えっ？ ええ!？」

スルーされたことでムツとしたのか一度だけでなく、ツンツン。と地味に力を込めて何度も指で背中を突いてみせる。

「この子……誰？ 勇者さまの知り合い？」

ダイは、猫のぬいぐるみを抱いたドレス姿でデカイ剣の鞘を背負った女の子が勇者とは夢にも思っていないのか不思議そうな顔だ。

事実ダイは、ミリアのことを勇者さまに憧れて着いて回っているファンの子くらいに思っていた。

「わ、私はミリアだよ。よろしくね？」

そんなダイの内心がそれとなく伝わったのか、ヒクヒクと表情を歪

めながら、ミリアはにっこりと挨拶を終わらせた。

こうして、3人の勇者たちが顔を合わせたのだった――。

★★★

デルムリン島の砂浜に降り立った一行は、改めて自己紹介をするこ  
とになった、のだが。

「えーっ！っ!? ミリアが勇者あ？ うっそだあー！」

「むうっーウソじゃないよ！ 勇者ミリアといったらちよつとしたも  
んなのに!!」

ミリアが勇者と呼ばれていることを明かすもダイが信じず、一悶着  
起こってしまう。

「ミリアはおれよりちっちゃい女の子じゃないか！ うっそだあー  
！」

「ちつちやくないよっ、私のほうが背が高いのっ、ほらほらあっ！」

ミリアはダイの横に並んで、手で背比べをしてみせて、胸を張った。

ほらほらつと得意げに自分の頭の上に置いた手をダイの頭の上に  
置いて、ニタニタ笑うミリアに、ダイはむっつとして手を叩き払う。

「おれはこれから伸びるんだよ！」

「ふふーん。背だけじゃないんだよ。私はね、君より2つも歳が上な  
の。私をミリアお姉さんって呼んでね、ダイくん」

「ええーっ！っ!! 信じられないねっ！」

「だからあつ、ウソじゃないって！ そっちこそそんなにチビっこく  
て勇者になんかなれるのー？ こんな子供なのー！」

「子供じゃないやいつ、おれは勇者になるんだ！ そっちこそ、勇者を  
騙るニセモノだろ!? 女の子の勇者がいるなんてじいちゃん言っ  
てなかつたぞー！」

「……決闘！」

「やだよ！ おんなのこ相手に本気だせるわけないだろ!!」

「へー、女の子相手に本気出して負けるのが怖いんだー？」

挑発するように笑みかけながらミリアが、むにーっつとダイの頬を掴  
んで引つ張る。

「泣いても知らないからなっ！」

ダイは反撃をためらっていたものの、ミリアに挑発されると彼女の頬を握ってぐいぐいと引っ張り始めた。

「こによー」

「なによおー」

これが殴り合いの喧嘩ならさすがにダイも応戦しなかったろうが、頬のひっぱりあいの喧嘩なら女の子相手でも躊躇しないようだ。

そのうちにケンカはエスカレートして地面に転がり、頬を引っ張り合い始めたミリアとダイ。

「はあ……これが現勇者ミリアと未来の勇者の姿とは」

「いいじゃないの、子供同士じゃれあっているんでしょ。でも、そろそろとめたほうがいいんじゃない？」

「いやあ、怪我しない程度にやらせたほうが逆にすつきりするだろ」と、そこに。

「こりやあダイー！」

「いだあっ!?!」

かっぽーん。と気持ちのいい音が周囲に鳴り響く。

きめんどうしが走り寄ってきて、ダイの頭に木杖を叩きつけたのだ。

「なにをしとるんじゃ!! 女の子を虐めるなど、どういうつもりじゃ!」

「そりやないよじいちゃん……もともとミリアが悪いんだい!」

たんこぶをこきえて、頭を抱えて痛がるダイ。

「やーい、おーこられたおこられたー♪ ねえどんな気持ち? 怒られちゃったけど、今どんな気持ち?」

「ぐぐぐっ……!!」

「あはははっ」

すかさずミリアはその周囲をぐるぐると走り回りながら、すばやい動きであっかんべーやお尻ぺんぺんの連続攻撃を繰り出しながら、挑発していく。

「こらミリア。煽るんじゃない!」

「ふーんだっ……私が勇者だって信じないのが悪いんだもん」

「じょーだんじやないっ、わるいのはそつちだ！」

影夫が宥めるが、ミリアはぷくーつと頬を膨らませて、プイつとダイから目をそらした。

ダイもプンスカ怒りながらあぐらをかいて腕を組んで怒っている。

「どうもすみません、言い合いからケンカになってしまって……この子はどうにも直情気味で……困っています」

「いえ、こちらこそ……女の子に手を出すなど、恥ずかしいかぎりですじゃ……」

影夫はプラスに頭を下げ、プラスも影夫に頭を下げる。

そんな保護者同士のやり取りが終わったところで……不思議そうにプラスが口を開いた。

「ところで……あなた方はどちら様ですか？」

## 紹介

「へえーよく出来た家ね。おしゃれだし、かわいい森の隠れ家って感じ」

ずるぼんが、きよろきよろと見回している。

ダイとブラスの家の中は、意外と広く凝った作りだ。

大きな木のテーブルを囲むように丸太イスが2つあり、その側には4人は座れそうな石のソファもあり、木のはしごの上には屋根裏スペースもある。

「こりゃあいいな」

「隠居先には良さそうじゃわい」

「食い物も美味しい」

でろりん達は石のソファに座って出されたお茶を啜り、お茶請けの果実を齧りながら周囲をもめずらしげに見回すのだった。

そんな彼らから少し離れた場所。

ブラスとクロスは、テーブルで向かい合って丸太イスに座っていた。

「ほー、みなさま勇者さまですか」

正体を隠す必要もないので、影夫はシャドーの姿である。

「ええ。最近売り出し中のぼつと出なんですけどね」

「すまんことですじゃ。この孤島には人は寄り付かず、外のことは知りませなんだ。ダイには勇者アバン殿の話しかしておらんで……それで疑ってしまったのでしょうか」

「ミリアは見た目があれですから、疑うのもしようがないことだと思いますよ」

「そうですね。しかし、新しい勇者さまがふたりも増えておるとは

……驚きですじゃ」

ブラスはそう言うと、お茶を啜った。

言葉からも態度からも、勇者を名乗った影夫たちを疑う様子はない。



「あの、俺らがウソを言っているとか……疑わないのですか？」

「なに、これでも人を見る目はあると思っております。みなさん、強く正しい目をしておられる」

「いやいや。俺なんか邪悪な闘気の塊だとわかるでしょう？」

「それを言ったらワシらも元は邪悪な怪物。それに、あなたはワシと同じようですよじや」

そう言うときブラスは優しい表情で、天井を見やる。

上からは、ミリアとダイがわーきゃーと騒いでいる声やドタドタ走る音が聞こえてくる。

「そんなお方を疑う理由はあるまいて……」

ブラスは島のモンスター達を纏めてきた長老であるだけに、人格者であり、洞察力にも優れているようだった。

「して、この島に何用ですか？　ワシらは誰にも迷惑を掛けずに静かに暮らしておるだけですじや」

「いえ、ロモスの漁師から怪物島に住んでいる少年の話を聞きましてね……それで様子を見にきました」

「なるほど。ダイのやつに会いにですか」

「尤も心配するようなことはなかったのですが、もう用事は終わったようなものですが、知り合ったのも何かの縁です。もしよろしければ少しの間滞在させていただいてもいいですか？」

「それは勿論。好きなだけおってください。それでひとつ、お願いをしてもよろしいですか？」

そこで咳払いを一つし、ブラスは手に持った杖で床を叩いて鳴らした。

その真摯な表情に、何事かと影夫も居住まいを正す。

「ダイを鍛えてやっては下さいますか。あの子は勇者になりたくて仕方ないようですよ……」

「かまいませんが、ブラスさんはそれでいいのですか？」

「親代わりの身としてはワシと同じ魔法使いにと望んでいるのですが、本人の望むようにするのが一番でしょう——」

「……………」

「じゃがワシでは魔法しか教えてやれず、この島には剣の修行を付けてやれるものがおらんのですじゃ。今までは中途半端な勇者になるよりはと、魔法使いとして修行させておりましたが」

ブラスがそこまで言ったところで、ダイとミリアがはしごの上から転がる勢いで降りてきて、大人達には目もくれずに大騒ぎをしながら家の外へ飛び出ていった。

「こらー！ー！ 待てー！ー！」

「待たないよーだつ。そーれ、おしりペンペン！」

「このおー！ー！ もう怒ったぞー！」

「きやーきやー！」

「すみません、大騒ぎしてしまって……本当に申し訳ないです」

「いえいえどうかお気になさらずに」

影夫は、汗を垂らしながらぺこぺこ頭を下げる。

よそ様のうちでよそ様の子をからかって大騒ぎというのは影夫の精神上、とても申し訳なかった。

「ダイ君を鍛える件はお受けします。弟子には取れませんが、彼の望みの助けになれるでしょう」

「どうかお願いしますじゃ。この島に人間はダイただひとり。しようがないとはいえ、不憫に思っておったのですじゃ。外の人間との交流はいい刺激にもなるじゃろうて……」

そういうとブラスは、ダイとミリアが出て行った玄関のほうを優しく見つめるのだった。

★★★

ダイが口笛を吹くとあつという間に、島のモンスター達が砂煙を上げて集まってくる。

五分と経たずに島の原っぱには島中のモンスターが大集合していた。

「ごほん。じゃ皆、勇者さまに挨拶！」

ダイがそういうと、モンスター達は嬉しそうにグギャーゲギャーと

声を上げた。

「へえーブラスさんもそうだけど、この島のモンスターってほんとに皆大人しいのねえ……ほらおいで」

ずるぼんが近くに居たスライムを撫でながらスライム達に手招きする。

「うーん、可愛いわねえ。お持ち帰りしたいくらい」

すると彼らはぴよんぴよん跳ねながら、ずるぼんの肩や頭に乗っかって、ぷるぷる嬉しそうに震えている。

「外にいるモンスターたちは違うの？」

そう言うと言をかしげるダイ。

島を出たことがないダイにとつては島のモンスターが基準。

外のモンスターたちも同じように考えていた。

「そうだな、人里の近くに出てくるモンスターは人間を襲うような凶暴なのが多い。そうじゃないモンスターもいるらしいが、人間と会わない場所に隠れ住んでるって話だ。この島もその1つだな」

「そうなんだ……」

外の現実にはダイは肩を落とした。

モンスターに育てられ、彼らを友達として育った少年には辛いことだろう。

「ピイー！」

「あつ、ゴメちゃん！」

でろりんがダイの頭を軽く撫でてやったところで、黄金色に輝く空飛ぶスライムが、ダイの元へ飛び込むようにやってきた。

「ほら、ゴメちゃん……勇者さまたちに挨拶して！」

「ピッ？。ピイー」

「お。よろしくな」

「綺麗ねえー」

でろりん達の周囲を飛びながら、ゴメちゃんは空中でお辞儀をしていく。

だが。

「ピッ!?。ピ。ピイーツ!」

ミリアと影夫を見るなり、ゴメちゃんは脅えてダイの後ろに隠れてしまった。

やっぱり暗黒闘気の邪悪な気配が苦手なのだろうか? そんなことを思う影夫であったが、

ダイはというとその様子を見て、やっぱりといった表情でミリアをじとつと見つめる。

「やっぱりミリアは勇者じゃないんじゃないの? ゴメちゃんがこんなに怖がるなんて!」

「まだ言うのっ!?!」

「いであつ、なにすんだよ!」

「ひよっひほそっ、にやにしゆるのおー!」

そして、子供同士のケンカがまたもや始まる。

ミリアが髪の毛をひっぱれば、ダイは頬をひっぱる。

そのまま地面に転がってひっぱりあい。

「はあ……ほどほどにな」

ミリアも加減を心得ているので、影夫はもうスルーだ。

子供のケンカに大人が首を突っ込むこともない。

「べえーっだ!」

「ピイー?」

しばらく転がりあったかと思うと、舌を出し合って変顔で挑発しあうふたりの子供。

「ピッ?。ピイイー?」

ゴメちゃんは、不思議そうな表情でダイとミリアの周りをくるくる飛んだかと思うと、ミリアへと恐る恐る近づいていった。

「あつ。君がゴメちゃんだよね?。ほらおいで。あははっ、可愛い!」

彼女が差し出した手の平の上にちよこんと座って、ゴメちゃんはしきりに首をかしげている。

「ピ。ピイイー?」

「ははは、分かってくれたみたいだな」

怖いけど怖くない? みたいなことでも考えてるのだろう。

影夫は微笑ましい気持ちになって、自らもゴメちゃんへと手を伸ばす。

「俺もよろしくなゴメちゃん」

「ピピッー！」

影夫が手を伸ばすと、それは避けられてしまった。

「……なぜ」

「え、えっと。お兄ちゃんどんまい！」

「うぐ……っ」

延ばされた手が行き所を失って、ゆらゆらとさまよう。

ミリアの慰めのエールは、さらに影夫の心を抉る。

「いいんだいいんだ。俺はどうせ、邪悪で陰キヤな暗黒闘気だよ……」

「お兄ちゃん、頑張って！」

「えーっと。ゴメちゃんは人見知りだから、あまり気にしないでクロスさん！」

陰鬱な雰囲気を放ち始めて地面にのの字を描き始めたクロス。

ミリアが無意識の応援という言葉の追撃を放ち、慌てたダイのフオローが入るのだった……

## 特訓

「今から呪文の特訓をはじめる！」

モンスター達とダイの総出で慰められてどうにか意識を取り戻した影夫が、におう立ちで宣言した。

「えええー……！　呪文なんてやだよ。身体を動かす修行とかさ！　そうだ、剣を教えてよ!!」

影夫の前にちよこんと正座していたダイが、悲鳴を上げて盛大にブー垂れる。

勇者になるために手伝ってくれると聞いた彼は、大喜びで格好いい剣の特訓や修行の光景を空想していた。

だというのに、聞かされたのは大嫌いな呪文の特訓。

ダイは心底がつくりきたのだ。

「いや、まずは短所をどうにかしないと。まったく使えないじゃどうしようもないぞ」

「えー呪文なんかいいよ。やっぱり剣だって！　おれ毎日本剣で素振りしてるんだ！　ほらっ見てよー！」

立ち上がったダイは、背中に背負った木剣を抜いてえいやあと気合を入れて素振りをして見せた。

「へえ。なかなかのもんだな」

力強くブレもすくない。

本当に毎日続けているのがうかがえた。

ある程度土台があるからこそ、7日で勇者になるコースに途中までとは言え、ついていけたのだということが分かる。

「そうでしょ!?　だから呪文よりも剣を……」

「なんでそんなに呪文を嫌がるんだ？」

「だって……どうやったって出来ないんだもん。おれには才能ないんだよ……」

そう言いながら、ダイは力なく座り込む。

「なあダイ君」

影夫は、その前から肩に手を置いて、一呼吸する。

これから彼に辛い現実を教えてあげないといけない。

気の毒な気持ちになりつつも、ゆっくりと口を開く。

「君はさ、戦士になるつもりなのか？」

「え……ちがうよつ、おれは勇者に！」

「呪文が使えない勇者って、中途半端な戦士じゃないのか？」

「そんなー！」

かなりシヨックだったらしい。

「じゃあおれ一生、勇者になれないのおー!?!」

がつくし！ と文字が出そうなほど落ち込んで、地面にのの字でも書き始めそうだ。

勇者への憧れと魔法への苦手意識は相当なものらしい。

「そんなことはないよ。契約が出来た以上、必ず呪文は使える。一度目の前でやってみてくれ」

「うん……メラッー！」

ダイは軽く頬を叩いて気合を入れると、手を突き出して呪文を唱えた。

だが。

ぷすんツという間抜けな音と煙が少し出ただけで、火球は生まれなかった。

「うう、やっぱりダメだあー！」

「ピーピーー！」

心配そうにゴメちゃんがダイの周りを飛び回った後、ダイの頬に身体をこすり付けて慰めている。

「ありがとうゴメちゃん、慰めてくれて……でも呪文が使えないんじゃ勇者には」

「なっさけないなあ。すぐ諦めちゃうなんて」

側でメイテーションをしながら、その様子を見ていたミリアがチャチャを入れる。

「今までじいちゃんにさんざんやらされたよ。！でもてんでダメ。俺才能ないんだ」

「メラ！ こんなに簡単だよ」

「ミリアとは違うんだよ！」

ミリアが軽く実演してみせるとダイは口を尖らせ、ミリアに背を向けてその場に座り込む。

「こらミリア！ 落ち込んでる時にそんな言われ方したらどんな気持ちになる？ もつと言い方を考えなさい」

「はーい。ごめんなさいーい。じゃあお兄ちゃん、ダイにもアレで教えてあげたらいいんじゃないの？」

呪文を放つには手順がある。

魔法力を高めて集中させたうえで必要な構成に沿って練り上げ、イメージに乗せて放つ必要があるのだ。

もちろんこのことはダイも、ブラスさんより教えられている。

だが、感覚特化の天才型であるダイには実感できないのだろう。理論や仕組みを使っても難しいと推測する。

「え？ なにかあるの？」

「私も最初はね、呪文が使えなかったんだ。でも魔法力を認識する裏技で、いっばつで出来るようになったんだよ！」

「それ！ 俺にもそれやってよクロスさん！」

「必要ないぞ。ダイ君は魔法力を操れてるからな」

「ええっ!? おれが？」

「ああ。すまんが、もう一回呪文をつかってみてくれ」

「うん……メラッ」

ダイが詠唱を始めて、失敗するまでの一部始終を影夫はじつと見つめ続けた。

影夫は、マトリフにつけてもらった修行で魔法力の流れを視るということが出来る。

(やつぱり出来てるじゃないか)

見たところ、やはりダイの呪文行使に問題はなかった。

魔法力は高まっており、集中が今一つなのだが初級呪文ならどうか問題ない範囲であった。

ダイがこの世界の住人である以上、手から魔法で火の玉を出すこと



に強い違和感もないだろうからイメージも問題ないはず。

「問題ないな……ブラスさんは何て?」

「努力が足りないって。気合と集中も……何度も練習させられたけど、ちつともうまくいかないんだ」

「まあ普通ならそうだ。だが俺が見る限りメラなら出来るはずだ」

「ええー? やっぱ俺才能がないのかなあ」

だが、呪文は発動しない。

何かがつかえて衝突して、それに邪魔されて呪文が出ていないように感じた。

ブラスさんや他の人間達にはない、ダイ特有の何かが……?

(つまり竜闘気の所為か)

影夫は心当たりにとどり着く。

無意識でも普段から、わずかに竜闘気を纏っているのだろう。

ブラスさんには竜闘気が存在が分からないので、反復練習をさせるしか手がなかったわけか。

原因が分からずブラスさんはさぞ苦悩したんだろうなあ。

となるとダイが呪文を使えるようになるには、竜闘気を制御するかもしれない、その干渉を計算に入れて呪文を扱うようにさせるのかなさそうだ。

が、それをそのままダイに説明しても、感覚型の天才である彼には小難しいと苦手意識が強くなってしまいうだろう。

「ダイ君、呪文を使う時どんな感じ? 出るはずのメラは何故出てこないのだと思う?」

「うーん、そんなこといわれても……よくわかんないよ」

ダイは腕を組んで首を傾げる。

「メラっていうのは、魔法力で作った薪に詠唱で火をつけるようなものだと思うてみてくれ。それはイメージできるか?」

「うん。飯炊きや風呂炊きはいつもやってるから。うーん、あんな感じかあ。だとするとおれのメラは……んーとお」

具体的にイメージさせてやると何かつかめそうになっているらしい。

ダイは何度かメラを唱えては、頭を捻ることを繰り返す。

影夫達が黙ってダイが考えを纏めるを待つこと数分後。

「火がつきかけたんだけどふっーって横風にかき消されちゃったかんじかな？」

「それを意識してみてくれ。横風が邪魔してるんだろ？ それを避けるとか、負けないくらい勢いで強く詠唱するとか」

「わかった！ んーっ……メラア！」

大きく息を吸って、叫んだダイ。

その手の平に大きな火の玉が出現した。

飛ばすことは出来ていないので、掌のまん前に浮いたままであるが、呪文は成功した。

「で、ででで、出来たあーっ!?」

「ピーーピッツピッツ！」

「うわあ！ やったよゴメちゃん、呪文ができたー!!」

火の玉をもったダイとゴメが走り回ってはしゃぐ。

「ああ、ブラスさんに見せてあげな。きつと喜ぶぜ」

「うん！ じいちゃん！ 俺おれ、呪文できたよーっ!!」

よほど嬉しかったんだろう。影夫が促すとダイは火の玉を掴んでまま、家の方に走って行ってしまった。

その後、ダイが向かった先から煙が立ち昇り、『ばつかもく〜ん!!!』とブラスの怒声が聞こえてきたが……たぶんミアみたいダイも嬉しさのあまり火の玉を持ったままブラスに抱きつきでもしたのだろう。

「すごいよクロスさん！ おれが呪文をつかえるなんて！ いままで何度やっても出来ないから、出来ないって思ってた！」

「契約できた時点で才能はあるよ。あとは試行錯誤しながらコツを掴めばできるさ」

「でも、こんなにあっさりできちゃうなんてすごいや！」

頭にこぶを作りつつ、興奮さめあらし様子で影夫達のところに戻ってきたダイが満面の笑みで影夫の手を握ってぶんぶんと上下に振る。

「はは、お役に立ててよかったよ」

「お兄ちゃんつてすごいでしょ。私も一発で使えるようになったし、教えるの上手なんだよ!」

「うんっ、すごいよ! 怒られたけどじいちゃんも凄い喜んでた!!  
ほんと、ありがとうクロスさん!」

「出来ないって思い込みは無くなっただろ? 後は、他の呪文も試して  
いけばいい」

「うんっ、さっそく試してみる……ヒヤド!」

ダイが両手を突き出して詠唱をしてみると、ちよびつと氷が出た。  
ただそれだけ。

「うーん、なんでだろう?」

「ダイ君は直感タイプだからな。理屈よりも、感覚で捉えた違和感を  
無くすように調整していけばいいと思うぞ」

「そうする……ヒヤド! 違うなあ。勢いがダメなのかも……ヒヤド  
!」

ダイは夢中で呪文を何度も試していく。

うんうん、自分であれこれ工夫して成功するのは面白いからな。

苦手意識をなくすにはこれが一番だろう。

原作の様子を見るに本人の感覚直感に任じたほうが良さそうだし。

「あつ、いい感じ。でも、ちよつと違うか、もつとぶわーって出して  
きゅつと締める感じ?……ヒヤド!」

最初は、ビー玉くらいの大きさしか出せなかった氷がもう、小さな  
メロンくらいの大きさになっている。

とっかかりとしては大変順調なようだ。

まあ、凡才なら自己流でやると変な癖がつくんだがダイなら大丈夫  
だろう。

どうしてもまずいようなら、後でアバン先生が何とかするだろう  
し、今は上達の楽しさを優先すべきだろう。

「ヒヤドー! できたあ!! はははつやったあー」

ダイはしばらく夢中になって呪文を試していたが、ヒヤドの呪文が

成功すると同時に

彼は魔法力を使い果たして地面に寝転がっていた。

「えへへ……俺が呪文を使ったんだ……」

疲労困憊になっていてもダイは、先ほどまで呪文を出していた手を握ったり開いたりしている。

「クロスさん。呪文つて楽しいんだね。小難しくてややこしくって、俺には向いてないって思ってたよ……」

「上達するのは楽しくて嬉しいもんだ。剣も呪文もな」

「よし！ おれ、呪文も頑張るよ！ 剣も呪文もばっちり使える勇者になってみせるよ!!」

「ああ、がんばれよ。やる気になってるダイ君にプレゼント。飲めば魔法力が回復するぞ」

ダイ君にまほうのせいすいをいくつか投げてあげる。

「ありがとう！ よーし、メラとヒヤドを今日中に完璧にするぞ！」

その日、ダイは夜になるまで夢中で呪文の特訓を続けるのだった――

その夜。

家の中で影夫とブラスは木のテーブルを挟んで座り、お茶を啜っていた。

「クロス殿。心より感謝いたしますじや」

「いえ、そんな。頭を上げてくださいブラスさん」

「ワシがあの子に教えてやれなかった魔法を使えるようにしていただいて……もうワシは涙が出てしまつて……その後、照れ臭くて雷を落としてしまいました」

「ダイ君の喜びようもすごいものでしたよ。よほど嬉しかったのでしよう」

例えば、最初はダイにも魔法に対して憧れの気持ちがあったんじゃないだろうか。

育ての親であるブラスが操る呪文は、自分や友達の傷を癒し、島に住むみなへの助けになっていたから。

そんなプラスに教えてもらっても、どうしても上手く使えない。きつとプラスはつきつきりで根気よく教えただろう。なのにいつまでたっても初級呪文が使えるようにならない。

頭を悩ませてダイの魔法の指導をするプラス。

苦勞をかけてしまっている、なのに期待に応えられないという日々が続く。

いつしかダイにはプラスを裏切っているような罪悪感を覚えてしまい、それが苦手意識になってしまっていたのではないだろうか。そんなことを影夫は思った。

その不幸な流れの解消に手を貸せたなら影夫としても嬉しいことだ。

「時にでろりんさん達は、中で寝なくて大丈夫なのでしようか？」

「え？ ああ。彼らなら用事があるとかで夜はどこかへ行っていますから気にしないでいいそうです」

「ほう、そうなのですか？ 勇者様ともなるとお忙しいのですな」

「ええまあ」

破邪の洞窟攻略を終えて以降、でろりん達とミアア&影夫はいつも一緒というわけではない。

秘密の特訓だとかで、ちよくちよくルーラでどこかへ行っていくことがある。

だが、デルムリン島に来てからはそのことよりも影夫には気になっていることがあった。

(でろりん達はどうするか。原作沿いにこだわらなくてもいいと思うんだけど)

原作のことは、影夫とミアアが何もしなかった場合に起こった事として伝えてある。

今後の予想や行動を考える上では原作に沿っているほうが対処しやすいというのは事実だ。

だけど、原作沿いで進めたところで、いくらでも予想外の事態は起こり得る。

せつかくまっとうな道を歩んでいるのに台無しにしてまで原作に

浴うことはない。

むしろ悪事を犯して心の迷いを抱えるほうが、マイナスになりうるだろう。

影夫がそう考えていることは、マトリフやでろりん達の前で伝えて  
いるが、

実際にでろりん達が『勇者』としてどうするつもりなのかは分  
からない。

でろりん達の良心は影夫も信じているが、正義のためには犠牲が必  
要なのだど覚悟を決めてしまう可能性もある。

(しばらく気をつけておかないと……)

影夫はお茶を啜りながら、目を閉じた。

いざとなれば、身体を張ってでも止めるしかなさそうだ。

## 決断

「は〜いいわねえこの島」

デルムリン島の砂浜にて。

サングラスを掛けた水着姿のずるぼんが、ビーチチェアに横たわってそう言うどゆつくりと足を組みなおした。

「海水浴は出来るし、フルーツは食べられるし、のどかだし、山もあるし、住み易い気候だし、温泉まであるなんて……最高よね」

ビーチチェアの脇には島で採れた果実を搾ったトロピカルジュースが置いてあり、彼女はすっかりバカンス気分だった。

「うほっ、うほほー！」

「あら、ありがと♪」

そこにおおザルやらスライムといったモンスター達が、果物を持ってくる。

ずるぼんがセクシーポーズでお礼のウインクすると、モンスター達は緩んだ顔で目にハートマークを浮かべるのであった。

「親切なモンスター達もいっぱい居るし……本当に永住しちやおうかしら。ねえくんわたし、ジュースのおかわりが欲しいなあ」

「うほっほっ!!」

おおザルが自慢の怪力で果物を潰してしぼり、ジヨツキに注いでいく。

「ん〜おいしいわあ。ありがとねー♪」

「えげつな〜……」

「ずるぼんのやつは見た目はいいからのう。『かおげい』を見たらあやつらも目が覚めるじやろ」

色気でモンスター達を手足のように働かせるその様子はまさに女王様。

でろりんとまぞっほはドン引きだった。

「おーい、いっぱい採れたぞー!」

「ぐぎやー、ぎぎやおー!」

とそこへ。

海に潜っていたへろへろとマーマン達が、新鮮な魚介類を手でろりん達のもとへ駆けよってくる。

「こらあずるぼん！ いい加減こつちに来いよ！」

「わかったわよ！ ってあらあ、みんなで運んでくれるの？ ありがとうね……ちゅっ♪」

「むほーっ！」

「ふごっ、ふごおーっ！」

ずるぼんは、舞い上がったモンスター達にビーチエアを運ばせながら、すっかり女王様が板に付いていた。

「おほほっ。女王様ついていー気分ねー♪ うーん快適、快……っ」  
だが。

調子に乗った罰が当たったのか、大きく揺れた拍子にずるぼんは転げ落ちてしまい――

「んぶべえっ!?!」

日差しで熱された砂と熱烈な抱擁を交わすことになった。

それからはもう大騒ぎ。

熱い！ 痛い！ と喚いてのたうったと思ったら、口に入った砂でえずいてオエオエ言いはじめる始末。

「うほうほっー!?!」

「ピキイー、ピキピキーツ!!」

周囲のモンスターも大慌てで、海水をずるぼんにぶっかけたり、それでさらに悲鳴が上がったりと、どんどん大きなバカ騒ぎになっていった。

「何をやっておるんじゃあやつは」

「もう知るか。ほっとけほっとけ」

そんな様子を呆れ顔で見ながら、でろりんとまぞっほは組みあがった焚火炉に火を入れて、焼き網を乗つける。

後はへろへろ達が取ってきた材料を焼けば海鮮バーベキューの完成だ。



「そういや、まぞつほはちよくちよく一人でどつかいくけどあれは何やってんだ?」

「ああ。まあアレじゃ。ちよいと野暮用がお」

「ふーん? 特訓も入れ込み過ぎるとうまくいかねーぞ」

「わかつとるよ、じゃがワシはちと先に遊びすぎたでの。修行を多めにしてちようどいいんじゃよ」

「無理はするなよ」

「ああ。疲労はきちんと計算しとるよ」

「ま、ぼちぼち行こうぜ、俺らはニセモンなんだからよー」

ふたりがそんなことを言っていると、ひよいひよいと火バサミで挟まれた海鮮が次々に網の上に乗せられていった。

「そうそう。それでいいのよ私達は」

「おぬし、いつの間に……」

「ほらほら。みんなはそこで休んでなさい。全員分見事に焼いてあげるからー」

「あ、ああ。任せる」

「美味しく食べるには、焼き加減が難しいのよね。あんたらじゃ無理」  
「よ」

顔を海水と砂で汚したまま、すまし顔のずるぼんはバーベキュー奉行と化す。

言うだけのことはあって、絶妙な焼き具合で次々に配られる海産物は美味しく、モンスター達もでろりん達も大満足の食事になった。

★★★★★

「……」

「……」

「……」

モンスター達も寝静まって静寂が支配する月夜。

デルムリン島の中央付近にある原っぱで、でろりん達は立ち尽くしていた。

「明日、決行だ。いいな?」

「し、しかしのう……」

「本当にやるのか？」

「ちよ、ちよつと……本気なの？」

でろりんの言葉に、顔を青くしたまぞつほ達が躊躇いがちに声を漏らす。

「はっ。おいおい、おめえら——」

「……」

でろりんは皮肉げな冷たい笑みを浮かべて、仲間たちをゆつくりと見回す。

あまりに剣呑とした雰囲気、ずるぼん達3人は息をのむ。

「なんか勘違いしてるんじゃないか？ なあ」

そう。

彼らは、元々偽の勇者だ。

それはクロスが語る、あるべきだった正史が物語っている。

「それは……」

なのに、3人は本当の勇者であるかのように思ってしまった。俺らがしなくて誰がするんだ？ まさかミアアにやらせようって言うんじゃないやねえだろうな？ こんなのは、俺たち偽物の仕事だろうが！

「……」

それは、定めなのだろう。

世界がそのように彼らを作ったのだ——

「そう、よね」

「そのとおりじゃな……」

「俺らがやるしかないんだな」

でろりんの冷たい視線に射抜かれた3人は、現実打ちのめされて俯きながら声を絞り出す。

へろへろも、まぞつほも、ずるぼんも。

逃げた過去を清算して、勇気の欠片を得て、力も得たことで、正しき道を進んでいるのだと思っていた。

そしてこのまま、正道を貫き続けられると期待していたのだ。

「……………」

小さな呻きとも、苦しい吐息ともつかない小さな音が三人の口から漏れ、そのまま言葉も出ない沈痛な時がしばらく流れる。

「あのね、でろりん」

その内。

意を決したずるぼんが、すぎるようにでろりんを見上げ口を開いて静寂を破り――

「ほ、他のやり方がきつと……」

「ねえよ」

にべもなく希望を絶たれた。

「逸脱したら先が読めなくなる……クロスの予言を最大限活かすためにやるしかない。それは、分かってんだろ？」

「それは……」

嗚呼……やはり、本当の勇者にはなれない。

ニセモノとして生まれたからには、ニセモノらしく振舞うしかないのだ。

3人の胸中を重い諦念が覆っていく。

「ちっ。もういい、俺がひとりやる。なあに。この島の連中を一人残らず半殺しにするだけだ！ 造作もねえよ!!」

「……………」

叫ぶようにそう言ってのけたリーダーの姿はあまりに痛ましい。

ずるぼん達は、ただ俯いたままうめくしかなかった。

「くくく……あーひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃー！」

でろりんは天を見上げて狂ったように笑いだす。

彼はこうやって狂ったふりに身を委ねなければ呵責の念に耐えられないのだ。

「ちくしょうが！」

心底嘆いているだろう。呪っているのだろう。

胸が張り裂けそうな気持ちを抱きながらも、自分ひとりで咎を背負おうとするその姿が……3人に覚悟を決めさせる。

「待ちなよでろりん。私もやる。仲間じゃないか」

「ああ、リーダーはひとりじゃない！」

「そうじゃ、わしらは一蓮托生なんじゃからな」

「ふん。てめえら……物好きな奴らだな」

自分達の本質は、どこまでいっても偽者でしかない。

そんな諦念の中で、ずるぼんもへろへろもまぞつほも。己の心を凍らせる。

どうせ偽物ならばそれでいい。

汚れ役、嫌われ役はすべてやってみせよう。

そして、可愛い弟子で妹のようなミリアには、正しき道を歩んでもらおう。

「いいかよく聞け。俺らは明日、この島のモンスター達を一匹残らず半殺しに——」

決意を瞳に宿らせた三人に向け、でろりんが声を張り上げて、宣言する。

「できるわけあるかアアア——!!!」

「へ?」

「は?」

「え?」

ぽかん。まさにそう聞こえてくるような表情で3人が呆けた。

「いやいや無理だろ! てかしちやダメだろ! それをやったら俺ら1ミリも成長できてねえだろ!!」

でろりんは今までの空気をぶち壊し、拳を天に突き上げて、何もかもぶつちやけはつちやけていく。

「変わったんだろが俺らは! やりたくねえし、できねえよ! それで当然! 当たり前だああ!!」

「えつ。ええー……??」

「なんだかのう。わしらちよつと覚悟したのじゃが……」

「本来の姿とか知ったこっちゃねえっての! ミリアもダイもクロスの奴も。信じてくれてるのは今の俺らだ。それを裏切れるもんかよ!!!」

「だ、だよなあ……」

「まあそうよねえ」

「ワシも気持ちは同じじゃよでろりん。じゃが、本当に良いのかの?」「これが賢明じゃねえのは俺も分かってるさ。でも正しいことだろ。何よりも、俺らが心から望んでることなんだろうがッ!!」

「……」

「自分を裏切って失望すんのはもうこりこりだ。自分が信じられなくても俺らはお互いを信じられるだろ?」

そう。力を合わせればでろりん達も、正しい道を歩いていける。

あの時がそうだったように。

「って訳で、やめだやめ!。そもそもクロスのヤローがぜっんぜん気にしてねえんだから、どうにかなるんだろうよ!。ああーつたく。柄にもなく悩んでアホらしい!」

ひとしきり叫びんで息を切らせるでろりんの肩を仲間たちが優しく叩く。

「リーダー。俺らもがんばるぞ!」

「立場と評価と自覚が人を作るといふ。ワシらのような小心者は勇者という看板に縛られるのじゃよ。懊悩は定めと思つて諦めるしかないのう」

「ふふ。たしかに今まで勇者っぽいことしてきたしね。今更それに背けない、か」

「ま、不自由なもんじゃが、わしやあ気に入っておるよ。なにせ格好いいからのう」

ほっほっほ。と笑うと、まぞっほは頭に被っているふしぎなぼうしを愛しげに撫でる。

まぞっほにとつて、仲間との絆と勇気の証だ。

「なんかそう言うのと俗っぽいわねえ」

「金のため、名誉のため、地位のため、見栄のため。そういう俗な動機のほうが長続きするのが人間じゃとワシは思うがのう」

「欲塗れの勇者……担当の欲望を決めとくと面白いかもね」

ずるぼんがそう言うのと、4人は首をひねって考え込む。

「なら、俺は強欲か。ゴールドも宝石も好きだからな」

「……ワシは嫉妬かのう。兄者の圧倒的な才には思うところがあるしの」

「俺はなんだ？ 傲慢か？ まあ本物の勇者を騙ってるしな」

「私は……ないわね」

へろへろ、まぞつほ、でろりんが次々と決めていく中。

ずるぼんだけは自信満々の顔で三人に言い放った。

「「はあ？」」

「強いて言えばちよつと怒りっぽいところがあることくらいかしら。でも私だけの所為ってわけじゃないし。つまりこの中じゃ私だけがまともってことよね！ うんうんそうなのよ」

「いやいやいや。ずるぼんはアレに決まってるだろ」

「だな。アレしかない。ちゃんと見てたからな」

「じゃのう……一斉に言ってみるぞい」

「「色欲！」」

「はあ!? ちよつと何よそれ、淫乱みたいに言わないでくれる？ こう見えても清らかな身なんだからね！」

「純真なモンスター達を色気で籠絡してたじゃねえかよ！」

「違うわよ！」

「100%違わねえよ！」

ギャーギャーと騒ぎ始めるでろりん達から少し離れた茂みの中。

こつそりと覗いていた影夫は安堵するとともに気を引き締めていた。

(さあて。ここからが正念場だな)

原作を無視する以上、ここからはどんな流れになるのか分かったものではないのだから。

(でも。困難だけど、俺も望んだ道だからな)

できるだけ原作沿いにすすめるということは多くの犠牲と悲劇を放置するということだ。

あの時止められたのに見捨てたのだと、自分の所業に後悔して苦し

むことになったろう。

（でろりん達のおかげだ。彼らが共に道を歩んでくれるから、俺たちは贅沢な選択ができた……）

影夫がそれほど原作にこだわらずにいるのは、でろりん達のお陰。

もし、でろりん達と出会えず、事情を知るのがミリアと影夫だけだったならば。

戦力も手数も足りずに——おそらく心を殺して、原作沿いですめることになってしまっていただろう。

（そうならなくて、本当によかった。でろりん達が俺に勇気と希望を与えてくれた）

でろりん達は何かと、ミリアこそ勇者で自分たちは贗物だと卑下するがそんなことはない。

影夫もミリアも心の底からそう思っている。

（でろりん達はさ、紛れもない勇者なんだぜ）

## 冒険のはじまり

「それでクロス。結局どうするつもりなんだ？」

でろりん達が原作沿いを諦め、影夫がほっと胸をなで下ろしつつ、思案にくれていると——唐突に声が掛けられた。

「な、なんだ。バレてたのかよ」

「ふん。気が緩んで気配が漏れてたぞ。俺らを止めるつもりだったんだろ？」

「お見通しかあ」

でろりんが軽く地面を蹴ると、一瞬で距離が詰められて影夫の目の前にやってくる。

「んで。ダイをどうすんだ？ お前らが代わりをするつもりじゃないんだろ？」

「冗談！ そんなつもりはないって。成長面はテコ入れ済みだし、覇者のかんむりは、俺らで手に入れるか、ロモス王にダイを売り込んで適当に手柄たてさせればいいける」

「なるほどな。どうとでもできるか」

偽勇者の襲撃がなくとも、ダイの強化は比較的容易だ。

ロモス王とはでろりんもミリアも面識があるし、勇者として認めてもらえている。

かつこ悪いが、ミリアが昔辞退した恩賞をやっぱり下さいとお願いしてもいいだろう。

ダイの成長は、すでにテコ入れ済み。

この時点で初級ながら呪文が使えるようになってる。

さらに体力づくりの指導やメデイーションなど基礎を教えることもすでにしている。

効果的な鍛錬を自分で続けられるように環境を整えてやることできている。

あくまでも基礎だけなので良かれと思って悪しきになってしまう可能性は低いはず。

恐らくはアバンに師事した時には原作よりもスムーズに修行がす



すめられるだろう。

「ともかくロモス王に顔通しだけはしておくか。やつといて困ることはないしな」

「ああ。じゃあ明日にでもダイをつれて出発するぞ」

早速翌朝。

ブラスさんの了承を得て、ダイを連れてロモスに向かう為、一同は船に乗り込んでいた。

「忘れもんじゃないか？」

「うん！ 荷物もあるし、ダイも迷子になってないよ！」

「むっ。俺は迷子になるような歳じゃないやい！」

「えー？」

「あーはいはい。ジャレるのは後にしろよ。んじや……しゅっばあー」

「ピッピーッ！」

「なんだあれ!?! 外のモンスターあ!?!」

出発しようとした一同の前に気球船が飛んでくるのが見えた。

ダイは正体の分からないものに警戒して、腰の木剣に手をやっていった。

ダイには分からなかったが、気球船にはパプニカの紋章が描かれており、レオナとバロンとバダックが乗っている。

「いや、あれは気球船って乗り物だよ」

「え？ そうなの……あっほんとだ！ 女の子と男の人とおじいさんがいる」

「ピッピー？」

どこから取り出したのか、ダイは望遠鏡を覗いていて人影を確認している。

ゴメちゃんはダイの肩にのって、羽を丸めて筒を覗くような仕草でダイとジャレていた。

「わあー、でっかい！」

「ピツピッピーー」

そうこうしているうちに気球船はどんどん近づいてくる。

(つてあれ？ パプニカの気球船ってあんなに大きかったか？)

影夫はひとり、内心で首をかしげた。

アニメや漫画では10人ちよつとでいっぱいになるくらいのスペースしかなかった記憶がある。たしかフレイザードから逃げる時にそのくらいの人数で窮屈そうだった。

しかし、今見えている気球船は思っていたより数倍大きく、荷物がいっぱい積まれているようだ。

ゴテゴテと木箱やずた袋、大きな布で包んである荷物が置いてあった。

「ああつー、レオナだ！ ひさしぶりだね」

「パプニカにも長らく行ってなかったなあ」

影夫の疑問を他所に久しぶりに見る友人の姿にミリアはぴよんぴよんと飛び跳ねて気球船に手を振って喜ぶ。

破邪の洞窟に挑んでいる間は忙しさのあまり年に数回会えるかどうかだった。

洞窟の探索が終わった後も、なんだかんだと忙しくてレオナに会いに行っていないかったから、一年ぶりくらいだろうか。

「でも何でここに？ あの儀式はまだ先のはずだよね」

「うーむ。分からん」

「はあーいみんなー！ ひさしぶりー！！ ミリアとクロスは変わらないわねーっ！」

「そんなに身を乗り出しては危ないですよ！」

「ああもうっ。分かっているって。ちゃんと気をつけてるわよ」

ゴンドラの縁に身体を預けてぶんぶんと手をふるレオナはバダツクによって引き剥がされてしまう。

「姫様！ お願いですから、パプニカにお戻りくださいませ！」

「ここまで来てまだ言うの？ いつも言うとおりにしてるんだからたまにはいいじゃない。しばらくは予定もなかったし」

「ここは怪物島と恐れられる島なのですぞ！ ああつ、姫になにかあ

ればパプニカ王になんと言えば!」

「平気だつてば。私だつてかなりレベルアップしてるのよ。それにバロンもついてるし」

「そういう問題ではありませんぞ!! 姫は唯一のお世継ぎなのです、いくら強かろうが万が一のことがあれば……」

お説教をはじめたバダツクの肩をバロンは軽く左手で叩いた。

「バダツク老。心配は分かるが、諦めたほうがよい。こうなった姫さまは止めるだけ無駄だ」

「そもそもじゃ! バロン殿がついておりながら、姫を止めるどころか脱出の手助けをするとは!!」

「ふむ。どうせ3月と経たずに儀式で向かうことになるなら事前にルーラで来れるようにしておく方が効率的ですから。それに、無人の怪物島ならアレを仕上げるにはなにかと都合もいなので」

しれつと言い捨てたバロンに一瞬あんぐりを大口を開いたバダツクは、ふるふると震えて爆発するように叫ぶ。

「バロン殿おおー!」

「姫は止めても聞く御方ではありません。いきなり行方知らずになられるより、我等だけでも御側についていた方がよほど良いでしょう」

「そ、それは……」

「ああもうっ。ふたりともぐちやぐちやうるさいわよ!」

「……御意」

「いいや、ワシは黙りませんぞ姫様! 今日という今日は……!」

バロンは魔族文字で書かれた書物を開いて読み始め、バダツクは姫にお説教を始め、レオナは耳をふさいであーあー聞こえないと叫び始める。

「あー……どうするよクロス?」

「とにかくレオナから話を聞かないとなあ」

こうして、ロモス行きは一時延期になった。

★★★

……ダイは不満げに頬を膨らませて、デルムリン島の海崖で腰を下ろしていた。

「ピーーピーツ！」

「はあ……みんなひでえよなあ。おれを置いて行つちやうんだもん！」

出発寸前。

あの後、レオナがベンガーナ王からの伝言をミリアやでろりん達に伝えると、彼らは急遽ベンガーナへ戻ることとなり、ロモスへの出発時期は完全に分からなくなってしまった。

急ぎということもあり、ダイは1人島に置いてけぼりとなってしまうのだ。

直ぐに戻つてくるとは言われているが、せつかく盛り上がっていた外への旅気分は台無しだった。

「ねえキミ。そんなところで何やってるのよ？」

「別に……なんでもないよ」

いつの間にか背後にやってきたレオナがダイに声をかける。

本来天真爛漫で明るいダイだが、今は不機嫌である。

ロモス行きが潰れる原因を作ったお姫様とはあまり話したい気分にはなれずにそっけない態度を取ってしまう。

「なーに拗ねてるのよ？」

「なんだっていいだろ……それよりお姫さんがこんなところに1人でやってきていいの？」

ダイは横目でレオナを見ると、咎めるように言う。

パプニカの姫さままだというレオナは、おてんばで好奇心が強く疑問があると納得するまで尋ねてくるし、何でもズケズケ物を言うというミリアみたいに遠慮のない奴だ。

それだけだとただの無神経で嫌な奴なのだが、会ってすぐに姫呼びを禁止して名前と呼ばせて嬉しそうにするという、やっぱりミリアみたいに変な奴でもある。

「いいのよ。バダックはブラスさんと苦労話で意気投合しちゃってお

茶飲みながら、チエスやってるわ」

「Wじいちゃん……」

バダックとかいう鎧を身に付けているお爺さんは、レオナの後についてまわり、ガミガミと小言ばかり言っている人だ。

その小言の嵐は何だかブラスじいちゃんを見ているような気持ちになる。

うんざり顔で小言を聞き流していたレオナの姿が自分と重なる。

そんなレオナが高貴でおえらい『お姫さま』であるというのがどうもしっくりこない。

「バロンの方は機械弄りに夢中だし。人の目がないこの島で仕上げたしまいたいそうよ」

「ああ、あの物騒な機械……」

バロンとかいう目つきの悪い青年は、姫相手にずいぶん気安い態度のようで、レオナも気にした風もなく、勝手気ままにさせているし、彼女自身もしている。

ブラスの話では王家の人は、高貴な血を引いていて、神に仕えるお偉くてりっぱな方々のはずだったのだが。

レオナと連れの方たりを見ていると気安過ぎてピンとこないダイだった。

「というわけで私は晴れて自由の身つてわけ！」

本当にそんなのでいいのかなあとダイは思う。

王家の人間というのは、忠誠を誓った従者とかをぞろぞろ引き連れて偉そうにしてるイメージだったのだが、このレオナはずいぶんと違う。

「ここまでくるのは結構森とか険しいし、モンスター達もいるはずだけど。本当に姫さまなの？」

「ふふふ。途中でキャタピラーくんが寝てたけど、通してもらったわよ。彼っていい感触してるわよねえ。思わず頬ずりしちゃった」

「おれの友達だぞ。変なことしないでよ」

「困ったみたいだったから、すぐに離してあげたわよ」

「……女の子って、芋虫みたいな見た目は苦手じゃないのお？ 普通

は悲鳴をあげたりするって聞いたけど」

「私は箱入り娘じゃないのよ。一緒にしてもらっちゃ困るわね。なんたってあのミリアの友達なんだから！ ダンジョンにだって潜ったことがあるくらいよ！」

そういつて、自慢げに胸をそらすレオナ。

姫という存在に、儂げな中に凛々しきがあるようなイメージを抱いていたからダイの違和感がますます強まる。

「ダンジョンって……普通は誰か止めるんじゃないの？」

「そりゃあね。でもミリアを見てたら自分が弱いままなんて嫌になつてね。それでも閉じ込めようとしてくるから脱走したわ！」

「ええー……」

「ま、バロンとバダックがついて来ちゃったけどねー」

「でもまあミリアの友達ならしようがないのかなあ」

ミリアが勇者と自称するのと同じくらい、レオナが姫というのは似合っていないようにダイには思えた。

ダイには分からないことだが、ミリアという変わった友達ができた影響でレオナは、はっちゃけておりアグレッシブさや行動力も原作の彼女より強くなっている。

原作ではあったレオナの姫っぽさは、シリアスにならないと分からないほどになってしまっている。

「それでこんなところで何してたの？」

「なんでもないよ……」

「分かった。置いていかれてふてくされてるのね。見た目どおり子供ねー。おチビくんは」

「チビじゃないやい！ おれにはダイって名前があるんだ！ ミリアの友達だけあって、言い方までそっくりだ!!」

「あらそう？ まだまだだと思っけど」

「褒めてない！ 用がないならほっといてよ」

ミリアに似てると言われて嬉しげに微笑むレオナに、むすつとダイは膨れてみせる。

レオナはほつといて欲しいと言葉でも態度でも示したダイを無視

して、その肩を掴んで、正面から顔を覗き込んだ。

「ふふふ。それでダイくん。こんなところで拗ねててもしょうがないわよ?」

「分かってるよ! でもどうしようもないだろ。ロモスの場所も分からないんだし」

「ふっふー。ところが私には分かるのよね。さらに言うとう気球船の操作もバッチリ出来るわよ」

「えっ!?!」

「いやー私も暇なのよ。私までほつといてミリア達は行っちゃうしねえ。旅は道連れって言うじゃない?」

「ま、まさか?」

「気球船でロモスに行くわよ! ダイくんも着いて来るわよね?」

ダイは、ぶんぶんと頭を縦に振るのだった。

一時間後。

デルムリン島の上空に舞い上がる気球船を必死に追いかけるふたつの人影があった。

「こりゃーダイ! 何をしとるかぁー!! 降りてくるんじや!!」

「おやめくだされ姫さまー!! ええい、こんな時にバロン殿はどこに行ったんじや!!」

「は、はあ。何でもテストがあるとかで島の大穴の方に……」

「ぐぬぬうっ! 帰ってきたらたっぷりとお説教ですぞ!!」

「ダイもたっぷり説教じやー!!」

「うわあ……」

ダイはそつと、ふたりのおじいさんの姿を見ないようにゴンドラの内側に体を向ける。

地上からは息を切らせつつ、断続的に大声が響いてきているが、レオナは涼しげな顔で気球船を操作していた。

「レオナ……ふたりともすごい怒ってるよ」

「そうねー」

「い、いいのかなあ。帰ってきたら絶対猛烈なお説教だよ」

「いいのよ。お説教はちゃんと受けるわ」

「姫が勝手に危険なこととしていいの？」

「大丈夫よ。危険なんてないわ。中級呪文もバッチリ使えるんだからたとえ野生のモンスターに襲われても平気よ。ダイくんも剣と呪文使えるんでしょ？」

「う、うん。剣の腕は自信あるよ。初級呪文も使える」

「なら大丈夫よ」

「……着いてこなきやよかったかも」

島の外——人間の国口モスに行つて見たいという気持ちは今も強く、楽しみではある。

しかし、帰つてきた時に食らうであろう大目玉を考えるとちよつぴり後悔してしまうダイだった。



## 急報

ダイとレオナがロモスへ向かっているその頃。

でろりん達とミリアらはベンガーナ王城の貴賓室で思い思いに過ごしていた。

そこは他国の賓客の歓待に使う広い部屋であり、会議も行える作りにもなっている。

その部屋の隅。

まぞっほがその手の中でビー玉大の透明な宝玉をいくつもコロコロと転がし続けていた。

「ふうー……」

そして徐々に魔法力を高めていくと、宝玉が共鳴するように煌いていく。

「うわぁきれい」

「ほっ、ほっ、ほいほいっほいほいっ」

宝玉が魔法力の光を宿したところでまぞっほは次々に右手で宙に向かって玉を投げては、器用に左手で次々にキャッチしていく。

「すごいすごいー」

「なんのまだまだっ……ほほいっ！」

空中に投げた宝玉をすべてキャッチした後、すっと手の平を開いてみると宝玉が両手の指の間に上手く挟まっていた。

そしてそれをまた、一気に宙へと投げる。

「むううっー」

まぞっほが下から煽るように魔法力を放出すると宝玉は、光を放ちながらふわふわと浮遊する。

「わーわーぱちぱちっ、ひゅーひゅーー！」

「ほっほっほ。まだまだじゃよ。もつと自在に動かせねばのう」

まぞっほがしているのは大道芸の練習……ではない。

魔法力の修行であった。

そんなまぞっほのすぐ側では。

「んっ……ぐぐっ」

ずるぼんが手の平の上に作り出した真空の刃を操作して天に向けて小さな竜巻を作っていた。

「んんん……はあっ！」

形を変えてみたり、固定化したり。

両手に同時に作り出してあわせて1つに合体させてみたり。

無論これも遊んでいるのではなく、真空呪文の精度を高める修行であつた。

そのずるぼんから少し離れたところでは。

「……っ！」

「っ!? うっ！」

でろりんとへろへろは向かい合つて座禅しており、静かに闘気を高めめあい、ぶつけ合っていた。

「ぶはあっ！ 負けだ負け。また力負けだ」

「俺は腐つても戦士だからな。力と闘気じゃ簡単に負けられない」

「ちっ。器用貧乏は辛いぜ」

ふたりがしていたのはイメージ化した闘気をぶつけあつて行う、仮想組み手修行。

「うーん、みんながんばってるなあ」

「そろそろ、俺らも練習再開するぞー」

「はい♪」

猫ぐるみの中に入っている影夫が、ミリアの前までとことこと歩いて、ぐでんとうつ伏せに横になつてみせる。

「んうう……お手、おまわり、ちんちん、待て、伏せ、三回回つてにやあくからの猫ダンス♪」

「……おお。ぬるぬる動く。ミリアもずいぶん上手くなつたなあ」  
ミリアと影夫組も遊んでいるわけではなく。

影夫の暗黒闘気の身体をミリアが操作して、傀儡掌もどきで猫ぐるみボデイを動かす訓練中。

「まだまだあつ。秘技八艘飛びつ、三角飛びつ、壁歩きいつ！天井張り付きいゝ♪猫はあんちつ、きいつく！トドメはつ、えぐりこむようにうつべしうつべし！」

日常のゆつくりとした動作から、狩りをするような激しい動きまで次々に繰り出していく。

暗黒闘気熟练操作精度を高める修行であつた――

ちなみに影夫が変幻自在の伝説の武具と呼ばれていて、普段は猫ぐるみに入っていることは、数度目のベンガーナ王との謁見の場でお披露目済みである。

「……………」

すっかり日課になっている各種修行で時間を潰していた2組の勇者一行を他所に、椅子に座り込み机に頬杖をついているベンガーナ王は難しい顔で思案にくれていた。

どのみち、ミリア達に伝える用事は、待ち人が現れるまで話すことができない。

時間を無駄にせず、修練に励む勇者たちの姿を一瞥すると王は侍女を呼んで、軽食の手配をさせる。

今、彼が出来るのはそのくらいだつた。

――それから小一時間後。

ノックもなく乱暴に貴賓室の扉が開かれ、息を乱したルイーダが駆け込んでくる。

「悪い！ずいぶん待たせちゃったようだね」

「むうー、おそいよー」

「文句があるなら、辺境なんかに住んでるその大魔道士さんに言つとくれよ」

ルイーダの後に続いてマトリフが部屋に入るなりしかめ面で、まぞっほの頭を杖で小突く。

「……………よう薄情者ども。元氣そうだな」

「あ、兄者……………」

「わあ、マトリフだいいししょー。ひさしぶりー！」

「ああ、ずいぶんと久しいな」

ミリアの明るい挨拶に皮肉げに答えつつ、じとりと影夫のほうにもマトリフは睨みを利かせる。

「お、おひさしぶりですマトリフさん。でも、薄情って……？」

「用事がねえと年単位で顔を見せやがらねえ奴らは薄情者じゃねえのか？」

さすがにそこまで間は空けていなかったと思う影夫だが、半年だつて年単位。

たしかに用事がある時しか顔を見せないのは不義理だろう。

「あつすみません、忙しくてつい……つていうかマトリフさんもやっぱり寂しいんですね」

「……定期報告をしやがれって話だ。お前らに不測の事態が起こつたら俺はどうやって知ればいいんだ？」

マトリフの指摘は正論だった。

たしかにありえる。

「すつ、すみません」

「ふんまあいい。んじや説明よろしく頼むぜ年増のねーちゃん」

「ああっ!? 道中さんざんひとの尻を撫で回しておいて、年増だあ？」

「このエロジジイ！」

「ケケケ、年甲斐もなくプリっとしたいいケツしてるのが悪いんだよ」

「あ、あれを触ったのか。ごくっ」

「……お兄ちゃん？」

「うっ。な、なんでもない」

「あーごほん。すまぬが、先にルイーダの報告を頼む」

話が延々と脱線していく状況に焦れたのか、ベンガーナ王が間に入る。

「単刀直入に言うよ——ギルドメイン山脈中央に巨大な岩の城が現れた」

「「「っ!?!」」」

ルイーダの言葉に、周囲に鋭い緊張が走る。

その意味することは重大だ。

「……ルイーダよ。それは、確かなのじやな？」

「ああ。クロスの『予言』通りってわけだね。新生魔王軍の移動城塞――」

「鬼岩城。地上侵攻の本拠地です。そうか、この時期にもう……」

「正直言って、クロスの予言は外れて欲しかったよ」

ため息とともにルイーダは天を仰ぐ。

ハドラー戦役ではベンガーナ王国の被害は比較的マシであったとはいえ、兵も民も少なくない数が死んだ。

他国の状況はもつと悪かった。

カール王国は幾度も王都が陥落寸前に追い詰められたし、パプニカなどは王都が蹂躪され、国土も散々に荒らされて本気で滅びる寸前までいったほどだ。

そんな危機が再びやってくる。

「魔王再びか……頼むよあんた達だけが頼りだ」

「ふっふーん。バッチリ任せてよね！ こんなこともあろうかと、みんなすっごい頑張ったんだから。ハドラーなんてちよちよいのちよいだよー！」

ミリアがエツヘンと胸を張ってみせる。

破邪の洞窟で嫌になるくらい修行した。

死線を何度もくぐりぬけ、多数の試練も突破して戦利品も多数手に入れたのだ。

「だよね？ みんな」

「破邪の洞窟の深層に比べりやなあ」

「へへ。頑張ったもんな」

「ほんと、何回死に掛けたか分からないくらいだったしねえ」

「復活したハドラーが相手ならどうにか勝てるじやろうのう」

元気いっぱいミリアの様子にでろりん達も苦笑しつつ、余裕を見せている。

積み重ねた努力と身に付けた力が自信と自負を生んでいた。

「そうかい、そりゃあ頼もしいねえ。アバンを含めると勇者パーティ

が3組もいる上に、予言で先読みまで出来るんだ。状況としちやかなりマシかもね」

「ふむ……油断は出来んが、そう悲観することもないということか」  
強者たちの余裕ある態度にルイーダが破顔し、ベンガーナ王もそれに続く。

「……………」

だがマトリフだけは、しかめっ面のままだ。

ルイーダたちと違い、彼は大魔王バーンのことを知っている。

ハドラーが足元にも及ばない、まさに神にも等しいような相手に勝てなければ地上の終わりだということを知っている。

「念のために聞くが、魔王軍に勘付かれたりしてねえだろうな」

「そんなヘマはしないさ。情報を持つてくるのは雇った狩人たちだ。獲物を追って山奥まで入ってきたとしか思われなはずだよ」

彼らは本当に獲物を狩ってそれで生計を立てている。

ルイーダの手下が彼らから情報を聞き取る時も、不自然に見えないように徹底してあった。

さらに、ギルドメイン山脈の奥深くにまで狩人が入り込む不自然さについても、好景氣目当ての狩人の数が増えて、狩猟競争が激しくなったが故と理由付けがある。

また、狩人自身が魔王軍に目を付けられたり捕らわれた場合でも、真の目的を知らない為に情報は漏れない。

「ほう。悪くねえ手際じゃねえか」

『知っている』ことを知られたら、どうなるかくらい分かってるさ」  
「ううむ。しかし気になることがある。クロス殿の予言によると、侵攻の時期はまだ先とのことだが？」

そこで腕を組んで考え込んでいたベンガーナ王が口を開く。

「はい、今から半年前後です。おそらく今はまだ準備段階なのでしよう」

「侵攻が早まったわけではない、か。ならば今のうちに叩けぬか？」

ベンガーナ王軍の総力を挙げてでも――

「そりややめたほうがいい」

「むっ。」

そう言いかけた王はマトリフに言葉を遮られる。

「ハドラーも阿呆じゃねえだろうから、以前以上の軍勢を用意するはずだ。となると、今はまだ配下の魔物を集めている段階だろう」

「そうです。新生魔王軍には6軍団あって、それぞれ強力な軍団長がまとめていますから」

「今殴りこんでも軍勢も軍団長も城に詰めてるかわからねえな。最悪もぬけの殻だ」

「戦果なしで警戒されるだけというのは、たしかに困るのう」

「連中がこっちの手品の種に気付く前に、ドカンと派手に軍勢を壊滅させとかねえと被害が増える」

「となると待ち伏せて各個撃破の形になるかの」

まぞつほとマトリフの会話を聞きつつ、なるほど、と影夫はごちる。

開幕即壊滅させられたとなったら、魔王軍の怒りと警戒は俺達に集まるから全世界の被害は劇的に抑えられるだろう。

「ふむ……」

王が再び、顎に手を当てて考え込む。

苦悩するようにその表情は歪んでいた。

「諸君らへの助力は惜しまん。必要なものはなんでもいってくれ。それくらいしか、ワシにはできん！」

理由もなく露骨に国が動いては目立ちすぎて、魔王軍に気取られる可能性が出てしまう。

ゆえに表立っては動けない——ベンガーナ王はそれが口惜しかった。

「本当にすまぬ。我が自慢の軍勢などと言っておきながら——魔王軍との戦いの役に立てず、情けない！」

「お、王様、どうか頭を上げてください！ 今までも気球船を貸してくれたりとかすごいありがたいがたかったですし!! 助かっていますから。なっ、ミリアア？」

「そうだよっ、気球船のたびはとくつても楽しかったっ」

「いつも感謝しているんです。それに、これからもどんどん遠慮なく

たよらせてもらいますから」

「おめーらはカケラも遠慮がねーもんな。ま、王様のお許しが出たんだし、俺らもガンガン頼らせてもらおうとするかー!」

「ほっほっほ、ワシらは浪費家じゃからのう。申し訳ないが、後悔してしまふかもしれないぞい」

彼らの集り宣言のようなあつかましい言動も、無力感に苛まれる王を慮った故。

それが伝わったのだろう。王は悔しげな表情から一転、不適な笑みで胸を叩いてみせた。

「ああ、なんでもいい。金でも何でもいるだけ言ってくれ!」

「えっ!? それじゃあ、ド、ドレスや宝石も有り!? きゃー! 姫が着るような豪華なのもらえるの?」

「俺はやっぱり現ナマなんだな。ゴールドがっぼがっぼがいいんだな!」

「まずは美味しいご飯一生分! えっとえっとね、気球船も欲しい! それとね面白い武具も! 伝説のアイテムとかもあればちよーだいい!!」

「かっかっか。俺様はむっちりポインな美人のねーちゃんを両手いっぱいにいただくとするか」

「いやいや——マトリフ師匠まで何言ってるんですか!?!」

一国の王に向けて、再現なく欲望を吐き出し始めるのを、影夫があわてて止める。

冗談まじりではあるが、要求の内容が私欲塗れで酷過ぎた。

「はっはっは! よいよい!! 国庫からは出せんが、ワシの財産からいくらでも出そうではないか!」

「い、いいんですか王様。うちの連中は遠慮なんかしませんよ?」

「ワシが破産する程度、何の問題もないわ! 王位を継ぐ前に山と築いた富を使う時が来た!」

「ま、まあ本人がいいならいいけど……」

「俺達もかなり欲深いけどよ、あいつらほどにはなれないよな」

「ま、わしも古文書や魔法のアイテムが欲しいが……兄者たちに比べ



たら可愛いものじゃな」

「おほほほっ、めぼしい宝石はすべてあたしのものよ！」

「ぬれてにあわ、ぬれてにあわー」

比較的分別がある（小心者とも言う）3人は俗っぽく欲丸出しでニヤけるずるぼん達にあきれ果てる。

「はっはっは!!」

クルテマツカは王としてではなく、個人として愉快そうに笑い続けるのだった。

ダイ覚醒！

「すごいや！ 見渡す限りの陸地！ デルムリン島よりでっかい森！  
これが大陸なんだね！」

「ふうん。ほんとに島から出たことなかったのねえ」

気球船にのって、ロモスに向かっているダイとレオナ。

現在ふたりはロモス領内、魔の森の上空を飛んでいた。

「うわあー！ あー！ あつちにごうけつぐま、じんめんちように、どく  
いもむしもいるや！ トモダチになれるかなあ？」

「どうかしらね。今は魔王の影響がないから、元々大人しい性質の子  
なら大丈夫だと思うけど。元から獰猛だったり本能だけで生きてる  
のも多くいるみたいだからね」

「そうかく。やっぱりでろりんが言ってたとおりにんだね」

「まーね。って少し風が出てきたわね……」

風向きが代わり、レオナが忙しそうに動きまわって気球船を操作す  
る。

それをぼんやり眺めつつ、ダイはやっぱり姫らしくないと思ったり  
した。

「そうそうダイくん。ロモスの王城についたら王様に挨拶に行くんだ  
から身だしなみは整えておいてよ」

「ええっ!? 聞いてないよ！ そんなこといわれても、おれ服はこれ  
しかないし！ だ、大丈夫かな……？」

「ロモス王はそんなの気にしない人だから平気よ。髪の毛とか服の乱  
れだけ直しておけばいいから」

「うう。急に言うなんてレオナひどいよ」

ダイは慌てて、乱れた髪の毛を弄ったり額につけてある冠を直した  
り、服の埃を掃っていく。

「ま、あと数十分は空の旅だから今は楽しんでおけばいいんじゃない  
？ 心配は着いてからでいいわよ」

「つたくもう……じゃあ着いてから言えればいいのに」

楽しい気分にな水を差され、ふてくされながらダイは気持ちを切り替

えて、再び望遠鏡で魔の森の観察にもどる。

「あれ？」

木々の合間を何か走りぬける小さな影が見えた。

「いつかくさぎかアルミラージかな？」

何者かはどうやら気球船のほうにむかって走っているみたいで、木々が拓けた場所へと飛び出てくる。

「あれは……女の子!? 何かに追われてるよ!」

「急いで助けに行くわ!」

レオナが急ぎ気球船を下降させていくが、走り逃げていた小さな女の子は足をもつれさせて転んでしまった。

「ああっ!」

「ひっ……やあ……っ」

立ち上がろうと焦るあまり、何度も転びながら後ずさることしかできない。

羽の生えた6本足のライオン——ライオンヘッドは身を屈めて足に力を溜める。

一息に飛び掛り獲物を仕留めるつもりなのだ。

「やめろーっ!」

「ちよ、ちよつとダイくん!」

レオナが制止するのも聞かず、ダイは気球船から飛び降りた。

「っ……助けてえええ!」

飛び掛ったモンスターが女の子に牙を突き立てる寸前。

ダイはライオンヘッドの上に落下して、一時昏倒させることができた。

「きみ、大丈夫っ!」

「えっ、う、うん……」

「早く逃げて! あの気球船の方に向かうんだ!」

「で、でも……足が。あうう」

女の子は転んだ拍子に足を怪我してしまっているようで逃げられない。

ダイは焦りを覚えつつ、腰の木剣を抜いてすばやく女の子を背中に



「おれなら、大丈夫だから……」

「う、うん……」

(だめだ、こいつには勝てない……!)

ダイは脅える女の子を励まし庇いながらも、心底焦る。

「グルウツ!!」

そこへ再び飛び掛ってくるライオンヘッド。

6本足から繰り出される素早くも力強い連続攻撃を、ダイは木剣でどうにか捌いていく。

「ぐつ、うつ、ああつ、くつ、くそおつ!」

「ぐすつ、えぐつ……」

(ごめんよ、おれのカじゃ……つ)

恐怖のあまり女の子が泣き出してしまう。

必死に応戦しながらダイは、ちいさな女の子を救ってあげられない自身を責めていた。

(おれが強ければ、もっと強ければ……力があれば……!)

一撃を受けるたびに体勢は崩されて、防ぎきれないダメージを負い、ダイの全身には傷が増え、動きは鈍っていった。

「はあつはあつ……!」

「あつ、やあつ……ぐすつえぐ」

ダイは防御に手一杯で反撃をする余裕もない。

体中の傷から血を流し、倒れこみそうになるたびに、ダイは震える足を抑えて、ライオンヘッドを睨みつけた。

(だめだ。おれが諦めたら、この子はどうなっちゃうんだよ。たとえおれに力がなくなったらって!)

震えて涙を流す女の子。

絶対に彼女を守って見せると、ダイは心を奮わせる。

「おれはぜったいに諦めたりするもんか! ……うおおおおおお!!!」

決意を込めて、力を搾り出さんとダイが叫ぶ。

それに応えるように、かすかな光がダイの身体を包み、額に未知の力が集まっていく。

「グウウ……ガアアツ!!」

ダイは飛び掛ってきたライオンヘッドに向けて、木剣を振り抜き、渾身のカウンターを叩き込んだ。

「ギアアウツ！」

それは相手の力を利用した、まさに会心の一撃。

「くっ」

しかし、ダイの得物は所詮木剣。

その威力に耐え切れず、攻撃半ばで木の刀身は砕け散ってしまった。

「このおー!」

だがダイは、身体の奥から湧き上がってくる力と衝動に突き動かされ、その状況でも最善手を打つ。

刀身が半ば折れた木剣をライオンヘッドの目へと突き刺し、怯んだところに闘気の籠った拳でライオンヘッドを幾度も殴りつけた。

「ああつ、うあつ! だりやつ、はあああつ!!」

腹に、胸に、顎に、鼻面に、額に。

左右の拳を猛烈な勢いで叩きつけていく。

「でやああツ!」

最後に渾身の力をこめた回し蹴りを放つと、ライオンヘッドはもんどりうって地面を転がっていった。

「はああはあはあつ……!」

「ガツ、グアアツ!」

激しいダメージを負って、吹き飛ばされたライオンヘッドは驚愕していた。

相手は脆弱な人間の子。いとも簡単にしとめられる獲物のはずだった。

予想外の抵抗はされたが、己の勝ちを本能的に確信していた。

「グオオ……オ……」

しかし、すでに片目は潰されて全身に激しいダメージを与えられてしまっている。

そして今ライオンヘッドは、自分が獲物になってしまったような強

い恐怖を覚えていた。

彼の本能は、目の前の人間の子供は獣王をも上回る絶対強者だと警鐘を鳴らしていた。

だが。ライオンヘッドは獣王を除けば魔の森の食物連鎖のほぼ頂点にいる存在。

弱肉強食が掟の魔の森で、人間の子供相手に逃げ出すようでは生きていけない。

故に。ライオンヘッドは、ダイに向けて大口を開けた。

「ガウツ！ グウルウウツ……！」

その口内に魔法力が急速に集まり、紫電を放ちながら閃熱が高まっていく。

（あれをつ……うたせちゃだめだ）

ベギラマ——それは現時点の地上においては、殆ど最強クラスの呪文である。

「う……あ、ああ……っ」

ダイの胸に強い焦燥と危機感が募るが、打つ手はない。

「ガアアアツ!!」

咆哮とともにベギラマが放たれてしまった。

女の子諸共ダイを消し去るであろう直撃コースで。

まばゆい光を放ちながら、閃熱はダイ達へと迫る。

「……ぐすっこわいよ、お兄ちゃんたすけて！」

怯えた女の子がダイの背後に抱きついてくる。

ダイが何とかしなければこの子も確実に死んでしまう。

ダイの脳裏に閃熱に焼かれて死んでしまう女の子の姿が一瞬よぎった。

「ううっ……おおおおおッ!!」

ダイが雄叫びを上げると額につけていた手製のかんむりがはじけ飛び、闘気と魔法力が激しく噴き上がる。

そして、額に竜の紋章が浮き上がると同時にダイは衝動のままに右手の拳を突き出した。

「ベギラマアアアッ!!」

ダイの拳から放たれた眩く閃熱呪文が、ライオンヘッドのものと激しくぶつかり合う。

一瞬の拮抗の後。ダイのベギラマは、ライオンヘッドのそれを威力で上回り、見る間に押し込んでいった。

「グギャアアアアアア……！」

ライオンヘッドは閃熱に飲み込まれて燃え上がり、苦悶の叫びを上げて地面に倒れこんだ。

「うつ……」

そこで、ダイの力が尽きた。

額から紋章が消え去り、ダイの全身から力が抜けて思わずその場に倒れこんでしまう。

ダイは知らないが、未熟な状態で不完全な竜の紋章の力を過度に行使してしまった反動であった。

「だ、大丈夫……？」

「う、うん……なんとかね」

「おにいちゃんありがとう！ 私、ミーナっていうの！」

「おれはダイ……はあー、助けられてよかったあ！」

ダイは、心から安堵する。

戦いの最中、自分でもよく分からない力が出ていた気がしたが今はどうでもよかった。

「ともかくここは危険だからはやく気球船に向かおう。ほら、送ってあげる」

力が抜けそうになる足をムリヤリに動かして、ダイは立ち上がる。

ここは危険な魔の森。

いつまた他のモンスターが来るとも限らない。

そうなる前にレオナと合流しなければ今度こそ危ないだろう。

「うん……あ」

「ほらいこう。どうしたの？」

「あ……あつ……ああつ」

ダイが呼びかけても、ミーナは声も出せずにただただ震えてしまっ



ていた。

(ま、まさか……)

ダイは嫌な予感に満たされながらゆっくりと背後を振り向く。

そして、そこには——絶望があった。

「そんな……！」

## 使徒の片鱗

煙がくすぶる焼け焦げた身体を震わせ、

痣だらけで血を流しながら、

激しい怒りをその身に湛えた――

手負いのライオンヘッドがダイに向けて、大口を開けていた。

「グオオオオオオーッ!!」

彼は最期の力を振り絞って再びベギラマを撃ち放つ。

「ぐ、ぐう……ち、力がっ」

慌ててダイは再び、力をこめようとするが、もはや限界だった。

紋章の力は使いきってしまい発現せず、自力でどうにかするしかない。

「ヒヤドー!」

放たれたベギラマをダイはヒヤドで迎撃するが、その程度で防げるはずもない。

「くそおっ……!」

一瞬の拮抗すらしなかった。

瞬く間にヒヤドの氷雪は押し込まれて、ダイに閃熱が直撃してしま  
う――その直前。

「ヒヤダルコ!」

背後から氷雪の嵐が放たれてベギラマの熱線をギリギリのところ  
で拮抗させ、じわじわと押し返していく。

「レオナ、来てくれたんだ!」

「なんとか間に合ったみたいね、ダイくん?」

「うん! でももうおれ、魔法力も力も空っぽなんだ」

「あとは私に任せなさい!」

レオナはヒヤダルコを撃ち続けながら、ダイと女の子の前に立ち  
はだかる。

「ごめんレオナ……おれに力が残ってたら……」

「ダイくんはもう十分やったわよ。次は、この私の番!」

レオナは、一部始終を見ていた。

ダイの奇跡的な奮戦も、自分にも使えないような強力な呪文を使ったことも。

次は自分の番だとレオナは氣力に満ちていた。

「ぐ、ぐぐ……っ」

だが、ベギラマの威力はレオナの想像以上。

「こ、このっ……!」

ダイのヒヤドでいくらか弱まっていたから一瞬押し返したものの、その影響が消えると同時に逆にじわじわと押し込まれてしまう。

「なんで、なんでよっ!」

レオナは必死に両手を突き出して、魔法力を放ち続けるが、状況は悪くなる一方。

「私の呪文じゃダメなの……?!」

並の使い手のヒヤダルコ程度では、ベギラマは抑えきれない。

それはこの世界では当たり前のことだった。

「もういいレオナ!」

そのことを悟ったダイは、レオナの背後に立って両手を広げる。

「ミーナをつれて逃げて!」

「そんなこと出来るわけないでしょっ!」

「……おれなら大丈夫。こう見えて頑丈だからさ耐えて見せるって」

ダイは、自分の身体で呪文を受け止めてふたりを逃がす、そのつもりだった。

今の状態でベギラマを受ければ死ぬだろう。

でもそれでも。

ブラスからの教えと、勇者を目指す気持ちと、彼の中の純粋な善性が頑なに女の子を守ろうとしていた。

「ダイくん……!」

その姿にレオナは感銘を受けながら、どうしようもなく自分が嫌になる。

(なんてっ、私はなんて情けないのよ! 年下のダイくんがあんなに頑張ったのに。親友のミアは多くの人たちを救ってきているのに! 私は……私は!)

「レオナ、もうこうするしか」

「ふぎけないですよ！ 友達を犠牲にするなんて……」

「ありがとうレオナ。もういいよ、ふたりだけでも」

「うっさいのよ!! 黙って見てなさい!!」

涙目でレオナはわめく。

レオナの中でふがいない自分と、その為に自己犠牲に走ろうとするダイへの怒りに火がつく。

そんなに自分は情けないのか。

そんなに自分は頼りないのか。

しかしダイくんのその態度は正当なものだ。

だって現に負けかけている。

——自分はミリアのような強い女の子じゃない。

みんなに守られるだけの、か弱いか弱いおひめさまだ。

——友達を犠牲にして助かるなんて、正義じゃない！

その憤りが。

出来なければ死ぬという状況が。

「友達ひとり守れなくて、何が、何が……っ！」

——レオナに眠っていた力を引き出させた。

「私はパプニカの姫で、未来の賢者なのよ！ ……我がパプニカを守護する母なる大地の神よ！ 御神の祝福と加護を与えたまえっ!!」

パプニカ王国の祀る神々へと、強い正義の願いと祈りで呼びかけたレオナの全身に淡い緑の光が宿る。

「神よ、友を助け民を守護する力を授けたまえ……我が名はレオナ。正統なるパプニカの王位を継ぐものなり！」

レオナは一世一代の賭けに出た。

彼女はヒヤダルコを止めると、即座に別の呪文を発動させる。

「……ヒヤダインツ!!」

それは、契約だけして使えなかった高度な氷系呪文。

稀代の天才と称される3賢者がようやく最近使えるようになったばかりのもの。

猛烈な氷雪の嵐を魔法力の輪っか状の光線の中に収束させて打ち

放つ強力な呪文であり、並のメラゾーマを超える威力がある。

普段ならレオナに使えるはずもない難易度の高い呪文だった。

だが、レオナの決然たる意思の力が眠れる才を呼び起こし、神々の加護を受けて不可能を可能とする。

ダイが未来の勇者にして、純粹を司るアバンの使徒だと言うのならば――

レオナも未来の賢者にして、正義を司るアバンの使徒なのだ。

「最近のお姫様をつ、舐めんじやないわよオオナー!!」

ベギラマの熱線を呑み込むように押し返し、ライオンヘッドは氷漬けにしていぐ。

そして断末魔の声を上げる間もなく、氷像と化したライオンヘッドは今度こそ息途絶えた。

「や、やったつ、やったあ！　すごいやレオナ！　ほんとにすごいよ!!」

「は、はは。ざまあみなさい！　やったわ！　やってやったわよ!!」

駆け寄ってきたダイがはしやぎ、震えていたミーナがひつしとレオナに抱きついてくる。

「おにいちゃんおねえちゃんありがとう……ぐすつひぐつ、こわかったよおつ！」

「ミーナって言ったっけ？　ほら、足を出して……」

「うん！」

レオナが最期に残った魔法力を振り絞ってミーナにホイミを掛けると、強くくじいて歩けないほどだった足が見る間に回復していた。

「わあつ、ありがとう！」

「はあー……今ので魔法力は完全に打ち止め」

安堵と同時にレオナに襲ってくる極度の疲労と緊張からの反動。

力量に見合わない呪文を無理やりつけた反動はかなり大きく、体力も激しく消耗していた。

レオナの手の震えは今更になって、激しさを増して止まらない。

「ははつ。我ながらほんと、なっさけないわ。でもぶっつけ本番にし

「ちゃ、上出来よね……ちよつとダイくん！」

「なに？」

「頑張ったご褒美にこれあげる。だから、後は任せたわよ。ダイ、くん……」

「ちよつ!? レオナ!?」

レオナは、腰のベルトからパプニカのナイフをダイに渡すとそのまま、満足げな笑みを浮かべて気絶してしまった。

「おねえちゃん大丈夫……？」

「うん、ちゃんと生きてる……おれ達は生き延びたんだ」

これで死闘は終わり。

後は気球船に戻るだけ……しかし。

「——ぐふふつ。面白いものを見せてもらったぞ小僧！」

今の時期に出会はずの存在が、ダイ達の前へと姿を現した。

ダイの絶望は続く。

## 獣王の試し

「だ、誰だお前はー」

「俺はこの魔の森の主。獣王クロコダイン」

分厚い鱗の皮膚の上に重厚な鋼鉄の鎧を身に纏い、巨大な斧を持つリザードマンがそこにいた。

「獣王、クロコダイン……？」

ダイは一目見ただけで彼の実力を理解し、勝てる相手ではないことを悟ってしまった。

ダイの中に眠る竜の騎士の経験がダイにどうしようもなく勝てないことを伝えてくる。

そしてそれは事実。未熟な竜の騎士の力を使っても力及ばないだろう。

疲弊しきり気絶したレオナとミーナを抱えて勝てる相手じゃなかった。

「どうした。さっきまでの威勢はもうないのか？」

ダイは知らないが、この時点でクロコダインはすでにハドラーからスカウトを受けていた。

魔王軍決起の暁には百獣魔団の軍団長を任されることになり、魔の森の配下を集めて回っているその最中に、ダイたちの戦いを目撃し、興味を抱いたのだった。

「ごめんミーナ……レオナをつれて気球船までいける？」

「え、うん……」

少し離れたところにある原っぱ。そこに気球船はある。

周囲に獣の気配はなく、レオナを引きずりながらもなんとかたどり着けそうだ。

「その荷物にキメラの翼があるからふたりで逃げて。おれは後からいくから」

「ほう……？」

ダイの言葉を聞いて、クロコダインは面白げに笑みを浮かべる。

絶対に勝てないと確信しても、弱い者を逃がす為に立ちふさがろう

とする。

その姿が武人としての琴線に触れた。

「中々の男ぶりだが——いいのか小僧。恥など捨ててその女たちを差し出せば自分だけは助かるかも知れんぞ」

そして試すように言葉を続ける。

今までクロコダインが出会ってきた人間は皆そうしてきた。

自分の命が助かる為なら、弱い者を犠牲にして、誇りも矜持も捨てて、ひっしになって命乞いをした。

人間とはそんなつまらない生き物のはず。

だが、ここにいる少年と少女は違ったのだ。

弱き者を守る為に限界を超えて戦いそして、勝って見せた。

それは武人として、尊敬できる姿だった。

だから、彼は今一度試している。

「ふぎけるな！ そんなこと死んでもするもんか！」

ダイはいきり立ち、パプニカのナイフを構えてクロコダインに斬りかかる。

「ぐふふっ……ふぁーはっはっはっは！」

「ぐぐ……っ！」

大笑いしながらクロコダインは素手でその刃を掴み受け止めた。

ダイが全体重をかけて刃を押し込むがビクともしない。

「いいな。実にいい男ぶりだぞ！ 将来が楽しみな小僧だ」

その瞳に、誇りと矜持を穢された男の怒りを感じ取って、クロコダインは感心する。

「だが……力不足ではな」

「おれはっ、ふたりを！ まもるんだぁーっ!!」

鋼鉄以上の堅さを誇るクロコダインの皮膚には刃が通らない。

だがそれでも渾身の力をこめて、ダイはわずかに体に残った力を振り絞った。

「お、おおっ？ 俺の鋼鉄の皮膚に傷をつけるとは！」

一筋の血が流れる。

僅かに。だが確かに傷をつけて見せた。



それが今のダイにできる最大の抵抗。

「くそっ……もう、ちからが」

ダイの体から力が抜け、その場に倒れ込む。  
もはや限界だった。

「うう……」

なんとか立ち上がろうとするも、それすら出来ないほどに消耗しきってしまった。

ダイは死を覚悟した。

「ぜつたいに、あのふたりには手を出させるもんか……!」

それでも、這いずって上半身をクロコダインのほうに向け、力が入らない右手を左手で押さえつけ、両手でナイフを握った。

そして、目線を上げてクロコダインを睨みつける。

「ぐっ、ふふふっ……!」

クロコダインは激しいダイの闘志に思わず一瞬後ずさると、顔を手で覆った。

「負けた負けた! ……俺の負けだ!」

「えっ……?」

クロコダインが発した予想外の言葉に目を丸くするダイ。

「お前の勝ちだと言っているのだ小僧!」

クロコダインは傷つけられた指を見る。

圧倒的にレベル差がある上に、魔法力も体力も尽きて疲弊した状況。

それでも逃げず諦めず媚びずに手向かい、傷さえ負わせてみせた。

さらに、立ち上がる力も無くしたというのに凄まじい闘志と気迫をむき出しにして、この獣王を一步とはいえ退かせて見せたのだ。

「い、いいの?」

「かまわん。お前はいい武人になる。ここで死ぬには惜しい奴だ。ぶわはあっはっは!」

あまりにも天晴れというしかなかった。

戦気を消して、心の底からクロコダインは笑う。

「小僧！ お前とあの娘の名はなんと言う?!」

「え？ おれはダイ、そっちがレオナ……」

「そうかそうか。覚えたぞ。お前たちはいい漢たちだ！」

「ええ？ レオナは女だけど……」

「ふははっ、男の中の男と、男勝りの女傑よな！」

クロコダインはダイを担ぎ上げると、レオナを引きずって逃げようとしていたミーナに歩み寄り、彼女達も担ぎ上げる。

「俺に勝ってみせた褒美だ、この森を抜けるまではお前たちに決して手出しをさせないことを誓おう」

「ありがとうクロコダイン！」

ダイは心からの感謝を抱いて笑みを浮かべる。

純粋で純心なあなたか！ その笑みはまるで太陽のようだった。

「ふっ。人間が俺のようなモンスターに感謝するとは、豪気だなダイよ」

「モンスターはおれの友達だよ！ 島にいっぱいいるんだ！」

「そうかそうか！ ならばこの女傑もそうなのであろうな！ ますます気に入ったぞ！ ぶわあはーはっは！」

クロコダインはのっしのっしと気球船に向けて歩いていった。

その後、気球船に着いてレオナの快方が終わるまでクロコダインは、周囲の魔物を遠くへ追いやってくれた――。

小一時間後。

意識を取り戻したレオナは事情を説明されて、気球船を浮かべるべく操作していた。

「それではなダイ。お前にはこれをやろう」

クロコダインは、首飾りのようなものをダイに渡す。

「俺の爪の先を鎖に通したものだ。それを持っていればこの森で魔物に襲われることはない。その子にくれても構わん。お前の好きにしろ」

「うん、ありがとうクロコダイン」

あくまで素直に感謝するダイにクロコダインは破顔する。

「うむ。さあ女傑どのも受けとつてくれ」

「だから、私のことはレオナって呼びなさいよ！」

「おおすまんすまん。レオナなのだな」

クロコダインは、首飾りをレオナにも渡す。

「ありがと。クロコダインって、話してみると意外と普通のヒト？  
なのね」

「ふっ。お前たちが弱くて卑怯なつまらない人間なら相応の態度で接  
しただろうが——例外のようなのでな」

「あらそう？ ならもつとすごいのがいっぱいいるわよ。心も体も技  
も強いのがね！」

「フハハッ、そのような猛者がいるのか！ 世界は広いな！ 出会う  
のが楽しみだ」

そうしているうちに、レオナが気球船の操作を終えた。

ダイは小さな手を差し出して誇り高き獣王と握手を交わす。

「じゃあねクロコダイン！」

「それではな。強くなれよふたりとも。そしていつか正々堂々戦お  
う」

「うん！」

「また会いましょう！ 出来れば敵ではない形でね」

「……それは難しいだろうが、まあいい。全力で戦う時を楽しみにし  
ているぞ」

「えっと……ばいばい、クロコダインさん！」

「ふはははっ、その幼子の将来もなかなか楽しみなようだ」

最初は怯えていたミーナも、ダイとふつうに会話するクロコダイン  
の様子から徐々に慣れていった。

原作では村人の中でゴメちゃんを怖がらず警戒もしなかつただけ  
あつて、度胸があるようだ。

ともあれ。ダイとレオナは激戦を生き残ってミーナを守り、クロコ  
ダインに認められることができたのだった——

☆☆☆☆☆☆

「ダイおにいちちゃんもレオナおねえちゃんもすつごく強いんだね！  
ママムおねえちゃんみたい！」

「はは、どうにか勝てただけだって。クロコダインには勝てそうにな  
かったし」

「ほんとにねえ。私もまだまだだわ」

小さくレオナは嘆息する。

いかに呪文をいくつも覚えて、いくつかダンジョンにも潜ったこと  
があるとはいええ、実戦経験も修行もレオナにはまだまだ足りていな  
かった。

王族として、行事や勉強があつて中々時間が取れない上に危険なこ  
とも止められるので仕方がないことではあるのだが。

ミリアならばクロコダインにすら勝てたかもしれないのに。

そう思うともつともつと鍛えねばとレオナは焦りを覚える。

「それでミーナはなんでこんな危ない森にいたの？」

「あのね、パデキア草を探しにきたの」

「ああ、どんな難病奇病も治すつて噂の？ でもあれつてたしかデマ  
だったはずよ。栄養たつぷりで生命力が強くて身体にはいいらしい  
けど、それだけ」

「そんなあ……」

そうこうするうちに、気球船はネイル村の上空へと到着して、村の  
広場にゆつくりと降下していく。

「どこの誰だこんな時に……！」

「ほつとけよ！ ミーナを探すのが先だ！」

「さてよ、パプニカの紋章があるぞ！」

降りてくる気球船のそばに一部の村人達が集まり、殺気立ってい  
た。

「おとうさーんっ、おかあさーんっ！」

「ミーナか!? よかった、本当に良かった……！」

「おおっ、旅の人が助けてくれたのか？」

気球船が着地するなり、両親が走り寄ってきて、ミーナはふたりの  
胸に飛び込んだ。

「よかった無事で……ミーナを助けてくれてありがとう、本当にありがとう！」

ピンクの髪の少女が、ダイとレオナに涙目で頭を下げる。

マアムは魔の森へ捜索に行こうとしていたところだったが、生存は絶望視していた。

自分がミーナから目を離さなければ、と後悔しっぱなしだったのだ。

「私は最後に手伝っただけ。直接助けたのはこの子よ」

「何言ってるんだよ。ライオンヘッドを倒したのはレオナじゃないか！」

「ダイくんがその前に弱らせておいてくれたからよ。万全の状態なら勝てなかったわ」

「でもレオナのほうが」

「ふふ。落ち着いてふたりとも。私はマアムよ。よろしくね」

「おれはダイ！よろしく！」

「私はレオナよ。よろしくね」

マアムが差し出した手をダイとレオナが握って笑いあう。

とそこにやってきた村の長老がダイたちに頭を下げた。

「ようこそ旅のお方。ワシはこの村の村長ですじや。ミーナを助けていただき感謝いたしますぞ。今日はもう日が暮れます。是非とも我が村に滞在してください」

「それならば是非とも我が家に。娘の恩人に御礼がしたい」

「それじゃ一晩お世話になりましたよか？」

「へへ、正直もうくたくただから助かったよ」

それからミーナとその家族に心から歓迎され、素朴だけど美味しい手料理の数々でもてなされたふたりは心から寛ぎ、笑いあって楽しい時を過ごすのだった――。

翌日の早朝。

レオナとダイはさっそく気球船で旅立とうとしていた。

「もう行っちゃうの？ もう少し村にいればいいのに」

「そうしたいんだけど、早いとこ島に戻らないといけないのよね」  
「はは、これ以上遅くなったらじいちゃんにどれだけ怒られるか……  
恐ろしいよ。ううっ」

「そう、せっかくお友達になれたのに残念だわ。今度来たときには私の家にも泊まってね」

「それにしても、まさかこの村にミリアも来てたなんてね。その話もいろいろ聞きたかったんだけど……」

「またきてね〜、ダイおにいちゃんレオナおねえちゃん！」

積もる話は尽きないが、デルムリン島でカンカンになっていいるあろうWじいちゃんのことを思うと、ふたりは手早く旅立つしかなかった。

「結局ロモス王宮にいけなくて残念だったわねダイくん」

「しょうがないよ。一泊しちやっただし」

「これ以上遅くなるのはさすがにね。早く帰らないと心配してると思うし」

逃げるように島を出て、帰りが遅いとまずいだろう。

特にレオナはパプニカの姫。何かあれば一大事なのだから。

それなのに無断外泊に危険な戦闘までしてしまったのだ。

お説教はとんでもないことになるだろう。

それを思うとレオナとダイはため息が止まらないのだった。

☆☆☆☆☆☆

「はあー死ぬかと思ったわ」

「おれも……」

その後——デルムリン島に戻ったレオナとダイは、丸一日続くWじいちゃんからの大説教を受けた上、しばらくは自由時間と小遣いを失い、反省の勉強漬けの日々を送るハメになってしまった。

プラスにしこたま作られたコブを撫でるダイ。

バダツクに大声で叱られ嘆かれ続けて、耳を押さえているレオナ。

お説教から解放されたふたりが、原っぱで倒れこんでダウンしていた。

日は傾き、夕日がふたりを照らしていた。

そこへミリアたちがやってくる。

「ようおふたりさん、そろっていい格好してるじゃないか」

「聞いたよ！ 大活躍だったんだってね。さっすがレオナ！ ダイもすごいね〜！」

「あははは……」

「ったくよ。呆れりやいいのか、感心すりやいいのか……」

「さすがよねえ。この歳で英雄譚作っちゃうなんて」

「未来の勇者と賢者というのは確かなようじやお」

「俺らが居ない間にとんでもないことをやらかしやがって」

「まったく。すごいやつらだ」

ベンガーナから戻ってきた影夫やでろりん達も、ダイたちのしでかした事を聞いてあんぐりと口を開いて驚くしかなかった。

ミーナを救うために初めての実戦をライオンヘッド相手にこなして勝った上に獣王クロコダインに認められて戻ってきたなど。

特に影夫は背筋が凍る思いをしていた。

主人公であるダイや、大きい役割を持つレオナが敗死していたら話はそこで終わりである。

無事に紋章は発動したようだし、ダイの成長も確認できたが、原作にない展開は肝が冷えた。

その反面、ダイの持つ強い主人公補正という物も感じていた。

チートガン積みの竜の騎士の血と勇者としての適正は疑いようもない。

クロコダインが現れたのも考えようによつては僥倖で、彼に認められさえすれば安全だ。

この時期ならばクロコダインはまだ魔王軍の一員として動くわけにもいかないだろうはずで、そうなると彼は武人の価値観のみで判断するだろう。

その基準ならばダイは認められて当然。

生き残るべくして生き残ったともいえる。

「活躍がロモス王の耳に入ったら、きつと覇者のかんむりがもらえる

ぞく。よかったなダイ」

「え？ そうなのかな……へへへ」

事実、後にロモス王からレオナと共に王宮へと招待を受けて、ダイへと覇者のかんむりが送られることになる。

ちなみにレオナはパプニカの姫なので、報償の授与などは行われなかったが、ロモス王室から謝意とともにレオナ姫への贈り物がパプニカ王室へと贈られることになった。

「もちろん、レオナもな」

「私はむしろ戻ってからのお説教が怖いわ……」

国同士の話になると、バロンやバダックレベルで止められる話ではなくなってしまう。

一体、父になんと言われるのか。

なにかと過保護気味の3賢者からも猛烈なお説教を受けてしまいうさだ。

「私が怒られるのはね、当然のことだから別にいいのよ」

レオナは暗澹たる気持ちだったが後悔はしていない。

ダイと共にミーナを救えたことは誇りだった。

「でも、責任問題だけにはしたくないの。みんな、手を貸してください……お願いします」

ただ自らの行動が多大な問題があったことやバロンやバダックの責任問題にならないように何が何でも手を回す必要がある。

最終的にミリア達の手助けもあって。最速でロモス王へ手を回したことで、大々的にレオナの関与がパプニカに知らせられることは防げたのだが、ロモス王国内で少しずつ広がっている噂は止められなかった。

また、王室間のプライベートなルートとはいえ最大級の謝意と贈り物がロモスから贈られたことでパプニカ王であるレオナの父とその側近たちには確実に知られた。

レオナの名はいい意味でも悪い意味でも有名になりそうだった。